文語訳　新約聖書

マタイ傳福音書

第一章 一アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系圖。
二アブラハム、イサクを生み、イサク、ヤコブを生み、ヤコブ、ユダ
とその兄弟らとを生み、三ユダ、タマルによりてパレスとザラとを
生み、パレス、エスロンを生み、エスロン、アラムを生み、四アラム、
アミナダブを生み、アミナダブ、ナアソンを生み、ナアソン、サルモ
ンを生み、五サルモン、ラハブによりてボアズを生み、ボアズ、ルツ
によりてオベデを生み、オベデ、エッサイを生み、六エッサイ、ダビ
デ王を生めり。ダビデ、ウリヤの妻たりし女によりてソロモンを生
み、七ソロモン、レハベアムを生み、レハベアム、アビヤを生み、ア
ビヤ、アサを生み、八アサ、ヨサパテを生み、ヨサパテ、ヨラムを生
み、ヨラム、ウジヤを生み、九ウジヤ、ヨタムを生み、ヨタム、アハ

ズを生み、アハズ、ヒゼキヤを生み、一〇ヒゼキヤ、マナセを生み、
マナセ、アモンを生み、アモン、ヨシヤを生み、一一バビロンに移さ
るる頃、ヨシヤ、エコニヤとその兄弟らとを生めり。一二バビロン
に移されて後、エコニヤ、サラテルを生み、サラテル、ゾロバベルを
生み、一三ゾロバベル、アビウデを生み、アビウデ、エリヤキムを生
み、エリヤキム、アゾルを生み、一四アゾル、サドクを生み、サドク、
アキムを生み、アキム、エリウデを生み、一五エリウデ、エレアザル
を生み、エレアザル、マタンを生み、マタン、ヤコブを生み、一六ヤ
コブ、マリヤの夫ヨセフを生めり。此のマリヤよりキリストと稱ふ
るイエス生れ給へり。一七されば總て世をふる事、アブラハムよりダ
ビデまで十四代、ダビデよりバビロンに移さるるまで十四代、バビロ
ンに移されてよりキリストまで十四代なり。一八イエス・キリストの
誕生は左のごとし。その母マリヤ、ヨセフと許嫁したるのみにて、
未だ偕にならざりしに、聖靈によりて孕り、その孕りたること顯
れたり。一九夫ヨセフは正しき人にして、之を公然にするを好まず、

私に離縁せんと思ふ。二〇かくて、これらの事を思ひ回らしをると
き、視よ、主の使、夢に現れて言ふ『ダビデの子ヨセフよ、妻マリ
ヤを納るる事を恐るな。その胎に宿る者は聖靈によるなり。二一かれ
子を生まん、汝その名をイエスと名づくべし。己が民をその罪より
救ひ給ふ故なり』二二すべて此の事の起りしは、預言者によりて主の
云ひ給ひし言の成就せん爲なり。曰く、
二三『視よ、處女みごもりて子を生まん。
その名はインマヌエルと稱へられん』
之を釋けば、神われらと偕に在すといふ意なり。二四ヨセフ寐より
起き、主の使の命ぜし如くして妻を納れたり。二五されど子の生る
るまでは、相知る事なかりき。かくてその子をイエスと名づけたり。
第二章 一イエスはヘロデ王の時、ユダヤのベツレヘムに生れ給ひし
が、視よ、東の博士たちエルサレムに來りて言ふ、二『ユダヤ人の
王とて生れ給へる者は、何處に在すか。我ら東にてその星を見たれ
ば、拜せんために來れり』三ヘロデ王これを聞きて悩みまどふ、エル

サレムも皆然り。四王、民の祭司長・學者らを皆あつめて、キリスト
の何處に生るべきを問ひ質す。五かれら言ふ『ユダヤのベツレヘムな
り。それは預言者によりて、
　六「ユダの地ベツレヘムよ、汝は
ユダの長たちの中にて最小き者にあらず、
　汝の中より一人の君いでて、
　わが民イスラエルを牧せん」
と録されたるなり』七ここにヘロデ密に博士たちを招きて、星の現
れし時を詳細にし、八彼らをベツレヘムに遣さんとして言ふ『往き
て幼兒のことを細にたづね、之にあはば我に告げよ。我も往きて拜
せん』九彼ら王の言をききて往きしに、視よ、前に東にて見し星、
先だちゆきて、幼兒の在すところの上に止る。一〇かれら星を見て、
歡喜に溢れつつ、一一家に入りて、幼兒のその母マリヤと偕に在すを
見、平伏して拜し、かつ寶の匣をあけて、黄金・乳香・沒藥など禮物
を献げたり。一二かくて夢にてヘロデの許に返るなとの御告を蒙り、

ほかの路より己が國に去りゆきぬ。
一三その去り往きしのち、視よ、
主の使、夢にてヨセフに現れていふ『起きて、幼兒とその母とを携
へ、エジプトに逃れ、わが告ぐるまで彼處に留れ。ヘロデ幼兒を索
めて亡さんとするなり』
一四ヨセフ起きて、夜の間に幼兒とその母
とを携へて、エジプトに去りゆき、
一五ヘロデの死ぬるまで彼處に
留りぬ。これ主が預言者によりて『我エジプトより我が子を呼び出
せり』と云ひ給ひし言の成就せん爲なり。
一六ここにヘロデ、博士
たちに賺されたりと悟りて、甚だしく憤ほり、人を遣し、博士た
ちに由りて詳細にせし時を計り、ベツレヘム及び凡てその邊の地方
なる、二歳以下の男の兒をことごとく殺せり。
一七ここに預言者エ
レミヤによりて云はれたる言は成就したり。曰く、
一八『聲ラマにありて聞ゆ、
慟哭なり、いとどしき悲哀なり。
ラケル己が子らを歎き、
子等のなき故に慰めらるるを厭ふ』

一九ヘロデ死にてのち、視よ、主の使、夢にてエジプトなるヨセフ
に現れて言ふ、二〇『起きて、幼兒とその母とを携へ、イスラエル
の地にゆけ。幼兒の生命を索めし者どもは死にたり』二一ヨセフ起き
て、幼兒とその母とを携へ、イスラエルの地に到りしに、二二アケ
ラオその父ヘロデに代りてユダヤを治むと聞き、彼處に往くことを
恐る。また夢にて御告を蒙り、ガリラヤの地方に退き、二三ナザレ
といふ町に到りて住みたり。これは預言者たちに由りて、『彼はナザ
レ人と呼ばれん』と云はれたる言の成就せん爲なり。

第三章 一その頃バプテスマのヨハネ來り、ユダヤの荒野にて教を
宣べて言ふ二『なんぢら悔改めよ、天國は近づきたり』三これ預言者
イザヤによりて、斯く云はれし人なり、曰く

『荒野に呼はる者の聲す
「主の道を備へ、
その路すぢを直くせよ」』

四このヨハネは駱駝の毛織衣をまとひ、腰に皮の帶をしめ、蝗と野蜜

とを食とせり。五ここにエルサレム及びユダヤ全國、またヨルダン
の邊なる全地方の人々、ヨハネの許に出できたり、六罪を言ひ表し、
ヨルダン川にてバプテスマを受けたり。七ヨハネ、パリサイ人および
サドカイ人のバプテスマを受けんとて、多く來るを見て、彼らに言
ふ『蝮の裔よ、誰が汝らに、來らんとする御怒を避くべき事を示し
たるぞ。八さらば悔改に相應しき果を結べ。九汝ら「われらの父
にアブラハムあり」と心のうちに言はんと思ふな。我なんぢらに告
ぐ、神は此らの石よりアブラハムの子らを起し得給ふなり。一〇斧は
はや樹の根に置かる。されば凡て善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に
投げ入れらるべし。一一我は汝らの悔改のために、水にてバプテ
スマを施す。されど我より後にきたる者は、我よりも能力あり、我
はその鞋をとるにも足らず、彼は聖靈と火とにて汝らにバプテスマ
を施さん。一二手には箕を持ちて禾場をきよめ、その麥は倉に納め、
殼は消えぬ火にて燒きつくさん』一三ここにイエス、ヨハネにバプテ
スマを受けんとて、ガリラヤよりヨルダンに來り給ふ。一四ヨハネ之

を止めんとして言ふ『われは汝にバプテスマを受くべき者なるに、
反つて我に來り給ふか』一五イエス答へて言ひたまふ『今は許せ、わ
れら斯く正しき事をことごとく爲遂ぐるは、當然なり』ヨハネ乃ち
許せり。一六イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給ひしと
き、視よ、天ひらけ、神の御靈の、鴿のごとく降りて己が上にきたる
を見給ふ。一七また天より聲あり、曰く『これは我が愛しむ子、わ
が悅ぶ者なり』

第四章一ここにイエス御靈によりて荒野に導かれ給ふ、惡魔に試
みられんとするなり。二四十日四十夜斷食して、後に飢ゑたまふ。三
試むる者きたりて言ふ『汝もし神の子ならば、命じて此等の石をパ
ンと爲らしめよ』四答へて言ひ給ふ『「人の生くるはパンのみに由る
にあらず、神の口より出づる凡ての言に由る」と録されたり』五ここ
に惡魔イエスを聖なる都につれゆき、宮の頂上に立たせて言ふ、六
『汝もし神の子ならば己が身を下に投げよ。それは
「なんぢの爲に御使たちに命じ給はん。

彼ら手にて汝を支へ、その足を
石にうち當つること無からしめん」
と録されたるなり』七イエス言ひたまふ『「主なる汝の神を試むべ
からず」と、また録されたり』八惡魔またイエスを最高き山につれゆ
き、世のもろもろの國と、その榮華とを示して言ふ、九『汝もし平伏
して我を拜せば、此等を皆なんぢに與へん』一〇ここにイエス言ひ給
ふ『サタンよ、退け「主なる汝の神を拜し、ただ之にのみ事へ奉る
べし」と録されたるなり』一一ここに惡魔は離れ去り、視よ、御使た
ち來り事へぬ。一二イエス、ヨハネの囚はれし事をききて、ガリラヤ
に退き、一三後ナザレを去りて、ゼブルンとナフタリとの境なる、
海邊のカペナウムに到りて住み給ふ。一四これは預言者イザヤにより
て云はれたる言の成就せん爲なり。曰く
一五『ゼブルンの地、ナフタリの地、
海の邊、ヨルダンの彼方、
異邦人のガリラヤ、

一六暗きに坐する民は、大なる光を見、
死の地と死の蔭とに坐する者に、光のぼれり』
一七この時よりイエス教を宣べはじめて言ひ給ふ『なんぢら悔改め
よ、天國は近づきたり』一八かくて、ガリラヤの海邊をあゆみて、二人
の兄弟ペテロといふシモンとその兄弟アンデレとが、海に網うちを
るを見給ふ、かれらは漁人なり。一九これに言ひたまふ『我に從ひ
きたれ、さらば汝らを人を漁る者となさん』二〇かれら直ちに網を
すてて從ふ。二一更に進みゆきて、また二人の兄弟、ゼベダイの子
ヤコブとその兄弟ヨハネとが、父ゼベダイとともに舟にありて網を
繕ひをるを見て呼び給へば、二二直ちに舟と父とを置きて從ふ。二
三イエスあまねくガリラヤを巡り、會堂にて教をなし、御國の福音
を宣べつたへ、民の中のもろもろの病、もろもろの疾患をいやし給
ふ。二四その噂あまねくシリヤに弘り、人々すべての惱めるもの、
即ちさまざまの病と苦痛とに罹れるもの、惡鬼に憑かれたるもの、
癲癇および中風の者などを連れ來りたれば、イエス之を醫したまふ。

二五ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの彼方
より、大なる群衆きたり從へり。

第五章

一イエス群衆を見て、山にのぼり、座し給へば、弟子たち
御許にきたる。二イエス口をひらき、教へて言ひたまふ、三『幸福なる
かな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。四幸福なるかな、悲
しむ者。その人は慰められん。五幸福なるかな、柔和なる者。その人
は地を嗣がん。六幸福なるかな、義に飢ゑ渇く者。その人は飽くこと
を得ん。七幸福なるかな、憐憫ある者。その人は憐憫を得ん。八幸福
なるかな、心の清き者。その人は神を見ん。九幸福なるかな、平和な
らしむる者。その人は神の子と稱へられん。一〇幸福なるかな、義の
ために責められたる者。天國はその人のものなり。一一我がために、
人なんぢらを罵り、また責め、詐りて各様の惡しきことを言ふと
きは、汝ら幸福なり。一二喜びよろこべ、天にて汝らの報は大
なり。汝等より前にありし預言者たちをも、斯く責めたりき。一三
汝らは地の鹽なり、鹽もし效力を失はば、何をもてか之に鹽すべ

き。後は用なし、外にすてられて人に蹈まるるのみ。一四汝らは世
の光なり。山の上にある町は隱るることなし。一五また人は燈火を
ともして升の下におかず、燈臺の上におく。かくて燈火は家にある
凡ての物を照すなり。一六かくのごとく汝らの光を人の前にかがや
かせ。これ人の汝らが善き行爲を見て、天にいます汝らの父を崇
めん爲なり。一七われ律法また預言者を毀つために來れりと思ふな。
毀たんとて來らず、反つて成就せん爲なり。一八誠に汝らに告ぐ、
天地の過ぎ往かぬうちに、律法の一點、一畫も廢ることなく、ことご
とく全うせらるべし。一九この故にもし此等のいと小き誡命の一つ
をやぶり、且その如く人に教ふる者は、天國にて最小き者と稱へら
れ、之を行ひ、かつ人に教ふる者は、天國にて大なる者と稱へられ
ん。二〇我なんぢらに告ぐ、汝らの義、學者・パリサイ人に勝らず
ば、天國に入ること能はず。二一古への人に「殺すなかれ、殺す者は
審判にあふべし」と云へることあるを汝等きけり。二二されど我は
汝らに告ぐ、すべて兄弟を怒る者は、審判にあふべし。また兄弟

に對ひて、愚者よといふ者は、衆議にあふべし。また痴者よといふ
者は、ゲヘナの火にあふべし。二三この故に汝もし供物を祭壇にさ
さぐる時、そこにて兄弟に怨まるる事あるを思ひ出さば、二四供物
を祭壇のまへに遺しおき、先づ往きて、その兄弟と和睦し、然るの
ち來りて、供物をささげよ。二五なんぢを訴ふる者とともに途に在
るうちに、早く和解せよ。恐らくは、訴ふる者なんぢを審判人にわ
たし、審判人は下役にわたし、遂になんぢは獄に入れられん。二六
まことに汝に告ぐ、一厘ものこりなく償はずば、其處をいづるこ
と能はじ。二七「姦淫するなかれ」と云へることあるを汝等きけり。
二八されど我は汝らに告ぐ、すべて色情を懷きて女を見るものは、
既に心のうち姦淫したるなり。二九もし右の目なんぢを躓かせば、
抉り出して棄てよ、五體の一つ亡びて、全身ゲヘナに投げ入れられぬ
は益なり。三〇もし右の手なんぢを躓かせば、切りて棄てよ、五體
の一つ亡びて、全身ゲヘナに往かぬは益なり。三一また「妻をいだす
者は離縁状を與ふべし」と云へることあり。三二されど我は汝らに

告ぐ、淫行の故ならで其の妻をいだす者は、これに姦淫を行はしむ
るなり。また出されたる女を娶るものは、姦淫を行ふなり。三三ま
た古への人に「いつはり誓ふなかれ、なんぢの誓は主に果すべし」
と云へる事あるを汝ら聞けり。三四されど我は汝らに告ぐ、一切ち
かふな、天を指して誓ふな、神の御座なればなり。三五地を指して誓
ふな、神の足臺なればなり。エルサレムを指して誓ふな、大君の都
なればなり。三六己が頭を指して誓ふな、なんぢ頭髪一筋だに白く
し、また黒くし能はねばなり。三七ただ然り然り、否否といへ、之に
過ぐるは惡より出づるなり。三八「目には目を、齒には齒を」と云へ
ることあるを汝ら聞けり。三九されど我は汝らに告ぐ、惡しき者に
抵抗ふな。人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。四〇なんぢ
を訟へて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ。四一人も
し汝に一里ゆくことを強ひなば、共に二里ゆけ。四二なんぢに請ふ
者にあたへ、借らんとする者を拒むな。四三「なんぢの隣を愛し、な
んぢの仇を憎むべし」と云へることあるを汝等きけり。四四されど

我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。
四五これ天にいます汝らの父の子とならん爲なり。天の父は、その
日を惡しき者のうへにも善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者に
も正しからぬ者にも降らせ給ふなり。四六なんぢら己を愛する者を
愛すとも何の報をか得べき、取税人も然するにあらずや。四七兄弟
にのみ挨拶すとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや。
四八さらば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。

第六章 一汝ら見られんために己が義を人の前にて行はぬやうに
心せよ。然らずば、天にいます汝らの父より報を得じ。二さらば
施濟をなすとき、僞善者が人に崇められんとて會堂や街にて爲すご
とく、己が前にラッパを鳴すな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその
報を得たり。三汝は施濟をなすとき、右の手のなすことを左の手
に知らすな。四是はその施濟の隱れん爲なり。さらば隱れたるに見た
まふ汝の父は報い給はん。五なんぢら祈るとき、僞善者の如くあら
ざれ。彼らは人に顯さんとて、會堂や大路の角に立ちて祈ることを

好む。誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその報を得たり。六なんぢ
は祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉ぢて隠れたるに在す汝の父に
祈れ。さらば隠れたるに見給ふなんぢの父は報い給はん。七また祈る
とき、異邦人の如くいたづらに言を反復すな。彼らは言多きにより
て聽かれんと思ふなり。八さらば彼らに效ふな、汝らの父は求めぬ
前に、なんぢらの必要なる物を知りたまふ。九この故に汝らは斯く
祈れ。「天にいます我らの父よ、願はくは御名の崇められん事を。一
〇御國の來らんことを。御意の天のごとく地にも行はれん事を。一
一我らの日用の糧を今日もあたへ給へ。一二我らに負債ある者を我ら
の免したる如く、我らの負債をも免し給へ。一三我らを嘗試に遇はせ
ず、惡より救ひ出したまへ」一四汝等もし人の過失を免さば、汝ら
の天の父も汝らを免し給はん。一五もし人を免さずば、汝らの父も
汝らの過失を免し給はじ。一六なんぢら斷食するとき、偽善者のご
とく、悲しき面容をすな。彼らは斷食することを人に顯さんとて、
その顔色を害ふなり。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得

たり。一七なんぢは斷食するとき、頭に油をぬり、顔をあらへ。一
八これ斷食することの人に顯れずして、隠れたるに在す汝の父にあ
らはれん爲なり。さらば隠れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。
一九なんぢら己がために財寶を地に積むな、ここは蟲と銹とが損ひ、
盗人うがちて盗むなり。二〇なんぢら己がために財寶を天に積め、か
しこは蟲と銹とが損はず、盗人うがちて盗まぬなり。二一なんぢの
財寶のある所には、なんぢの心もあるべし。二二身の燈火は目なり。
この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。二三されど汝の目
あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇
いかばかりぞや。二四人は二人の主に兼ね事ふること能はず、或は
これを憎み彼を愛し、或はこれに親しみ彼を輕しむべければなり。
汝ら神と富とに兼ね事ふること能はず。二五この故に我なんぢらに
告ぐ、何を食ひ、何を飲まんと生命のことを思ひ煩ひ、何を著んと
體のことを思ひ煩ふな。生命は糧にまさり、體は衣に勝るなら
ずや。二六空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝ら

の天の父は、これを養ひたまふ。汝らは之よりも遙に優るる者な
らずや。二七汝らの中たれか思ひ煩ひて身の長一尺を加へ得んや。
二八又なにゆゑ衣のことを思ひ煩ふや。野の百合は如何にして育つ
かを思へ、勞せず、紡がざるなり。二九されど我なんぢらに告ぐ、榮華
を極めたるソロモンだに、その服裝この花の一つにも及かざりき。
三〇今日ありて明日爐に投げ入れらるる野の草をも、神はかく裝ひ給
へば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ。三一さらば何を食ひ、
何を飲み、何を著んとて思ひ煩ふな。三二是みな異邦人の切に求む
る所なり。汝らの天の父は、凡てこれらの物の汝らに必要なるを
知り給ふなり。三三まづ神の國と神の義とを求めよ、さらば凡てこれ
らの物は汝らに加へらるべし。三四この故に明日のことを思ひ煩ふ
な、明日は明日みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり。
第七章 一なんぢら人を審くな、審かれざらん爲なり。二己がさばく
審判にて己もさばかれ、己がはかる量にて己も量らるべし。三何
ゆゑ兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある梁木を認めぬか。四

視よ、おのが目に梁木のあるに、いかで兄弟にむかひて、汝の目よ
り塵をとり除かせよと言ひ得んや。五僞善者よ、まづ己が目より梁木
をとり除け、さらば明かに見えて、兄弟の目より塵を取りのぞき得
ん。六聖なる物を犬に與ふな。また眞珠を豚の前に投ぐな。恐らくは
足にて蹈みつけ、向き返りて汝らを噛みやぶらん。七求めよ、さらば
與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。
八すべて求むる者は得、たづぬる者は見いだし、門をたたく者は開か
るるなり。九汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を與へ、一〇
魚を求めんに蛇を與へんや。一一さらば、汝ら惡しき者ながら、善き
賜物をその子らに與ふるを知る。まして天にいます汝らの父は、求
むる者に善き物を賜はざらんや。一二さらば凡て人に爲られんと思ふ
ことは、人にも亦その如くせよ。これは律法なり、預言者なり。一三
狹き門より入れ、滅にいたる門は大きく、その路は廣く、之より入
る者おほし。一四生命にいたる門は狹く、その路は細く、之を見出す
者すくなし。一五僞預言者に心せよ、羊の扮裝して來れども、内は

奪ひ掠むる豺狼なり。一六その果によりて彼らを知るべし。茨より
葡萄を、薊より無花果をとる者あらんや。一七斯く、すべて善き樹
は善き果をむすび、惡しき樹は惡しき果をむすぶ。一八善き樹は惡し
き果を結ぶこと能はず、惡しき樹はよき果を結ぶこと能はず。一九す
べて善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらる。二〇さらばそ
の果によりて彼らを知るべし。二一我に對ひて主よ主よといふ者、こ
とごとくは天國に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなふ者
のみ、之に入るべし。二二その日おほくの者われに對ひて「主よ、主
よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて惡鬼を逐ひいだ
し、汝の名によりて多くの能力ある業を爲ししにあらずや」と言は
ん。二三その時われ明白に告げん「われ斷えて汝らを知らず、不法
をなす者よ、我を離れされ」と。二四さらば凡て我がこれらの言を
ききて行ふ者を、磐の上に家をたてたる慧き人に擬へん。二五雨ふ
り流みなぎり、風ふきてその家をうてども倒れず、これ磐の上に建て
られたる故なり。二六すべて我がこれらの言をききて行はぬ者を、

沙の上に家を建てたる愚なる人に擬へん。二七雨ふり流みなぎり、
風ふきて其の家をうてば、倒れてその顚倒はなはだし』二八イエスこ
れらの言を語りをへ給へるとき、群衆その教に驚きたり。二九そ
れは學者らの如くならず、權威ある者のごとく教へ給へる故なり。

第八章一イエス山を下り給ひしとき、大なる群衆これに從ふ。二
視よ、一人の癩病人みもとに來り、拜して言ふ『主よ、御意ならば、
我を潔くなし給ふを得ん』三イエス手をのべ、彼につけて『わが意な
り、潔くなれ』と言ひ給へば、癩病ただちに潔まれり。四イエス言ひ
給ふ『つつしみて誰にも語るな、ただ往きて己を祭司に見せ、モー
セが命じたる供物を献げて、人々に證せよ』五イエス、カペナウム
に入り給ひしとき、百卒長きたり、六請ひていふ『主よ、わが僕、
中風を病み、家に臥しゐて甚く苦しめり』七イエス言ひ給ふ『われ往
きて醫さん』八百卒長こたへて言ふ『主よ、我は汝をわが屋根の下
に入れまつるに足らぬ者なり。ただ御言のみを賜へ、さらば我が僕
はいえん。九我みづから權威の下にある者なるに、我が下にまた兵卒

ありて、此に「ゆけ」と言へば往き、彼に「きたれ」と言へば來り、わ
が僕に「これを爲せ」といへば爲すなり』一〇イエス聞きて怪しみ、
從へる人々に言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、かかる篤き信仰はイ
スラエルの中の一人にだに見しことなし。一一又なんぢらに告ぐ、多
くの人、東より西より來り、アブラハム、イサク、ヤコブとともに
天國の宴につき、一二御國の子らは外の暗きに逐ひ出され、そこにて
哀哭・切齒することあらん』一三イエス百卒長に『ゆけ、汝の信
ずるごとく汝になれ』と言ひ給へば、このとき僕いえたり。一四イ
エス、ペテロの家に入り、その外姑の熱を病みて臥しをるを見、一五
その手に觸り給へば、熱去り、女おきてイエスに事ふ。一六夕にな
りて、人々、惡鬼に憑かれたる者をおほく御許につれ來りたれば、イ
エス言にて靈を逐ひいだし、病める者をことごとく醫し給へり。一
七これは預言者イザヤによりて『かれは自ら我らの疾患をうけ、我
らの病を負ふ』と云はれし言の成就せん爲なり。一八さてイエス
群衆の己を環れるを見て、ともに彼方の岸に往かんことを弟子た

ちに命じ給ふ。一九一人の學者きたりて言ふ『師よ、何處にゆき給ふ
とも、我は從はん』。二〇イエス言ひたまふ『狐は穴あり、空の鳥
は塒あり、されど人の子は枕する所なし』二一また弟子の一人い
ふ『主よ、先づ、往きて、我が父を葬ることを許したまへ』二二イ
エス言ひたまふ『我に從へ、死にたる者にその死にたる者を葬ら
せよ』二三かくて舟に乘り給へば、弟子たちも從ふ。二四視よ、海に
大なる暴風おこりて、舟波に蔽はるるばかりなるに、イエスは眠り
ゐ給ふ。二五弟子たち御許にゆき、起して言ふ『主よ、救ひたまへ、
我らは亡ぶ』二六彼らに言ひ給ふ『なにゆゑ臆するか、信仰うすき者
よ』乃ち起きて、風と海とを禁め給へば、大なる凪となりぬ。二
七人々あやしみて言ふ『こは如何なる人ぞ、風も海も從ふとは』二八
イエス彼方にわたり、ガダラ人の地にゆき給ひしとき、惡鬼に憑かれ
たる二人のもの、墓より出できたりて之に遇ふ。その猛きこと甚だ
しく、其處の途を人の過ぎ得ぬほどなり。二九視よ、かれら叫びて言
ふ『神の子よ、われら汝と何の關係あらん、未だ時いたらぬに、我

らを責めんとて此處にきたり給ふか』三〇遙にへだたりて多くの豚
の一群、食しゐたりしが、三一惡鬼ども請ひて言ふ『もし我らを逐
ひ出さんとならば、豚の群に遣したまへ』三二彼らに言ひ給ふ『ゆ
け』惡鬼いでて豚に入りたれば、視よ、その群みな崖より海に駈け下
りて、水に死にたり。三三飼ふ者ども逃げて町にゆき、すべての事と
惡鬼に憑かれたりし者の事とを告げたれば、三四視よ、町人こぞりて
イエスに逢はんとて出できたり、彼を見て、この地方より去り給はん
ことを請へり。

第九章 一イエス舟にのり、渡りて己が町にきたり給ふ。二視よ、中風
にて床に臥しをる者を、人々みもとに連れ來れり。イエス彼らの信仰
を見て、中風の者に言ひたまふ『子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされ
たり』三視よ、或學者ら心の中にいふ『この人は神を瀆すなり』四
イエスその思を知りて言ひ給ふ『何ゆゑ心に惡しき事をおもふか。
五汝の罪ゆるされたりと言ふと、起きて歩めと言ふと、孰か易き。
六人の子地にて罪を赦す權威あることを汝らに知らせん爲に』――

ここに中風の者に言ひ給ふ――『起きよ、床をとりて汝の家にかへ
れ』七彼おきてその家にかへる。八群衆これを見ておそれ、かかる
能力を人にあたへ給へる神を崇めたり。九イエス此處より進みて、マ
タイといふ人の收税所に坐しをるを見て『我に從へ』と言ひ給へば、
立ちて從へり。一〇家にて食事の席につき居給ふとき、視よ、多く
の取税人・罪人ら來りて、イエス及び弟子たちと共に列る。一一パ
リサイ人これを見て弟子たちに言ふ『なに故なんぢらの師は、取税人
・罪人らと共に食するか』一二之を聞きて、言ひたまふ『健かなる
者は醫者を要せず、ただ、病める者これを要す。一三なんぢら往きて
學べ「われ憐憫を好みて、犧牲を好まず」とは如何なる意ぞ。我は
正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて來れり』一四ここに
ヨハネの弟子たち御許にきたりて言ふ『われらとパリサイ人は斷食
するに、何故なんぢの弟子たちは斷食せぬか』一五イエス言ひたまふ
『新郎の友だち、新郎と偕にをる間は、悲しむことを得んや。されど
新郎をとらるる日きたらん、その時には斷食せん。一六誰も新しき

布の裂を舊き衣につぐことは爲じ、補ひたる裂は、その衣をやぶ
りて、破綻さらに甚だしかるべし。一七また新しき葡萄酒をふるき
革嚢に入るることは爲じ。もし然せば、嚢はりさけ酒ほどばしり出
でて、嚢もまた廢らん。新しき葡萄酒は新しき革嚢にいれ、かく
て兩ながら保つなり』一八イエス此等のことを語りゐ給ふとき、視
よ、一人の司きたり、拜して言ふ『わが娘いま死にたり。されど來
りて御手を之におき給はば活きん』一九イエス起ちて彼に伴ひ給ふ
に、弟子たちも從ふ。二〇視よ、十二年血漏を患ひゐたる女、イエ
スの後にきたりて、御衣の總にさはる。二一それは、御衣にだに觸ら
ば救はれんと心の中にいへるなり。二二イエスふりかへり、女を見
て言ひたまふ『娘よ、心安かれ、汝の信仰なんぢを救へり』女こ
の時より救はれたり。二三かくてイエス司の家にいたり、笛ふく者
と騒ぐ群衆とを見て言ひたまふ、二四『退け、少女は死にたるにあ
らず、寐ねたるなり』人々イエスを嘲笑ふ。二五群衆の出されし後、
いりてその手をとり給へば、少女おきたり。二六この聲聞あまねく其

の地に弘りぬ。二七イエス此處より進みたまふ時、ふたりの盲人さ
けびて『ダビデの子よ、我らを憫みたまへ』と言ひつつ從ふ。二八
イエス家にいたり給ひしに、盲人ども御許に來りたれば、之に言ひた
まふ『我この事をなし得と信ずるか』彼等いふ『主よ、然り』二九爰
にイエスかれらの目に觸りて言ひたまふ『なんぢらの信仰のごとく
汝らに成れ』三〇乃ち彼らの目あきたり。イエス嚴しく戒めて言
ひたまふ『愼みて誰にも知らすな』三一されど彼ら出でて、あまねく
その地にイエスの事をいひ弘めたり。三二盲人どもの出づるとき、視
よ、人々、惡鬼に憑かれたる唖者を御許につれきたる。三三惡鬼おひ
出されて唖者ものいひたれば、群衆あやしみて言ふ『かかる事は未
だイスラエルの中に顯れざりき』三四然るにパリサイ人いふ『かれは
惡鬼の首によりて惡鬼を逐ひ出すなり』三五イエスあまねく町と村
とを巡り、その會堂にて教へ、御國の福音を宣べつたへ、もろもろ
の病、もろもろの疾患をいやし給ふ。三六また群衆を見て、その牧
ふ者なき羊のごとく惱み、且たふるるを甚く憫み、三七遂に弟子た

ちに言ひたまふ『收穫はおほく勞動人はすくなし。三八この故に收穫
の主に、勞動人をその收穫場に遣し給はんことを求めよ』

第一〇章 一かくてイエスその十二弟子を召し、穢れし靈を制する
權威をあたへて、之を逐ひ出し、もろもろの病、もろもろの疾患を
醫すことを得しめ給ふ。二十二使徒の名は左のごとし。先づペテロ
といふシモン及びその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブ及びその
兄弟ヨハネ、三ピリポ及びバルトロマイ、トマス及び取税人マタイ、
アルパヨの子ヤコブ及びタダイ、四熱心黨のシモン及びイスカリオテ
のユダ、このユダはイエスを賣りし者なり。五イエスこの十二人を遣
さんとて、命じて言ひたまふ。『異邦人の途にゆくな、又サマリヤ人
の町に入るな。六むしろイスラエルの家の失せたる羊にゆけ。七往
きて宣べつたへ「天國は近づけり」と言へ。八病める者をいやし、死
にたる者を甦へらせ、癩病人をきよめ、惡鬼を逐ひいだせ。價な
しに受けたれば價なしに與へよ。九帶のなかに金・銀または錢をも
つな。一〇旅の嚢も、二枚の下衣も、鞋も、杖ももつな。勞動人の、

その食物を得るは相應しきなり。一一いづれの町いづれの村に入る
とも、その中にて相應しき者を尋ねいだして、立ち去るまでは其處に
留れ。一二人の家に入らば平安を祈れ。一三その家もし之に相應しく
ば、汝らの祈る平安はその上に臨まん。もし相應しからずば、その
平安はなんぢらに歸らん。一四人もし汝らを受けず、汝らの言を
聽かずば、その家その町を立ち去るとき、足の塵をはらへ。一五まこ
とに汝らに告ぐ、審判の日には、その町よりもソドム、ゴモラの地
のかた耐へ易からん。一六視よ、我なんぢらを遣すは、羊を豺狼の
なかに入るるが如し。この故に蛇のごとく慧く、鴿のごとく素直な
れ。一七人々に心せよ、それは汝らを衆議所に付し、會堂にて鞭
うたん。一八また汝等わが故によりて、司たち王たちの前に曳かれ
ん。これは彼らと異邦人とに證をなさん爲なり。一九かれら汝らを
付さば、如何に何を言はんと思ひ煩ふな、言ふべき事は、その時さ
づけらるべし。二〇これ言ふものは汝等にあらず、其の中にありて
言ひたまふ汝らの父の靈なり。二一兄弟は兄弟を、父は子を死に

付し、子どもは親に逆ひて之を死なしめん。二二又なんぢら我が名
のために凡ての人に憎まれん。されど終まで耐へ忍ぶものは救はる
べし。二三この町にて責めらるる時は、かの町に逃れよ。誠に汝ら
に告ぐ、なんぢらイスラエルの町々を巡り盡さぬうちに人の子は來
るべし。二四弟子はその師にまさらず、僕はその主にまさらず、二五
弟子はその師のごとく、僕はその主の如くならば足れり。もし家主
をベルゼブルと呼びたらんには、ましてその家の者をや。二六この故
に、彼らを懼るな。蔽はれたるものに露れぬはなく、隱れたるもの
に知られぬは無ければなり。二七暗黒にて我が告ぐることを光明にて
言へ。耳をあてて聽くことを屋の上にて宣べよ。二八身を殺して靈魂
をころし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者
をおそれよ。二九二羽の雀は一錢にて賣るにあらずや、然るに、汝
らの父の許なくば、その一羽も地に落つること無からん。三〇汝ら
の頭の髮までも皆かぞへらる。三一この故におそるな、汝らは多く
の雀よりも優るるなり。三二されど凡そ人の前にて我を言ひあらは

す者を、我もまた天にいます我が父の前にて言ひ顯さん。三三され
ど人の前にて我を否む者を、我もまた天にいます我が父の前にて否
まん。三四われ地に平和を投ぜんために來れりと思ふな。平和にあら
ず、反つて劍を投ぜん爲に來れり。三五それ我が來れるは、人をその
父より、娘をその母より、嫁をその姑より分たん爲なり。三六人
の仇はその家の者なるべし。三七我よりも父または母を愛する者は、
我に相應しからず。我よりも息子または娘を愛する者は、我に相應
しからず。三八又おのが十字架をとりて我に從はぬ者は、我に相應
しからず。三九生命を得る者はこれを失ひ、我がために生命を失ふ
者はこれを得べし。四〇汝らを受くる者は、我を受くるなり。我を
うくる者は、我を遣し給ひし者を受くるなり。四一預言者たる名の
故に預言者をうくる者は、預言者の報をうけ、義人たる名のゆゑに
義人をうくる者は、義人の報を受くべし。四二凡そわが弟子たる名
の故に、この小き者の一人に冷かなる水一杯にても與ふる者は、ま
ことに汝らに告ぐ、必ずその報を失はざるべし』

第一一章一イエス十二弟子に命じ終へてのち、町々にて教へ、か
つ、宣傳へんとて、此處を去り給へり。二ヨハネ牢舍にてキリストの
御業をきき、弟子たちを遣して、三イエスに言はしむ『來るべき者
は汝なるか、或は、他に待つべきか』四答へて言ひたまふ『ゆきて、
汝らが見聞する所をヨハネに告げよ。五盲人は見、跛者はあゆみ、
癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦へらせられ、貧しき者は
福音を聞かせらる。六おほよそ我に躓かぬ者は幸福なり』七彼らの
歸りたるをり、ヨハネの事を群衆に言ひ出でたまふ『なんぢら何を
眺めんとて野に出でし、風にそよぐ葦なるか。八さらば何を見んとて
出でし、柔かき衣を著たる人なるか。視よ、やはらかき衣を著た
る者は、王の家に在り。九さらば何のために出でし、預言者を見んと
てか。然り、汝らに告ぐ、預言者よりも勝る者なり。
一〇「視よ、わが使をなんぢの顏の前につかはす。
彼はなんぢの前に、なんぢの道をそなへん」
と録されたるは此の人なり。一一誠に汝らに告ぐ、女の產みたる

者のうち、バプテスマのヨハネより大なる者は起らざりき。されど
天國にて小さき者も、彼よりは大なり。一二バプテスマのヨハネの時
より今に至るまで、天國は烈しく攻めらる、烈しく攻むる者はこれ
を奪ふ。一三凡ての預言者と律法との預言したるは、ヨハネの時まで
なり。一四もし汝等わが言をうけんことを願はば、來るべきエリヤ
は此の人なり、一五耳ある者は聽くべし。一六われ今の代を何に比へ
ん、童子、市場に坐し、友を呼びて、一七「われら汝等のために笛吹き
たれど、汝ら踊らず、歎きたれど、汝ら胸うたざりき」と言ふに似
たり。一八それは、ヨハネ來りて飮食せざれば「惡鬼に憑かれたる者
なり」といひ、一九人の子來りて飮食すれば、「視よ、食を貪り酒を
好む人、また取税人・罪人の友なり」と言ふなり。されど智慧は己が
業によりて正しとせらる』二〇爰にイエス多くの能力ある業を行ひ
給へる町々の悔改めぬによりて、之を責めはじめ給ふ、二一『禍害な
る哉コラジンよ、禍害なる哉ベツサイダよ、汝らの中にて行ひたる
能力ある業を、ツロとシドンとにて行ひしならば、彼らは早く荒布

を著、灰の中にて悔改めしならん。二二されば汝らに告ぐ、審判の
日にはツロとシドンとのかた汝等よりも耐へ易からん。二三カペナ
ウムよ、なんぢは天にまで擧げらるべきか、黄泉にまで下らん。汝
のうちにて行ひたる能力ある業を、ソドムにて行ひしならば、今日
までもかの町は遺りしならん。二四されば汝らに告ぐ、審判の日に
はソドムの地のかた汝よりも耐へ易からん』二五その時イエス答へ
て言ひたまふ『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智き
者慧き者にかくして、嬰兒に顯し給へり。二六父よ、然り、かくの
如きは御意に適へるなり。二七すべての物は我わが父より委ねられた
り。子を知る者は父の外になく、父をしる者は子または子の欲する
ままに顯すところの者の外になし。二八凡て勞する者・重荷を負ふ
者、われに來れ、われ汝らを休ません。二九我は柔和にして心卑け
れば、我が軛を負ひて我に學べ、さらば靈魂に休息を得ん。三〇わ
が軛は易く、わが荷は輕ければなり』

第一二章 一その頃イエス安息日に麥畠をとほり給ひしに、弟子た

ち飢ゑて穗を摘み、食ひ始めたるを、二パリサイ人見てイエスに言ふ
『視よ、なんぢの弟子は安息日に爲まじき事をなす』三彼らに言ひ給
ふ『ダビデがその伴へる人々とともに飢ゑしとき、爲しし事を讀ま
ぬか。四即ち神の家に入りて、祭司のほかは、己もその伴へる人々
も食ふまじき供のパンを食へり。五また安息日に祭司らは宮の内に
て安息日を犯せども、罪なきことを律法にて讀まぬか。六われ汝ら
に告ぐ、宮より大なる者ここに在り。七「われ憐憫を好みて犧牲を
好まず」とは、如何なる意かを汝ら知りたらんには、罪なき者を罪
せざりしならん。八それ人の子は安息日の主たるなり』九イエス此處
を去りて、彼らの會堂に入り給ひしに、一〇視よ、片手なえたる人
あり。人々イエスを訴へんと思ひ、問ひていふ『安息日に人を醫す
ことは善きか』一一彼らに、言ひたまふ『汝等のうち一匹の羊をも
てる者あらんに、もし安息日に穴に陷らば、之を取りあげぬか。一
二人は羊より優るること如何ばかりぞ。さらば安息日に善をなすは
可し』一三ここにかの人に言ひ給ふ『なんぢの手を伸べよ』かれ伸べ

たれば、他の手のごとく癒ゆ。一四パリサイ人いでていかにしてかイ
エスを亡さんと議る。一五イエス之を知りて此處を去りたまふ。多
くの人したがひ來りたれば、ことごとく之を醫し、一六かつ我を人に
知らすなと戒め給へり。一七これ預言者イザヤによりて云はれたる
言の成就せんためなり。曰く、
一八『視よ、わが選びたる我が僕、
わが心の悦ぶ我が愛しむ者、
我わが靈を彼に與へん、
彼は異邦人に正義を告げ示さん。
一九彼は争はず、叫ばず、
その聲を大路にて聞く者なからん。
二〇正義をして勝ち遂げしむるまでは、
傷へる葦を折ることなく、
煙れる亞麻を消すことなからん。
二一異邦人も彼の名に望をおかん』

二二ここに惡鬼に憑かれたる盲目の唖者を御許に連れ來りたれば、之
を醫して、唖者の物言ひ見ゆるやうに爲し給ひぬ。二三群衆みな驚
きて言ふ『これはダビデの子にあらぬか』二四然るにパリサイ人きき
て言ふ『この人、惡鬼の首ベルゼブルによらでは、惡鬼を逐ひ出すこ
となし』二五イエス彼らの思を知りて言ひ給ふ『すべて分れ争ふ國
はほろび、分れ争ふ町また家はたたず。二六サタンもしサタンを逐
ひ出さば、自ら分れ争ふなり。さらばその國いかで立つべき。二七
我もしベルゼブルによりて惡鬼を逐ひ出さば、汝らの子は誰により
て之を逐ひ出すか。この故に彼らは汝らの審判人となるべし。二八
されど我もし神の靈によりて惡鬼を逐ひ出さば、神の國は既に汝ら
に到れるなり。二九人まづ強き者を縛らずば、いかで強き者の家に入
りて、その家財を奪ふことを得ん、縛りて後その家を奪ふべし。三〇
我と偕ならぬ者は我にそむき、我とともに集めぬ者は散すなり。三一
この故に汝らに告ぐ、人の凡ての罪と　とは赦されん、されど御靈
を　すことは赦されじ。三二誰にても言をもて人の子に逆ふ者は赦

されん、されど言をもて聖靈に逆ふ者は、この世にても後の世にて
も赦されじ。三三或は樹をも善しとし、果をも善しとせよ。或は樹
をも惡しとし、果をも惡しとせよ。樹は果によりて知らるるなり。三
四蝮の裔よ、なんぢら惡しき者なるに、爭で善きことを言ひ得んや。
それ心に滿つるより口に言はるるなり。三五善き人は善き倉より善
き物をいだし、惡しき人は惡しき倉より惡しき物をいだす。三六われ
汝らに告ぐ、人の語る凡ての虛しき言は、審判の日に糺さるべし。
三七それは汝の言によりて義とせられ、汝の言によりて罪せらる
るなり』三八ここに或學者・パリサイ人ら答へて言ふ『師よ、われら
汝の徴を見んことを願ふ』三九答へて言ひたまふ『邪曲にして不義
なる代は徴を求む、されど預言者ヨナの徴のほかに徴は與へられ
じ。四〇即ち「ヨナが三日三夜、大魚の腹の中に在りし」ごとく、人
の子も三日三夜、地の中に在るべきなり。四一ニネベの人、審判のと
き今の代の人とともに立ちて之が罪を定めん、彼らはヨナの宣ぶる
言によりて悔改めたり。視よ、ヨナよりも勝るもの此處に在り。四

二南の女王、審判のとき今の代の人とともに起きて之が罪を定めん、
彼はソロモンの智慧を聽かんとて地の極より來れり。視よ、ソロモン
よりも勝る者ここに在り。四三穢れし靈、人を出づるときは、水なき
處を巡りて休を求む、而して得ず。四四乃ち「わが出でし家に歸
らん」といひ、歸りて、その家の空きて掃き淨められ、飾られたるを
見、四五遂に往きて己より惡しき他の七つの靈を連れきたり、共に
入りて此處に住む。されば其の人の後の状は前よりも惡しくなるな
り。邪曲なる此の代もまた斯くの如くならん』四六イエスなほ群衆
にかたり居給ふとき、視よ、その母と兄弟たちと、彼に物言はんと
て外に立つ。四七或人イエスに言ふ『視よ、なんぢの母と兄弟たち
と、汝に物言はんとて外に立てり』四八イエス告げし者に答へて言
ひたまふ『わが母とは誰ぞ、わが兄弟とは誰ぞ』四九かくて手をの
べ、弟子たちを指して言ひたまふ『視よ、これは我が母、わが兄弟
なり。五〇誰にても天にいます我が父の御意をおこなふ者は、即ち
我が兄弟、わが姉妹、わが母なり』

第一三章一その日イエスは家を出でて、海邊に坐したまふ。二大な
る群衆みもとに集りたれば、イエスは舟に乘りて坐したまひ、群衆
はみな岸に立てり。三譬にて數多のことを語りて言ひたまふ、『視よ、
種播く者まかんとて出づ。四播くとき路の傍らに落ちし種あり、鳥
きたりて啄む。五土うすき磽地に落ちし種あり、土深からぬにより
て速かに萠え出でたれど、六日の昇りし時やけて根なき故に枯る。七
茨の地に落ちし種あり、茨そだちて之を塞ぐ。八良き地に落ちし種
あり、あるひは百倍、あるひは六十倍、あるひは三十倍の實を結べ
り。九耳ある者は聽くべし』一〇弟子たち御許に來りて言ふ『なにゆ
ゑ譬にて彼らに語り給ふか』一一答へて言ひ給ふ『なんぢらは天國
の奧義を知ることを許されたれど、彼らは許されず。一二それ誰にて
も、有てる人は與へられて愈々豐ならん。されど有たぬ人は、その
有てる物をも取らるべし。一三この故に彼らには譬にて語る、これ
彼らは見ゆれども見ず、聞ゆれども聽かず、また悟らぬ故なり、一四
かくてイザヤの預言は、彼らの上に成就す。曰く、

「なんぢら聞きて聞けども悟らず、
見て見れども認めず。
一五この民の心は鈍く、
耳は聞くに懶く、
目は閉ぢたればなり。
これ目にて見、耳にて聴き、
心にて悟り、飜へりて、
我に醫さるる事なからん爲なり」
一六されど汝らの目なんぢらの耳は、見るゆゑに聞くゆゑに、幸福
なり。一七まことに汝らに告ぐ、多くの預言者・義人は、汝らが見
る所を見んとせしが見ず、なんぢらが聞く所を聞かんとせしが聞
かざりしなり。一八されば汝ら種播く者の譬を聴け。一九誰にても
天國の言をききて悟らぬときは、惡しき者きたりて、其の心に播
かれたるものを奪ふ。路の傍らに播かれしとは斯かる人なり。二〇
磽地に播かれしとは、御言をききて、直ちに喜び受くれども、二一己

に根なければ暫し耐ふるのみにて、御言のために艱難あるひは迫害
の起るときは、直ちに躓くものなり。二二茨の中に播かれしとは、
御言をきけども、世の心労と財貨の惑とに、御言を塞がれて實ら
ぬものなり。二三良き地に播かれしとは、御言をききて悟り、實を結
びて、あるひは百倍、あるひは六十倍、あるひは三十倍に至るもの
なり』二四また他の譬を示して言ひたまふ『天國は良き種を畑にま
く人のごとし。二五人々の眠れる間に、仇きたりて麥のなかに毒麥を
播きて去りぬ。二六苗はえ出でて實りたるとき、毒麥もあらはる。二
七僕ども來りて家主にいふ「主よ、畑に播きしは良き種ならずや、
然るに如何にして毒麥あるか」二八主人いふ「仇のなしたるなり」僕
ども言ふ「さらば我らが往きて之を抜き集むるを欲するか」二九主人
いふ「いな、恐らくは毒麥を抜き集めんとて、麥をも共に抜かん。三
〇兩ながら收穫まで育つに任せよ。收穫のとき我かる者に「まづ毒
麥を抜きあつめて、焚くために之を束ね、麥はあつめて我が倉に納れ
よ」と言はん』三一また他の譬を示して言ひたまふ『天國は一粒の

芥種のごとし、人これを取りてその畑に播くときは、三二萬の種よ
りも小けれど、育ちては他の野菜よりも大く、樹となりて、空の鳥
きたり其の枝に宿るほどなり』三三また他の譬を語りたまふ『天國は
パンだねのごとし、女これを取りて、三斗の粉の中に入るれば、こ
とごとく脹れいだすなり』三四イエスすべて此等のことを、譬にて
群衆に語りたまふ、譬ならでは何事も語り給はず。三五これ預言者
によりて云はれたる言の成就せん爲なり。曰く、

『われ譬を設けて口を開き、
世の創より隠れたる事を言ひ出さん』

三六ここに群衆を去らしめて、家に入りたまふ。弟子たち御許に來り
て言ふ『畑の毒麥の譬を我らに解きたまへ』三七答へて言ひ給ふ『良
き種を播く者は人の子なり、三八畑は世界なり、良き種は天國の子ど
もなり、毒麥は惡しき者の子どもなり、三九之を播きし仇は惡魔なり、
收穫は世の終なり、刈る者は御使たちなり。四〇されば毒麥の集めら
れて火に焚かるる如く、世の終にも斯くあるべし。四一人の子その

使たちを遣さん。彼ら御國の中より凡ての顚躓となる物と不法を
なす者とを集めて、四二火の爐に投げ入るべし、其處にて哀哭・切齒
することあらん。四三其のとき義人は父の御國にて日のごとく輝か
ん。耳ある者は聽くべし。四四天國は畑に隱れたる寶のごとし。人
見出さば、之を隱しおきて、喜びゆき、有てる物をことごとく賣りて
其の畑を買ふなり。四五また天國は良き眞珠を求むる商人のごとし。
四六價たかき眞珠一つを見出さば、往きて有てる物をことごとく賣
りて、之を買ふなり。四七また天國は、海におろして各樣のものを集
むる網のごとし。四八充つれば岸にひきあげ、坐して良きものを器に
入れ、惡しきものを棄つるなり。四九世の終にも斯くあるべし。御使
たち出でて、義人の中より惡人を分ちて、五〇之を火の爐に投げ入る
べし。其處にて哀哭・切齒することあらん。五一汝等これらの事を
みな悟りしか』彼等いふ『然り』五二また言ひ給ふ『この故に、天國
のことを教へられたる凡ての學者は、新しき物と舊き物とをその倉
より出す家主のごとし』五三イエスこれらの譬を終へて此處を去り

たまふ。五四己が郷にいたり、會堂にて教へ給へば、人々おどろき
て言ふ『この人はこの智慧と此等の能力とを何處より得しぞ。五五こ
れ木匠の子にあらずや、其の母はマリヤ、其の兄弟はヤコブ、ヨセ
フ、シモン、ユダにあらずや。五六又その姉妹も皆われらと共にをる
に非ずや。然るに此等のすべての事は何處より得しぞ』五七遂に人々
かれに躓けり。イエス彼らに言ひたまふ『預言者は、おのが郷おの
が家の外にて尊ばれざる事なし』五八彼らの不信仰によりて其處に
ては多くの能力ある業を爲し給はざりき。

第一四章一そのころ、國守ヘロデ、イエスの噂をききて、二侍臣ど
もに言ふ『これバプテスマのヨハネなり。かれ死人の中より甦へり
たり、さればこそ此等の能力その内に働くなれ』三ヘロデ先に、己
が兄弟ピリポの妻ヘロデヤの爲にヨハネを捕へ、縛りて獄に入れ
たり。四ヨハネ、ヘロデに『かの女を納るるは宜しからず』と言ひ
しに因る。五かくてヘロデ、ヨハネを殺さんと思へど、群衆を懼れ
たり。群衆ヨハネを預言者とすればなり。六然るにヘロデの誕生日

に當り、ヘロデヤの娘その席上に舞をまひてヘロデを喜ばせたれ
ば、七ヘロデ之に何にても求むるままに與へんと誓へり。八娘その
母に唆かされて言ふ『バプテスマのヨハネの首を盆に載せてここに
賜はれ』九王憂ひたれど、その誓と席に在る者とに對して、之を與
ふることを命じ、一〇人を遣し獄にてヨハネの首を斬り、一一その
首を盆にのせて持ち來らしめ、之を少女に與ふ。少女はこれを母に
捧ぐ。一二ヨハネの弟子たち來り、屍體を取りて葬り、往きて、イエ
スに告ぐ。一三イエス之を聞きて人を避け、其處より舟にのりて寂し
き處に往き給ひしを群衆ききて町々より徒歩にて從ひゆく。一四
イエス出でて大なる群衆を見、これを憫みて、その病める者を醫
し給へり。一五夕になりたれば、弟子たち御許に來りて言ふ『ここ
は寂しき處、はや時も晩し、群衆を去らしめ、村々に往きて、己が
爲に食物を買はせ給へ』一六イエス言ひ給ふ『かれらが往くに及ばず、
汝ら之に食物を與へよ』一七弟子たち言ふ『われら此處にもてる
は、唯五つのパンと二つの魚とのみ』一八イエス言ひ給ふ『それを我

に持ちきたれ』一九かくて群衆に命じて草の上に坐せしめ、五つの
パンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、パンを裂きて、弟子たち
に與へ給へば、弟子たち之を群衆に與ふ。二〇凡ての人食ひて飽く、
裂きたる餘を集めしに十二の筐に滿ちたり。二一食ひし者は、女と
子供とを除きて凡そ五千人なりき。二二イエス直ちに弟子たちを強
ひて舟に乘らせ、自ら群衆をかへす間に、彼方の岸に先に往かし
む。二三かくて群衆を去らしめてのち、祈らんとて竊に山に登り、
夕になりて獨そこにゐ給ふ。二四舟ははや陸より數丁はなれ、風
逆ふによりて波に難されゐたり。二五夜明の四時ごろ、イエス海の
上を歩みて、彼らに到り給ひしに、二六弟子たち其の海の上を歩み給
ふを見て心騷ぎ、變化の者なりと言ひて懼れ叫ぶ。二七イエス直ち
に彼らに語りて言ひたまふ『心安かれ、我なり、懼るな』二八ペテロ
答へて言ふ『主よ、もし汝ならば我に命じ、水を蹈みて御許に到ら
しめ給へ』二九『來れ』と言ひ給へば、ペテロ舟より下り、水の上を
歩みてイエスの許に往く。三〇然るに風を見て懼れ、沈みかかりけれ

ば、叫びて言ふ『主よ、我を救ひたまへ』 三一イエス直ちに御手を伸
べ、これを捉へて言ひ給ふ『ああ信仰うすき者よ、何ぞ疑ふか』 三
二相共に舟に乘りしとき、風やみたり。 三三舟に居る者どもイエスを
拜して言ふ『まことに汝は神の子なり』 三四遂に渡りてゲネサレの
地に著きしに、 三五その處の人々イエスを認めて、あまねく四方に
人をつかはし、又すべての病める者を連れきたり、 三六ただ御衣の總
にだに觸らしめ給はんことを願ふ、觸りし者はみな醫されたり。

第一五章 一ここにパリサイ人・學者ら、エルサレムより來りてイ
エスに言ふ、二『なにゆゑ汝の弟子は、古への人の言傳を犯すか、
食事のときに手を洗はぬなり』 三答へて言ひ給ふ『なにゆゑ汝らは、
また汝らの言傳によりて神の誡命を犯すか。 四即ち神は「父母を
敬へ」と言ひ「父または母を罵る者は必ず殺さるべし」と言ひたま
へり。 五然るに汝らは「誰にても父または母に對ひて、我が負ふ所
のものは供物となりたりと言はば、 六父または母を敬ふに及ばず」
と言ふ。斯くその言傳によりて神の言を空しうす。 七僞善者よ、宜

なる哉、イザヤは汝らに就きて能く預言せり。曰く、
八「この民は口唇にて我を敬ふ、
されど其の心は我に遠ざかる。
九ただ徒らに我を拜む。
人の訓誡を教として教へて」』
一〇かくて群衆を呼び寄せて言ひたまふ『聽きて悟れ。一一口に入る
ものは人を汚さず、されど口より出づるものは、これ人を汚すなり』一
二ここに弟子たち御許に來りていふ『御言をききてパリサイ人の躓
きたるを知り給ふか』一三答へて言ひ給ふ『わが天の父の植ゑ給はぬ
ものは、みな拔かれん。一四彼らを捨ておけ、盲人を手引する盲人な
り、盲人もし盲人を手引せば、二人とも穴に落ちん』一五ペテロ答へ
て言ふ『その譬を我らに解き給へ』一六イエス言ひ給ふ『なんぢら
も今なほ悟りなきか。一七凡て口に入るものは腹にゆき、遂に厠に
棄てらるる事を悟らぬか。一八されど口より出づるものは心より出
づ、これ人を汚すものなり。一九それ心より惡しき念いづ、すなは

ち殺人・姦淫・淫行・竊盗・僞證・誹謗、二〇これらは人を汚すもの
なり、されど洗はぬ手にて食する事は人を汚さず』二一イエスここ
を去りてツロとシドンとの地方に往き給ふ。二二視よ、カナンの女
その邊より出できたり、叫びて『主よ、ダビデの子よ、我を憫み給
へ、わが娘、惡鬼につかれて甚く苦しむ』と言ふ。二三されどイエス
一言も答へ給はず。弟子たち來り請ひて言ふ『女を歸したまへ、我
らの後より叫ぶなり』二四答へて言ひたまふ『我はイスラエルの家の
失せたる羊のほかに遣されず』二五女きたり拜して言ふ『主よ、我
を助けたまへ』二六答へて言ひたまふ『子供のパンをとりて小狗に投
げ與ふるは善からず』二七女いふ『然り、主よ、小狗も主人の食卓
よりおつる食屑を食ふなり』二八ここにイエス答へて言ひたまふ『を
んなよ、汝の信仰は大なるかな、願のごとく汝になれ』娘この
時より癒えたり。二九イエス此處を去り、ガリラヤの海邊にいたり、
而して山に登り、そこに坐し給ふ。三〇大なる群衆、跛者・不具・
盲人・唖者および他の多くの者を連れ來りて、イエスの足下に置きた

れば、醫し給へり。三一群衆は、唖者の物いひ、不具の癒え、跛者
の歩み、盲人の見えたるを見て之を怪しみ、イスラエルの神を崇め
たり。三二イエス弟子たちを召して言ひ給ふ『われ此の群衆をあは
れむ、既に三日われと偕にをりて食ふべき物なし。飢ゑたるままに
て歸らしむるを好まず、恐らくは途にて疲れ果てん』三三弟子たち言
ふ『この寂しき地にて、斯く大なる群衆を飽かしむべき多くのパン
を、何處より得べき』三四イエス言ひ給ふ『パン幾つあるか』彼らい
ふ『七つ、また小き魚すこしあり』三五イエス群衆に命じて地に坐
せしめ、三六七つのパンと魚とを取り、謝して之をさき弟子たちに與
へ給へば、弟子たちこれを群衆に與ふ。三七凡ての人くらひて飽き、
裂きたる餘を拾ひしに、七つの籃に滿ちたり。三八食ひし者は、女
と子供とを除きて四千人なりき。三九イエス群衆をかへし、舟に乘
りてマガダンの地方に往き給へり。

第一六章
一パリサイ人とサドカイ人と來りてイエスを試み、天よ
りの徴を示さんことを請ふ。二答へて言ひたまふ『夕には汝ら「空

あかき故に晴ならん」と言ひ、三また朝には「そら赤くして曇る故
に、今日は風雨ならん」と言ふ。なんぢら空の氣色を見分くること
を知りて、時の徴を見分くること能はぬか。四邪曲にして不義なる
代は徴を求む、されどヨナの徴の外に徴は與へられじ』かくて彼
らを離れて去り給ひぬ。五弟子たち彼方の岸に到りしに、パンを携
ふることを忘れたり。六イエス言ひたまふ『愼みてパリサイ人とサ
ドカイ人とのパン種に心せよ』七弟子たち互に『我らはパンを携
へざりき』と語り合ふ。八イエス之を知りて言ひ給ふ『ああ信仰うす
き者よ、何ぞパン無きことを語り合ふか。九未だ悟らぬか、五つのパ
ンを五千人に分ちて、その餘を幾籃ひろひ、一〇また七つのパンを
四千人に分ちて、その餘を幾籃ひろひしかを覺えぬか。一一我が言
ひしはパンの事にあらぬを何ぞ悟らざる。唯パリサイ人とサドカイ
人とのパンだねに心せよ』一二ここに弟子たちイエスの心せよと言
ひ給ひしは、パンの種にはあらで、パリサイ人とサドカイ人との教
なることを悟れり。一三イエス、ピリポ・カイザリヤの地方にいたり、

弟子たちに問ひて言ひたまふ『人々は人の子を誰と言ふか』一四彼等
いふ『或人はバプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人はエレミヤ、
また預言者の一人』一五彼らに言ひたまふ『なんぢらは我を誰と言ふ
か』一六シモン・ペテロ答へて言ふ『なんぢはキリスト、活ける神の
子なり』一七イエス答へて言ひ給ふ『バルヨナ・シモン、汝は幸福な
り、汝に之を示したるは血肉にあらず、天にいます我が父なり。一
八我はまた汝に告ぐ、汝はペテロなり、我この磐の上に我が教會
を建てん、黄泉の門はこれに勝たざるべし。一九われ天國の鍵を汝
に與へん、凡そ汝が地にて縛ぐ所は天にても縛ぎ、地にて解く所
は天にても解くなり』二〇ここにイエス、己がキリストなる事を誰に
も告ぐなと、弟子たちを戒め給へり。二一この時よりイエス・キリ
スト、弟子たちに、己のエルサレムに往きて、長老・祭司長・學者
らより多くの苦難を受け、かつ殺され、三日めに甦へるべき事を示
し始めたまふ。二二ペテロ、イエスを傍にひき戒め出でて言ふ『主
よ、然あらざれ、此の事なんぢに起らざるべし』二三イエス振反りて

ペテロに言ひ給ふ『サタンよ、我が後に退け、汝はわが躓物なり、
汝は神のことを思はず、反って人のことを思ふ』二四ここにイエス
弟子たちに言ひたまふ『人もし我に從ひ來らんと思はば、己をす
て、己が十字架を負ひて、我に從へ。二五己が生命を救はんと思ふ
者は、これを失ひ、我がために己が生命をうしなふ者は、之を得べ
し。二六人、全世界を贏くとも、己が生命を損せば、何の益あらん、又
その生命の代に何を與へんや。二七人の子は父の榮光をもて、御使
たちと共に來らん。その時おのおのの行爲に隨ひて報ゆべし。二八
まことに汝らに告ぐ、ここに立つ者のうちに、人の子のその國をも
て來るを見るまでは、死を味はぬ者どもあり』

第一七章 一六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ及びヤコブの兄弟
ヨハネを率きつれ、人を避けて高き山に登りたまふ。二かくて彼らの
前にてその狀かはり、其の顔は日のごとく輝き、その衣は光のご
とく白くなりぬ。三視よ、モーセとエリヤとイエスに語りつつ彼らに
現る。四ペテロ差出でてイエスに言ふ『主よ、我らの此處に居るは

善し。御意ならば我ここに三つの廬を造り、一つを汝のため、一つ
をモーセのため、一つをエリヤの爲にせん』五彼なほ語りをるとき、
視よ、光れる雲かれらを覆ふ。また雲より聲あり、曰く『これは我が
愛しむ子、わが悅ぶ者なり、汝ら之に聽け』六弟子たち之を聞きて
倒れ伏し、懼るること甚だし。七イエスその許にきたり之に觸りて
『起きよ、懼るな』と言ひ給へば、八彼ら目を擧げしに、イエス一人の
他は誰も見えざりき。九山を下るとき、イエス彼らに命じて言ひたま
ふ『人の子の死人の中より甦へるまでは、見たることを誰にも語る
な』一〇弟子たち問ひて言ふ『さらばエリヤ先づ來るべしと學者らの
言ふは何ぞ』一一答へて言ひたまふ『實にエリヤ來りて萬の事をあら
ためん。一二我なんぢらに告ぐ、エリヤは既に來れり。されど人々こ
れを知らず、反つて心のままに待へり。かくのごとく人の子もまた
人々より苦しめらるべし』一三ここに弟子たちバプテスマのヨハネを
指して言ひ給ひしなるを悟れり。一四かれら群衆の許に到りしとき、
或人御許にきたり跪づきて言ふ、一五『主よ、わが子を憫みたまへ。

癲癇にて難み、しばしば火の中に、しばしば水の中に倒るるなり。一
六之を御弟子たちに連れ來りしに、醫すこと能はざりき』一七イエス
答へて言ひ給ふ『ああ信なき曲れる代なるかな、我いつまで汝らと
偕にをらん、何時まで汝らを忍ばん。その子を我に連れきたれ』一
八遂にイエスこれを禁め給へば、惡鬼いでてその子この時より癒え
たり。一九ここに弟子たち竊にイエスに來りて言ふ『われらは何故
に逐ひ出し得ざりしか』二〇彼らに言ひ給ふ『なんぢら信仰うすき故
なり。まことに汝らに告ぐ、もし芥種一粒ほどの信仰あらば、この
山に「此處より彼處に移れ」と言ふとも移らん、かくて汝ら能はぬ
こと無かるべし』二一[なし]二二彼らガリラヤに集ひをる時、イエス
言ひたまふ『人の子は人の手に付され、二三人々は之を殺さん、かく
て三日めに甦へるべし』弟子たち甚く悲しめり。二四彼らカペナウ
ムに到りしとき、納金を集むる者どもペテロに來りて言ふ『なんぢ
らの師は納金を納めぬか』二五ペテロ『納む』と言ひ、やがて家に
入りしに、逸速くイエス言ひ給ふ『シモンいかに思ふか、世の王たち

は税または貢を誰より取るか、己が子よりか、他の者よりか』二六
ペテロ言ふ『ほかの者より』イエス言ひ給ふ『されば子は自由なり。
二七されど彼らを躓かせぬ爲に、海に往きて釣をたれ、初に上る魚
をとれ、其の口をひらかば銀貨一つを得ん、それを取りて我と汝と
の爲に納めよ』

第一八章一そのとき弟子たちイエスに來りて言ふ『しからば天國に
て大なるは誰か』二イエス幼兒を呼び、彼らの中に置きて言ひ給ふ
三『まことに汝らに告ぐ、もし汝ら飜へりて幼兒の如くならずば、
天國に入るを得じ。四されば誰にても此の幼兒のごとく己を卑うす
る者は、これ天國にて大なる者なり。五また我が名のために、かく
のごとき一人の幼兒を受くる者は、我を受くるなり。六されど我を信
ずる此の小き者の一人を躓かする者は、寧ろ大なる碾臼を頸に懸
けられ、海の深處に沈められんかた益なり。七この世は躓物あるによ
りて禍害なるかな。躓物は必ず來らん、されど躓物を來らする人は
禍害なるかな。八もし汝の手または足なんぢを躓かせば、切りて棄

てよ。不具または蹇跛にて生命に入るは、兩手兩足ありて永遠の火
に投げ入れらるるよりも勝るなり。九もし汝の眼なんぢを躓かせ
ば、抜きて棄てよ。片眼にて生命に入るは、兩眼ありて火のゲヘナ
に投げ入れらるるよりも勝るなり。一〇汝ら愼みて此の小き者の
一人をも侮るな。我なんぢらに告ぐ、彼らの御使たちは天にありて、
天にいます我が父の御顔を常に見るなり。一一[なし]一二汝等いかに
思ふか、百匹の羊を有てる人あらんに、若しその一匹まよはば、九
十九匹を山に遺しおき、往きて迷へるものを尋ねぬか。一三もし之を
見出さば、まことに汝らに告ぐ、迷はぬ九十九匹に勝りて此の一匹
を喜ばん。一四かくのごとく此の小き者の一人の亡ぶるは、天にい
ます汝らの父の御意にあらず。一五もし汝の兄弟罪を犯さば、往
きてただ彼とのみ相對して諫めよ。もし聽かば其の兄弟を得たるな
り。一六もし聽かずば、一人・二人を伴ひ往け、これ二三の證人の
口に由りて、凡ての事の慥められん爲なり。一七もし彼等にも聽か
ずば、教會に告げよ。もし教會にも聽かずば、之を異邦人または

取税人のごとき者とすべし。一八まことに汝らに告ぐ、すべて汝ら
が地にて縛ぐ所は天にても縛ぎ、地にて解く所は天にても解くな
り。一九また誠に汝らに告ぐ、もし汝等のうち二人、何にても求
むる事につき地にて心を一つにせば、天にいます我が父は之を成し
給ふべし。二〇二三人わが名によりて集る所には、我もその中に在
るなり。二一ここにペテロ御許に來りて言ふ『主よ、わが兄弟われ
に對して罪を犯さば幾たび赦すべきか、七度までか』二二イエス言ひ
たまふ『否、われ「七度まで」とは言はず「七度を七十倍するまで」
と言ふなり。二三この故に、天國はその家來どもと計算をなさんとす
る王のごとし。二四計算を始めしとき、一萬タラントの負債ある家來
つれ來られしが、二五償ひ方なかりしかば、其の主人、この者とその
妻子と凡ての所有とを賣りて償ふことを命じたるに、二六その家來
ひれ伏し拜して言ふ「寛くし給へ、さらば悉とく償はん」二七その
家來の主人あはれみて之を解き、その負債を免したり。二八然るに其
の家來いでて、己より百デナリを負ひたる一人の同僚にあひ、之を

とらへ、喉を締めて言ふ「負債を償へ」二九その同僚ひれ伏し、願ひ
て「寛くし給へ、さらば償はん」と言へど、三〇肯はずして往き、
その負債を償ふまで之を獄に入れたり。三一同僚ども有りし事を見
て甚く悲しみ、往きて有りし凡ての事をその主人に告ぐ。三二ここに
主人かれを呼び出して言ふ「惡しき家來よ、なんぢ願ひしによりて、
かの負債をことごとく免せり。三三わが汝を憫みしごとく、汝も
また同僚を憫むべきにあらずや」三四斯くその主人、怒りて、負債を
ことごとく償ふまで彼を獄卒に付せり。三五もし汝等おのおの心
より兄弟を赦さずば、我が天の父も亦なんぢらに斯のごとく爲し給
ふべし』

第一九章 一イエスこれらの言を語り終へて、ガリラヤを去り、ヨ
ルダンの彼方なるユダヤの地方に來り給ひしに、二大なる群衆した
がひたれば、此處にて彼らを醫し給へり。三パリサイ人ら來り、イエ
スを試みて言ふ『何の故にかかはらず、人その妻を出すは可きか』四
答へて言ひたまふ『人を造り給ひしもの、元始より之を男と女とに

造り、而して、五「かかる故に人は父母を離れ、その妻に合ひて、二人
のもの一體となるべし」と言ひ給ひしを未だ讀まぬか。六されば、は
や二人にはあらず、一體なり。この故に神の合せ給ひし者は、人こ
れを離すべからず』七彼らイエスに言ふ『さらば何故モーセは離縁状
を與へて出すことを命じたるか』八彼らに言ひ給ふ『モーセは汝の
心つれなきによりて妻を出すことを許したり。されど元始より然に
はあらぬなり。九われ汝らに告ぐ、おほよそ淫行の故ならで其の妻
をいだし他に娶る者は、姦淫を行ふなり』一〇弟子たちイエスに言
ふ『人もし妻のことに於てかくのごとくば、娶らざるに如かず』一一
彼らに言ひたまふ『凡ての人この言を受け容るるにはあらず、ただ
授けられたる者のみなり。一二それ生れながらの閹人あり、人に爲ら
れたる閹人あり、また天國のために自らなりたる閹人あり、之を受
け容れうる者は受け容るべし』一三ここに人々イエスの手をおきて祈
り給はんことを望みて、幼兒らを連れ來りしに、弟子たち禁めたれ
ば、一四イエス言ひたまふ『幼兒らを許せ、我に來るを止むな、天國

はかくのごとき者の國なり』一五かくて手を彼らの上におきて此處を
去り給へり。一六視よ、或人みもとに來りて言ふ『師よ、われ永遠の
生命をうる爲には、如何なる善き事を爲すべきか』一七イエス言ひた
まふ『善き事につきて何ぞ我に問ふか、善き者は唯ひとりのみ。汝
もし生命に入らんと思はば誡命を守れ』一八彼いふ『孰を』イエス
言ひたまふ『「殺すなかれ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」「僞證を
立つる勿れ」一九「父と母とを敬へ」また「己のごとく汝の隣を
愛すべし」』二〇その若者いふ『我みな之を守れり、なほ何を缺くか』
二一イエス言ひたまふ『なんぢ若し全からんと思はば、往きて汝の
所有を賣りて貧しき者に施せ、さらば財寶を天に得ん。かつ來りて
我に從へ』二二この言をききて、若者悲しみつつ去りぬ。大なる
資産を有てる故なり。二三イエス弟子たちに言ひ給ふ『まことに汝
らに告ぐ、富める者の天國に入るは難し。二四復なんぢらに告ぐ、富
める者の神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた反つて易し』
二五弟子たち之をきき、甚だしく驚きて言ふ『さらば誰か救はるる

ことを得ん』二六イエス彼らに目を注めて言ひ給ふ『これは人に能は
ねど、神は凡ての事をなし得るなり』二七ここにペテロ答へて言ふ『視
よ、われら一切をすてて汝に從へり、されば何を得べきか』二八イ
エス彼らに言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、世あらたまりて人の子
その榮光の座位に坐するとき、我に從へる汝等もまた十二の座位
に坐して、イスラエルの十二の族を審かん。二九また凡そ我が名の
ために、或は家、あるひは兄弟、あるひは姉妹、あるひは父、ある
ひは母、あるひは子、あるひは田畑を棄つる者は、數倍を受け、また
永遠の生命を嗣がん。三〇されど多くの先なる者後に、後なる者先に
なるべし。

第二〇章 一 天國は勞動人を葡萄園に雇ふために、朝早く出でたる
主人のごとし。二 一日一デナリの約束をなして、勞動人どもを葡萄園
に遣す。三 また九時ごろ出でて市場に空しく立つ者どもを見て、四
「なんぢらも葡萄園に往け、相當のものを與へん」といへば、彼らも
往く。五 十二時頃と三時頃とに復いでて前のごとくす。六 五時頃また

出でしに、なほ立つ者どものあるを見ていふ「何ゆゑ終日ここに空し
く立つか」七かれら言ふ「たれも我らを雇はぬ故なり」主人いふ「な
んぢらも葡萄園に往け」八夕になりて葡萄園の主人その家司に言ふ
「勞動人を呼びて、後の者より始め、先の者にまで賃銀をはらへ」九か
くて五時ごろに雇はれしもの來りて、おのおの一デナリを受く。一〇
先の者きたりて、多く受くるならんと思ひしに、之も亦おのおの一デ
ナリを受く。一一受けしとき、家主にむかひ呟きて言ふ、一二「こ
の後の者どもは僅に一時間はたらきたるに、汝は一日の勞と暑さ
とを忍びたる我らと均しく之を遇へり」一三主人こたへて其の一人に
言ふ「友よ、我なんぢに不正をなさず、汝は我と一デナリの約束を
せしにあらずや。一四己が物を取りて往け、この後の者に汝とひと
しく與ふるは、我が意なり。一五わが物を我が意のままにするは可
からずや、我よきが故に汝の目あしきか」一六かくのごとく後なる
者は先に、先なる者は後になるべし』一七イエス、エルサレムに上ら
んとし給ふとき、竊に十二弟子を近づけて、途すがら言ひ給ふ、一

八『視よ、我らエルサレムに上る、人の子は祭司長・學者らに付され
ん。彼ら之を死に定め、一九また嘲弄し、鞭うち、十字架につけん爲
に異邦人に付さん、かくて彼は三日めに甦へるべし』二〇ここにゼベ
ダイの子らの母、その子らと共に御許にきたり、拜して何事か求めん
としたるに、二一イエス彼に言ひたまふ『何を望むか』かれ言ふ『こ
の我が二人の子が汝の御國にて、一人は汝の右に、一人は左に坐
せんことを命じ給へ』二二イエス答へて言ひ給ふ『なんぢらは求むる
所を知らず、我が飮まんとする酒杯を飮み得るか』かれら言ふ『得
るなり』二三イエス言ひたまふ『實に汝らは我が酒杯を飮むべし、さ
れど我が右左に坐することは、これ我の與ふべきものならず、我が
父より備へられたる人こそ與へらるるなれ』二四十人の弟子これを聞
き、二人の兄弟の事によりて憤ほる。二五イエス彼らを呼びて言ひ
たまふ『異邦人の君のその民を宰どり、大なる者の民の上に權を執
ることは、汝らの知る所なり。二六汝らの中にては然らず、汝ら
の中に大ならんと思ふ者は、汝らの役者となり、二七首たらんと

思ふ者は汝らの僕となるべし。二八かくのごとく、人の子の來れる
も事へらるる爲にあらず、反つて事ふることをなし、又おほくの人の
贖償として己が生命を與へん爲なり』二九彼らエリコを出づるとき、
大なる群衆イエスに從へり。三〇視よ、二人の盲人、路の傍らに
坐しをりしが、イエスの過ぎ給ふことを聞き、叫びて言ふ『主よ、ダ
ビデの子よ、我らを憫みたまへ』三一群衆かれらを禁めて默さし
めんとしたれど、愈々叫びて言ふ『主よ、ダビデの子よ、我らを憫
み給へ』三二イエス立ちどまり、彼らを呼びて言ひ給ふ『わが汝ら
に何を爲さんことを望むか』三三彼ら言ふ『主よ、目の開かれんこと
なり』三四イエスいたく憫みて彼らの目に觸り給へば、直ちに物見
ることを得て、イエスに從へり。

第二一章 一彼らエルサレムに近づき、オリブ山の邊なるベテパゲ
に到りし時、イエス二人の弟子を遣さんとして言ひ給ふ、二『向の
村にゆけ、やがて繋ぎたる驢馬のその子とともに在るを見ん、解きて
我に牽ききたれ。三誰かもし汝らに何とか言はば「主の用なり」と

言へ、さらば直ちに之を遣さん』四此の事の起りしは、預言者によ
りて云はれたる言の成就せん爲なり。曰く、
五『シオンの娘に告げよ、
「視よ、汝の王、なんぢに來り給ふ。
柔和にして驢馬に乘り、
軛を負ふ驢馬の子に乘りて」』
六弟子たち往きて、イエスの命じ給へる如くして、七驢馬とその子と
を牽ききたり、己が衣をその上におきたれば、イエス之に乘りたま
ふ。八群衆の多くはその衣を途にしき、或者は樹の枝を伐りて途に
敷く。九かつ前にゆき後にしたがふ群衆よばはりて言ふ『ダビデの
子にホサナ、讃むべきかな、主の御名によりて來る者。いと高き處
にてホサナ』一〇遂にエルサレムに入り給へば、都擧りて騷立ちて
言ふ『これは誰なるぞ』一一群衆いふ『これガリラヤのナザレより
出でたる預言者イエスなり』一二イエス宮に入り、その内なる凡ての
賣買する者を逐ひいだし、兩替する者の臺、鴿を賣る者の腰掛を倒

して言ひ給ふ、一三『「わが家は祈の家と稱へらるべし」と録された
るに、汝らは之を強盜の巢となす』一四宮にて盲人・跛者ども御許に
來りたれば、之を醫したまへり。一五祭司長・學者らイエスの爲し給
へる不思議なる業と、宮にて呼はり『ダビデの子にホサナ』と言ひを
る子等とを見、憤ほりて、一六イエスに言ふ『なんぢ彼らの言ふとこ
ろを聞くか』イエス言ひ給ふ『然り「嬰兒乳兒の口に讚美を備へ給へ
り」とあるを未だ讀まぬか』一七遂に彼らを離れ、都を出でてベタニ
ヤにゆき、そこに宿り給ふ。一八朝早く都にかへる時、イエス飢ゑた
まふ。一九路の傍なる一もとの無花果の樹を見て、その下に到り給
ひしに、葉のほかに何をも見出さず、之に對ひて『今より後いつまで
も果を結ばざれ』と言ひ給へば、無花果の樹たちどころに枯れたり。
二〇弟子たち之を見、怪しみて言ふ『無花果の樹の斯く立刻に枯れた
るは何ぞや』二一イエス答へて言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、もし
汝ら信仰ありて疑はずば、啻に此の無花果の樹にありし如きことを
爲し得るのみならず、此の山に「移りて海に入れ」と言ふとも亦成る

べし。二二かつ祈のとき何にても信じて求めば、ことごとく得べし』
二三宮に到りて教へ給ふとき、祭司長・民の長老ら御許に來りて言
ふ『何の權威をもて此等の事をなすか、誰がこの權威を授けしか』二
四イエス答へて言ひたまふ『我も一言なんぢらに問はん、もし夫を告
げなば、我もまた何の權威をもて此等のことを爲すかを告げん。二五
ヨハネのバプテスマは何處よりぞ、天よりか、人よりか』かれら互
に論じて言ふ『もし天よりと言はば「何故かれを信ぜざりし」と言は
ん。二六もし人よりと言はんか、人みなヨハネを預言者と認むれば、
我らは群衆を恐る』二七遂に答へて『知らず』と言へり。イエスも
また言ひたまふ『我も何の權威をもて此等のことを爲すか汝らに告
げじ。二八なんぢら如何に思ふか、或人ふたりの子ありしが、その兄
にゆきて言ふ「子よ、今日、葡萄園に往きて働け」二九答へて「主
よ、我ゆかん」と言ひて終に往かず。三〇また弟にゆきて同じやう
に言ひしに、答へて「往かじ」と言ひたれど、後くいて往きたり。三
一この二人のうち孰か父の意を爲しし』彼らいふ『後の者なり』イ

エス言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、取税人と遊女とは汝らに先だ
ちて神の國に入るなり。三二それヨハネ義の道をもて來りしに、汝
らは彼を信ぜず、取税人と遊女とは信じたり。然るに汝らは之を見
し後も、なほ悔改めずして信ぜざりき。三三また一つの譬を聽け、
ある家主、葡萄園をつくりて籬をめぐらし、中に酒槽を掘り、櫓
を建て、農夫どもに貸して遠く旅立せり。三四果期ちかづきたれば、
その果を受取らんとて僕らを農夫どもの許に遣ししに、三五農夫ど
もその僕らを執へて、一人を打ちたたき、一人をころし、一人を石
にて撃てり。三六復ほかの僕らを前よりも多く遣ししに、之をも同
じやうに遇へり。三七「わが子は敬ふならん」と言ひて、遂にその
子を遣ししに、三八農夫ども此の子を見て互に言ふ「これは世嗣な
り、いざ殺して、その嗣業を取らん」三九かくて之をとらへ、葡萄園の
外に逐ひ出して殺せり。四〇さらば葡萄園の主人きたる時、この農夫
どもに何を爲さんか』四一かれら言ふ『その惡人どもを飽くまで滅
し、果期におよびて果を納むる他の農夫どもに葡萄園を貸し與ふべ

し』四二イエス言ひたまふ『聖書に、
「造家者らの棄てたる石は、
これぞ隅の首石となれる、
これ主によりて成れるにて、
我らの目には奇しきなり」
とあるを汝ら未だ讀まぬか。四三この故に汝らに告ぐ、汝らは神
の國をとられ、其の果を結ぶ國人は、之を與へらるべし。四四この石
の上に倒るる者はくだけ、又この石、人のうへに倒るれば、其の人を
微塵とせん』四五祭司長・パリサイ人ら、イエスの譬をきき、己ら
を指して語り給へるを悟り、四六イエスを執へんと思へど群衆を恐
れたり、群衆かれを預言者とするに因る。
第二二章一イエスまた譬をもて答へて言ひ給ふ二『天國は己が子
のために婚筵を設くる王のごとし。三婚筵に招きおきたる人々を迎へ
んとて僕どもを遣ししに、來るを肯はず。四復ほかの僕どもを遣
すとて言ふ「招きたる人々に告げよ、視よ、晝餐は既に備りたり。

我が牛も肥えたる畜も屠られて、凡ての物備りたれば、婚筵に來れ
と」五然るに人々顧みずして、或者は己が畑に、或者は己が商賣に
往けり。六また他の者は僕を執へて、辱しめかつ殺したれば、七王
怒りて軍勢を遣し、かの兇行者を滅して其の町を燒きたり。八か
くて僕どもに言ふ「婚筵は既に備りたれど、招きたる者どもは相應
しからず。九されば汝ら街に往きて、遇ふほどの者を婚筵に招け」
一〇僕ども途に出でて、善きも惡しきも遇ふほどの者をみな集めた
れば、婚禮の席は客にて滿てり。一一王、客を見んとて入り來り、
一人の禮服を著けぬ者あるを見て、一二之に言ふ「友よ、如何なれば
禮服を著けずして此處に入りたるか」かれ默しゐたり。一三ここに王
、侍者らに言ふ「その手足を縛りて外の暗黑に投げいだせ、其處にて
哀哭・切齒することあらん」一四それ招かるる者は多かれど、選ばる
る者は少し』一五ここにパリサイ人ら出でて、如何にしてかイエス
を言の羂に係けんと相議り、一六その弟子らをヘロデ黨の者どもと
共に遺して言はしむ『師よ、我らは知る、なんじは眞にして、眞を

もて神の道を教へ、かつ誰をも憚りたまふ事なし、人の外貌を見給
はぬ故なり。一七されば我らに告げたまへ、貢をカイザルに納むる
は可きか、惡しきか、如何に思ひたまふ』一八イエスその邪曲なるを
知りて言ひたまふ『僞善者よ、なんぞ我を試むるか。一九貢の金を
我に見せよ』彼らデナリ一つを持ち來る。二〇イエス言ひ給ふ『これ
は誰の像、たれの號なるか』二一彼ら言ふ『カイザルのなり』ここ
に彼らに言ひ給ふ『さらばカイザルの物はカイザルに、神の物は神に
納めよ』二二彼ら之を聞きて怪しみ、イエスを離れて去り往けり。二
三復活なしといふサドカイ人ら、その日みもとに來り問ひて言ふ二
四『師よ、モーセは「人もし子なくして死なば、其の兄弟かれの妻を
娶りて、兄弟のために世嗣を擧ぐべし」と云へり。二五我らの中に
七人の兄弟ありしが、兄めとりて死に、世嗣なくして其の妻を弟
に遺したり。二六その二その三より、その七まで皆かくの如く爲し、
二七最後にその女も死にたり。二八されば復活の時、その女は七人
のうち誰の妻たるべきか、彼ら皆これを妻としたればなり』二九イエ

ス答へて言ひ給ふ『なんぢら聖書をも神の能力をも知らぬ故に誤れ
り。三〇それ人よみがへりの時は、娶らず嫁がず、天に在る御使たち
の如し。三一死人の復活に就きては、神なんぢらに告げて、三二「我
はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」と言ひ給へること
を未だ讀まぬか。神は死にたる者の神にあらず、生ける者の神なり』
三三群衆これを聞きて其の教に驚けり。三四パリサイ人ら、イエス
のサドカイ人らを默さしめ給ひしことを聞きて相集り、三五その中
なる一人の教法師、イエスを試むる爲に問ふ三六『師よ、律法のうち
孰の誡命が大なる』三七イエス言ひ給ふ『「なんぢ心を盡し、精神
を盡し、思を盡して主なる汝の神を愛すべし」三八これは大にし
て第一の誡命なり。三九第二もまた之にひとし「おのれの如くなんぢ
の隣を愛すべし」四〇律法全體と預言者とは此の二つの誡命に據る
なり』四一パリサイ人らの集りたる時、イエス彼らに問ひて言ひ給ふ
四二『なんぢらはキリストに就きて如何に思ふか、誰の子なるか』か
れら言ふ『ダビデの子なり』四三イエス言ひ給ふ『さらばダビデ御靈

に感じて何故かれを主と稱ふるか。曰く
四四「主わが主に言ひ給ふ、
われ汝の敵を汝の足の下に置くまでは、
我が右に坐せよ」
四五斯くダビデ彼を主と稱ふれば、争でその子ならんや』四六誰も一言
だに答ふること能はず、その日より敢へて復イエスに問ふ者なかりき。
第二三章 一ここにイエス群衆と弟子たちとに語りて言ひ給ふ、二
『學者とパリサイ人とはモーセの座を占む。三されば凡てその言ふ所
は守りて行へ、されどその所作には效ふな、彼らは言ふのみにて行
はぬなり。四また重き荷を括りて人の肩にのせ、己は指にて之を動
かさんともせず。五凡てその所作は人に見られん爲にするなり。即
ちその經札を幅ひろくし、衣の總を大くし、六饗宴の上席、會堂
の上座、七市場にての敬禮、また人にラビと呼ばるることを好む。八
されど汝らはラビの稱を受くな、汝らの師は一人にして、汝等
はみな兄弟なり。九地にある者を父と呼ぶな、汝らの父は一人、す

なはち天に在す者なり。一〇また導師の稱を受くな、汝らの導師は
ひとり、即ちキリストなり。一一汝等のうち大なる者は、汝らの
役者とならん。一二凡そおのれを高うする者は卑うせられ、己を卑
うする者は高うせらるるなり。一三禍害なるかな、僞善なる學者、パ
リサイ人よ、なんぢらは人の前に天國を閉して自ら入らず、入らん
とする人の入るをも許さぬなり。一四［なし］一五禍害なるかな、僞善
なる學者、パリサイ人よ、汝らは一人の改宗者を得んために海陸を
經めぐり、既に得れば、之を己に倍したるゲヘナの子となすなり。
一六禍害なるかな、盲目なる手引よ、なんぢらは言ふ「人もし宮を指
して誓はば事なし、宮の黄金を指して誓はば果さざるべからず」と。
一七愚にして盲目なる者よ、黄金と黄金を聖ならしむる宮とは孰か
貴き。一八なんぢら又いふ「人もし祭壇を指して誓はば事なし、其の
上の供物を指して誓はば果さざるべからず」と。一九盲目なる者よ、
供物と供物を聖ならしむる祭壇とは孰か貴き。二〇されば祭壇を
指して誓ふ者は、祭壇とその上の凡ての物とを指して誓ふなり。二

一宮を指して誓ふ者は、宮とその内に住みたまふ者とを指して誓ふ
なり。二二また天を指して誓ふ者は、神の御座とその上に坐したまふ
者とを指して誓ふなり。二三禍害なるかな、僞善なる學者、パリサイ
人よ、汝らは薄荷・蒔蘿・クミンの十分の一を納めて、律法の中に
て尤も重き公平と憐憫と忠信とを等閑にす。されど之は行ふべき
ものなり、而して、彼もまた等閑にすべきものならず。二四盲目なる
手引よ、汝らは蚋を漉し出して駱駝を呑むなり。二五禍害なるかな、
僞善なる學者、パリサイ人よ、汝らは酒杯と皿との外を潔くす、さ
れど内は貪慾と放縱とにて滿つるなり。二六盲目なるパリサイ人よ、
汝まづ酒杯の内を潔めよ、さらば外も潔くなるべし。二七禍害なる
かな、僞善なる學者、パリサイ人よ、汝らは白く塗りたる墓に似た
り、外は美しく見ゆれども、内は死人の骨とさまざまの穢とにて滿
つ。二八かくのごとく汝らも外は人に正しく見ゆれども、内は僞善
と不法とにて滿つるなり。二九禍害なるかな、僞善なる學者、パリサ
イ人よ、汝らは預言者の墓をたて、義人の碑を飾りて言ふ、三〇「我

らもし先祖の時にありしならば、預言者の血を流すことに與せざりし
ものを」と。三一かく汝らは預言者を殺しし者の子たるを自ら證
す。三二なんぢら己が先祖の桝目を充せ。三三蛇よ、蝮の裔よ、なん
ぢら爭でゲヘナの刑罰を避け得んや。三四この故に視よ、我なんぢら
に預言者・智者・學者らを遣さんに、其の中の或者を殺し、十字架
につけ、或者を汝らの會堂にて鞭うち、町より町に逐ひ苦しめん。
三五之によりて義人アベルの血より、聖所と祭壇との間にて汝らが
殺ししバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上にて流したる正
しき血は、皆なんぢらに報い來らん。三六まことに汝らに告ぐ、こ
れらの事はみな今の代に報い來るべし。三七ああエルサレム、エルサ
レム、預言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて撃つ者よ、牝鷄
のその雛を翼の下に集むるごとく、我なんぢの子どもを集めんとせ
しこと幾度ぞや、されど汝らは好まざりき。三八視よ、汝らの家は
廢てられて汝らに遺らん。三九われ汝らに告ぐ「讃むべきかな、主
の名によりて來る者」と、汝等のいふ時の至るまでは、今より我を

見ざるべし』
第二四章 一イエス宮を出でてゆき給ふとき、弟子たち宮の建造物を
示さんとて御許に來りしに、二答へて言ひ給ふ『なんぢら此の一切の
物を見ぬか。誠に汝らに告ぐ、此處に一つの石も崩されずしては石
の上に遺らじ』三オリブ山に坐し給ひしとき、弟子たち竊に御許に
來りて言ふ『われらに告げ給へ、これらの事は何時あるか、又なんぢ
の來り給ふと世の終とには、何の兆あるか』四イエス答へて言ひ給
ふ『なんぢら人に惑されぬやうに心せよ。五多くの者わが名を冒し
來り「我はキリストなり」と言ひて多くの人を惑さん。六又なんぢ
ら戰爭と戰爭の噂とを聞かん、愼みて懼るな。かかる事はあるべき
なり、されど未だ終にはあらず。七即ち「民は民に、國は國に逆ひ
て起たん」また處々に饑饉と地震とあらん、八此等はみな産の苦難
の始なり。九そのとき人々なんぢらを患難に付し、また殺さん、汝
等わが名の爲に、もろもろの國人に憎まれん。一〇その時おほくの人
つまづき、且たがひに付し、互に憎まん。一一多くの僞預言者おこり

て、多くの人を惑さん。一二また不法の増すによりて、多くの人の
愛ひややかにならん。一三されど終まで耐へしのぶ者は救はるべし。
一四御國のこの福音は、もろもろの國人に證をなさんため全世界に
宣傳へられん、而してのち終は至るべし。一五なんぢら預言者ダニ
エルによりて言はれたる「荒す惡むべき者」の聖なる處に立つを見
ば（讀む者さとれ）一六その時ユダヤに居る者どもは山に遁れよ。一
七屋の上に居る者はその家の物を取り出さんとして下るな。一八畑に
をる者は上衣を取らんとて歸るな。一九その日には孕りたる者と乳
を哺まする者とは禍害なるかな。二〇汝らの遁ぐることの冬または
安息日に起らぬように祈れ。二一そのとき大なる患難あらん、世の
創より今に至るまでかかる患難はなく、また後にも無からん。二二
その日もし少くせられずば、一人だに救はるる者なからん、されど
選民の爲にその日少くせらるべし。二三その時あるひは「視よ、キ
リスト此處にあり」或は「此處にあり」と言ふ者ありとも信ずな。
二四僞キリスト・僞預言者おこりて、大なる徴と不思議とを現し、

爲し得べくば選民をも惑さんとするなり。二五視よ、あらかじめ之
を汝らに告げおくなり。二六されば人もし汝らに「視よ、彼は荒野
にあり」といふとも出で往くな「視よ、彼は部屋にあり」と言ふと
も信ずな。二七電光の東より出でて西にまで閃きわたる如く、人の
子の來るも亦然らん。二八それ死骸のある處には鷲あつまらん。二
九これらの日の患難ののち直ちに日は暗く、月は光を發たず、星は
空より隕ち、天の萬象ふるひ動かん。三〇そのとき人の子の兆、天
に現れん。そのとき地上の諸族みな嘆き、かつ人の子の能力と大
なる榮光とをもて、天の雲に乘り來るを見ん。三一また彼は使たち
を大なるラッパの聲とともに遣さん。使たちは天の此の極より彼
の極まで、四方より選民を集めん。三二無花果の樹よりの譬をまな
べ、その枝すでに柔かくなりて葉芽ぐめば、夏の近きを知る。三三
かくのごとく汝らも此等のすべての事を見ば、人の子すでに近づき
て門邊に到るを知れ。三四誠に汝らに告ぐ、これらの事ことごとく
成るまで、今の代は過ぎ往くまじ。三五天地は過ぎゆかん、されど我

が言は過ぎ往くことなし。三六その日その時を知る者なし、天の使
たちも知らず、子も知らず、ただ父のみ知り給ふ。三七ノアの時のご
とく人の子の來るも然あるべし。三八曾て洪水の前ノア方舟に入る日
までは、人々飲み食ひ、娶り嫁がせなどし、三九洪水の來りて悉と
く滅すまでは知らざりき、人の子の來るも然あるべし。四〇そのと
き二人の男畑にをらんに、一人は取られ一人は遺されん。四一二人
の女磨ひき居らんに、一人は取られ一人は遺されん。四二されば目
を覺しをれ、汝らの主のきたるは、何れの日なるかを知らざればな
り。四三汝等これを知れ、家主もし盗人いづれの時きたるかを知ら
ば、目をさまし居て、その家を穿たすまじ。四四この故に汝らも備へ
をれ、人の子は思はぬ時に來ればなり。四五主人が時に及びて食物
を與へさする爲に、家の者のうへに立てたる忠實にして慧き僕は誰
なるか。四六主人のきたる時、かく爲し居るを見らるる僕は幸福な
り。四七まことに汝らに告ぐ、主人すべての所有を彼に掌どらすべ
し。四八もしその僕惡しくして、心のうちに主人は遲しと思ひて、

四九その同輩を　きはじめ、酒徒らと飲食を共にせば、五〇その僕の
主人おもはぬ日しらぬ時に來りて、五一之を烈しく笞うち、その報
を僞善者と同じうせん。其處にて哀哭・切齒することあらん。
第二五章一このとき天國は、燈火を執りて新郎を迎へに出づる、十人
の處女に比ふべし。二その中の五人は愚にして五人は慧し。三愚
なる者は燈火をとりて油を携へず、四慧きものは油を器に入れて
燈火とともに携へたり。五新郎遲かりしかば、皆まどろみて寢ぬ。
六夜半に「やよ、新郎なるぞ、出で迎へよ」と呼はる聲す。七ここに
處女みな起きてその燈火を整へたるに、八愚なる者は慧きものに言
ふ「なんぢらの油を分けあたへよ、我らの燈火きゆるなり」九慧き
もの答へて言ふ「恐らくは我らと汝らとに足るまじ、寧ろ賣るもの
に往きて己がために買へ」一〇彼ら買はんとて往きたる間に新郎きた
りたれば、備へをりし者どもは彼とともに婚筵にいり、而して門は閉
されたり。一一その後かの他の處女ども來りて「主よ、主よ、われら
の爲にひらき給へ」と言ひしに、一二答へて「まことに汝らに告ぐ、

我は汝らを知らず」と言へり。一三されば目を覺しをれ、汝らは其
の日その時を知らざるなり。一四また或人とほく旅立せんとして、其
の僕どもを呼び、之に己が所有を預くるが如し。一五各人の能力に
應じて、或者には五タラント、或者には二タラント、或者には一タ
ラントを與へ置きて旅立せり。一六五タラントを受けし者は、直ちに
往き、之をはたらかせて他に五タラントを贏け、一七二タラントを受
けし者も同じく他に二タラントを贏く。一八然るに一タラントを受け
し者は、往きて地を掘り、その主人の銀をかくし置けり。一九久しう
して後この僕どもの主人きたりて彼らと計算したるに、二〇五タラ
ントを受けし者は他に五タラントを持ちきたりて言ふ「主よ、なん
ぢ我に五タラントを預けたりしが、視よ、他に五タラントを贏けた
り」二一主人いふ「宜いかな、善かつ忠なる僕、なんぢは僅なる物
に忠なりき。我なんぢに多くの物を掌どらせん、汝の主人の歡喜
に入れ」二二二タラントを受けし者も來りて言ふ「主よ、なんぢ我に
二タラントを預けたりしが、視よ、他に二タラントを贏けたり」二三

主人いふ「宜いかな、善かつ忠なる僕、なんぢは僅なる物に忠な
りき。我なんぢに多くの物を掌どらせん、汝の主人の歡喜にいれ」
二四また一タラントを受けし者もきたりて言ふ「主よ、我はなんぢの
嚴しき人にて、播かぬ處より刈り、散らさぬ處より歛むることを
知るゆゑに、二五懼れてゆき、汝のタラントを地に藏しおけり。視
よ、汝はなんぢの物を得たり」二六主人こたへて言ふ「惡しくかつ
惰れる僕、わが播かぬ處より刈り、散さぬ處より歛むることを知
るか。二七さらば我が銀を銀行にあづけ置くべかりしなり、我きたり
て利子とともに我が物をうけ取りしものを。二八されば彼のタラント
を取りて十タラントを有てる人に與へよ。二九すべて有てる人は、與
へられて愈々豐ならん。されど有たぬ者は、その有てる物をも取ら
るべし。三〇而して此の無益なる僕を外の暗黑に逐ひいだせ、其處
にて哀哭・切齒することあらん」三一人の子その榮光をもて、もろ
もろの御使を率ゐきたる時、その榮光の座位に坐せん。三二かくて
その前にもろもろの國人あつめられん、之を別つこと牧羊者が羊と

山羊とを別つ如くして、三三羊をその右に、山羊をその左におかん。
三四ここに王その右にをる者どもに言はん「わが父に祝せられたる者
よ、來りて世の創より汝等のために備へられたる國を嗣げ。三五な
んぢら我が飢ゑしときに食はせ、渇きしときに飮ませ、旅人なりし時
に宿らせ、三六裸なりしときに衣せ、病みしときに訪ひ、獄に在り
しときに來りたればなり」三七ここに、正しき者ら答へて言はん「主
よ、何時なんぢの飢ゑしを見て食はせ、渇きしを見て飮ませし。三八
何時なんぢの旅人なりしを見て宿らせ、裸なりしを見て衣せし。三
九何時なんぢの病みまた獄に在りしを見て、汝にいたりし」四〇王
こたへて言はん「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと
小き者の一人になしたるは、即ち我に爲したるなり」四一かくてま
た左にをる者どもに言はん「詛はれたる者よ、我を離れて惡魔とそ
の使らとのために備へられたる永遠の火に入れ。四二なんぢら我が
飢ゑしときに食はせず、渇きしときに飮ませず、四三旅人なりしとき
に宿らせず、裸なりしときに衣せず、病みまた獄にありしときに

訪はざればなり」四四ここに彼らも答へて言はん「主よ、いつ汝の
飢ゑ、或は渇き、或は旅人、あるひは裸、あるひは病み、或は獄
に在りしを見て事へざりし」四五ここに王こたへて言はん「誠にな
んぢらに告ぐ、此等のいと小きものの一人に爲さざりしは、即ち我
になさざりしなり」と。四六かくて、これらの者は去りて永遠の刑罰
にいり、正しき者は永遠の生命に入らん』
第二六章 一イエスこれらの言をみな語りをへて、弟子たちに言ひ
給ふ二『なんぢらの知るごとく、二日の後は過越の祭なり、人の子は
十字架につけられん爲に賣らるべし』三そのとき祭司長・民の長老
ら、カヤパといふ大祭司の中庭に集り、四詭計をもてイエスを捕へ、
かつ殺さんと相議りたれど、五又いふ『まつりの間は爲すべからず、
恐らくは民の中に亂起らん』六イエス、ベタニヤにて癩病人シモン
の家に居給ふ時、七ある女、石膏の壺に入りたる貴き香油を持ち
て、近づき來り、食事の席に就き居給ふイエスの首に注げり。八弟子
たち之を見て憤ほり言ふ『何故かく濫なる費をなすか。九之を多

くの金に賣りて、貧しき者に施すことを得たりしものを』一〇イエス
之を知りて言ひたまふ『何ぞこの女を惱すか、我に善き事をなせる
なり。一一貧しき者は常に汝らと偕にをれど、我は常に偕に居らず。
一二この女の我が體に香油を注ぎしは、わが葬りの備をなせる
なり。一三まことに汝らに告ぐ、全世界いづこにても、この福音の
宣傳へらるる處には、この女のなしし事も記念として語らるべし』
一四ここに十二弟子の一人イスカリオテのユダといふ者、祭司長らの
許にゆきて言ふ一五『なんぢらに彼を付さば、何ほど我に與へんとす
るか』彼ら銀三十を量り出せり。一六ユダこの時よりイエスを付さん
と好き機を窺ふ。一七除酵祭の初の日、弟子たちイエスに來りて言
ふ『過越の食をなし給ふために、何處に我らが備ふる事を望み給ふ
か』一八イエス言ひたまふ『都にゆき、某のもとに到りて「師い
ふ、わが時近づけり。われ弟子たちと共に過越を汝の家にて守らん」
と言へ』一九弟子たちイエスの命じ給ひし如くして、過越の備をな
せり。二〇日暮れて十二弟子とともに席に就きて、二一食するとき言

ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、汝らの中の一人われを賣らん』二二
弟子たち甚く憂ひて、おのおの『主よ、我なるか』と言ひいでしに、二
三答へて言ひたまふ『我とともに手を鉢に入るる者われを賣らん。二
四人の子は己に就きて録されたる如く逝くなり。されど人の子を賣
る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしものを』二五イ
エスを賣るユダ答へて言ふ『ラビ、我なるか』イエス言ひ給ふ『なん
ぢの言へる如し』二六彼ら食しをる時、イエス、パンをとり、祝して
さき、弟子たちに與へて言ひ給ふ『取りて食へ、これは我が體なり』
二七また酒杯をとりて謝し、彼らに與へて言ひ給ふ『なんぢら皆この
酒杯より飲め。二八これは契約のわが血なり、多くの人のために、罪
の赦を得させんとて流す所のものなり。二九われ汝らに告ぐ、わ
が父の國にて新しきものを汝らと共に飲む日までは、われ今より後
この葡萄の果より成るものを飲まじ』三〇彼ら讃美を歌ひて後オリブ
山に出でゆく。三一ここにイエス弟子たちに言ひ給ふ『今宵なんぢら
皆われに就きて躓かん「われ牧羊者を打たん、さらば群の羊散るべ

し」と録されたるなり。三二されど我よみがへりて後、なんぢらに先
だちてガリラヤに往かん』三三ペテロ答へて言ふ『假令みな汝に就き
て躓くとも我はいつまでも躓かじ』三四イエス言ひ給ふ『まことに
汝に告ぐ、こよひ鷄鳴く前に、なんぢ三たび我を否むべし』三五ペ
テロ言ふ『我なんぢと共に死ぬべき事ありとも汝を否まず』弟子た
ち皆かく言へり。三六ここにイエス彼らと共にゲツセマネといふ處
にいたりて、弟子たちに言ひ給ふ『わが彼處にゆきて祈る間、なん
ぢら此處に坐せよ』三七かくてペテロとゼベダイの子二人とを伴ひ
ゆき、憂ひ悲しみ出でて言ひ給ふ、三八『わが心いたく憂ひて死ぬば
かりなり。汝ら此處に止りて我と共に目を覺しをれ』三九少し進み
ゆきて、平伏し祈りて言ひ給ふ『わが父よ、もし得べくば此の酒杯を
我より過ぎ去らせ給へ。されど我が意のままにとにはあらず、御意の
ままに爲し給へ』四〇弟子たちの許にきたり、その眠れるを見てペテ
ロに言ひ給ふ『なんぢら斯く一時も我と共に目を覺し居ること能はぬ
か。四一誘惑に陷らぬやう、目を覺しかつ祈れ。實に心は熱すれど

も肉體よわきなり』四二また二度ゆき祈りて言ひ給ふ『わが父よ、この
酒杯もし我飲までは過ぎ去りがたくば、御意のままに成し給へ』四三
復きたりて彼らの眠れるを見たまふ、是その目疲れたるなり。四四ま
た離れゆきて、三たび同じ言にて祈り給ふ。四五而して弟子たちの
許に來りて言ひ給ふ『今は眠りて休め。視よ、時近づけり、人の子は
罪人らの手に付さるるなり。四六起きよ、我ら往くべし。視よ、我を
賣るもの近づけり』四七なほ語り給ふほどに、視よ、十二弟子の一人
なるユダ來る、祭司長・民の長老らより遣されたる大なる群衆、
劍と棒とをもちて之に伴ふ。四八イエスを賣る者あらかじめ合圖を
示して言ふ『わが接吻する者はそれなり、之を捕へよ』四九かくて直
ちにイエスに近づき『ラビ、安かれ』といひて接吻したれば、五〇イ
エス言ひたまふ『友よ、何とて來る』このとき人々すすみてイエスに
手をかけて捕ふ。五一視よ、イエスと偕にありし者のひとり、手をの
べ劍を拔きて、大祭司の僕をうちて、その耳を切り落せり。五二こ
こにイエス彼に言ひ給ふ『なんぢの劍をもとに收めよ、すべて劍を

とる者は劍にて亡ぶるなり。五三我わが父に請ひて、十二軍に餘る
御使を今あたへらるること能はずと思ふか。五四もし然せば、斯くあ
るべく録したる聖書はいかで成就すべき』五五この時イエス群衆に
言ひ給ふ『なんぢら強盜に向ふごとく劍と棒とをもち、我を捕へん
とて出で來るか。我は日々宮に坐して教へたりしに、汝ら我を捕へ
ざりき。五六されどかくの如くなるは、みな預言者たちの書の成就
せん爲なり』ここに弟子たち皆イエスを棄てて逃げさりぬ。五七イエ
スを捕へたる者ども、學者・長老らの集り居る大祭司カヤパの許に
曳きゆく。五八ペテロ遠く離れ、イエスに從ひて大祭司の中庭まで
到り、その成行を見んとて、そこに入り下役どもと共に坐せり。五九
祭司長らと全議會と、イエスを死に定めんとて、いつはりの證據を求
めたるに、六〇多くの僞證者いでたれども得ず。後に二人の者いでて
言ふ六一『この人は「われ神の宮を毀ち三日にて建て得べし」と云へ
り』六二大祭司たちてイエスに言ふ『この人々が汝に對して立つる
證據に何をも答へぬか』六三されどイエス默し居給ひたれば、大祭司

いふ『われ汝に命ず、活ける神に誓ひて我らに告げよ、汝はキリス
ト、神の子なるか』六四イエス言ひ給ふ『なんぢの言へる如し。かつ
我なんぢらに告ぐ、今より後、なんぢら人の子の全能者の右に坐し、
天の雲に乘りて來るを見ん』六五ここに大祭司おのが衣を裂きて言
ふ『かれ言をいへり、何ぞ他に證人を求めん。視よ、なんぢら今
この言をきけり。六六いかに思ふか』答へて言ふ『かれは死に當れ
り』六七ここに彼等その御顏に唾し、拳にて搏ち、或者どもは手掌
にて批きて言ふ六八『キリストよ、我らに預言せよ、汝をうちし者
は誰なるか』六九ペテロ外にて中庭に坐しゐたるに、一人の婢女きた
りて言ふ『なんぢもガリラヤ人イエスと偕にゐたり』七〇かれ凡ての
人の前に肯はずして言ふ『われは汝の言ふことを知らず』七一かく
て門まで出で往きたるとき、他の婢女かれを見て、其處にをる者ども
に向ひて『この人はナザレ人イエスと偕にゐたり』と言へるに、七二
重ねて肯はず、契ひて『我はその人を知らず』といふ。七三暫くし
て其處に立つ者ども近づきてペテロに言ふ『なんぢも慥にかの黨與

なり、汝の國訛なんぢを表せり』七四ここにペテロ盟ひかつ契ひ
て『我その人を知らず』と言ひ出づるをりしも、鷄鳴きぬ。七五ペ
テロ『にはとり鳴く前に、なんぢ三度われを否まん』と、イエスの言
ひ給ひし御言を思ひだし、外に出でて甚く泣けり。

第二七章
一夜明けになりて、凡ての祭司長・民の長老ら、イエスを
殺さんと相議り、二遂に之を縛り、曳きゆきて總督ピラトに付せり。
三ここにイエスを賣りしユダ、その死に定められ給ひしを見て悔い、
祭司長・長老らに、かの三十の銀をかへして言ふ、四『われ罪なきの
血を賣りて罪を犯したり』彼らいふ『われら何ぞ干らん、汝みづか
ら當るべし』五彼その銀を聖所に投げすてて去り、ゆきて自ら縊れ
たり。六祭司長らその銀をとりて言ふ『これは血の價なれば、宮の
庫に納むるは可からず』七かくて相議り、その銀をもて陶工の畑を
買ひ、旅人らの墓地とせり。八之によりて其の畑は、今に至るまで血
の畑と稱へらる。九ここに預言者エレミヤによりて云はれたる言は
成就したり。曰く『かくて彼ら値積られしもの、即ちイスラエルの

子らが値積りし者の價の銀三十をとりて、一〇陶工の畑の代に之
を與へたり。主の我に命じ給ひし如し』一一さてイエス、總督の前に
立ち給ひしに、總督問ひて言ふ『なんぢはユダヤ人の王なるか』イエ
ス言ひ給ふ『なんぢの言ふが如し』一二祭司長・長老ら訴ふれども、
何をも答へ給はず。一三ここにピラト彼に言ふ『聞かぬか、彼らが汝
に對して如何におほくの證據を立つるを』一四されど總督の甚く怪し
むまで、一言をも答へ給はず。一五祭の時には、總督群衆の望に
まかせて、囚人一人を之に赦す例あり。一六ここにバラバといふ隱れ
なき囚人あり。一七されば人々の集れる時、ピラト言ふ『なんぢら
我が誰を赦さんことを願ふか。バラバなるか、キリストと稱ふるイエ
スなるか』一八これピラト彼らのイエスを付ししは嫉に因ると知る
故なり。一九彼なほ審判の座にをる時、その妻、人を遣して言はし
む『かの義人に係ることを爲な、我けふ夢の中にて彼の故にさまざ
ま苦しめり』二〇祭司長・長老ら、群衆にバラバの赦されん事を請
はしめ、イエスを亡さんことを勸む。二一總督こたへて彼らに言ふ

『二人の中いづれを我が赦さん事を願ふか』彼らいふ『バラバなり』二
二ピラト言ふ『さらばキリストと稱ふるイエスを我いかにすべきか』
皆いふ『十字架につくべし』二三ピラト言ふ『かれ何の惡事をなした
るか』彼ら烈しく叫びていふ『十字架につくべし』二四ピラトは何の
效なく反つて亂にならんとするを見て、水をとり群衆のまへに手を
洗ひて言ふ『この人の血につきて我は罪なし、汝等みづから當れ』二
五民みな答へて言ふ『其の血は、我らと我らの子孫とに歸すべし』二
六ここにピラト、バラバを彼らに赦し、イエスを鞭うちて、十字架に
つくる爲に付せり。二七ここに總督の兵卒ども、イエスを官邸につ
れゆき、全隊を御許に集め、二八その衣をはぎて、緋色の上衣をき
せ、二九茨の冠冕を編みて、その首に冠らせ、葦を右の手にもたせ、
且その前に跪づき、嘲弄して言ふ『ユダヤ人の王、安かれ』三〇また
之に唾し、かの葦をとりて其の首を叩く。三一かく嘲弄してのち、
上衣を剥ぎて、故の衣をきせ、十字架につけんとて曳きゆく。三二
その出づる時、シモンといふクレネ人にあひしかば、強ひて之にイエ

スの十字架をおはしむ。三三かくてゴルゴタといふ處、即ち髑髏
の地にいたり、三四苦味を混ぜたる葡萄酒を飲ませんとしたるに、嘗
めて、飲まんとし給はず。三五彼らイエスを十字架につけてのち、籤
をひきて其の衣をわかち、三六且そこに坐して、イエスを守る。三
七その首の上に『これはユダヤ人の王イエスなり』と記したる罪標
を置きたり。三八ここにイエスとともに二人の強盜、十字架につけら
れ、一人はその右に、一人はその左におかる。三九往來の者どもイ
エスを譏り、首を振りていふ、四〇『宮を毀ちて三日のうちに建つる
者よ、もし神の子ならば己を救へ、十字架より下りよ』四一祭司長
らもまた同じく、學者・長老らとともに嘲弄して言ふ、四二『人を
救ひて己を救ふこと能はず。彼はイスラエルの王なり、いま十字架
より下りよかし、さらば我ら彼を信ぜん。四三彼は神に依り頼めり、
神かれを愛しまば今すくひ給ふべし「我は神の子なり」と云へり』
四四ともに十字架につけられたる強盜どもも、同じ事をもてイエスを
罵れり。四五晝の十二時より地の上あまねく暗くなりて、三時に及

ぶ。四六三時ごろイエス大聲に叫びて『エリ、エリ、レマ、サバクタ
ニ』と言ひ給ふ。わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひしとの意
なり。四七そこに立つ者のうち或人々これを聞きて『彼はエリヤを呼
ぶなり』と言ふ。四八直ちにその中の一人はしりゆきて海綿をとり、
酸き葡萄酒を含ませ、葦につけてイエスに飮ましむ。四九その他の者
ども言ふ『まて、エリヤ來りて彼を救ふや否や、我ら之を見ん』五〇
イエス再び大聲に呼はりて息絶えたまふ。五一視よ、聖所の幕、上
より下まで裂けて二つとなり、また地震ひ、磐さけ、五二墓ひらけて、
眠りたる聖徒の屍體おほく活きかへり、五三イエスの復活ののち墓
をいで、聖なる都に入りて、多くの人に現れたり。五四百卒長お
よび之と共にイエスを守りゐたる者ども、地震とその有りし事とを
見て甚く懼れ『實に彼は神の子なりき』と言へり。五五その處にて
遙に望みゐたる多くの女あり、イエスに事へてガリラヤより從ひ
來りし者どもなり。五六その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨ
セフとの母マリヤ、及びゼベダイの子らの母などもゐたり。五七日暮

れて、ヨセフと云ふアリマタヤの富める人きたる。彼もイエスの弟子
なるが、五八ピラトに往きてイエスの屍體を請ふ。ここにピラト之を
付すことを命ず。五九ヨセフ屍體をとりて淨き亞麻布につつみ、六〇
岩にほりたる己が新しき墓に納め、墓の入口に大なる石を轉しお
きて去りぬ。六一其處にはマグダラのマリヤと他のマリヤと墓に向ひ
て坐しゐたり。六二あくる日、即ち準備日の翌日、祭司長らとパリサ
イ人らとピラトの許に集りて言ふ、六三『主よ、かの惑すもの生き
居りし時「われ三日の後に甦へらん」と言ひしを、我ら思ひいだせ
り。六四されば命じて三日に至るまで墓を固めしめ給へ、恐らくはそ
の弟子ら來りて之を盜み、「彼は死人の中より甦へれり」と民に言は
ん。然らば後の惑は前のよりも甚だしからん』六五ピラト言ふ『な
んぢらに番兵あり、往きて力限り固めよ』六六乃ち彼らゆきて石に
封印し、番兵を置きて墓を固めたり。

第二八章一さて安息日をはりて、一週の初の日のほの明き頃、マ
グダラのマリヤと他のマリヤと墓を見んとて來りしに、二視よ、大な

る地震あり、これ主の使、天より降り來りて、かの石を轉し退け、
その上に坐したるなり。三その狀は電光のごとく輝き、その衣は雪
のごとく白し。四守の者ども彼を懼れたれば、戰きて死人の如くな
りぬ。五御使こたへて女たちに言ふ『なんぢら懼るな、我なんぢらが
十字架につけられ給ひしイエスを尋ぬるを知る。六此處には在さず、
その言へる如く甦へり給へり。來りてその置かれ給ひし處を見よ。
七かつ速かに往きて、その弟子たちに「彼は死人の中より甦へり給
へり。視よ、汝らに先だちてガリラヤに往き給ふ、彼處にて謁ゆる
を得ん」と告げよ。視よ、汝らに之を告げたり』八女たち懼と大
なる歡喜とをもて、速かに墓を去り、弟子たちに知らせんとて走り
ゆく。九視よ、イエス彼らに遇ひて『安かれ』と言ひ給ひたれば、進
みゆき、御足を抱きて拜す。一〇ここにイエス言ひたまふ『懼るな、
往きて我が兄弟たちに、ガリラヤにゆき、彼處にて我を見るべきこ
とを知らせよ』一一女たちの往きたるとき、視よ、番兵のうちの數人
、都にいたり、凡て有りし事どもを祭司長らに告ぐ。一二祭司長ら、

長老らと共に集りて相議り、兵卒どもに多くの銀を與へて言ふ、一
三『なんぢら言へ「その弟子ら夜きたりて、我らの眠れる間に彼を盗
めり」と。一四この事もし總督に聞えなば、我ら彼を宥めて汝らに
憂なからしめん』一五彼ら銀をとりて言ひ含められたる如くしたれ
ば、此の話ユダヤ人の中にひろまりて、今日に至れり。一六十一弟子
たちガリラヤに往きて、イエスの命じ給ひし山にのぼり、一七遂に謁
えて拜せり。されど疑ふ者もありき。一八イエス進みきたり、彼ら
に語りて言ひたまふ『我は天にても地にても一切の權を與へられた
り。一九されば汝ら往きて、もろもろの國人を弟子となし、父と子
と聖靈との名によりてバプテスマを施し、二〇わが汝らに命ぜし凡
ての事を守るべきを教へよ。視よ、我は世の終まで常に汝らと偕
に在るなり』

マルコ傳福音書

第一章 一 神の子イエス、キリストの福音の始。二 預言者イザヤの
書に、
『視よ、我なんぢの顔の前に、わが使を遣す、
彼なんぢの道を設くべし。
三 荒野に呼はる者の聲す、
「主の道を備へ、その路すぢを直くせよ」』
と録されたる如く、四 バプテスマのヨハネ出で、荒野にて罪の赦を
得さする悔改のバプテスマを宣傳ふ。五 ユダヤ全國またエルサレム
の人々、みな其の許に出で來りて罪を言ひあらはし、ヨルダン川に
てバプテスマを受けたり。六 ヨハネは駱駝の毛織を著、腰に皮の帯し
て、蝗と野蜜とを食へり。七 かれ宣傳へて言ふ『我よりも力ある者

、わが後に來る。我は屈みてその鞋の紐をとくにも足らず、八我は水
にて汝らにバプテスマを施せり。されど彼は聖靈にてバプテスマ
を施さん』九その頃イエス、ガリラヤのナザレより來り、ヨルダン
にてヨハネよりバプテスマを受け給ふ。一〇かくて水より上るをりし
も、天さけゆき、御靈、鴿のごとく己に降るを見給ふ。一一かつ天よ
り聲出づ『なんぢは我が愛しむ子なり、我なんぢを悅ぶ』一二かく
て御靈ただちにイエスを荒野に逐ひやる。一三荒野にて四十日の間
サタンに試みられ、獸とともに居給ふ、御使たち之に事へぬ。一四
ヨハネの囚はれし後、イエス、ガリラヤに到り、神の福音を宣傳へて
言ひ給ふ、一五『時は滿てり、神の國は近づけり、汝ら悔改めて福音
を信ぜよ』一六イエス、ガリラヤの海にそひて步みゆき、シモンと其
の兄弟アンデレとが、海に網うちをるを見給ふ。かれらは漁人な
り。一七イエス言ひ給ふ『われに從ひきたれ、汝等をして人を漁
る者とならしめん』一八彼ら直ちに網をすてて從へり。一九少し進み
ゆきて、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとを見給ふ、彼らも

舟にありて網を繕ひゐたり。二〇直ちに呼び給へば、父ゼベダイを
雇人とともに舟に遺して從ひゆけり。二一かくて彼らカペナウムに
到る、イエス直ちに安息日に會堂にいりて教へ給ふ。二二人々その
教に驚きあへり。それは學者の如くならず、權威ある者のごとく教
へ給ふゆゑなり。二三時にその會堂に、穢れし靈に憑かれたる人あ
り、叫びて言ふ二四『ナザレのイエスよ、我らは汝と何の關係あらん
や、汝は我らを亡さんとて來給ふ。われは汝の誰なるを知る、神
の聖者なり』二五イエス禁めて言ひ給ふ『默せ、その人を出でよ』
二六穢れし靈その人を痙攣けさせ、大聲をあげて出づ。二七人々みな
驚き相問ひて言ふ『これ何事ぞ、權威ある新しき教なるかな、穢れ
し靈すら命ずれば從ふ』二八ここにイエスの噂あまねくガリラヤの
四方に弘りたり。二九會堂をいで、直ちにヤコブとヨハネとを伴
ひて、シモン及びアンデレの家に入り給ふ。三〇シモンの外姑、熱を
やみて臥しゐたれば、人々ただちに之をイエスに告ぐ。三一イエス往
きて、その手をとり、起し給へば、熱さりて女かれらに事ふ。三二

夕となり、日いりてのち、人々すべての病ある者・惡鬼に憑かれ
たる者をイエスに連れ來り、三三全町こぞりて門に集る。三四イエス
さまざまの病を患ふ多くの人をいやし、多くの惡鬼を逐ひいだし、
之に物言ふことを免し給はず、惡鬼イエスを知るに因りてなり。三五
朝まだき暗き程に、イエス起き出でて、寂しき處にゆき、其處にて
祈りゐたまふ。三六シモン及び之と偕にをる者ども、その跡を慕ひゆ
き、三七イエスに遇ひて言ふ『人みな汝を尋ぬ』三八イエス言ひ給ふ
『いざ最寄の村々に往かん、われ彼處にも教を宣ぶべし、我はこの爲
に出で來りしなり』三九遂にゆきて、　くガリラヤの會堂にて教
を宣べ、かつ惡鬼を逐ひ出し給へり。四〇一人の癩病人みもとに來
り、跪づき請ひて言ふ『御意ならば、我を潔くなし給ふを得ん』四一
イエス憫みて、手をのべ彼につけて『わが意なり、潔くなれ』と言
ひ給へば、四二直ちに癩病さりて、その人きよまれり。四三やがて彼
を去らしめんとて、嚴しく戒めて言ひ給ふ四四『つつしみて誰にも
語るな、唯ゆきて己を祭司に見せ、モーセが命じたる物を汝の潔

のために獻げて、人々に證せよ』四五されど彼いでて此の事を大に
述べつたへ、く弘め始めたれば、この後イエスあらはに町に入り
がたく、外の寂しき處に留りたまふ。人々四方より御許に來れり。
第二章 一數日の後、またカペナウムに入り給ひしに、その家に在す
ることを聞きて、二多くの人あつまり來り、門口すら隙間なき程なり。
イエス彼らに御言を語り給ふ。三ここに四人に擔はれたる中風の者を
人々つれ來る。四群衆によりて御許にゆくこと能はざれば、在す所
の屋根を穿ちあけて、中風の者を床のまま縋り下せり。五イエス彼ら
の信仰を見て、中風の者に言ひたまふ『子よ、汝の罪ゆるされたり』
六ある學者たち其處に坐しゐたるが、心の中に、七『この人なんぞ
斯く言ふか、これは神をすなり、神ひとりの外は誰か罪を赦すこ
とを得べき』と論ぜしかば、八イエス直ちに彼等がかく論ずるを心
に悟りて言ひ給ふ『なにゆゑ斯かることを心に論ずるか、九中風の
者に「なんぢの罪ゆるされたり」と言ふと「起きよ、床をとりて歩
め」と言ふと、孰か易き。一〇人の子の地にて罪を赦す權威ある事

を、汝らに知らせん爲に』――中風の者に言ひ給ふ――一一『なん
ぢに告ぐ、起きよ、床をとりて家に歸れ』一二彼おきて直ちに床をと
りあげ、人々の眼前いで往けば、皆おどろき、かつ神を崇めて言ふ
『われら斯くの如きことは斷えて見ざりき』一三イエスまた海邊に出
でゆき給ひしに、群衆みもとに集ひ來りたれば、之を教へ給へり。
一四かくて過ぎ往くとき、アルパヨの子レビの收税所に坐しをるを見
て『われに從へ』と言ひ給へば、立ちて從へり。一五而して其の家
にて食事の席につき居給ふとき、多くの取税人・罪人ら、イエス及び
弟子たちと共に席に列る、これらの者おほく居て、イエスに從へる
なり。一六パリサイ人の學者ら、イエスの罪人・取税人とともに食
し給ふを見て、その弟子たちに言ふ『なにゆゑ取税人・罪人とともに
食するか』一七イエス聞きて言ひ給ふ『健かなる者は醫者を要せず、
ただ病ある者これを要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人
を招かんとて來れり』一八ヨハネの弟子とパリサイ人とは、斷食しゐ
たり。人々イエスに來りて言ふ『なにゆゑヨハネの弟子とパリサイ

人の弟子とは斷食して、汝の弟子は斷食せぬか』一九イエス言ひ給
ふ『新郎の友だち、新郎と偕にをるうちは斷食し得べきか、新郎と偕
にをる間は、斷食するを得ず。二〇されど新郎をとらるる日きたら
ん、その日には斷食せん。二一誰も新しき布の裂を舊き衣に縫ひつ
くることは爲じ。もし然せば、その補ひたる新しきものは、舊き物
をやぶり、破綻さらに甚だしからん。二二誰も新しき葡萄酒を、ふ
るき革嚢に入るることは爲じ。もし然せば、葡萄酒は嚢をはりさ
きて、葡萄酒も嚢も廢らん。新しき葡萄酒は、新しき革嚢に入る
るなり』二三イエス安息日に麥畠をとほり給ひしに、弟子たち歩み
つつ穗を摘み始めたれば、二四パリサイ人、イエスに言ふ『視よ、彼
らは何ゆゑ安息日に爲まじき事をするか』二五答へ給ふ『ダビデその
伴へる人々と共に乏しくして飢ゑしとき爲しし事を未だ讀まぬか。
二六即ち大祭司アビアタルの時、ダビデ神の家に入りて、祭司のほか
は食ふまじき供のパンを取りて食ひ、おのれと偕なる者にも與へた
り』二七また言ひたまふ『安息日は人のために設けられて、人は安息

日のために設けられず。二八されば人の子は安息日にも主たるなり』
第三章一また會堂に入り給ひしに、片手なえたる人あり。二人々
イエスを訴へんと思ひて、安息日にかの人を醫すや否やと窺ふ。三
イエス手なえたる人に『中に立て』といひ、四また人々に言ひたまふ
『安息日に善をなすと惡をなすと、生命を救ふと殺すと、孰かよき』
彼ら默然たり。五イエスその心の頑固なるを憂ひて、怒り見囘して、
手なえたる人に『手を伸べよ』と言ひ給ふ。かれ手を伸べたれば癒
ゆ。六パリサイ人いでて、直ちにヘロデ黨の人とともに、如何にして
イエスを亡さんと議る。七イエスその弟子とともに海邊に退き給ひ
しに、ガリラヤより來れる夥多しき民衆も從ふ。又ユダヤ、八エル
サレム、イドマヤ、ヨルダンの向の地、およびツロ、シドンの邊
より夥多しき民衆その爲し給へる事を聞きて、御許に來る。九イエ
ス群衆のおしなやますを逃れんとて、小舟を備へ置くことを弟子に
命じ給ふ。一〇これ多くの人を醫し給ひたれば、凡て病に苦しむも
の、御體に觸らんとて押迫る故なり。一一また穢れし靈イエスを見る

毎に、御前に平伏し、叫びて『なんぢは神の子なり』と言ひたれば、
一二我を顯すなとて、嚴しく戒め給ふ。一三イエス山に登り、御意
に適ふ者を召し給ひしに、彼ら御許に來る。一四ここに十二人を擧げ
たまふ。是かれらを御側におき、また教を宣べさせ、一五惡鬼を逐
ひ出す權威を用ひさする爲に、遣さんとてなり。一六此の十二人を
擧げて、シモンにペテロといふ名をつけ、一七ゼベダイの子ヤコブ、
その兄弟ヨハネ、此の二人にボアネルゲ、即ち雷霆の子といふ名を
つけ給ふ。一八又アンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、
アルパヨの子ヤコブ、タダイ、熱心黨のシモン、一九及びイスカリオ
テのユダ、このユダはイエスを賣りしなり。かくてイエス家に入り給
ひしに、二〇群衆また集り來りたれば、食事する暇もなかりき。二
一その親族の者これを聞き、イエスを取押へんとて出で來る、イエス
を狂へりと謂ひてなり。二二又エルサレムより下れる學者たちも『彼
はベルゼブルに憑かれたり』と言ひ、かつ『惡鬼の首によりて惡鬼
を逐ひ出すなり』と言ふ。二三イエス彼らを呼びよせ、譬にて言ひ

給ふ『サタンはいかでサタンを逐ひ出し得んや。二四もし國分れ爭
はば、其の國立つこと能はず。二五もし家分れ爭はば、其の家立つこ
と能はざるべし。二六もしサタン己に逆ひて分れ爭はば、立つこ
と能はず、反つて亡び果てん。二七誰にても先づ強き者を縛らずば、
強き者の家に入りて其の家財を奪ふこと能はじ、縛りて後その家を
奪ふべし。二八まことに汝らに告ぐ、人の子らの凡ての罪と、けが
す　とは赦されん。二九されど聖靈をけがす者は、永遠に赦されず、
永遠の罪に定めらるべし』三〇これは彼らイエスを『穢れし靈に憑か
れたり』と云へるが故なり。三一ここにイエスの母と兄弟と來りて
外に立ち、人を遣してイエスを呼ばしむ。三二群衆イエスを環りて
坐したりしが、或者いふ『視よ、なんぢの母と兄弟姉妹と外にあり
て汝を尋ぬ』三三イエス答へて言ひ給ふ『わが母、わが兄弟とは誰
ぞ』三四かくて周圍に坐する人々を見回して言ひたまふ『視よ、これ
は我が母、わが兄弟なり。三五誰にても神の御意を行ふものは、是
わが兄弟、わが姉妹、わが母なり』

第四章一イエスまた海邊にて教へ始めたまふ。夥多しき群衆、み
もとに集りたれば、舟に乘り海に泛びて坐したまひ、群衆はみな海
に沿ひて陸にあり。二譬にて數多の事をしへ、教の中に言ひたま
ふ、三『聽け、種播くもの、播かんとて出づ。四播くとき、路の傍
らに落ちし種あり、鳥きたりて啄む。五土うすき磽地に落ちし種あ
り、土深からぬによりて、速かに萠え出でたれど、六日出でてやけ、
根なき故に枯る。七茨の中に落ちし種あり、茨そだち塞ぎたれば、
實を結ばず。八良き地に落ちし種あり、生え出でて茂り、實を結ぶこ
と、三十倍、六十倍、百倍せり』九また言ひ給ふ『きく耳ある者は聽
くべし』一〇イエス人々を離れ居給ふとき、御許にをる者ども、十二
弟子とともに、此等の譬を問ふ。一一イエス言ひ給ふ『なんぢらに
は神の國の奧義を與ふれど、外の者には、凡て譬にて教ふ。一二こ
れ「見るとき見ゆとも認めず、聽くとき聞ゆとも悟らず、飜へりて
赦さるる事なからん」爲なり』一三また言ひ給ふ『なんぢら此の譬
を知らぬか、さらば爭でもろもろの譬を知り得んや。一四播く者は

御言を播くなり。一五御言の播かれて路の傍らにありとは、かかる
人をいふ、即ち聞くとき、直ちにサタン來りて、その播かれたる御言
を奪ふなり。一六同じく播かれて磽地にありとは、かかる人をいふ、
即ち御言をききて、直ちに喜び受くれども、一七その中に根なけれ
ば、ただ暫し保つのみ、御言のために患難また迫害にあふ時は、直
ちに躓くなり。一八また播かれて茨の中にありとは、かかる人をい
ふ、一九すなはち御言をきけど、世の心勞、財貨の惑、さまざま
の慾いりきたり、御言を塞ぐによりて、遂に實らざるなり。二〇播か
れて良き地にありとは、かかる人をいふ、即ち御言を聽きて受け、
三十倍、六十倍、百倍の實を結ぶなり』二一また言ひたまふ『升の
した、寢臺の下におかんとて、燈火をもち來るか、燈臺の上におく爲
ならずや。二二それ顯るる爲ならで隱るるものなく、明かにせらる
る爲ならで秘めらるるものなし。二三聽く耳ある者は聽くべし』二四
また言ひ給ふ『なんぢら聽くことに心せよ、汝らが量る量にて量
られ、更に增し加へらるべし。二五それ有てる人は、なほ與へられ、

有たぬ人は、有てる物をも取らるべし』二六また言ひたまふ『神の國
は、或人たねを地に播くが如し、二七日夜起臥するほどに、種はえ出
でて育てども、その故を知らず。二八地はおのづから實を結ぶものに
して、初には苗、つぎに穗、つひに穗の中に充ち足れる穀なる。二
九實みのれば直ちに鎌を入る、收穫時の到れるなり』三〇また言ひ給
ふ『われら神の國を何になずらへ、如何なる譬をもて示さん。三一
一粒の芥種のごとし、地に播く時は、世にある萬の種よりも小け
れど、三二既に播きて生え出づれば、萬の野菜よりは大く、かつ大
なる枝を出して、空の鳥その蔭に棲み得るほどになるなり』三三かく
のごとき數多の譬をもて、人々の聽きうる力に隨ひて、御言を語
り、三四譬ならでは語り給はず、弟子たちには、人なき時に凡ての
事を釋き給へり。三五その日、夕になりて言ひ給ふ『いざ彼方に往
かん』三六弟子たち群衆を離れ、イエスの舟に居給ふままに共に乘り
出づ、他の舟も從ひゆく。三七時に烈しき颶風おこり、浪うち込み
て、舟に滿つるばかりなり。三八イエスは艫の方に茵を枕として寢

ねたまふ。弟子たち呼び起して言ふ『師よ、我らの亡ぶるを顧み給
はぬか』三九イエス起きて風をいましめ、海に言ひたまふ『默せ、鎭
れ』乃ち風やみて、大なる凪となりぬ。四〇かくて弟子たちに言ひ
給ふ『なに故かく臆するか、信仰なきは何ぞ』四一かれら甚く懼れて
互に言ふ『こは誰ぞ、風も海も順ふとは』

第五章 一かくて海の彼方なるゲラセネ人の地に到る。二イエスの舟
より上り給ふとき、穢れし靈に憑かれたる人、墓より出で直ちに遇
ふ。三この人、墓を住處とす、鏈にてすら今は誰も繋ぎ得ず。四彼
はしばしば足械と鏈とにて繋がれたれど、鏈をちぎり、足械をく
だきたり、誰も之を制する力なかりしなり。五夜も晝も、絶えず墓
あるひは山にて叫び、己が身を石にて傷つけゐたり。六かれ遙にイ
エスを見て、走りきたり、御前に平伏し、七大聲に叫びて言ふ『いと
高き神の子イエスよ、我は汝と何の關係あらん、神によりて願ふ、
我を苦しめ給ふな』八これはイエス『穢れし靈よ、この人より出で往
け』と言ひ給ひしに因るなり。九イエスまた『なんぢの名は何か』と

問ひ給へば『わが名はレギオン、我ら多きが故なり』と答へ、一〇また
己らを此の地の外に逐ひやり給はざらんことを切に求む。一一彼處
の山邊に豚の大なる群、食しゐたり。一二惡鬼どもイエスに求めて
言ふ『われらを遣して豚に入らしめ給へ』一三イエス許したまふ。穢
れし靈いでて、豚に入りたれば、二千匹ばかりの群、海に向ひて崖
を駈けくだり、海に溺れたり。一四飼ふ者ども逃げ往きて、町にも里
にも告げたれば、人々何事の起りしかを見んとて出づ。一五かくてイ
エスに來り、惡鬼に憑かれたりし者、即ちレギオンをもちたりし者
の、衣服をつけ、慥なる心にて坐しをるを見て、懼れあへり。一六
かの惡鬼に憑かれたる者の上にありし事と、豚の事とを見し者ども、
之を具に告げたれば、一七人々イエスにその境を去り給はん事を求
む。一八イエス舟に乗らんとし給ふとき、惡鬼に憑かれたりしもの偕
に在らん事を願ひたれど、一九許さずして言ひ給ふ『なんぢの家に、
親しき者に歸りて、主がいかに大なる事を汝に爲し、いかに汝を
憫み給ひしかを告げよ』二〇彼ゆきて、イエスの如何に大なる事を

己になし給ひしかを、デカポリスに言ひ弘めたれば、人々みな怪し
めり。二一イエス舟にて復かなたに渡り給ひしに、大なる群衆みも
とに集る、イエス海邊に在せり。二二會堂司の一人、ヤイロといふ
者きたり、イエスを見て、その足下に伏し、二三切に願ひて言ふ『わ
が稚なき娘、いまはの際なり、來りて手をおき給へ、さらば救はれ
て活くべし』二四イエス彼と共にゆき給へば、大なる群衆したがひ
つつ御許に押迫る。二五ここに十二年血漏を患ひたる女あり。二六
多くの醫者に多く苦しめられ、有てる物をことごとく費したれど、
何の效なく、反つて増々惡しくなりたり。二七イエスの事をききて、
群衆にまじり、後に來りて、御衣にさはる、二八『その衣にだに
觸らば救はれん』と自ら謂へり。二九かくて血の泉ただちに乾き、
病のいえたるを身に覺えたり。三〇イエス直ちに能力の己より出で
たるを自ら知り、群衆の中にて、振反り言ひたまふ『誰が我の衣
に觸りしぞ』三一弟子たち言ふ『群衆の押迫るを見て、誰が我に觸
りしぞと言ひ給ふか』三二イエスこの事を爲しし者を見んとて見回し

給ふ。三三女おそれ戰き、己が身になりし事を知り、來りて御前に
平伏し、ありしままを告ぐ。三四イエス言ひ給ふ『娘よ、なんぢの
信仰なんぢを救へり、安らかに往け、病いえて健かになれ』三五か
く語り給ふほどに、會堂司の家より人々きたりて言ふ『なんぢの
娘は早や死にたり、爭でなほ師を煩はすべき』三六イエス其の告ぐ
る言を傍より聞きて、會堂司に言ひたまふ『懼るな、ただ信ぜ
よ』三七かくてペテロ、ヤコブその兄弟ヨハネの他は、ともに往く
事を誰にも許し給はず。三八彼ら會堂司の家に來る。イエス多くの
人の、甚く泣きつ叫びつする騷を見、三九入りて言ひ給ふ『なんぞ
騷ぎかつ泣くか、幼兒は死にたるにあらず、寐ねたるなり』四〇人々
イエスを嘲笑ふ。イエス彼等をみな外に出し、幼兒の父と母と己に
伴へる者とを率きつれて、幼兒のをる處に入り、四一幼兒の手を執
りて『タリタ、クミ』と言ひたまふ。少女よ、我なんぢに言ふ、起き
よ、との意なり。四二直ちに少女たちて歩む、その歳十二なりけれ
ばなり。彼ら直ちに甚く驚きおどろけり。四三イエス此の事を誰に

も知れぬやうにせよと、堅く彼らを戒め、また食物を娘に與ふる
ことを命じ給ふ。

第六章 一かくて其處をいで、己が郷に到り給ひしに、弟子たちも從
へり。二安息日になりて、會堂にて教へ始め給ひしに、聞きたる多
くのもの驚きて言ふ『この人は此等のことを何處より得しぞ、此の
人の授けられたる智慧は何ぞ、その手にて爲すかくのごとき能力あ
るわざは何ぞ。三此の人は木匠にして、マリヤの子、またヤコブ、ヨ
セ、ユダ、シモンの兄弟ならずや、其の姉妹も此處に我らと共にを
るに非ずや』遂に彼に躓けり。四イエス彼らに言ひたまふ『預言者
は、おのが郷、おのが親族、おのが家の外にて尊ばれざる事なし』
五彼處にては、何の能力ある業をも行ひ給ふこと能はず、ただ少數
の病める者に、手をおきて醫し給ひしのみ。六彼らの信仰なきを怪し
み給へり。かくて村々を歴巡りて教へ給ふ。七また十二弟子を召し、
二人づつ遣しはじめ、穢れし靈を制する權威を與へ、八かつ旅のた
めに、杖一つの他は、何をも持たず、糧も嚢も帶の中に錢をも持た

ず、九ただ草鞋ばかりをはきて、二つの下衣をも著ざることを命じ給
へり。一〇かくて言ひたまふ『何處にても人の家に入らば、その地を
去るまで其處に留れ。一一何地にても汝らを受けず、汝らに聽か
ずば、其處を出づるとき、證のために足の裏の塵を拂へ』一二ここに
弟子たち出で往きて、悔改むべきことを宣傳へ、一三多くの惡鬼を
逐ひいだし、多くの病める者に油をぬりて醫せり。一四かくてイエ
スの名顯れたれば、ヘロデ王ききて言ふ『バプテスマのヨハネ死人
の中より甦へりたり。この故に此等の能力その中に働くなり』一五
或人は『エリヤなり』といひ、或人は『預言者、いにしへの預言者
のごとき者なり』といふ。一六ヘロデ聞きて言ふ『わが首斬りしヨハ
ネ、かれ甦へりたるなり』一七ヘロデ先にその娶りたる己が兄弟ピ
リポの妻ヘロデヤの爲に、みづから人を遣し、ヨハネを捕へて獄
に繋げり。一八ヨハネ、ヘロデに『その兄弟の妻を納るるは宜しか
らず』と言へるに因る。一九ヘロデヤ、ヨハネを怨みて殺さんと思へ
ど能はず。二〇それはヘロデ、ヨハネの義にして聖なる人たるを知り

て、之を畏れ、之を護り、且つその教をききて、大に惱みつつも、
なほ喜びて聽きたる故なり。二一然るに機よき日來れり。ヘロデ己
が誕生日に、大臣・將校・ガリラヤの貴人たちを招きて饗宴せしに、
二二かのヘロデヤの娘いり來りて、舞をまひ、ヘロデと其の席に列
れる者とを喜ばしむ。王、少女に言ふ『何にても欲しく思ふものを
求めよ、我あたへん』二三また誓ひて言ふ『なんぢ求めば、我が國の
半までも與へん』二四娘いでて母にいふ『何を求むべきか』母いふ
『バプテスマのヨハネの首を』二五娘ただちに急ぎて王の許に入りき
たり、求めて言ふ『ねがはくは、バプテスマのヨハネの首を盆に載せ
て速かに賜はれ』二六王いたく憂ひたれど、その誓と席に在る者と
に對して拒むことを好まず、二七直ちに衛兵を遣し、之にヨハネの
首を持ち來ることを命ず、衛兵ゆきて、獄にてヨハネを首斬り、二
八その首を盆にのせ、持ち來りて少女に與ふ、少女これを母に與ふ。
二九ヨハネの弟子たち聞きて來り、その屍體を取りて墓に納めたり。
三〇使徒たちイエスの許に集りて、その爲ししこと、教へし事をこ

とごとく告ぐ。三一イエス言ひ給ふ『なんぢら人を避け、寂しき處
に、いざ來りて暫し息へ』これは往來の人おほくして、食する暇だに
なかりし故なり。三二かくて人を避け、舟にて寂しき處にゆく。三三
其の往くを見て、多くの人それと知り、その處を指して、町々より
徒歩にてともに走り、彼等よりも先に往けり。三四イエス出でて大
なる群衆を見、その牧ふ者なき羊の如くなるを甚く憫みて、多く
の事を教へはじめ給ふ。三五時すでに晩くなりたれば、弟子たち御許
に來りていふ『ここは寂しき處、はや時も晩し。三六人々を去らし
め、周圍の里また村に往きて、己がために食物を買はせ給へ』三七答
へて言ひ給ふ『なんぢら食物を與へよ』弟子たち言ふ『われら往き
て二百デナリのパンを買ひ、これに與へて食はすべきか』三八イエス
言ひ給ふ『パン幾つあるか、往きて見よ』彼ら見ていふ『五つ、また
魚二つあり』三九イエス凡ての人の組々となりて、青草の上に坐する
ことを命じ給へば、四〇或は百人、あるひは五十人、畝のごとく列
びて坐す。四一かくてイエス五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰

ぎて祝し、パンをさき、弟子たちに付して人々の前に置かしめ、二つ
の魚をも人毎に分け給ふ。四二凡ての人食ひて飽きたれば、四三パン
の餘、魚の殘を集めしに、十二の筐に滿ちたり。四四パンを食ひた
る男は五千人なりき。四五イエス直ちに、弟子たちを強ひて舟に乘
らせ、自ら群衆を返す間に、彼方なるベツサイダに先に往かしむ。
四六群衆に別れてのち、祈らんとて山にゆき給ふ。四七夕になりて、
舟は海の眞中にあり、イエスはひとり陸に在す。四八風逆ふに因り
て、弟子たちの漕ぎ煩ふを見て、夜明の四時ごろ、海の上を歩み、
その許に到りて、往き過ぎんとし給ふ。四九弟子たち其の海の上を歩
み給ふを見、變化の者ならんと思ひて叫ぶ。五〇皆これを見て心騒
ぎたるに因る。イエス直ちに彼らに語りて言ひ給ふ『心安かれ、我
なり、懼るな』五一かくて弟子たちの許にゆき、舟に登り給へば、風
やみたり。弟子たち心の中にて甚く驚く、五二彼らは先のパンの事
をさとらず、反つて其の心鈍くなりしなり。五三遂に渡りてゲネサ
レの地に著き、舟より上りしに、五四人々ただちにイエ

スを認めて、五五　くあたりを馳せまはり、その在すと聞く處々
に、患ふ者を床のままつれ來る。五六その到りたまふ處には、村に
ても、町にても、里にても、病める者を市場におきて、御衣の總にだ
に觸らしめ給はんことを願ふ。觸りし者は、みな醫されたり。
第七章一パリサイ人と或學者らと、エルサレムより來りてイエスの
許に集る。二而して、その弟子たちの中に、潔からぬ手、即ち洗は
ぬ手にて食事する者のあるを見たり。三パリサイ人および凡てのユダ
ヤ人は、古への人の言傳を固く執りて、懇ろに手を洗はねば食は
ず。四また市場より歸りては、まず禊がざれば食はず。このほか酒杯
・鉢・銅の器を濯ぐなど、多くの傳を承けて固く執りたり。五パ
リサイ人および學者らイエスに問ふ『なにゆゑ汝の弟子たちは、古
への人の言傳に遵ひて歩まず、潔からぬ手にて食事するか』六イエ
ス言ひ給ふ『イザヤは汝ら僞善者につきて能く預言せり。
　「この民は口唇にて我を敬ふ、
　されどその心は我に遠ざかる。

七ただ徒らに我を拜む、
人の訓誡を教とし教へて」
と録したり。八なんぢらは神の誡命を離れて、人の言傳を固く執る』
九また言ひたまふ『汝等はおのれの言傳を守らんとて、能くも神の
誡命を棄つ。一〇即ちモーセは「なんぢの父、なんぢの母を敬へ」
といひ「父また母を詈る者は、必ず殺さるべし」といへり。一一然
るに汝らは「人もし父また母にむかひ、我が汝に對して負ふ所の
ものは、コルバン即ち供物なりと言はば可し」と言ひて、一二その
のち人をして、父また母に事ふること無からしむ。一三かく汝らの
傳へたる言傳によりて、神の言を空しうし、又おほく此の類の事
をなしをるなり』一四更に群衆を呼び寄せて言ひ給ふ『なんぢら皆
われに聽きて悟れ。一五外より人に入りて、人を汚し得るものなし、
されど人より出づるものは、これ人を汚すなり』一六［なし］一七イエ
ス群衆を離れて家に入り給ひしに、弟子たち其の譬を問ふ。一八彼
らに言ひ給ふ『なんぢらも然か悟なきか、外より人に入る物の、人

を汚しえぬを悟らぬか、一九これ心には入らず、腹に入りて厠にお
つるなり』かく凡ての食物を潔しとし給へり。二〇また言ひたまふ
『人より出づるものは、これ人を汚すなり。二一それ内より、人の心
より、惡しき念いづ、即ち淫行・竊盜・殺人、二二姦淫・慳貪・邪曲
・詭計・好色・嫉妬・誹謗・傲慢・愚痴。二三すべて此等の惡しき
事は、内より出でて人を汚すなり』二四イエス起ちて此處を去り、ツ
ロの地方に往き、家に入りて人に知られじとし給ひたれど、隱るるこ
と能はざりき。二五ここに穢れし靈に憑かれたる稚なき娘をもてる
女、ただちにイエスの事をきき、來りて御足の許に平伏す。二六こ
の女はギリシヤ人にて、スロ・フェニキヤの生なり。その娘より
惡鬼を逐ひ出し給はんことを請ふ。二七イエス言ひ給ふ『まづ子供に
飽かしむべし、子供のパンをとりて小狗に投げ與ふるは善からず』二
八女こたへて言ふ『然り、主よ、食卓の下の小狗も子供の食屑を食
ふなり』二九イエス言ひ給ふ『なんぢ此の言によりて⊠安んじ⊠往
け、惡鬼は既に娘より出でたり』三〇をんな家に歸りて見るに、子

は寢臺の上に臥し、惡鬼は既に出でたり。三一イエスまたツロの地方
を去りて、シドンを過ぎ、デカポリスの地方を經て、ガリラヤの海に
來り給ふ。三二人々、耳聾にして物言ふこと難き者を連れ來りて、之
に手をおき給はんことを願ふ。三三イエス群衆の中より、彼をひと
り連れ出し、その兩耳に指をさし入れ、また唾して其の舌に觸り、
三四天を仰ぎて嘆じ、その人に對ひて『エパタ』と言ひ給ふ、ひらけ
よとの意なり。三五かくてその耳ひらけ、舌の縺ただちに解け、正
しく物いへり。三六イエス誰にも告ぐなと人々を戒めたまふ。され
ど戒むるほど反って愈々言ひ弘めたり。三七また甚だしく打驚き
て言ふ『かれの爲しし事は皆よし、聾者をも聞えしめ、唖者をも物い
はしむ』

第八章 一その頃また大なる群衆にて食ふべき物なかりしかば、イ
エス弟子たちを召して言ひ給ふ、二『われ此の群衆を憫む、既に三日
われと偕にをりて、食ふべき物なし。三飢ゑしままにて其の家に歸ら
しめば、途にて疲れ果てん。其の中には遠くより來れる者あり』四

弟子たち答へて言ふ『この寂しき地にては、何處よりパンを得て、こ
の人々を飽かしむべき』五イエス問ひ給ふ『パン幾つあるか』答へて
『七つ』といふ。六イエス群衆に命じて地に坐せしめ、七つのパンを
取り、謝して之を裂き、弟子たちに與へて群衆の前におかしむ。弟子
たち乃ちその前におく。七また小き魚すこしばかりあり、祝して、
之をもその前におけと言ひ給ふ。八人々食ひて飽き、裂きたる餘を
拾ひしに、七つの籃に滿ちたり。九その人おほよそ四千人なりき。イ
エス彼らを歸し、一〇直ちに弟子たちと共に舟に乘りて、ダルマヌタ
の地方に往き給へり。一一パリサイ人いで來りて、イエスと論じはじ
め、之を試みて天よりの徵をもとむ。一二イエス心に深く歎じて
言ひ給ふ『なにゆゑ今の代は徵を求むるか、まことに汝らに告ぐ、
徵は今の代に斷えて與へられじ』一三かくて彼らを離れ、また舟に
乘りて彼方に往き給ふ。一四弟子たちパンを携ふることを忘れ、舟
には唯一つの他パンなかりき。一五イエス彼らを戒めて言ひたまふ
『愼みて、パリサイ人のパンだねと、ヘロデのパンだねとに心せよ』

一六弟子たち互に、これはパン無き故ならんと語り合ふ。一七イエス
知りて言ひたまふ『何ぞパン無き故ならんと語り合ふか、未だ知らぬ
か、悟らぬか、汝らの心なほ鈍きか。一八目ありて見ぬか、耳あり
て聽かぬか。又なんぢら思ひ出でぬか、一九五つのパンを裂きて、五
千人に與へし時、その餘を幾筐ひろひしか』弟子たち言ふ『十二』二
〇『七つのパンを裂きて四千人に與へし時、その餘を幾籃ひろひし
か』弟子たち言ふ『七つ』二一イエス言ひたまふ『未だ悟らぬか』二
二彼ら遂にベツサイダに到る。人々、盲人をイエスに連れ來りて、觸
り給はんことを願ふ。二三イエス盲人の手をとりて、村の外に連れ往
き、その目に唾し、御手をあてて『なにか見ゆるか』と問ひ給へば、
二四見上げて言ふ『人を見る、それは樹の如き物の歩くが見ゆ』二五ま
た御手をその目にあて給へば、視凝めたるに、癒えて凡てのもの明
かに見えたり。二六かくて『村にも入るな』と言ひて、その家に歸し
給へり。二七イエス其の弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々に出で
ゆき、途にて弟子たちに問ひて言ひたまふ『人々は我を誰と言ふか』

二八答へて言ふ『バプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人は預言者
の一人』二九また問ひ給ふ『なんぢらは我を誰と言ふか』ペテロ答へ
て言ふ『なんぢはキリストなり』三〇イエス己がことを誰にも告ぐな
と、彼らを戒め給ふ。三一かくて人の子の必ず多くの苦難をうけ、
長老・祭司長・學者らに棄てられ、かつ殺され、三日の後に甦へ
るべき事を教へはじめ、三二此の事をあらはに語り給ふ。ここにペテ
ロ、イエスを傍にひきて戒め出でたれば、三三イエス振反りて弟子
たちを見、ペテロを戒めて言ひ給ふ『サタンよ、わが後に退け、
汝は神のことを思はず、反って人のことを思ふ』三四かくて群衆を
弟子たちと共に呼び寄せて言ひたまふ『人もし我に從ひ來らんと思
はば、己をすて、己が十字架を負ひて我に從へ。三五己が生命を救
はんと思ふ者は、これを失ひ、我が爲また福音の爲に己が生命をう
しなふ者は、之を救はん。三六人、全世界を贏くとも、己が生命を損
せば、何の益あらん、三七人その生命の代に何を與へんや。三八不義
なる罪深き今の代にて、我または我が言を恥づる者をば、人の子も

また、父の榮光をもて、聖なる御使たちと共に來らん時に恥づべし』
第九章 一また言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、此處に立つ者のう
ちに、神の國の、權能をもて來るを見るまでは、死を味はぬ者どもあ
り』二六日の後、イエスただペテロ、ヤコブ、ヨハネのみを率きつれ、
人を避けて高き山に登りたまふ。かくて彼らの前にて其の状かはり、
三其の衣かがやきて甚だ白くなりぬ、世の晒布者を爲し得ぬほど白
し。四エリヤ、モーセともに彼らに現れて、イエスと語りゐたり。五
ペテロ差出でてイエスに言ふ『ラビ、我らの此處に居るは善し。われ
ら三つの廬を造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つを
エリヤのためにせん』六彼等いたく懼れたれば、ペテロ何と言ふべき
かを知らざりしなり。七かくて雲おこり、彼らを覆ふ。雲より聲出づ
『これは我が愛しむ子なり、汝ら之に聽け』八弟子たち急ぎ見回す
に、イエスと己らとの他には、はや誰も見えざりき。九山をくだる
時、イエス彼らに、人の子の、死人の中より甦へるまでは、見しこ
とを誰にも語るなと戒め給ふ。一〇彼ら此の言を心にとめ『死人

の中より甦へる』とは、如何なる事ぞと互に論じ合ふ。一一かくて
イエスに問ひて言ふ『學者たちは、何故エリヤまづ來るべしと言ふ
か』一二イエス言ひ給ふ『實にエリヤ先づ來りて、萬の事をあらた
む。さらば人の子につき、多くの苦難を受け、かつ蔑せらるる事の
録されたるは何ぞや。一三されど我なんぢらに告ぐ、エリヤは既に來
れり。然るに彼に就きて録されたる如く、人々心のままに之を待
へり』一四相共に弟子たちの許に來りて、大なる群衆の之を環り、
學者たちの之と論じゐたるを見給ふ。一五群衆みなイエスを見るや
否や、いたく驚き、御許に走り往きて禮をなせり。一六イエス問ひ
給ふ『なんぢら何を彼らと論ずるか』一七群衆のうちの一人こたふ
『師よ、唖の靈に憑かれたる我が子を御許に連れ來れり。一八靈いづ
こにても彼に憑けば、痙攣け泡をふき、齒をくひしばり、而して痩せ
衰ふ。御弟子たちに之を逐ひ出すことを請ひたれど能はざりき』一
九ここに彼らに言ひ給ふ『ああ信なき代なるかな、我いつまで汝ら
と偕にをらん、何時まで汝らを忍ばん。その子を我が許に連れきた

れ』二〇乃ち連れきたる。彼イエスを見しとき、靈ただちに之を痙攣
けたれば、地に倒れ、泡をふきて轉び廻る。二一イエスその父に問ひ
給ふ『いつの頃より斯くなりしか』父いふ『をさなき時よりなり。二
二靈しばしば彼を火のなか水の中に投げ入れて亡さんとせり。され
ど汝なにか爲し得ば、我らを憫みて助け給へ』二三イエス言ひたま
ふ『爲し得ばと言ふか、信ずる者には、凡ての事なし得らるるなり』
二四その子の父ただちに叫びて言ふ『われ信ず、信仰なき我を助け給
へ』二五イエス群衆の走り集るを見て、穢れし靈を禁めて言ひたま
ふ『唖にて耳聾なる靈よ、我なんぢに命ず、この子より出でよ、重ね
て入るな』二六靈さけびて甚だしく痙攣けさせて出でしに、その子、
死人の如くなりたれば、多くの者これを死にたりと言ふ。二七イエス
その手を執りて起し給へば立てり。二八イエス家に入り給ひしとき、
弟子たち竊に問ふ『我等いかなれば逐ひ出し得ざりしか』二九答へ
給ふ『この類は祈に由らざれば、如何にすとも出でざるなり』三〇
此處を去りてガリラヤを過ぐ。イエス人の此の事を知るを欲し給は

ず。三一これは弟子たちに教をなし、かつ『人の子は人々の手にわ
たされ、人々これを殺し、殺されて三日ののち甦へるべし』と言ひ
給ふが故なり。三二弟子たちはその言を悟らず、また問ふ事を恐れ
たり。三三かくてカペナウムに到る。イエス家に入りて弟子たちに問
ひ給ふ『なんぢら途すがら何を論ぜしか』三四弟子たち默然たり、こ
れは途すがら、誰か大ならんと、互に爭ひたるに因る。三五イエス
坐して十二弟子を呼び、之に言ひたまふ『人もし頭たらんと思はば、
凡ての人の後となり、凡ての人の役者となるべし』三六かくてイエ
ス幼兒をとりて彼らの中におき、之を抱きて言ひ給ふ、三七『おほよ
そ我が名のために斯かる幼兒の一人を受くる者は、我を受くるなり。
我を受くる者は、我を受くるにあらず、我を遣しし者を受くるなり』
三八ヨハネ言ふ『師よ、我らに從はぬ者の、御名によりて惡鬼を逐ひ
出すを見しが、我らに從はぬ故に、之を止めたり』三九イエス言ひた
まふ『止むな、我が名のために能力ある業をおこなひ、俄に我を譏
り得る者なし。四〇我らに逆はぬ者は、我らに附く者なり。四一キリ

ストの者たるによりて、汝らに一杯の水を飲まする者は、我まこと
に汝らに告ぐ、必ずその報を失はざるべし。四二また我を信ずる
此の小き者の一人を躓かする者は、寧ろ大なる碾臼を頸に懸けら
れて、海に投げ入れられんかた勝れり。四三もし汝の手なんぢを躓
かせば、之を切り去れ、不具にて生命に入るは、兩手ありてゲヘナの
消えぬ火に往くよりも勝るなり。四四［なし］四五もし汝の足なんぢを
躓かせば、之を切り去れ、蹇跛にて生命に入るは、兩足ありてゲヘ
ナに投げ入れらるるよりも勝るなり。四六［なし］四七もし汝の眼なん
ぢを躓かせば、之を拔き出せ、片眼にて神の國に入るは、兩眼あり
てゲヘナに投げ入れらるるよりも勝るなり。四八「彼處にては、その
蛆つきず、火も消えぬなり」四九それ人はみな火をもて鹽つけらるべ
し。五〇鹽は善きものなり、されど鹽もし其の鹽氣を失はば、何を
もて之に味つけん。汝ら心の中に鹽を保ち、かつ互に和ぐべし』

第一〇章
一 イエス此處をたちて、ユダヤの地方およびヨルダンの

彼方に來り給ひしに、群衆またも御許に集ひたれば、常のごとく教
へ給ふ。二時にパリサイ人ら來り試みて問ふ『人その妻を出すはよ
きか』三答へて言ひ給ふ『モーセは汝らに何と命ぜしか』四彼ら言ふ
『モーセは離縁状を書きて出すことを許せり』五イエス言ひ給ふ『汝
らの心つれなきによりて、此の誡命を録ししなり。六されど開闢の
初より「人を男と女とに造り給へり」七「かかる故に人はその父
母を離れて、八二人のもの一體となるべし」さればはや二人にはあら
ず、一體なり。九この故に神の合せ給ふものは、人これを離すべから
ず』一〇家に入りて弟子たち復この事を問ふ。一一イエス言ひ給ふ『お
ほよそ其の妻を出して他に娶る者は、その妻に對して姦淫を行ふな
り。一二また妻もし其の夫を棄てて他に嫁がば、姦淫を行ふなり』
一三イエスの觸り給はんことを望みて、人々幼兒らを連れ來りしに、
弟子たち禁めたれば、一四イエス之を見、いきどほりて言ひたまふ
『幼兒らの我に來るを許せ、止むな、神の國は斯くのごとき者の國な
り。一五まことに汝らに告ぐ、凡そ幼兒の如くに神の國をうくる者

ならずば、之に入ること能はず』一六かくて幼兒を抱き、手をその上に
おきて祝し給へり。一七イエス途に出で給ひしに、一人はしり來り、
跪づきて問ふ『善き師よ、永遠の生命を嗣ぐためには、我なにを爲
すべきか』一八イエス言ひ給ふ『なにゆゑ我を善しと言ふか、神ひと
りの他に善き者なし。一九誡命は汝が知るところなり「殺すなかれ」
「姦淫するなかれ」「盜むなかれ」「僞證を立つるなかれ」「欺き取る
なかれ」「汝の父と母とを敬へ」』二〇彼いふ『師よ、われ幼き時よ
り皆これを守れり』二一イエス彼に目をとめ、愛しみて言ひ給ふ『な
んぢ尚ほ一つを缺く、往きて汝の有てる物をことごとく賣りて、貧
しき者に施せ、さらば財寶を天に得ん。且きたりて我に從へ』二二
この言によりて、彼は憂を催し、悲しみつつ去りぬ、大なる資産
をもてる故なり。二三イエス見回して弟子たちに言ひたまふ『富ある
者の神の國に入るは如何に難いかな』二四弟子たち此の御言に驚く。
イエスまた答へて言ひ給ふ『子たちよ、神の國に入るは如何に難いか
な、二五富める者の神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた反

つて易し』二六弟子たち甚く驚きて互に言ふ『さらば誰か救はるる
事を得ん』二七イエス彼らに目を注めて言ひたまふ『人には能はねど、
神には然らず、夫れ神は凡ての事をなし得るなり』二八ペテロ、イエ
スに對ひて『我らは一切をすてて汝に從ひたり』と言ひ出でたれ
ば、二九イエス言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、我がため、福音のた
めに、或は兄弟、あるひは姉妹、或は父、或は母、或は子、或
は田畑をすつる者は、三〇誰にても今、今の時に百倍を受けぬはな
し。即ち家・兄弟・姉妹・母・子・田畑を迫害と共に受け、また後
の世にては、永遠の生命を受けぬはなし。三一されど多くの先なる者
は後に、後なる者は先になるべし』三二エルサレムに上る途にて、イ
エス先だち往き給ひしかば、弟子たち驚き、隨ひ往く者ども懼れた
り。イエス再び十二弟子を近づけて、己が身に起らんとする事ども
を語り出で給ふ三三『視よ、我らエルサレムに上る。人の子は祭司長
・學者らに付されん。彼ら死に定めて、異邦人に付さん。三四異邦人
は嘲弄し、唾し、鞭うち、遂に殺さん、かくて彼は三日の後に甦

へるべし』三五ここにゼベダイの子ヤコブ、ヨハネ御許に來りて言ふ
『師よ、願はくは我らが何にても求むる所を爲したまへ』三六イエス
言ひ給ふ『わが汝らに何を爲さんことを望むか』三七彼ら言ふ『な
んぢの榮光の中にて、一人をその右に、一人をその左に坐せしめ給
へ』三八イエス言ひ給ふ『なんぢらは求むる所を知らず、汝等わが
飮む酒杯を飮み、我が受くるバプテスマを受け得るか』三九彼等いふ
『得るなり』イエス言ひ給ふ『なんぢら我が飮む酒杯を飮み、また我
が受くるバプテスマを受くべし。四〇されど我が右左に坐すること
は、我の與ふべきものならず、ただ備へられたる人こそ與へらるるな
れ』四一十人の弟子これを聞き、ヤコブとヨハネとの事により憤ほ
り出でたれば、四二イエス彼らを呼びて言ひたまふ『異邦人の君と認
めらるる者の、その民を宰どり、大なる者の、民の上に權を執るこ
とは、汝らの知る所なり。四三されど汝らの中にては然らず、反
つて大ならんと思ふ者は、汝らの役者となり、四四頭たらんと思
ふ者は、凡ての者の僕となるべし。四五人の子の來れるも、事へら

るる爲にあらず、反つて事ふることをなし、又おほくの人の贖償とし
て己が生命を與へん爲なり』四六かくて彼らエリコに到る。イエスそ
の弟子たち及び大なる群衆と共に、エリコを出でたまふ時、テマイ
の子バルテマイといふ盲目の乞食、路の傍に坐しをりしが、四七ナ
ザレのイエスなりと聞き、叫び出して言ふ『ダビデの子イエスよ、我
を憫みたまへ』四八多くの人かれを禁めて默さしめんとしたれど、
ますます叫びて『ダビデの子よ、我を憫みたまへ』と言ふ。四九イ
エス立ち止りて『かれを呼べ』と言ひ給へば、人々盲人を呼びて言
ふ『心安かれ、起て、なんぢを呼びたまふ』五〇盲人うはぎを脱ぎ
捨て、躍り上りて、イエスの許に來りしに、五一イエス答へて言ひ給
ふ『わが汝に何を爲さんことを望むか』盲人いふ『わが師よ、見え
んことなり』五二イエス彼に『ゆけ、汝の信仰なんぢを救へり』と
言ひ給へば、直ちに見ることを得、イエスに從ひて途を往けり。

第一一章 一彼らエルサレムに近づき、オリブ山の麓なるベテパゲ
及びベタニヤに到りし時、イエス二人の弟子を遣さんとして言ひ給

ふ、二『むかひの村にゆけ、其處に入らば、やがて人の未だ乘りたる
ことなき驢馬の子の繫ぎあるを見ん、それを解きて牽き來れ。三誰か
もし汝らに「なにゆゑ然するか」と言はば「主の用なり、彼ただちに
返さん」といへ』四弟子たち往きて、門の外の路に驢馬の子の繫ぎあ
るを見て解きたれば、五其處に立つ人々のうちの或者『なんぢら驢馬
の子を解きて何とするか』と言ふ。六弟子たちイエスの告げ給ひし如
く言ひしに、彼ら許せり。七かくて弟子たち驢馬の子をイエスの許に
牽ききたり、己が衣をその上に置きたれば、イエス之に乘り給ふ。
八多くの人は己が衣を、或人は野より伐り取りたる樹の枝を途に敷
く。九かつ前に往き後に從ふ者ども呼はりて言ふ『「ホサナ、讃むべ
きかな、主の御名によりて來る者」一〇讃むべきかな、今し來る我ら
の父ダビデの國。「いと高き處にてホサナ」』一一遂にエルサレムに
到りて宮に入り、凡ての物を見回し、時はや暮に及びたれば、十二
弟子と共にベタニヤに出で往きたまふ。一二あくる日かれらベタニヤ
より出で來りし時、イエス飢ゑ給ふ。一三遙に葉ある無花果の樹を

見て、果をや得んと其のもとに到り給ひしに、葉のほかに何をも見出
し給はず、是は無花果の時ならぬに因る。一四イエスその樹に對ひて
言ひたまふ『今より後いつまでも、人なんぢの果を食はざれ』弟子
たち之を聞けり。一五彼らエルサレムに到る。イエス宮に入り、その
内にて賣買する者どもを逐ひ出し、兩替する者の臺、鴿を賣るもの
の腰掛を倒し、一六また器物を持ちて宮の内を過ぐることを免し給は
ず。一七かつ教へて言ひ給ふ『「わが家は、もろもろの國人の祈の家
と稱へらるべし」と録されたるにあらずや、然るに汝らは之を「強盜
の巣」となせり』一八祭司長・學者ら之を聞き、如何にしてかイエス
を亡さんと謀る、それは群衆みな其の教に驚きたれば、彼を懼れ
しなり。一九夕になる毎に、イエス弟子たちと共に都を出でゆき給
ふ。二〇彼ら朝早く路をすぎしに、無花果の樹の根より枯れたるを見
る。二一ペテロ思ひ出してイエスに言ふ『ラビ、見給へ、詛ひ給ひ
し無花果の樹は枯れたり』二二イエス答へて言ひ給ふ『神を信ぜよ。
二三まことに汝らに告ぐ、人もし此の山に「移りて海に入れ」と言

ふとも、其の言ふところ必ず成るべしと信じて、心に疑はずば、
その如く成るべし。二四この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願ふ事は、
すでに得たりと信ぜよ、さらば得べし。二五また立ちて祈るとき、人
を怨む事あらば免せ、これは天に在す汝らの父の、汝らの過失を免
し給はん爲なり』二六［なし］二七かれら又エルサレムに到る。イエス
宮の内を歩み給ふとき、祭司長・學者・長老たち御許に來りて、二
八『何の權威をもて此等の事をなすか、誰が此等の事を爲すべき權威
を授けしか』と言ふ。二九イエス言ひ給ふ『われ一言なんぢらに問は
ん、答へよ、さらば我も何の權威をもて、此等の事を爲すかを告げ
ん。三〇ヨハネのバプテスマは、天よりか、人よりか、我に答へよ』
三一彼ら互に論じて言ふ『もし天よりと言はば「何故かれを信ぜざ
りし」と言はん。三二されど人よりと言はんか……』彼ら群衆を恐
れたり、人みなヨハネを實に預言者と認めたればなり。三三遂にイエ
スに答へて『知らず』と言ふ。イエス言ひ給ふ『われも何の權威をも
て此等の事を爲すか、汝らに告げじ』

第一二章一イエス譬をもて彼らに語り出で給ふ『ある人、葡萄園
を造り、籬を環らし、酒槽の穴を掘り、櫓をたて、農夫どもに貸し
て、遠く旅立せり。二時いたりて農夫より葡萄園の所得を受取らんと
て、僕をその許に遣ししに、三彼ら之を執へて打ちたたき、空手に
て歸らしめたり。四又ほかの僕を遣ししに、その首に傷つけ、か
つ辱しめたり。五また他の者を遣ししに、之を殺したり。又ほかの
多くの僕をも、或は打ち或は殺したり。六なほ一人あり、即ち其
の愛しむ子なり「わが子は敬ふならん」と言ひて、最後に之を遣
ししに、七かの農夫ども互に言ふ「これは世嗣なり、いざ之を殺さ
ん、さらばその嗣業は、我らのものとなるべし」八乃ち執へて之を
殺し、葡萄園の外に投げ棄てたり。九さらば葡萄園の主、なにを爲さ
んか、來りて農夫どもを亡し、葡萄園を他の者どもに與ふべし。
一〇汝ら聖書に
「造家者らの棄てたる石は、
これぞ隅の首石となれる。

一一これ主によりて成れるにて、
我らの目には奇しきなり」
とある句をすら讀まぬか』一二ここに彼等イエスを執へんと思ひた
れど、群衆を恐れたり、この譬の己らを指して言ひ給へるを悟り
しに因る。遂にイエスを離れて去り往けり。一三かくて彼らイエスの
言尾をとらへて陷入れん爲に、パリサイ人とヘロデ黨との中より、
數人を御許に遣す。一四その者ども來りて言ふ『師よ、我らは知る、
汝は眞にして、誰をも憚りたまふ事なし、人の外貌を見ず、眞を
もて神の道を教へ給へばなり。我ら貢をカイザルに納むるは、宜き
か、惡しきか、納めんか、納めざらんか』一五イエス其の詐僞なるを
知りて『なんぞ我を試むるか、デナリを持ち來りて我に見せよ』と
言ひ給へば、一六彼ら持ち來る。イエス言ひ給ふ『これは誰の像、た
れの號なるか』『カイザルのなり』と答ふ。一七イエス言ひ給ふ『カ
イザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ』彼らイエスに就きて
甚だ怪しめり。一八また復活なしと云ふサドカイ人ら、イエスに來

り問ひて言ふ一九『師よ、モーセは、人の兄弟もし子なく妻を遺し
て死なば、その兄弟かれの妻を娶りて、兄弟のため嗣子を擧ぐべし
と、我らに書き遺したり。二〇ここに七人の兄弟ありて、兄妻を娶
り、嗣子なくして死に、二一第二の者その女を娶り、また嗣子なくし
て死に、第三の者もまた然なし、二二七人とも嗣子なくして死に、終
には其の女も死にたり。二三復活のとき彼らみな甦へらんに、こ
の女は誰の妻たるべきか、七人これを妻としたればなり』二四イエ
ス言ひ給ふ『なんぢらの誤れるは、聖書をも神の能力をも知らぬ故
ならずや。二五人、死人の中より甦へる時は、娶らず、嫁がず、天に
在る御使たちの如くなるなり。二六死にたる者の甦へる事に就きて
は、モーセの書の中なる柴の條に、神モーセに「われはアブラハム
の神、イサクの神、ヤコブの神なり」と告げ給ひし事あるを、未だ讀
まぬか。二七神は死にたる者の神にあらず、生ける者の神なり。なん
ぢら大に誤れり』二八學者の一人、かれらの論じをるを聞き、イエ
スの善く答へ給へるを知り、進み出でて問ふ『すべての誡命のうち、

何か第一なる』二九イエス答へたまふ『第一は是なり「イスラエルよ
聽け、主なる我らの神は唯一の主なり。三〇なんぢ心を盡し、精神
を盡し、思を盡し、力を盡して、主なる汝の神を愛すべし」三一
第二は是なり「おのれの如く汝の隣を愛すべし」此の二つより大
なる誡命はなし』三二學者いふ『善きかな師よ「神は唯一にして他に
神なし」と言ひ給へるは眞なり。三三「こころを盡し、知慧を盡し、
力を盡して神を愛し、また己のごとく隣を愛する」は、もろもろ
の燔祭および犧牲に勝るなり』三四イエスその聰く答へしを見て言ひ
給ふ『なんぢ神の國に遠からず』此の後たれも敢へてイエスに問ふ
者なかりき。三五イエス宮にて教ふるとき、答へて言ひ給ふ『なにゆ
ゑ學者らはキリストをダビデの子と言ふか。三六ダビデ聖靈に感じて
自らいへり

「主わが主に言ひ給ふ、
我なんぢの敵を汝の足の下に置くまでは、
我が右に坐せよ」

と。三七ダビデ自ら彼を主と言ふ、されば爭でその子ならんや』大
なる群衆は喜びてイエスに聽きたり。三八イエスその教のうちに
言ひたまふ『學者らに心せよ、彼らは長き衣を著て歩むこと、市場
にての敬禮、三九會堂の上座、饗宴の上席を好み、四〇また寡婦ら
の家を呑み、外見をつくりて長き祈をなす。その受くる審判は更に
嚴しからん』四一イエス賽錢函に對ひて坐し、群衆の錢を賽錢函に投
げ入るるを見給ふ。富める多くの者は、多く投げ入れしが、四二一人
の貧しき寡婦きたりて、レプタ二つを投げ入れたり、即ち五厘ほど
なり。四三イエス弟子たちを呼び寄せて言ひ給ふ『まことに汝らに
告ぐ、この貧しき寡婦は、賽錢函に投げ入るる凡ての人よりも多く投
げ入れたり。四四凡ての者は、その豐なる内よりなげ入れ、この寡婦
は其の乏しき中より、凡ての所有、即ち己が生命の料をことごとく
投げ入れたればなり』

第一三章 一イエス宮を出で給ふとき、弟子の一人いふ『師よ、見給
へ、これらの石、これらの建造物、いかに盛ならずや』二イエス言ひ

給ふ『なんぢ此等の大なる建造物を見るか、一つの石も崩されずし
ては石の上に殘らじ』
三オリブ山にて宮の方に對ひて坐し給へるに、
ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ竊に問ふ
四『われらに告げ給へ、
これらの事は何時あるか、又すべて此等の事の成し遂げられんとす
る時は、如何なる兆あるか』
五イエス語り出で給ふ『なんぢら人に
惑されぬやうに心せよ。
六多くの者わが名を冒し來り「われは夫な
り」と言ひて多くの人を惑さん。
七戰爭と戰爭の噂とを聞くとき懼
るな、かかる事はあるべきなり、されど未だ終にはあらず。
八即ち
「民は民に、國は國に逆ひて起たん」また處々に地震あり、饑饉あ
らん、これらは産の苦難の始なり。
九汝等みづから心せよ、人々
なんぢらを衆議所に付さん。なんぢら會堂に曳かれて打たれ、且わ
が故によりて、司たち及び王たちの前に立てられん、これは證を
なさん爲なり。
一〇かくて福音は先づもろもろの國人に宣傳へらるべ
し。
一一人々なんぢらを曳きて付さんとき、何を言はんと預じめ思
ひ煩ふな、唯そのとき授けらるることを言へ、これ言ふ者は汝等に

あらず、聖靈なり。一二兄弟は兄弟を、父は子を死にわたし、子ら
は親たちに逆ひ立ちて死なしめん。一三又なんぢら我が名の故に凡
ての人に憎まれん、されど終まで耐へ忍ぶ者は救はるべし。一四「荒
す惡むべき者」の立つべからざる所に立つを見ば（讀むもの悟れ）
その時ユダヤにをる者どもは、山に遁れよ。一五屋の上にをる者は、
内に下るな。また家の物を取り出さんとて内に入るな。一六畑にをる
者は上衣を取らんとて歸るな。一七其の日には孕りたる女と、乳を
哺まする女とは禍害なるかな。一八この事の冬おこらぬやうに祈れ、
一九その日は患難の日なればなり。神の萬物を造り給ひし開闢より
今に至るまで、かかる患難はなく、また後にもなからん。二〇主その
日を少くし給はずば、救はるる者一人だになからん。されど其の選
び給ひし選民の爲に、その日を少くし給へり。二一其の時なんぢら
に「視よ、キリスト此處にあり」「視よ、彼處にあり」と言ふ者あり
とも信ずな。二二僞キリスト・僞預言者ら起りて、徵と不思議とを
行ひ、爲し得べくは、選民をも惑さんとするなり。二三汝らは心

せよ、あらかじめ之を皆なんぢらに告げおくなり。二四其の時、その
患難ののち、日は暗く、月は光を發たず。二五星は空より隕ち、天
にある萬象ふるひ動かん。二六其のとき人々、人の子の大なる能力
と榮光とをもて、雲に乘り來るを見ん。二七その時かれは使者たち
を遣して、地の極より天の極まで、四方より其の選民をあつめん。
二八無花果の樹よりの譬を學べ、その枝すでに柔かくなりて葉芽ぐ
めば、夏の近きを知る。二九かくの如く此等のことの起るを見ば、人
の子すでに近づきて門邊にいたるを知れ。三〇まことに汝らに告ぐ、
これらの事ことごとく成るまで、今の代は過ぎ逝くことなし。三一天
地は過ぎゆかん、されど我が言は過ぎ逝くことなし。三二その日そ
の時を知る者なし。天にある使者たちも知らず、子も知らず、ただ父
のみ知り給ふ。三三心して目を覺しをれ、汝等その時の何時なるか
を知らぬ故なり。三四例へば家を出づる時、その僕どもに權を委ね
て、各自の務を定め、更に門守に、目を覺しをれと命じ置きて、遠
く旅立したる人のごとし。三五この故に目を覺しをれ、家の主人の歸

るは、夕か、夜半か、鶏鳴くころか、夜明か、いづれの時なるか
を知らねばなり。三六恐らくは俄に歸りて、汝らの眠れるを見ん。
三七わが汝らに告ぐるは、凡ての人に告ぐるなり。目を覺しをれ』

第一四章一さて過越と除酵との祭の二日前となりぬ。祭司長・學者
ら詭計をもてイエスを捕へ、かつ殺さんと企てて言ふ二『祭の間
は爲すべからず、恐らくは民の亂あるべし』三イエス、ベタニヤに在
して、癩病人シモンの家にて食事の席につき居給ふとき、或女、價
高き混なきナルドの香油の入りたる石膏の壺を持ち來り、その壺
を毀ちてイエスの首に注ぎたり。四ある人々、憤ほりて互に言ふ
『なに故かく濫に油を費すか、五この油を三百デナリ餘に賣り
て、貧しき者に施すことを得たりしものを』而して甚く女を咎む。
六イエス言ひ給ふ『その爲すに任せよ、何ぞこの女を惱すか、我に
善き事をなせり。七貧しき者は常に汝らと偕にをれば、何時にても
心のままに助け得べし、されど我は常に汝らと偕にをらず。八此の
女は、なし得る限をなして、我が體に香油をそそぎ、あらかじ

め葬りの備をなせり。九まことに汝らに告ぐ、全世界いづこにて
も、福音の宣傳へらるる處には、この女の爲し事も記念として語
らるべし』一〇ここに十二弟子の一人なるイスカリオテのユダ、イエ
スを賣らんとて祭司長の許にゆく。一一彼等これを聞きて喜び、銀
を與へんと約したれば、ユダ如何にしてか機好くイエスを付さんと
謀る。一二除酵祭の初の日、即ち過越の羔羊を屠るべき日、弟子た
ちイエスに言ふ『過越の食をなし給ふために、我らが何處に往きて
備ふることを望み給ふか』一三イエス二人の弟子を遣さんとして言
ひたまふ『都に往け、然らば水をいれたる瓶を持つ人、なんぢらに
遇ふべし。之に從ひ往き、一四その入る所の家主に「師いふ、われ
弟子らと共に過越の食をなすべき座敷は何處なるか」と言へ。一五
さらば調へ備へたる大なる二階座敷を見すべし。其處に我らのた
めに備へよ』一六弟子たち出で往きて都に入り、イエスの言ひ給ひし
如くなるを見て、過越の設備をなせり。一七日暮れてイエス十二弟子
とともに往き、一八みな席に就きて食するとき言ひ給ふ『まことに

汝らに告ぐ、我と共に食する汝らの中の一人、われを賣らん』一九
弟子たち憂ひて一人一人『われなるか』と言ひ出でしに、二〇イエス
言ひたまふ『十二のうちの一人にて、我と共にパンを鉢に浸す者は夫
なり。二一實に人の子は己に就きて録されたる如く逝くなり。され
ど人の子を賣る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしも
のを』二二彼ら食しをる時、イエス、パンを取り、祝してさき、弟子
たちに與へて言ひたまふ『取れ、これは我が體なり』二三また酒杯
を取り、謝して彼らに與へ給へば、皆この酒杯より飲めり。二四また
言ひ給ふ『これは契約の我が血、おほくの人の爲に流す所のものな
り。二五まことに汝らに告ぐ、神の國にて新しきものを飲む日まで
は、われ葡萄の果より成るものを飲まじ』二六かれら讃美をうたひて
後、オリブ山に出でゆく。二七イエス弟子たちに言ひ給ふ『なんぢら
皆躓かん、それは「われ牧羊者を打たん、さらば羊散るべし」と録
されたるなり。二八されど我よみがへりて後、なんぢらに先だちてガ
リラヤに往かん』二九時にペテロ、イエスに言ふ『假令みな躓くとも、

我は然らじ』三〇イエス言ひ給ふ『まことに汝に告ぐ、今日この夜、
鶏ふたたび鳴く前に、なんぢ三たび我を否むべし』三一ペテロ力
をこめて言ふ『われ汝とともに死ぬべき事ありとも、汝を否まず』
弟子たち皆かく言へり。三二彼らゲツセマネと名づくる處に到りし
時、イエス弟子たちに言ひ給ふ『わが祈る間、ここに座せよ』三三か
くてペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴ひゆき、甚く驚き、かつ悲しみ出
でて言ひ給ふ三四『わが心いたく憂ひて死ぬばかりなり、汝ら此處
に留りて目を覺しをれ』三五少し進みゆきて、地に平伏し、若しも
得べくば此の時の己より過ぎ往かんことを祈りて言ひ給ふ三六『ア
バ父よ、父には能はぬ事なし、此の酒杯を我より取り去り給へ。され
ど我が意のままを成さんとにあらず、御意のままを成し給へ』三七
來りて、その眠れるを見、ペテロに言ひ給ふ『シモンよ、なんぢ眠る
か、一時も目を覺しをること能はぬか。三八なんぢら誘惑に陷らぬ
やう、目を覺しかつ祈れ。實に心は熱すれども肉體よわきなり』三
九再びゆき、同じ言にて祈り給ふ。四〇また來りて彼らの眠れるを

見たまふ、是その目いたく疲れたるなり、彼ら何と答ふべきかを知ら
ざりき。四一三度來りて言ひたまふ『今は眠りて休め、足れり、時き
たれり、視よ、人の子は罪人らの手に付さるるなり。四二起て、われ
らは往くべし。視よ、我を賣る者ちかづけり』四三なほ語り給ふほ
どに、十二弟子の一人なるユダ、やがて近づき來る、祭司長・學者・
長老らより遣されたる群衆、劍と棒とを持ちて之に伴ふ。四四
イエスを賣るもの、あらかじめ合圖を示して言ふ『わが接吻する者は
それなり、之を捕へて確と引きゆけ』四五かくて來りて直ちに御許に
往き『ラビ』と言ひて接吻したれば、四六人々イエスに手をかけて捕
ふ。四七傍らに立つ者のひとり、劍を拔き、大祭司の僕を撃ちて、
耳を切り落せり。四八イエス人々に對ひて言ひ給ふ『なんぢら強盜に
むかふ如く、劍と棒とを持ち、我を捕へんとて出で來るか。四九我
は日々なんぢらと偕に宮にありて教へたりしに、我を執へざりき、さ
れど是は聖書の言の成就せん爲なり』五〇其のとき弟子みなイエス
を棄てて逃げ去る。五一ある若者、素肌に亞麻布を纏ひて、イエスに

從ひたりしに、人々これを捕へければ、五二亞麻布を棄て裸にて逃
げ去れり。五三人々イエスを大祭司の許に曳き往きたれば、祭司長・
長老・學者ら皆あつまる。五四ペテロ遠く離れてイエスに從ひ、大
祭司の中庭まで入り、下役どもと共に坐して火に煖まりゐたり。五
五さて祭司長ら及び全議會、イエスを死に定めんとて、證據を求むれ
ども得ず。五六それはイエスに對して僞證する者多くあれども、其の
證據あはざりしなり。五七遂に或者ども起ちて僞證して言ふ五八『わ
れら此の人の「われは手にて造りたる此の宮を毀ち、手にて造らぬ他
の宮を三日にて建つべし」と云へるを聞けり』五九然れど尚この證據
もあはざりき。六〇ここに大祭司、中に立ちイエスに問ひて言ふ『な
んぢ何をも答へぬか、此の人々の立つる證據は如何に』六一されどイ
エス默して何をも答へ給はず。大祭司ふたたび問ひて言ふ『なんぢは
頌むべきものの子キリストなるか』六二イエス言ひ給ふ『われは夫な
り、汝ら、人の子の全能者の右に坐し、天の雲の中にありて來るを
見ん』六三此のとき大祭司おのが衣を裂きて言ふ『なんぞ他に證人

を求めん。六四なんぢら此の言を聞けり、如何に思ふか』かれら
擧りてイエスを死に當るべきものと定む。六五而して或者どもはイエ
スに唾し、又その顏を蔽ひ、拳にて搏ちなど爲始めて言ふ『預言せ
よ』下役どもイエスを受け、手掌にてうてり。六六ペテロ下にて中庭
にをりしに、大祭司の婢女の一人きたりて、六七ペテロの火に煖ま
りをるを見、これに目を注めて『汝もかのナザレ人イエスと偕に居
たり』と言ふ。六八ペテロ肯はずして『われは汝の言ふことを知ら
ず、又その意をも悟らず』と言ひて庭口に出でたり。六九婢女かれ
を見て、また傍らに立つ者どもに『この人はかの黨與なり』と言ひ
出でしに、七〇ペテロ重ねて肯はず、暫くしてまた傍らに立つ者
どもペテロに言ふ『なんぢは慥にかの黨與なり、汝もガリラヤ人な
り』七一此の時ペテロ盟ひかつ誓ひて『われは汝らの言ふ其の人を
知らず』と言ひ出づ。七二その折しも、また鶏なきぬ。ペテロ『に
はとり二度なく前に、なんぢ三度われを否まん』とイエスの言ひ給ひ
し御言を思ひいだし、思ひ反して泣きたり。

第一五章 一夜明るや直ちに、祭司長・長老・學者ら、即ち全議會
ともに相議りて、イエスを縛り、曳きゆきてピラトに付す。二ピラ
ト、イエスに問ひて言ふ『なんぢはユダヤ人の王なるか』答へて言
ひ給ふ『なんぢの言ふが如し』三祭司長らさまざまに訴ふれば、四
ピラトまた問ひて言ふ『なにも答へぬか、視よ、如何に多くの事をも
て訴ふるか』五されどピラトの怪しむばかり、イエス更に何をも答
へ給はず。六さて祭の時には、ピラト民の願に任せて、囚人ひとり
を赦す例なるが、七ここに一揆を起し、人を殺して繋がれをる者の中
に、バラバといふ者あり。八群衆すすみ來りて、例の如くせんこと
を願ひ出でたれば、九ピラト答へて言ふ『ユダヤ人の王を赦さんこと
を願ふか』一〇これピラト、祭司長らのイエスを付ししは、嫉に因
ると知る故なり。一一されど祭司長ら群衆を唆かし、反ってバラバ
を赦さんことを願はしむ。一二ピラトまた答へて言ふ『さらば汝ら
がユダヤ人の王と稱ふる者をわれ如何にすべきか』一三人々また叫び
て言ふ『十字架につけよ』一四ピラト言ふ『そも彼は何の惡事を爲し

たるか』かれら烈しく叫びて『十字架につけよ』と言ふ。一五ピラト
群衆の望を滿さんとて、バラバを釋し、イエスを鞭うちたるのち、
十字架につくる爲にわたせり。一六兵卒どもイエスを官邸の中庭に
連れゆき、全隊を呼び集めて、一七彼に紫色の衣を著せ、茨の冠冕
を編みて冠らせ、一八『ユダヤ人の王、安かれ』と禮をなし始め、一
九また葦にて其の首をたたき、唾し、跪づきて拜せり。二〇かく
嘲弄してのち、紫色の衣を剝ぎ、故の衣を著せ、十字架につけんと
て曳き出せり。二一時にアレキサンデルとルポスとの父シモンといふ
クレネ人、田舍より來りて通りかかりしに、強ひてイエスの十字架
を負はせ、二二イエスをゴルゴダ、釋けば髑髏といふ處に連れ往け
り。二三かくて沒藥を混ぜたる葡萄酒を與へたれど、受け給はず。二
四彼らイエスを十字架につけ、而して誰が何を取るべきと、鬮を引き
て其の衣を分つ、二五イエスを十字架につけしは、朝の九時頃なり
き。二六その罪標には『ユダヤ人の王』と書せり。二七イエスと共に、
二人の強盜を十字架につけ、一人をその右に、一人をその左に置く。

二八[なし]二九往來の者どもイエスを譏り、首を振りて言ふ『ああ、
宮を毀ちて三日のうちに建つる者よ、三〇十字架より下りて己を救
へ』三一祭司長らも亦同じく、學者らと共に嘲弄して互に言ふ『人
を救ひて、己を救ふこと能はず、三二イスラエルの王キリスト、いま
十字架より下りよかし、さらば我ら見て信ぜん』共に十字架につけら
れたる者どもも、イエスを罵りたり。三三晝の十二時に、地のうへ
　く暗くなりて、三時に及ぶ。三四三時にイエス大聲に『エロイ、エ
ロイ、ラマ、サバクタニ』と呼はり給ふ。之を釋けば、わが神、わが
神、なんぞ我を見棄て給ひし、との意なり。三五傍らに立つ者のう
ち或人々これを聞きて言ふ『視よ、エリヤを呼ぶなり』三六一人はし
り往きて、海綿に酸き葡萄酒を含ませて葦につけ、イエスに飲ましめ
て言ふ『待て、エリヤ來りて、彼を下すや否や、我ら之を見ん』三七イ
エス大聲を出して息絶え給ふ。三八聖所の幕、上より下まで裂けて二
つとなりたり。三九イエスに向ひて立てる百卒長、かかる樣にて息
絶え給ひしを見て言ふ『實にこの人は神の子なりき』四〇また遙に

望み居たる女たちあり、その中にはマグダラのマリヤ、小ヤコブと
ヨセとの母マリヤ、及びサロメなども居たり。四一彼らはイエスのガ
リラヤに居給ひしとき、從ひ事へし者どもなり。此の他イエスと共
にエルサレムに上りし多くの女もありき。四二日既に暮れて、準備
日すなはち安息日の前の日となりたれば、四三貴き議員にして、神
の國を待ち望める、アリマタヤのヨセフ來りて、憚らずピラトの許
に往き、イエスの屍體を乞ふ。四四ピラト、イエスは早や死にしかと
訝り、百卒長を呼びて、その死にしより時經しや否やを問ひ、四
五既に死にたる事を百卒長より聞き知りて、屍體をヨセフに與ふ。
四六ヨセフ亞麻布を買ひ、イエスを取下して之に包み、岩に鑿りたる
墓に納め、墓の入口に石を轉し置く。四七マグダラのマリヤとヨセ
の母マリヤと、イエスを納めし處を見ゐたり。

第一六章
一安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ
及びサロメ、往きてイエスに抹らんとて香料を買ひ、二一週の首の
日、日の出でたる頃いと早く墓にゆく。三誰か我らの爲に墓の入口よ

り石を轉すべきと語り合ひしに、四目を擧ぐれば、石の既に轉しあ
るを見る。この石は甚だ大なりき。五墓に入り、右の方に白き衣
を著たる若者の坐するを見て甚く驚く。六若者いふ『おどろくな、
汝らは十字架につけられ給ひしナザレのイエスを尋ぬれど、既に甦
へりて、此處に在さず。視よ、納めし處は此處なり。七されど往き
て弟子たちとペテロとに告げよ「汝らに先だちてガリラヤに往き給
ふ、彼處にて謁ゆるを得ん、曾て汝らに言ひ給ひしが如し」』八女
たち甚く驚きをののき、墓より逃げ出でしが、懼れたれば一言をも
人に語らざりき。九⊠一週の首の日の拂曉、イエス甦へりて先づ
マグダラのマリヤに現れたまふ、前にイエスが七つの惡鬼を逐ひい
だし給ひし女なり。一〇マリヤ往きて、イエスと偕にありし人々の、
泣き悲しみ居るときに之を告ぐ。一一彼らイエスの活き給へる事と、
マリヤに見え給ひし事とを聞けども信ぜざりき。一二此の後その中の
二人、田舍に往く途を歩むほどに、イエス異なりたる姿にて現れ給
ふ。一三此の二人ゆきて、他の弟子たちに之を告げたれど、なほ信ぜ

ざりき。一四其ののち十一弟子の食しをる時に、イエス現れて、己
が甦へりたるを見し者どもの言を信ぜざりしにより、其の信仰な
きと、其の心の頑固なるとを責め給ふ。一五かくて彼らに言ひたま
ふ『全世界を巡りて凡ての造られしものに福音を宣傳へよ。一六信じ
てバプテスマを受くる者は救はるべし、然れど信ぜぬ者は罪に定め
らるべし。一七信ずる者には此等の徴ともなはん。即ち我が名によ
りて悪鬼を逐ひいだし、新しき言をかたり、一八蛇を握るとも、毒
を飲むとも、害を受けず、病める者に手をつけなば癒えん』一九語り
終へてのち、主イエスは天に擧げられ、神の右に坐し給ふ。二〇弟子
たち出でて、あまねく福音を宣傳へ、主も亦ともに働き、伴ふとこ
ろの徴をもて、御言を確うし給へり〕

ルカ傳福音書

第一章 一我らの中に成りし事の物語につき、始よりの目撃者にし
て、二御言の役者となりたる人々の、我らに傳へし其のままを書き列
ねんと、手を著けし者あまたある故に、三我も凡ての事を最初より
詳細に推し尋ねたれば、四テオピロ閣下よ、汝の教へられたる事の
慥なるを悟らせん爲に、これが序を正して書き贈るは善き事と思
はるるなり。五ユダヤの王ヘロデの時、アビヤの組の祭司に、ザカリ
ヤという人あり。その妻はアロンの裔にて、名をエリサベツといふ。
六二人ながら神の前に正しくして、主の誡命と定規とを、みな缺なく
行へり。七エリサベツ石女なれば、彼らに子なし、また二人とも年
邁みぬ。八さてザカリヤその組の順番に當りて、神の前に祭司の務
を行ふとき、九祭司の慣例にしたがひて、籤をひき主の聖所に入り

て、香を焼くこととなりぬ。一〇香を焼くとき、民の群みな外にあり
て祈りゐたり。一一時に主の使あらはれて、香壇の右に立ちたれば、
一二ザカリヤ之を見て、心さわぎ懼を生ず。一三御使いふ『ザカリ
ヤよ、懼るな、汝の願は聽かれたり。汝の妻エリサベツ男子を生
まん、汝その名をヨハネと名づくべし。一四なんぢに喜悦と歡樂と
あらん、又おほくの人もその生るるを喜ぶべし。一五この子、主の前
に大ならん、また葡萄酒と濃き酒とを飲まず、母の胎を出づるや聖
靈にて滿されん。一六また多くのイスラエルの子らを、主なる彼らの
神に歸らしめ、一七且エリヤの靈と能力とをもて、主の前に往かん。
これ父の心を子に、戻れる者を義人の聰明に歸らせて、整へたる
民を主のために備へんとてなり』一八ザカリヤ御使にいふ『何に據り
てか此の事あるを知らん。我は老人にて、妻もまた年邁みたり』一九
御使こたへて言ふ『われは神の御前に立つガブリエルなり、汝に語
りてこの嘉き音信を告げん爲に遣さる。二〇視よ、時いたらば必ず
成就すべき我が言を信ぜぬに因り、なんぢ物言へずなりて、此らの

事の成る日までは語ること能はじ』二一民はザカリヤを俟ちゐて、其
の聖所の内に久しく留るを怪しむ。二二遂に出で來りたれど語るこ
と能はねば、彼らその聖所の内にて異象を見たることを悟る。ザカ
リヤは、ただ首にて示すのみ、なほ唖なりき。二三かくて務の日滿
ちたれば、家に歸りぬ。二四此の後その妻エリサベツ孕りて、五月
ほど隱れをりて言ふ、二五『主わが恥を人の中に雪がせんとて、我を
顧み給ふときは、斯く爲し給ふなり』二六その六月めに、御使ガブ
リエル、ナザレといふガリラヤの町にをる處女のもとに、神より遣
さる。二七この處女はダビデの家のヨセフといふ人と許嫁せし者に
て、其の名をマリヤと云ふ。二八御使、處女の許にきたりて言ふ『め
でたし、惠まるる者よ、主なんぢと偕に在せり』二九マリヤこの言
によりて心いたく騷ぎ、斯かる挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻らした
るに、三〇御使いふ『マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に惠を得た
り。三一視よ、なんぢ孕りて男子を生まん、其の名をイエスと名づく
べし。三二彼は大ならん、至高者の子と稱へられん。また主たる神

、これに其の父ダビデの座位をあたへ給へば、三三ヤコブの家を永遠
に治めん。その國は終ることなかるべし』三四マリヤ御使に言ふ『わ
れ未だ人を知らぬに、如何にして此の事のあるべき』三五御使こたへ
て言ふ『聖靈なんぢに臨み、至高者の能力なんぢを被はん。此の故
に汝が生むところの聖なる者は、神の子と稱へらるべし。三六視よ、
なんぢの親族エリサベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女と
いはれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。三七それ神の
言には能はぬ所なし』三八マリヤ言ふ『視よ、われは主の婢女なり。
汝の言のごとく、我に成れかし』つひに御使はなれ去りぬ。三九そ
の頃マリヤ立ちて山里に急ぎ往き、ユダの町にいたり、四〇ザカリヤ
の家に入りてエリサベツに挨拶せしに、四一エリサベツその挨拶を聞
くや、兒は胎内にて躍れり。エリサベツ聖靈にて滿され、四二聲高ら
かに呼はりて言ふ『をんなの中にて汝は祝福せられ、その胎の實も
また祝福せられたり。四三わが主の母われに來る、われ何によりてか
之を得し。四四視よ、なんぢの挨拶の聲、わが耳に入るや、我が兒、

胎内にて喜びをどれり。四五信ぜし者は幸福なるかな、主の語り給
ふことは必ず成就すべければなり』四六マリヤ言ふ、
『わがこころ主をあがめ、
四七わが靈はわが救主なる神を喜びまつる。
四八その婢女の卑しきをも顧み給へばなり。
視よ、今よりのち萬世の人われを幸福とせん。
四九全能者われに大なる事を爲したまへばなり。
その御名は聖なり、
五〇そのあはれみは代々
かしこみ恐るる者に臨むなり。
五一神は御腕にて權力をあらはし、
心の念に高ぶる者を散し、
五二權勢ある者を座位より下し、
いやしき者を高うし、
五三飢ゑたる者を善き物に飽かせ、

富める者を空しく去らせ給ふ。
五四また我らの先祖に告げ給ひし如く、
五五アブラハムとその裔とに對する
あはれみを永遠に忘れじとて、
僕イスラエルを助けたまへり』
五六かくてマリヤは、三月ばかりエルザベツと偕に居りて、己が家に
歸れり。五七さてエリサベツ産む期みちて男子を生みたれば、五八そ
の最寄のもの親族の者ども、主の大なる憐憫をエリサベツに垂れ給
ひしことを聞きて、彼とともに喜ぶ。五九八日めになりて、其の子
に割禮を行はんとて人々きたり、父の名に因みてザカリヤと名づけ
んとせしに、六〇母こたへて言ふ『否、ヨハネと名づくべし』六一か
れら言ふ『なんぢの親族の中には此の名をつけたる者なし』六二而し
て父に首にて示し、いかに名づけんと思ふか、問ひたるに、六三ザ
カリヤ書板を求めて『その名はヨハネなり』と書きしかば、みな怪し
む。六四ザカリヤの口たちどころに開け、舌ゆるみ、物いひて神を讃

めたり。六五最寄に住む者みな懼をいだき、又すべて此等のこと
くユダヤの山里に言ひ囃されたれば、六六聞く者みな之を心にとめ
て言ふ『この子は如何なる者にか成らん』主の手かれと偕に在りしな
り。
六七かくて父ザカリヤ聖靈にて滿され預言して言ふ、
六八『讃むべきかな、主イスラエルの神、
その民をかへりみて贖罪をなし、
六九我らのために救の角を、
その僕ダビデの家に立て給へり。
七〇これぞ古へより聖預言者の口をもて言ひ給ひし如く、
七一我らを仇より、凡て我らを憎む者の手より、取り出したまふ
救なる。
七二我らの先祖に憐憫を垂れ、その聖なる契約を思し、
七三我らの先祖アブラハムに立て給ひし御誓を忘れずして、
七四我らを仇の手より救ひ、
生涯、主の御前に、

七五聖と義とをもて懼なく事へしめたまふなり。
七六幼兒よ、なんぢは至高者の預言者と稱へられん。
これ主の御前に先だちゆきて、其の道を備へ、
七七主の民に罪の赦による
救を知らしむればなり。
七八これ我らの神の深き憐憫によるなり。
この憐憫によりて朝のひかり、上より臨み、
七九暗黒と死の蔭とに坐する者をてらし、
我らの足を平和の路にみちびかん』
八〇かくて幼兒は漸に成長し、その靈強くなり、イスラエルに現る
る日まで荒野にゐたり。
第二章一その頃、天下の人を戸籍に著かすべき詔令、カイザル・
アウグストより出づ。二この戸籍登録は、クレニオ、シリヤの總督た
りし時に行はれし初のものなり。三さて人みな戸籍に著かんとて、
各自その故郷に歸る。四五ヨセフもダビデの家系また血統なれば、既

に孕める許嫁の妻マリヤとともに、戸籍に著かんとて、ガリラヤの
町ナザレを出でてユダヤに上り、ダビデの町ベツレヘムといふ處に
到りぬ。六此處に居るほどに、マリヤ月滿ちて、七初子をうみ、之を
布に包みて馬槽に臥させたり。旅舍にをる處なかりし故なり。八こ
の地に野宿して、夜群を守りをる牧者ありしが、九主の使その傍
らに立ち、主の榮光その周圍を照したれば、甚く懼る。一〇御使かれ
らに言ふ『懼るな、視よ、この民一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信
を我なんぢらに告ぐ。一一今日ダビデの町にて汝らの爲に救主うま
れ給へり、これ主キリストなり。一二なんぢら布にて包まれ、馬槽に
臥しをる嬰兒を見ん、是その徴なり』一三忽ちあまたの天の軍勢、
御使に加はり、神を讚美して言ふ、

一四『いと高き處には榮光、神にあれ。
地には平和、主の悦び給ふ人にあれ』

一五御使等さりて天に往きしとき、牧者たがひに語る『いざ、ベツレ
ヘムにいたり、主の示し給ひし事を見ん』一六乃ち急ぎ往き

て、マリヤとヨセフと、馬槽に臥したる嬰兒とに尋ねあふ。一七既に
見て、この子につき御使の語りしことを告げたれば、一八聞く者はみ
な牧者の語りしことを怪しみたり。一九而してマリヤは凡て此等の
ことを心に留めて思ひ回せり。二〇牧者は御使の語りしごとく凡て
の事を見聞せしによりて、神を崇めかつ讃美しつつ歸れり。二一八日
みちて幼兒に割禮を施すべき日となりたれば、未だ胎内に宿らぬ先
に御使の名づけし如く、その名をイエスと名づけたり。二二モーセの
律法に定めたる潔の日滿ちたれば、彼ら幼兒を携へてエルサレム
に上る。二三これは主の律法に『すべて初子に生るる男子は、主につ
ける聖なる者と稱へらるべし』と録されたる如く、幼兒を主に献げ、
二四また主の律法に『山鳩一つがひ或は家鴿の雛二羽』と云ひたる
に遵ひて、犧牲を供へん爲なり。二五視よ、エルサレムにシメオン
といふ人あり。この人は義かつ敬虔にして、イスラエルの慰められ
んことを待ち望む。聖靈その上に在す。二六また聖靈に、主のキリス
トを見ぬうちは死を見ずと示されたれしが、二七此とき御靈に感じて

宮に入る。兩親その子イエスを携へ、この子のために律法の慣例に
遵ひて行はんとて來りたれば、二八シメオン、イエスを取りいだき、
神を讃めて言ふ、
二九『主よ、今こそ御言に循ひて、
僕を安らかに逝かしめ給ふなれ。
三〇わが目は、はや主の救を見たり。
三一是もろもろの民の前に備へ給ひし者、
三二異邦人をてらす光、
御民イスラエルの榮光なり』
三三かく幼兒に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、三四シ
メオン彼らを祝して母マリヤに言ふ『視よ、この幼兒は、イスラエル
の多くの人の或は倒れ、或は起たん爲に、また言ひ逆ひを受くる
徴のために置かる。三五――劍なんぢの心をも刺し貫くべし――
これは多くの人の心の念の顯れん爲なり』三六ここにアセルの族
パヌエルの娘に、アンナといふ預言者あり、年いたく老ゆ。處女の

とき、夫に適きて七年ともに居り、三七八十四年寡婦たり。宮を離
れず、夜も晝も斷食と祈祷とを爲して神に事ふ。三八この時すすみ寄
りて神に感謝し、また凡てエルサレムの拯贖を待ちのぞむ人に、幼兒
のことを語れり。三九さて主の律法に遵ひて、凡ての事を果したれ
ば、ガリラヤに歸り、己が町ナザレに到れり。四〇幼兒は漸に成長
して健かになり、智慧みち、かつ神の惠その上にありき。四一かく
てその兩親、過越の祭には年毎にエルサレムに往きぬ。四二イエス
の十二歳のとき、祭の慣例に遵ひて上りゆき、四三祭の日終りて
歸る時、その子イエスはエルサレムに止りたまふ。兩親は之を知ら
ずして、四四道伴のうちに居るならんと思ひ、一日路ゆきて、親族・
知邊のうちを尋ぬれど、四五遇はぬに因りて復たづねつつエルサレム
に歸り、四六三日ののち、宮にて教師のなかに坐し、かつ聽き、かつ問
ひゐ給ふに遇ふ。四七聞く者は皆その聰と答とを怪しむ。四八兩親
イエスを見て、いたく驚き、母は言ふ『兒よ、何故かかる事を我ら
に爲しぞ、視よ、汝の父と我と憂ひて尋ねたり』四九イエス言ひたま

ふ『何故われを尋ねたるか、我はわが父の家に居るべきを知らぬか』
五〇兩親はその語りたまふ事を悟らず。五一かくてイエス彼等ととも
に下り、ナザレに往きて順ひ事へたまふ。其の母これらの事をこと
ごとく心に藏む。五二イエス智慧も身のたけも彌まさり、神と人と
にますます愛せられ給ふ。

第三章一テベリオ・カイザル在位の十五年、ポンテオ・ピラトはユダ
ヤの總督、ヘロデはガリラヤ分封の國守、その兄弟ピリポはイツリ
ヤ及びテラコニテの地の分封の國守、ルサニヤはアビレネ分封の國守
たり、二アンナスとカヤパとは大祭司たりしとき、神の言、荒野にて
ザカリヤの子ヨハネに臨む。三かくてヨルダン河の邊なる四方の地
にゆき、罪の赦を得さする悔改のバプテスマを宣傳ふ。四預言者
イザヤの言の書に

『荒野に呼はる者の聲す。
「主の道を備へ、その路すじを直くせよ。
五諸の谷は埋められ、諸の山と岡とは平げられ、

曲りたるは直く、嶮しきは坦かなる路となり、
六人みな神の救を見ん」』
と録されたるが如し。七さてヨハネ、バプテスマを受けんとて出でき
たる群衆にいふ『蝮の裔よ、誰が汝らに、來らんとする御怒を避
くべき事を示したるぞ。八さらば悔改に相應しき果を結べ。なんぢ
ら「我らの父にアブラハムあり」と心のうちに言ひ始むな。我なん
ぢらに告ぐ、神はよく此らの石よりアブラハムの子等を起し得給ふ
なり。九斧ははや樹の根に置かる。されば凡て善き果を結ばぬ樹は、
伐られて火に投げ入れらるべし』一〇群衆ヨハネに問ひて言ふ『さ
らば我ら何を爲すべきか』一一答へて言ふ『二つの下衣をもつ者は、
有たぬ者に分け與へよ。食物を有つ者もまた然せよ』一二取税人も
バプテスマを受けんとて來りて言ふ『師よ、我ら何を爲すべきか』一
三答へて言ふ『定りたるものの外、なにをも促るな』一四兵卒もまた
問ひて言ふ『我らは何を爲すべきか』答へて言ふ『人を劫かし、また
誣ひ訴ふな、己が給料をもて足れりとせよ』一五民、待ち望みゐたれ

ば、みな心の中にヨハネをキリストならんかと論ぜしに、一六ヨハネ
凡ての人に答へて言ふ『我は水にて汝らにバプテスマを施す、され
ど我よりも能力ある者きたらん、我はその鞋の紐を解くにも足らず。
彼は聖靈と火とにて汝らにバプテスマを施さん。一七手には箕を持
ちたまふ。禾場をきよめ、麥を倉に納めんとてなり。而して殼は消え
ぬ火にて焚きつくさん』一八ヨハネこの他なほ、さまざまの勸をな
して、民に福音を宣傳ふ。一九然るに國守ヘロデ、その兄弟の妻へ
ロデヤの事につき、又その行ひたる凡ての惡しき事につきて、ヨハ
ネに責められたれば、二〇更に復一つの惡しき事を加へて、ヨハネを
獄に閉ぢこめたり。二一民みなバプテスマを受けし時、イエスもバ
プテスマを受けて祈りゐ給へば、天ひらけ、二二聖靈、形をなして鴿
のごとく其の上に降り、かつ天より聲あり、曰く『なんぢは我が愛
しむ子なり、我なんぢを悦ぶ』二三イエスの、教を宣べ始め給ひし
は、年おほよそ三十の時なりき。人にはヨセフの子と思はれ給へり。
ヨセフの父はヘリ、二四その先はマタテ、レビ、メルキ、ヤンナイ、

ヨセフ、二五マタテヤ、アモス、ナホム、エスリ、ナンガイ、二六マ
ハテ、マタテヤ、シメイ、ヨセク、ヨダ、二七ヨハナン、レサ、ゾロ
バベル、サラテル、ネリ、二八メルキ、アデイ、コサム、エルマダム、
エル、二九ヨセ、エリエゼル、ヨリム、マタテ、レビ、三〇シメオン、
ユダ、ヨセフ、ヨナム、エリヤキム、三一メレヤ、メナ、マタタ、ナ
タン、ダビデ、三二エッサイ、オベデ、ボアズ、サラ、ナアソン、三
三アミナダブ、アデミン、アルニ、エスロン、パレス、ユダ、三四ヤ
コブ、イサク、アブラハム、テラ、ナホル、三五セルグ、レウ、ペレ
グ、エベル、サラ、三六カイナン、アルパクサデ、セム、ノア、ラメ
ク、三七メトセラ、エノク、ヤレデ、マハラレル、カイナン、三八エ
ノス、セツ、アダムに至る。アダムは神の子なり。

第四章

一さてイエス聖靈にて滿ち、ヨルダン河より歸り、荒野にて
四十日のあひだ御靈に導かれ、二惡魔に試みられ給ふ。この間な
にをも食はず、日數滿ちてのち餓ゑ給ひたれば、三惡魔いふ『なんぢ
若し神の子ならば、此の石に命じてパンと爲らしめよ』四イエス答へ

たまふ『「人の生くるはパンのみに由るにあらず」と録されたり』五
惡魔またイエスを携へのぼりて、瞬間に天下のもろもろの國を示
して言ふ、六『この凡ての權威と國々の榮華とを汝に與へん。我こ
れを委ねられたれば、我が欲する者に與ふるなり。七この故にもし我
が前に拜せば、ことごとく汝の有となるべし』八イエス答へて言ひ
たまふ『「主なる汝の神を拜し、ただ之にのみ事ふべし」と録された
り』九惡魔またイエスをエルサレムに連れゆき、宮の頂上に立たせて
言ふ『なんぢ若し神の子ならば、此處より己が身を下に投げよ。一〇
それは

　「なんぢの爲に御使たちに命じて守らしめ給はん」
一一「かれら手にて汝をささへ、
　その足を石に打當つる事なからしめん」

と録されたるなり』一二イエス答へて言ひたまふ『「主なる汝の神を
試むべからず」と云ひてあり』一三惡魔あらゆる嘗試を盡してのち、
暫くイエスを離れたり。一四イエス御靈の能力をもてガリラヤに歸

り給へば、その聲聞あまねく四方の地に弘る。一五かくて諸會堂に
て教をなし、凡ての人に崇められ給ふ。一六その育てられ給ひし
處のナザレに到り、例のごとく安息日に會堂に入りて、聖書を讀ま
んとて立ち給ひしに、一七預言者イザヤの書を與へたれば、其の書を
繙きて、かく録されたる所を見出し給ふ。

一八『主の御靈われに在す。
これ我に油を注ぎて貧しき者に福音を宣べしめ、
我をつかはして囚人に赦を得ること、
盲人に見ゆることとを告げしめ、
壓へらるる者を放ちて自由を與へしめ、
一九主の喜ばしき年を宣傳へしめ給ふなり』

二〇イエス書を卷き、係の者に返して坐し給へば、會堂に居る者み
な之に目を注ぐ。二一イエス言ひ出でたまふ『この聖書は今日なんぢ
らの耳に成就したり』二二人々みなイエスを讚め、又その口より出
づる惠の言を怪しみて言ふ『これヨセフの子ならずや』二三イエス

言ひ給ふ『なんぢら必ず我に俚諺を引きて「醫者よ、みづから己を
醫せ、カペナウムにて有りしといふ我らが聞ける事どもを、己が郷な
る此の地にても爲せ」と言はん』二四また言ひ給ふ『われ誠に汝ら
に告ぐ、預言者は己が郷にて喜ばるることなし。二五われ實をもて
汝らに告ぐ、エリヤのとき三年六个月、天とぢて、全地大なる饑饉
なりしが、イスラエルの中に多くの寡婦ありたれど、二六エリヤは其
の一人にすら遣されず、唯シドンなるサレプタの一人の寡婦にのみ
遣されたり。二七また預言者エリシヤの時、イスラエルの中に多く
の癩病人ありしが、其の一人だに潔められず、唯シリヤのナアマン
のみ潔められたり』二八會堂にをる者みな之を聞きて憤恚に滿ち、
二九起ちてイエスを町より逐ひ出し、その町の建ちたる山の崖に引き
往きて、投げ落さんとせしに、三〇イエスその中を通りて去り給ふ。
三一かくてガリラヤの町カペナウムに下りて、安息日ごとに人を教へ
給へば、三二人々その教に驚きあへり。その言、權威ありたるに因
る。三三會堂に穢れし惡鬼の靈に憑かれたる人あり、大聲に叫びて

言ふ、三四『ああ、ナザレのイエスよ、我らは汝となにの關係あらん
や。我らを亡さんとて來給ふか。我はなんぢの誰なるを知る、神の
聖者なり』三五イエス之を禁めて言ひ給ふ『默せ、その人より出で
よ』惡鬼その人を人々の中に倒し、傷つけずして出づ。三六みな驚
き語り合ひて言ふ『これ如何なる言ぞ、權威と能力とをもて命ずれ
ば、穢れし惡鬼すら出で去る』三七ここにイエスの噂あまねく四方
の地に弘りたり。三八イエス會堂を立ち出でて、シモンの家に入り
給ふ。シモンの外姑おもき熱を患ひ居たれば、人々これが爲にイエ
スに願ふ。三九その傍らに立ちて熱を責めたまへば、熱去りて女た
ちどころに起きて彼らに事ふ。四〇日のいる時、さまざまの病を患
ふ者をもつ人、みな之をイエスに連れ來れば、一々その上に手を置き
て醫し給ふ。四一惡鬼もまた多くの人より出でて叫びつつ言ふ『なん
ぢは神の子なり』之を責めて物言ふことを免し給はず、惡鬼そのキリ
ストなるを知るに因りてなり。四二明くる朝イエス出でて寂しき處
にゆき給ひしが、群衆たづねて御許に到り、その去り往くことを止

めんとせしに、四三イエス言ひ給ふ『われ又ほかの町々にも神の國の
福音を宣傳へざるを得ず、わが遣されしは之が爲なり』四四かくて
ユダヤの諸會堂にて教を宣べたまふ。
第五章 一群衆おし迫りて神の言を聽きをる時、イエス、ゲネサ
レの湖のほとりに立ちて、二渚に二艘の舟の寄せあるを見たまふ、
漁人は舟をいでて網を洗ひ居たり。三イエスその一艘なるシモンの
舟に乘り、彼に請ひて陸より少しく押し出さしめ、坐して舟の中より
群衆を教へたまふ。四語り終へてシモンに言ひたまふ『深處に乘り
いだし、網を下して漁れ』五シモン答へて言ふ『君よ、われら終夜
勞したるに、何をも得ざりき、されど御言に隨ひて網を下さん』六か
くて然せしに、魚の夥多しき群を圍みて、網裂けかかりたれば、七他
の一艘の舟にをる組の者を差招きて來り助けしむ。來りて魚を二艘
の舟に滿したれば、舟沈まんばかりになりぬ。八シモン・ペテロ之を
見て、イエスの膝下に平伏して言ふ『主よ、我を去りたまへ。我は罪
ある者なり』九これはシモンも偕に居る者もみな、漁りし魚の夥多

しきに驚きたるなり。一〇ゼベダイの子にしてシモンの侶なるヤコ
ブもヨハネも同じく驚けり。イエス、シモンに言ひたまふ『懼るな、
なんぢ今よりのち人を漁らん』一一かれら舟を陸につけ、一切を棄て
てイエスに從へり。一二イエス或町に居給ふとき、視よ、全身癩病
をわづらふ者あり。イエスを見て平伏し、願ひて言ふ『主よ、御意な
らば、我を潔くなし給ふを得ん』一三イエス手をのべ彼につけて『わが
意なり、潔くなれ』と言ひ給へば、直ちに癩病されり。一四イエス
之を誰にも語らぬやうに命じ、かつ言ひ給ふ『ただ往きて己を祭司
に見せ、モーセが命じたるごとく汝の潔のために献物して、人々
に證せよ』一五されど彌増々イエスの事ひろまりて、大なる群衆
、あるひは教を聽かんとし、或は病を醫されんとして集り來りし
が、一六イエス寂しき處に退きて祈り給ふ。一七或日イエス教をな
し給ふとき、ガリラヤの村々、ユダヤ及びエルサレムより來りしパ
リサイ人、教法學者ら、そこに坐しゐたり。病を醫すべき主の能力
イエスと偕にありき。一八視よ、人々、中風を病める者を、床にのせ

て擔ひきたり、之を家に入れて、イエスの前に置かんとすれど、一九
群衆によりて擔ひ入るべき道を得ざれば、屋根にのぼり、瓦を取り
除けて、床のまま人々の中に、イエスの前につり縋り下せり。二〇イ
エス彼らの信仰を見て言ひたまふ『人よ、汝の罪ゆるされたり』二
一ここに學者・パリサイ人ら論じ出でて言ふ『　言をいふ此の人は
誰ぞ、神より他に誰か罪を赦すことを得べき』二二イエス彼らの論ず
る事をさとり、答へて言ひ給ふ『なにを心のうちに論ずるか。二三
「なんぢの罪ゆるされたり」と言ふと「起きて歩め」と言ふと孰か易
き、二四人の子の地にて罪をゆるす權威あることを汝らに知らせん
爲に』――中風を病める者に言ひ給ふ――『なんぢに告ぐ、起きよ、
床をとりて家に往け』二五かれ立刻に人々の前にて起きあがり、臥
しゐたる床をとりあげ、神を崇めつつ己が家に歸りたり。二六人々み
な甚く驚きて神をあがめ懼に滿ちて言ふ『今日われら珍しき事を
見たり』二七この事の後イエス出でて、レビといふ取税人の收税所に
坐しをるを見て『われに從へ』と言ひ給へば、二八一切を棄ておき、

起ちて從へり。二九レビ己が家にて、イエスの爲に大なる饗宴を設
けしに、取税人および他の人々も多く食事の席に列りゐたれば、三〇
パリサイ人および其の曹輩の學者ら、イエスの弟子たちに向ひ、呟
きて言ふ『なにゆゑ汝らは取税人・罪人らと共に飲食するか』三一
イエス答へて言ひたまふ『健康なる者は醫者を要せず、ただ病ある
者これを要す。三二我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招きて
悔改めさせんとて來れり』三三彼らイエスに言ふ『ヨハネの弟子た
ちは、しばしば斷食し祈祷し、パリサイ人の弟子たちも亦然するに、
汝の弟子たちは飲食するなり』三四イエス言ひたまふ『新郎の友だ
ち新郎と偕にをるうちは、彼らに斷食せしめ得んや。三五されど日來
りて新郎をとられん、その日には斷食せん』三六イエスまた譬を言
ひ給ふ『たれも新しき衣を切り取りて、舊き衣を繕ふ者はあら
じ。もし然せば、新しきものも破れ、かつ新しきものより取りたる
裂も舊きものに合はじ。三七誰も新しき葡萄酒を、ふるき革嚢に入
るることは爲じ。もし然せば、葡萄酒は嚢をはりさき漏れ出でて、

囊も廢らん。三八新しき葡萄酒は、新しき革囊に入るべきなり。
三九誰も舊き葡萄酒を飲みてのち、新しき葡萄酒を望む者はあらじ。
「舊きは善し」と云へばなり』

第六章一イエス安息日に麥畠を過ぎ給ふとき、弟子たち穗を摘み、
手にて揉みつつ食ひたれば、二パリサイ人のうち或者ども言ふ『なん
ぢらは何ゆゑ安息日に爲まじき事をするか』三イエス答へて言ひ給ふ
『ダビデその伴へる人々とともに飢ゑしとき、爲しし事をすら讀まぬ
か。四即ち神の家に入りて、祭司の他は食ふまじき供のパンを取り
て食ひ、己と偕なる者にも與へたり』五また言ひたまふ『人の子は
安息日の主たるなり』六又ほかの安息日に、イエス會堂に入りて教
をなし給ひしに、此處に人あり、其の右の手なえたり。七學者・パリ
サイ人ら、イエスを訴ふる廉を見出さんと思ひて、安息日に人を醫
すや否やを窺ふ。八イエス彼らの念を知りて、手なえたる人に『起
きて中に立て』と言ひ給へば、起きて立てり。九イエス彼らに言ひ給
ふ『われ汝らに問はん、安息日に善をなすと惡をなすと、生命を救

ふと亡すと、孰かよき』一〇かくて一同を見まはして、手なえたる
人に『なんぢの手を伸べよ』と言ひ給ふ。かれ然なしたれば、その
手癒ゆ。一一然るに彼ら狂氣の如くなりて、イエスに何をなさんと語
り合へり。一二その頃イエス祈らんとて山にゆき、神に祈りつつ夜を
明したまふ。一三夜明になりて弟子たちを呼び寄せ、その中より十二
人を選びて、之を使徒と名づけたまふ。一四即ちペテロと名づけ給
ひしシモンと其の兄弟アンデレと、ヤコブとヨハネと、ピリポとバ
ルトロマイと、一五マタイとトマスと、アルパヨの子ヤコブと熱心黨
と呼ばるるシモンと、一六ヤコブの子ユダとイスカリオテのユダとな
り。このユダはイエスを賣る者となりたり。一七イエス此等とともに
下りて、平かなる處に立ち給ひしに、弟子の大なる群衆、およ
びユダヤ全國、エルサレム又ツロ、シドンの海邊より來りて、或は
教を聽かんとし、或は病を醫されんとする民の大なる群も、そこ
にあり。一八穢れし靈に惱されたる者も醫される。一九能力イエスよ
り出でて、凡ての人を醫せば、群衆みなイエスに觸らん事を求む。

二〇イエス目をあげ弟子たちを見て言ひたまふ『幸福なるかな、貧し
き者よ、神の國は汝らの有なり。二一幸福なる哉、いま飢うる者よ、
汝ら飽くことを得ん。幸福なる哉、いま泣く者よ、汝ら笑ふことを
得ん。二二人なんぢらを憎み、人の子のために遠ざけ、謗り、汝ら
の名を惡しとして棄てなば、汝ら幸福なり。二三その日には喜び躍
れ。視よ、天にて汝らの報は大なり、彼らの先祖が預言者たちに
爲ししも斯くありき。二四されど禍害なるかな、富む者よ、汝らは
既にその慰安を受けたり。二五禍害なる哉、いま飽く者よ、汝らは
飢ゑん。禍害なる哉、いま笑ふ者よ、汝らは、悲しみ泣かん。二六凡
ての人、なんぢらを譽めなば、汝ら禍害なり。彼らの先祖が虛僞の
預言者たちに爲ししも斯くありき。二七われ更に汝ら聽くものに告
ぐ、なんじらの仇を愛し、汝らを憎む者を善くし、二八汝らを詛ふ
者を祝し、汝らを辱しむる者のために祈れ。二九なんぢの頰を打つ
者には、他の頰をも向けよ。なんぢの上衣を取る者には下衣をも拒
むな。三〇すべて求むる者に與へ、なんぢの物を奪ふ者に復索むな。

三一なんぢら人に爲られんと思ふごとく、人にも然せよ。三二なんぢ
ら己を愛する者を愛せばとて、何の嘉すべき事あらん、罪人にても
己を愛する者を愛するなり。三三汝等おのれに善をなす者に善を爲
すとも、何の嘉すべき事あらん、罪人にても然するなり。三四なんぢ
ら得る事あらんと思ひて人に貸すとも、何の嘉すべき事あらん、罪人
にても均しきものを受けんとて罪人に貸すなり。三五汝らは仇を愛
し、善をなし、何をも求めずして貸せ、さらば、その報は大ならん。
かつ至高者の子たるべし。至高者は、恩を知らぬもの惡しき者に
も、仁慈あるなり。三六汝らの父の慈悲なるごとく、汝らも慈悲な
れ。三七人を審くな、さらば汝らも審かるる事あらじ。人を罪に定
むな、さらば、汝らも罪に定めらるる事あらじ。人を赦せ、さらば
汝らも赦されん。三八人に與へよ、さらば汝らも與へられん。人は
量をよくし、押し入れ、搖り入れ、溢るるまでにして、汝らの懷中
に入れん。汝等おのが量る量にて量らるべし』三九また譬にて言
ひたまふ『盲人は盲人を手引するを得んや。二人とも穴に落ちざら

んや。四〇弟子はその師に勝らず、凡そ全うせられたる者は、その
師の如くならん。四一何ゆゑ兄弟の目にある塵を見て、己が目にあ
る梁木を認めぬか。四二おのが目にある梁木を見ずして、爭で兄弟
に向ひて「兄弟よ、汝の目にある塵を取り除かせよ」といふを得ん
や。僞善者よ、先づ己が目より梁木を取り除け。さらば明かに見え
て、兄弟の目にある塵を取りのぞき得ん。四三惡しき果を結ぶ善き
樹はなく、また善き果を結ぶ惡しき樹はなし。四四樹はおのおの其の
果によりて知らる。茨より無花果を取らず、野荊より葡萄を収めざ
るなり。四五善き人は心の善き倉より善きものを出し、惡しき人は
惡しき倉より惡しき物を出す。それ心に滿つるより、口は物言ふな
り。四六なんぢら我を「主よ主よ」と呼びつつ、何ぞ我が言ふことを
行はぬか。四七凡そ我にきたり我が言を聽きて行ふ者は、如何な
る人に似たるかを示さん。四八即ち家を建つるに、地を深く掘り岩
の上に基を据ゑたる人のごとし。洪水いでて流その家を衝けども
動かすこと能はず、これ固く建てられたる故なり。四九されど聽きて

行はぬ者は、基なくして家を土の上に建てたる人のごとし。流そ
の家を衝けば、直ちに崩れて、その破壞はなはだし』
第七章 一イエス凡て此らの言を民に聞かせ終へて後、カペナウム
に入り給ふ。二時に或百卒長、その重んずる僕やみて死ぬばかり
なりしかば、三イエスの事を聽きて、ユダヤ人の長老たちを遣し、
來りて僕を救ひ給はんことを願ふ。四彼らイエスの許にいたり、切
に請ひて言ふ『かの人は此の事を爲らるるに相應し。五わが國人を愛
し、我らのために會堂を建てたり』六イエス共に往き給ひて、その家
はや程近くなりしとき、百卒長、數人の友を遣して言はしむ『主
よ、自らを煩はし給ふな。我は汝をわが屋根の下に入れまつるに
足らぬ者なり。七されば御前に出づるにも相應しからずと思へり、た
だ御言を賜ひて我が僕をいやし給へ。八我みづから權威の下に置か
るる者なるに、我が下にまた兵卒ありて、此に「往け」と言へば往き、
彼に「來れ」と言へば來り、わが僕に「これを爲せ」と言へば爲すな
り』九イエス聞きて彼を怪しみ、振反りて從ふ群衆に言ひ給ふ『わ

れ汝らに告ぐ、イスラエルの中にだに斯かるあつき信仰は見しこと
なし』一〇遣されたる者ども家に歸りて僕を見れば、既に健康とな
れり。一一その後イエス、ナインといふ町にゆき給ひしに、弟子たち
及び大なる群衆も共に往く。一二町の門に近づき給ふとき、視よ、
舁き出さるる死人あり。これは獨息子にて母は寡婦なり、町の多く
の人々これに伴ふ。一三主、寡婦を見て憫み『泣くな』と言ひて、一
四近より、柩に手をつけ給へば、舁くもの立ち止る。イエス言ひた
まふ『若者よ、我なんぢに言ふ、起きよ』一五死人、起きかへりて物言
ひ始む。イエス之を母に付したまふ。一六人々みな懼をいだき、神
を崇めて言ふ『大なる預言者われらの中に興れり』また言ふ『神そ
の民を顧み給へり』一七この事ユダヤ全國および最寄の地にくひ
ろまりぬ。一八偖ヨハネの弟子たち、凡て此等のことを告げたれば、
一九ヨハネ兩三人の弟子を呼び、主に遣して言はしむ『來るべき者
は汝なるか、或は他に待つべきか』二〇彼ら御許に到りて言ふ『バ
プテスマのヨハネ、我らを遣して言はしむ「來るべき者は汝なる

か、或は他に待つべきか」』二一この時イエス多くの者の病・疾患
を醫し、惡しき靈を逐ひいだし、又おほくの盲人に見ることを得しめ
給ひしが、二二答へて言ひたまふ『往きて汝らが見聞せし所をヨハ
ネに告げよ。盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者は
きき、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。二三お
ほよそ我に躓かぬ者は幸福なり』二四ヨハネの使の去りたる後、ヨ
ハネの事を群衆に言ひいで給ふ『なんぢら何を眺めんとて野に出で
し、風にそよぐ葦なるか。二五さらば何を見んとて出でし、柔かき
衣を著たる人なるか。視よ、華美なる衣をきて奢り暮す者は王宮
に在り。二六さらば何を見んとて出でし、預言者なるか。然り、我な
んぢらに告ぐ、預言者よりも勝る者なり。
二七「視よ、わが使を汝の顔の前につかはす。
かれは汝の前になんじの道をそなへん」
と録されたるは此の人なり。二八われ汝らに告ぐ、女の産みたる者
の中、ヨハネより大なる者はなし。されど神の國にて小き者も、彼

よりは大なり。二九（凡ての民これを聞きて、取税人までも神を正
しとせり。ヨハネのバプテスマを受けたるによる。三〇されどパリサ
イ人・教法師らは、其のバプテスマを受けざりしにより、各自にかか
はる神の御旨をこばみたり）三一さればわれ今の代の人を何に比へ
ん。彼らは何に似たるか。三二彼らは、童市場に坐し、たがひに呼
びて「われら汝らの爲に笛吹きたれど、汝ら躍らず。歎きたれど、
汝ら泣かざりき」と云ふに似たり。三三それはバプテスマのヨハネ
來りて、パンをも食はず葡萄酒をも飮まねば、「惡鬼に憑かれたる者
なり」と汝ら言ひ、三四人の子きたりて飮食すれば「視よ、食を貪
り、酒を好む人、また取税人・罪人の友なり」と汝ら言ふなり。三五
されど智慧は己が凡ての子によりて正しとせらる』三六ここに或パリ
サイ人ともに食せん事をイエスに請ひたれば、パリサイ人の家に入
りて、席につき給ふ。三七視よ、この町に罪ある一人の女あり。イ
エスのパリサイ人の家にて食事の席にゐ給ふを知り、香油の入りた
る石膏の壺を持ちきたり、三八泣きつつ御足近く後にたち、涙にて

御足をうるほし、頭の髮にて之を拭ひ、また御足に接吻して香油
を抹れり。三九イエスを招きたるパリサイ人これを見て、心のうち
に言ふ『この人もし預言者ならば、觸る者の誰、如何なる女なるか
を知らん、彼は罪人なるに』四〇イエス答へて言ひ給ふ『シモン、我
なんぢに言ふことあり』シモンいふ『師よ、言ひたまへ』四一『或債主
に二人の負債者ありて、一人はデナリ五百、一人は五十の負債せし
に、四二償ひかたなければ、債主この二人を共に免せり。されば二人
のうち債主を愛すること孰か多き』四三シモン答へて言ふ『われ思
ふに、多く免されたる者ならん』イエス言ひ給ふ『なんぢの判斷は當
れり』四四かくて女の方に振向きてシモンに言ひ給ふ『この女を見
るか。我なんぢの家に入りしに、なんぢは我に足の水を與へず、此の
女は涙にて我足を濡し、頭髮にて拭へり。四五なんぢは我に接吻せ
ず、此の女は我が入りし時より、我が足に接吻して止まず。四六なん
ぢは我が頭に油を抹らず、此の女は香油を抹れり。四
七この故に我なんぢに告ぐ、この女の多くの罪は赦されたり。その

愛すること大なればなり。赦さるる事の少き者は、その愛する事
もまた少し』四八遂に女に言ひ給ふ『なんぢの罪は赦されたり』四
九同席の者ども心の内に『罪をも赦す此の人は誰なるか』と言ひ出
づ。五〇ここにイエス女に言ひ給ふ『なんぢの信仰なんぢを救へり、
安らかに往け』

第八章一この後イエス教を宣べ、神の國の福音を傳へつつ、町々
村々を廻り給ひしに、十二弟子も伴ふ。二また前に惡しき靈を逐ひ
出され、病を醫されなどせし女たち、即ち七つの惡鬼のいでしマ
グラダと呼ばるるマリヤ、三ヘロデの家司クーザの妻ヨハンナ及び
スザンナ、此の他にも多くの女ともなひゐて、其の財産をもて彼ら
に事へたり。四大なる群衆むらがり、町々の人みもとに寄り集ひた
れば、譬をもて言ひたまふ、五『種播く者その種を播かんとて出づ。
播くとき路の傍らに落ちし種あり、踏みつけられ、また空の鳥これ
を啄む。六岩の上に落ちし種あり、生え出でたれど潤澤なきにより
て枯る。七茨の中に落ちし種あり、茨も共に生え出でて之を塞ぐ。

八良き地に落ちし種あり、生え出でて百倍の實を結べり』これらの事
を言ひて呼はり給ふ『きく耳ある者は聽くべし』九弟子たち此の譬
の如何なる意なるかを問ひたるに、一〇イエス言ひ給ふ『なんぢら
は神の國の奧義を知ることを許されたれど、他の者は譬にてせらる。
彼らの見て見ず、聞きて悟らぬ爲なり。一一譬の意は是なり。種は
神の言なり。一二路の傍らなるは、聽きたるのち、惡魔きたり、信
じて救はるる事のなからんために、御言をその心より奪ふ所の人
なり。一三岩の上なるは、聽きて御言を喜び受くれども、根なけれ
ば、暫く信じて嘗試のときに退く所の人なり。一四茨の中に落ち
しは、聽きてのち過ぐるほどに、世の心勞と財貨と快樂とに塞が
れて實らぬ所の人なり。一五良き地なるは、御言を聽き、正しく善
き心にて之を守り、忍びて實を結ぶ所の人なり。一六誰も燈火をと
もし器にて覆ひ、または寢臺の下におく者なし、入り來る者のその
光を見んために、之を燈臺の上に置くなり。一七それ隱れたるもの
の顯れぬはなく、秘めたるものの知られぬはなく、明かにならぬ

はなし。一八されば汝ら聽くこと如何にと心せよ、誰にても有てる
人はなほ與へられ、有たぬ人はその有てりと思ふ物をも取らるべし』
一九さてイエスの母と兄弟と來りたれど、群衆によりて近づくこと
能はず。二〇或人イエスに『なんぢの母と兄弟と、汝に逢はんとて
外に立つ』と告げたれば、二一答へて言ひたまふ『わが母わが兄弟
は、神の言を聽き、かつ行ふ此らの者なり』二二或日イエス弟子た
ちと共に舟に乘りて『みづうみの彼方にゆかん』と言ひ給へば、乃
ち船出す。二三渡るほどにイエス眠りたまふ。颶風みづうみに吹き下
し、舟に水滿ちんとして危かりしかば、二四弟子たち御側により、呼
び起して言ふ『君よ、君よ、我らは亡ぶ』イエス起きて風と浪とを禁
め給へば、ともに鎭りて凪となりぬ。二五かくて弟子たちに言ひ給
ふ『なんぢらの信仰いづこに在るか』かれら懼れ怪しみて互に言ふ
『こは誰ぞ、風と水とに命じ給へば順ふとは』二六遂にガリラヤに對
へるゲラセネ人の地に著く。二七陸に上りたまふ時、その町の人にて
惡鬼に憑かれたる者きたり遇ふ。この人は久しきあひだ衣を著ず、

また家に住まずして墓の中にゐたり。二八イエスを見てさけび、御前
に平伏して大聲にいふ『至高き神の子イエスよ、我は汝と何の關係
あらん、願はくは我を苦しめ給ふな』二九これはイエス穢れし靈に、こ
の人より出で往かんことを命じ給ひしに因る。この人けがれし靈に
しばしば拘へられ、鏈と足械とにて繋ぎ守られたれど、その繋をや
ぶり、惡鬼に逐はれて荒野に往けり。三〇イエス之に『なんぢの名は
何か』と問ひ給へば『レギオン』と答ふ、多くの惡鬼その中に入りた
る故なり。三一彼らイエスに、底なき所に往くを命じ給はざらんこ
とを請ふ。三二彼處の山に、多くの豚の一群、食し居たりしが、惡鬼
ども其の豚に入るを許し給はんことを請ひたれば、イエス許し給ふ。
三三惡鬼、人を出でて豚に入りたれば、その群、崖より湖水に駈け下
りて溺れたり。三四飼ふ者ども此の起りし事を見て、逃げ往きて、町
にも里にも告げたれば、三五人々ありし事を見んとて出で、イエスに
來りて、惡鬼の出でたる人の、衣服をつけ慥なる心にて、イエスの
足下に坐しをるを見て懼れあへり。三六かの惡鬼に憑かれたる人の救

はれし事柄を見し者ども、之を彼らに告げたれば、三七ゲラセネ地方
の民衆、みなイエスに出で去り給はんことを請ふ。これ大に懼れ
たるなり。ここにイエス舟に乘りて歸り給ふ。三八時に惡鬼の出でた
る人、ともに在らんことを願ひたれど、之を去らしめんとて、三九言
ひ給ふ『なんぢの家に歸りて、神が如何に大なる事を汝になし給
ひしかを具に告げよ』彼ゆきて、イエスの如何に大なる事を己に
なし給ひしかを、くその町に言ひ弘めたり。四〇かくてイエスの
歸り給ひしとき、群衆これを迎ふ、みな待ちゐたるなり。四一視よ、
會堂司にてヤイロといふ者あり、來りてイエスの足下に伏し、その
家にきたり給はんことを願ふ。四二おほよそ十二歳ほどの一人娘あ
りて、死ぬばかりなる故なり。イエスの往き給ふとき、群衆かこみ
塞がる。四三ここに十二年このかた血漏を患ひて、醫者の爲に己が
身代をことごとく費したれども、誰にも癒され得ざりし女あり。四
四イエスの後に來りて、御衣の總にさはりたれば、血の出づること
立刻に止みたり。四五イエス言ひ給ふ『我に觸りしは誰ぞ』人みな否

みたれば、ペテロ及び共にをる者ども言ふ『君よ、群衆なんぢを圍
みて押迫るなり』四六イエス言ひ給ふ『われに觸りし者あり、能力の
我より出でたるを知る』四七女おのれが隠れ得ぬことを知り、戰き
來りて御前に平伏し、觸りし故と立刻に癒えたる事を、人々の前に
て告ぐ。四八イエス言ひ給ふ『むすめよ、汝の信仰なんぢを救へり、
安らかに往け』四九かく語り給ふほどに、會堂司の家より人きたり
て言ふ『なんぢの娘は早や死にたり、師を煩はすな』五〇イエス之
を聞きて會堂司に答へたまふ『懼るな、ただ信ぜよ。さらば娘は
救はれん』五一イエス家に到りて、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ及び子の
父母の他は、ともに入ることを誰にも許し給はず。五二人みな泣き、
かつ子のために歎き居たりしが、イエス言ひたまふ『泣くな、死にた
るにあらず、寢ねたるなり』五三人々その死にたるを知れば、イエス
を嘲笑ふ。五四然るにイエス子の手をとり、呼びて『子よ、起きよ』
と言ひ給へば、五五その靈かへりて立刻に起く。イエス食物を之に
與ふることを命じ給ふ。五六その兩親おどろきたり。イエス此の有り

し事を誰にも語らぬやうに命じ給ふ。
第九章 一イエス十二弟子を召し寄せて、もろもろの惡鬼を制し、病
をいやす能力と權威とを與へ、二また神の國を宣傳へしめ、人を醫さ
しむる爲に、之を遣さんとして言ひ給ふ、三『旅のために何をも持
つな、杖も袋も糧も銀も、また二つの下衣をも持つな。四いづれの
家に入るとも、其處に留れ、而して其處より立ち去れ。五人もし汝
らを受けずば、その町を立ち去るとき、證のために足の塵を拂へ』
六ここに弟子たち出でて村々を歴巡り、あまねく福音を宣傳へ、醫す
ことを爲せり。七さて國守ヘロデ、ありし凡ての事をききて周章てま
どふ。或人はヨハネ死人の中より甦へりたりといひ、八或人はエリ
ヤ現れたりといひ、また或人は、古への預言者の一人よみがへりた
りと言へばなり。九ヘロデ言ふ『ヨハネは我すでに首斬りたり、然る
に斯かる事のきこゆる此の人は誰なるか』かくてイエスを見んこと
を求めゐたり。一〇使徒たち歸りきて、其の爲しし事を具にイエス
に告ぐ。イエス彼らを携へて竊にベツサイダといふ町に退きたま

ふ。一一されど群衆これを知りて從ひ來りたれば、彼らを接けて、
神の國の事を語り、かつ治療を要する人々を醫したまふ。一二日傾
きたれば、十二弟子きたりて言ふ『群衆を去らしめ、周圍の村また
里にゆき、宿をとりて食物を求めさせ給へ。我らは斯かる寂しき所
に居るなり』一三イエス言ひ給ふ『なんぢら食物を與へよ』弟子た
ち言ふ『我らただ五つのパンと二つの魚とあるのみ、此の多くの人の
ために、往きて買はねば他に食物なし』一四男おほよそ五千人ゐた
ればなり。イエス弟子たちに言ひたまふ『人々を組にして五十人づ
つ坐せしめよ』一五彼等その如くなして、人々をみな坐せしむ。一六
かくてイエス五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、擘き
て弟子たちに付し、群衆のまへに置かしめ給ふ。一七彼らは食ひて
皆飽く。擘きたる餘を集めしに十二筐ほどありき。一八イエス人々
を離れて祈り居給ふとき、弟子たち偕にをりしに、問ひて言ひたまふ
『群衆は我を誰といふか』一九答へて言ふ『バプテスマのヨハネ、或
人はエリヤ、或人は古への預言者の一人よみがへりたりと言ふ』二〇

イエス言ひ給ふ『なんぢらは我を誰と言ふか』ペテロ答へて言ふ『神
のキリストなり』二一イエス彼らを戒めて、之を誰にも告げぬやう
に命じ、かつ言ひ給ふ二二『人の子は必ず多くの苦難をうけ、長老
・祭司長・學者らに棄てられ、かつ殺され、三日めに甦へるべし』二
三また一同の者に言ひたまふ『人もし我に從ひ來らんと思はば、己
をすて、日々おのが十字架を負ひて我に從へ。二四己が生命を救は
んと思ふ者は之を失ひ、我がために己が生命を失ふその人は之を救
はん。二五人、全世界を贏くとも、己をうしなひ己を損せば、何の
益あらんや。二六我と我が言とを恥づる者をば、人の子もまた、己
と父と聖なる御使たちとの榮光をもて來らん時に恥づべし。二七わ
れ實をもて汝らに告ぐ、此處に立つ者のうちに、神の國を見るまで
は死を味はぬ者どもあり』二八これらの言をいひ給ひしのち八日ば
かり過ぎて、ペテロ、ヨハネ、ヤコブを率きつれ、祈らんとて山に登
り給ふ。二九かくて祈り給ふほどに、御顏の状かはり、其の衣白く
なりて輝けり。三〇視よ、二人の人ありてイエスと共に語る。これ

はモーセとエリヤとにて、三一榮光のうちに現れ、イエスのエルサ
レムにて遂げんとする逝去のことを言ひゐたるなり。三二ペテロ及び
共にをる者いたく睡氣ざしたれど、目を覺してイエスの榮光および
偕に立つ二人を見たり。三三二人の者イエスと別れんとする時、ペテ
ロ、イエスに言ふ『君よ、我らの此處に居るは善し、我ら三つの廬を
造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリヤの爲に
せん』彼は言ふ所を知らざりき。三四この事を言ひ居るほどに、雲お
こりて彼らを覆ふ。雲の中に入りしとき、弟子たち懼れたり。三五雲
より聲出でて言ふ『これは我が選びたる子なり、汝ら之に聽け』三六
聲出でしとき、唯イエスひとり見え給ふ。弟子たち默して、見し事を
何一つ其の頃たれにも告げざりき。三七次の日、山より下りたるに、
大なる群衆イエスを迎ふ。三八視よ、群衆のうちの或人さけびて
言ふ『師よ、願はくは我が子を顧みたまへ、之は我が獨子なり。三九
視よ、靈の憑くときは俄に叫ぶ、痙攣けて沫をふかせ、甚く害ひ、
漸くにして離るるなり。四〇御弟子たちに之を逐ひ出すことを請ひ

たれど、能はざりき』四一イエス答へて言ひ給ふ『ああ信なき曲れる
代なる哉、われ何時まで汝らと偕にをりて、汝らを忍ばん。汝の
子をここに連れ來れ』四二乃ち來るとき、惡鬼これを打ち倒し、甚く
痙攣けさせたり。イエス穢れし靈を禁め、子を醫して、その父に付
したまふ。四三人々みな神の稜威に驚きあへり。人々みなイエスの
爲し給ひし凡ての事を怪しめる時、イエス弟子たちに言ひ給ふ、四四
『これらの言を汝らの耳にをさめよ。人の子は人々の手に付さるべ
し』四五かれら此の言を悟らず、辨へぬやうに隱されたるなり。ま
た此の言につきて問ふことを懼れたり。四六ここに弟子たちの中に、
誰か大ならんとの爭論おこりたれば、四七イエスその心の爭論を知
りて、幼兒をとり御側に置きて言ひ給ふ、四八『おほよそ我が名のた
めに此の幼兒を受くる者は、我を受くるなり。我を受くる者は、我を
遣しし者を受くるなり。汝らの中にて最も小き者は、これ大な
るなり』四九ヨハネ答へて言ふ『君よ、御名によりて惡鬼を逐ひいだ
す者を見しが、我等とともに從はぬ故に、之を止めたり』五〇イエ

ス言ひ給ふ『止むな。汝らに逆はぬ者は、汝らに附く者なり』五
一イエス天に擧げらるる時滿ちんとしたれば、御顔を堅くエルサレム
に向けて進まんとし、五二己に先だちて使を遣したまふ。彼ら往
きてイエスの爲に備をなさんとて、サマリヤ人の或村に入りしに、
五三村人そのエルサレムに向ひて往き給ふさまなるが故に、イエスを
受けず、五四弟子のヤコブ、ヨハネ、これを見て言ふ『主よ、我らが
天より火を呼び下して彼らを滅すことを欲し給ふか』五五イエス顧
みて彼らを戒め、五六遂に相共に他の村に往きたまふ。五七途を往く
とき、或人イエスに言ふ『何處に往き給ふとも我は從はん』五八イエ
ス言ひたまふ『狐は穴あり、空の鳥は塒あり、されど人の子は枕
する所なし』五九また或人に言ひたまふ『我に從へ』かれ言ふ『ま
づ往きて我が父を葬ることを許し給へ』六〇イエス言ひたまふ『死
にたる者に、その死にたる者を葬らせ、汝は往きて神の國を言ひ弘
めよ』六一また或人いふ『主よ、我なんぢに從はん、されど先づ家
の者に別を告ぐることを許し給へ』六二イエス言ひたまふ『手を鋤

につけてのち後を顧みる者は、神の國に適ふ者にあらず』
第一〇章 一この事ののち、主、ほかに七十人をあげて、自ら往かん
とする町々處々へ、おのれに先だち二人づつを遣さんとして言ひ
給ふ、二『收穫はおほく、勞働人は少し。この故に收穫の主に、勞働人
をその收穫場に遣し給はんことを求めよ。三往け、視よ、我なんぢ
らを遣すは、羔羊を豺狼のなかに入るるが如し。四財布も袋も鞋も
携ふな。また途にて誰にも挨拶すな。五孰の家に入るとも、先づ
平安この家にあれと言へ。六もし平安の子そこに居らば、汝らの祝
する平安はその上に留らん。もし然らずば、其の平安は汝らに歸
らん。七その家にとどまりて、與ふる物を食ひ飲みせよ。勞働人のそ
の値を得るは相應しきなり。家より家に移るな。八孰の町に入ると
も、人々なんぢらを受けなば、汝らの前に供ふる物を食し、九其處
にをる病のものを醫し、また「神の國は汝らに近づけり」と言へ。
一〇孰の町に入るとも、人々なんぢらを受けずば、大路に出でて、一一
「我らの足につきたる汝らの町の塵をも、汝らに對して拂ひ棄つ、

されど神の國の近づけるを知れ」と言へ。一二われ汝らに告ぐ、か
の日にはソドムの方その町よりも耐へ易からん。一三禍害なる哉、コ
ラジンよ、禍害なる哉、ベツサイダよ、汝らの中にて行ひたる能力
ある業を、ツロとシドンとにて行ひしならば、彼らは早く荒布をき、
灰のなかに坐して、悔改めしならん。一四されば審判には、ツロとシ
ドンとのかた汝等よりも耐へ易からん。一五カペナウムよ、汝は天
にまで擧げらるべきか、黄泉にまで下らん。一六汝等に聽く者は我
に聽くなり、汝らを棄つる者は我を棄つるなり。我を棄つる者は我
を遣し給ひし者を棄つるなり』一七七十人よろこび歸りて言ふ『主
よ、汝の名によりて惡鬼すら我らに服す』一八イエス彼らに言ひ給
ふ『われ天より閃く電光のごとくサタンの落ちしを見たり。一九視
よ、われ汝らに蛇・蠍を踏み、仇の凡ての力を抑ふる權威を授け
たれば、汝らを害ふもの斷えてなからん。二〇されど靈の汝らに
服するを喜ぶな、汝らの名の天に録されたるを喜べ』二一その時
イエス聖靈により喜びて言ひたまふ『天地の主なる父よ、われ感謝

す、此等のことを智きもの慧き者に隱して、嬰兒に顯したまへり。
父よ、然り、此のごときは御意に適へるなり。二二凡ての物は我わが
父より委ねられたり。子の誰なるを知る者は、父の外になく、父の誰
なるを知る者は、子また子の欲するままに顯すところの者の外にな
し』二三かくて弟子たちを顧み竊に言ひ給ふ『なんぢらの見る所
を見る眼は幸福なり。二四われ汝らに告ぐ、多くの預言者も、王も、
汝らの見るところを見んと欲したれど見ず、汝らの聞く所を聞か
んと欲したれど聞かざりき』二五視よ、或教法師、立ちてイエスを試
みて言ふ『師よ、われ永遠の生命を嗣ぐためには何をなすべきか』二
六イエス言ひたまふ『律法に何と録したるか、汝いかに讀むか』二
七答へて言ふ『なんぢ心を盡し精神を盡し、力を盡し、思を盡し
て、主たる汝の神を愛すべし。また己のごとく汝の隣を愛すべ
し』二八イエス言ひ給ふ『なんぢの答は正し。之を行へ、さらば生
くべし』二九彼おのれを義とせんとしてイエスに言ふ『わが隣とは
誰なるか』三〇イエス答へて言ひたまふ『或人エルサレムよりエリコ

に下るとき強盗にあひしが、強盗どもその衣を剥ぎ、傷を負はせ、之
半死半生にして棄て去りぬ。三一或祭司たまたま此の途より下り、之
を見てかなたを過ぎ往けり。三二又レビ人も此處にきたり、之を見て
同じく彼方を過ぎ往けり三三然るに或るサマリヤ人、旅して其の許に
きたり、之を見て憫み、三四近寄りて油と葡萄酒とを注ぎ、傷を包
みて己が畜にのせ、旅舍に連れゆきて介抱し、三五あくる日デナリ
二つを出し、主人に與へて「この人を介抱せよ。費もし増さば、我
が歸りくる時に償はん」と言へり。三六汝いかに思ふか、此の三人
のうち、孰か強盗にあひし者の隣となりしぞ』三七かれ言ふ『その
人に憐憫を施したる者なり』イエス言ひ給ふ『なんぢも往きて其の
如くせよ』三八かくて彼ら進みゆく間に、イエス或村に入り給へば、
マルタと名づくる女おのが家に迎へ入る。三九その姉妹にマリヤと
いふ者ありて、イエスの足下に坐し、御言を聽きをりしが、四〇マル
タ饗應のこと多くして心いりみだれ、御許に進みよりて言ふ『主よ、
わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思ひ給はぬか、彼

に命じて我を助けしめ給へ』四一主、答へて言ひ給ふ『マルタよ、マ
ルタよ、汝さまざまの事により、思ひ煩ひて心勞す。四二されど
無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善きかたを選び
たり。此は彼より奪ふべからざるものなり』
第一一章 一イエス或處にて祈り居給ひしが、その終りしとき、弟子
の一人いふ『主よ、ヨハネの其の弟子に教へし如く、祈ることを我ら
に教へ給へ』二イエス言ひ給ふ『なんぢら祈るときに斯く言へ「父よ、
願はくは御名の崇められん事を。御國の來らん事を。三我らの日用の
糧を日毎に與へ給へ。四我らに負債ある凡ての者を我ら免せば、我ら
の罪をも免し給へ。我らを嘗試にあはせ給ふな」』五また言ひ給ふ『な
んぢらの中たれか友あらんに、夜半にその許に往きて「友よ、我に
三つのパンを貸せ。六わが友、旅より來りしに、之に供ふべき物な
し」と言ふ時、七かれ内より答へて「われを煩はすな、戸ははや閉
ぢ、子らは我と共に臥所にあり、起ちて與へ難し」といふ事ありと
も、八われ汝らに告ぐ、友なるによりては起ちて與へねど、求の切

なるにより、起きて其の要する程のものを與へん。九われ汝らに告
ぐ、求めよ、さらば與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩
け、さらば開かれん。一〇すべて求むる者は得、尋ぬる者は見出し、
門を叩く者は開かるるなり。一一汝等のうち父たる者、たれか其の
子魚を求めんに、魚の代に蛇を與へ、一二卵を求めんに蠍を與へ
んや。一三さらば汝ら惡しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふ
るを知る。まして天の父は、求むる者に聖靈を賜はざらんや』一四さ
てイエス唖の惡鬼を逐ひいだし給へば、惡鬼いでて唖もの言ひし
により、群衆あやしめり。一五其の中の或者ども言ふ『かれは惡鬼
の首ベルゼブルによりて惡鬼を逐ひ出すなり』一六また或者どもは、
イエスを試みんとて天よりの徴を求む。一七イエスその思を知り
て言ひ給ふ『すべて分れ争ふ國は亡び、分れ争ふ家は倒る。一八サ
タンもし分れ争はば、その國いかで立つべき。汝等わが惡鬼を逐ひ
出すを、ベルゼブルに由ると言へばなり。一九我もしベルゼブルによ
りて惡鬼を逐ひ出さば、汝らの子は誰によりて之を逐ひ出すか。こ

の故に彼らは汝らの審判人となるべし。二〇されど我もし神の指に
よりて惡鬼を逐ひ出さば、神の國は既に汝らに到れるなり。二一強
きもの武具をよろひて己が屋敷を守るときは、其の所有安全なり。二
二されど更に強きもの來りて之に勝つときは、恃とする武具をこと
ごとく奪ひて、分捕物を分たん。二三我と偕ならぬ者は我にそむき、
我と共に集めぬ者は散すなり。二四穢れし靈、人を出づる時は、水な
き處を巡りて休を求む。されど得ずして言ふ「わが出でし家に歸ら
ん」二五歸りて其の家の掃き淨められ、飾られたるを見、二六遂に往き
て己よりも惡しき他の七つの靈を連れきたり、共に入りて此處に住
む。されば其の人の後の状は、前よりも惡しくなるなり』二七此等の
ことを言ひ給ふとき、群衆の中より或女、聲をあげて言ふ『幸福な
るかな、汝を宿しし胎、なんぢの哺ひし乳房は』二八イエス言ひたま
ふ『更に幸福なるかな、神の言を聽きて之を守る人は』二九群衆お
し集れる時、イエス言ひ出でたまふ『今の世は邪曲なる代にして徴
を求む。されどヨナの徴のほかに徴は與へられじ。三〇ヨナがニネ

べの人に徴となりし如く、人の子もまた今の代に然らん。三一南の
女王、審判のとき、今の代の人と共に起きて之が罪を定めん。彼はソ
ロモンの智慧を聽かんとて地の極より來れり。視よ、ソロモンよりも
勝るもの此處にあり。三二ネベの人、審判のとき、今の代の人と共
に立ちて之が罪を定めん。彼らはヨナの宣ぶる言によりて悔改め
たり。視よ、ヨナよりも勝るもの此處に在り。三三誰も燈火をともし
て、穴藏の中または升の下におく者なし。入り來る者の光を見んた
めに、燈臺の上に置くなり。三四汝の身の燈火は目なり、汝の目正
しき時は、全身明るからん。されど惡しき時は、身もまた暗からん。
三五この故に汝の内の光、闇にはあらぬか、省みよ。三六もし汝
の全身明るくして暗き所なくば、輝ける燈火に照さるる如く、その
身全く明るからん』三七イエスの語り給へるとき、或パリサイ人そ
の家にて食事し給はん事を請ひたれば、入りて席に著きたまふ。三八
食事前に手を洗ひ給はぬを、此のパリサイ人見て怪しみたれば、三九
主これに言ひたまふ『今や汝らパリサイ人は、酒杯と盆との外を潔

くす、されど汝らの内は貪慾と惡とにて滿つるなり。四〇愚なる者
よ、外を造りし者は、内をも造りしならずや。四一唯その内にある物
を施せ。さらば一切の物なんぢらの爲に潔くなるなり。四二禍害な
るかな、パリサイ人よ、汝らは薄荷・芸香その他あらゆる野菜の十分
の一を納めて、公平と神に對する愛とを等閑にす、されど之は行ふ
べきものなり。而して彼もまた等閑にすべきものならず。四三禍害な
るかな、パリサイ人よ、汝らは會堂の上座、市場にての敬禮を喜
ぶ。四四禍害なるかな、汝らは露れぬ墓のごとし。其の上を歩む人
これを知らぬなり』四五教法師の一人、答へて言ふ『師よ、斯かるこ
とを言ふは、我らをも辱しむるなり』四六イエス言ひ給ふ『なんぢら
教法師も禍害なる哉。なんぢら擔ひ難き荷を人に負せて、自ら指一
つだに其の荷につけぬなり。四七禍害なるかな、汝らは預言者たち
の墓を建つ、之を殺しし者は汝らの先祖なり。四八げに汝らは先祖
の所作を可しとする證人ぞ。それは彼らは之を殺し、汝らは其の墓
を建つればなり。四九この故に神の智慧いへる言あり、われ預言者

と使徒とを彼らに遣さんに、その中の或者を殺し、また逐ひ苦しめ
ん。五〇世の創より流されたる凡ての預言者の血、五一即ちアベル
の血より、祭壇と聖所との間にて殺されたるザカリヤの血に至るま
でを、今の代に糺すべきなり。然り、われ汝らに告ぐ、今の代は糺
さるべし。五二禍害なるかな教法師よ、なんぢらは知識の鍵を取り去
りて自ら入らず、入らんとする人をも止めしなり』五三此處より出
で給へば、學者・パリサイ人ら烈しく詰め寄せて、様々のことを詰り
はじめ、五四その口より何事をか捉へんと待構へたり。

第一二章一その時、無數の人あつまりて、群衆ふみ合ふばかりな
り。イエスまづ弟子たちに言ひ出で給ふ『なんぢら、パリサイ人の
パンだねに心せよ、これ僞善なり。二蔽はれたるものに露れぬは
なく、隱れたるものに知られぬはなし。三この故に汝らが暗きにて
言ふことは、明るきにて聞え、部屋の内にて耳によりて語りしこと
は、屋の上にて宣べらるべし。四我が友たる汝らに告ぐ。身を殺し
て後に何をも爲し得ぬ者どもを懼るな。五懼るべきものを汝らに示

さん。殺したる後ゲヘナに投げ入るる權威ある者を懼れよ。われ汝
らに告ぐ、げに之を懼れよ。六五羽の雀は二錢にて賣るにあらずや、
然るに其の一羽だに神の前に忘れらるる事なし。七汝らの頭の髪ま
でもみな數へらる。懼るな、汝らは多くの雀よりも優るるなり。八
われ汝らに告ぐ、凡そ人の前に我を言ひあらはす者を、人の子もま
た神の使たちの前にて言ひあらはさん。九されど人の前にて我を否
む者は、神の使たちの前にて否まれん。一〇凡そ言をもて人の子
に逆ふ者は赦されん。されど聖靈を　すものは赦されじ。一一人な
んぢらを會堂、或は司、あるひは權威ある者の前に引きゆかん時
、いかに何を答へ、または何を言はんと思ひ煩ふな。一二聖靈その
とき言ふべきことを教へ給はん』一三群衆のうちの或人いふ『師よ、
わが兄弟に命じて、嗣業を我に分たしめ給へ』一四之に言ひたまふ
『人よ、誰が我を立てて汝らの裁判人また分配者とせしぞ』一五かく
て人々に言ひたまふ『愼みて凡ての慳貪をふせげ、人の生命は所有
の豐なるには因らぬなり』一六また譬を語りて言ひ給ふ『ある富め

る人、その畑豐に實りたれば、一七心の中に議りて言ふ「われ如何
にせん、我が作物を藏めおく處なし」一八遂に言ふ「われ斯く爲さ
ん、わが倉を毀ち、更に大なるものを建てて、其處にわが穀物および
善き物をことごとく藏めん。一九かくてわが靈魂に言はん、靈魂よ、
多年を過すに足る多くの善き物を貯へたれば、安んぜよ、飲食せよ、
樂しめよ」二〇然るに神かれに「愚なる者よ、今宵なんぢの靈魂と
らるべし、さらば汝の備へたる物は、誰がものとなるべきぞ」と言
ひ給へり。二一己のために財を貯へ、神に對して富まぬ者は斯く
のごとし』二二また弟子たちに言ひ給ふ『この故にわれ汝らに告ぐ、
何を食はんと生命のことを思ひ煩ひ、何を著んと體のことを思ひ
煩ふな。二三生命は糧にまさり、體は衣に勝るなり。二四鴉を思
ひ見よ、播かず、刈らず、納屋も倉もなし。然るに神は之を養ひたま
ふ、汝ら鳥に優ること幾許ぞや。二五汝らの中たれか思ひ煩ひ
て、身の長一尺を加へ得んや。二六されば最小き事すら能はぬに、
何ぞ他のことを思ひ煩ふか。二七百合を思ひ見よ、紡がず、織らざ

るなり。されど我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、其
の服裝この花の一つにも及かざりき。二八今日ありて、明日爐に投げ
入れらるる野の草をも、神は斯く裝ひ給へば、況て汝らをや、あ
あ信仰うすき者よ、二九なんぢら何を食ひ何を飮まんと求むな、また
心を動かすな。三〇是みな世の異邦人の切に求むる所なれど、汝
らの父は、此等の物のなんぢらに必要なるを知り給へばなり。三一た
だ父の御國を求めよ。さらば此等の物は、なんぢらに加へらるべし。
三二懼るな、小き群よ、なんぢらに御國を賜ふことは、汝らの父の
御意なり。三三汝らの所有を賣りて施濟をなせ。己がために舊びぬ
財布をつくり、盡きぬ財寶を天に貯へよ。かしこは盜人も近づかず、
蟲も壞らぬなり、三四汝らの財寶のある所には、汝らの心もある
べし。三五なんぢら腰に帶し、燈火をともして居れ。三六主人、婚筵
より歸り來りて戸を叩かば、直ちに開くために待つ人のごとくなれ。
三七主人の來るとき、目を覺しをるを見らるる僕どもは幸福なるか
な。われ誠に汝らに告ぐ、主人帶して其の僕どもを食事の席に就

かせ、進みて給仕すべし。三八主人、夜の半ごろ若くは夜の明くる
頃に來るとも、かくの如くなるを見らるる僕どもは幸福なり。三九
なんぢら之を知れ、家主もし盜人いづれの時來るかを知らば、その
家を穿たすまじ。四〇汝らも備へをれ。人の子は思はぬ時に來れば
なり』四一ペテロ言ふ『主よ、この譬を言ひ給ふは我らにか、また凡
ての人にか』四二主いひ給ふ『主人が時に及びて僕どもに定の糧を
與へさする爲に、その僕どもの上に立つる忠實にして慧き支配人は
誰なるか、四三主人のきたる時、かく爲し居るを見らるる僕は幸福
なるかな。四四われ實をもて汝らに告ぐ、主人すべての所有を彼に
掌どらすべし。四五若しその僕、心のうちに、主人の來るは遲し
と思ひ、僕・婢女をたたき、飮食して醉ひ始めなば、四六その僕の
主人、おもはぬ日知らぬ時に來りて、之を烈しく笞うち、その報を
不忠者と同じうせん。四七主人の意を知りながら用意せず、又その
意に從はぬ僕は、笞うたるること多からん。四八されど知らずし
て打たるべき事をなす者は、笞うたるること少からん。多く與へ

らるる者は、多く求められん。多く人に托くれば、更に多くその人
より請ひ求むべし。四九我は火を地に投ぜんとて來れり。此の火すで
に燃えたらんには、我また何をか望まん。五〇されど我には受くべき
バプテスマあり。その成し遂げらるるまでは、思ひ逼ること如何ば
かりぞや。五一われ地に平和を與へんために來ると思ふか。われ汝
らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。五二今よりのち一家に五人あら
ば、三人は二人に、二人は三人に分れ争はん。五三父は子に、子は
父に、母は娘に、娘は母に、姑は嫁に、嫁は姑に分れ争はん』
五四イエスまた群衆に言ひ給ふ『なんぢら雲の西より起るを見れば、
直ちに言ふ「急雨きたらん」と、果して然り。五五また南風ふけば、
汝等いふ「強き暑あらん」と、果して然り。五六僞善者よ、汝ら
天地の氣色を辨ふることを知りて、今の時を辨ふること能はぬは
何ぞや。五七また何故みづから正しき事を定めぬか。五八なんぢ訴ふ
る者とともに司に往くとき、途にて和解せんことを力めよ。恐らく
は訴ふる者なんぢを審判人に引きゆき、審判人なんぢを下役にわた

し、下役なんぢを獄に投げ入れん。五九われ汝に告ぐ、一レプタも
殘りなく償はずば、其處に出づること能はじ』
第一三章一その折しも或人々きたりて、ピラトがガリラヤ人らの血
を彼らの犧牲にまじへたりし事をイエスに告げたれば、二答へて言ひ
給ふ『かのガリラヤ人は斯かることに遭ひたる故に、凡てのガリラ
ヤ人に勝れる罪人なりしと思ふか。三われ汝らに告ぐ、然らず、汝
らも悔改めずば皆おなじく亡ぶべし。四又シロアムの櫓たふれて、
壓し殺されし十八人は、エルサレムに住める凡ての人に勝りて、罪
の負債ある者なりしと思ふか。五われ汝らに告ぐ、然らず、汝らも
悔改めずば、みな斯くのごとく亡ぶべし』六又この譬を語りたまふ
『或人おのが葡萄園に植ゑありし無花果の樹に來りて、果を求むれど
も得ずして、七園丁に言ふ「視よ、われ三年きたりて此の無花果の
樹に果を求むれども得ず。これを伐り倒せ、何ぞ徒らに地を塞ぐか」
八答へて言ふ「主よ、今年も容したまへ、我その周圍を掘りて肥料せ
ん。九そののち果を結ばば善し、もし結ばずば伐り倒したまへ」』一

〇イエス安息日に或會堂にて教えたまふ時、一一視よ、十八年のあ
ひだ病の靈に憑かれたる女あり、屈まりて少しも伸ぶること能は
ず。一二イエスこの女を見、呼び寄せて『女よ、なんぢは病より
解かれたり』と言ひ、一三之に手を按きたまへば、立刻に身を直に
して神を崇めたり。一四會堂司イエスの安息日に病を醫し給ひし
ことを憤ほり、答へて群衆に言ふ『働くべき日は六日あり、その
間に來りて醫されよ。安息日には爲ざれ』一五主こたへて言ひたま
ふ『僞善者らよ、汝等おのおの安息日には、己が牛または驢馬を小屋
より解きいだし、水飼はんとて牽き往かぬか。一六さらば長き十八年
の間サタンに縛られたるアブラハムの娘なる此の女は、安息日に
その繋より解かるべきならずや』一七イエス此等のことを言ひ給へ
ば、逆ふ者はみな恥ぢ、群衆は擧りてその爲し給へる榮光ある凡
ての業を喜べり。一八かくてイエス言ひたまふ『神の國は何に似た
るか、我これを何に擬へん、一九一粒の芥種のごとし。人これを取
りて己の園に播きたれば、育ちて樹となり、空の鳥その枝に宿れり』

二〇また言ひたまふ『神の國を何に擬へんか、二一パン種のごとし。
女これを取りて、三斗の粉の中に入るれば、ことごとく脹れいだす
なり』二二イエス教へつつ町々村々を過ぎて、エルサレムに旅し給ふ
とき、二三或人いふ『主よ、救はるる者は少きか』二四イエス人々に
言ひたまふ『力を盡して狭き門より入れ。我なんぢらに告ぐ、入ら
ん事を求めて入り能はぬ者おほからん。二五家主おきて門を閉ぢた
る後、なんぢら外に立ちて「主よ、我らに開き給へ」と言ひつつ門を
叩き始めんに、主人こたへて「われ汝らが何處の者なるかを知らず」
と言はん。二六その時「われらは御前にて飲食し、なんぢは、我らの
町の大路にて教へ給へり」と言ひ出でんに、二七主人こたへて「われ
汝らが何處の者なるかを知らず、惡をなす者どもよ、皆われを離れ
去れ」と言はん。二八汝らアブラハム、イサク、ヤコブ及び凡ての
預言者の、神の國に居り、己らの逐ひ出さるるを見ば、其處にて哀哭
・切齒する事あらん。二九また人々、東より西より南より北より來
りて、神の國の宴に就くべし。三〇視よ、後なる者の先になり、先な

る者の後になる事あらん』三一そのとき或パリサイ人らイエスに來り
て言ふ『いでて此處を去り給へ、ヘロデ汝を殺さんとす』三二答へ
て言ひ給ふ『往きてかの狐に言へ。視よ、われ今日明日、惡鬼を逐
ひ出し、病を醫し、而して三日めに全うせられん。三三されど今日
も明日も次の日も我は進み往くべし。それ預言者のエルサレムの外
にて死ぬることは有るまじきなり。三四噫エルサレム、エルサレム、
預言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて撃つ者よ、牝鷄の己が
雛を翼のうちに集むるごとく、我なんぢの子どもを集めんとせしこ
と幾度ぞや。されど汝らは好まざりき。三五視よ、汝らの家は棄て
られて汝らに遺らん。我なんぢらに告ぐ、「讃むべきかな、主の名に
よりて來る者」と、汝らの言ふ時の至るまでは、我を見ざるべし』

第一四章

一イエス安息日に食事せんとて、或パリサイ人の頭の家
に入り給へば、人々これを窺ふ。二視よ、御前に水腫をわづらふ人
ゐたれば、三イエス答へて教法師とパリサイ人とに言ひたまふ『安息
日に人を醫すことは善しや、否や』四かれら默然たり。イエスその人

を執り、醫して去らしめ、五且かれらに言ひ給ふ『なんぢらの中その
子あるひは其の牛、井に陷らんに、安息日には直ちに之を引揚げぬ
者あるか』六彼等これに對して物言ふこと能はず。七イエス招かれた
る者の上席をえらぶを見、譬をかたりて言ひ給ふ、八『なんぢ婚筵
に招かるるとき、上席に著くな。恐らくは汝よりも貴き人の招か
れんに、九汝と彼とを招きたる者きたりて「この人に席を讓れ」と
言はん。さらば其の時なんぢ恥ぢて末席に往きはじめん。一〇招かる
るとき、寧ろ往きて末席に著け、さらば招きたる者きたりて「友よ、
上に進め」と言はん。その時なんぢ同席の者の前に譽あるべし。一
一凡そおのれを高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせ
らるるなり』一二また己を招きたる者にも言ひ給ふ『なんぢ晝餐ま
たは夕餐を設くるとき、朋友・兄弟・親族・富める隣人などをよぶ
な。恐らくは彼らも亦なんぢを招きて報をなさん。一三饗宴を設く
る時は、寧ろ貧しき者・不具・跛者・盲人などを招け。一四彼らは報
ゆること能はぬ故に、なんぢ幸福なるべし。正しき者の復活の時に

報いらるるなり』一五同席の者の一人これらの事を聞きてイエスに言
ふ『おほよそ神の國にて食事する者は幸福なり』一六之に言ひたまふ
『或人、盛なる夕餐を設けて、多くの人を招く。一七夕餐の時いたり
て、招きおきたる者の許に僕を遣して「來れ、既に備りたり」と言
はしめたるに、一八皆ひとしく辭りはじむ。初の者いふ「われ田地
を買へり。往きて見ざるを得ず。請ふ、許されんことを」一九他の者
いふ「われ五軛の牛を買へり、之を驗すために往くなり。請ふ、許
されんことを」二〇また他も者いふ「われ妻を娶れり、此の故に往く
こと能はず」二一僕かへりて此等の事をその主人に告ぐ、家主いか
りて僕に言ふ「とく町の大路と小路とに往きて、貧しき者・不具者
・盲人・跛者などを此處に連れきたれ」二二僕いふ「主よ、仰のご
とく爲したれど、尚ほ餘の席あり」二三主人、僕に言ふ「道や籬
の邊にゆき、人々を強ひて連れきたり、我が家に充たしめよ。二四
われ汝らに告ぐ、かの招きおきたる者のうち、一人だに我が夕餐を
味ひ得る者なし」』二五さて大なる群衆イエスに伴ひゆきたれば、

顧みて之に言ひたまふ、二六『人もし我に來りて、その父母・妻子・
兄弟・姉妹・己が生命までも憎まずば、我が弟子となるを得ず。二七
また己が十字架を負ひて我に從ふ者ならでは、我が弟子となるを得
ず。二八汝らの中たれか櫓を築かんと思はば、先づ坐して其の費
をかぞへ、己が所有、竣工までに足るか否かを計らざらんや。二九
然らずして基を据ゑ、もし成就すること能はずば、見る者みな嘲笑
ひて、三〇「この人は築きかけて成就すること能はざりき」と言は
ん。三一又いづれの王か出でて他の王と戰爭をせんに、先づ坐して、
此の一萬人をもて、かの二萬人を率ゐきたる者に對ひ得るか否か籌ら
ざらんや。三二もし及かずば、敵なほ遠く隔るうちに、使を遣し
て和睦を請ふべし。三三かくのごとく、汝らの中その一切の所有を
退くる者ならでは、我が弟子となるを得ず。三四鹽は善きものなり、
然れど鹽もし效力を失はば、何によりてか味つけられん。三五土に
も肥料にも適せず、外に棄てらるるなり。聽く耳ある者は聽くべし』
第一五章一取稅人、罪人ども、みな御言を聽かんとて近寄りたれば、

二パリサイ人・學者ら呟きて言ふ、『この人は罪人を迎へて食を共に
す』三イエス之に譬を語りて言ひ給ふ、四『なんぢらの中たれか百匹
の羊を有たんに、若その一匹を失はば、九十九匹を野におき、往
きて失せたる者を見出すまでは尋ねざらんや。五遂に見出さば、喜
びて之を己が肩にかけ、六家に歸りて其の友と隣人とを呼び集めて
言はん「我とともに喜べ、失せたる我が羊を見出せり」七われ汝
らに告ぐ、かくのごとく悔改むる一人の罪人のためには、悔改の
必要なき九十九人の正しき者にも勝りて、天に歡喜あるべし。八又い
づれの女か銀貨十枚を有たんに、若しその一枚を失はば、燈火をと
もし、家を掃きて見出すまでは懇ろに尋ねざらんや。九遂に見出さ
ば、其の友と隣人とを呼び集めて言はん、「我とともに喜べ、わが
失ひたる銀貨を見出せり」一〇われ汝らに告ぐ、かくのごとく悔改
むる一人の罪人のために、神の使たちの前に歡喜あるべし』一一ま
た言ひたまふ『或人に二人の息子あり、一二弟、父に言ふ「父よ、
財産のうち我が受くべき分を我にあたへよ」父その身代を二人に分け

あたふ。一三幾日も經ぬに、弟おのが物をことごとく集めて、遠國
にゆき、其處にて放蕩にその財産を散せり。一四ことごとく費した
る後、その國に大なる饑饉おこり、自ら乏しくなり始めたれば、一
五往きて其の地の或人に依附りしに、其の人かれを畑に遣して豚を
飼はしむ。一六かれ豚の食ふ蝗豆にて、己が腹を充さんと思ふ程な
れど、何をも與ふる人なかりき。一七此のとき我に反りて言ふ『わが
父の許には食物あまれる雇人いくばくぞや、然るに我は飢ゑてこ
の處に死なんとす。一八起ちて我が父にゆき「父よ、われは天に對
し、また汝の前に罪を犯したり。一九今より汝の子と稱へらるるに
相應しからず、雇人の一人のごとく爲し給へ』と言はん」二〇乃ち
起ちて其の父のもとに往く。なほ遠く隔りたるに、父これを見て憫
み、走りゆき、其の頸を抱きて接吻せり。二一子、父にいふ「父よ、
我は天に對し又なんぢの前に罪を犯したり。今より汝の子と稱へら
るるに相應しからず」二二されど父、僕どもに言ふ「とくとく最上
の衣を持ち來りて之に著せ、その手に指輪をはめ、其の足に鞋をは

かせよ。二三また肥えたる犢を牽ききたりて屠れ、我ら食して樂し
まん。二四この我が子、死にて復生き、失せて復得られたり」かくて
彼ら樂しみ始む。二五然るに其の兄、畑にありしが、歸りて家に近づ
きたるとき、音樂と舞踏との音を聞き、二六僕の一人を呼びてその
何事なるかを問ふ。二七答へて言ふ「なんぢの兄弟歸りたり、その
恙なきを迎へたれば、汝の父肥えたる犢を屠れるなり」二八兄怒
りて内に入ることを好まざりしかば、父いでて勸めしに、二九答へて
父に言ふ「視よ、我は幾歳もなんぢに仕へて、未だ汝の命令に背き
し事なきに、我には小山羊一匹だに與へて友と樂しましめし事なし。
三〇然るに遊女らと共に、汝の身代を食ひ盡したる此の汝の子歸り
來れば、之がために肥えたる犢を屠れり」三一父いふ「子よ、なん
ぢは常に我とともに在り、わが物は皆なんぢの物なり。三二されど此
の汝の兄弟は死にて復生き、失せて復得られたれば、我らの樂しみ
喜ぶは當然なり」』

第一六章
一イエスまた弟子たちに言ひ給ふ『或富める人に一人の

支配人あり、主人の所有を費しをりと訴へられたれば、二主人かれ
を呼びて言ふ「わが汝につきて聞く所は、これ何事ぞ、務の報告
をいだせ、汝こののち支配人たるを得じ」三支配人、心のうちに言ふ
「如何にせん、主人わが職を奪ふ。われ土掘るには力なく、物乞ふ
は恥かし。四我なすべき事こそ知りたれ、斯く職を罷めらるる
とき、人々その家に我を迎ふるならん」とて、五主人の負債者を一人
一人呼びよせて、初の者に言ふ「なんぢ我が主人より負ふところ何
程あるか」六答へて言ふ「油、百樽」支配人いふ「なんぢの證書を
とり、早く坐して五十と書け」七又ほかの者に言ふ「負ふところ何程
あるか」答へて言ふ「麥、百石」支配人いふ「なんぢの證書をとり
て八十と書け」八ここに主人、不義なる支配人の爲しし事の巧なる
によりて、彼を譽めたり。この世の子らは、己が時代の事には光の
子らよりも巧なり。九われ汝らに告ぐ、不義の富をもて、己がため
に友をつくれ。さらば富の失する時、その友なんぢらを永遠の住居
に迎へん。一〇小事に忠なる者は大事にも忠なり。小事に不忠な

る者は大事にも不忠なり。一一さらば汝等もし不義の富に忠なら
ずば、誰か眞の富を汝らに任すべき。一二また汝等もし人のもの
に忠ならずば、誰か汝等のものを汝らに與ふべき。一三僕は二人
の主に兼ね事ふること能はず、或は之を憎み彼を愛し、或は之に親
しみ彼を輕しむべければなり。汝ら神と富とに兼ね事ふること能は
ず』一四ここに慾深きパリサイ人ら、この凡ての事を聞きてイエスを
嘲笑ふ。一五イエス彼らに言ひ給ふ『なんぢらは人のまへに己を義
とする者なり。されど神は汝らの心を知りたまふ。人のなかに尊
ばるる者は、神のまへに憎まるる者なり。一六律法と預言者とはヨハ
ネまでなり、その時より神の國は宣傳へられ、人みな烈しく攻めて之
に入る。一七されど律法の一畫の落つるよりも、天地の過ぎ往くは易
し。一八凡てその妻を出して、他に娶る者は、姦淫を行ふなり。ま
た夫より出されたる女を娶る者も、姦淫を行ふなり。一九或富め
る人あり、紫色の衣と細布とを著て、日々奢り樂しめり。二〇又ラ
ザロといふ貧しき者あり、腫物にて腫れただれ、富める人の門に置

かれ、二一その食卓より落つる物にて飽かんと思ふ。而して犬ども
來りて其の腫物を舐れり。二二遂にこの貧しきもの死に、御使たちに
携へられてアブラハムの懷裏に入れり。富める人もまた死にて葬
られしが、二三黄泉にて苦惱の中より目を擧げて、遙にアブラハム
と其の懷裏にをるラザロとを見る。二四乃ち呼びて言ふ「父アブラ
ハムよ、我を憐みて、ラザロを遣し、その指の先を水に浸して我が
舌を冷させ給へ、我はこの焰のなかに悶ゆるなり」二五アブラハム
言ふ「子よ、憶へ、なんぢは生ける間なんぢの善き物を受け、ラザ
ロは惡しき物を受けたり。今ここにて彼は慰められ、汝は悶ゆる
なり。二六然のみならず、此處より汝らに渡り往かんとすとも得ず、
其處より我らに來り得ぬために、我らと汝らとの間に大なる淵定
めおかれたり」二七富める人また言ふ「さらば父よ、願はくは我が父
の家にラザロを遣したまへ。二八我に五人の兄弟あり、この苦痛の
ところに來らぬよう、彼らに證せしめ給へ」二九アブラハム言ふ「彼
らにはモーセと預言者とあり、之に聽くべし」三〇富める人いふ「い

な、父アブラハムよ、もし死人の中より彼らに往く者あらば、悔改
めん」三一アブラハム言ふ「もしモーセと預言者とに聽かずば、たと
ひ死人の中より甦へる者ありとも、其の勸を納れざるべし」』
第一七章一イエス弟子たちに言ひ給ふ『躓物は必ず來らざるを得
ず、されど之を來らす者は禍害なるかな。二この小き者の一人を躓
かするよりは、寧ろ碾臼の石を頸に懸けられて、海に投げ入れられ
んかた善きなり。三汝等みづから心せよ。もし汝の兄弟罪を犯さ
ば、これを戒めよ。もし悔改めなば之をゆるせ。四もし一日に七度
なんぢに罪を犯し、七たび「悔改む」と言ひて、汝に歸らば之を
ゆるせ』五使徒たち主に言ふ『われらの信仰を增したまへ』六主いひ
給ふ『もし芥種一粒ほどの信仰あらば、此の桑の樹に「拔けて海に
植れ」と言ふとも汝らに從ふべし。七汝等のうち誰か或は耕し、
或は牧する僕を有たんに、その僕畑より歸りたる時、これに對ひ
て「直ちに來り食に就け」と言ふ者あらんや。八反つて「わが夕餐
の備をなし、我が飲食するあひだ、帶して給仕せよ、然る後に、な

んぢ飲食すべし」と言ふにあらずや。九僕、命ぜられし事を爲した
ればとて、主人これに謝すべきか。一〇かくのごとく汝らも命ぜら
れし事をことごとく爲したる時「われらは無益なる僕なり、爲すべ
き事を爲したるのみ」と言へ』一一イエス、エルサレムに往かんとて、
サマリヤとガリラヤとの間をとほり、一二或村に入り給ふとき、十
人の癩病人これに遇ひて、遙に立ち止り、一三聲を揚げて言ふ『君
イエスよ、我らを憫みたまへ』一四イエス之を見て言ひたまふ『な
んぢら往きて身を祭司らに見せよ』彼ら往く間に潔められたり。一
五その中の一人、おのが醫されたるを見て、大聲に神を崇めつつ歸り
きたり、一六イエスの足下に平伏して謝す。これはサマリヤ人なり。
一七イエス答へて言ひたまふ『十人みな潔められしならずや、九人は
何處に在るか。一八この他國人のほかは、神に榮光を歸せんとて歸
りきたる者なきか』一九かくて之に言ひたまふ『起ちて往け、なんぢ
の信仰なんぢを救へり』二〇神の國の何時きたるべきかをパリサイ人
に問はれし時、イエス答へて言ひたまふ『神の國は見ゆべき状にて

來らず。二一また「視よ、此處に在り」「彼處に在り」と人々言はざ
るべし。視よ、神の國は汝らの中に在るなり』二二かくて弟子たち
に言ひ給ふ『なんぢら人の子の日の一日を見んと思ふ日きたらん、さ
れど見ることを得じ。二三そのとき人々なんぢらに「見よ彼處に、見
よ此處に」と言はん、されど往くな、從ふな。二四それ電光の天の
彼方より閃きて、天の此方に輝くごとく、人の子もその日には然
あるべし。二五されど人の子は先づ多くの苦難を受け、かつ今の代に
棄てらるべきなり。二六ノアの日にありし如く、人の子の日にも然あ
るべし。二七ノア方舟に入る日までは、人々飮み食ひ娶り嫁ぎなど爲
たりしが、洪水きたりて彼等をことごとく滅せり。二八ロトの日に
も斯くのごとく、人々飮み食ひ、賣り買ひ、植ゑつけ、家造りなど
爲たりしが、二九ロトのソドムを出でし日に、天より火と硫黄と降り
て、彼等をことごとく滅せり。三〇人の子の顯るる日にも、その如
くなるべし。三一その日には、人もし屋の上にをりて、器物家の内に
あらば、之を取らんとて下るな。畑にをる者も同じく歸るな。三二ロ

トの妻を憶へ。三三おほよそ己が生命を全うせんとする者はこれを
失ひ、失ふ者はこれを保つべし。三四われ汝らに告ぐ、その夜ふ
たりの男、一つ寢臺に居らんに、一人は取られ一人は遣されん。三
五二人の女ともに臼ひき居らんに、一人は取られ一人は遣されん』
三六[なし]三七弟子たち答へて言ふ『主よ、それは何處ぞ』イエス言
ひたまふ『屍體のある處には鷲も亦あつまらん』

第一八章 一また彼らに、落膽せずして常に祈るべきことを、譬に
て語り言ひ給ふ 二『或町に、神を畏れず人を顧みぬ裁判人あり。三
その町に寡婦ありて、屢次その許にゆき「我がために仇を審きたま
へ」と言ふ。四かれ久しく聽き入れざりしが、其ののち心の中に言
ふ「われ神を畏れず、人を顧みねど、五此の寡婦われを煩はせば、
我かれが爲に審かん、然らずば絶えず來りて我を惱さん」と』六主い
ひ給ふ『不義なる裁判人の言ふことを聽け、七まして神は夜晝よばは
る選民のために、たとひ遲くとも遂に審き給はざらんや。八我なんぢ
らに告ぐ、速かに審き給はん。されど人の子の來るとき地上に信仰

を見んや』九また己を義と信じ、他人を輕しむる者どもに、此の譬
を言ひたまふ、一〇『二人のもの祈らんとて宮にのぼる、一人はパリ
サイ人、一人は取税人なり。一一パリサイ人たちて心の中に斯く祈
る「神よ、我はほかの人の、強奪・不義・姦淫するが如き者ならず、又
この取税人の如くならぬを感謝す。一二我は一週のうちに二度斷食
し、凡て得るものの十分の一を献ぐ」一三然るに取税人は遙に立ち
て、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言ふ「神よ、罪人なる我
を憫みたまへ」一四われ汝らに告ぐ、この人は、かの人よりも義と
せられて、己が家に下り往けり。おほよそ己を高うする者は卑うせ
られ、己を卑うする者は高うせらるるなり』一五イエスの觸り給はん
ことを望みて、人々嬰兒らを連れ來りしに、弟子たち之を見て禁め
たれば、一六イエス幼兒らを呼びよせて言ひたまふ『幼兒らの我に來
るを許して止むな、神の國はかくのごとき者の國なり。一七われ誠
に汝らに告ぐ、おほよそ幼兒のごとくに神の國をうくる者ならずば、
之に入ることは能はず』一八或司問ひて言ふ『善き師よ、われ何を

なして永遠の生命を嗣ぐべきか』一九イエス言ひ給ふ『なにゆゑ我を
善しと言ふか、神ひとりの他に善き者なし。二〇誡命はなんぢが知る
所なり「姦淫するなかれ」「殺すなかれ」「盗むなかれ」「僞證を立つ
る勿れ」「なんぢの父と母とを敬へ」』二一彼いふ『われ幼き時より
皆これを守れり』二二イエス之をききて言ひたまふ『なんぢなほ足ら
ぬこと一つあり、汝の有てる物をことごとく賣りて、貧しき者に分
ち與へよ、然らば財寶を天に得ん。かつ來りて我に從へ』二三彼は
之をききて甚く悲しめり、大に富める者なればなり。二四イエス之
を見て言ひたまふ『富める者の神の國に入るは如何に難いかな。二五
富める者の神の國に入るよりは、駱駝の針の穴をとほるは反つて易
し』二六之をきく人々いふ『さらば誰か救はるる事を得ん』二七イエ
ス言ひたまふ『人のなし得ぬところは、神のなし得る所なり』二八ペ
テロ言ふ『視よ、我等わが物をすてて汝に從へり』二九イエス言ひ
給ふ『われ誠に汝らに告ぐ、神の國のために、或は家、或は妻、
或は兄弟、あるひは兩親、あるひは子を棄つる者は、誰にても、三

〇今の時に數倍を受け、また後の世にて永遠の生命を受けぬはなし』
三一イエス十二弟子を近づけて言ひたまふ『視よ、我らエルサレムに
上る。人の子につき預言者たちによりて録されたる凡ての事は、成し
遂げらるべし。三二人の子は異邦人に付され、嘲弄せられ、辱しめ
られ、唾せられん。三三彼等これを鞭うち、かつ殺さん。かくて彼
は三日めに甦へるべし』三四弟子たち此等のことを一つだに悟らず、
此の言かれらに隱れたれば、その言ひ給ひしことを知らざりき。三
五イエス、エリコに近づき給ふとき、一人の盲人、路の傍らに坐し
て、物乞ひ居たりしが、三六群衆の過ぐるを聞きて、その何事なる
かを問ふ。三七人々ナザレのイエスの過ぎたまふ由を告げたれば、三
八盲人よばはりて言ふ『ダビデの子イエスよ、我を憫みたまへ』三
九先だち往く者ども、彼を禁めて默さしめんと爲たれど、増々さけ
びて言ふ『ダビデの子よ、我を憫みたまへ』四〇イエス立ち止り、
盲人を連れ來るべきことを命じ給ふ。かれ近づきたれば、四一イエス
問ひ給ふ『わが汝に何を爲さんことを望むか』彼いふ『主よ、見え

んことなり』四二イエス彼に『見ることを得よ、なんぢの信仰なんぢ
を救へり』と言ひ給へば、四三立刻に見ることを得、神を崇めてイ
エスに從ふ。民みな之を見て神を讃美せり。
第一九章 一エリコに入りて過ぎゆき給ふとき、二視よ、名をザアカ
イといふ人あり、取税人の長にて富める者なり。三イエスの如何な
る人なるかを見んと思へど、丈矮うして群衆のために見ること能は
ず、四前に走りゆき、桑の樹にのぼる。イエスその路を過ぎんとし給
ふ故なり。五イエス此處に至りしとき、仰ぎ見て言ひたまふ『ザアカ
イ、急ぎおりよ、今日われ汝の家に宿るべし』六ザアカイ急ぎおり、
喜びてイエスを迎ふ。七人々みな之を見て呟きて言ふ『かれは罪人
の家に入りて客となれり』八ザアカイ立ちて主に言ふ『主、視よ、わ
が所有の半を貧しき者に施さん、若しわれ誣ひ訴へて人より取り
たる所あらば、四倍にして償はん』九イエス言ひ給ふ『けふ救はこ
の家に來れり、此の人もアブラハムの子なればなり。一〇それ人の子
の來れるは、失せたる者を尋ねて救はん爲なり』一一人々これらの事

を聽きゐたるとき、譬を加へて言ひ給ふ。これはイエス、エルサレ
ムに近づき給ひ、神の國たちどころに現るべしと彼らが思ふ故なり。
一二乃ち言ひたまふ『或貴人、王の權を受けて歸らんとて遠き國へ
往くとき、一三十人の僕をよび、之に金十ミナを付して言ふ「わが
歸るまで商賣せよ」一四然るに其の地の民かれを憎み、後より使を
遣して「我らは此の人の我らの王となることを欲せず」と言はしむ。
一五貴人、王の權をうけて歸り來りしとき、銀を付し置きたる僕ど
もの、如何に商賣せしかを知らんとて彼らを呼ばしむ。一六初のも
の進み出でて言ふ「主よ、なんぢの一ミナは十ミナを贏けたり」一七
王いふ「善いかな、良き僕、なんぢは小事に忠なりしゆゑ、十の町
を司どるべし」一八次の者きたりて言ふ「主よ、なんぢの一ミナは
五ミナを贏けたり」一九王また言ふ「なんぢも五つの町を司どるべ
し」二〇また一人きたりて言ふ「主、視よ、なんぢの一ミナは此處に
在り。我これを袱紗に包みて藏め置きたり。二一これ汝の嚴しき人
なるを懼れたるに因る。なんぢは置かぬものを取り、播かぬものを刈

るなり」二二王いふ「惡しき僕、われ汝の口によりて汝を審かん。
我の嚴しき人にて、置かぬものを取り、播かぬものを刈るを知るか。
二三何ぞわが金を銀行に預けざりし、さらば我きたりて元金と利子と
を請求せしものを」二四かくて傍らに立つ者どもに言ふ「かれの一
ミナを取りて十ミナを有てる人に付せ」二五彼等いふ「主よ、かれは
既に十ミナを有てり」二六「われ汝らに告ぐ、凡て有てる人はなほ
與へられ、有たぬ人は有てるものをも取らるべし。二七而して我が王
たる事を欲せぬ、かの仇どもを此處に連れきたり、我が前にて殺せ』」
二八イエス此等のことを言ひてのち、先だち進みてエルサレムに上り
給ふ。二九オリブといふ山の麓なるベテパゲ及びベタニヤに近づき
し時、イエス二人の弟子を遣さんとして言ひ給ふ、三〇『向の山に
ゆけ、其處に入らば、一度も人の乘りたる事なき驢馬の子の繋ぎある
を見ん、それを解きて牽ききたれ。三一誰かもし汝らに「なにゆゑ
解くか」と問はば、斯く言ふべし「主の用なり」と』三二遣されたる
者ゆきたれば、果して言ひ給ひし如くなるを見る。三三かれら驢馬の

子をとく時、その持主ども言ふ『なにゆゑ驢馬の子を解くか』三四答
へて言ふ『主の用なり』三五かくて驢馬の子をイエスの許に牽ききた
り、己が衣をその上にかけて、イエスを乗せたり。三六その往き給
ふとき、人々おのが衣を途に敷く。三七オリブ山の下りあたりまで
近づき來り給へば、群れゐる弟子たち皆喜びて、その見しところの
能力ある御業につき、聲高らかに神を讃美して言ひ始む、三八『讃む
べきかな、主の名によりて來る王。天には平和、至高き處には榮光
あれ』三九群衆のうちの或パリサイ人ら、イエスに言ふ『師よ、なん
ぢの弟子たちを禁めよ』四〇答へて言ひ給ふ『われ汝らに告ぐ、此
のともがら默さば、石叫ぶべし』四一既に近づきたるとき、都を見
やり、之がために泣きて言ひ給ふ、四二『ああ汝、なんぢも若しこの
日の間に、平和にかかはる事を知りたらんには——されど今なんぢ
の目に隱れたり。四三日きたりて敵なんぢの周圍に壘をきづき、汝
を取圍みて四方より攻め、四四汝とその内にある子らとを地に打倒
し、一つの石をも石の上に遺さざるべし。なんぢ眷顧の時を知らざ

りしに因る』四五かくて宮に入り、商ひする者どもを逐ひ出しはじ
め、四六之に言ひたまふ『「わが家は祈の家たるべし」と録されたる
に、汝らは之を強盜の巣となせり』四七イエス日々宮にて教へたま
ふ。祭司長・學者ら及び民の重立ちたる者ども、之を殺さんと思ひた
れど、四八民みな耳を傾けてイエスに聽きたれば、爲すべき方を知
らざりき。

第二〇章一或日イエス宮にて民を教へ、福音を宣べ給ふとき、祭司長
・學者らは、長老どもと共に近づき來り、二イエスに語りて言ふ『な
にの權威をもて此等の事をなすか、此の權威を授けし者は誰か、我
らに告げよ』三答へて言ひ給ふ『われも一言なんぢらに問はん、答へ
よ。四ヨハネのバプテスマは天よりか、人よりか』五彼ら互に論じ
て言ふ『もし「天より」と言はば「なに故かれを信ぜざりし」と言は
ん。六もし「人より」と言はんか、民みなヨハネを預言者と信ずるに
よりて、我らを石にて撃たん』七遂に何處よりか知らぬ由を答ふ。八
イエス言ひたまふ『われも何の權威をもて此等の事をなすか、汝ら

に告げじ』九かくて次の譬を民に語りいで給ふ『ある人、葡萄園を
造りて農夫どもに貸し、遠く旅立して久しくなりぬ。一〇時至りて、
葡萄園の所得を納めしめんとて、一人の僕を農夫の許に遣ししに、
農夫ども之を打ちたたき、空手にて歸らしめたり。一一又ほかの僕
を遣ししに、之をも打ちたたき、辱しめ、空手にて歸らしめたり。
一二なほ三度めの者を遣ししに、之をも傷つけて逐ひ出したり。一三
葡萄園の主いふ「われ何を爲さんか。我が愛しむ子を遣さん、或
は之を敬ふなるべし」一四農夫ども之を見て互に論じて言ふ「これ
は世嗣なり。いざ殺して其の嗣業を我らの物とせん」一五かくてこれ
を葡萄園の外に逐ひ出して殺せり。さらば葡萄園の主かれらに何を
爲さんか、一六來りてかの農夫どもを亡し、葡萄園を他の者どもに
與ふべし』人々これを聽きて言ふ『然はあらざれ』一七イエス彼らに
目を注めて言ひ給ふ『されば
「造家者らの棄てる石は、
これぞ隅の首石となれる」

と録されたるは何ぞや。一八凡そその石の上に倒るる者は碎け、又
その石、人の上に倒るれば、その人を微塵にせん』一九此のとき學者
・祭司長ら、イエスに手をかけんと思ひたれど、民を恐れたり。こ
の譬の己どもを指して言ひ給へるを悟りしに因る。二〇かくて彼ら
機を窺ひ、イエスを司の支配と權威との下に付さんとて、その言
を捉ふるために、義人の樣したる間諜どもを遣したれば、二一其の
者どもイエスに問ひて言ふ『師よ、我らは汝の正しく語り、かつ教
へ、外貌を取らず、眞をもて神の道を教へ給ふを知る。二二われら
貢をカイザルに納むるは、善きか、惡しきか』二三イエスその惡巧
を知りて言ひ給ふ、二四『デナリを我に見せよ。これは誰の像、た
れの號なるか』『カイザルのなり』と答ふ。二五イエス言ひ給ふ『さ
らばカイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ』二六かれら民
の前にて其の言をとらへ得ず、且その答を怪しみて默したり。二七
また復活なしと言張るサドカイ人の或者ども、イエスに來り問ひて
言ふ、二八『師よ、モーセは、人の兄弟もし妻ありて子なくして死な

ば、其の兄弟かれの妻を娶りて、兄弟のために嗣子を擧ぐべしと、
我らに書き遺したり。二九さて茲に七人の兄弟ありて、兄、妻を娶
り、子なくして死に、三〇第二、第三の者も之を娶り、三一七人みな同
じく子を殘さずして死に、三二後には其の女も死にたり。三三されば
復活の時、この女は誰の妻たるべきか、七人これを妻としたればな
り』三四イエス言ひ給ふ『この世の子らは娶り嫁ぎすれど、三五かの
世に入るに、死人の中より甦へるに相應しとせらるる者は、娶り嫁
ぎすることとなし。三六彼等はや死ぬること能はざればなり。御使た
ちに等しく、また復活の子どもにして、神の子供たるなり。三七死
にたる者の甦へる事は、モーセも柴の條に、主を「アブラハムの神
、イサクの神、ヤコブの神」と呼びて之を示せり。三八神は死にたる
者の神にあらず、生ける者の神なり。それ神の前には皆生けるなり』
三九學者のうちの或者ども答へて『師よ、善く言ひ給へり』と言ふ。
四〇彼等はや何事をも問ひ得ざりし故なり。四一イエス彼らに言ひ
たまふ『如何なれば人々、キリストをダビデの子と言ふか。四二ダビ

デ自ら詩篇に言ふ
「主わが主に言ひたまふ、
四三われ汝の敵を汝の足臺となすまでは、
わが右に坐せよ」
四四ダビデ斯く彼を主と稱ふれば、爭でその子ならんや』四五民の皆
ききをる中にて、イエス弟子たちに言ひ給ふ、四六『學者らに心せ
よ。彼らは長き衣を著て歩むことを好み、市場にての敬禮、會堂の
上座、饗宴の上席を喜び、四七また寡婦らの家を呑み、外見をつく
りて長き祈をなす。其の受くる審判は更に嚴しからん』
第二一章一イエス目を擧げて、富める人々の納物を賽銭函に投げ
入るるを見、二また或貧しき寡婦のレプタ二つを投げ入るるを見て言
ひ給ふ、三『われ實をもて汝らに告ぐ、この貧しき寡婦は、凡ての
人よりも多く投げ入れたり。四彼らは皆その豐なる内より納物の中
に投げ入れ、この寡婦はその乏しき中より、己が有てる生命の料をこ
とごとく投げ入れたればなり』五或人々、美麗なる石と献物とにて

宮の飾られたる事を語りしに、イエス言ひ給ふ、六『なんぢらが見る
此等の物は、一つの石も崩されずして石の上に殘らぬ日きたらん』七
彼ら問ひて言ふ『師よ、さらば此等のことは何時あるか、又これらの
事の成らんとする時は如何なる兆あるか』八イエス言ひ給ふ『なん
ぢら惑されぬように心せよ、多くの者わが名を冒し來り「われは
夫なり」と言ひ「時は近づけり」と言はん、彼らに從ふな。九戰爭
と騷亂との事を聞くとき、怖づな。斯かることは先づあるべきなり。
然れど終は直ちに來らず』一〇また言ひたまふ『「民は民に、國は國
に逆ひて起たん」一一かつ大なる地震あり、處々に疫病・饑饉
あらん。懼るべき事と天よりの大なる兆とあらん。一二すべて此等
のことに先だちて、人々なんぢらに手をくだし、汝らを責めん、即
ち汝らを會堂および獄に付し、わが名のために王たち司たちの
前に曳きゆかん。一三これは汝らに證の機とならん。一四されば汝
ら如何に答へんと預じめ思慮るまじき事を心に定めよ。一五われ
汝らに、凡て逆ふ者の言ひ逆ひ言ひ消すことをなし得ざる、口と

智慧とを與ふべければなり。一六汝らは兩親・兄弟・親族・朋友に
さへ付されん。又かれらは汝らの中の或者を殺さん。一七汝等わが
名の故に凡ての人に憎まるべし。一八然れど汝らの頭の髮一すぢだ
に失せじ。一九汝らは忍耐によりて其の靈魂を得べし。二〇汝らエ
ルサレムが軍勢に圍まるるを見ば、其の亡近づけりと知れ。二一そ
の時ユダヤに居る者どもは山に遁れよ、都の中にをる者どもは出で
よ、田舍にをる者どもは都に入るな、二二これ録されたる凡ての事の
遂げらるべき刑罰の日なり。二三その日には孕りたる者と、乳を哺
まする者とは禍害なるかな。地に大なる艱難ありて、御怒この民に
臨み、二四彼らは劍の刃に斃れ、又は捕はれて諸國に曳かれん。而
してエルサレムは異邦人の時滿つるまで、異邦人に蹂躙らるべし。二
五また日・月・星に兆あらん。地にては國々の民なやみ、海と濤と
の鳴り轟くによりて狼狽へ、二六人々おそれ、かつ世界に來らんと
する事を思ひて膽を失はん。これ天の萬象ふるひ動けばなり。二七
其のとき人々、人の子の能力と大なる榮光とをもて、雲に乗りき

たるを見ん。二八これらの事起り始めなば、仰ぎて首を擧げよ。汝
らの贖罪近づけるなり』二九また譬を言ひたまふ『無花果の樹また
凡ての樹を見よ、三〇既に芽ざせば、汝等これを見てみづから夏の
近きを知る。三一斯くのごとく此等のことの起るを見ば、神の國の近
きを知れ。三二われ誠に汝らに告ぐ、これらの事ことごとく成るま
で、今の代は過ぎゆくことなし。三三天地は過ぎゆかん、されど我が
言は過ぎゆくことなし。三四汝等みづから心せよ、恐らくは飮食
にふけり、世の煩勞にまとはれて心鈍り、思ひがけぬ時、かの日羂
のごとく來らん。三五これは　く地の面に住める凡ての人に臨むべ
きなり。三六この起るべき凡ての事をのがれ、人の子のまへに立ち得
るやう、常に祈りつつ目を覺しをれ』三七イエス晝は宮にて教へ、夜
は出でてオリブといふ山に宿りたまふ。三八民はみな御教を聽かんと
て、朝とく宮にゆき、御許に集れり。

第二二章

一さて過越といふ除酵祭近づけり。二祭司長・學者らイエ
スを殺さんとし、その手段いかにと求む、民を懼れたればなり。三時

にサタン、十二の一人なるイスカリオテと稱ふるユダに入る。四ユダ
乃ち祭司長・宮守頭どもに往きて、イエスを如何にして付さんと議
りたれば、五彼ら喜びて銀を與へんと約す。六ユダ諾ひて、群衆の
居らぬ時にイエスを付さんと好き機をうかがふ。七過越の羔羊を屠る
べき除酵祭の日來りたれば、八イエス、ペテロとヨハネとを遣さん
として言ひたまふ『往きて我らの食せん爲に過越の備をなせ』九彼
ら言ふ『何處に備ふることを望み給ふか』一〇イエス言ひたまふ『視
よ、都に入らば、水をいれたる瓶を持つ人なんぢらに遇ふべし、之
に從ひゆき、その入る所の家にいりて、一一家の主人に「師なんぢ
に言ふ、われ弟子らと共に過越の食をなすべき座敷は何處なるか」
と言へ。一二さらば調へたる大なる二階座敷を見すべし。其處に備
へよ』一三かれら出で往きて、イエスの言ひ給ひし如くなるを見て、
過越の設備をなせり。一四時いたりてイエス席に著きたまひ、使徒た
ちも共に著く。一五かくて彼らに言ひ給ふ『われ苦難の前に、なんぢ
らと共にこの過越の食をなすことを望みに望みたり。一六われ汝ら

に告ぐ、神の國にて過越の成就するまでは、我復これを食せざるべ
し』一七かくて酒杯を受け、かつ謝して言ひ給ふ『これを取りて互
に分ち飲め。一八われ汝らに告ぐ、神の國の來るまでは、われ今よ
りのち葡萄の果より成るものを飲まじ』一九またパンを取り謝してさ
き、弟子たちに與へて言ひ給ふ『これは汝らの爲に與ふる我が體な
り。我が記念として之を行へ』二〇夕餐ののち酒杯をも然して言ひ
給ふ『この酒杯は、汝らの爲に流す我が血によりて立つる新しき
契約なり。二一されど視よ、我を賣る者の手、われと共に食卓の上
にあり、二二實に人の子は定められたる如く逝くなり。されど之を賣
る者は禍害なるかな』二三弟子たち己らの中にて此の事をなす者は、
誰ならんと互に問ひ始む。二四また彼らの間に、己らの中たれか
大ならんとの爭論おこりたれば、二五イエス言ひたまふ『異邦人の
王はその民を宰どり、また民を支配する者は恩人と稱へらる。二六
されど汝らは然あらざれ、汝等のうち大なる者は若き者のごとく、
頭たる者は事ふる者の如くなれ。二七食事の席に著く者と事ふる者

とは、何れか大なる。食事の席に著く者ならずや、されど我は汝ら
の中にて事ふる者のごとし。二八汝らは我が嘗試のうちに絶えず我
とともに居りし者なれば、二九わが父の我に任じ給へるごとく、我も
亦なんぢらに國を任ず。三〇これ汝らの我が國にて我が食卓に飲食
し、かつ座位に坐してイスラエルの十二の族を審かん爲なり。三一
シモン、シモン、視よ、サタン汝らを麥のごとく篩はんとて請ひ得た
り。三二されど我なんぢの爲に、その信仰の失せぬやうに祈りたり、
なんぢ立ち歸りてのち兄弟たちを堅うせよ』三三シモン言ふ『主よ、
我は汝とともに獄にまでも、死にまでも往かんと覺悟せり』三四イ
エス言ひ給ふ『ペテロよ、我なんぢに告ぐ、今日なんぢ三度われを知
らずと否むまでは、鷄鳴かざるべし』三五かくて弟子たちに言ひ給
ふ『財布・嚢・鞋をも持たせずして汝らを遣ししとき、缺けたる
所ありしや』彼ら言ふ『無かりき』三六イエス言ひ給ふ『されど今
は財布ある者は之を取れ、嚢ある者も然すべし。また劍なき者は
衣を賣りて劍を買へ。三七われ汝らに告ぐ「かれは愆人と共に數

へられたり」と録されたるは、我が身に成し遂げらるべし。凡そ我
に係る事は成し遂げらるればなり』三八弟子たち言ふ『主、見たま
へ、茲に劍二振あり』イエス言ひたまふ『足れり』三九遂に出でて、
常のごとくオリブ山に往き給へば、弟子たちも從ふ。四〇其處に至
りて彼らに言ひたまふ『誘惑に入らぬやうに祈れ』四一かくて自ら
は石の投げらるる程かれらより隔り、跪づきて祈り言ひたまふ、四
二『父よ、御旨ならば、此の酒杯を我より取り去りたまへ、されど我
が意にあらずして御意の成らんことを願ふ』四三時に天より御使あ
らはれて、イエスに力を添ふ。四四イエス悲しみ迫り、いよいよ切
に祈り給へば、汗は地上に落つる血の雫の如し。四五祈を了へ、起
ちて弟子たちの許にきたり、その憂によりて眠れるを見て言ひたま
ふ、四六『なんぞ眠るか、起て、誘惑に入らぬやうに祈れ』四七なほ語
りゐ給ふとき、視よ、群衆あらはれ、十二の一人なるユダ先だち來
り、イエスに接吻せんとて近寄りたれば、四八イエス言ひ給ふ『ユダ、
なんぢは接吻をもて人の子を賣るか』四九御側に居る者ども事の及ば

んとするを見て言ふ『主よ、われら劍をもて撃つべきか』五〇その
中の一人、大祭司の僕を撃ちて、右の耳を切り落せり。五一イエス
答へて言ひたまふ『之にてゆるせ』而して僕の耳に手をつけて醫し
給ふ。五二かくて己に向ひて來れる祭司長・宮守頭・長老らに言
ひ給ふ『なんぢら強盜に向ふごとく、劍と棒とを持ちて出できたる
か。五三我は日々なんぢらと共に宮に居りしに、我が上に手を伸べざ
りき。されど今は汝らの時、また暗黒の權威なり』五四遂に人々イ
エスを捕へて、大祭司の家に曳きゆく。ペテロ遠く離れて從ふ。五
五人々、中庭のうちに火を焚きて、諸共に坐したれば、ペテロもその
中に坐す。五六或婢女ペテロの火の光を受けて坐し居るを見、これ
に目を注ぎて言ふ『この人も彼と偕にゐたり』五七ペテロ肯はずし
て言ふ『をんなよ、我は彼を知らず』五八暫くして他の者ペテロを
見て言ふ『なんぢも彼の黨與なり』ペテロ言ふ『人よ、然らず』五九
一時ばかりして又ほかの男、言張りて言ふ『まさしく此の人も彼と
ともに在りき、是ガリラヤ人なり』六〇ペテロ言ふ『人よ、我なんぢ

の言ふことを知らず』なほ言ひ終へぬに、やがて鷄鳴きぬ。六一主
、振反りてペテロに目をとめ給ふ。ここにペテロ、主の『今日にはと
り鳴く前に、なんぢ三度われを否まん』と言ひ給ひし御言を憶ひいだ
し、六二外に出でて甚く泣けり。六三守る者どもイエスを嘲弄し、之
を打ち、六四その目を蔽ひ問ひて言ふ『預言せよ、汝を撃ちし者は
誰なるか』六五この他なほ多くのことを言ひて譏れり。六六夜明にな
りて、民の長老・祭司長・學者ら相集り、イエスをその議會に曳き
出して言ふ、六七『なんぢ若しキリストならば、我らに言へ』イエス
言ひ給ふ『われ言ふとも汝ら信ぜじ、六八又われ問ふとも汝ら答へ
じ。六九されど人の子は今よりのち神の能力の右に坐せん』七〇皆い
ふ『されば汝は神の子なるか』答へ給ふ『なんぢらの言ふごとく我
はそれなり』七一彼ら言ふ『何ぞなほ他に證據を求めんや。我ら自
らその口より聞けり』

第二三章 一民衆みな起ちて、イエスをピラトの前に曳きゆき、二
訴へ出でて言ふ『われら此の人が、わが國の民を惑し、貢をカイザ

ルに納むるを禁じ、かつ自ら王なるキリストと稱ふるを認めたり』三
ピラト、イエスに問ひて言ふ『なんぢはユダヤ人の王なるか』答へて
言ひ給ふ『なんぢの言ふが如し』四ピラト祭司長らと群衆とに言ふ
『われ此の人に愆あるを見ず』五彼等ますます言ひ募り『かれはユダヤ
全國に教をなして民を騷がし、ガリラヤより始めて、此處に至る』と
言ふ。六ピラト之を聞き、そのガリラヤ人なるかを問ひて、七ヘロデ
の權下の者なるを知り、ヘロデ此の頃エルサレムに居たれば、イエス
をその許に送れり。八ヘロデ、イエスを見て甚く喜ぶ。これは彼に
就きて聞く所ありたれば、久しく逢はんことを欲し、何をか徴を行
ふを見んと望み居たる故なり。九かくて多くの言をもて問ひたれど、
イエス何をも答へ給はず。一〇祭司長・學者ら起ちて激甚くイエスを
訴ふ。一一ヘロデその兵卒と共にイエスを侮り、かつ嘲弄し、華美
なる衣を著せて、ピラトに返す。一二ヘロデとピラトと前には仇た
りしが、此の日たがひに親しくなれり。一三ピラト、祭司長らと司
と民とを呼び集めて言ふ、一四『汝らこの人を民を惑す者として曳

き來れり。視よ、われ汝らの前にて訊したれど、其の訴ふる所に
就きて、この人に愆あるを見ず。一五ヘロデも亦然り、彼を我らに返
したり。視よ、彼は死に當るべき業を爲さざりき。一六されば懲しめ
て之を赦さん』一七［なし］一八民衆ともに叫びて言ふ『この人を除け、
我らにバラバを赦せ』一九此のバラバは、都に起りし一揆と殺人と
の故によりて、獄に入れられたる者なり。二〇ピラトはイエスを赦
さんと欲して、再び彼らに告げたれど、二一彼ら叫びて『十字架につ
けよ、十字架につけよ』と言ふ。二二ピラト三度まで『彼は何の惡事
を爲ししか、我その死に當るべき業を見ず、故に懲しめて赦さん』と
言ふ。二三されど人々、大聲をあげ迫りて、十字架につけんことを求
めたれば、遂にその聲勝てり。二四ここにピラトその求の如くすべ
しと言渡し、二五その求むるままに、かの一揆と殺人との故により
て獄に入れられたる者を赦し、イエスを付して彼らの心の隨ならし
めたり。二六人々イエスを曳きゆく時、シモンといふクレネ人の田舍
より來るを執へ、十字架を負はせてイエスの後に從はしむ。二七民

の大なる群と、歎き悲しめる女たちの群と之に從ふ。二八イエス
振反りて女たちに言ひ給ふ『エルサレムの娘よ、わが爲に泣くな、
ただ己がため、己が子のために泣け。二九視よ「石婦、兒産まぬ腹、哺
ませぬ乳は幸福なり」と言ふ日きたらん。三〇その時ひとびと「山に
向ひて我らの上に倒れよ、岡に向ひて我らを掩へ」と言ひ出でん。三
一もし青樹に斯く爲さば、枯樹は如何にせられん』三二また他に二人
の惡人をも、死罪に行はんとてイエスと共に曳きゆく。三三髑髏と
いふ處に到りて、イエスを十字架につけ、また惡人の一人をその右
、一人をその左に十字架につく。三四かくてイエス言ひたまふ『父
よ、彼らを赦し給へ、その爲す所を知らざればなり』彼らイエスの
衣を分ちて鬮取にせり、三五民は立ちて見ゐたり。司たちも嘲り
て言ふ『かれは他人を救へり、もし神の選び給ひしキリストならば、
己をも救へかし』三六兵卒どもも嘲弄しつつ、近よりて酸き葡萄酒
をさし出して言ふ、三七『なんぢ若しユダヤ人の王ならば、己を救
へ』三八又イエスの上には『これはユダヤ人の王なり』との罪標あり。

三九十字架に懸けられたる惡人の一人、イエスを譏りて言ふ『なんぢ
はキリストならずや、己と我らとを救へ』四〇他の者これに答へ禁
めて言ふ『なんぢ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか。四一我
らは爲し事の報を受くるなれば當然なり。されど此の人は何の不
善をも爲さざりき』四二また言ふ『イエスよ、御國に入り給ふとき、
我を憶えたまえ』四三イエス言ひ給ふ『われ誠に汝に告ぐ、今日な
んぢは我と偕にパラダイスに在るべし』四四晝の十二時ごろ、日、光
をうしなひ、地のうへ　く暗くなりて、三時に及び、四五聖所の幕
、眞中より裂けたり。四六イエス大聲に呼はりて言ひたまふ『父よ、
わが靈を御手にゆだぬ』斯く言ひて息絶えたまふ。四七百卒長この
有りし事を見て、神を崇めて言ふ『實にこの人は義人なりき』四八こ
れを見んとて集りたる群衆も、ありし事どもを見て、みな胸を打ち
つつ歸れり。四九凡てイエスの相識の者およびガリラヤより從ひ來
れる女たちも、遙に立ちて此等のことを見たり。五〇議員にして善
かつ義なるヨセフといふ人あり。五一――この人はかの評議と仕業と

に與せざりき――ユダヤの町なるアリマタヤの者にて、神の國を待
ちのぞめり。五二此の人ピラトの許にゆき、イエスの屍體を乞ひ、五
三これを取りおろし、亞麻布にて包み、巖に鑿りたる未だ人を葬り
し事なき墓に納めたり。五四この日は準備日なり、かつ安息日近づき
ぬ。五五ガリラヤよりイエスと共に來りし女たち後に從ひ、その墓
と屍體の納められたる樣とを見、五六歸りて香料と香油とを備ふ。
かくて誡命に遵ひて、安息日を休みたり。

第二四章一一週の初の日、朝まだき、女たち備へたる香料を携
へて墓にゆく。二然るに石の既に墓より轉し除けあるを見、三内に
入りたるに、主イエスの屍體を見ず、四これが爲に狼狽へをりしに、視
よ、輝ける衣を著たる二人の人その傍らに立てり。五女たち懼れ
て面を地に伏せたれば、その二人の者いふ『なんぞ死にし者どもの
中に生ける者を尋ぬるか。六彼は此處に在さず、甦へり給へり。尚
ガリラヤに居給へるとき、如何に語り給ひしかを憶ひ出でよ。七即
ち「人の子は必ず罪ある人の手に付され、十字架につけられ、かつ

三日めに甦へるべし」と言ひ給へり』八ここに彼らその御言を憶ひ出
で、九墓より歸りて、凡て此等のことを十一弟子および凡て他の弟子
たちに告ぐ。一〇この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤ
コブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を
使徒たちに告げたり。一一使徒たちは其の言を妄語と思ひて信ぜず。
一二⊠ペテロは起ちて墓に走りゆき、屈みて布のみあるを見、ありし事
を怪しみつつ歸れり⊠一三視よ、この日二人の弟子、エルサレムより
三里ばかり隔りたるエマオといふ村に往きつつ、一四凡て有りし事
どもを互に語りあふ。一五語りかつ論じあふ程に、イエス自ら近づ
きて共に往き給ふ。一六されど彼らの目遮へられて、イエスたるを認
むること能はず。一七イエス彼らに言ひ給ふ『なんぢら歩みつつ互
に語りあふ言は何ぞや』かれら悲しげなる状にて立ち止り、一八そ
の一人なるクレオパと名づくるもの答へて言ふ『なんぢエルサレム
に寓り居て、獨り此の頃かしこに起りし事どもを知らぬか』一九イ
エス言ひ給ふ『如何なる事ぞ』答へて言ふ『ナザレのイエスの事な

り、彼は神と凡ての民との前にて、業にも言にも能力ある預言者な
りしに、二〇祭司長ら及び我が司らは、死罪に定めんとて之を付し
遂に十字架につけたり。二一我らはイスラエルを贖ふべき者は、こ
の人なりと望みゐたり、然のみならず、此の事の有りしより今日は
はや三日めなるが、二二なほ我等のうちの或女たち、我らを驚かせ
り、即ち彼ら朝夙く墓に往きたるに、二三屍體を見ずして歸り、かつ
御使たち現れて、イエスは活き給ふと告げたりと言ふ。二四我らの
朋輩の數人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言ひし如くに
してイエスを見ざりき』二五イエス言ひ給ふ『ああ愚にして預言者
たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。二六キリストは
必ず此らの苦難を受けて、其の榮光に入るべきならずや』二七かく
てモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録し
たる所を説き示したまふ。二八遂に往く所の村に近づきしに、イエ
スなほ進みゆく樣なれば、二九強ひて止めて言ふ『我らと共に留れ、
時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入りたまふ。

三〇共に食事の席に著きたまふ時、パンを取りて祝し、擘きて與へ給
へば、三一彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えずな
り給ふ。三二かれら互に言ふ『途にて我らと語り、我らに聖書を説明
し給へるとき、我らの心、内に燃えしならずや』三三かくて直ちに立
ちエルサレムに歸りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつま
り居て言ふ、三四『主は實に甦へりて、シモンに現れ給へり』三五
二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給ふによりてイエスを
認めし事とを述ぶ。三六此等のことを語る程に、イエスその中に立ち
⊠『平安なんぢらに在れ』と言ひ⊠給ふ。三七かれら怖ぢ懼れて、見る
所のものを靈ならんと思ひしに、三八イエス言ひ給ふ『なんぢら何ぞ
心騒ぐか、何ゆゑ心に疑惑おこるか、三九我が手わが足を見よ、こ
れ我なり。我を撫でて見よ、靈には肉と骨となし、我にはあり、汝
らの見るごとし』四〇⊠斯く言ひて手と足とを示し給ふ⊠四一かれら
歡喜の餘に信ぜずして怪しめる時、イエス言ひたまふ『此處に何か
食物あるか』四二かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、四三之を取り、

その前にて食し給へり。四四また言ひ給ふ『これらの事は、我がな
ほ汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者お
よび詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言ひし所な
り』四五ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言ひ給ふ、
四六『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中
より甦へり、四七且その名によりて罪の赦を得さする悔改は、エ
ルサレムより始りて、もろもろの國人に宣傳へらるべしと。四八汝
らは此等のことの證人なり。四九視よ、我は父の約し給へるものを
汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留れ』五〇
遂にイエス彼らをベタニヤに連れゆき、手を擧げて之を祝したまふ。
五一祝する間に、彼らを離れ⊠天に擧げられ⊠給ふ。五二彼ら⊠之を
拜し⊠大なる歡喜をもてエルサレムに歸り、五三常に宮に在りて、神
を讃めゐたり。

ヨハネ傳福音書

第一章 一太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。二こ
の言は太初に神とともに在り、三萬の物これに由りて成り、成りた
る物に一つとして之によらで成りたるはなし。四之に生命あり、この
生命は人の光なりき。五光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざ
りき。六神より遣されたる人いでたり、その名をヨハネといふ。七
この人は證のために來れり、光に就きて證をなし、また凡ての人
の彼によりて信ぜん爲なり。八彼は光にあらず、光に就きて證せ
ん爲に來れるなり。九もろもろの人をてらす眞の光ありて、世にき
たれり。一〇彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知
らざりき。一一かれは己の國にきたりしに、己の民は之を受けざり
き。一二されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子

となる權をあたへ給へり。一三かかる人は血脈によらず、肉の欲に
よらず、人の欲によらず、ただ、神によりて生れしなり。一四言は
肉體となりて我らの中に宿りたまへり、我らその榮光を見たり、實
に父の獨子の榮光にして、恩惠と眞理とにて滿てり。一五ヨハネ彼
につきて證をなし、呼はりて言ふ『「わが後にきたる者は我に勝れ
り、我より前にありし故なり」と、我が曾ていへるは此の人なり』一六
我らは皆その充ち滿ちたる中より受けて、恩惠に恩惠を加へらる。一
七律法はモーセによりて與へられ、恩惠と眞理とはイエス・キリスト
によりて來れるなり。一八未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいま
す獨子の神のみ之を顯し給へり。一九さてユダヤ人、エルサレムよ
り祭司とレビ人とをヨハネの許に遣して『なんぢは誰なるか』と問
はせし時、ヨハネの證はかくのごとし。二〇乃ち言ひあらはして諱
まず『我はキリストにあらず』と言ひあらはせり。二一また問ふ『さ
らば何、エリヤなるか』答ふ『然らず』問ふ『かの預言者なるか』答
ふ『いな』二二ここに彼ら言ふ『なんぢは誰なるか、我らを遣しし

人々に答へ得るやうにせよ、なんぢ己につきて何と言ふか』二三答
へて言ふ『我は預言者イザヤの云へるが如く「主の道を直くせよと、
荒野に呼はる者の聲」なり』二四かの遣されたる者はパリサイ人な
りき。二五また問ひて言ふ『なんぢ若しキリストに非ず、またエリヤ
にも、かの預言者にも非ずば、何故バプテスマを施すか』二六ヨハ
ネ答へて言ふ『我は水にてバプテスマを施す。なんじらの中に汝
らの知らぬもの一人たてり。二七即ち我が後にきたる者なり、我は
その鞋の紐を解くにも足らず』二八これらの事は、ヨハネのバプテス
マを施しゐたりしヨルダンの向なるベタニヤにてありしなり。二九
明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給ふを見ていふ『視よ、こ
れぞ世の罪を除く神の羔羊。三〇われ曾て「わが後に來る人あり、我
にまされり、我より前にありし故なり」と云ひしは此の人なり。三一
我もと彼を知らざりき。然れど彼のイスラエルに顯れんために、我
きたりて水にてバプテスマを施すなり』三二ヨハネまた證をなして
言ふ『われ見しに、御靈鴿のごとく天より降りて、その上に止れり。

三三我もと彼を知らざりき。されど我を遣し水にてバプテスマを施
させ給ふもの、我に告げて「なんぢ御靈くだりて或人の上に止るを
見ん、これぞ聖靈にてバプテスマを施す者なる」といひ給へり。三
四われ之を見て、その神の子たるを證せしなり』三五明くる日ヨハ
ネまた二人の弟子とともに立ちて、イエスの歩み給ふを見ていふ
『視よ、これぞ神の羔羊』三七かく語るをききて、二人の弟子イエス
に從ひゆきたれば、三八イエス振反りて、その從ひきたるを見て言
ひたまふ『何を求むるか』彼等いふ『ラビ（釋きていへば師）いづ
こに留り給ふか』三九イエス言ひ給ふ『きたれ、さらば見ん』彼ら
往きてその留りたまふ所を見、この日ともに留れり、時は第十時
ごろなりき。四〇ヨハネより聞きてイエスに從ひし二人のうち一人
は、シモン・ペテロの兄弟アンデレなり。四一この人まづ其の兄弟
シモンに遇ひ『われらメシヤ（釋けばキリスト）に遇へり』と言ひて、
四二彼をイエスの許に連れきたれり。イエス之に目を注めて言ひ給ふ
『なんぢはヨハネの子シモンなり、汝ケパ（釋けばペテロ）と稱へ

らるべし』四三明くる日イエス、ガリラヤに往かんとし、ピリポにあ
ひて言ひ給ふ『われに從へ』四四ピリポはアンデレとペテロとの町
なるベツサイダの人なり。四五ピリポ、ナタナエルに遇ひて言ふ『我
らはモーセが律法に録ししところ、預言者たちが録しし所の者に遇
へり、ヨセフの子ナザレのイエスなり』四六ナタナエル言ふ『ナザレ
より何の善き者か出づべき』ピリポいふ『來りて見よ』四七イエス、
ナタナエルの己が許にきたるを見、これを指して言ひたまふ『視よ、
これ眞にイスラエル人なり、その衷に虚僞なし』四八ナタナエル言
ふ『如何にして我を知り給ふか』イエス答へて言ひたまふ『ピリポ
の汝を呼ぶまへに、我なんぢが無花果の樹の下に居るを見たり』四
九ナタナエル答ふ『ラビ、なんぢは神の子なり、汝はイスラエルの
王なり』五〇イエス答へて言ひ給ふ『われ汝が無花果の樹の下にを
るを見たりと言ひしに因りて信ずるか、汝これよりも更に大なる
事を見ん』五一また言ひ給ふ『まことに誠に汝らに告ぐ、天ひらけ
て、人の子のうへに神の使たちの昇り降りするを汝ら見るべし』

第二章 一 三日めにガリラヤのカナに婚禮ありて、イエスの母そこに
居り、二 イエスも弟子たちと共に婚禮に招かれ給ふ。三 葡萄酒つきた
れば、母イエスに言ふ『かれらに葡萄酒なし』四 イエス言ひ給ふ『をん
なよ、我と汝となにの關係あらんや、我が時は未だ來らず』五 母僕
どもに『何にても其の命ずる如くせよ』と言ひおく。六 彼處にユダヤ
人の潔の例にしたがひて、四五斗入りの石甕六個ならべあり。七 イ
エス僕に『水を甕に滿せ』といひ給へば、口まで滿す。八 また言ひ
給ふ『いま汲み取りて饗宴長に持ちゆけ』乃ち持ちゆけり。九 饗宴
長、葡萄酒になりたる水を嘗めて、その何處より來りしかを知らざ
れば(水を汲みし僕どもは知れり)新郎を呼びて言ふ、一〇『おほよ
そ人は先よき葡萄酒を出し、醉のまはる頃ほひ劣れるものを出すに、
汝はよき葡萄酒を今まで留め置きたり』一一 イエス此の第一の徴を
ガリラヤのカナにて行ひ、その榮光を顯し給ひたれば、弟子たち
彼を信じたり。一二 この後イエス及びその母・兄弟・弟子たちカペ
ナウムに下りて、そこに數日留りたり。一三 かくてユダヤ人の過越

の祭ちかづきたれば、イエス、エルサレムに上り給ふ。一四宮の内
に牛・羊・鴿を賣るもの、兩替する者の坐するを見て、一五繩を鞭
につくり、羊をも牛をもみな宮より逐ひ出し、兩替する者の金を散
し、その臺を倒し、一六鴿をうる者に言ひ給ふ『これらの物を此處よ
り取り去れ、わが父の家を商賣の家とすな』一七弟子たち『なんじの
家をおもふ熱心われを食はん』と録されたるを憶ひ出せり。一八ここ
にユダヤ人こたへてイエスに言ふ『なんぢ此等の事をなすからには、
我らに何の徴を示すか』一九答へて言ひ給ふ『なんぢら此の宮をこ
ぼて、われ三日の間に之を起さん』二〇ユダヤ人いふ『この宮を建
つるには四十六年を經たり、なんぢは三日のうちに之を起すか』二一
これはイエス己が體の宮をさして言ひ給へるなり。二二然れば死人
の中より甦へり給ひしのち、弟子たち斯く言ひ給ひしことを憶ひ出
して、聖書とイエスの言ひ給ひし言とを信じたり。二三過越のまつ
りの間、イエス、エルサレムに在すほどに、多くの人々その爲し給
へる徴を見て御名を信じたり。二四されどイエス己を彼らに任せ給

はざりき。それは凡ての人を知り、二五また人の衷にある事を知りた
まへば、人に就きて證する者を要せざる故なり。
第三章一ここにパリサイ人にて名をニコデモといふ人あり、ユダ
ヤ人の宰なり。二夜イエスの許に來りて言ふ『ラビ、我らは汝の神
より來る師なるを知る。神もし偕に在さずば、汝が行ふこれらの
徴は誰もなし能はぬなり』三イエス答へて言ひ給ふ『まことに誠に
汝に告ぐ、人あらたに生れずば、神の國を見ること能はず』四ニコ
デモ言ふ『人はや老いぬれば、爭で生るる事を得んや、再び母の胎
に入りて生るることを得んや』五イエス答へ給ふ『まことに誠に汝
に告ぐ、人は水と靈とによりて生れずば、神の國に入ること能はず、
六肉によりて生るる者は肉なり、靈によりて生るる者は靈なり。七な
んぢら新に生るべしと我が汝に言ひしを怪しむな。八風は己が好む
ところに吹く、汝その聲を聞けども、何處より來り何處へ往くを知
らず。すべて靈によりて生るる者も斯くのごとし』九ニコデモ答へて
言ふ『いかで斯かる事どものあり得べき』一〇イエス答へて言ひ給ふ

『なんぢはイスラエルの師にして、猶かかる事どもを知らぬか。一一
誠にまことに汝に告ぐ、我ら知ることを語り、また見しことを證
す、然るに汝らその證を受けず。一二われ地のことを言ふに汝ら
信ぜずば、天のことを言はんには爭で信ぜんや。一三天より降りし者
、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし。一四モーセ荒野にて蛇
を擧げしごとく、人の子もまた必ず擧げらるべし。一五すべて信ず
る者の彼によりて永遠の生命を得ん爲なり』一六それ神はその獨子を
賜ふほどに世を愛し給へり、すべて彼を信ずる者の亡びずして、永遠
の生命を得んためなり。一七神その子を世に遣したまへるは、世を
審かん爲にあらず、彼によりて世の救はれん爲なり。一八彼を信ずる
者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の獨子の名を信ぜざ
りしが故なり。一九その審判は是なり。光、世にきたりしに、人そ
の行爲の惡しきによりて、光よりも暗黑を愛したり。二〇すべて惡
を行ふ者は光をにくみて光に來らず、その行爲の責められざらん
爲なり。二一眞をおこなふ者は光にきたる、その行爲の神によりて

行ひたることの顯れん爲なり。二二この後イエス、弟子たちとユダ
ヤの地にゆき、其處にともに留りてバプテスマを施し給ふ。二三ヨ
ハネもサリムに近きアイノンにてバプテスマを施しゐたり、其處に
水おほくある故なり。人々つどひ來りてバプテスマを受く。二四ヨハ
ネは未だ獄に入れられざりしなり。二五ここにヨハネの弟子たちと
一人のユダヤ人との間に、潔につきて論起りたれば、二六彼らヨハ
ネの許に來りて言ふ『ラビ、視よ、汝とともにヨルダンの彼方にあ
りし者、なんぢが證せし者、バプテスマを施し、人みなその許に往
くなり』二七ヨハネ答へて言ふ『人は天より與へられずば、何をも受
くること能はず。二八「我はキリストにあらず」唯「その前に遣さ
れたる者なり」と我が言ひしことに就きて證する者は汝らなり。二
九新婦をもつ者は新郎なり、新郎の友は、立ちて新郎の聲をきくとき
大に喜ぶ、この我が勸喜いま滿ちたり。三〇彼は必ず盛になり、
我は衰ふべし』三一上より來るものは凡ての物の上にあり、地より出
づるものは地の者にして、その語ることも地の事なり。天より來るも

のは凡ての物の上にあり。三二彼その見しところ聞きしところを證
したまふに、誰もその證を受けず。三三その證を受くる者は、印し
て神を眞なりとす。三四神の遣し給ひし者は神の言をかたる、神、
御靈を賜ひて量りなければなり。三五父は御子を愛し、萬物をその手
に委ね給へり。三六御子を信ずる者は永遠の生命をもち、御子に從
はぬ者は生命を見ず、反つて神の怒その上に止るなり。

第四章 一主、おのれの弟子を造り、之にバプテスマを施すこと、ヨ
ハネよりも多しと、パリサイ人に聞えたるを知り給ひし時、二（その
實イエス自らバプテスマを施ししにあらず、その弟子たちなり）三
ユダヤを去りて復ガリラヤに往き給ふ。四サマリヤを經ざるを得ず。
五サマリヤのスカルといふ町にいたり給へるが、この町はヤコブその
子ヨセフに與へし土地に近くして、六此處にヤコブの泉あり。イエ
ス旅路に疲れて泉の傍らに坐し給ふ、時は第六時頃なりき。七サマ
リヤの或女、水を汲まんとて來りたれば、イエス之に『われに飮ま
せよ』と言ひたまふ。八弟子たちは食物を買はんとて町にゆきしな

り。九サマリヤの女いふ『なんぢはユダヤ人なるに、如何なればサ
マリヤの女なる我に、飲むことを求むるか』これはユダヤ人とサマ
リヤ人とは交りせぬ故なり。一〇イエス答へて言ひ給ふ『なんぢ若
し神の賜物を知り、また「我に飲ませよ」といふ者の誰なるを知り
たらんには、之に求めしならん、さらば汝に活ける水を與へしもの
を』一一女いふ『主よ、なんぢは汲む物を持たず、井は深し、その
活ける水は何處より得しぞ。一二汝はこの井を我らに與へし我らの
父ヤコブよりも大なるか、彼も、その子らも、その家畜も、これよ
り飲みたり』一三イエス答へて言ひ給ふ『すべて此の水をのむ者は、
また渇かん。一四されど我があたふる水を飲む者は、永遠に渇くこと
なし。わが與ふる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きい
づべし』一五女いふ『主よ、わが渇くことなく、又ここに汲みに來
ぬために、その水を我にあたへよ』一六イエス言ひ給ふ『ゆきて夫
をここに呼びきたれ』一七女こたへて言ふ『われに夫なし』イエス
言ひ給ふ『夫なしといふは宜なり。一八夫は五人までありしが、今

ある者はなんぢの夫にあらず。無しと云へるは眞なり』一九女い
ふ『主よ、我なんぢを預言者とみとむ。二〇我らの先祖たちは此の山
にて拜したるに、汝らは拜すべき處をエルサレムなりと言ふ』二一
イエス言ひ給ふ『をんなよ、我が言ふことを信ぜよ、此の山にもエ
ルサレムにもあらで、汝ら父を拜する時きたるなり。二二汝らは知
らぬ者を拜し、我らは知る者を拜す、救はユダヤ人より出づればな
り。二三されど眞の禮拜者の、靈と眞とをもて父を拜する時きたら
ん、今すでに來れり。父はかくのごとく拜する者を求めたまふ。二四
神は靈なれば、拜する者も靈と眞とをもて拜すべきなり』二五女い
ふ『我はキリストと稱ふるメシヤの來ることを知る、彼きたらば諸般
のことを我らに告げん』二六イエス言ひ給ふ『なんぢと語る我はそれ
なり』二七時に弟子たち歸りきたりて、女と語り給ふを怪しみたれ
ど、何を求め給ふか、何故かれと語り給ふかと問ふもの誰もなし。二
八ここに女その水瓶を遺しおき、町にゆきて人々にいふ、二九『來
りて見よ、わが爲しし事をことごとく我に告げし人を。この人ある

いはキリストならんか』三〇人々町を出でてイエスの許にゆく。三一
この間に弟子たち請ひて言ふ『ラビ、食し給へ』三二イエス言ひた
まふ『我には汝らの知らぬ我が食する食物あり』三三弟子たち互
にいふ『たれか食する物を持ち來りしか』三四イエス言ひ給ふ『わ
れを遣し給へる物の御意を行ひ、その御業をなし遂ぐるは、是わが
食物なり。三五なんぢら收穫時の來るには、なほ四月ありと言はず
や。我なんぢらに告ぐ、目をあげて畑を見よ、はや黄ばみて收穫時
になれり。三六刈る者は價を受けて永遠の生命の實を集む。播く者
と刈る者とともに喜ばん爲なり。三七俚諺に、彼は播き此は刈ると
いへるは、斯において眞なり。三八我なんぢらを遣して、勞せざり
しものを刈らしむ。他の人々さきに勞し、汝らはその勞を收むるな
り』三九此の町の多くのサマリヤ人、女の『わが爲しし事をことごと
く告げし』と證したる言によりてイエスを信じたり。四〇かくてサ
マリヤ人御許にきたりて、此の町に留らんことを請ひたれば、此處
に二日とどまり給ふ。四一御言によりて猶もおほくの人信じたり。四

二かくて女に言ふ『今われらの信ずるは、汝のかたる言によるに
あらず、親しく聽きて、これは眞に世の救主なりと知りたる故な
り』四三二日の後、イエスここを去りてガリラヤに往き給ふ。四四イ
エス自ら證して、預言者は己が郷にて尊ばるる事なしと言ひ給へ
り。四五かくてガリラヤに往き給へば、ガリラヤ人これを迎へたり。
前に彼らも祭に上り、その祭の時にエルサレムにて行ひ給ひし事
を見たる故なり。四六イエス復ガリラヤのカナに往き給ふ、ここは前
に水を葡萄酒になし給ひし處なり。時に王の近臣あり、その子カペ
ナウムにて病みゐたれば、四七イエスのユダヤよりガリラヤに來り給
へるを聞き、御許にゆきて、カペナウムに下りその子を醫し給はん
ことを請ふ、子は死ぬばかりなりしなり。四八ここにイエス言ひ給ふ
『なんぢら徴と不思議とを見ずば、信ぜじ』四九近臣いふ『主よ、わ
が子の死なぬ間に下り給へ』五〇イエス言ひ給ふ『かへれ、汝の子
は生くるなり』彼はイエスの言ひ給ひしことを信じて歸りしが、五一
下る途中、僕ども往き遇ひて、その子の生きたることを告ぐ。五二

その癒えはじめし時を問ひしに『昨日の第七時に熱去れり』といふ。
五三父その時の、イエスが『なんぢの子は生くるなり』と言ひ給ひし
時と同じきを知り、而して己も家の者もみな信じたり。五四是はイ
エス、ユダヤよりガリラヤに往きて爲し給へる第二の徴なり。
第五章一この後ユダヤ人の祭ありて、イエス、エルサレムに上り
給ふ。二エルサレムにある羊門のほとりに、ヘブル語にてベテスダ
といふ池あり、之にそひて五つの廊あり。三その内に病める者、盲人
、跛者、痩せ衰へたる者ども夥多しく臥しゐたり。（水の動くを待
てるなり。四それは御使のをりをり降りて水を動かすことあれば、そ
の動きたるのち最先に池にいる者は、如何なる病にても癒ゆる故な
り）五爰に三十八年病になやむ人ありしが、六イエスその臥し居る
を見、かつその病の久しきを知り、之に『なんぢ癒えんことを願ふ
か』と言ひ給へば、七病める者こたふ『主よ、水の動くとき、我を池
に入るる者なし、我が往くほどに、他の人さきだち下るなり』八イエ
ス言ひ給ふ『起きよ、床を取りあげて歩め』九この人ただちに癒え、

床を取りあげて歩めり。その日は安息日に當りたれば、一〇ユダヤ人
醫されたる人にいふ『安息日なり、床を取りあぐるは宜しからず』一一
答ふ『われを醫しその人「床を取りあげて歩め」と云へり』一二
かれら問ふ『「取りあげて歩め」と言ひし人は誰なるか』一三されど
醫されし者は、その誰なるを知らざりき、そこに群衆ゐたればイエ
ス退き給ひしに因る。一四この後イエス宮にて彼に遇ひて言ひたま
ふ『視よ、なんぢ癒えたり。再び罪を犯すな、恐らくは更に大なる
惡しきこと汝に起らん』一五この人ゆきてユダヤ人に、おのれを醫
したる者のイエスなるを告ぐ。一六ここにユダヤ人、かかる事を安息
日になすとて、イエスを責めたれば、一七イエス答へ給ふ『わが父は
今にいたるまで働き給ふ、我もまた働くなり』一八此に由りてユダ
ヤ人いよいよイエスを殺さんと思ふ。それは安息日を破るのみなら
ず、神を我が父といひて、己を神と等しき者になし給ひし故なり。
一九イエス答へて言ひ給ふ『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のな
し給ふことを見て行ふほかは、自ら何事をも爲し得ず、父のなし

給ふことは子もまた同じく爲すなり。二〇父は子を愛して、その爲す
所をことごとく子に示したまふ。また更に大なる業を示し給はん、
汝等をして怪しましめん爲なり。二一父の死にし者を起して活し給
ふごとく、子もまた己が欲する者を活すなり。二二父は誰をも審き給
はず、審判をさへみな子に委ね給へり。二三これ凡ての人の父を敬
ふごとくに子を敬はん爲なり。子を敬はぬ者は、之を遣し給ひし
父をも敬はぬなり。二四誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をきき
て我を遣し給ひし者を信ずる人は、永遠の生命をもち、かつ審判に
至らず、死より生命に移れるなり。二五誠にまことに汝らに告ぐ、
死にし人、神の子の聲をきく時きたらん、今すでに來れり、而して聞
く人は活くべし。二六これ父みづから生命を有ち給ふごとく、子にも
自ら生命を有つことを得させ、二七また人の子たるに因りて、審判す
る權を與へ給ひしなり。二八汝ら之を怪しむな、墓にある者みな神
の子の聲をききて出づる時きたらん。二九善をなしし者は生命に甦
へり、惡を行ひし者は審判に甦へるべし。三〇我みづから何事もな

し能はず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し、それは我が
意を求めずして、我を遣し給ひし者の御意を求むるに因る。三一我
もし己につきて證せば、我が證は眞ならず。三二我につきて證
する者は他にあり、その我につきて證する證の眞なるを我は知る。
三三なんぢら前に人をヨハネに遣ししに、彼は眞につきて證せり。
三四我は人よりの證を受くる事をせねど、唯なんぢらの救はれん爲
に之を言ふ。三五かれは燃えて輝く燈火なりしが、汝等その光に
ありて暫時よろこぶ事をせり。三六されど我にはヨハネの證よりも
大なる證あり。父の我にあたへて成し遂げしめ給ふわざ、即ち我
がおこなふ業は、我につきて父の我を遣し給ひたるを證し、三七ま
た我をおくり給ひし父も、我につきて證し給へり。汝らは未だその
御聲を聞きし事なく、その御形を見し事なし。三八その御言は汝ら
の衷にとどまらず、その遣し給ひし者を信ぜぬに因りて知らるるな
り。三九汝らは聖書に永遠の生命ありと思ひて之を査ぶ、されどこ
の聖書は我につきて證するものなり。四〇然るに汝ら生命を得んた

めに我に來るを欲せず。四一我は人よりの譽をうくる事をせず、四二
ただ汝らの衷に神を愛する事なきを知る。四三我はわが父の名によ
りて來りしに、汝等われを受けず、もし他の人おのれの名によりて
來らば之を受けん。四四互に譽をうけて、唯一の神よりの譽を求
めぬ汝らは、爭で信ずることを得んや。四五われ父に汝らを訴へ
んとすと思ふな、訴ふるもの一人あり、汝らが頼とするモーセな
り。四六若しモーセを信ぜしならば、我を信ぜしならん、彼は我につ
きて録したればなり。四七されど彼の書を信ぜずば、爭で我が言を
信ぜんや』

第六章
一この後イエス、ガリラヤの海、即ちテベリヤの海の彼方に
ゆき給へば、二大なる群衆これに從ふ、これは病みたる者に行ひ
たまへる徴を見し故なり。三イエス山に登りて、弟子たちと共にそ
こに坐し給ふ。四時はユダヤ人の祭なる過越に近し。五イエス眼を
あげて大なる群衆のきたるを見て、ピリポに言ひ給ふ『われら何處
よりパンを買ひて、此の人々に食はすべきか』六かく言ひ給ふはピリ

ポを試むるためにて、自ら爲さんとする事を知り給ふなり。七ピリ
ポ答へて言ふ『二百デナリのパンありとも、人々すこしづつ受くる
になほ足らじ』八弟子の一人にてシモン・ペテロの兄弟なるアンデ
レ言ふ九『ここに一人の童子あり、大麥のパン五つと小き肴二つと
をもてり、されど此の多くの人には何にかならん』一〇イエス言ひた
まふ『人々を坐せしめよ』その處に多くの草ありて人々坐せしが、そ
の數おほよそ五千人なりき。一一ここにイエス、パンを取りて謝し、
坐したる人々に分ちあたへ、また肴をも然なして、その欲するほど
與へ給ふ。一二人々の飽きたるのち弟子たちに言ひたまふ『廢るもの
のなきように擘きたる餘をあつめよ』一三乃ち集めたるに、五つの
大麥のパンの擘きたるを食ひしものの餘、十二の筐に滿ちたり。一四
人々その爲し給ひし徴を見ていふ『實にこれは世に來るべき預言者
なり』一五イエス彼らが來りて己をとらへ、王となさんとするを知
り、復ひとりにて山に遁れたまふ。一六夕になりて弟子たち海にく
だり、一七船にのり海を渡りて、カペナウムに往かんとす。既に暗く

なりたるに、イエス未だ來りたまはず。一八大風ふきて海やや荒出
づ。一九かくて四五十丁こぎ出でしに、イエスの海の上をあゆみ、船
に近づき給ふを見て懼れたれば、二〇イエス言ひたまふ『我なり、懼
るな』二一乃ちイエスを船に歡び迎へしに、船は直ちに往かんとす
る地に著けり。二二明くる日、海のかなたに立てる群衆は、一艘のほ
かに船なく、又イエスは弟子たちと共に乘りたまはず、弟子たちのみ
出でゆきしを見たり。二三（時にテベリヤより數艘の船、主の謝して
人々にパンを食はせ給ひし處の近くに來る）二四ここに群衆はイエ
スも居給はず、弟子たちも居らぬを見て、その船に乘り、イエスを尋
ねてカペナウムに往けり。二五遂に海の彼方にてイエスに遇ひて言ふ
『ラビ、何時ここに來り給ひしか』二六イエス答へて言ひ給ふ『まこと
に誠に汝らに告ぐ、汝らが我を尋ぬるは、徴を見し故ならで、パ
ンを食ひて飽きたる故なり。二七朽ちる糧のためならで、永遠の生命
にまで至る糧のために働け。これは人の子の汝らに與へんとする
ものなり、父なる神は印して彼を證し給ひたるに因る』二八ここに

彼ら言ふ『われら神の業を行はんには何をなすべきか』二九イエス答
へて言ひたまふ『神の業はその遣し給へる者を信ずる是なり』三〇
彼ら言ふ『さらば我らが見て汝を信ぜしために、何の徴をなすか、
何を行ふか。三一我らの先祖は荒野にてマナを食へり、録して「天
よりパンを彼らに與へて食はしめたり」と云へるが如し』三二イエス
言ひ給ふ『まことに誠に汝らに告ぐ、モーセは天よりのパンを汝
らに與へしにあらず、されど我が父は天よりの眞のパンを與へたま
ふ。三三神のパンは天より降りて生命を世に與ふるものなり』三四彼
等いふ『主よ、そのパンを常に與へよ』三五イエス言ひ給ふ『われは
生命のパンなり、我にきたる者は飢ゑず、我を信ずる者はいつまでも
渇くことなからん。三六されど汝らは我を見てなほ信ぜず、我さき
に之を告げたり。三七父の我に賜ふものは皆われに來らん、我にきた
る者は我これを退けず。三八夫わが天より降りしは、我が意をなさ
ん爲にあらず、我を遣し給ひし者の御意をなさん爲なり。三九我を
遣し給ひし者の御意は、すべて我に賜ひし者を、我その一つをも失

はずして、終の日に甦へらする是なり。四〇わが父の御意は、すべ
て子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれ
を甦へらすべし』四一ここにユダヤ人ら、イエスの『われは天より
降りしパンなり』と言ひ給ひしにより、四二呟きて言ふ『これはヨ
セフの子イエスならずや、我等はその父母を知る、何ぞ今「われは天
より降れり」と言ふか』四三イエス答へて言ひ給ふ『なんぢら呟き
合ふな、四四我を遣しし父ひき給はずば、誰も我に來ること能はず、
我これを終の日に甦へらすべし。四五預言者たちの書に「彼らみな
神に教へられん」と録されたり。すべて父より聽きて學びし者は我に
きたる。四六これは父を見し者ありとにあらず、ただ神よりの者のみ
父を見たり。四七まことに誠になんぢらに告ぐ、信ずる者は永遠の
生命をもつ。四八我は生命のパンなり。四九汝らの先祖は、荒野にて
マナを食ひしが死にたり。五〇天より降るパンは、食ふ者をして死ぬ
る事なからしむるなり。五一我は天より降りし活けるパンなり、人こ
のパンを食はば永遠に活くべし。我が與ふるパンは我が肉なり、世

の生命のために之を與へん』五二ここにユダヤ人たがひに爭ひて言
ふ『この人はいかで己が肉を我らに與へて食はしむることを得ん』五
三イエス言ひ給ふ『まことに誠になんぢらに告ぐ、人の子の肉を食
はず、その血を飮まずば、汝らに生命なし。五四わが肉をくらひ、我
が血をのむ者は、永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦へらす
べし。五五夫わが肉は眞の食物、わが血は眞の飮物なり。五六わが
肉をくらひ我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。五七活
ける父の我をつかはし、我の父によりて活くるごとく、我をくらふ者
も我によりて活くべし。五八天より降りしパンは、先祖たちが食ひて
なほ死にし如きものにあらず、此のパンを食ふものは永遠に活きん』
五九此等のことはイエス、カペナウムにて教ふるとき、會堂にて言
ひ給ひしなり。六〇弟子たちの中おほくの者これを聞きて言ふ『こは
甚だしき言なるかな、誰か能く聽き得べき』六一イエス弟子たちの
之に就きて呟くを自ら知りて言ひ給ふ『このことは汝らを躓かす
るか。六二さらば人の子のもと居りし處に昇るを見ば如何に。六

三活すものは靈なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、
靈なり、生命なり。六四されど汝らの中に信ぜぬ者どもあり』イエ
ス初より、信ぜぬ者どもは誰、おのれを賣る者は誰なるかを知り給
へるなり。六五かくて言ひたまふ『この故に我さきに汝らに告げて、
父より賜はりたる者ならずば我に來るを得ずと言ひしなり』六六ここ
において、弟子たちのうち多くの者かへり去りて、復イエスと共に歩
まざりき。六七イエス十二弟子に言ひ給ふ『なんじらも去らんとする
か』六八シモン・ペテロ答ふ『主よ、われら誰にゆかん、永遠の生命の
言は汝にあり。六九又われらは信じかつ知る、なんぢは神の聖者
なり』七〇イエス答へ給ふ『われ汝ら十二人を選びしにあらずや、然
るに汝らの中の一人は惡魔なり』七一イスカリオテのシモンの子ユ
ダを指して言ひ給へるなり、彼は十二弟子の一人なれど、イエスを賣
らんとする者なり。

第七章 一この後イエス、ガリラヤのうちを巡りゐ給ふ、ユダヤ人
の殺さんとするに因りて、ユダヤのうちを巡ることを欲し給はぬな

り。二ユダヤ人の假廬の祭ちかづきたれば、三兄弟たちイエスに言
ふ『なんぢの行ふ業を弟子たちにも見せんために、此處を去りてユ
ダヤに往け。四誰にても自ら顯れんことを求めて、隱に業をなす
者なし。汝これらの事を爲すからには、己を世にあらはせ』五是そ
の兄弟たちもイエスを信ぜぬ故なり。六ここにイエス言ひ給ふ『わ
が時はいまだ到らず、汝らの時は常に備れり。七世は汝らを憎む
こと能はねど我を憎む、我は世の所作の惡しきを證すればなり。八
なんぢら祭に上れ、わが時いまだ滿たねば、我は今この祭にのぼら
ず』九かく言ひて尚ガリラヤに留り給ふ。一〇而して兄弟たちの祭
にのぼりたる後、あらはならで潛びやかに上り給ふ。一一祭にあた
りユダヤ人らイエスを尋ねて『かれは何處に居るか』と言ふ。一二ま
た群衆のうちに囁く者おほくありて、或は『イエスは善き人なり』
といひ、或は『いな、群衆を惑すなり』と言ふ。一三されどユダヤ
人を懼るるに因りて、誰もイエスのことを公然に言はず。一四祭も、
はや半となりし頃、イエス宮にのぼりて教へ給へば、一五ユダヤ人あ

やしみて言ふ『この人は學びし事なきに、如何にして書を知るか』一
六イエス答へて言ひ給ふ『わが教はわが教にあらず、我を遣し給
ひし者の教なり。一七人もし御意を行はんと欲せば、此の教の神
よりか、我が己より語るかを知らん。一八己より語るものは己の
榮光をもとむ、己を遣しし者の榮光を求むる者は眞なり、その
中に不義なし。一九モーセは汝らに律法を與へしにあらずや、されど
汝等のうちに律法を守る者なし。汝ら何ゆゑ我を殺さんとするか』
二〇群衆こたふ『なんぢは惡鬼に憑かれたり、誰が汝を殺さんとす
るぞ』二一イエス答へて言ひ給ふ『われ一つの業をなしたれば、汝
等みな怪しめり。二二モーセは汝らに割禮を命じたり（これはモー
セより起りしとにあらず、先祖より起りしなり）この故に汝ら安息
日にも人に割禮を施す。二三モーセの律法の廢らぬために、安息日
に人の割禮を受くる事あらば、何ぞ安息日に人の全身を健かにせし
とて我を怒るか。二四外貌によりて裁くな、正しき審判にて審け』二
五ここにエルサレムの或人々いふ『これは人々の殺さんとする者なら

ずや。二六視よ、公然に語るに、之に對して何をも言ふ者なし、司
たちは此の人のキリストたるを眞に認めしならんか。二七されど我
らは此の人の何處よりかを知る、キリストの來る時には、その何處よ
りかを知る者なし』二八ここにイエス宮にて教へつつ呼はりて言ひ給
ふ『なんぢら我を知り、亦わが何處よりかを知る。されど我は己よ
り來るにあらず、眞の者ありて我を遣し給へり。汝らは彼を知ら
ず、二九我は彼を知る。我は彼より出で、彼は我を遣し給ひしに因り
てなり』三〇ここに人々イエスを捕へんと謀りたれど、彼の時いまだ
到らぬ故に手出する者なかりき。三一かくて群衆のうち多くの人々
イエスを信じて『キリスト來るとも、此の人の行ひしより多く徴を
行はんや』と言ふ。三二イエスにつきて群衆のかく囁くことパリ
サイ人の耳に入りたれば、祭司長・パリサイ人ら彼を捕へんとて下役
どもを遣ししに、三三イエス言ひ給ふ『我なほ暫く汝らと偕に居
り、而してのち我を遣し給ひし者の御許に往く。三四汝らは我を尋ね
ん、されど逢はざるべし、汝等わが居る處に往くこと能はず』三五

ここにユダヤ人ら互に云ふ『この人われらの逢ひ得ぬいづこに往か
んとするか、ギリシヤ人のうちに散りをる者に往きて、ギリシヤ人を
教へんとするか。三六その言に「なんぢら我を尋ねん、然れど逢は
ざるべし、汝ら我がをる處に往くこと能はず」と云へるは何ぞや』
三七祭の終の大なる日に、イエス立ちて呼はりて言ひたまふ『人
もし渇かば我に來りて飲め。三八我を信ずる者は、聖書に云へるごと
く、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし』三九これは彼を
信ずる者の受けんとする御靈を指して言ひ給ひしなり。イエス未だ
榮光を受け給はざれば、御靈いまだ降らざりしなり。四〇此等の言
をききて群衆のうちの或人は『これ眞にかの預言者なり』といひ、
四一或人は『これキリストなり』と言ひ、又ある人は『キリストいか
でガリラヤより出でんや、四二聖書に、キリストはダビデの裔またダ
ビデの居りし村ベツレヘムより出づと云へるならずや』と言ふ。四三
斯くイエスの事によりて、群衆のうちに紛爭おこりたり。四四その
中には、イエスを捕へんと欲する者もありしが、手出する者なかり

き。四五而して下役ども、祭司長・パリサイ人らの許に歸りたれば、
彼ら問ふ『なに故かれを曳き來らぬか』四六下役ども答ふ『この人の
語るごとく語りし人は未だなし』四七パリサイ人等これに答ふ『なん
ぢらも惑されしか、四八司たち又はパリサイ人のうちに、一人だに
彼を信ぜし者ありや、四九律法を知らぬこの群衆は詛はれたる者な
り』五〇彼等のうちの一人にてさきにイエスの許に來りしニコデモ言
ふ、五一『われらの律法は、先その人に聽き、その爲すところを知る
にあらずば、審く事をせんや』五二かれら答へて言ふ『なんぢもガリ
ラヤより出でしか、査べ見よ、預言者はガリラヤより起る事なし』五
三⊠斯くておのおの己が家に歸れり。

第八章一イエス、オリブ山にゆき給ふ。二夜明ごろ、また宮に入り
しに、民みな御許に來りたれば、坐して教へ給ふ。三ここに學者・パ
リサイ人ら、姦淫のとき捕へられたる女を連れきたり、眞中に立て
てイエスに言ふ、四『師よ、この女は姦淫のをり、そのまま捕へら
れたるなり。五モーセは律法に、斯かる者を石にて撃つべき事を我ら

に命じたるが、汝は如何に言ふか』六かく云へるは、イエスを試み
て、訴ふる種を得んとてなり。イエス身を屈め、指にて地に物書き
給ふ。七かれら問ひて止まざれば、イエス身を起して『なんぢらの中
、罪なき者まづ石を擲て』と言ひ、八また身を屈めて地に物書きたま
ふ。九彼等これを聞きて良心に責められ、老人をはじめ若き者まで
一人一人いでゆき、唯イエスと中に立てる女とのみ遺れり。一〇イ
エス身を起して、女のほかに誰も居らぬを見て言ひ給ふ『をんなよ、
汝を訴へたる者どもは何處にをるぞ、汝を罪する者なきか』一一
女いふ『主よ、誰もなし』イエス言ひ給ふ『われも汝を罪せじ、往
け、この後ふたたび罪を犯すな』⊠一二かくてイエスまた人々に語りて
言ひ給ふ『われは世の光なり、我に從ふ者は暗き中を歩まず、生命
の光を得べし』一三パリサイ人ら言ふ『なんぢは己につきて證す、
なんぢの證は眞ならず』一四イエス答へて言ひ給ふ『われ自ら己
につきて證すとも、我が證は眞なり、我は何處より來り何處に往
くを知る故なり。汝らは我が何處より來り、何處に往くを知らず、

一五なんぢらは肉によりて審く、我は誰をも審かず。
一六されど我も審かば、我が審判は眞なり、我は一人ならず、我と我を遣し給ひ
し者と偕なるに因る。一七また汝らの律法に、二人の證は眞なり
と録されたり。一八我みづから己につきて證をなし、我を遣し給
ひし父も我につきて證をなし給ふ』一九ここに彼ら言ふ『なんぢの
父は何處にあるか』イエス答へ給ふ『なんぢらは我をも我が父をも知
らず、我を知りしならば、我が父をも知りしならん』二〇イエス宮の
内にて教へし時、これらの事を賽錢函の傍らにて語り給ひしが、彼
の時いまだ到らぬ故に、誰も捕ふる者なかりき。二一かくてまた人々
に言ひ給ふ『われ往く、なんぢら我を尋ねん。されど己が罪のうちに
死なん、わが往くところに汝ら來ること能はず』二二ユダヤ人ら言
ふ『「わが往く處に汝ら來ること能はず」と云へるは、自殺せんと
てか』二三イエス言ひ給ふ『なんぢらは下より出で、我は上より出づ、
汝らは此の世より出で、我は此の世より出でず。二四之によりて我
なんぢらは己が罪のうちに死なんと云へるなり。汝等もし我の夫な

るを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし』二五彼ら言ふ『なんぢは誰なる
か』イエス言ひ給ふ『われは正しく汝らに告げ來りし所の者なり。
二六われ汝らに就きて語るべきこと審くべきこと多し、而して我を
遣し給ひし者は眞なり、我は彼に聽きしその事を世に告ぐるなり』
二七これは父をさして言ひ給へるを、彼らは悟らざりき。二八ここに
イエス言ひ給ふ『なんぢら人の子を擧げしのち、我の夫なるを知り、
又わが己によりて何事をも爲さず、ただ父の我に教へ給ひしごとく、
此等のことを語りたるを知らん。二九我を遣し給ひし者は、我とと
もに在す。我つねに御意に適ふことを行ふによりて、我を獨おき
給はず』三〇此等のことを語り給へるとき、多くの人々イエスを信じ
たり。三一ここにイエス己を信じたるユダヤ人に言ひたまふ『汝等
もし常に我が言に居らば、眞にわが弟子なり。三二また眞理を知ら
ん、而して眞理は汝らに自由を得さすべし』三三かれら答ふ『われは
アブラハムの裔にして、未だ人の奴隷となりし事なし。如何なれば
「なんぢら自由を得べし」と言ふか』三四イエス答へ給ふ『まことに

誠に汝らに告ぐ、すべて罪を犯す者は罪の奴隷なり。三五奴隷はと
こしへに家に居らず、子は永遠に居るなり。三六この故に子もし汝
らに自由を得させば、汝ら實に自由とならん。三七我は汝らがアブ
ラハムの裔なるを知る、されど我が言なんぢらの衷に留らぬ故に、
我を殺さんと謀る。三八我はわが父の許にて見しことを語り、汝ら
は又なんぢらの父より聞きしことを行ふ』三九かれら答へて言ふ『わ
れらの父はアブラハムなり』イエス言ひ給ふ『もしアブラハムの子な
らば、アブラハムの業をなさん。四〇然るに汝らは今、神より聽き
たる眞理を汝らに告ぐる者なる我を殺さんと謀る。アブラハムは斯
かることを爲さざりき。四一汝らは汝らの父の業を爲すなり』かれ
ら言ふ『われら淫行によりて生れず、我らの父はただ一人、即ち神
なり』四二イエス言ひたまふ『神もし汝らの父ならば、汝ら我を愛
せん、われ神より出でて來ればなり。我は己より來るにあらず、神
われを遣し給へり。四三何故わが語ることを悟らぬか、是わが言を
きくこと能はぬに因る。四四汝らは己が父惡魔より出でて、己が父

の慾を行はんことを望む。彼は最初より人殺なり、また眞その中
になき故に眞に立たず、彼は虚僞をかたる每に己より語る、それは
虚僞者にして虚僞の父なればなり。
四五然るに我は眞を告ぐるによりて、汝ら我を信ぜず、
四六汝等のうち誰か我を罪ありとして責め得る。われ眞を告ぐるに、我を信ぜぬは何故ぞ。
四七神より出づる者は神の言をきく、汝らの聽かぬは神より出でぬに因る』
四八ユダヤ人こたへて言ふ『なんぢはサマリヤ人にて惡鬼に憑かれたる者なりと、我らが云へるは宜ならずや』
四九イエス答へ給ふ『われは惡鬼に憑かれず、反つて我が父を敬ふ、なんぢらは我を輕んず。
五〇我はおのれの榮光を求めず、之を求めかつ審判し給ふ者あり。
五一誠にまことに汝らに告ぐ、人もし我が言を守らば、永遠に死を見ざるべし』
五二ユダヤ人いふ『今ぞなんぢが惡鬼に憑かれたるを知る。アブラハムも預言者たちも死にたり、然るに汝は「人もし我が言を守らば、永遠に死を味はざるべし」と云ふ。
五三汝われらの父アブラハムよりも大なるか、彼は死に、預言者たちも死にたり、汝はお

のれを誰とするか』五四イエス答へたまふ『我もし己に榮光を歸せ
ば、我が榮光は空し。我に榮光を歸する者は我が父なり、即ち汝
らが己の神と稱ふる者なり。五五然るに汝らは彼を知らず、我は彼
を知る。もし彼を知らずと言はば、汝らの如く僞者たるべし。さ
れど我は彼を知り、且その御言を守る。五六汝らの父アブラハムは、
我が日を見んとて樂しみ且これを見て喜べり』五七ユダヤ人いふ『な
んぢ未だ五十歳にもならぬにアブラハムを見しか』五八イエス言ひ給
ふ『まことに誠に汝らに告ぐ、アブラハムの生れいでぬ前より我
は在るなり』五九ここに彼ら石をとりてイエスに擲たんとしたるに、
イエス隱れて宮を出で給へり。

第九章

一イエス途往くとき、生れながらの盲人を見給ひたれば、二
弟子たち問ひて言ふ『ラビ、この人の盲目にて生れしは、誰の罪によ
るぞ、己のか、親のか』三イエス答へ給ふ『この人の罪にも親の罪に
もあらず、ただ彼の上に神の業の顯れん爲なり。四我を遣し給ひし
者の業を我ら晝の間になさざる可からず。夜きたらん、その時は誰

も働くこと能はず。五われ世にをる間は世の光なり』六かく言ひ
て地に唾し、唾にて泥をつくり、之を盲人の目にぬりて言ひ給ふ、
七『ゆきてシロアム（釋けば遣されたる者）の池にて洗へ』乃ちゆ
きて洗ひたれば、見ゆることを得て歸れり。八ここに隣人および前
に彼の乞食なるを見し者ども言ふ『この人は坐して物乞ひゐたるに
あらずや』九或人は『夫なり』といひ、或人は『否、ただ似たるなり』
といふ。かの者『われは夫なり』と言ひたれば、一〇人々いふ『さら
ば汝の目は如何にして開きたるか』一一答ふ『イエスといふ人、泥
をつくり我が目に塗りて言ふ「シロアムに往きて洗へ」と、乃ち往
きて洗ひたれば、物見ることを得たり』一二彼ら『その人は何處に居
るか』と言へば『知らず』と答ふ。一三人々さきに盲目なりし者をパ
リサイ人らの許に連れきたる。一四イエスの泥をつくりて其の人の目
をあけし日は安息日なりき。一五パリサイ人らも亦いかにして物見る
ことを得しかと問ひたれば、彼いふ『かの人わが目に泥をぬり、我こ
れを洗ひて見ゆることを得たり』一六パリサイ人の中なる或人は『か

の人、安息日を守らぬ故に、神より出でし者にあらず』と言ひ、或人
は『罪ある人いかで斯かる徴をなし得んや』と言ひて互に相爭ひ
たり。一七ここにまた盲目なりし人に言ふ『なんぢの目をあけしに因
り、汝は彼に就きて如何にいふか』彼いふ『預言者なり』一八ユダ
ヤ人ら、彼が盲目なりしに見ゆるやうになりしことを、未だ信ぜずし
て、目の開きたる人の兩親を呼び、一九問ひて言ふ『これは盲目にて
生れしと言ふ汝らの子なりや、さらば今いかにして見ゆるか』二〇
兩親こたへて言ふ『かれの我が子なることと、盲目にて生れたる事と
を知る。二一されど今いかにして見ゆるかを知らず、又その目をあけ
しは誰なるか、我らは知らず、彼に問へ、年長けたれば自ら己がこ
とを語らん』二二兩親のかく言ひしはユダヤ人を懼れたるなり。ユダ
ヤ人ら相議りて『若しイエスをキリストと言ひ顯す者あらば、除名
すべし』と定めたるに因る。二三兩親の『かれ年長けたれば彼に問へ』
と云へるは此の故なり。二四かれら盲目なりし人を再び呼びて言ふ
『神に榮光を歸せよ、我等はかの人の罪人たるを知る』二五答ふ『か

れ罪人なるか、我は知らず、ただ一つの事をしる、即ち我さきに盲目
たりしが、今見ゆることを得たる是なり』二六彼ら言ふ『かれは汝に
何をなししか、如何にして目をあけしか』二七答ふ『われ既に汝らに
告げたれど聽かざりき。何ぞまた聽かんとするか、汝らもその弟子
とならんことを望むか』二八かれら罵りて言ふ『なんぢは其の弟子
なり、我等モーセの弟子なり。二九モーセに神の語り給ひしことを知
れど、此の人の何處よりかを知らず』三〇答へて言ふ『その何處より
かを知らずとは怪しき事なり、彼わが目をあけしに。三一神は罪人に
聽き給はねど、敬虔にして御意をおこなふ人に聽き給ふことを我ら
は知る。三二世の太初より、盲目にて生れし者の目をあけし人あるを
聞きし事なし。三三かの人もし神より出でずば、何事をも爲し得ざら
ん』三四かれら答へて『なんぢ全く罪のうちに生れながら、我らを
教ふるか』と言ひて、遂に彼を追ひ出せり。三五イエスその追ひ出さ
れしことを聞き、彼に逢ひて言ひ給ふ『なんぢ人の子を信ずるか』三
六答へて言ふ『主よ、それは誰なる乎、われ信ぜまほし』三七イエス

言ひ給ふ『なんぢ彼を見たり、汝と語る者は夫なり』三八ここに彼
『主よ、我は信ず』といひて拜せり。三九イエス言ひ給ふ『われ審判
の爲にこの世に來れり。見えぬ人は見え、見ゆる人は盲目とならん
爲なり』四〇パリサイ人の中イエスと共に居りし者、これを聞きて言
ふ『我らも盲目なるか』四一イエス言ひ給ふ『もし盲目なりしならば、
罪なかりしならん、されど見ゆと言ふ汝らの罪は遺れり』

第一〇章 一『まことに誠に汝らに告ぐ、羊の檻に門より入らずし
て、他より越ゆる者は、盜人なり、強盜なり。二門より入る者は、羊
の牧者なり。三門守は彼のために開き、羊はその聲をきき、彼は己
の羊の名を呼びて牽きいだす。四悉とく其の羊をいだしし時、こ
れに先だちゆく、羊その聲を知るによりて從ふなり。五他の者には
從はず、反って逃ぐ、他の者どもの聲を知らぬ故なり』六イエスこの
譬を言ひ給へど、彼らその何事をかたり給ふかを知らざりき。七こ
の故にイエス復いひ給ふ『まことに誠に汝らに告ぐ、我は羊の門
なり。八すべて我より前に來りし者は、盜人なり、強盜なり、羊は之

に聽かざりき。九我は門なり、おほよそ我によりて入る者は救はれ、
かつ出入をなし、草を得べし。一〇盜人のきたるは盜み、殺し、亡
さんとするの他なし。わが來るは羊に生命を得しめ、かつ豐に得し
めん爲なり。一一我は善き牧者なり、善き牧者は羊のために生命
を捨つ。一二牧者ならず、羊も己がものならぬ雇人は、豺狼のき
たるを見れば羊を棄てて逃ぐ、――豺狼は羊をうばひ且ちらす――
一三彼は雇人にて、その羊を顧みぬ故なり。一四我は善き牧者に
して、我がものを知り、我がものは我を知る、一五父の我を知り、我
の父を知るが如し、我は羊のために生命を捨つ。一六我には亦この
檻のものならぬ他の羊あり、之をも導かざるを得ず、彼らは我が
聲をきかん、遂に一つの群ひとりの牧者となるべし。一七之により
て父は我を愛し給ふ、それは我ふたたび生命を得んために生命を捨
つる故なり。一八人これを我より取るにあらず、我みづから捨つるな
り。我は之をすつる權あり、復これを得る權あり、我この命令をわが
父より受けたり』一九これらの言によりて復ユダヤ人のうちに紛爭

おこり、二〇その中なる多くの者いふ『かれは惡鬼に憑かれて氣狂へ
り、何ぞ之にきくか』二一他の者ども言ふ『これは惡鬼に憑かれたる
者の言にあらず、惡鬼は盲人の目をあけ得んや』二二その頃エルサ
レムに宮潔の祭あり、時は冬なり。二三イエス宮の内、ソロモンの
廊を歩みたまふに、二四ユダヤ人ら之を取圍みて言ふ『何時まで我ら
の心を惑しむるか、汝キリストならば明白に告げよ』二五イエス
答へ給ふ『われ既に告げたれど汝ら信ぜず、わが父の名によりて行
ふわざは、我に就きて證す。二六されど汝らは信ぜず、我が羊な
らぬ故なり。二七わが羊はわが聲をきき、我は彼らを知り、彼らは
我に從ふ。二八我かれらに永遠の生命を與ふれば、彼らは永遠に亡
ぶることなく、又かれらを我が手より奪ふ者あらじ。二九彼らを我に
あたへ給ひし我が父は、一切のものよりも大なれば、誰にても父の
御手よりは奪ふこと能はず。三〇我と父とは一つなり』三一ユダヤ人
また石を取りあげてイエスを撃たんとす。三二イエス答へ給ふ『われ
は父によりて多くの善き業を汝らに示したり、その孰の業ゆゑに

我を石にて撃たんとするか』三三ユダヤ人こたふ『なんぢを石にて撃
つは善きわざの故ならず、言の故にして、なんぢ人なるに、己を
神とする故なり』三四イエス答へ給ふ『なんぢらの律法に「われ言ふ、
汝らは神なり」と録されたるに非ずや。三五かく神の言を賜はりし
人々を神と云へり。聖書は廢るべきにあらず、三六然るに父の潔め別
ちて世に遣し給ひし者が「われは神の子なり」と言へばとて、何ぞ
「言を言ふ」といふか。三七我もし我が父のわざを行はずば、我
を信ずな、三八もし行はば、假令われを信ぜずとも、その業を信ぜ
よ。さらば父の我にをり、我の父に居ることを知りて悟らん』三九か
れら復イエスを捕へんとせしが、その手より脱れて去り給へり。四〇
かくてイエス復ヨルダンの彼方、ヨハネの最初にバプテスマを施し
たる處にいたり、其處にとどまり給ひしが、四一多くの人みもとに
來りて『ヨハネは何の徴をも行はざりしかど、この人に就きてヨハ
ネの言ひし事は、ことごとく眞なりき』と言ふ。四二而して多くの
人かしこにてイエスを信じたり。

第一一章 一ここに病める者あり、ラザロと云ふ、マリヤとその姉妹
マルタとの村ベタニヤの人なり。二此のマリヤは、主に香油をぬ
り、頭髪にて御足を拭ひし者にして、病めるラザロはその兄弟なり。
三姉妹ら人をイエスに遣して『主、視よ、なんぢの愛し給ふもの病
めり』と言はしむ。四之を聞きてイエス言ひ給ふ『この病は死に至
らず、神の榮光のため、神の子のこれに由りて榮光を受けんためな
り』五イエスはマルタと、その姉妹と、ラザロとを愛し給へり。六ラ
ザロの病みたるを聞きて、その居給ひし處になほ二日とどまり、七
而してのち弟子たちに言ひ給ふ『われら復ユダヤに往くべし』八弟子
たち言ふ『ラビ、この程もユダヤ人、なんぢを石にて撃たんとせしに、
復かしこに往き給ふか』九イエス答へたまふ『一日に十二時あるなら
ずや、人もし晝あるかば、此の世の光を見るゆゑに躓くことなし。
一〇夜あるかば、光その人になき故に躓くなり』一一かく言ひて復
その後いひ給ふ『われらの友ラザロ眠れり、されど我よび起さん爲に
往くなり』一二弟子たち言ふ『主よ、眠れるならば癒ゆべし』一三イエ

スは彼が死にたることを言ひ給ひしなれど、弟子たちは寢ねて眠れ
るを言ひ給ふと思へるなり。一四ここにイエス明白に言ひ給ふ『ラザ
ロは死にたり。一五我かしこに居らざりし事を汝等のために喜ぶ、
汝等をして信ぜしめんとてなり。されど我ら今その許に往くべし』
一六デドモと稱ふるトマス、他の弟子たちに言ふ『われらも往きて彼
と共に死ぬべし』一七さてイエス來り見給へば、ラザロの墓にあるこ
と既に四日なりき。一八ベタニヤはエルサレムに近くして、二十五丁
ばかりの距離なるが、一九數多のユダヤ人、マルタとマリヤとをその
兄弟の事につき慰めんとて來れり。二〇マルタはイエス來給ふと聞
きて出で迎へたれど、マリヤはなほ家に坐し居たり。二一マルタ、イ
エスに言ふ『主よ、もし此處に在ししならば、我が兄弟は死なざり
しものを。二二されど今にても我は知る、何事を神に願ひ給ふとも、
神は與へ給はん』二三イエス言ひ給ふ『なんぢの兄弟は甦へるべし』
二四マルタ言ふ『をはりの日、復活のときに甦へるべきを知る』二
五イエス言ひ給ふ『我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬ

とも生きん。二六凡そ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし。
汝これを信ずるか』二七彼いふ『主よ然り、我なんぢは世に來るべき
キリスト、神の子なりと信ず』二八かく言ひて後、ゆきて竊にその
姉妹マリヤを呼びて『師きたりて汝を呼びたまふ』と言ふ。二九マ
リヤ之をきき、急ぎ起ちて御許に往けり。三〇イエスは未だ村に入ら
ず、尚マルタの迎へし處に居給ふ。三一マリヤと共に家に居りて慰
め居たるユダヤ人、その急ぎ立ちて出でゆくを見、かれは歎かんとて
墓に往くと思ひて後に隨へり。三二かくてマリヤ、イエスの居給ふ
處にいたり、之を見てその足下に伏し『主よ、もし此處に在ししな
らば、我が兄弟は死なざりしものを』と言ふ。三三イエスかれが泣
き居り、共に來りしユダヤ人も泣き居るを見て、心を傷め悲しみて
言ひ給ふ、三四『かれを何處に置きしか』彼ら言ふ『主よ、來りて見給
へ』三五イエス涙をながし給ふ。三六ここにユダヤ人ら言ふ『視よ、
いかばかり彼を愛せしぞや』三七その中の或者ども言ふ『盲人の目を
あけし此の人にして、彼を死なざらしむること能はざりしか』三八イ

エスまた心を傷めつつ墓にいたり給ふ。墓は洞にして石を置きて塞
げり。三九イエス言ひ給ふ『石を除けよ』死にし人の姉妹マルタ言ふ
『主よ、彼ははや臭し、四日を經たればなり』四〇イエス言ひ給ふ『われ
汝に、もし信ぜば神の榮光を見んと言ひしにあらずや』四一ここに
人々石を除けたり。イエス目を擧げて言ひたまふ『父よ、我にきき給
ひしを謝す。四二常にきき給ふを我は知る。然るに斯く言ふは、傍
らに立つ群衆の爲にして、汝の我を遣し給ひしことを之に信ぜし
めんとてなり』四三斯く言ひてのち、聲高く『ラザロよ、出で來れ』と
呼はり給へば、四四死にしもの布にて足と手とを卷かれたるまま出で
來る、顔も手拭にて包まれたり。イエス『これを解きて往かしめよ』
と言ひ給ふ。四五かくてマリヤの許に來りて、イエスの爲し給ひし事
を見たる多くのユダヤ人、かれを信じたりしが、四六或者はパリサイ
人に往きて、イエスの爲し給ひし事を告げたり。四七ここに祭司長・
パリサイ人ら議會を開きて言ふ『われら如何に爲すべきか、此の人お
ほくの徴を行ふなり。四八もし彼をこのまま捨ておかば、人々みな

彼を信ぜん、而してロマ人きたりて、我らの土地と國人とを奪はん』
四九その中の一人にて此の年の大祭司なるカヤパ言ふ『なんぢら何を
も知らず。五〇ひとりの人、民のために死にて、國人すべての滅びぬ
は、汝らの益なるを思はぬなり』五一これは己より云へるに非ず、
この年の大祭司なれば、イエスの國人のため、五二又ただに國人の爲
のみならず、散りたる神の子らを一つに集めん爲に死に給ふことを
預言したるなり。五三彼等この日よりイエスを殺さんと議れり。五四
されば此の後イエス顯にユダヤ人のなかを歩み給はず、此處を去り
て、荒野にちかき處なるエフライムといふ町に往き、弟子たちと偕
に其處に留りたまふ。五五ユダヤ人の過越の祭近づきたれば、多く
の人々身を潔めんとて、祭のまへに田舍よりエルサレムに上れり。
五六彼らイエスをたづね、宮に立ちて互に言ふ『なんぢら如何に思
ふか、彼は祭に來らぬか』五七祭司長・パリサイ人らは、イエスを
捕へんとて、その在處を知る者あらば、告げ出づべく預て命令したり
しなり。

第一二章 一過越の祭の六日前に、イエス、ベタニヤに來り給ふ、こ
こは死人の中より甦へらせ給ひしラザロの居る處なり。二此處にて
イエスのために饗宴を設け、マルタは事へ、ラザロはイエスと共に席
に著ける者の中にあり。三マリヤは價高き混りなきナルドの香油
一斤を持ち來りて、イエスの御足にぬり、己が頭髮にて御足を拭ひし
に、香油のかをり家に滿ちたり。四御弟子の一人にて、イエスを賣
らんとするイスカリオテのユダ言ふ、五『何ぞこの香油を三百デ
ナリに賣りて、貧しき者に施さざる』六かく云へるは貧しき者を思
ふ故にあらず、おのれ盜人にして、財囊を預り、その中に納むる物を
掠めゐたればなり。七イエス言ひ給ふ『この女の爲すに任せよ、我
が葬りの日のために之を貯へたるなり。八貧しき者は常に汝らと
偕に居れども、我は常に居らぬなり』九ユダヤの多くの民ども、イエ
スの此處に居給ふことを知りて來る、これはイエスの爲のみにあら
ず、死人の中より甦へらせ給ひしラザロを見んとてなり。一〇かく
て祭司長ら、ラザロをも殺さんと議る。一一彼のために多くのユダヤ

人さり往きてイエスを信ぜし故なり。一二明くる日、祭に來りし多
くの民ども、イエスのエルサレムに來り給ふをきき、一三棕梠の枝を
とりて出で迎へ、『「ホサナ、讃むべきかな、主の御名によりて來る者
」イスラエルの王』と呼はる。一四イエスは小驢馬を得て之に乗り給
ふ。これは録して、一五『シオンの娘よ、懼るな。視よ、なんぢの
王は驢馬の子に乗りて來り給ふ』と有るが如し。一六弟子たちは最初
これらの事を悟らざりしが、イエスの榮光を受け給ひし後に、これ
らの事のイエスに就きて録されたると、人々が斯く爲ししとを思ひ
出せり。一七ラザロを墓より呼び起し、死人の中より甦へらせ給ひ
し時に、イエスと偕に居りし群衆、證をなせり。一八群衆のイエ
スを迎へたるは、かかる徴を行ひ給ひしことを聞きたるに因りて
なり。一九パリサイ人ら互に言ふ『見るべし、汝らの謀ることの益
なきを。視よ、世は彼に從へり』二〇禮拜せんとて祭に上りたる者
の中に、ギリシヤ人數人ありしが、二一ガリラヤなるベツサイダのピ
リポに來り、請ひて言ふ『君よ、われらイエスに謁えんことを願ふ』

二二ピリポ往きてアンデレに告げ、アンデレとピリポと共に往きてイ
エスに告ぐ。二三イエス答へて言ひ給ふ『人の子の榮光を受くべき
時きたれり。二四誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麥、地に落ちて
死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。二
五己が生命を愛する者は、これを失ひ、この世にてその生命を憎む
者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし。二六人もし我に事へんとせ
ば、我に從へ、わが居る處に我に事ふる者もまた居るべし。人もし
我に事ふることをせば、我が父これを貴び給はん。二七今わが心さ
わぐ、われ何を言ふべきか。父よ、この時より我を救ひ給へ、されど
我この爲にこの時に到れり。二八父よ、御名の榮光をあらはし給へ』
ここに天より聲いでて言ふ『われ既に榮光をあらはしたり、復さら
に顯さん』二九傍らに立てる群衆これを聞きて『雷霆鳴れり』と
言ひ、ある人々は『御使かれに語れるなり』と言ふ。三〇イエス答へ
て言ひ給ふ『この聲の來りしは、我が爲にあらず、汝らの爲なり。
三一今この世の審判は來れり、今この世の君は逐ひ出さるべし。三二

我もし地より擧げられなば、凡ての人をわが許に引きよせん』三三か
く言ひて、己が如何なる死にて死ぬるかを示し給へり。三四群衆こ
たふ『われら律法によりて、キリストは永遠に存へ給ふと聞きたる
に、汝いかなれば人の子は擧げらるべしと言ふか、その人の子とは
誰なるか』三五イエス言ひ給ふ『なほ暫し光は汝らの中にあり、光
のある間に歩みて、暗黒に追及かれぬやうにせよ、暗き中を歩む者は
往方を知らず。三六光の子とならんために、光のある間に光を信
ぜよ』イエス此等のことを語りてのち、彼らを避けて隠れ給へり。三
七かく多くの徴を人々の前におこなひ給ひたれど、なほ彼を信ぜざ
りき。三八これ預言者イザヤの言の成就せん爲なり。曰く
『主よ、我らに聞きたる言を誰か信ぜし。
主の御腕は誰にあらはれし』
三九彼らが信じ得ざりしは此の故なり。即ちイザヤまた云へらく、
四〇『彼らの眼を暗くし、心を頑固にし給へり。
これ目にて見、心にて悟り、

ひるがへりて、
我に醫さるる事なからん爲なり』
四一イザヤの斯く云へるは、その榮光を見し故にて、イエスに就き
て語りしなり。四二されど司たちの中にもイエスを信じたるもの多
かりしが、パリサイ人の故によりて言ひ顯すことをせざりき、除名
せられん事を恐れたるなり。四三彼らは神の譽よりも人の譽を愛で
しなり。四四イエス呼はりて言ひ給ふ『われを信ずる者は我を信ずる
にあらず、我を遣し給ひし者を信じ、四五我を見る者は我を遣し給
ひし者を見るなり。四六我は光として世に來れり、すべて我を信ず
る者の暗黒に居らざらん爲なり。四七人たとひ我が言をききて守ら
ずとも、我は之を審かず。夫わが來りしは世を審かん爲にあらず、世
を救はん爲なり。四八我を棄て我が言を受けぬ者を審く者あり、わ
が語れる言こそ終の日に之を審くなれ。四九我はおのれに由りて語
れるにあらず、我を遣し給ひし父みづから、我が言ふべきこと語る
べきことを命じ給ひし故なり。五〇我その命令の永遠の生命たるを知

る。されば我は語るに我が父の我に言ひ給ふままを語るなり』

第一三章 一過越のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべ
き己が時の來れるを知り、世に在る己の者を愛して、極まで之を愛
し給へり。二夕餐のとき、惡魔早くもシモンの子イスカリオテのユダ
の心に、イエスを賣らんとする思を入れたるが、三イエス父が萬物
をおのが手にゆだね給ひしことと、己の神より出でて神に到ること
を知り、四夕餐より起ちて上衣をぬぎ、手巾をとりて腰にまとひ、五尋
で盥に水をいれて、弟子たちの足をあらひ、纏ひたる手巾にて之を
拭ひはじめ給ふ。六かくてシモン・ペテロに至り給へば、彼いふ『主
よ、汝わが足を洗ひ給ふか』七イエス答へて言ひ給ふ『わが爲すこ
とを汝いまは知らず、後に悟るべし』八ペテロ言ふ『永遠に我が足
をあらひ給はざれ』イエス答へ給ふ『我もし汝を洗はずば、汝わ
れと關係なし』九シモン・ペテロ言ふ『主よ、わが足のみならず、手
をも頭をも』一〇イエス言ひ給ふ『すでに浴したる者は足のほか洗
ふを要せず、全身きよきなり。斯く汝らは潔し、されど悉とくは

然らず』一一これ己を賣る者の誰なるを知りたまふ故に『ことごと
くは潔からず』と言ひ給ひしなり。一二彼らの足をあらひ、己が上衣
をとり、再び席につきて後いひ給ふ『わが汝らに爲したることを
知るか。一三なんぢら我を師また主ととなふ、然か言ふは宜なり、我
は是なり。一四我は主また師なるに、尚なんぢらの足を洗ひたれば、
汝らも互に足を洗ふべきなり。一五われ汝らに模範を示せり、わ
が爲ししごとく汝らも爲さんためなり。一六誠にまことに汝らに
告ぐ、僕はその主よりも大ならず。遣されたる者は之を遣す者
よりも大ならず。一七汝等これらの事を知りて之を行はば幸福な
り。一八これ汝ら凡ての者につきて言ふにあらず、我はわが選びた
る者どもを知る。されど聖書に「我とともにパンを食ふ者、われに向
ひて踵を擧げたり」と云へることは、必ず成就すべきなり。一九
今その事の成らぬ前に之を汝らに告ぐ、事の成らん時、わが夫なる
を汝らの信ぜんためなり。二〇誠にまことに汝らに告ぐ、わが遣
す者を受くる者は我をうくるなり。我を受くる者は我を遣し給ひし

者を受くるなり』二一イエス此等のことを言ひ終へて、心さわぎ證
をなして言ひ給ふ『まことに誠に汝らに告ぐ、汝らの中の一人わ
れを賣らん』二二弟子たち互に顔を見合せ、誰につきて言ひ給ふか
を訝る。二三イエスの愛したまふ一人の弟子、イエスの御胸により
そひ居たれば、二四シモン・ペテロ首にて示し『誰のことを言ひ給ふ
か、告げよ』といふ。二五彼そのまま御胸によりかかりて『主よ、誰
なるか』と言ひしに、二六イエス答へ給ふ『わが一撮の食物を浸して
與ふる者は夫なり』かくて一撮の食物を浸して、シモンの子イスカ
リオテのユダに與へたまふ。二七ユダ一撮の食物を受くるや、惡魔
かれに入りたり。イエス彼に言ひたまふ『なんぢが爲すことを速か
に爲せ』二八席に著きゐたる者は一人として、何故かく言ひ給ふかを
知らず。二九ある人々は、ユダが財嚢を預るによりて『祭のために
要する物を買へ』とイエスの言ひ給へるか、また貧しき者に何か施
さしめ給ふならんと思へり。三〇ユダ一撮の食物を受くるや、直ち
に出づ、時は夜なりき。三一ユダの出でし後、イエス言ひ給ふ『今や

人の子、榮光をうく、神も彼によりて榮光をうけ給ふ。三二神かれ
に由りて榮光をうけ給はば、神も己によりて彼に榮光を與へ給は
ん、直ちに與へ給ふべし。三三若子よ、我なほ暫く汝らと偕にあり、
汝らは我を尋ねん、されど曾てユダヤ人に「なんぢらは我が往く處
に來ること能はず」と言ひし如く、今汝らにも然か言ふなり。三四
われ新しき誡命を汝らに與ふ、なんぢら相愛すべし。わが汝らを
愛せしごとく、汝らも相愛すべし。三五互に相愛する事をせば、之
によりて人みな汝らの我が弟子たるを知らん』三六シモン・ペテロ
言ふ『主よ、何處にゆき給ふか』イエス答へ給ふ『わが往く處に、な
んぢ今は從ふこと能はず。されど後に從はん』三七ペテロ言ふ『主
よ、いま從ふこと能はぬは何故ぞ、我は汝のために生命を棄てん』
三八イエス答へ給ふ『なんぢ我がために生命を棄つるか、誠にまこ
とに汝に告ぐ、なんぢ三度われを否むまでは、鷄鳴かざるべし』

第一四章

一『なんぢら心を騷がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。
二わが父の家には住處おほし、然らずば我かねて汝らに告げしなら

ん。われ汝等のために處を備へに往く。三もし往きて汝らの爲に
處を備へば、復きたりて汝らを我がもとに迎へん、わが居るところ
に汝らも居らん爲なり。四汝らは我が往くところに至る道を知る』
五トマス言ふ『主よ、何處にゆき給ふかを知らず、いかでその道を
知らんや』六イエス彼に言ひ給ふ『われは道なり、眞理なり、生命な
り、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。七汝等もし我
を知りたらば、我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既
に之を見たり』八ピリポ言ふ『主よ、父を我らに示し給へ、さらば足
れり』九イエス言ひ給ふ『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りし
に、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに
父を示せ」と言ふか。一〇我の父に居り、父の我に居給ふことを信ぜ
ぬか。わが汝等にいふ言は、己によりて語るにあらず、父われに
在して御業をおこなひ給ふなり。一一わが言ふことを信ぜよ、我は父
にをり、父は我に居給ふなり。もし信ぜずば、我が業によりて信ぜ
よ。一二誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業をな

さん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。一三
汝らが我が名によりて願ふことは、我みな之を爲さん、父、子によ
りて榮光を受け給はんためなり。一四何事にても我が名によりて我
に願はば、我これを成すべし。一五汝等もし我を愛せば、我が誡命を
守らん。一六われ父に請はん、父は他に助主をあたへて、永遠に汝
らと偕に居らしめ給ふべし。一七これは眞理の御靈なり、世はこれを
受くること能はず、これを見ず、また知らぬに因る。なんぢらは之を
知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給ふべければなり。
一八我なんぢらを遺して孤兒とはせず、汝らに來るなり。一九暫く
せば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝ら
も活くべければなり。二〇その日には、我わが父に居り、なんぢら我
に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。二一わが誡命を保ちて
之を守るものは、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に
愛せられん、我も之を愛し、之に己を顯すべし』二二イスカリオテ
ならぬユダ言ふ『主よ、何故おのれを我らに顯して、世には顯し給

はぬか』二三イエス答へて言ひ給ふ『人もし我を愛せば、わが言を
守らん、わが父これを愛し、かつ我等その許に來りて住處を之とと
もにせん。二四我を愛せぬ者は、わが言を守らず。汝らが聞くところ
の言は、わが言にあらず、我を遣し給ひし父の言なり。二五此等
のことは我なんぢらと偕にありて語りしが、二六助主すなはちわが
名によりて父の遣したまふ聖靈は、汝らに萬の事ををしへ、又す
べて我が汝らに言ひしことを思ひ出さしむべし。二七われ平安を汝
らに遺す、わが平安を汝らに與ふ。わが與ふるは世の與ふる如くな
らず、なんぢら心を騒がすな、また懼るな。二八「われ往きて汝ら
に來るなり」と云ひしを汝ら既に聞けり。もし我を愛せば、父にわ
が往くを喜ぶべきなり、父は我よりも大なるに因る。二九今その事
の成らぬ前に、これを汝らに告げたり、事の成らんとき汝らの信ぜ
んためなり。三〇今より後われ汝らと多く語らじ、この世の君きた
る故なり。彼は我に對して何の權もなし、三一されど斯くなるは、我
の、父を愛し、父の命じ給ふところに遵ひて行ふことを、世の知ら

ん爲なり。起きよ、いざ此處を去るべし。

第一五章 一我は眞の葡萄の樹、わが父は農夫なり。二おほよそ我
にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ
果を結ばせん爲に之を潔めたまふ。三汝らは既に潔し、わが語りた
る言に因りてなり。四我に居れ、さらば我なんぢらに居らん。枝も
し樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能はぬごとく、汝らも我に居ら
ずば亦然り。五我は葡萄の樹、なんぢらは枝なり。人もし我にをり、
我また彼にをらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事
をも爲し能はず。六人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて
枯る、人々これを集め火に投げ入れて燒くなり。七汝等もし我に居
り、わが言なんぢらに居らば、何にても望に隨ひて求めよ、さら
ば成らん。八なんぢら多くの果を結ばば、わが父は榮光を受け給ふ
べし、而して汝等わが弟子とならん。九父の我を愛し給ひしごとく、
我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。一〇なんぢら若しわが誡命を
まもらば、我が愛にをらん、我わが父の誡命を守りて、その愛に居る

がごとし。一一我これらの事を語りたるは、我が喜悦の汝らに在り、
かつ汝らの喜悦の滿されん爲なり。一二わが誡命は是なり、わが汝
らを愛せしごとく互に相愛せよ。一三人その友のために己の生命を
棄つる、之より大なる愛はなし。一四汝等もし我が命ずる事をおこ
なはば、我が友なり。一五今よりのち我なんぢらを僕といはず、僕
は主人のなす事を知らざるなり。我なんぢらを友と呼べり、我が父に
聽きし凡てのことを汝らに知らせたればなり。一六汝ら我を選びし
にあらず、我なんぢらを選べり。而して汝らの往きて果を結び、且
その果の殘らんために、又おほよそ我が名によりて父に求むるもの
を、父の賜はんために汝らを立てたり。一七これらの事を命ずるは、
汝らの互に相愛せん爲なり。一八世もし汝らを憎まば、汝等より
先に我を憎みたることを知れ。一九汝等もし世のものならば、世は
己がものを愛するならん。汝らは世のものならず、我なんぢらを世
より選びたり。この故に世は汝らを憎む。二〇わが汝らに「僕は
その主人より大ならず」と告げし言をおぼえよ。人もし我を責め

しならば、汝等をも責め、わが言を守りしならば、汝らの言をも
守らん。二一すべて此等のことを我が名の故に汝らに爲さん、それ
は我を遣し給ひし者を知らぬに因る。二二われ來りて語らざりしな
らば、彼ら罪なかりしならん。されど今はその罪いひのがるべき樣
なし。二三我を憎むものは我が父をも憎むなり。二四我もし誰もいま
だ行はぬ事を彼らの中に行はざりしならば、彼ら罪なかりしなら
ん。されど今ははや我をも我が父をも見たり、また憎みたり。二五こ
れは彼らの律法に「ひとびと故なくして我を憎めり」と録したる言
の成就せん爲なり。二六父の許より我が遣さんとする助主、すな
はち父より出づる眞理の御靈のきたらんとき、我につきて證せん。
二七汝等もまた初より我とともに在りたれば證するなり。
第一六章 一我これらの事を語りたるは、汝らの躓かざらん爲な
り。二人なんぢらを除名すべし、然のみならず、汝らを殺す者みな
自ら神に事ふと思ふとき來らん。三これらの事をなすは、父と我と
を知らぬ故なり。四我これらの事を語りたるは、時いたりて我が斯く

言ひしことを汝らの思ひいでん爲なり。初より此等のことを言は
ざりしは、我なんぢらと偕に在りし故なり。五今われを遣し給ひし
者にゆく、然るに汝らの中、たれも我に「何處にゆく」と問ふ者な
し。六唯これらの事を語りしによりて、憂なんぢらの心にみてり。
七されど、われ實を汝らに告ぐ、わが去るは汝らの益なり。我さ
らずば助主なんぢらに來らじ、我ゆかば之を汝らに遣さん。八か
れ來らんとき、世をして罪につき、義につき、審判につきて、過てる
を認めしめん。九罪に就きてとは、彼ら我を信ぜぬに因りてなり。一
〇義に就きてとは、われ父にゆき、汝ら今より我を見ぬに因りてな
り。一一審判に就きてとは、此の世の君さばかるるに因りてなり。一
二我なほ汝らに告ぐべき事あまたあれど、今なんぢら得耐へず。一
三されど彼すなはち眞理の御靈きたらん時、なんぢらを導きて眞理
をことごとく悟らしめん。かれ己より語るにあらず、凡そ聞くとこ
ろの事を語り、かつ來らんとする事どもを汝らに示さん。一四彼は
わが榮光を顯さん、それは我がものを受けて汝らに示すべければ

なり。一五すべて父の有ち給ふものは我がものなり、此の故に我がも
のを受けて汝らに示さんと云へるなり。一六暫くせば汝ら我を見
ず、また暫くして我を見るべし』一七ここに弟子たちのうち或者た
がひに言ふ『「暫くせば我を見ず、また暫くして我を見るべし」と
言ひ、かつ「父に往くによりて」と言ひ給へるは、如何なることぞ』
一八復いふ『この暫くとは如何なることぞ、我等その言ひ給ふとこ
ろを知らず』一九イエスその問はんと思へるを知りて言ひ給ふ『なん
ぢら「暫くせば我を見ず、また暫くして我を見るべし」と我が言
ひしを尋ねあふか。二〇誠にまことに汝らに告ぐ、なんぢらは泣き
悲しみ、世は喜ばん。汝ら憂ふべし、然れどその憂は喜悦となら
ん。二一をんな産まんとする時は憂あり、その期いたるに因りてな
り。子を産みてのちは苦痛をおぼえず、世に人の生れたる喜悦により
てなり。二二斯く汝らも今は憂あり、されど我ふたたび汝らを見
ん、その時なんぢらの心よろこぶべし、その喜悦を奪ふ者なし。二
三かの日には汝ら何事をも我に問ふまじ。誠にまことに汝らに告

ぐ、汝等のすべて父に求むる物をば、我が名によりて賜ふべし。二四
なんぢら今までは何をも我が名によりて求めたることなし。求めよ、
然らば受けん、而して汝らの喜悦みたさるべし。二五我これらの事
を譬にて語りたりしが、また譬にて語らず、明白に父のことを汝
らに告ぐるとき來らん。二六その日には汝等わが名によりて求めん。
我は汝らの爲に父に請ふと言はず、二七父みづから汝らを愛し給へ
ばなり。これ汝等われを愛し、また我の父より出で來りしことを信
じたるに因る。二八われ父より出でて世にきたれり、また世を離れて
父に往くなり』二九弟子たち言ふ『視よ、今は明白に語りて聊かも
譬をいひ給はず。三〇我ら今なんぢの知り給はぬ所なく、また人の
汝に問ふを待ち給はぬことを知る。之によりて汝の神より出でき
たり給ひしことを信ず』三一イエス答へ給ふ『なんぢら今、信ずるか。
三二視よ、なんぢら散されて各自おのが處にゆき、我をひとり遺す
とき到らん、否すでに到れり。然れど我ひとり居るにあらず、父われ
と偕に在すなり。三三此等のことを汝らに語りたるは、汝ら我に在

りて平安を得んが爲なり。なんぢら世にありては患難あり、されど
雄々しかれ。我すでに世に勝てり』

第一七章 一イエスこれらの事を語りはて、目を擧げ天を仰ぎて言ひ
給ふ『父よ、時來れり、子が汝の榮光を顯さんために、汝の子
の榮光を顯したまへ。二汝より賜はりし凡ての者に、永遠の生命
を與へしめんとて、萬民を治むる權威を子に賜ひたればなり。三永遠
の生命は、唯一の眞の神にいます汝と、なんぢの遣し給ひしイエ
ス・キリストとを知るにあり。四我に成さしめんとて汝の賜ひし業
を成し遂げて、我は地上に汝の榮光をあらはせり。五父よ、まだ世
のあらぬ前に、わが汝と偕にもちたりし榮光をもて、今御前にて
我に榮光あらしめ給へ。六世の中より我に賜ひし人々に、われ御名
をあらはせり。彼らは汝の有なるを我に賜へり、而して彼らは汝
の言を守りたり。七今かれらは、凡て我に賜ひしものの汝より出づ
るを知る。八我は我に賜ひし言を彼らに與へ、彼らは之を受け、わ
が汝より出でたるを眞に知り、なんぢの我を遣し給ひしことを信

じたるなり。九我かれらの爲に願ふ、わが願ふは世のためにあらず、
汝の我に賜ひたる者のためなり、彼らは即ち汝のものなり。一〇
我がものは皆なんぢの有、なんぢの有は我がものなり、我かれらより
榮光を受けたり。一一今より我は世に居らず、彼らは世に居り、我
は汝にゆく。聖なる父よ、我に賜ひたる汝の御名の中に彼らを守り
たまへ。これ我等のごとく、彼らの一つとならん爲なり。一二我かれ
らと偕にをる間、われに賜ひたる汝の御名の中に彼らを守り、かつ
保護したり。其のうち一人だに亡びず、ただ亡の子のみ亡びたり、
聖書の成就せん爲なり。一三今は我なんぢに往く、而して此等のこ
とを世に在りて語るは、我が喜悦を彼らに全からしめん爲なり。一
四我は御言を彼らに與へたり、而して世は彼らを憎めり、我の世のも
のならぬごとく、彼らも世のものならぬに因りてなり。一五わが願ふ
は、彼らを世より取り給はんことならず、惡より免れさせ給はん
ことなり。一六我の世のものならぬ如く、彼らも世のものならず。一
七眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八汝わ

れを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に遣せり。一九また彼等の
ために我は己を潔めわかつ、これ眞理にて彼らも潔め別たれん爲な
り。二〇我かれらの爲のみならず、その言によりて我を信ずる者の
ためにも願ふ。二一これ皆一つとならん爲なり。父よ、なんぢ我に在
し、我なんぢに居るごとく、彼らも我らに居らん爲なり、是なんぢ
の我を遣し給ひしことを世の信ぜん爲なり。二二我は汝の我に賜ひ
し榮光を彼らに與へたり、是われらの一つなる如く、彼らも一つと
ならん爲なり。二三即ち我かれらに居り、汝われに在し、彼ら一つ
となりて全くせられん爲なり、是なんぢの我を遣し給ひしことと、
我を愛し給ふごとく彼らをも愛し給ふことを、世の知らん爲なり。
二四父よ、望むらくは、我に賜ひたる人々の我が居るところに我と偕
にをり、世の創の前より我を愛し給ひしによりて、汝の我に賜ひた
る我が榮光を見んことを。二五正しき父よ、げに世は汝を知らず、
されど我は汝を知り、この者どもも汝の我を遣し給ひしことを知
れり。二六われ御名を彼らに知らしめたり、復これを知らしめん。こ

れ我を愛し給ひたる愛の、彼らに在りて、我も彼らに居らん爲なり』

第一八章

一此等のことを言ひ終へて、イエス弟子たちと偕にケデロ
ンの小川の彼方に出でたまふ。彼処に園あり、イエス弟子たちとと
もども入り給ふ。二ここは弟子たちと屡々あつまり給ふ處なれば、
イエスを賣るユダもこの處を知れり。三かくてユダは一組の兵隊と
祭司長・パリサイ人等よりの下役どもとを受けて、炬火・燈火・武器
を携へて此處にきたる。四イエス己に臨まんとする事をことごと
く知り、進みいでて彼らに言ひたまふ『誰を尋ぬるか』五答ふ『ナザ
レのイエスを』イエス言ひたまふ『我はそれなり』イエスを賣るユ
ダも彼らと共に立てり。六『我はそれなり』と言ひ給ひし時、かれら
後退して地に倒れたり。七ここに再び『たれを尋ぬるか』と問ひ給
へば『ナザレのイエスを』と言ふ。八イエス答へ給ふ『われは夫なり
と既に告げたり、我を尋ぬるならば此の人々の去るを容せ』九これさ
きに『なんぢの我に賜ひし者の中より、われ一人をも失はず』と言
ひ給ひし言の成就せん爲なり。一〇シモン・ペテロ劍をもちたる

が、之を抜き大祭司の僕を撃ちて、その右の耳を斬り落す、僕の名
はマルコスと云ふ。一一イエス、ペテロに言ひたまふ『劍を鞘に收
めよ、父の我に賜ひたる酒杯は、われ飲まざらんや』一二ここにかの
兵隊・千卒長・ユダヤ人の下役ども、イエスを捕へて縛り、一三先づ
アンナスの許に曳き往く、アンナスはその年の大祭司なるカヤパの
舅なり。一四カヤパはさきにユダヤ人に、一人、民のために死ぬる
は益なる事を勸めし者なり。一五シモン・ペテロ及び他の一人の弟子
、イエスに從ふ。この弟子は大祭司に知られたる者なれば、イエス
と共に大祭司の庭に入りしが、一六ペテロは門の外に立てり。ここに
大祭司に知られたる彼の弟子いでて、門を守る女に物言ひてペテロ
を連れ入れしに、一七門を守る婢女、ペテロに言ふ『なんぢも彼の人
の弟子の一人なるか』かれ言ふ『然らず』一八時寒くして僕・下役
ども炭火を熾し、その傍らに立ちて煖まり居りしに、ペテロも共に
立ちて煖まりゐたり。一九ここに大祭司、イエスにその弟子とその
教とにつきて問ひたれば、二〇イエス答へ給ふ『われ公然に世に語

れり、凡てのユダヤ人の相集ふ會堂と宮とにて常に教へ、密には何
をも語りし事なし。二一何ゆゑ我に問ふか、我が語れることは聽きた
る人々に問へ。視よ、彼らは我が言ひしことを知るなり』二二かく言
ひ給ふとき、傍らに立つ下役の一人、手掌にてイエスを打ちて言ふ
『かくも大祭司に答ふるか』二三イエス答へ給ふ『わが語りし言もし
惡しくば、その惡しき故を證せよ。善くば何とて打つぞ』二四ここに
アンナス、イエスを縛りたるままにて、大祭司カヤパの許に送れり。
二五シモン・ペテロ立ちて煖まり居たるに、人々いふ『なんぢも彼
が弟子の一人なるか』否みて言ふ『然らず』二六大祭司の僕の一人
にて、ペテロに耳を斬り落されし者の親族なるが言ふ『われ汝が園
にて彼と偕なるを見しならずや』二七ペテロまた否む折しも鷄鳴き
ぬ。二八かくて人々イエスをカヤパの許より官邸にひきゆく、時は
夜明なり。彼ら過越の食をなさんために、汚穢を受けじとて己ら
は官邸に入らず。二九ここにピラト彼らの前に出でゆきて言ふ『こ
の人に對して如何なる訴訟をなすか』三〇答へて言ふ『もし惡をなし

たる者ならずば汝に付さじ』三一ピラト言ふ『なんぢら彼を引取り、
おのが律法に循ひて審け』ユダヤ人いふ『我らに人を殺す權威なし』
三二これイエス、己が如何なる死にて死ぬるかを示して、言ひ給ひし
御言の成就せん爲なり。三三ここにピラトまた官邸に入り、イエス
を呼び出して言ふ『なんぢはユダヤ人の王なるか』三四イエス答へ給
ふ『これは汝おのれより言ふか、將わが事を人の汝に告げたるか』
三五ピラト答ふ『我はユダヤ人ならんや、汝の國人・祭司長ら汝を
我に付したり、汝なにを爲ししぞ』三六イエス答へ給ふ『わが國は
この世のものならず、若し我が國この世のものならば、我が僕ら我
をユダヤ人に付さじと戰ひしならん。然れど我が國は此の世よりの
ものならず』三七ここにピラト言ふ『されば汝は王なるか』イエス
答へ給ふ『われの王たることは汝の言へるごとし。我は之がために
生れ、之がために世に來れり、即ち眞理につきて證せん爲なり。凡
て眞理に屬する者は我が聲をきく』三八ピラト言ふ『眞理とは何ぞ』
かく言ひて再びユダヤ人の前に出でて言ふ『我この人に何の罪ある

をも見ず。三九過越のとき我なんぢらに一人の囚人を赦す例あり、さ
れば汝らユダヤ人の王をわが赦さんことを望むか』四〇彼らまた叫
びて『この人ならず、バラバを』と言ふ、バラバは強盗なり。
第一九章一ここにピラト、イエスをとりて鞭うつ。二兵卒ども茨
にて冠冕をあみ、その首にかむらせ、紫色の上衣をきせ、三御許に
進みて言ふ『ユダヤ人の王やすかれ』而して手掌にて打てり。四ピラ
ト再び出でて人々にいふ『視よ、この人を汝らに引出す、これは何
の罪あるをも我が見ぬことを汝らの知らん爲なり』五ここにイエス
茨の冠冕をかむり、紫色の上衣をきて出で給へば、ピラト言ふ『視
よ、この人なり』六祭司長・下役どもイエスを見て叫びいふ『十字架
につけよ、十字架につけよ』ピラト言ふ『なんぢら自らとりて十字架
につけよ、我は彼に罪あるを見ず』七ユダヤ人こたふ『我らに律法あ
り、その律法によれば死に當るべき者なり、彼はおのれを神の子とな
せり』八ピラトこの言をききて増々おそれ、九再び官邸に入りて
イエスに言ふ『なんぢは何處よりぞ』イエス答をなし給はず。一〇ピ

ラト言ふ『われに語らぬか、我になんぢを赦す權威あり、また十字架
につくる權威あるを知らぬか』一一イエス答へ給ふ『なんぢ上より賜
はらずば、我に對して何の權威もなし。この故に我をなんぢに付しし
者の罪は更に大なり』一二ここにおいてピラト、イエスを赦さんこと
を力む。されどユダヤ人さけびて言ふ『なんぢ若しこの人を赦さば、
カイザルの忠臣にあらず、凡そおのれを王となす者はカイザルに
叛くなり』一三ピラトこれらの言をききて、イエスを外にひきゆき、
敷石（ヘブル語にてガバタ）といふ處にて審判の座につく。一四こ
の日は過越の準備日にて、時は第六時ごろなりき。ピラト、ユダヤ人
にいふ『視よ、なんぢらの王なり』一五かれら叫びていふ『除け、除
け、十字架につけよ』ピラト言ふ『われ汝らの王を十字架につくべ
けんや』祭司長ら答ふ『カイザルの他われらに王なし』一六ここにピ
ラト、イエスを十字架に釘くるために彼らに付せり。彼らイエスを
受取りたれば、一七イエス己に十字架を負ひて、髑髏（ヘブル語に
てゴルゴダ）といふ處に出でゆき給ふ。一八其處にて彼らイエスを

十字架につく。又ほかに二人の者をともに十字架につけ、一人を右
に、一人を左に、イエスを眞中に置けり。一九ピラト罪標を書きて
十字架の上に掲ぐ『ユダヤ人の王、ナザレのイエス』と記したり。二
〇イエスを十字架につけし處は都に近ければ、多くのユダヤ人この
標を讀む、標はヘブル、ロマ、ギリシヤの語にて記したり。二一ここ
にユダヤ人の祭司長らピラトに言ふ『ユダヤ人の王と記さず、我はユ
ダヤ人の王なりと自稱せりと記せ』二二ピラト答ふ『わが記したるこ
とは記したるままに』二三兵卒どもイエスを十字架につけし後、その
衣をとりて四つに分け、おのおの其の一つを得たり。また下衣を取
りしが、下衣は縫目なく、上より惣て織りたる物なれば、二四兵卒ど
も互にいふ『これを裂くな、誰がうるか鬮にすべし』これは聖書の
成就せん爲なり。曰く『かれら互にわが衣をわけ、わが衣を鬮に
せり』兵卒ども斯くなしたり。二五さてイエスの十字架の傍らには、
その母と母の姉妹と、クロパの妻マリヤとマグダラのマリヤと立て
り。二六イエスその母とその愛する弟子との近く立てるを見て、母に

言ひ給ふ『をんなよ、視よ、なんぢの子なり』二七また弟子に言ひた
まふ『視よ、なんぢの母なり』この時より、その弟子かれを己が家に
接けたり。二八この後イエス萬の事の終りたるを知りて、――聖書
の全うせられん爲に――『われ渇く』と言ひ給ふ。二九ここに酸き
葡萄酒の滿ちたる器あり、その葡萄酒のふくみたる海綿をヒソプに
著けてイエスの口に差附く。三〇イエスその葡萄酒をうけて後いひ給
ふ『事畢りぬ』遂に首をたれて靈をわたし給ふ。三一この日は準備
日なれば、ユダヤ人、安息日に屍體を十字架のうへに留めおかじとて
(殊にこの度の安息日は大なる日なるにより)ピラトに、彼らの脛を
をりて屍體を取除かんことを請ふ。三二ここに兵卒ども來りて、イエ
スとともに十字架に釘けられたる第一の者と他のものとの脛を折り、
三三而してイエスに來りしに、はや死に給ふを見て、その脛を折らず。
三四然るに一人の兵卒、鎗にてその脅をつきたれば、直ちに血と水と
流れいづ。三五之を見しもの證をなす、其の證は眞なり、彼はそ
の言ふことの眞なるを知る、これ汝等にも信ぜしめん爲なり。三六

此等のことの成りたるは『その骨くだかれず』とある聖句の成就せ
ん爲なり。
三七また他に『かれら己が刺したる者を見るべし』と云へ
る聖句あり。
三八この後、アリマタヤのヨセフとて、ユダヤ人を懼れ
密にイエスの弟子たりし者、イエスの屍體を引取らんことをピラト
に請ひたれば、ピラト許せり、乃ち往きてその屍體を引取る。
三九
また曾て夜御許に來りしニコデモも、沒藥・沈香の混和物を百斤ば
かり携へて來る。
四〇ここに彼らイエスの屍體をとり、ユダヤ人の
葬りの習慣にしたがひて、香料とともに布にて卷けり。
四一イエス
の十字架につけられ給ひし處に園あり、園の中にいまだ人を葬り
しことなき新しき墓あり。
四二ユダヤ人の準備日なれば、この墓の
近きままに其處にイエスを納めたり。

第二〇章
一 一週のはじめの日、朝まだき暗きうちに、マグダラのマ
リヤ墓にきたりて、墓より石の取除けあるを見る。
二乃ち走りゆき、
シモン・ペテロとイエスの愛し給ひしかの弟子との許に到りて言ふ
『たれか主を墓より取去れり、何處に置きしか我ら知らず』
三ペテロ

と、かの弟子とともに墓にゆく。四二人ともに走りたれど、かの弟子
ペテロより疾く走りて先に墓にいたり、五屈みて布の置きたるを見れ
ど、内には入らず。六シモン・ペテロ後れ來り、墓に入りて布の置き
たるを視、七また首を包みし手拭は布とともに在らず、他のところ
に巻きてあるを見る。八先に墓にきたれる彼の弟子もまた入り、之を
見て信ず。九彼らは聖書に録したる、死人の中よりその甦へり給ふ
べきことを未だ悟らざりしなり。一〇遂に二人の弟子おのが家にかへ
れり。一一然れどマリヤは墓の外に立ちて泣き居りしが、泣きつつ屈
みて墓の内を見るに、一二イエスの屍體の置かれし處に、白き衣を
きたる二人の御使、首の方にひとり足の方にひとり坐しゐたり。一
三而してマリヤに言ふ『をんなよ、何ぞ泣くか』マリヤ言ふ『誰かわ
が主を取去れり、何處に置きしか我しらず』一四かく言ひて後に振反
れば、イエスの立ち居給ふを見る、されどイエスたるを知らず。一五
イエス言ひ給ふ『をんなよ、何ぞ泣く、誰を尋ぬるか』マリヤは園守
ならんと思ひて言ふ『君よ、汝もし彼を取去りしならば、何處に置

きしかを告げよ、われ引取るべし』一六イエス『マリヤよ』と言ひ給
ふ。マリヤ振反りて『ラボニ』(釋けば師よ)と言ふ。一七イエス言ひ
給ふ『われに觸るな、我いまだ父の許に昇らぬ故なり。我が兄弟た
ちに往きて「我はわが父すなはち汝らの父、わが神すなはち汝らの
神に昇る」といへ』一八マグダラのマリヤ往きて弟子たちに『われは
主を見たり』と告げ、また云々の事を言ひ給ひしと告げたり。一九こ
の日すなはち一週のはじめの日の夕、弟子たちユダヤ人を懼るる
に因りて、居るところの戸を閉ぢおきしに、イエスきたり彼らの中に
立ちて言ひたまふ『平安なんぢらに在れ』二〇斯く言ひてその手と脅
とを見せたまふ、弟子たち主を見て喜べり。二一イエスまた言ひた
まふ『平安なんぢらに在れ、父の我を遣し給へるごとく、我も亦な
んぢらを遣す』二二斯く言ひて、息を吹きかけ言ひたまふ『聖靈をう
けよ。二三なんじら誰の罪を赦すとも其の罪ゆるされ、誰の罪を留む
るとも其の罪とどめらるべし』二四イエス來り給ひしとき、十二弟子
の一人デドモと稱ふるトマスともに居らざりしかば、二五他の弟子こ

れに言ふ『われら主を見たり』トマスいふ『我はその手に釘の痕を見
、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその脅に差入るるにあらずば
信ぜじ』二六八日ののち弟子たちまた家にをり、トマスも偕に居りて
戸を閉ぢおきしに、イエス來り、彼らの中に立ちて言ひたまふ『平安
なんぢらに在れ』二七またトマスに言ひ給ふ『なんぢの指をここに伸
べて、わが手を見よ、汝の手をのべて、我が脅にさしいれよ、信ぜ
ぬ者とならで信ずる者となれ』二八トマス答へて言ふ『わが主よ、わ
が神よ』二九イエス言ひ給ふ『なんぢ我を見しによりて信じたり、見
ずして信ずる者は幸福なり』三〇この書に録さざる外の多くの徴を、
イエス弟子たちの前にて行ひ給へり。三一されど此等の事を録しし
は、汝等をしてイエスの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じ
て御名により生命を得しめんが爲なり。

第二一章 一この後、イエス復テベリヤの海邊にて己を弟子たちに
現し給ふ、その現れ給ひしこと左のごとし。二シモン・ペテロ、デ
ドモと稱ふるトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子ら

及びほかの弟子二人もともに居りしに、三シモン・ペテロ『われ漁猟
にゆく』と言へば、彼ら『われらも共に往かん』と言ひ、皆いでて舟
に乗りしが、その夜は何をも得ざりき。四夜明の頃イエス岸に立ち給
ふに、弟子たち其のイエスなるを知らず。五イエス言ひ給ふ『子ども
よ、獲物ありしか』彼ら『なし』と答ふ。六イエス言ひたまふ『舟の右
のかたに網をおろせ、然らば獲物あらん』乃ち網を下したるに、魚
おびただしくして、網を曳き上ぐること能はざりしかば、七イエスの
愛し給ひし弟子、ペテロに言ふ『主なり』シモン・ペテロ『主なり』
と聞きて、裸なりしを上衣をまとひて海に飛びいれり。八他の弟子
たちは陸を離るること遠からず、僅に五十間ばかりなりしかば、魚
の入りたる網を小舟にて曳き來り、九陸に上りて見れば、炭火ありて
その上に肴あり、又パンあり。一〇イエス言ひ給ふ『なんぢらの今
とりたる肴を少し持ちきたれ』一一シモン・ペテロ舟に往きて網を
陸に曳き上げしに、百五十三尾の大なる魚滿ちたり、斯く多かりし
が網は裂けざりき。一二イエス言ひ給ふ『きたりて食せよ』弟子た

ちその主なるを知れば『なんぢは誰ぞ』と敢へて問ふ者もなし。一三
イエス進みてパンをとり彼らに與へ、肴をも然なし給ふ。一四イエ
ス死人の中より甦へりてのち、弟子たちに現れ給ひし事、これにて
三度なり。一五かくて食したる後、イエス、シモン・ペテロに言ひ給
ふ『ヨハネの子シモンよ、汝この者どもに勝りて我を愛するか』ペ
テロいふ『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんぢ知り給ふ』イ
エス言ひ給ふ『わが羔羊を養へ』一六また二度いひ給ふ『ヨハネの
子シモンよ、我を愛するか』ペテロ言ふ『主よ、然り、わが汝を愛
する事は、なんぢ、知り給ふ』イエス言ひ給ふ『わが羊を牧へ』一七
三度いひ給ふ『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ三度『わ
れを愛するか』と言ひ給ふを憂ひて言ふ『主よ、知りたまはぬ處な
し、わが汝を愛する事は、なんぢ識りたまふ』イエス言ひ給ふ『わ
が羊をやしなへ。一八まことに誠になんぢに告ぐ、なんぢ若かりし
時は自ら帶して欲する處を歩めり、されど老いては手を伸べて他
の人に帶せられ、汝の欲せぬ處に連れゆかれん』一九これペテロが

如何なる死にて神の榮光を顯すかを示して言ひ給ひしなり。斯く
言ひて後かれに言ひ給ふ『われに從へ』二〇ペテロ振反りて、イエ
スの愛したまひし弟子の從ふを見る。これはさきに夕餐のとき御胸
に倚りかかりて『主よ、汝を賣る者は誰か』と問ひし弟子なり。二
一ペテロこの人を見てイエスに言ふ『主よ、この人は如何に』二二イ
エス言ひ給ふ『よしや我、かれが我の來るまで留るを欲すとも、汝
になにの關係あらんや、汝は我に從へ』二三ここに兄弟たちの中
に、この弟子死なずと云ふ話つたはりたり。されどイエスは死なず
と言ひ給ひしにあらず『よしや我、かれが我の來るまで留るを欲す
とも、汝になにの關係あらんや』と言ひ給ひしなり。二四これらの
事につきて、證をなし、又これを録しし者は、この弟子なり、我等
はその證の眞なるを知る。二五イエスの行ひ給ひし事は、この外
なほ多し、もし一つ一つ録さば、我おもふに世界もその録すところの
書を載するに耐へざらん。

使徒行傳

第一章一テオピロよ、我さきに前の書をつくりて、凡そイエスの
行ひはじめ教へはじめ給ひしより、二その選び給へる使徒たちに、聖
靈によりて命じたるのち、擧げられ給ひし日に至るまでの事を記せ
り。三イエスは苦難をうけしのち、多くの慥なる證をもて、己の
活きたることを使徒たちに示し、四十日の間、しばしば彼らに現
れて、神の國のことを語り、四また彼等とともに集りゐて命じたま
ふ『エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を待て。五ヨハ
ネは水にてバプテスマを施ししが、汝らは日ならずして聖靈にて
バプテスマを施されん』六弟子たち集れるとき問ひて言ふ『主よ、
イスラエルの國を回復し給ふは此の時なるか』七イエス言ひたまふ
『時また期は父おのれの權威のうちに置き給へば、汝らの知るべき

にあらず。八然れど聖靈なんぢらの上に臨むとき、汝ら能力をうけ
ん、而してエルサレム、ユダヤ全國、サマリヤ、及び地の極にまで
我が證人とならん』九此等のことを言ひ終りて、彼らの見るがうち
に擧げられ給ふ。雲これを受けて見えざらしめたり。一〇その昇りゆ
き給ふとき、彼ら天に目を注ぎゐたりしに、視よ、白き衣を著たる
二人の人かたはらに立ちて言ふ、一一『ガリラヤの人々よ、何ゆゑ天
を仰ぎて立つか、汝らを離れて天に擧げられ給ひし此のイエスは、
汝らが天に昇りゆくを見たるその如く復きたり給はん』一二ここに
彼等オリブといふ山よりエルサレムに歸る。この山はエルサレムに
近く、安息日の道程なり。一三既に入りてその留りをる高樓に登る。
ペテロ、ヨハネ、ヤコブ及びアンデレ、ピリポ及びトマス、バルト
ロマイ及びマタイ、アルパヨの子ヤコブ、熱心黨のシモン及びヤコ
ブの子ユダなり。一四この人々はみな女たち及びイエスの母マリヤ、
イエスの兄弟たちと共に、心を一つにして只管いのりを務めゐた
り。一五その頃ペテロ、百二十名ばかり共に集りて群をなせる兄弟

たちの中に立ちて言ふ、一六『兄弟たちよ、イエスを捕ふる者ども
の手引となりしユダにつきて、聖靈ダビデの口によりて預じめ言ひ
給ひし聖書は、かならず成就せざるを得ざりしなり。一七彼は我ら
の中に數へられ、此の務に與りたればなり。一八（この人は、かの
不義の價をもて地所を得、また俯伏に墜ちて直中より裂けて臟腑み
な流れ出でたり。一九この事エルサレムに住む凡ての人に知られて、
その地所は國語にてアケルダマと稱へらる、血の地所との義なり）
二〇それは詩篇に録して

　「彼の住處は荒れ果てよ、
　人その中に住はざれ」

と云ひ、

　又「その職はほかの人に得させよ」

と云ひたり。二一然れば主イエス我等のうちに往來し給ひし間、二二
即ちヨハネのバプテスマより始り、我らを離れて擧げられ給ひし
日に至るまで、常に我らと偕に在りし此の人々のうち一人、われらと

共に主の復活の證人となるべきなり』二三ここにバルサバと稱へら
れ、またの名をユストと呼ばるるヨセフ及びマツテヤの二人をあげ、
二四二五祈りて言ふ『凡ての人の心を知りたまふ主よ、ユダ己が所
に往かんとて此の務と使徒の職とより墮ちたれば、その後を繼がす
るに、此の二人のうち孰を選び給ふか示したまへ』二六かくて鬮せ
しに、鬮はマツテヤに當りたれば、彼は十一の使徒に加へられたり。

第二章 一五旬節の日となり、彼らみな一處に集ひ居りしに、二烈
しき風の吹きたるごとき響、にはかに天より起りて、その坐する
所の家に滿ち、三また火の如きもの舌のやうに現れ、分れて各人の
上にとどまる。四彼らみな聖靈にて滿され、御靈の宣べしむるままに
異邦の言にて語りはじむ。五時に敬虔なるユダヤ人ら、天下の國々
より來りてエルサレムに住み居りしが、六この音おこりたれば群衆
あつまり來り、おのおの己が國語にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ
合ひ、七かつ驚き怪しみて言ふ『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人
ならずや、八如何にして我等おのおのの生れし國の言をきくか。九

我等はパルテヤ人、メヂヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダ
ヤ、カパドキヤ、ポント、アジヤ、一〇フルギヤ、パンフリヤ、エジプ
ト、リビヤのクレネに近き地方などに住む者、ロマよりの旅人――ユ
ダヤ人および改宗者――一一クレテ人およびアラビヤ人なるに、我
が國語にて彼らが神の大なる御業をかたるを聞かんとは』一二みな
驚き惑ひて互に言ふ『これ何事ぞ』一三或者どもは嘲りて言ふ『か
れらは甘き葡萄酒にて滿されたり』一四ここにペテロ十一の使徒とと
もに立ち、聲を揚げ宣べて言ふ『ユダヤの人々および凡てエルサレム
に住める者よ、汝等わが言に耳を傾けて、この事を知れ。一五今
は朝の九時なれば、汝らの思ふごとく彼らは醉ひたるに非ず、一六
これは預言者ヨエルによりて言はれたる所なり。

一七「神いひ給はく、末の世に至りて、
我が靈を凡ての人に注がん。
汝らの子女は預言し、
汝らの若者は幻影を見、

なんぢらの老人は夢を見るべし。
一八その世に至りて、わが僕・婢女に
わが靈を注がん、彼らは預言すべし。
一九われ上は天に不思議を、
下は地に徴をあらはさん、
即ち血と火と煙の氣とあるべし。
二〇主の大なる顯著しき日のきたる前に、
日は闇に月は血に變らん。
二一すべて主の御名を呼び頼む者は救はれん」
二二イスラエルの人々よ、これらの言を聽け。ナザレのイエスは、汝
らの知るごとく、神かれに由りて汝らの中に行ひ給ひし能力ある
業と不思議と徴とをもて、汝らに證し給へる人なり。二三この人
は神の定め給ひし御旨と、預じめ知り給ふ所とによりて付されし
が、汝ら不法の人の手をもて釘磔にして殺せり。二四然れど神は死
の苦難を解きて之を甦へらせ給へり。彼は死に繋がれをるべき者な

らざりしなり。二五ダビデ彼につきて言ふ
「われ常に我が前に主を見たり、
我が動かされぬ爲に我が右に在せばなり。
二六この故に我が心は樂しみ、我が舌は喜べり、
かつ我が肉體もまた望の中に宿らん。
二七汝わが靈魂を黄泉に棄て置かず、
汝の聖者の朽果つることを許し給はざればなり。
二八汝は生命の道を我に示し給へり、
御顔の前にて我に歡喜を滿し給はん」
二九兄弟たちよ、先祖ダビデに就きて、われ憚らず汝らに言ふを得
べし、彼は死にて葬られ、その墓は今日に至るまで我らの中にあり。
三〇即ち彼は預言者にして、己の身より出づる者をおのれの座位に
坐せしむることを、誓をもて神の約し給ひしを知り、三一先見して、
キリストの復活に就きて語り、その黄泉に棄て置かれず、その肉體
の朽果てぬことを言へるなり。三二神はこのイエスを甦へらせ給へ

り、我らは皆その證人なり。三三イエスは神の右に擧げられ、約束
の聖靈を父より受けて、汝らの見聞する此のものを注ぎ給ひしなり。
三四それダビデは天に昇りしことなし、然れど自ら言ふ
「主わが主に言ひ給ふ、
三五我なんぢの敵を汝の足臺となすまでは、
わが右に坐せよ」
と。三六然ればイスラエルの全家は確と知るべきなり。汝らが十字架
に釘けし此のイエスを、神は立てて主となし、キリストとなし給へり』
三七人々これを聞きて心を刺され、ペテロと他の使徒たちとに言ふ
『兄弟たちよ、我ら何をなすべきか』三八ペテロ答ふ『なんぢら悔改
めて、おのおの罪の赦を得んために、イエス・キリストの名により
てバプテスマを受けよ、然らば聖靈の賜物を受けん。三九この約束は
汝らと汝らの子らと、凡ての遠き者すなはち主なる我らの神の召
し給ふ者とに屬くなり』四〇この他なほ多くの言をもて證し、かつ
勸めて『この曲れる代より救ひ出されよ』と言へり。四一かくてペテ

ロの言を聽納れし者はバプテスマを受く。この日、弟子に加はりた
る者、おほよそ三千人なり。四二彼らは使徒たちの教を受け、交際
をなし、パンを擘き、祈祷をなすことを只管つとむ。四三ここに人み
な敬畏を生じ、多くの不思議と徴とは使徒たちに由りて行はれた
り。四四信じたる者はみな偕に居りて諸般の物を共にし、四五資産と
所有とを賣り、各人の用に從ひて分け與へ、四六日々、心を一つに
して弛みなく宮に居り、家にてパンをさき、勸喜と眞心とをもて食事
をなし、四七神を讚美して一般の民に悅ばる。かくて主は救はるる
者を日々かれらの中に加へ給へり。

第三章 一晝の三時いのりの時に、ペテロとヨハネと宮に上りしが、
二ここに生れながらの跛者かかれて來る。宮に入る人より施濟を乞ふ
ために、日々宮の美麗といふ門に置かるるなり。三ペテロとヨハネと
の宮に入らんとするを見て施濟を乞ひたれば、四ペテロ、ヨハネと共
に目を注めて『我らを見よ』と言ふ。五かれ何をか受くるならんと、
彼らを見つめたるに、六ペテロ言ふ『金銀は我になし、然れど我に有

るものを汝に與ふ、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』七
乃ち右の手を執りて起ししに、足の甲と踝骨とたちどころに強くな
りて、八躍り立ち歩み出して、且あゆみ且をどり、神を讚美しつつ彼
らと共に宮に入れり。九民みな其の歩み、また神を讚美するを見て、
一〇彼が前に乞食にて宮の美麗門に坐しゐたるを知れば、この起りし
事に就きて驚駭と奇異とに充ちたり。一一かくて彼がペテロとヨハネ
とに取りすがり居るほどに、民みな甚だしく驚きてソロモンの廊と
稱ふる廊に馳せつどふ。一二ペテロこれを見て民に答ふ『イスラエル
の人々よ、何ぞ此の事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力と敬虔とに
よりて此の人を歩ませしごとく、我らを見つむるか。一三アブラハム、
イサク、ヤコブの神、われらの先祖の神は、その僕イエスに榮光あ
らしめ給へり。汝等このイエスを付し、ピラトの之を釋さんと定め
しを、其の前にて否みたり。一四汝らは、この聖者・義人を否みて、
殺人者を釋さんことを求め、一五生命の君を殺したれど、神はこれを
死人の中より甦へらせ給へり、我らは其の證人なり。一六斯くてそ

の御名を信ずるに因りてその御名は、汝らの見るところ識るところ
の此の人を健くしたり。イエスによる信仰は、汝等もろもろの前に
て斯かる全癒を得させたり。一七兄弟よ、われ知る、汝らが、かの
事を爲ししは知らぬに因りてなり。汝らの司たちも亦然り。一八然
れど神は凡ての預言者の口をもて、キリストの苦難を受くべきこと
を預じめ告げ給ひしを、斯くは成就し給ひしなり。一九然れば汝
ら罪を消されん爲に、悔改めて心を轉ぜよ。二〇これ主の御前より
慰安の時きたり、汝らの爲に預じめ定め給へるキリスト・イエスを
遣し給はんとてなり。二一古へより神が、その聖なる預言者の口に
よりて語り給ひし、萬物の革まる時まで、天は必ずイエスを受けお
くべし。二二モーセ云へらく「主なる神は汝らの兄弟の中より我が
ごとき預言者を起し給はん。その語る所のことは汝等ことごとく
聽くべし。二三凡てこの預言者に聽かぬ者は民の中より滅し盡さる
べし」二四又サムエル以來かたりし預言者も、皆この時につきて宣傳
へたり。二五汝らは預言者たちの子孫なり、又なんぢらの先祖たち

に神の立て給ひし契約の子孫なり、即ち神アブラハムに告げ給はく
「なんぢの裔によりて地の諸族はみな祝福せらるべし」二六神はその
僕を甦へらせ、まづ汝らに遣し給へり、これ汝ら各人を、その
罪より呼びかへして祝福せん爲なり』

第四章一かれら民に語り居るとき、祭司ら・宮守頭およびサドカ
イ人ら近づき來りて、二その民を教へ、又イエスの事を引きて死人の
中よりの復活を宣ぶるを憂ひ、三手をかけて之を捕へしに、はや夕
になりたれば、明くる日まで留置場に入れたり。四然れど、その言
を聽きたる人々の中にも信ぜし者おほくありて、男の數おほよそ五
千人となりたり。五明くる日、司・長老・學者らエルサレムに會
し、六大祭司アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレキサンデル及び大祭司
の一族みな集ひて、七その中にかの二人を立てて問ふ『如何なる能力
いかなる名によりて此の事を行ひしぞ』八この時ペテロ聖靈にて滿
され、彼らに言ふ『民の司たち及び長老たちよ、九我らが病める者
になしし善き業に就き、その如何にして救はれしかを今日もし訊さる

るならば、一〇汝ら一同およびイスラエルの民みな知れ、この人の
健かになりて汝らの前に立つは、ナザレのイエス・キリスト、即
ち汝らが十字架に釘け、神が死人の中より甦へらせ給ひし者の名
に頼ることを。一一このイエスは汝ら造家者に輕しめられし石にし
て、隅の首石となりたるなり。一二他の者によりては救を得ること
なし、天の下には我らの頼りて救はるべき他の名を、人に賜ひし事
なければなり』一三彼らはペテロとヨハネとの臆することなきを見、
その無學の凡人なるを知りたれば、之を怪しみ、且そのイエスと偕
にありし事を認む。一四また醫されたる人の之とともに立つを見るに
よりて、更に言ひ消す辭なし。一五ここに、命じて彼らを衆議所よ
り退け、相共に議りて言ふ、一六『この人々を如何にすべきぞ。彼
等によりて顯著しき徵の行はれし事は、凡てエルサレムに住む者
に知られ、我ら之を否むこと能はねばなり。一七然れど愈々ひろく民
の中に言ひ弘らぬやうに、彼らを脅かして、今より後かの名によ
りて誰にも語る事なからしめん』一八乃ち彼らを呼び、一切イエス

の名によりて語り、また教へざらんことを命じたり。一九ペテロとヨ
ハネと答へていふ『神に聽くよりも汝らに聽くは、神の御前に正し
きか、汝ら之を審け。二〇我らは見しこと聽きしことを語らざるを
得ず』二一民みな此の有りし事に就きて神を崇めたれば、彼らを罰す
るに由なく、更にまた脅かして釋せり。二二かの徴によりて醫され
し人は四十歳餘なりしなり。二三彼ら釋されて、その友の許にゆき、
祭司長・長老らの言ひし凡てのことを告げたれば、二四之を聞きて
皆心を一つにし、神に對ひ、聲を揚げて言ふ『主よ、汝は天と地と
海と、其の中のあらゆる物とを造り給へり。二五曾て聖靈によりて、
汝の僕われらの先祖ダビデの口をもて

「何ゆゑ異邦人は騷ぎ立ち、
民らは空しき事を謀るぞ。
二六世の王たちは共に立ち、
司らは一つにあつまりて、
主および其のキリストに逆ふ」

と宣給へり。二七果してヘロデとポンテオ・ピラトとは、異邦人およ
びイスラエルの民等とともに、汝の油そそぎ給ひし聖なる僕イエ
スに逆ひて、此の都にあつまり、二八御手と御旨とにて、斯く成る
べしと預じめ定め給ひし事をなせり。二九主よ、今かれらの脅喝を
御覽し、僕らに御言を聊かも臆することなく語らせ、三〇御手をの
べて醫を施させ、汝の聖なる僕イエスの名によりて、徴と不思議
とを行はせ給へ』三一祈り終へしとき、其の集りをる處ふるひ動
き、みな聖靈にて滿され、臆することなく神の御言を語れり。三二信
じたる者の群は、おなじ心おなじ思となり、誰一人その所有を己
が者と謂はず、凡ての物を共にせり。三三かくて使徒たちは大なる
能力をもて、主イエスの復活の證をなし、みな大なる恩惠を蒙り
たり。三四彼らの中には一人の乏しき者もなかりき。これ地所あるい
は家屋を有てる者、これを賣り、その賣りたる物の價を持ち來りて、
三五使徒たちの足下に置きしを、各人その用に隨ひて分け與へられ
たればなり。三六ここにクプロに生れたるレビ人にて、使徒たちにバ

ルナバ（釋けば慰籍の子）と稱へらるるヨセフ、三七畑ありしを賣り
て其の金を持ちきたり、使徒たちの足下に置けり。

第五章 一然るにアナニヤと云ふ人、その妻サツピラと共に資産を賣
り、二その價の幾分を匿しおき、殘る幾分を持ちきたりて使徒たち
の足下に置きしが、妻も之を與れり。三ここにペテロ言ふ『アナニ
ヤよ、何故なんぢの心サタンに滿ち、聖靈に對し詐りて、地所の
價の幾分を匿したるぞ。四有りし時は汝の物なり、賣りて後も汝
の權の內にあるに非ずや、何とて斯ることを心に企てし。なんぢ
人に對してにあらず、神に對して詐りしなり』五アナニヤこの言を
きき、倒れて息絶ゆ。これを聞く者みな大なる懼を懷く。六若者ど
も立ちて彼を包み、舁き出して葬れり。七凡そ三時間を經て、その
妻この有りし事を知らずして入り來りしに、八ペテロ之に向ひて言ふ
『なんぢら此程の價にてかの地所を賣りしか、我に告げよ』女いふ
『然り、此程なり』九ペテロ言ふ『なんぢら何ぞ心を合せて主の御靈
を試みんとせしか、視よ、なんぢの夫を葬りし者の足は門口にあ

り、汝をもまた舁き出すべし』一〇をんな立刻にペテロの足下に倒
れて息絶ゆ。若者ども入り來りて、その死にたるを見、これを舁き出
して夫の傍らに葬れり。一一ここに全教會および此等のことを聞
く者みな大なる懼を懷けり。一二使徒たちの手によりて多くの徴
と不思議と民の中に行はれたり。彼等はみな心を一つにして、ソ
ロモンの廊にあり。一三他の者どもは敢へて近づかず、民は彼らを崇
めたり。一四信ずるもの男女とも増々おほく主に屬けり。一五終には
人々、病める者を大路に舁ききたり、寝臺または床の上におく。此等
のうち誰にもせよ、ペテロの過ぎん時、その影になりと庇はれんとて
なり。一六又エルサレムの周圍の町々より多くの人々、病める者・穢
れし靈に惱されたる者を携へきたりて集ひたりしが、みな醫された
り。一七ここに大祭司および之と偕なる者、即ちサドカイ派の人々、
みな嫉に滿されて立ち、一八使徒たちに手をかけて之を留置場に入
る。一九然るに主の使、夜、獄の戸をひらき、彼らを連れ出して言
ふ、二〇『往きて宮に立ち、この生命の言をことごとく民に語れ』二

一かれら之を聞き、夜明がた宮に入りて教ふ。大祭司および之と偕な
る者ども集ひきたりて、議會とイスラエル人の元老とを呼びあつめ、
使徒たちを曳き來らせんとて人を牢舍に遣したり。二二下役ども往
きしに、獄のうちに彼らの居らぬを見て、歸りきたり告げて言ふ、
二三『われら牢舍の堅く閉ぢられて、戸の前に牢番の立ちたるを見し
に、開きて見れば、内には誰も居らざりき』二四宮守頭および祭司長
らこの言を聞きて、如何になりゆくべきかと惑ひいたるに、二五或
人きたり告げて言ふ『視よ、汝らの獄に入れし人は、宮に立ちて民
を教へ居るなり』二六ここに宮守頭、下役を伴ひて出でゆき、彼ら
を曳き來る。されど手暴きことをせざりき、これ民より石にて打た
れんことを恐れたるなり。二七彼らを連れ來りて議會の中に立てたれ
ば、大祭司問ひて言ふ、二八『我等かの名によりて教ふることを堅く
禁ぜしに、視よ、汝らは其の教をエルサレムに滿し、かの人の血を
我らに負はせんとす』二九ペテロ及び他の使徒たち答へて言ふ『人に
從はんよりは神に從ふべきなり。三〇我らの先祖の神はイエスを起

し給ひしに、汝らは之を木に懸けて殺したり。三一神は彼を君とし
救主として己が右にあげ、悔改と罪の赦とをイスラエルに與へ
しめ給ふ。三二我らは此の事の證人なり。神のおのれに從ふ者に賜
ふ聖靈もまた然り』三三かれら之をききて怒に滿ち、使徒たちを殺
さんと思へり。三四然るにパリサイ人にて凡ての民に尊ばるる教法
學者ガマリエルと云ふもの、議會の中に立ち、命じて使徒たちを暫
く外に出さしめ、議員らに向ひて言ふ、三五『イスラエルの人よ、汝
らが此の人々に爲さんとする事につきて心せよ。三六前にチウダ起
りて、自ら大なりと稱し、之に附隨ふ者の數おほよそ四百人な
りしが、彼は殺され、從へる者はみな散されて跡なきに至れり。三
七そののち戸籍登録のときガリラヤのユダ起りて、多くの民を誘ひお
のれに從はしめしが、彼も亡び從へる者もことごとく散されたり。
三八然れば今なんぢらに言ふ、この人々より離れて、その爲すに任せ
よ。若しその企圖その所作、人より出でたらんにはおのづから壞れ
ん。三九もし神より出でたらんには彼らを壞ること能はず、恐らくは

汝ら神に敵する者とならん』四〇彼等その勸告にしたがひ、遂に使徒たちを呼び出して之を鞭うち、イエスの名によりて語ることを堅く禁じて釋せり。四一使徒たちは御名のために辱しめらるるに相應しき者とせられたるを喜びつつ、議員らの前を出で去れり。四二かくて日毎に宮また家にて教をなし、イエスのキリストなる事を宣傳へて止まざりき。

第六章一そのころ弟子のかず增加はり、ギリシヤ語のユダヤ人、その寡婦らが日々の施濟に漏されたれば、ヘブル語のユダヤ人に對して呟く事あり。二ここに十二使徒すべての弟子を呼び集めて言ふ『われら神の言を差措きて、食卓に事ふるは宜しからず。三然れば兄弟よ、汝らの中より御靈と智慧とにて滿ちたる令聞ある者七人を見出せ、それに此の事を掌どらせん。四我らは專ら祈をなすことと、御言に事ふることとを務めん』五集れる凡ての者この言を善しとし、信仰と聖靈とにて滿ちたるステパノ及びピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、またアンテオケの改宗者ニコラオを選

びて、六使徒たちの前に立てたれば、使徒たち祈りて手をその上に按
けり。七かくて神の言ますます弘り、弟子の數エルサレムにて甚
だ多くなり、祭司の中にも信仰の道に從へるもの多かりき。八さて
ステパノは恩惠と能力とにて滿ち、民の中に大なる不思議と徵と
を行へり。九ここに世に稱ふるリベルテンの會堂およびクレネ人、
アレキサンデリヤ人、またキリキヤとアジヤとの人の諸會堂より、
人々起ちてステパノと論ぜしが、一〇その語るところの智慧と御靈と
に敵すること能はず。一一乃ち或者どもを唆かして『我らはステパ
ノが、モーセと神とを瀆す言をいふを聞けり』と言はしめ、一二民
および長老・學者らを煽動し、俄に來りてステパノを捕へ、議會に
曳きゆき、一三僞證者を立てて言はしむ『この人はこの聖なる所と
律法とに逆ふ言を語りて止まず、一四即ち、かのナザレのイエス
は此の所を毀ち、かつモーセの傳へし例を變ふべしと、彼が云へる
を聞けり』と。一五ここに議會に坐したる者みな目を注ぎてステパノ
を見しに、その顏は御使の顏の如くなりき。

第七章一かくて大祭司いふ『此等のこと果してかくの如きか』二ス
テパノ言ふ『兄弟たち親たちよ、聴け、我らの先祖アブラハム未だ
カランに住まずして尚メソポタミヤに居りしとき、榮光の神あらは
れて、三「なんぢの土地、なんぢの親族を離れて、我が示さんとする
地に往け」と言ひ給へり。四ここにカルデヤの地に出でてカランに住
みたりしが、その父の死にしのち、神は彼を彼處より汝らの今住め
る此の地に移らしめ、五此處にて足、蹈立つる程の地をも嗣業に與へ
給はざりき。然るに、その地を未だ子なかりし彼と彼の裔とに所有と
して與へんと約し給へり。六神また其の裔は他の國に寄寓人となり、
その國人は之を四百年のあひだ奴隷となして苦しめん事を告げ給へ
り。七神いひ給ふ「われは彼らを奴隷とする國人を審かん、然るのち
彼等その國を出で、この處にて我に事へん」八神また割禮の契約を
アブラハムに與へ給ひたれば、イサクを生みて八日めに之に割禮を
行へり。イサクはヤコブを、ヤコブは十二の先祖を生めり。九先祖
たちヨセフを嫉みてエジプトに賣りしに、神は彼と偕に在して、一〇

凡ての患難より之を救ひ出し、エジプトの王パロの前にて寵愛を得
させ、また智慧を與へ給ひたれば、パロ之を立ててエジプトと己が
全家との宰となせり。一一時にエジプトとカナンの全地とに飢饉あ
りて大なる患難おこり、我らの先祖たち糧を求め得ざりしが、一二
ヤコブ、エジプトに穀物あるを聞きて、先づ我らの先祖たちを遣す。
一三二度めの時ヨセフその兄弟たちに知られ、ヨセフの氏族パロに
明かになれり。一四ヨセフ言ひ遣して己が父ヤコブと凡ての親族と
七十五人を招きたれば、一五ヤコブ、エジプトに下り、彼處にて己も
我らの先祖たちも死にたり。一六彼等シケムに送られ、曾てアブラハ
ムがシケムにてハモルの子等より銀をもて買ひ置きし墓に葬られた
り。一七かくて神のアブラハムに語り給ひし約束の時近づくに隨ひ
て、民はエジプトに蕃えひろがり、一八ヨセフを知らぬ他の王、エジ
プトに起るに及べり。一九王は惡計をもて我らの同族にあたり、我
らの先祖たちを苦しめて、其の嬰兒の生存ふる事なからんやう、之
を棄つるに至らしめたり。二〇その頃モーセ生れて甚うるはしくして

三月のあいだ父の家に育てられ、二一遂に棄てられしを、パロの娘ひ
き上げて己が子として育てたり。二二かくてモーセはエジプト人の凡
ての學術を教へられ、言と業とに能力あり。二三年齢四十になりた
る時、おのが兄弟たるイスラエルの子孫を顧みる心おこり、二四
一人の害はるるを見て之を護り、エジプト人を撃ちて、虐げらるる
者の仇を復せり。二五彼は己の手によりて神が救を與へんとし給ふ
ことを、兄弟たち悟りしならんと思ひたるに、悟らざりき。二六翌日
かれらの相争ふところに現れて和睦を勸めて言ふ「人々よ、汝ら
は兄弟なるに、何ぞ互に害ふか」二七隣を害ふ者モーセを押退
けて言ふ「誰が汝を立てて我らの司また審判人とせしぞ、二八昨日
エジプト人を殺したる如く、我をも殺さんとするか」二九この言によ
り、モーセ遁れてミデアンの地の寄寓人となり、二人の子を
儲けたり。三〇四十年を歴て後シナイ山の荒野にて、御使、柴の焔
のなかに現れたれば、三一モーセ之を見て視るところを怪しみ、認
めんとして近づきしとき、主の聲あり。曰く、三二「我は汝の先祖た

ちの神、即ちアブラハム、イサク、ヤコブの神なり」モーセ戰慄き
敢へて認むることを爲ず。三三主いひ給ふ「なんぢの足の鞋を脱げ、
なんぢの立つところは聖なる地なり。三四我エジプトに居る我が民の
苦難を見、その歎息をききて之を救はん爲に降れり。いで我なんぢを
エジプトに遣さん」三五斯く彼らが「誰が汝を立てて司また審判
人とせしぞ」と言ひて拒みし此のモーセを、神は柴のなかに現れた
る御使の手により、司また救人として遣し給へり。三六この人かれ
らを導き出し、エジプトの地にても、また紅海および四十年のあひ
だ荒野にても、不思議と徴とを行ひたり。三七イスラエルの子らに
「神は汝らの兄弟の中より、我がごとき預言者を起し給はん」と云ひ
しは此のモーセなり。三八彼はシナイ山にて語りし御使および我らの
先祖たちと偕に荒野なる集會に在りて汝らに與へん爲に生ける御言
を授りし人なり。三九然るに我らの先祖たちは此の人に從ふことを
好まず、反つて之を押退け、その心エジプトに還りて、四〇アロン
に言ふ「我らに先だち往くべき神々を造れ、我らをエジプトの地より

導き出しし、かのモーセの如何になりしかを知らざればなり」四一
その頃かれら犢を造り、その偶像に犧牲をささげて己が手の所作を
喜べり。四二爰に神は彼らを離れ、その天の軍勢に事ふるに任せ給
へり。これは預言者たちの書に

「イスラエルの家よ、なんぢら
荒野にて四十年の間、
屠りし畜と犧牲とを我に献げしや。
四三汝らは拜せんとして造れる像、
すなはちモロクの幕屋と
神ロンパの星とを舁きたり。
われ汝らをバビロンの彼方に移さん」

と録されたるが如し。四四我らの先祖たちは荒野にて證の幕屋を有
てり、モーセに語り給ひし者の、彼が見し式に循ひて造れと命じ給
ひしままなり。四五我らの先祖たちは之を承け繼ぎ、先祖たちの前よ
り神の逐ひいだし給ひし異邦人の領地を收めし時、ヨシュアととも

に携へ來りてダビデの日に及べり。四六ダビデ神の前に恩惠を得て、
ヤコブの神のために住處を設けんと求めたり。四七而して、その家を
建てたるはソロモンなりき。四八されど至高者は手にて造れる所に
住み給はず、即ち預言者の

四九「主のたまはく、天は我が座位、
地は我が足臺なり。
汝等わが爲に如何なる家をか建てん、
わが休息のところは何處なるぞ。
五〇わが手は凡て此等の物を造りしにあらずや」

と云へるが如し。五一項強くして心と耳とに割禮なき者よ、汝ら
は常に聖靈に逆ふ、その先祖たちの如く汝らも然り。五二汝らの
先祖たちは預言者のうちの誰をか迫害せざりし。彼らは義人の來る
を預じめ告げし者を殺し、汝らは今この義人を賣り、かつ殺す者と
なれり。五三なんぢら、御使たちの傳へし律法を受けて、尚これを守
らざりき』五四人々これらの言を聞きて、心いかりに滿ち切齒しつ

つステパノに向ふ。五五ステパノは聖靈にて滿ち、天に目を注ぎ、神
の榮光およびイエスの神の右に立ちたまふを見て言ふ、五六『視よ、
われ天開けて人の子の神の右に立ち給ふを見る』五七ここに彼ら大聲
に叫びつつ、耳を掩ひ心を一つにして驅け寄り、五八ステパノを町
より逐ひいだし、石にて撃てり。證人らその衣をサウロといふ若者
の足下に置けり。五九かくて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ス
テパノ呼びて言ふ『主イエスよ、我が靈を受けたまへ』六〇また跪
づきて大聲に『主よ、この罪を彼らの負はせ給ふな』と呼はる。斯く
言ひて眠に就けり。

第八章一サウロは彼の殺さるるを可しとせり。その日エルサレムに
在る教會に對ひて大なる迫害おこり、使徒たちの他は皆ユダヤ及び
サマリヤの地方に散さる。二敬虔なる人々ステパノを葬り、彼のため
に大に胸打てり。三サウロは教會をあらし、家々に入り男女を引出
して獄に付せり。四ここに散されたる者ども歷巡りて御言を宣べし
が、五ピリポはサマリヤの町に下りてキリストの事を傳ふ。六群衆

ピリポの行ふ徴を見聞して、心を一つにし、謹みて其の語る事ど
もを聽けり。七これ多くの人より、之に憑きたる穢れし靈、大聲に叫
びて出で、また中風の者と跛者と多く醫されたるに因る。八この故に
その町に大なる歡喜おこれり。九ここにシモンといふ人あり、前に
その町にて魔術を行ひ、サマリヤ人を驚かして自ら大なる者と
稱へたり。一〇小より大に至る凡ての人つつしみて之に聽き『この人
は、いわゆる神の大能なり』といふ。一一かく謹みて聽けるは、久し
き間その魔術に驚かされし故なり。一二然るにピリポが、神の國と
イエス・キリストの御名とに就きて宣傳ふるを人々信じたれば、男女
ともにバプテスマを受く。一三シモンも亦みづから信じ、バプテスマ
を受けて、常にピリポと偕に居り、その行ふ徴と、大なる能力と
を見て驚けり。一四エルサレムに居る使徒たちは、サマリヤ人、神の
御言を受けたりと聞きて、ペテロとヨハネとを遣したれば、一五彼ら
下りて人々の聖靈を受けんことを祈れり。一六これ主イエスの名によ
りてバプテスマを受けしのみにて、聖靈いまだ其の一人にだに降らざ

りしなり。一七ここに二人のもの彼らの上に手を按きたれば、みな聖
靈を受けたり。一八使徒たちの按手によりて其の御靈を與へられしを
見て、シモン金を持ち來りて言ふ、一九『わが手を按くすべての人の聖
靈を受くるやうに、此の權威を我にも與へよ』二〇ペテロ彼に言ふ『な
んぢの銀は汝とともに亡ぶべし、なんぢ金をもて神の賜物を得んと
思へばなり。二一なんぢは此の事に關係なく干與なし、なんぢの心
、神の前に正しからず。二二然ればこの惡を悔改めて主に祈れ、な
んぢが心の念あるひは赦されん。二三我なんぢが苦き膽汁と不義の
繋とに居るを見るなり』二四シモン答へて言ふ『なんぢらの言ふ所
のこと一つも我に來らぬやう、汝ら我がために主に祈れ』二五かくて
使徒たちは證をなし、主の御言を語りて後、サマリヤ人の多くの村
に福音を宣傳へつつエルサレムに歸れり。二六然るに主の使ピリポ
に語りて言ふ『なんぢ起ちて南に向ひエルサレムよりガザに下る道
に往け。そこは荒野なり』二七ピリポ起ちて往きたれば、視よ、エテ
オピヤの女王カンダケの權官にして、凡ての寶物を掌どる閹人エテ

オピヤ人あり、禮拜の爲にエルサレムに上りしが、二八歸る途すがら
馬車に坐して預言者イザヤの書を讀みゐたり。二九御靈ピリポに言ひ
給ふ『ゆきて此の馬車に近寄れ』三〇ピリポ走り寄りて、その預言者
イザヤの書を讀むを聽きて言ふ『なんぢ其の讀むところを悟るか』三
一閹人いふ『導く者なくば、いかで悟り得ん』而してピリポに、乘り
て共に坐せんことを請ふ。三二その讀むところの聖書の文は是なり
『彼は羊の屠場に就くが如く曳かれ、
羔羊のその毛を剪る者のまへに默すがごとく
口を開かず。
三三卑しめられて審判を奪はれたり、
誰かその代の状を述べ得んや。
その生命地上より取られたればなり』
三四閹人こたへてピリポに言ふ『預言者は誰に就きて斯く云へるぞ、
己に就きてか、人に就きてか、請ふ示せ』三五ピリポ口を開き、こ
の聖句を始としてイエスの福音を宣傳ふ。三六途を進むる程に水あ

る所に來りたれば、閹人いふ『視よ、水あり、我がバプテスマを受
くるに何の障りかある』三七[なし]三八乃ち命じて馬車を止め、ピリ
ポと閹人と二人ともに水に下りて、ピリポ閹人にバプテスマを授く。
三九彼ら水より上りしとき、主の靈ピリポを取去りたれば、閹人ふた
たび彼を見ざりしが、喜びつつ其の途に進み往けり。四〇かくてピ
リポはアゾトに現れ、町々を經て福音を宣傳へつつカイザリヤに到
れり。

第九章一サウロは主の弟子たちに對して、なほ恐喝と殺害との氣
を充し、大祭司にいたりて、二ダマスコにある諸教會への添書を請
ふ。この道の者を見出さば、男女にかかはらず縛りてエルサレムに
曳かん爲なり。三往きてダマスコに近づきたるとき、忽ち天より光
いでて、彼を環り照したれば、四かれ地に倒れて『サウロ、サウロ、
何ぞ我を迫害するか』といふ聲をきく。五彼いふ『主よ、なんぢは誰
ぞ』答へたまふ『われは汝が迫害するイエスなり。六起きて町に入
れ、さらば汝なすべき事を告げらるべし』七同行の人々、物言ふこと

能はずして立ちたりしが、聲は聞けども誰をも見ざりき。八サウロ地
より起きて目をあけたれど何も見えざれば、人その手をひきてダマス
コに導きゆきしに、九三日のあひだ見えず、また飲食せざりき。一〇
さてダマスコにアナニヤといふ一人の弟子あり、幻影のうちに主いひ
給ふ『アナニヤよ』答ふ『主よ、我ここに在り』一一主いひ給ふ『起き
て直といふ街にゆき、ユダの家にてサウロといふタルソ人を尋ねよ。
視よ、彼は祈りをるなり。一二又アナニアといふ人の入り來りて、再
び見ゆることを得しめんために、手を己がうへに按くを見たり』一三
アナニヤ答ふ『主よ、われ多くの人より此の人に就きて聞きしに、彼
がエルサレムにて汝の聖徒に害を加へしこと如何ばかりぞや。一四
また此處にても、凡て汝の御名をよぶ者を縛る權を祭司長らより受
けをるなり』一五主いひ給ふ『往け、この人は異邦人・王たち・イスラ
エルの子孫のまへに、我が名を持ちゆく我が選の器なり。一六我か
れに我が名のために如何に多くの苦難を受くるかを示さん』一七ここ
にアナニヤ往きて其の家にいり、彼の上に手をおきて言ふ『兄弟サ

ウロよ、主すなはち汝が來る途にて現れ給ひしイエス、われを遣
し給へり。なんぢが再び見ることを得、かつ聖靈にて滿されん爲な
り』一八直ちに彼の目より鱗のごときもの落ちて見ることを得、す
なはち起きてバプテスマを受け、一九かつ食事して力づきたり。サ
ウロは數日の間ダマスコの弟子たちと偕にをり、二〇直ちに諸會堂
にて、イエスの神の子なることを宣べたり。二一聞く者みな驚きて
言ふ『こはエルサレムにて此の名をよぶ者を害ひし人ならずや、又
ここに來りしも、之を縛りて祭司長らの許に曳きゆかんが爲ならず
や』二二サウロますます能力くははり、イエスのキリストなることを
論證して、ダマスコに住むユダヤ人を言ひ伏せたり。二三日を經る
こと久しくして後、ユダヤ人かれを殺さんと相謀りたれど、二四その
計畧サウロに知らる。かくて彼らはサウロを殺さんとて、晝も夜も
町の門を守りしに、二五その弟子ら夜中かれを籃にて石垣より縋り下
せり。二六ここにサウロ、エルサレムに到りて弟子たちの中に列ら
んとすれど、皆かれが弟子たるを信ぜずして懼れたり。二七然るにバ

ルナバ彼を迎へて、使徒たちの許に伴ひゆき、その途にて主を見し
こと、主の之に物言ひ給ひしこと、又ダマスコにてイエスの名のため
に臆せず語りし事などを具に告ぐ。二八ここにサウロはエルサレム
にて弟子たちと共に出入し、主の御名のために臆せず語り、又ギ
リシヤ語のユダヤ人と、かつ語りかつ論じたれば、彼等これを殺さ
んと謀りしに、三〇兄弟たち知りて彼をカイザリヤに伴ひ下り、タ
ルソに往かしめたり。三一かくてユダヤ、ガリラヤ及びサマリヤを通
じて、教會は平安を得、ややに堅立し、主を畏れて歩み、聖靈の祐助
によりて人數いや増せり。三二ペテロは　く四方をめぐりてルダに
住む聖徒の許にいたり、三三彼處にてアイネヤといふ人の中風を患
ひて八年のあひだ牀に臥し居るに遇ふ。三四かくてペテロ之に『アイ
ネヤよ、イエス・キリスト汝を醫したまふ、起きて牀を收めよ』と
言ひたれば、直ちに起きたり。三五ここにルダ及びサロンに住む者み
な之を見て主に歸依せり。三六ヨツパにタビタと云ふ女の弟子あり、
その名を譯すればドルカスなり。此の女は、ひたすら善き業と施濟

とをなせり。三七彼そのころ病みて死にたれば、之を洗ひて高樓に置
く。三八ルダはヨツパに近ければ、弟子たちペテロの彼處に居るを聞
きて、二人の者を遣し『ためらはで我らに來れ』と請はしむ。三九
ペテロ起ちてともに往き、遂に到れば、彼を高樓に伴れてのぼりし
に、寡婦らみな之をかこみて泣きつつ、ドルカスが偕に居りしほどに
製りし下衣・上衣を見せたり。四〇ペテロ彼等をみな外に出し、跪
づきて祈りし後、ふりかへり屍體に向ひて『タビタ、起きよ』と言ひ
たれば、かれ目を開き、ペテロを見て起反れり。四一ペテロ手をあた
へ、起して聖徒と寡婦とを呼び、タビタを活きたるままにて見す。四
二この事ヨツパ中に知られたれば、多くの人、主を信じたり。四三ペ
テロ皮工シモンの家にありて日久しくヨツパに留れり。

第一〇章 一ここにカイザリヤにコルネリオといふ人あり、イタリ
ヤ隊と稱ふる軍隊の百卒長なるが、二敬虔にして全家族とともに神
を畏れ、かつ民に多くの施濟をなし、常に神に祈れり。三或日の午後
三時ごろ幻影のうちに神の使きたりて『コルネリオよ』と言ふを明

かに見たれば、四之に目をそそぎ怖れて言ふ『主よ、何事ぞ』御使い
ふ『なんぢの祈と施濟とは、神の前に上りて記念とせらる。五今ヨツ
パに人を遣してペテロと稱ふるシモンを招け、六彼は皮工シモンの
家に宿る。その家は海邊にあり』七斯く語れる御使の去りし後、コル
ネリオ己が僕二人と從卒中の敬虔なる者一人とを呼び、八凡ての
事を告げてヨツパに遣せり。九明くる日かれらなほ途中にあり、既
に町に近づかんとする頃ほひ、ペテロ祈らんとて屋の上に登る、時は
晝の十二時ごろなりき。一〇飢ゑて物欲しくなり、人の食を調ふる
ほどに我を忘れし心地して、一一天開け、器のくだるを見る、大な
る布のごとき物にして、四隅もて地に縋り下されたり。一二その中に
は諸種の四足のもの、地を匐ふもの、空の鳥あり。一三また聲ありて
言ふ『ペテロ、立て、屠りて食せよ』一四ペテロ言ふ『主よ、可から
じ、我いまだ潔からぬもの穢れたる物を食せし事なし』一五聲再び
ありて言ふ『神の潔め給ひし物を、なんぢ潔からずとすな』一六かく
の如きこと三度にして、器は直ちに天に上げられたり。一七ペテロ

その見し幻影の何の意なるか、心に惑ふほどに、視よ、コルネリオ
より遣されたる人、シモンの家を尋ねて門の前に立ち、一八訪ひて、
ペテロと稱ふるシモンの此處に宿るかを問ふ。一九ペテロなほ幻影に
就きて打案じゐたるに、御靈いひ給ふ『視よ、三人なんぢを尋ぬ。二
〇起ちて下り疑はずして共に往け、彼らを遣したるは我なり』二一
ペテロ下りて、かの人たちに言ふ『視よ、我は汝らの尋ぬる者なり、
何の故ありて來るか』二二かれら言ふ『義人にして神を畏れ、ユダヤ
の國人の中に令聞ある百卒長コルネリオ、聖なる御使より、汝を
家に招きて、その語ることを聽けとの告を受けたり』二三ここにペテ
ロ彼らを迎へ入れて宿らす。明くる日たちて彼らと共に出でゆきし
が、ヨツパの兄弟も數人ともに往けり。二四明くる日カイザリヤに
入りし時、コルネリオは親族および親しき朋友を呼び集めて彼らを
待ちゐたり。二五ペテロ入り來れば、コルネリオ之を迎へ、その足下
に伏して拜す。二六ペテロ彼を起して言ふ『立て、我も人なり』二七
かくて相語りつつ内に入り、多くの人の集れるを見て、ペテロ之に

言ふ、二八『なんぢらの知る如く、ユダヤ人たる者の外の國人と交り
また近づくことは、律法に適はぬ所なり、然れど神は、何人をも穢
れたるもの潔からぬ者と言ふまじきことを我に示したまへり。二九こ
の故に、われ招かるるや躊躇はずして來れり。然れば問ふ、汝らは
何の故に我をまねきしか』三〇コルネリオ言ふ『われ四日前に我が家
にて午後三時の祈をなし、此の時刻に至りしに、視よ、輝く衣を
著たる人、わが前に立ちて、三一「コルネリオよ、汝の祈は聽かれ、
なんぢの施濟は神の前に憶えられたり。三二人をヨッパに送りてペテ
ロと稱ふるシモンを招け、かれは海邊なる皮工シモンの家に宿るな
り」と云へり。三三われ速かに人を汝に遣したるに、汝の來れる
は忝けなし。いま我等はみな、主の汝に命じ給ひし凡てのことを
聽かんとて、神の前に在り』三四ペテロ口を開きて言ふ、『われ今まこ
とに知る、神は偏ることをせず、三五何れの國の人にても神を敬ひ
て義をおこなふ者を容れ給ふことを。三六神はイエス・キリスト（こ
れ萬民の主）によりて平和の福音をのべ、イスラエルの子孫に言を

おくり給へり。三七即ちヨハネの傳へしバプテスマの後、ガリラヤ
より始り、ユダヤ全國に弘りし言なるは汝らの知る所なり。三
八これは神が聖靈と能力とを注ぎ給ひしナザレのイエスの事にして、
彼は　くめぐりて善き事をおこなひ、凡て惡魔に制せらるる者を醫
せり、神これと偕に在したればなり。三九我等はユダヤの地およびエ
ルサレムにて、イエスの行ひ給ひし諸般のことの證人なり、人々は
彼を木にかけて殺せり。四〇神は之を三日めに甦へらせ、かつ明か
に現したまへり。四一然れど凡ての民にはあらで、神の預じめ選び
給へる證人、即ちイエスの死人の中より甦へり給ひし後、これと
共に飮食せし我らに現し給ひしなり。四二イエスは己の生ける者と
死にたる者との審判主に、神より定められしを證することと、民ど
もに宣傳ふる事とを我らに命じ給ふ。四三彼につきては預言者たちも
皆、おほよそ彼を信ずる者の、その名によりて罪の赦を得べきこと
を證す』四四ペテロ尚これらの言を語りをる間に、聖靈、御言をき
く凡ての者に降りたまふ。四五ペテロと共に來りし割禮ある信者は、

異邦人にも聖靈の賜物のそそがれしに驚けり。四六そは彼らが異言
をかたり、神を崇むるを聞きたるに因る。四七ここにペテロ答へて言
ふ『この人々われらの如く聖靈をうけたれば、誰か水を禁じて其の
バプテスマを受くることを拒み得んや』四八遂にイエス・キリストの
御名によりてバプテスマを授けられんことを命じたり。ここに彼ら
ペテロに數日とどまらんことを請へり。

第一一章

一使徒たち及びユダヤに居る兄弟たちは、異邦人も神の
言を受けたりと聞く。二かくてペテロのエルサレムに上りしとき、
割禮ある者ども彼を詰りて言ふ、三『なんぢ割禮なき者の内に入りて
之と共に食せり』四ペテロ有りし事を序正しく説き出して言ふ、五
『われヨッパの町にて祈り居るとき、我を忘れし心地し、幻影にて器
のくだるを見る、大なる布のごとき物にして、四隅もて天より縋り
下され我が許にきたる。六われ目を注めて之を視るに、地の四足のも
の、野の獸、匍ふもの、空の鳥を見たり。七また「ペテロ、立て、屠
りて食せよ」といふ聲を聞けり。八我いふ「主よ、可からじ、潔か

らぬもの穢れたる物は、曾て我が口に入りしことなし」九再び天よ
り聲ありて答ふ「神の潔め給ひし物を、なんぢ潔からずと爲な」一〇
かくの如きこと三度にして、終にはみな天に引上げられたり。一一視
よ、三人の者カイザリヤより我に遣されて、はや我らの居る家の前
に立てり。一二御靈われに、疑はずして彼らと共に往くことを告げ
給ひたれば、此の六人の兄弟も我とともに往きて、かの人の家に入
れり。一三彼はおのが家に御使の立ちて「人をヨッパに遣し、ペテロ
と稱ふるシモンを招け、一四その人、なんぢと汝の全家族との救は
るべき言を語らん」と言ふを、見しことを我らに告げたり。一五ここ
に、われ語り出づるや、聖靈かれらの上に降りたまふ、初め我らの上
に降りし如し。一六われ主の曾て「ヨハネは水にてバプテスマを施
ししが、汝らは聖靈にてバプテスマを施されん」と宣給ひし御言を
思ひ出せり。一七神われらが主イエス・キリストを信ぜしときに賜ひ
しと同じ賜物を彼らにも賜ひたるに、われ何者なれば神を阻み得ん』
一八人々これを聞きて默然たりしが、頓て神を崇めて言ふ『されば神

は異邦人にも生命を得さする悔改を與へ給ひしなり』一九かくてス
テパノによりて起りし迫害のために散されたる者ども、ピニケ、クブ
ロ、アンテオケまで到り、ただユダヤ人にのみ御言を語りたるに、二
〇その中にクブロ及びクレネの人、數人ありて、アンテオケに來りし
時、ギリシヤ人にも語りて主イエスの福音を宣傳ふ。二一主の手かれ
らと偕にありたれば、數多の人、信じて主に歸依せり。二二この事エ
ルサレムに在る教會に聞えたれば、バルナバをアンテオケに遣す。
二三かれ來りて、神の恩惠を見てよろこび、みな心を堅く
して主にをらんことを勸む。二四彼は聖靈と信仰とにて滿ちたる善き
人なればなり。ここに多くの人々、主に加はりたり。二五かくてバル
ナバはサウロを尋ねんとてタルソに往き、二六彼に逢ひてアンテオケ
に伴ひきたり、二人ともに一年の間かしこの教會の集會に出でて
多くの人を教ふ。弟子たちのキリステアンと稱へらるる事はアンテ
オケより始れり。二七その頃エルサレムより預言者たちアンテオケ
に下る。二八その中の一人アガボと云ふもの起ちて、大なる飢饉の

全世界にあるべきことを御靈によりて示せるが、果してクラウデオ
の時に起れり。二九ここに弟子たち各々の力に應じてユダヤに住む
兄弟たちに扶助をおくらん事をさだめ、三〇遂に之をおこなひ、バ
ルナバ及びサウロの手に托して長老たちに贈れり。

第一二章
一その頃ヘロデ王、教會のうちの或人どもを苦しめんと
て手を下し、二劍をもてヨハネの兄弟ヤコブを殺せり。三この事ユ
ダヤ人の心に適ひたるを見て、またペテロをも捕ふ、頃は除酵祭の
時なりき。四すでに執りて獄に入れ、過越の後に民のまへに曳き出
さんとの心構にて、四人一組なる四組の兵卒に付して之を守らせた
り。五かくてペテロは獄のなかに因はれ、教會は熱心に彼のために
神に祈をなせり。六ヘロデこれを曳き出さんとする其の前の夜、ペ
テロは二つの鏈にて繫がれ、二人の兵卒のあひだに睡り、番兵らは
門口にゐて獄を守りたるに、七視よ、主の使ペテロの傍らに立ち
て、光明室内にかがやく。御使かれの脇をたたき、覺していふ『疾く
起きよ』かくて鏈その手より落ちたり。八御使いふ『帶をしめ、鞋

をはけ』彼その如く爲たれば、又いふ『上衣をまとひて我に從へ』
九ペテロ出でて隨ひしが、御使のする事の眞なるを知らず、幻影を
見るならんと思ふ。一〇かくて第一・第二の警固を過ぎて町に入ると
ころの鐵の門に到れば、門おのづから彼等のために開け、相共にい
でて一つの街を過ぎしとき、直ちに御使はなれたり。一一ペテロ我
に反りて言ふ『われ今まことに知る、主その使を遣して、ヘロデ
の手およびユダヤの民の凡て思ひ設けし事より、我を救ひ出し給ひ
しを』一二斯く悟りてマルコと稱ふるヨハネの母マリヤの家に往きし
が、其處には數多のもの集りて祈りゐたり。一三ペテロ門の戸を叩
きたれば、ロダといふ婢女ききに出できたり、一四ペテロの聲なるを
知りて、勸喜のあまりに門を開けずして走り入り、ペテロの門の前
に立てることを告げたれば、一五彼ら『なんぢは氣狂へり』と言ふ。
然れどロダは夫なりと言張る。かれら言ふ『それはペテロの御使な
らん』一六然るにペテロなほ叩きて止まざれば、かれら門をひらき之
を見て驚けり。一七かれ手を搖かして人々を鎭め、主の己を獄よ

り導きいだし給ひしことを具に語り『これをヤコブと兄弟たちと
に告げよ』と言ひて他の處に出で往けり。一八夜明になりて、ペテ
ロは如何にせしとて兵卒の中の騷一方ならず。一九ヘロデ之を索む
れど見出さず、遂に守卒を訊して死罪を命じ、而してユダヤよりカ
イザリヤに下りて留れり。二〇偖ヘロデ、ツロとシドンとの人々を
甚く怒りたれば、其の民ども心を一つにして彼の許にいたり、王の
内侍の臣ブラストに取入りて和諧を求む。かれらの地方は王の國よ
り食品を得るに因りてなり。二一ヘロデ定めたる日に及びて王の服
を著け高座に坐して言を宣べたれば、二二集民よばはりて『これ神の
聲なり、人の聲にあらず』と言ふ。二三ヘロデ神に榮光を歸せぬに
因りて、主の使たちどころに彼を撃ちたれば、蟲に噛まれて息絶え
たり。二四かくて主の御言いよいよ増々ひろまる。二五バルナバ、サ
ウロはその職務を果し、マルコと稱ふるヨハネを伴ひてエルサレム
より歸れり。
第一三章一アンテオケの教會にバルナバ、ニゲルと稱ふるシメオ

ン、クレネ人ルキオ、國守ヘロデの乳兄弟マナエン及びサウロなど
いふ預言者と教師とあり。二彼らが主に事へ斷食したるとき、聖靈い
ひ給ふ『わが召して行はせんとする業の爲に、バルナバとサウロと
を選び、別て』三ここに彼ら斷食し、祈りて二人の上に手を按きて往
かしむ。四この二人、聖靈に遣されてセルキヤに下り、彼處より船
にてクプロに渡り、五サラミスに著きてユダヤ人の諸會堂にて神の
言を宣傳へ、またヨハネを助人として伴ふ。六　くこの島を經行
きてパポスに到り、バルイエスといふユダヤ人にて僞預言者たる魔術
者に遇ふ。七彼は地方總督なる慧き人セルギオ・パウロと偕にあり
き。總督はバルナバとサウロとを招き神の言を聽かんとしたるに、
八かの魔術者エルマ（この名を釋けば魔術者）二人に敵對して總督を
信仰の道より離れしめんとせり。九サウロ又の名はパウロ、聖靈に滿
され、彼に目を注めて言ふ、一〇『ああ有らゆる詭計と奸惡とにて滿
ちたる者、惡魔の子、すべての義の敵よ、なんぢ主の直き道を曲げ
て止まぬか。一一視よ、いま主の御手なんぢの上にあり、なんぢ盲目

となりて暫く日を見ざるべし』かくて立刻に朦と闇とその目を掩
ひたれば、探り回りて導きくるる者を求む。一二ここに總督この有
りし事を見て、主の教に驚きて信じたり。一三さてパウロ及び之に
伴ふ人々、パポスより船出してパンフリヤのペルガに到り、ヨハネ
は離れてエルサレムに歸れり。一四彼らはペルガより進み往きてピシ
デヤのアンテオケに到り、安息日に會堂に入りて坐せり。一五律法
および預言者の書の朗讀ありしのち、會堂司たち人を彼らに遣し
『兄弟たちよ、もし民に勸の言あらば言へ』と言はしめたれば、一
六パウロ起ちて手を搖かして言ふ、『イスラエルの人々および神を畏
るる者よ、聽け。一七このイスラエルの民の神は、我らの先祖を選び、
そのエジプトの地に寄寓せし時、わが民をおこし、強き御腕にて之を
導きいだし、一八おほよそ四十年のあひだ、荒野にて彼らの所作を
忍び、一九カナンの地にて七つの民族をほろぼし、その地を彼らに嗣
がしめて、二〇凡そ四百五十年を經たり。此ののち預言者サムエル
の時代まで審判人を賜ひしを、二一後に至りて彼ら王を求めたれば、

神は之にキスの子サウロと云ふベニヤミンの族の人を四十年のあひ
だ賜ひ、二二之を退けて後、ダビデを擧げて王となし、且これを證
して「我エッサイの子ダビデといふ我が心に適ふ者を見出せり、彼
わが意をことごとく行はん」と宣給へり。二三神は約束に隨ひて
此の人の裔より、イスラエルの爲に救主イエスを興し給ひしが、二
四その來る前にヨハネ預じめイスラエルの凡ての民に悔改のバプ
テスマを宣傳へたり。二五かくてヨハネ己が走るべき道程を終へんと
する時「なんぢら我を誰と思ふか、我はかの人にあらず、視よ、我
に後れて來る者あり、我はその鞋の紐を解くにも足らず」と云へり。
二六兄弟たち、アブラハムの血統の子ら及び汝等のうち神を畏るる
者よ、この救の言は我らに贈られたり。二七それエルサレムに住め
る者および其の司らは、彼をも安息日ごとに讀むところの預言者た
ちの言をも知らず、彼を刑ひて預言を成就せしめたり。二八その
死に當るべき故を得ざりしかど、ピラトに殺さんことを求め、二九彼
につきて記されたる事をことごとく成しをへ、彼を木より下して墓

に納めたり。三〇されど神は彼を死人の中より甦へらせ給へり。三
一かくてイエスは己と偕にガリラヤよりエルサレムに上りし者に多
くの日のあひだ現れ給へり。その人々は今、民の前にイエスの證人
たるなり。三二我らも先祖たちが與へられし約束につきて喜ばしき
音信を汝らに告ぐ、三三神はイエスを甦へらせて、その約束を我ら
の子孫に成就したまへり。即ち詩の第二篇に「なんぢは我が子な
り、われ今日なんぢを生めり」と録されたるが如し。三四また朽腐に
歸せざる状に彼を死人の中より甦へらせ給ひし事に就きては、斯く
宣給へり。曰く「われダビデに約せし確き聖なる恩惠を汝らに與へ
ん」三五そは他の篇に「なんぢは汝の聖者を朽腐に歸せざらしむべ
し」と云へり。三六それダビデは、その代にて神の御旨を行ひ、終に
眠りて先祖たちと共に置かれ、かつ朽腐に歸したり。三七然れど神の
甦へらせ給ひし者は朽腐に歸せざりき。三八この故に兄弟たちよ、
汝ら知れ。この人によりて罪の赦のなんぢらに傳へらるることを。
三九汝らモーセの律法によりて義とせられ得ざりし凡ての事も、信

ずる者は皆この人によりて義とせらるる事を。四〇然れば汝ら心せ
よ、恐らくは預言者たちの書に云ひたること來らん、四一曰く
「あなどる者よ、なんぢら視よ、
おどろけ、亡びよ、
われ汝らの日に一つの事を行はん。
これを汝らに具に告ぐる者ありとも
信ぜざる程の事なり」』
四二彼らが會堂を出づるとき、人々これらの言を次の安息日にも
語らんことを請ふ。四三集會の散ぜし後、ユダヤ人および敬虔なる
改宗者おほくパウロとバルナバとに從ひ往きたれば、彼らに語り
て神の恩惠に止らんことを勸めたり。四四次の安息日には、神の言
を聽かんとて殆ど町擧りて集りたり。四五されどユダヤ人はその
群衆を見て嫉に滿され、パウロの語ることに言ひ逆ひて罵れり。
四六パウロとバルナバとは臆せずして言ふ『神の言を先づ汝らに語
るべかりしを、汝等これを斥けて己を永遠の生命に相應しからぬ

者と自ら定むるによりて、視よ、我ら轉じて異邦人に向はん。四七
それ主は斯く我らに命じ給へり。曰く
「われ汝を立てて異邦人の光とせり。
地の極にまで救とならしめん爲なり」』
四八異邦人は之を聽きて喜び、主の言をあがめ、又とこしへの生命
に定められたる者はみな信じ、四九主の言この地にあまねく弘りたり。
五〇然るにユダヤ人ら、敬虔なる貴女たち及び町の重立ちたる人々を
唆かして、パウロとバルナバとに迫害をくはへ、遂に彼らを其の境
より逐ひ出せり。五一二人は彼らに對ひて足の塵をはらひ、イコニオ
ムに往く。五二弟子たちは喜悦と聖靈とにて滿され居たり。

第一四章

一二人はイコニオムにて相共にユダヤ人の會堂に入りて
語りたれば、之に由りてユダヤ人およびギリシヤ人あまた信じたり。
二然るに從はぬユダヤ人ら異邦人を唆かし、兄弟たちに對して惡意
を懷かしむ。三二人は久しく留り、主によりて臆せずして語り、主
は彼らの手により、徴と不思議とを行ひて恵の御言を證したま

ふ。四ここに町の人々相分れて、或者はユダヤ人に黨し、或者は使徒
たちに黨せり。五異邦人ユダヤ人および其の司ら相共に使徒たちを
辱しめ、石にて撃たんと企てしに、六彼ら悟りてルカオニヤの町な
るルステラ、デルベ及びその邊の地にのがれ、七彼處にて福音を宣傳
ふ。八ルステラに足弱き人ありて坐しゐたり、生れながらの跛者にて
曾て歩みたる事なし。九この人パウロの語るを聽きゐたるが、パウロ
之に目をとめ、救はるべき信仰あるを見て、一〇大聲に『なんぢの足
にて眞直に起て』と言ひたれば、かれ躍り上りて歩めり。一一群衆、
パウロの爲ししことを見て聲を揚げ、ルカオニヤの國語にて『神た
ち人の形をかりて我らに降り給へり』と言ひ、一二バルナバをゼウス
と稱へ、パウロを宗と語る人なる故にヘルメスと稱ふ。一三而して町
の外なるゼウスの宮の祭司、數匹の牛と花飾とを門の前に携へきた
りて、群衆とともに犧牲を献げんとせり。一四使徒たち、即ちバル
ナバとパウロと之を聞きて、己が衣をさき群衆のなかに馳せ入り、
一五呼はりて言ふ『人々よ、なんぞ斯かる事をなすか、我らも汝らと

同じ情を有てる人なり、汝らに福音を宣べて斯かる虚しき者より離
れ、天と地と海とその中にある有らゆる物とを造り給ひし活ける神に
歸らしめんとするなり。一六過ぎし時代には神、すべての國人の己が
道々を歩むに任せ給ひしかど、一七また自己を證し給はざりし事な
し。即ち善き事をなし、天より雨を賜ひ、豐穰の時をあたへ、食物
と歡喜とをもて汝らの心を滿ち足らはせ給ひしなり』一八斯く言ひ
て辛うじて群衆の己らに犧牲を獻げんとするを止めたり。一九然る
に數人のユダヤ人、アンテオケ及びイコニオムより來り、群衆を勸
め、而してパウロを石にて撃ち、既に死にたりと思ひて町の外に曳き
出せり。二〇弟子たち之を立圍みゐたるに、パウロ起きて町に入る。
明くる日バルナバと共にデルベに出で往き、二一その町に福音を宣傳
へ、多くの人を弟子として後、ルステラ、イコニオム、アンテオケに
還り、二二弟子たちの心を堅うし信仰に止らんことを勸め、また我
らが多くの艱難を歴て神の國に入るべきことを教ふ。二三また教會
毎に長老をえらび、斷食して祈り、弟子たちを其の信ずる所の主に

委ぬ。二四かくてピシデヤを經てパンフリヤに到り、二五ペルガにて
御言を語りて後アタリヤに下り、二六彼處より船出して、その成し果
てたる務のために神の惠みに委ねられし處なるアンテオケに往け
り。二七既に到りて教會の人々を集めたれば、神が己らと偕に在し
て成し給ひし凡てのこと、竝に信仰の門を異邦人にひらき給ひしこ
とを述ぶ。二八かくて久しく留りて弟子たちと偕にゐたり。

第一五章 一或人々ユダヤより下りて、兄弟たちに『なんぢらモー
セの例に遵ひて割禮を受けずば救はるるを得ず』と教ふ。二ここに
彼らとパウロ及びバルナバとの間に、大なる紛爭と議論と起りたれ
ば、兄弟たちはパウロ、バルナバ及びその中の數人をエルサレムに
上らせ、此の問題につきて使徒・長老たちに問はしめんと定む。三
かれら教會の人々に見送られて、ピニケ及びサマリヤを經、異邦人
の改宗せしことを具に告げて、凡ての兄弟に大なる喜悅を得させ
たり。四エルサレムに到り、教會と使徒と長老とに迎へられ、神が
己らと偕に在して爲し給ひし凡ての事を述べたるに、五信者となり

たるパリサイ派の或人々立ちて『異邦人にも割禮を施し、モーセの
律法を守ることを命ぜざる可からず』と言ふ。六ここに使徒・長老
たち此の事につきて協議せんとて集る。七多くの議論ありし後、ペ
テロ起ちて言ふ『兄弟たちよ、汝らの知るごとく、久しき前に神
は、なんぢらの中より我を選び、わが口より異邦人に福音の言を聞
かせ、之を信ぜしめんとし給へり。八人の心を知りたまふ神は、我
らと同じく、彼等にも聖靈を與へて證をなし、九かつ信仰によりて彼
らの心をきよめ、我らと彼らとの間に隔を置き給はざりき。一〇
然るに何ぞ神を試みて、弟子たちの頸に我らの先祖も我らも負ひ能
はざりし軛をかけんとするか。一一然らず、我らの救はるるも彼ら
と均しく主イエスの恩惠に由ることを我らは信ず』一二ここに會衆
みな默して、バルナバとパウロとの、己等によりて神が異邦人のう
ちに爲し給ひし多くの徴と不思議とを述ぶるを聽く。一三彼らの語
り終へし後、ヤコブ答へて言ふ『兄弟たちよ、我に聽け、一四シメオ
ン既に神の初めて異邦人を顧み、その中より御名を負ふべき民を取

り給ひしことを述べしが、一五預言者たちの言もこれと合へり。一六録して

「こののち我かへりて、
倒れたるダビデの幕屋を再び造り、
その頽れし所をふたたび造り、
而して之を立てん。
一七これ殘餘の人々、主を尋ね求め、
凡て我が名をもて稱へらるる異邦人も
また然せん爲なり。
一八古へより此等のことを知らしめ給ふ主、
これを言ひ給ふ」

とあるが如し。一九之によりて我は判斷す、異邦人の中より神に歸依する人を煩はすべきにあらず。二〇ただ書き贈りて、偶像に穢されたる物と、淫行と、絞殺したる物と、血とを避けしむべし。二一昔より、いづれの町にもモーセを宣ぶる者ありて、安息日毎に諸會堂に

てその書を讀めばなり』二二ここに使徒・長老たち及び全教會は、
その中より人を選びてパウロ、バルナバと共にアンテオケに送るこ
とを可しとせり。選ばれたるは、バルサバと稱ふるユダとシラスと
にて、兄弟たちの中の重立ちたる者なり。二三之に托したる書にい
ふ『使徒および長老たる兄弟ら、アンテオケ、シリヤ、キリキヤ
に在る異邦人の兄弟たちの平安を祈る。二四我等のうちの或人々わ
れらが命じもせぬに、言をもて汝らを煩はし、汝らの心を亂し
たりと聞きたれば、二五我ら心を一つにして人を選びて、二六我らの
主イエス・キリストの名のために生命を惜まざりし者なる、我らの
愛するバルナバ、パウロと共に汝らに遣すことを可しとせり。二七
之によりて我らユダとシラスとを遣す、かれらも口づから此等のこ
とを述べん。二八聖靈と我らとは左の肝要なるものの他に何をも汝
らに負はせぬを可しとするなり。二九即ち偶像に献げたる物と、血
と、絞殺したる物と、淫行とを避くべき事なり、汝等これを愼ま
ば善し。なんぢら健かなれ』三〇かれら別を告げてアンテオケに下

り、人々を集めて書を付す。三一人々これを讀み慰安を得て喜べり。
三二ユダもシラスもまた預言者なれば、多くの言をもて兄弟たちを
勸めて彼らを堅うし、三三暫く留りてのち、兄弟たちに平安を祝
せられ、別を告げて、己らを遣しし者に歸れり。三四［なし］三五斯
てパウロとバルナバとは尚アンテオケに留りて多くの人とともに主
の御言を教へ、かつ宣傳へたり。三六數日の後パウロはバルナバに言
ふ『いざ、我ら曩に主の御言を傳へし凡ての町にまた往きて、兄弟
たちを訪ひ、その安否を尋ねん』三七バルナバはマルコと稱ふるヨハ
ネを伴はんと望み、三八パウロは彼が曾てパンフリヤより離れ去り
て、勤勞のために共に往かざりしをもて、伴ふは宜しからずと思ひ、
三九激しき爭論となりて遂に二人相別れ、バルナバはマルコを伴ひ、
舟にてクプロに渡り、四〇パウロはシラスを選び、兄弟たちより主
の恩惠に委ねられて出で立ち、四一シリヤ、キリキヤを經て諸教會
を堅うせり。

第一六章一かくてパウロ、デルベとルステラとに到りたるに、視よ、

彼處にテモテと云ふ弟子あり、その母は信者なるユダヤ人にて、父
はギリシヤ人なり。二彼はルステラ、イコニオムの兄弟たちの中に
令聞ある者なり。三パウロかれの共に出で立つことを欲したれば、そ
の邊に居るユダヤ人のために之に割禮を行へり、その父のギリシヤ
人たるを凡ての人の知る故なり。四かくて町々を經ゆきて、エルサレ
ムに居る使徒・長老たちの定めし規を守らせんとて、之を人々に授
けたり。五ここに諸教會はその信仰を堅うせられ、人員日毎にいや
増せり。六彼らアジヤにて御言を語ることを聖靈に禁ぜられたれば、
フルギヤ及びガラテヤの地を經ゆきて、七ムシヤに近づき、ビテニヤ
に往かんと試みたれど、イエスの御靈ゆるし給はず、八遂にムシヤを
過ぎてトロアスに下れり。九パウロ夜、幻影を見たるに、一人のマケ
ドニヤ人あり、立ちて己を招き『マケドニヤに渡りて我らを助けよ』
と言ふ。一〇パウロこの幻影を見たれば、我らは神のマケドニヤ人に
福音を宣傳へしむる爲に、我らを召し給ふことと思ひ定めて、直ちに
マケドニヤに赴かんとせり。一一さてトロアスより船出して、眞直

にはせてサモトラケにいたり、次の日ネアポリスにつき、一二彼處よ
りピリピにゆく。ここはマケドニヤの中にて、この邊の第一の町に
して殖民地なり、われら數日の間この町に留る。一三安息日に町の
門を出でて、祈場あらんと思はるる河のほとりに往き、其處に坐し
て、集れる女たちに語りたれば、一四テアテラの町の紫布の商人
にして、神を敬ふルデヤと云ふ女きき居りしが、主その心をひら
き、謹みてパウロの語る言をきかしめ給ふ。一五彼は己も家族も
バプテスマを受けてのち、我らに勸めて言ふ『なんぢら我を主の信者
なりとせば、我が家に來りて留れ』斯く強ひて我らを留めたり。一六
われら祈場に往く途中、卜筮の靈に憑れて卜筮をなし、其の主人らに
多くの利を得さする婢女、われらに遇ふ。一七彼はパウロ及び我らの
後に從ひつつ叫びて言ふ『この人たちは至高き神の僕にて、汝ら
に救の道を教ふる者なり』一八幾日も斯くするをパウロ憂ひて、振反
りその靈に言ふ『イエス・キリストの名によりて、汝にこの女より
出でん事を命ず』靈ただちに出でたり。一九然るにこの女の主人ら

利を得る望のなくなりたるをみて、パウロとシラスとを捕へ、市場
に曳きて司たちに往き、二〇之を上役らに出して言ふ『この人々は
ユダヤ人にて、我らの町を甚く騒がし、二一我らロマ人たる者の受く
まじく行ふまじき習慣を傳ふるなり』二二群衆も齊しく起り立ちた
れば、上役ら命じて其の衣を褫ぎ、かつ笞にて打たしむ。二三多く
打ちてのち獄に入れ、獄守に固く守るべきことを命ず。二四獄守
この命令を受けて二人を奥の獄に入れ、桎にてその足を締め置きた
り。二五夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美する囚人ら聞きゐ
たるに、二六俄に大なる地震おこりて牢舎の基ふるひ動き、その
戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縲絏とけたり。二七獄守、目
さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人にげ去れりと思ひ、刀を拔きて
自殺せんとしたるに、二八パウロ大聲に呼はりて言ふ『みづから害ふ
な、我ら皆ここに在り』二九獄守、燈火を求め、駈け入りて戰きつつ
パウロとシラスとの前に平伏し、三〇之を連れ出して言ふ『君たちよ、
われ救はれん爲に何をなすべきか』三一二人は言ふ『主イエスを信ぜ

よ、然らば汝も汝の家族も救はれん』三二かくて神の言を獄守と
その家に居る凡ての人々に語れり。三三この夜、即時に獄守かれら
を引取りて、その打傷を洗ひ、遂に己も己に屬する者もみな直ちに
バプテスマを受け、三四かつ二人を自宅に伴ひて食事をそなへ、全家
とともに神を信じて喜べり。三五夜明になりて上役らは警吏どもを
遣して『かの人々を釋せ』と言はせたれば、三六獄守これらの言
をパウロに告げて言ふ『上役、人を遣して汝らを釋さんとす。然れ
ば今いでて安らかに往け』三七ここにパウロ警吏に言ふ『我らはロマ
人たるに罪を定めずして公然に鞭うち、獄に投げ入れたり。然るに
今ひそかに我らを出さんと爲るか。然るべからず、彼等みづから來
りて我らを連れ出すべし』三八警吏これらの言を上役に告げたれば、
其のロマ人たるを聞きて懼れ、三九來り宥めて、二人を連れ出し、か
つ町を去らんことを請ふ。四〇二人は獄を出でてルデヤの家に入り、
兄弟たちに逢ひ、勸をなして出で往けり。

第一七章 一かくてアムピポリス及びアポロニヤを經てテサロニケに

到る。此處にユダヤ人の會堂ありたれば、
二パウロは例のごとく彼らの中に入り、
三つの安息日にわたり、聖書に基きて論じ、かつ解き明して、
三キリストの必ず苦難をうけ、死人の中より甦へるべきことを述べ『わが汝らに傳ふる此のイエスはキリストなり』と證せり。
四その中のある人々および敬虔なる數多のギリシヤ人、また多くの重立ちたる女も信じてパウロとシラスとに從へり。
五ここにユダヤ人ら嫉を起して市の無頼者をかたらひ、群衆を集めて町を騒がし、又ふたりを集民の前に曳き出さんとしてヤソンの家を圍みしが、
六見出さざれば、ヤソンと數人の兄弟とを町司たちの前に曳ききたり、呼はりて言ふ『天下を顛覆したる彼の者ども此處にまで來れるを、
七ヤソン迎へ入れたり。この曹輩は皆カイザルの詔勅にそむき、他にイエスと云ふ王ありと言ふ』
八之をききて群衆と町司たちと心をさわがし、
九保證を取りてヤソンと他の人々とを釋せり。
一〇兄弟たち直ちに夜の間にパウロとシラスとをベレヤに送りいだす。二人は彼處につきてユダヤ人の會堂にいたる。
一一此處の人々

はテサロニケに居る人よりも善良にして、心より御言をうけ、この
事正しく然るか然らぬか、日々聖書をしらぶ。一二この故にその中の
多くのもの信じたり、又ギリシヤの貴女、男子にして信じたる者も
少からざりき。一三然るにテサロニケのユダヤ人ら、パウロがベレ
ヤにも神の言を傳ふることを聞きたれば、此處にも來りて群衆を
動かし、かつ騒がしたり。一四ここに兄弟たち直ちにパウロを送り
出して海邊に往かしめ、シラスとテモテとは尚ベレヤに留れり。一
五パウロを導ける人々はアテネまで伴ひ往き、パウロよりシラスと
テモテとに、疾く我に來れとの命を受けて立ち去れり。一六パウロ、
アテネにて彼らを待ちをる間に、町に偶像の滿ちたるを見て、その
心に憤慨を懷く。一七されば會堂にてはユダヤ人および敬虔なる
人々と論じ、市場にては日々逢ふところの者と論じたり。一八斯てエ
ピクロス派ならびにストア派の哲學者數人これと論じあひ、或者ら
は言ふ『この囀る者なにを言はんとするか』或者らは言ふ『かれは
異なる神々を傳ふる者の如し』是はパウロがイエスと復活とを宣べ

たる故なり。一九遂にパウロをアレオパゴスに連れ往きて言ふ『なん
ぢが語るこの新しき教の如何なるものなるを、我ら知り得べきか。
二〇なんぢ異なる事を我らの耳に入るるが故に、我らその何事たるを
知らんと思ふなり』二一アテネ人も、彼處に住む旅人も、皆ただ新
しき事を或は語り、或は聞きてのみ日を送りゐたり。二二パウロ、
アレオパゴスの中に立ちて言ふ『アテネ人よ、我すべての事に就きて
汝らが神々を敬ふ心の篤きを見る。二三われ汝らが拝むものを見
つつ道を過ぐるほどに「知らざる神に」と記したる一つの祭壇を見出
したり。然れば我なんぢらが知らずして拝む所のものを汝らに示
さん。二四世界とその中のあらゆる物とを造り給ひし神は、天地の主
にましませば、手にて造れる宮に住み給はず。二五みづから凡ての人
に生命と息と萬の物とを與へ給へば、物に乏しき所あるが如く、人
の手にて事ふることを要し給はず。二六一人よりして諸種の國人を造
りいだし、之を地の全面に住ましめ、時期の限と住居の界とを定
め給へり。二七これ人をして神を尋ねしめ、或は探りて見出す事あ

らしめん爲なり。されど神は我等おのおのを離れ給ふこと遠からず、
二八我らは神の中に生き、動きまた在るなり。汝らの詩人の中の或
者どもも「我らは又その裔なり」と云へる如し。二九かく神の裔なれ
ば、神を金・銀・石など人の工と思考とにて刻める物と等しく思ふべ
きにあらず。三〇神はかかる無知の時代を見過しにし給ひしが、今は
何處にても凡ての人に悔改むべきことを告げたまふ。三一曩に立て
給ひし一人によりて、義をもて世界を審かんために日をさだめ、彼を
死人の中より甦へらせて保證を萬人に與へ給へり』三二人々、死人
の復活をききて、或者は嘲笑ひしが、或者は『われら復この事を汝
に聞かん』と言へり。三三ここにパウロ人々のなかを出で去る。三四
されど彼に附隨ひて信じたるもの數人あり。其の中にアレオパゴス
の裁判人デオヌシオ及びダマリスと名づくる女あり、尚その他にも
ありき。

第一八章

一この後パウロ、アテネを離れてコリントに到り、二アク
ラと云ふポントに生れたるユダヤ人に遇ふ。クラウデオ、ユダヤ人

にことごとくロマを退くべき命を下したるによりて、近頃その妻プ
リスキラと共にイタリヤより來りし者なり。三パウロ其の許に到りし
に、同業なりしかば偕に居りて工をなせり。彼らの業は幕屋製造な
り。四かくて安息日毎に會堂にて論じ、ユダヤ人とギリシヤ人とを
勸む。五シラスとテモテとマケドニヤより來りて後は、パウロ專ら
御言を宣ぶることに力め、イエスのキリストたることをユダヤ人に
證せり。六然るに、彼ら之に逆ひかつ罵りたれば、パウロ衣を拂
ひて言ふ『なんぢらの血は汝らの首に歸すべし、我はいさぎよし、
今より異邦人に往かん』七遂に此處を去りて、神を敬ふテテオ・ユ
ストと云ふ人の家に到る。この家は會堂に隣れり。八會堂司クリ
スポその家族一同と共に主を信じ、また多くのコリント人も聽きて信
じ、かつバプテスマを受けたり。九主は夜まぼろしの中にパウロに言
ひ給ふ『おそるな、語れ、默すな、一〇我なんぢと偕にあり、誰も汝を
攻めて害ふ者なからん。此の町には多くの我が民あり』一一かくて
パウロ一年六个月ここに留りて神の言を教へたり。一二ガリオ、ア

カヤの總督たる時、ユダヤ人、心を一つにしてパウロを攻め、審判の
座に曳きゆき、一三『この人は律法にかなはぬ仕方にて神を拜むこと
を人に勸む』と言ひたれば、一四パウロ口を開かんとせしに、ガリオ、
ユダヤ人に言ふ『ユダヤ人よ、不正または奸惡の事ならば、我が汝
らに聽くは道理なれど、一五もし言・名あるいは汝らの律法にかか
はる問題ならば、汝等みづから理むべし。我かかる事の審判人とな
るを好まず』一六かくて彼らを審判の座より逐ひいだす。一七ここに
人々みな會堂司ソステネを執へ、審判の座の前にて打ち扑きたり。
ガリオは凡て此らの事を意とせざりき。一八パウロなほ久しく留り
てのち、兄弟たちに別を告げ、プリスキラとアクラとを伴ひ、シ
リヤに向ひて船出す。早くより誓願ありたれば、ケンクレヤにて髮
を剃れり。一九かくてエペソに著き、其處にこの二人を留めおき、自
らは會堂に入りてユダヤ人と論ず。二〇人々かれに今しばらく居ら
んことを請ひたれど、肯んぜずして、二一別を告げ『神の御意なら
ば復なんぢらに返らん』と言ひてエペソより船出し、二二カイザリヤ

につき、而してエルサレムに上り、教會の安否を問ひてアンテオケ
に下り、二三此處に暫く留りて後、また去りてガラテヤ、フルギヤ
の地を次々に經て凡ての弟子を堅うせり。二四時にアレキサンデリヤ
生れのユダヤ人にて、聖書に通達したるアポロと云ふ能辯なる者エ
ペソに下る。二五この人は曩に主の道を教へられ、ただヨハネのバプ
テスマを知るのみなれど、熱心にして詳細にイエスの事を語り、か
つ教へたり。二六かれ會堂にて臆せずして語り始めしを、プリスキ
ラとアクラと聞きゐて之を迎へ入れ、なほも詳細に神の道を解き明
せり。二七アポロ遂にアカヤに渡らんとしたれば、兄弟たち之を勵
まし、かつ弟子たちに彼を受け容るるやうに書き贈れり。彼かしこ
に往き、既に恩惠によりて信じたる者に多くの益を與ふ。二八即ち
聖書に基き、イエスのキリストたる事を示して、激甚くかつ公然に
ユダヤ人を言ひ伏せたるなり。

第一九章一かくてアポロ、コリントに居りし時、パウロ東の地方
を經てエペソに到り、或弟子たちに逢ひて、二『なんぢら信者となり

しとき聖靈を受けしか』と言ひたれば、彼等いふ『いな、我らは聖
靈の有ることすら聞かず』三パウロ言ふ『されば何によりてバプテス
マを受けしか』彼等いふ『ヨハネのバプテスマなり』四パウロ言ふ
『ヨハネは悔改のバプテスマを授けて、己に後れて來るもの（即
ちイエス）を信ずべきことを民に云へるなり』五彼等これを聞きて主
イエスの名によりてバプテスマを受く。六パウロ手を彼らの上に按
きしとき、聖靈その上に望みたれば、彼ら異言を語り、かつ預言せ
り。七この人々は凡て十二人ほどなり。八ここにパウロ會堂に入り
て、三个月のあひだ臆せずして神の國に就きて論じ、かつ勸めたり。
九然るに或者ども頑固になりて從はず、會衆の前に神の道を譏り
たれば、パウロ彼らを離れ、弟子たちをも退かしめ、日毎にツラノの
會堂にて論ず。一〇斯くすること二年の間なりしかば、アジヤに住
む者は、ユダヤ人もギリシヤ人もみな主の言を聞けり。一一而して
神はパウロの手によりて尋常ならぬ能力ある業を行ひたまふ。一二
即ち人々かれの身より或は手拭あるひは前垂をとりて病める者に

著くれば、病は去り惡靈は出でたり。一三ここに諸國遍歴の咒文師
なるユダヤ人數人あり、試みに惡靈に憑かれたる者に對して、主イ
エスの名を呼び『われパウロの宣ぶるイエスによりて、汝らに命ず』
と言へり。一四斯くなせる者の中に、ユダヤの祭司長スケワの七人の
子もありき。一五惡靈こたへて言ふ『われイエスを知り、又パウロを
知る。然れど汝らは誰ぞ』一六かくて惡靈の入りたる人、かれらに
跳びかかりて二人に勝ち、これを打拉ぎたれば、彼ら裸體になり傷を
受けてその家を逃げ出でたり。一七此の事エペソに住む凡てのユダヤ
人とギリシヤ人とに知れたれば、懼かれら一同のあひだに生じ、主
イエスの名崇めらる。一八信者となりし者おほく來り、懺悔して自
らの行爲を告ぐ。一九また魔術を行ひし多くの者ども、その書物を
持ちきたり、衆人の前にて焚きたるが、其の價を算ふれば銀五萬
ほどなりき。二〇主の言、大に弘りて權力を得しこと斯くの如し。
二一此等の事のありし後、パウロ、マケドニヤ、アカヤを經てエルサ
レムに往かんと心を決めて言ふ『われ彼處に到りてのち必ずロマ

をも見るべし』二二かくて己に事ふる者の中にてテモテとエラスト
との二人をマケドニヤに遣し、自己はアジヤに暫く留る。二三そ
の頃この道に就きて一方ならぬ騒擾おこれり。二四デメテリオと云ふ
銀細工人ありしが、アルテミスの銀の小宮を造りて細工人らに多く
の業を得させたり。二五それらの者および同じ類の職業者を集めて
言ふ『人々よ、われらが此の業に頼りて利益を得ることは、汝らの
知る所なり。二六然るに、かのパウロは手にて造れる物は神にあら
ずと云ひて、唯にエペソのみならず、殆ど全アジヤにわたり、多く
の人々を説き勸めて惑したり、これ亦なんぢらの見聞する所なり。
二七かくては啻に我らの職業の輕しめらるる恐あるのみならず、ま
た大女神アルテミスの宮も蔑せられ、全アジヤ全世界のをがむ大女神
の稜威も滅ぶるに至らん』二八彼等これを聞きて憤恚に滿され、叫
びて言ふ『大なる哉、エペソ人のアルテミス』二九かくて町擧りて
騒ぎ立ち、人々パウロの同行者なるマケドニヤ人ガイオとアリスタ
ルコとを捕へ、心を一つにして劇場に押入りたり。三〇パウロ集民

のなかに入らんとしたれど、弟子たち許さず。三一又アジヤの祭
司のうちの或者どもも彼と親しかりしかば、人を遣して劇場に入
らぬやうにと勸めたり。三二ここに會衆おほいに亂れ、大方はその
何のために集りたるかを知らずして、或者はこの事を、或者はかの
事を叫びたり。三三遂に群衆の或者ども、ユダヤ人の推し出したる
アレキサンデルに勸めたれば、かれ手を搖かして集民に辯明をなさん
とすれど、三四其のユダヤ人たるを知り、みな同音に『おほいなる哉
、エペソ人のアルテミス』と呼はりて二時間ばかりに及ぶ。三五時に
書記役、群衆を鎭めおきて言ふ『さてエペソ人よ、誰かエペソの町
が大女神アルテミス及び天より降りし像の宮守なることを知らざる
者あらんや。三六これは言ひ消し難きことなれば、なんぢら靜なる
べし、妄なる事を爲すべからず。三七この人々は宮の物を盜む者に
あらず、我らの女神を謗る者にもあらず、然るに汝ら之を曳き來れ
り。三八もしデメテリオ及び偕にをる細工人ら、人に就きて訴ふべ
き事あらば、裁判の日あり、かつ司あり、彼等おのおの訴ふべし。

三九もし又ほかの事につきて議する所あらば、正式の議會にて決す
べし。四〇我ら今日の騷擾につきては、何の理由もなきにより咎を受
くる恐あり。この會合につきて言ひひらくこと能はねばなり』四一
斯く言ひて集會を散じたり。

第二〇章 一騷亂のやみし後、パウロ弟子たちを招きて勸をなし、之
に別を告げ、マケドニヤに往かんとて出で立つ。二而して、かの地方
を巡り多くの言をもて弟子たちを勸めし後、ギリシヤに到る。三そ
こに留ること三个月にして、シリヤに向ひて船出せんとする時、お
のれを害はんとするユダヤ人らの計略に遭ひたれば、マケドニヤ
を經て歸らんと心を決む。四之に伴へる人々はベレア人にしてプロ
の子なるソパテロ、テサロニケ人アリスタルコ及びセクンド、デル
べ人ガイオ及びテモテ、アジヤ人テキコ及びトロピモなり。五彼らは
先だちゆき、トロアスにて我らを待てり。六我らは除酵祭の後ピリピ
より船出し、五日にしてトロアスに著き、彼らの許に到りて七日のあ
ひだ留れり。七一週の首の日われらパンを擘かんとて集りしが、

パウロ明日いで立たんとて彼等とかたり、夜半まで語り續けたり。八
集りたる高樓には多くの燈火ありき。九ここにユテコといふ若者窓
に倚りて坐しゐたるが、甚く眠氣ざすほどに、パウロの語ること愈々
久しくなりたれば、遂に熟睡して三階より落つ。これを扶け起した
るに、はや死にたり。一〇パウロ降りて其の上に伏し、かき抱きて言
ふ『なんぢら騒ぐな、生命はなほ内にあり』一一乃ち復のぼりてパ
ンを擘き、食してのち久しく語りあひ、夜明に至り遂に出でたてり。
一二人々かの若者の活きたるを連れきたり、甚く慰藉を得たり。一三
かくて我らは先だちて船に乗り、アソスにてパウロを載せんとして
彼處に船出せり。彼は徒歩にて往かんとて斯くは定めたるなり。一四
我らアソスにてパウロを待ち迎へ、これを載せてミテレネに渡り、一
五また彼處より船出して翌日キヨスの彼方にいたり、次の日サモスに
立ち寄り、その次の日ミレトに著く。一六パウロ、アジヤにて時を費
さぬ爲に、エペソには船を寄せずして過ぐることに定めしなり。これ
は成るべく五旬節の日エルサレムに在ることを得んとて急ぎしに因

る。一七而してパウロ、ミレトより人をエペソに遣し、教會の長老
たちを呼びて、一八その來りし時かれらに言ふ『わがアジヤに來りし
初の日より、如何なる状にて常に汝らと偕に居りしかは、汝らの
知る所なり。一九即ち謙遜の限をつくし、涙を流し、ユダヤ人の
計略によりて迫り來し艱難に耐へて主につかへ、二〇益となる事は
何くれとなく憚らずして告げ、公然にても家々にても汝らを教へ、
二一ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に對して悔改め、われらの主
イエスに對して信仰すべきことを證せり。二二視よ、今われは心搦
められてエルサレムに往く。彼處にて如何なる事の我に及ぶかを知
らず。二三ただ聖靈いづれの町にても我に證して、縲絏と患難と我
を待てりと告げたまふ。二四然れど我わが走るべき道程と、主イエス
より承けし職、すなわち神の惠の福音を證する事とを果さん爲に
は、固より生命をも重んぜざるなり。二五視よ、今われは知る、前に
汝らの中を歴巡りて御國を宣傳へし我が顏を、汝ら皆ふたたび見
ざるべきを。二六この故に、われ今日なんぢらに證す、われは凡て

の人の血につきていさぎよし。二七我は憚らずして神の御旨をこと
ごとく汝らに告げしなり。二八汝等みづから心せよ、又すべての
群に心せよ、聖靈は汝等を群のなかに立てて監督となし、神の己
の血をもて買ひ給ひし教會を牧せしめ給ふ。二九われ知る、わが出
で去るのち、暴き豺狼なんぢらの中に入りきたりて、群を惜まず、三
〇又なんぢらの中よりも、弟子たちを己が方に引き入れんとて、曲れ
ることを語るもの起らん。三一されば汝ら目を覺しをれ。三年の間
わが夜も晝も休まず、涙をもて汝等おのおのを訓戒せしことを憶
えよ。三二われ今なんぢらを、主および其の恵の御言に委ぬ。御言
は汝らの徳を建て、すべての潔められたる者とともに嗣業を受けし
め得るなり。三三我は人の金銀・衣服を貪りし事なし。三四この手は
我が必要に供へ、また我と偕なる者に供へしことを汝等みづから知
る。三五我すべての事に於て例を示せり、即ち汝らも斯く働きて、
弱き者を助け、また主イエスの自ら言ひ給ひし「與ふるは受くるよ
りも幸福なり」との御言を記憶すべきなり』三六斯く言ひて後、パウ

ロ跪づきて一同とともに祈れり。三七みな大に歎きパウロの頸を抱
きて接吻し、三八そのふたたび我が顔を見ざるべしと云ひし言によ
りて特に憂ひ、遂に彼を船まで送りゆけり。
第二一章一ここに我ら人々と別れて船出をなし、眞直にはせてコス
に到り、次の日ロドスにつき、彼處よりパタラにわたる。二此の處
にてピニケにゆく船に遇ひ、これに乘りて船出す。三クプロを望み、
之を左にして過ぎ、シリヤに向ひて進み、ツロに著きたり、此處にて
船荷を卸さんとすればなり。四かくて弟子たちに尋ね逢ひて七日留
れり。かれら御靈によりてパウロに、エルサレムに上るまじき事を云
へり。五然るに我ら七日終りて後、いでて旅立ちたれば、彼等みな妻
子とともに町の外まで送りきたり、諸共に濱邊に跪づきて祈り、六
相互に別を告げて我らは船に乘り、彼らは家に歸れり。七ツロをい
でてトレマイに到りて船路つきたり。此處にて兄弟たちの安否を訪
ひ、かれらの許に一日留り、八明くる日ここを去りてカイザリヤに
いたり、傳道者ピリポの家に入りて留る、彼はかの七人の一人なり。

九この人に預言する四人の娘ありて、處女なりき。一〇我ら數日留
り居るうちに、アガボと云ふ預言者ユダヤより下り、一一我らの許に
來りてパウロの帶をとり、己が足と手とを縛りて言ふ『聖靈かく言
ひ給ふ「エルサレムにて、ユダヤ人この帶の主を斯くの如く縛りて
異邦人の手に付さん」と』一二われら之を聞きて此の地の人々ととも
にパウロに、エルサレムに上らざらんことを勸む。一三その時パウロ
答ふ『なんぢら何ぞ歎きて我が心を挫くか、我エルサレムにて、主
イエスの名のために、唯に縛らるるのみかは、死ぬることをも覺悟
せり』一四斯く我らの勸告を納れるによりて『主の御意の如くなれか
し』と言ひて止む。一五この後われら行李を整へてエルサレムに上
る。一六カイザリヤに居る弟子も數人ともに往き、我らの宿らんとす
るクプロ人マナソンといふ舊き弟子のもとに案内したり。一七エルサ
レムに到りたれば、兄弟たち歡びて我らを迎へたり。一八翌日パウ
ロ我らと共にヤコブの許に往きしに、長老たちみなあつまり居たり。
一九パウロその安否を問ひて後、おのが勤勞によりて異邦人のうちに

神の行ひ給ひしことを、一々告げたれば、二〇彼ら聞きて神を崇め、
またパウロに言ふ『兄弟よ、なんぢの見るごとく、ユダヤ人のうち、
信者となりたるもの數萬人あり、みな律法に對して熱心なる者なり。
二一彼らは、汝が異邦人のうちに居る凡てのユダヤ人に對ひて、その
兒らに割禮を施すな、習慣に從ふなと云ひて、モーセに遠ざかるこ
とを教ふと聞けり。二二如何にすべきか、彼らは必ず汝の來りたる
を聞かん。二三されば汝われらの言ふ如くせよ、我らの中に誓願あ
るもの四人あり、二四汝かれらと組みて之とともに潔をなし、彼等
のために費を出して髮を剃らしめよ。さらば人々みな汝につきて
聞きたることの虛僞にして、汝も律法を守りて正しく步み居ること
を知らん。二五異邦人の信者となりたる者につきては、我ら既に書き
贈りて、偶像に獻げたる物と、血と、絞殺したる物と、淫行とに遠ざ
かるべき事を定めたり』二六ここにパウロその人々と組みて、次の日
ともどもに潔をなして宮に入り、潔の期滿ちて各人のために獻物
をささぐべき日を告げたり。二七かくて七日の終らんとする時、アジ

ヤより來りしユダヤ人ら、宮の内にパウロの居るを見て、群衆を騷
がし、かれに手をかけ叫びて言ふ、二八『イスラエルの人々助けよ、
この人はいたる處にて民と律法と此の所とに悖れることを人々に
教ふる者なり、然のみならず、ギリシヤ人を宮に率き入れて、此の聖
なる所をも汚したり』二九からら曩にエペソ人トロピモがパウロと
ともに市中にゐたるを見て、パウロ之を宮に率き入れしと思ひしな
り。三〇ここに市中みな騷ぎたち、民ども馳せ集り、パウロを捕へ
て宮の外に曳き出せり、かくて門は直ちに鎖されたり。三一彼らパウ
ロを殺さんとせしとき、軍隊の千卒長に、エルサレム中さわぎ立
てりとの事きこえたれば、三二かれ速かに兵卒および百卒長らを
率ゐて馳せ下る。かれら千卒長と兵卒とを見て、パウロを打つこと
を止む。三三千卒長、近よりてパウロを執へ、命じて二つの鏈にて
繫がせ、その何人なるか、何事をなしたるかを尋ぬるに、三四群衆
の中にて或者はこの事を、或者はかの事を呼はり、騷亂のために確
なる事を知るに由なく、命じて陣營に曳き來らしめたり。三五階段に

至れるに、群衆の手暴きによりて、兵卒パウロを負ひたり。三六こ
れ群れる民ども『彼を除け』と叫びつつ随ひ迫れる故なり。三七パ
ウロ陣營に曳き入れられんとするとき、千卒長に言ふ『われ汝に語
りて可きか』かれ言ふ『なんぢギリシヤ語を知るか。三八汝はかの
エジプト人にして、曩に亂を起して四千人の刺客を荒野に率ゐ出で
し者ならずや』三九パウロ言ふ『我はキリキヤなるタルソのユダヤ人
、鄙しからぬ市の市民なり。請ふ民に語るを許せ』四〇之を許したれ
ば、パウロ階段の上に立ち、民に對ひて手を搖かし、大に靜まれる
時、ヘブルの語にて語りて言ふ、

第二二章一『兄弟たち親たちよ、今なんぢらに對する辯明を聽け』
二人々そのヘブルの語を語るを聞きてますます靜になりたれば、又
いふ、三『我はユダヤ人にてキリキヤのタルソに生れしが、此の都
にて育てられ、ガマリエルの足下にて先祖たちの律法の嚴しき方に
遵ひて教へられ、今日の汝らのごとく神に對して熱心なる者なり
き。四我この道を迫害し、男女を縛りて獄に入れ、死にまで至らし

めしことは、五大祭司も凡ての長老も我に就きて證するなり。我は
彼等より兄弟たちへの書を受けて、ダマスコに寓り居る者どもを縛
り、エルサレムに曳き來りて罰を受けしめんとて彼處にゆけり。六往
きてダマスコに近づきたるに、正午ごろ忽ち大なる光、天より出
でて我を環り照せり。七その時われ地に倒れ、かつ我に語りて「サウ
ロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」といふ聲を聞き、八「主よ、なんぢ
は誰ぞ」と答へしに「われは汝が迫害するナザレのイエスなり」と
言ひ給へり。九偕に居る者ども光は見しが、我に語る者の聲は聞か
ざりき。一〇われ復いふ「主よ、我なにを爲すべきか」主いひ給ふ「起
ちてダマスコに往け、なんぢの爲すべき定りたる事は彼處にて悉
とく告げらるべし」一一我は、かの光の晃耀にて目見えずなりたれ
ば、偕にをる者に手を引かれてダマスコに入りたり。一二ここに律法
に據れる敬虔の人にして、其の町に住む凡てのユダヤ人に令聞ある
アナニヤといふ者あり。一三彼われに來り傍らに立ちて「兄弟サウ
ロよ、見ることを得よ」と言ひたれば、その時、仰ぎて彼を見たり。

一四かれ又いふ「我らの先祖の神は、なんぢを選びて御意を知らしめ、
又かの義人を見、その御口の聲を聞かしめんとし給へり。一五これは
汝の見聞したる事につきて、凡ての人に對し彼の證人とならん爲
なり。一六今なんぞ躊躇ふか、起て、その御名を呼び、バプテスマを
受けて汝の罪を洗ひ去れ」一七かくて我エルサレムに歸り、宮にて
祈りをるとき、我を忘れし心地して主を見奉るに、我に斯く言ひ給
ふ、一八「なんぢ急げ、早くエルサレムを去れ、人々われに係る汝
の證を受けぬ故なり」一九我いふ「主よ、我さきに汝を信ずる者を
獄に入れ、諸會堂にて之を打ち、二〇又なんぢの證人ステパノの血
の流されしとき、我もその傍らに立ちて之を可しとし、殺す者ども
の衣を守りしことは、彼らの知る所なり」二一われに言ひ給ふ「往
け、我なんぢを遠く異邦人に遣すなり」と』二二人々きき居たりし
が、此の言に及び、聲を揚げて言ふ『斯くのごとき者をば地より除
け、生かしおくべき者ならず』二三斯く叫びつつ其の衣を脱ぎすて、
塵を空中に撒きたれば、二四千卒長、人々が何故パウロにむかひて

斯く叫び呼はるかを知らんとし、鞭うちて訊ぶることを命じて、彼を
陣營に曳き入れしむ。二五革鞭をあてんとてパウロを引き張りし時、
かれ傍らに立つ百卒長に言ふ『ロマ人たる者を罪も定めずして鞭
うつは可きか』二六百卒長これを聞きて千卒長に往き、告げて言
ふ『なんぢ何をなさんとするか、此の人はロマ人なり』二七千卒長き
たりて言ふ『なんぢはロマ人なるか、我に告げよ』かれ言ふ『然り』
二八千卒長こたふ『我は多くの金をもて此の民籍を得たり』パウロ
言ふ『我は生れながらなり』二九ここに訊べんとせし者どもは直ちに
去り、千卒長はそのロマ人なるを知り、之を縛りしことを懼れたり。
三〇明くる日、千卒長かれが何故ユダヤ人に訴へられしか、確な
る事を知らんと欲して、彼の縛を解き、命じて祭司長らと全議會と
を呼び集め、パウロを曳き出して其の前に立たしめたり。
第二三章 一パウロ議會に目を注ぎて言ふ『兄弟たちよ、我は今日
に至るまで事毎に良心に從ひて神に事へたり』二大祭司アナニヤ
傍らに立つ者どもに、彼の口を撃つことを命ず。三ここにパウロ言

ふ『白く塗りたる壁よ、神なんぢを撃ち給はん、なんぢ律法により
て我を審くために坐しながら、律法に悖りて我を撃つことを命ずる
か』四傍らに立つ者いふ『なんぢ神の大祭司を罵るか』五パウロ言
ふ『兄弟たちよ、我その大祭司たることを知らざりき。録して「な
んぢの民の司をそしる可からず」とあればなり』六かくてパウロ、そ
の一部はサドカイ人、その一部はパリサイ人たるを知りて、議會の
うちに呼はりて言ふ『兄弟たちよ、我はパリサイ人にしてパリサイ
人の子なり、我は死人の甦へることの希望につきて審かるるなり』
七斯く言ひしに因りて、パリサイ人とサドカイ人との間に紛争おこ
りて、會衆相分れたり。八サドカイ人は復活もなく御使も靈もな
しと言ひ、パリサイ人は兩ながらありと云ふ。九遂に大なる喧噪と
なりて、パリサイ人の中の學者數人たちて争ひて言ふ『われら此の
人に惡しき事あるを見ず、もし靈または御使かれに語りたるならば
如何』一〇紛争いよいよ激しくなりたれば、千卒長、パウロの彼ら
に引裂かれんことを恐れ、兵卒どもに命じて下りゆかしめ、彼らの中

より引取りて陣營に連れ來らしめたり。一一その夜、主パウロの傍
らに立ちて言ひ給ふ『雄々しかれ、汝エルサレムにて我につきて證
をなしたる如く、ロマにても證をなすべし』一二夜明になりてユダ
ヤ人、徒黨を組み盟約を立てて、パウロを殺すまでは飲食せじと言
ふ。一三この徒黨を結びたる者は四十人餘なり。一四彼らは祭司長・
長老らに往きて言ふ『われらパウロを殺すまでは何をも味ふまじ
と堅く盟約を立てたり。一五されば汝等なほ詳細に訊べんとする状
して、彼を汝らの許に連れ下らすることを、議會とともに千卒長に
訴へよ。我等その近くならぬ間に殺す準備をなせり』一六パウロの
姉妹の子この待伏の事をきき、往きて陣營に入りパウロに告げたれ
ば、一七パウロ百卒長の一人を呼びて言ふ『この若者を千卒長に
つれ往け、告ぐる事あり』一八百卒長これを携へ、千卒長に至り
て言ふ『囚人パウロ我を呼びて、この若者なんぢに言ふべき事ありと
て、汝に連れ往くことを請へり』一九千卒長その手を執り退きて、
私に問ふ『われに告ぐる事とは何ぞ』二〇若者いふ『ユダヤ人は、汝

がパウロの事をなほ詳細に訊ぶる爲にとて、明日かれを議會に連れ
下ることを汝に請はんと申合せたり。二一汝その請に從ふな、彼
らの中にて四十人餘の者、パウロを待伏せ、之を殺すまでは飲食せ
じと盟約を立て、今その準備をなして汝の許諾を待てり』二二ここ
に千卒長、若者に『これらの事を我に訴へたりと誰にも語るな』と
命じて歸せり。二三さて百卒長を兩三人よびて言ふ『今夜九時ご
ろカイザリヤに向けて往くために、兵卒二百、騎兵七十、槍をとる
者二百を整へよ』二四また畜を備へ、パウロを乘せて安全に總督
ペリクスの許に護送することを命じ、二五かつ左のごとき書をかき贈
る。二六『クラウデオ・ルシヤ謹みて總督ペリクス閣下の平安を祈
る。二七この人はユダヤ人に捕へられて殺されんとせしを、我そのロ
マ人なるを聞き、兵卒どもを率ゐ往きて救へり。二八ユダヤ人の彼を
訴ふる理由を知らんと欲して、その議會に引き往きたるに、二九彼
らの律法の問題につき訴へられたるにて、死もしくは縛に當る罪
の訴訟にあらざるを知りたり。三〇又この人を害せんとする謀計あ

りと我に聞えたれば、われ俄にこれを汝のもとに送り、これを訴
ふる者に、なんぢの前にて彼を訴へんことを命じたり』三一ここに
兵卒ども命ぜられたる如くパウロを受けとりて、夜中アンテパトリス
まで連れてゆき、三二翌日これを騎兵に委ね、ともに往かしめて陣營
に歸れり。三三騎兵はカイザリヤに入り、總督に書をわたし、パウロ
を其の前に立たしむ。三四總督、書を讀みて、パウロのいづこの國の
者なるかを問ひ、そのキリキヤ人なるを知りて、三五『汝を訴ふる
者の來らんとき、尚つまびらかに汝のことを聽かん』と言ひ、かつ
命じて、ヘロデの官邸に之を守らしめたり。

第二四章 一五日ののち、大祭司アナニヤ數人の長老およびテルト
ロと云ふ辯護士とともに下りて、パウロを總督に訴ふ。二パウロ呼
び出されたれば、テルトロ訴へ出でて言ふ『ペリクス閣下よ、われ
らは汝によりて太平を樂しみ、三なんぢの先見によりて、此の國人
のために時に隨ひ處に隨ひて、惡しき事の改められたるを感謝し
て罷まず。四ここに喃々しく陳べて汝を妨ぐまじ、願はくは寛容

をもて我が少しの言を聽け。五我等この人を見るに、恰も疫病の
ごとくにて、全世界のユダヤ人のあひだに騷擾をおこし、且ナザレ人
の異端の首にして、六宮をさへ　さんとしたれば、之を捕へたり。七
[なし]八汝この人に就きて訊さば、我らの訴ふる所をことごとく
知り得べし』九ユダヤ人も之に加へて、誠にその如くなりと主張す。
一〇總督、首にて示しパウロに言はしめたれば、答ふ『なんぢが年久
しくこの國人の審判人たることを我は知るゆゑに、喜びて我が辯明
をなさん。一一なんぢ知り得べし、我が禮拜のためにエルサレムに上
りてより僅か十二日に過ぎず、一二また彼らは、我が宮にても會堂に
ても市中にても、人と爭ひ群衆を騷がしたるを見ず、一三いま訴へ
たる我が事につきても證明すること能はざるなり。一四我ただ此の
一事を汝に言ひあらはさん、即ち我は彼らが異端と稱ふる道に循
ひて、我が先祖たちの神につかへ、律法と預言者の書とに録したる事
をことごとく信じ、一五かれら自らも待てるごとく、義者と不義者と
の復活あるべしと、神を仰ぎて望を懷くなり。一六この故に、われ

常に神と人とに對して良心の責なからんことを勉む。一七我は多く
の年を經てのち歸りきたり、我が民に施濟をなし、また献物をささ
げゐたりしが、一八その時かれらは我が潔をなして宮にをるを見た
るのみにて、群衆もなく騷擾もなかりしなり。一九然るにアジアよ
り來れる數人のユダヤ人ありて――もし我に咎むべき事あらば、彼ら
が汝の前に出でて訴ふることを爲べきなり。二〇或はまた此處な
る人々、わが先に議會に立ちしとき、我に何の不義を認めしか言へ。
二一唯われ彼らの中に立ちて「死人の甦へる事につきて我けふ汝ら
の前にて審かる」と呼はりし一言の他には何もなかるべし』二二ペリ
クスこの道のことを詳しく知りたれば、審判を延して言ふ『千卒長
ルシヤの下るを待ちて汝らの事を定むべし』二三かくて百卒長に
命じパウロを守らせ、寛かならしめ、かつ友の之に事ふるをも禁ぜ
ざらしむ。二四數日の後ペリクス、その妻なるユダヤ人の女ドルシ
ラとともに來り、パウロを呼びよせてキリスト・イエスに對する信仰
のことを聽き、二五パウロが正義と節制と來らんとする審判とにつき

て論じたる時、ペリクス懼れて答ふ『今は去れ、よき機を得てまた招
かん』二六かくてパウロより金を與へられんことを望みて、尚しばし
ば彼を呼びよせては語れり。二七二年を經てポルシオ・フェスト、ペ
リクスの任に代りしが、ペリクス、ユダヤ人の意を迎へんとして、
パウロを繋ぎたるままに差措けり。

第二五章一フェスト任國にいたりて三日の後、カイザリヤよりエル
サレムに上りたれば、二祭司長ら及びユダヤ人の重立ちたる者ども、
パウロを訴へ之を害はんとして、三フェストの好意にて彼をエルサ
レムに召し出されんことを願ふ。斯くして道に待伏し、之を殺さんと
思へるなり。四然るにフェスト答へて、パウロのカイザリヤに囚はれ
在ること、己が程なく歸るべき事とを告げ、五『もし彼に不善あら
んには、汝等のうち然るべき者ども我とともに下りて訴ふべし』と
言ふ。六かくて彼處に八日十日ばかり居りてカイザリヤに下り、明く
る日、審判の座に坐し、命じてパウロを引出さしむ。七その出で來り
し時、エルサレムより下りしユダヤ人ら、これを取圍みて樣々の重き

罪を言ひ立てて訴ふれども、證すること能はず。八パウロは辯明し
て言ふ『我はユダヤ人の律法に對しても、宮に對しても、カイザルに
對しても、罪を犯したる事なし』九フェスト、ユダヤ人の意を迎へ
んとしてパウロに答へて言ふ『なんぢエルサレムに上り、彼處にて我
が前に審かるることを諾ふか』一〇パウロ言ふ『我はわが審かるべ
きカイザルの審判の座の前に立ちをるなり。汝の能く知るごとく、
我はユダヤ人を害ひしことなし。一一若し罪を犯して死に當るべ
き事をなしたらんには、死ぬるを厭はじ。然れど此の人々の訴ふる
こと實ならずば、誰も我を彼らに付すことを得じ、我はカイザルに
上訴せん』一二ここにフェスト陪席の者と相議りて答ふ『なんぢカイ
ザルに上訴せんとす、カイザルの許に往くべし』一三數日を經て後、
アグリッパ王とベルニケとカイザリヤに到りてフェストの安否を問
ふ。一四多くの日留りゐたれば、フェスト、パウロのことを王に告
げて言ふ『ここにペリクスが囚人として遺しおきたる一人の人あり、
一五我エルサレムに居りしとき、ユダヤ人の祭司長・長老ら之を訴

へて罪に定めんことを願ひしが、一六我は答へて、訴へらるる者の
未だ訴ふる者の面前にて辯明する機を與へられぬ前に付すは、ロマ
人の慣例にあらぬ事を告げたり。一七この故に彼等ここに集りたれ
ば、時を延さず次の日審判の座に坐し、命じてかの者を引出さしむ。
一八訴ふる者かれを圍みて立ちしが、思ひしごとき惡しき事は一つ
も陳ぶる所なし。一九ただ己らの宗教、またはイエスと云ふ者の
死にたるを活きたりと、パウロが主張するなどに關する問題のみな
れば、二〇かかる審理には我も當惑せし故、かの人に「なんぢエルサ
レムに往き彼處にて審かるる事を好むか」と問ひしに、二一パウロは
上訴して皇帝の判決を受けん爲に守られんことを願ひしにより、命
じて之をカイザルに送るまで守らせ置けり』二二アグリッパ、フェス
トに言ふ『我もその人に聽かんと欲す』フェスト言ふ『なんぢ明日か
れに聽くべし』二三明くる日アグリッパとベルニケと大に威儀を整
へてきたり、千卒長ら及び市の重立ちたる者どもと共に訊問所に入
りたれば、フェストの命によりてパウロ引出さる。二四フェスト言ふ

『アグリッパ王、竝びに此處に居る凡ての者よ、汝らの見るこの人は、
ユダヤの民衆が擧りて生かしおくべきにあらずと呼はりて、エルサ
レムにても此處にても我に訴へし者なり。二五然るに我はその死に
當るべき惡しき事を一つだに犯したるを認めねば、彼の自ら皇帝
に上訴せんとする隨にその許に送らんと決めたり。二六而して彼につ
きて我が主に上書すべき實情を得ず。この故に汝等のまへ、特に
アグリッパ王よ、なんぢの前に引出し、訊問をなしてのち、上書す
べき箇條を得んと思へり。二七囚人を送るに訴訟の次第を陳べざるは
道理ならずと思ふ故なり』

第二六章 一アグリッパ、パウロに言ふ『なんぢは自己のために陳ぶ
ることを許されたり』ここにパウロ手を伸べ、辯明して言ふ、二『ア
グリッパ王よ、我ユダヤ人より訴へられし凡ての事につきて、今日
なんぢらの前に辯明するを我が幸福とす。三汝がユダヤ人の凡ての
習慣と問題とを知るによりて殊に然りとす。されば請ふ、忍びて我に
聽け。四わが始より國人のうちに又エルサレムに於ける幼き時より

の生活の状は、ユダヤ人のみな知る所なり。五彼等もし證せんと
思はば、わが我らの宗教の最も嚴しき派に從ひて、パリサイ人の
生活をなしし事を始より知れり。六今わが立ちて審かるるは、神が
我らの先祖たちに約束し給ひしことの希望に因りてなり。七之を得ん
ことを望みて、我が十二の族は夜も晝も熱心に神に事ふるなり。王
よ、この希望につきて、我はユダヤ人に訴へられたり。八神は死人
を甦へらせ給ふとも、汝等なんぞ信じ難しとするか。九我も曩には
ナザレ人イエスの名に逆ひて樣々の事をなすを宜きことと自ら思
へり。一〇我エルサレムにて之をおこなひ、祭司長らより權威を受け
て多くの聖徒を獄にいれ、彼らの殺されし時これに同意し、一一諸
教會堂にてしばしば彼らを罰し、強ひて言を言はしめんとし、甚
だしく狂ひ、迫害して外國の町にまで至れり。一二此のとき祭司長
らより權威と委任とを受けてダマスコに赴きしが、一三王よ、その途
にて正午ごろ天よりの光を見たり、日にも勝りて輝き、我と伴侶と
を圍み照せり。一四我等みな地に倒れたるに、ヘブルの語にて「サウ

ロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか、刺ある策を蹴るは難し」といふ聲
を我きけり。一五われ言ふ「主よ、なんぢは誰ぞ」主いひ給ふ「われ
は汝が迫害するイエスなり。一六起きて汝の足にて立て、わが汝
に現れしは、汝をたてて其の見しことと我が汝に現れて示さん
とする事との役者また證人たらしめん爲なり。一七我なんぢを此の
民および異邦人より救はん、又なんぢを彼らに遣し、一八その目を
ひらきて暗より光に、サタンの權威より神に立ち歸らせ、我に對
する信仰によりて罪の赦と潔められたる者のうちの嗣業とを得しめ
ん」と。一九この故にアグリッパ王よ、われは天よりの顯示に背かず
して、二〇先づダマスコに居るもの、次にエルサレム及びユダヤ全國
、また異邦人にまで、悔改めて神に立ちかへり、其の悔改にかな
ふ業をなすべきことを宣傳へたり。二一之がためにユダヤ人われを宮
にて捕へ、かつ殺さんとせり。二二然るに神の祐によりて今日に至
るまで尚存へて、小なる人にも大なる人にも證をなし、言ふところ
は預言者およびモーセが必ず來るべしと語りしことの外ならず。二

三即ちキリストの苦難を受くべきこと、最先に死人の中より甦へる
事によりて、民と異邦人とに光を傳ふべきこと是なり』二四パウロ
斯く辯明しつつある時、フェスト大聲に言ふ『パウロよ、なんぢ狂氣
せり、博學なんぢを狂氣せしめたり』二五パウロ言ふ『フェスト閣下
よ、我は狂氣せず、宣ぶる所は眞にして慥なる言なり。二六王は
此等のことを知るゆゑに、我その前に憚らずして語る。これらの事
は片隅に行はれたるにあらねば、一つとして王の眼に隱れたるはな
しと信ずるに因る。二七アグリッパ王よ、なんぢ預言者の書を信ずる
か、我なんぢの信ずることを知る』二八アグリッパ、パウロに言ふ『な
んぢ説くこと僅にして我をキリステアンたらしめんとするか』二九
パウロ言ふ『説くことの僅なるにもせよ、多きにもせよ、神に願ふ
は、啻に汝のみならず、凡て今日われに聽ける者の、この縲絏なく
して我がごとき者とならんことなり』三〇ここに王も總督もベルニケ
も、列座の者どもも皆ともに立つ、三一退きてのち相語りて言ふ『こ
の人は死罪または縲絏に當るべき事をなさず』三二アグリッパ、フェ

ストに言ふ『この人カイザルに上訴せざりしならば釋さるべかりし
なり』

第二七章 一すでに我等をイタリヤに渡らしむること決りたれば、パ
ウロ及びその他數人の囚人を、近衛隊の百卒長ユリアスと云ふ人に
付せり。二ここに我らアジヤの海邊なる各處に寄せゆくアドラミテ
オの船の出帆せんとするに乘りて出づ。テサロニケのマケドニヤ人
アリスタルコも我らと共にありき。三次の日シドンに著きたれば、ユ
リアス懇切にパウロを遇ひ、その友らの許にゆきて歡待を受くるこ
とを許せり。四かくて此處より船出せしが、風の逆ふによりてクプ
ロの風下の方をはせ、五キリキヤ及びパンフリヤの沖を過ぎてルキヤ
のミラに著く。六彼處にてイタリヤにゆくアレキサンデリヤの船に遇
ひたれば、百卒長われらを之に乘らしむ。七多くの日のあひだ船の
進み遲く、辛うじてクニドに對へる處に到りしが、風に阻へられて
サルモネの沖を過ぎ、クレテの風下の方をはせ、八陸に沿ひ辛うじて
良き港といふ處につく。その近き處にラサヤの町あり。九船路久

しきを歷て、斷食の期節も既に過ぎたれば、航海危きにより、パウ
ロ人々に勸めて言ふ、一〇『人々よ、我この航海の害あり損多くして、
ただ積荷と船とのみならず、我らの生命にも及ぶべきを認む』一一さ
れど百卒長は、パウロの言ふ所よりも船長と船主との言を重ん
じたり。一二且この港は冬を過すに不便なるより、多數の者も、な
し得んにはピニクスに到り、彼處にて冬を過さんとて、此處を船出す
るを可しとせり。ピニクスはクレテの港にて東北と東南とに向
ふ。一三南風おもむろに吹きたれば、彼ら志望を得たりとして錨
をあげ、クレテの岸邊に沿ひて進みたり。一四幾程もなくユーラクロ
ンといふ疾風その島より吹きおろし、一五之がために船は吹き流され、
風に向ひて進むこと能はねば、船は風の追ふに任す。一六クラウダと
いふ小島の風下の方にいたり、辛うじて小艇を收め、一七これを船に
引上げてのち、備綱にて船體を卷き縛り、またスルテスの洲に乘り
かけんことを恐れ、帆を下して流る。一八いたく暴風に惱され、次の
日、船の者ども積荷を投げすて、一九三日めに手づから船具を棄てた

り。二〇數日のあひだ日も星も見えず、暴風はげしく吹き荒びて、我
らの救はるべき望ついに絶え果てたり。二一人々の食せぬこと久し
くなりたる時、パウロその中に立ちて言ふ『人々よ、なんぢら前に我
が勸をきき、クレテより船出せずして、この害と損とを受けずある
べき筈なりき。二二いま我なんぢらに勸む、心安かれ、汝等のうち
一人だに生命をうしなふ者なし、ただ船を失はん。二三わが屬する
ところ我が事ふる所の神の使、昨夜わが傍らに立ちて、二四「パウ
ロよ、懼るな、なんぢ必ずカイザルの前に立たん、視よ、神は汝と
同船する者をことごとく汝に賜へり」と云ひたればなり。二五この
故に人々よ、心安かれ、我はその我に語り給ひしごとく必ず成るべ
しと神を信ず。二六而して我らは或島に推上げらるべし』二七かくて
十四日めの夜に至りて、アドリヤの海を漂ひゆきたるに、夜半ごろ
水夫ら陸に近づきたりと思ひて、二八水を測りたれば、二十尋なるを
知り、少しく進みてまた測りたれば、十五尋なるを知り、二九岩に乘
り上げんことを恐れて、艫より錨を四つ投して夜明を待ちわぶ。三

○然るに水夫ら船より逃れ去らんと欲し、舳より錨を曳きゆくに言寄せて小艇を海に下したれば、三一パウロ、百卒長と兵卒らとに言ふ『この者ども若し船に留らずば、汝ら救はるること能はず』三二ここに兵卒ら小艇の綱を斷切りて、その流れゆくに任す。三三夜の明けんとする頃、パウロ凡ての人に食せんことを勸めて言ふ『なんぢら待ち待ちて食事せぬこと今日にて十四日なり。三四されば汝らに食せんことを勸む、これ汝らが救のためなり、汝らの頭髪一筋だに首より落つる事なし』三五斯く言ひて後みづからパンを取り、一同の前にて神に謝し、擘きて食し始めたれば、三六人々もみな心を安んじて食したり。三七船に居る我らは凡て二百七十六人なりき。三八人々食し飽きてのち、穀物を海に投げ棄てて船を輕くせり。三九夜明になりて、孰の土地かは知らねど、砂濱の入江を見出し、なし得べくば此處に船を寄せんと相議り、四〇錨を斷ちて海に棄つるとともに、舵纜をゆるめ舳の帆を揚げて、風にまかせつつ砂濱さして進む。四一然るに潮の流れあふ處にいたりて船を淺瀨に乘り上げた

れば、舳膠著きて動かず、艫は浪の激しきに破れたり。四二兵卒ら
は囚人の泳ぎて逃れ去らんことを恐れ、これを殺さんと議りしに、四
三百卒長パウロを救はんと欲して、その議るところを阻み、泳ぎう
る者に命じ、海に跳び入りてまず上陸せしめ、四四その他の者をば
或は板あるひは船の碎片に乘らしむ。斯くしてみな上陸して救は
るるを得たり。

第二八章一われら救はれて後、この島のマルタと稱ふるを知れり。
二土人ら一方ならぬ情を我らに表し、降りしきる雨と寒氣とのため
に、火を焚きて我ら一同を待遇せり。三パウロ柴を束ねて火にくべた
れば、熱によりて蝮いでて其の手につく。四蛇のその手に懸りたる
を土人ら見て互に言ふ『この人は必ず殺人者なるべし、海より救
はれしも、天道はその生くるを容さぬなり』五パウロ蛇を火のなかに
振り落して何の害をも受けざりき。六人々は彼が腫れ出づるか、また
は忽ち倒れ死ぬるならんと候ふ。久しく窺ひたれど、聊かも害
を受けぬを見て、思を變へて、此は神なりと言ふ。七この處の邊

に島司のもてる土地あり、島司の名はポプリオといふ。此の人われ
らを迎へて懇切に三日の間もてなせり。八ポプリオの父、熱と痢病
とに罹りて臥し居たれば、パウロその許にいたり、祈りかつ手を按
きて醫せり。九この事ありてより、島の病める人々みな來りて醫され
たれば、一〇禮を厚くして我らを敬ひ、また船出の時には必要なる
品々を贈りたり。一一三月の後、われらはこの島に冬籠せしデオス
クリの號あるアレキサンデリヤの船にて出で、一二シラクサにつき
て三日とまり、一三此處より繞りてレギオンにいたり、一日を過ぎて
南風ふき起りたれば、我ら二日めにポテオリに著き、一四此處にて
兄弟たちに逢ひ、その勸によりて七日のあひだ留り、而して遂に
ロマに往く。一五かしこの兄弟たち我らの事をききて、アピオポロ
およびトレスタベルネまで來りて我らを迎ふ。パウロこれを見て神
に感謝し、その心勇みたり。一六我らロマに入りて後、パウロは己
を守る一人の兵卒とともに別に住むことを許さる。一七三日すぎてパ
ウロ、ユダヤ人の重立ちたる者を呼び集む。その集りたる時これに

言ふ『兄弟たちよ、我はわが民わが先祖たちの慣例に悖ることを一
つも爲さざりしに、エルサレムより囚人となりて、ロマ人の手に付さ
れたり。一八かれら我を審きて死に當ることなき故に、我を釋さんと
思ひしに、一九ユダヤ人さからひたれば、餘義なくカイザルに上訴せ
り。然れど我が國人を訴へんとせしにあらず。二〇この故に我なん
ぢらに會ひ、かつ共に語らんことを願へり、我はイスラエルの懷く
希望の爲にこの鎖に繋がれたり』二一かれら言ふ『われら汝につき
てユダヤより書を受けず、また兄弟たちの中より來りて、汝の善か
らぬ事を告げたる者も、語りたる者もなし。二二ただ我らは汝の思
ふところを聞かんと欲するなり。それは此の宗旨の到る處にて非難
せらるるを知ればなり』二三ここに日を定めて多くの人パウロの宿に
來りたれば、パウロ朝より夕まで神の國のことを說明して證をな
し、かつモーセの律法と預言者の書とを引きてイエスのことを勸め
たり。二四パウロのいふ言を或者は信じ、或者は信ぜず。二五互に
相合はずして退かんとしたるに、パウロ一言を述べて言ふ『宜なる

かな、　聖靈は預言者イザヤによりて汝らの先祖たちに語り給へり。
曰く、

二六「なんぢらこの民に往きて言へ、
なんぢら聞きて聞けども悟らず、
見て見れども認めず、
二七この民の心はにぶく、
耳は聞くにものうく、
目は閉ぢたればなり。
これ目にて見、耳にて聞き、
心にてさとり、ひるがへりて
我に醫さるることなからん爲なり」

二八然れば汝ら知れ、神のこの救は異邦人に遣されたり、彼らは
之を聽くべし』二九[なし]三〇パウロは滿二年のあひだ、己が借り受
けたる家に留り、その許にきたる凡ての者を迎へて、三一更に臆せ
ずまた妨げられずして、神の國をのべ、主イエス・キリストの事を

教へたり。

ロマ人への書

第一章一キリスト・イエスの僕（しもべ）、召（め）されて使徒（しと）となり、神（かみ）の福音（ふくいん）の
ために選（えら）び別（わか）たれたるパウロ――二この福音（ふくいん）は神（かみ）その預言者（よげんしゃ）たちによ
り、聖書（せいしょ）の中（うち）に預（あらか）じめ御子（みこ）に就（つ）きて約（やく）し給（たま）ひしものなり。三御子（みこ）は
肉（にく）によれば、ダビデの裔（すゑ）より生（うま）れ、四潔（きよ）き靈（れい）によれば、死人（しにん）の復活（よみがへり）
により大能（たいのう）をもて神（かみ）の子（こ）と定（さだ）められ給（たま）へり、即（すなは）ち我（われ）らの主（しゅ）イエス・
キリストなり。五我等（われら）その御名（みな）の爲（ため）にもろもろの國人（くにびと）を信仰（しんかう）に従順（じゅうじゅん）
ならしめんとて、彼（かれ）より恩恵（めぐみ）と使徒（しと）の職（つとめ）とを受（う）けたり。六汝等（なんぢら）もそ
の中（うち）にあり、てイエス・キリストの有（もの）とならん爲（ため）に召（め）されたるなり。
――七われ書（ふみ）をロマに在（あ）りて神（かみ）に愛（あい）せられ、召（め）されて聖徒（せいと）となりたる
凡（すべ）ての者（もの）に贈（おく）る。願（ねが）はくは我（われ）らの父（ちち）なる神（かみ）および主（しゅ）イエス・キリスト
より賜（たま）ふ恩恵（めぐみ）と平安（へいあん）と汝（なんぢ）らに在（あ）らんことを。八汝（なんぢ）らの信仰（しんかう）、全世界（ぜんせかい）

に言ひ傳へられたれば、我まづ汝ら一同の爲にイエス・キリストに
よりて我が神に感謝す。九その御子の福音に於て我が靈をもて事ふる
神は、わが絶えず祈のうちに汝らを覺え、一〇如何にしてか御意に
適ひ、いつか汝らに到るべき途を得んと、常に冀がふことを我がた
めに證し給ふなり。一一われ汝らを見んことを切に望むは、汝ら
の堅うせられん爲に靈の賜物を分け與へんとてなり。一二即ち我な
んぢらの中にありて、互の信仰により相共に慰められん爲なり。一
三兄弟よ、我ほかの異邦人の中より得しごとく、汝らの中よりも實
を得んとて、屢次なんぢらに往かんとしたれど、今に至りてなほ妨
げらる、此の事を汝らの知らざるを欲せず。一四我はギリシヤ人にも
夷人にも、智き者にも愚なる者にも負債あり。一五この故に我はロ
マに在る汝らにも福音を宣傳へんことを頻りに願ふなり。一六我は
福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信
ずる者に救を得さする神の力たればなり。一七神の義はその福音の
うちに顯れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。録して『義人は信仰

によりて生くべし』とある如し。一八それ神の怒は、不義をもて眞理
を阻む人の、もろもろの不虔と不義とに對ひて天より顯る。一九そ
の故は、神につきて知り得べきことは彼らに顯著なればなり、神これ
を顯し給へり。二〇それ神の見るべからざる永遠の能力と神性とは、
造られたる物により世の創より悟りえて明かに見るべければ、彼
ら言ひ遁るる術なし。二一神を知りつつも尚これを神として崇めず、
感謝せず、その念は虚しく、その愚なる心は暗くなれり。二二自
ら智しと稱へて愚となり、二三朽つることなき神の榮光を易へて、
朽つべき人および禽獸・匍ふ物に似たる像となす。二四この故に神
は彼らを其の心の慾にまかせて、互にその身を辱しむる汚穢に付
し給へり。二五彼らは神の眞を易へて虚僞となし、造物主を措きて
造られたる物を拜し、且これに事ふ、造物主は永遠に讃むべき者な
り、アァメン。二六之によりて神は彼らを恥づべき慾に付し給へり。
即ち女は順性の用を易へて逆性の用となし、二七男もまた同じ
く女の順性の用を棄てて互に情慾を熾し、男と男と恥づること

を行ひて、その迷に値すべき報を己が身に受けたり。二八また神
を心に存むるを善しとせざれば、神もその邪曲なる心の随に爲まじ
き事をするに任せ給へり。二九即ちもろもろの不義・惡・慳貪・惡意
にて滿つる者、また嫉妬・殺意・紛爭・詭計・惡念の溢るる者、三〇
讒言する者・謗る者・神に憎まるる者・侮る者・高ぶる者・誇る者
・惡事を企つる者・父母に逆ふ者、三一無知・違約・無情・無慈悲
なる者にして、三二かかる事どもを行ふ者の死罪に當るべき神の定
を知りながら、啻に自己これらの事を行ふのみならず、また人の之
を行ふを可しとせり。

第二章一されば凡て人を審く者よ、なんぢ言ひ遁るる術なし、他の
人を審くは、正しく己を罪するなり。汝もみづから同じ
事を行へばなり。二かかる事をおこなふ者を罪する神の審判は眞理
に合へりと我らは知る。三かかる事をおこなふ者を審きて自己これを
行ふ人よ、なんぢ神の審判を遁れんと思ふか。四神の仁慈なんぢを
悔改に導くを知らずして、その仁慈と忍耐と寛容との豐なるを

輕んずるか。五なんぢ頑固と悔改めぬ心とにより、己のために神
の怒を積みて、その正しき審判の顯るる怒の日に及ぶなり。六神
はおのおのの所作に隨ひて報い、七耐へ忍びて善をおこない光榮と
尊貴と朽ちざる事とを求むる者には、永遠の生命をもて報い、八徒黨
により眞理に從はずして不義にしたがう者には、怒と憤恚とをも
て報い給はん。九すべて惡をおこなふ人には、ユダヤ人を始めギリシ
ヤ人にも患難と苦難とあり。一〇凡て善をおこなふ人には、ユダヤ人
を始めギリシヤ人にも光榮と尊貴と平安とあらん。一一そは神には
偏り視給ふこと無ければなり。一二凡そ律法なくして罪を犯したる
者は律法なくして滅び、律法ありて罪を犯したる者は律法によりて審
かるべし。一三律法を聞くもの神の前に義たるにあらず、律法をおこ
なふ者のみ義とせらるべし。――一四律法を有たぬ異邦人、もし本性
のまま律法に載せたる所をおこなふ時は、律法を有たずともおのづ
から己が律法たるなり。一五即ち律法の命ずる所のその心に録さ
れたるを顯し、おのが良心もこれを證をなして、その念、たがひ

に或は訴へ或は辯明す。――一六是わが福音に云へる如く、神の
キリスト・イエスによりて人々の隱れたる事を審きたまふ日に成るべ
し。一七汝ユダヤ人と稱へられ、律法に安んじ、神を誇り、一八その
御意を知り、律法に教へられて善惡を辨へ、一九また律法のうちに
知識と眞理との式を有てりとして、盲人の手引、暗黑にをる者の光明
、二〇愚なる者の守役、幼兒の教師なりと自ら信ずる者よ、二一何
ゆゑ人に教へて己を教へぬか、竊む勿れと宣べて自ら竊むか、二二
姦淫する勿れと言ひて姦淫するか、偶像を惡みて宮の物を奪ふか、二
三律法に誇りて律法を破り神を輕んずるか。二四録して『神の名は汝
らの故によりて異邦人の中に涜さる』とあるが如し。二五なんぢ律法
を守らば割禮は益あり、律法を破らば汝の割禮は無割禮となるなり。
二六割禮なき者も律法の義を守らば、その無割禮は割禮とせらるるに
あらずや。二七本性のまま割禮なくして律法を全うする者は、儀文
と割禮とありてなほ律法をやぶる汝を審かん。二八それ表面のユダ
ヤ人はユダヤ人たるにあらず、肉に在る表面の割禮は割禮たるにあら

ず。二九隠なるユダヤ人はユダヤ人なり、儀文によらず、靈による
心の割禮は割禮なり、その譽は人よりにあらず、神より來るなり。
第三章 一さらばユダヤ人に何の優る所ありや、また割禮に何の
益ありや。二凡ての事に益おほし、先づ第一に彼らは神の言を委ね
られたり。三されど如何ん、ここに信ぜざる者ありとも、その不信は
神の眞實を廢つべきか。四決して然らず、人をみな虚僞者とすとも神
を誠實とすべし。録して
『なんぢは其の言にて義とせられ、
審かるるとき勝を得給はん爲なり』
とあるが如し。五然れど若し我らの不義は神の義を顯すとせば何と
言はんか、怒を加へたまふ神は不義なるか（こは人の言ふごとく言
ふなり）六決して然らず、若し然あらば神は如何にして世を審き給ふ
べき。七わが虚僞によりて神の誠實いよいよ顯れ、その榮光とならば
んには、いかで我なほ罪人として審かるる事あらん。八また『善を來
らせん爲に惡をなすは可からずや』（或者われらを譏りて之を我らの

言なりといふ）かかる人の罪に定めらるるは正し。九さらば如何ん、
我らの勝る所ありや、有ることなし。我ら既にユダヤ人もギリシャ
人もみな罪の下に在りと告げたり。一〇録して
『義人なし、一人だになし、
一一聰き者なく、
神を求むる者なし。
一二みな迷ひて相共に空しくなれり、
善をなす者なし、一人だになし。
一三彼らの咽は開きたる墓なり、
舌には詭計あり、
口唇のうちには蝮の毒あり、
一四その口は詛と苦とにて滿つ。
一五その足は血を流すに速し、
一六破壞と艱難とその道にあり、
一七彼らは平和の道を知らず。

一八その眼前に神をおそるる畏なし』
とあるが如し。一九それ律法の言ふところは律法の下にある者に語る
と我らは知る、これは凡ての口ふさがり、神の審判に全世界の服せ
ん爲なり。二〇律法の行爲によりては、一人だに神のまへに義とせら
れず、律法によりて罪は知らるるなり。二一然るに今や律法の外に神
の義は顯れたり、これ律法と預言者とに由りて證せられ、二二イエ
ス・キリストを信ずるに由りて凡て信ずる者に與へたまふ神の義な
り。之には何等の差別あるなし。二三凡ての人、罪を犯したれば神の
榮光を受くるに足らず、二四功なくして神の恩惠により、キリスト・
イエスにある贖罪によりて義とせらるるなり。二五即ち神は忍耐を
もて過來しかたの罪を見遁し給ひしが、己の義を顯さんとて、キリ
ストを立て、その血によりて信仰によれる宥の供物となし給へり。
二六これ今おのれの義を顯して、自ら義たらん爲、またイエスを信
ずる者を義とし給はん爲なり。二七さらば誇るところ何處にあるか。
既に除かれたり、何の律法に由りてか、行爲の律法か、然らず、信仰

の律法に由りてなり。二八我らは思ふ、人の義とせらるるは、律法の
行爲によらず、信仰に由るなり。二九神はただユダヤ人のみの神なる
か、また異邦人の神ならずや、然り、また異邦人の神なり。三〇神は
唯一にして、割禮ある者を信仰によりて義とし、割禮なき者をも信仰
によりて義とし給へばなり。三一然らば我ら信仰をもて律法を空しく
するか、決して然らず、反って律法を堅うするなり。

第四章一さらば我らの先祖アブラハムは肉につきて何を得たりと言
はんか。二アブラハム若し行爲によりて義とせられたらんには誇るべ
き所あり、然れど神の前には有ることなし。三聖書に何と云へるか
『アブラハム神を信ず、その信仰を義と認められたり』と。四それ働
く者への報酬は恩惠といはず、負債と認めらる。五されど働く事な
くとも、敬虔ならぬ者を義としたまふ神を信ずる者は、その信仰を義
と認めらるるなり。六ダビデもまた行爲なくして神に義と認めらるる
人の幸福につきて斯く云へり。七『不法を免され、

　罪を蔽はれたる者は幸福なるかな、
　八主が罪を認め給はぬ人は幸福なるかな』
九されば此の幸福はただ割禮ある者にのみあるか、また割禮なき者に
もあるか、我らは言ふ『アブラハムはその信仰を義と認められたり』
と。一〇如何なるときに義と認められたるか、割禮のちか、無割禮
のときか、割禮の後ならず、無割禮の時なり。一一而して無割禮のと
きの信仰によれる義の印として割禮の徽を受けたり、これ無割禮に
して信ずる凡ての者の義と認められん爲に、その父となり、一二また
割禮のみに由らず、我らの父アブラハムの無割禮のときの信仰の跡
をふむ割禮ある者の父とならん爲なり。一三アブラハム世界の世嗣た
るべしとの約束を、アブラハムとその裔との與へられしは、律法に
由らず、信仰の義に由れるなり。一四もし律法による者ども世嗣たら
ば、信仰は空しく約束は廢るなり。一五それ律法は怒を招く、律法
なき所には罪を犯すこともなし。一六この故に世嗣たることの恩惠
に干らんために信仰に由るなり、是かの約束のアブラハムの凡ての

裔、すなわち律法による裔のみならず、彼の信仰に效ふ裔にも堅う
せられん爲なり。一七彼はその信じたる所の神、すなはち死人を活
し、無きものを有るものの如く呼びたまふ神の前にて、我等すべての
者の父たるなり。録して『われ汝を立てて多くの國人の父とせり』
とあるが如し。一八彼は望むべくもあらぬ時になほ望みて信じたり、
是なんぢの裔はかくの如くなるべしと言ひ給ひしに隨ひて、多くの
國人の父とならん爲なりき。一九かくて凡そ百歳に及びて己が身の
死にたるがごとき状なると、サラの胎の死にたるが如きとを認むれ
ども、その信仰よわらず、二〇不信をもて神の約束を疑はず、信仰
により強くなりて神に榮光を歸し、二一その約し給へることを、成
し得給ふと確信せり。二二之に由りて其の信仰を義と認められたり。
二三斯く『義と認められたり』と録したるは、アブラハムの爲のみな
らず、また我らの爲なり。二四我らの主イエスを死人の中より甦へ
らせ給ひし者を信ずる我らも、その信仰を義と認められん。二五主は
我らの罪のために付され、我らの義とせられん爲に甦へらせられ給

へるなり。

第五章

一斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、我らの主イエ
ス・キリストに頼り、神に對して平和を得たり。**二**また彼により信仰
によりて、今立つところの恩惠に入ることを得、神の榮光を望みて
喜ぶなり。**三**然のみならず患難をも喜ぶ、そは患難は忍耐を生じ、
四忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり。**五**希望は恥
を來らせず、我らに賜ひたる聖靈によりて神の愛われらの心に注げ
ばなり。**六**我等のなほ弱かりし時、キリスト定りたる日に及びて、
敬虔ならぬ者のために死に給へり。**七**それ義人のために死ぬるもの
殆どなし、仁者のためには死ぬることを厭はぬ者もやあらん。**八**然
れど我等がなほ罪人たりし時、キリスト我等のために死に給ひしに
由りて、神は我らに對する愛をあらはし給へり。**九**斯く今その血に頼
りて我ら義とせられたらんには、まして彼によりて怒より救はれざ
らんや。**一〇**我等もし敵たりしとき御子の死に頼りて神と和ぐこと
を得たらんには、まして和ぎて後その生命によりて救はれざらんや。

一一然のみならず今われらに和睦を得させ給へる我らの主イエス・キ
リストに頼りて神を喜ぶなり。一二それ一人の人によりて罪は世に
入り、また罪によりて死は世に入り、凡ての人罪を犯しし故に、死は
凡ての人に及べり。一三律法のきたる前にも罪は世にありき、されど
律法なくば罪は認めらるること無し。一四然るにアダムよりモーセに
至るまで、アダムの咎と等しき罪を犯さぬ者の上にも死は王たりき。
アダムは來らんとする者の型なり。一五されど恩惠の賜物は、かの咎
の如きにあらず、一人の咎によりて多くの人の死にたらんには、まし
て神の恩惠と一人の人イエス・キリストによる恩惠の賜物とは、多く
の人に溢れざらんや。一六又この賜物は罪を犯しし一人より來れるも
のの如きにあらず、審判は一人よりして罪を定むるに至りしが、恩惠
の賜物は多くの咎よりして義とするに至るなり。一七もし一人の咎の
ために一人によりて死は王となりたらんには、まして恩惠と義の賜物
とを豐に受くる者は、一人のイエス・キリストにより生命に在りて
王たらざらんや。一八されば一つの咎によりて罪を定むることの凡て

の人に及びしごとく、一つの正しき行爲によりて義とせられ生命を
得るに至ることも、凡ての人に及べり。一九それは一人の不從順に
よりて多くの人の罪人とせられし如く、一人の從順によりて多くの
人、義人とせらるるなり。二〇律法の來りしは咎の增さんためなり。
されど罪の增すところには恩恵も彌增せり。二一これ罪の死によりて
王たりし如く、恩恵も義によりて王となり、我らの主イエス・キリス
トに由りて永遠の生命に至らん爲なり。
第六章 一されば何をか言はん、恩恵の增さんために罪のうちに止
るべきか、二決して然らず、罪に就きて死にたる我らは爭で尚その中
に生きんや。三なんじら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合ふバプ
テスマを受けたる我らは、その死に合ふバプテスマを受けしを。四我
らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、その死に合せられたり。
これキリスト父の榮光によりて死人の中より甦へらせられ給ひし
ごとく、我らも新しき生命に歩まんためなり。五我らキリストに接つ
がれて、その死の状にひとしくば、その復活にも等しかるべし。六

我らは知る、われらの舊き人、キリストと共に十字架につけられたる
は、罪の體ほろびて、此ののち罪に事へざらん爲なるを。七そは死に
し者は罪より脱るるなり。八我等もしキリストと共に死にしならば、
また彼とともに活きんことを信ず。九キリスト死人の中より甦へり
て復死に給はず、死もまた彼に主とならぬを我ら知ればなり。一〇そ
の死に給へるは罪につきて一たび死に給へるにて、その活き給へる
は神につきて活き給へるなり。一一斯くのごとく汝らも己を罪につ
きては死にたるもの、神につきては、キリスト・イエスに在りて活き
たる者と思ふべし。一二されば罪を汝らの死ぬべき體に王たらしめ
て其の慾に從ふことなく、一三汝らの肢體を罪に獻げて不義の器
となさず、反つて死人の中より活き返りたる者のごとく己を神にさ
さげ、その肢體を義の器として神に獻げよ。一四汝らは律法の下に
あらずして恩惠の下にあれば、罪は汝らに主となる事なきなり。一
五然らば如何に、我らは律法の下にあらず、恩惠の下にあるが故に、
罪を犯すべきか、決して然らず。一六なんぢら知らぬか、己を獻げ

僕となりて、誰に從ふとも其の僕たることを。或は罪の僕とな
りて死に至り、或は從順の僕となりて義に至る。一七然れど神に
感謝す、汝等はもと罪の僕なりしが、傳へられし教の範に心より
從ひ、一八罪より解放されて義の僕となりたり。一九斯く人の事を
かりて言ふは、汝らの肉よわき故なり。なんぢら舊その肢體をささ
げ、穢と不法との僕となりて不法に到りしごとく、今その肢體をさ
さげ、義の僕となりて潔に到れ。二〇なんぢら罪の僕たりしとき
は義に對して自由なりき。二一その時に今は恥とする所の事により
て何の實を得しか、これらの事の極は死なり。二二然れど今は罪より
解放されて神の僕となりたれば、潔にいたる實を得たり、その極は
永遠の生命なり。二三それ罪の拂ふ價は死なり、然れど神の賜物は
我らの主キリスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり。

第七章 一兄弟よ、なんぢら知らぬか、（われ律法を知る者に語る）
律法は人の生ける間のみ之に主たるなり。二夫ある婦は律法によ
りて夫の生ける中は之に縛らる。然れど夫死なば夫の律法より解

かるるなり。三されば夫の生ける中に他の人に適かば淫婦と稱へら
るれど、夫死なばその律法より解放さるる故に、他の人に適くとも
淫婦とはならぬなり。四わが兄弟よ、斯くのごとく汝等もキリスト
の體により律法に就きて死にたり。これ他の者、すなはち死人の中
より甦へらせられ給ひし者に適き、神のために實を結ばん爲なり。
五われら肉に在りしとき、律法に由れる罪の情は我らの肢體のうち
に働きて、死のために實を結ばせたり。六されど縛られたる所に就
きて我等いま死にて律法より解かれたれば、儀文の舊きによらず、靈
の新しきに從ひて事ふることを得るなり。七さらば何をか言はん、
律法は罪なるか、決して然らず、律法に由らでは、われ罪を知らず、
律法に『貪る勿れ』と言はずば、慳貪を知らざりき。八されど罪は
機に乘じ誡命によりて各様の慳貪を我がうちに起せり、律法なくば
罪は死にたるものなり。九われ曾て律法なくして生きたれど、誡命き
たりし時に罪は生き、我は死にたり。一〇而して我は生命にいたるべ
き誡命の反つて死に到らしむるを見出せり。一一これ罪は機に乘じ

誡命によりて我を欺き、かつ之によりて我を殺せり。一二それ律法
は聖なり、誡命もまた聖にして正しく、かつ善なり。一三されば善な
るもの我に死となりたるか。決して然らず、罪は罪たることの現れ
んために、善なる者によりて我が内に死を來らせたるなり。これ誡命
によりて罪の甚だしき惡とならん爲なり。一四われら律法は靈なる
ものと知る、されど我は肉なる者にて罪の下に賣られたり。一五わが
行ふことは我しらず、我が欲する所は之をなさず、反つて我が憎む
ところは之を爲すなり。一六わが欲せぬ所を爲すときは律法の善な
るを認む。一七然れば之を行ふは我にあらず、我が中に宿る罪なり。
一八我はわが中、すなわち我が肉のうちに善の宿らぬを知る、善を欲
すること我にあれど、之を行ふ事なければなり。一九わが欲する所
の善は之をなさず、反つて欲せぬ所の惡は之をなすなり。二〇我も
し欲せぬ所の事をなさば、之を行ふは我にあらず、我が中に宿る罪
なり。二一然れば善をなさんと欲する我に惡ありとの法を、われ見出
せり。二二われ中なる人にては神の律法を悦べど、二三わが肢體のう

ちに他の法ありて、我が心の法と戰ひ、我を肢體の中にある罪の法
の下に虜とするを見る。
二四噫われ惱める人なるかな、此の死の體
より我を救はん者は誰ぞ。
二五我らの主イエス・キリストに頼りて神
に感謝す、然れば我みづから心にては神の律法につかへ、内にては
罪の法に事ふるなり。

第八章
一この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪の定めらるる
ことなし。
二キリスト・イエスに在る生命の御靈の法は、なんじを罪
と死との法より解放したればなり。
三肉によりて弱くなれる律法の成
し能はぬ所を神は爲し給へり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪
のために遣し、肉に於て罪を定めたまへり。
四これ肉に從はず靈に
從ひて歩む我らの中に、律法の義の完うせられん爲なり。
五肉にし
たがふ者は肉の事をおもひ、靈にしたがふ者は靈の事をおもふ。
六肉
の念は死なり、靈の念は生命なり、平安なり。
七肉の念は神に逆
ふ、それは神の律法に服はず、否したがふこと能はず、
八また肉に
居る者は神を悦ばすこと能はざるなり。
九然れど神の御靈なんぢら

の中に宿り給はば、汝らは肉に居らで靈に居らん、キリストの御靈
なき者はキリストに屬する者にあらず。一〇若しキリスト汝らに在
さば、體は罪によりて死にたる者なれど、靈は義によりて生命に在
らん。一一若しイエスを死人の中より甦へらせ給ひし者の御靈なん
ぢらの中に宿り給はば、キリスト・イエスを死人の中より甦へらせ
給ひし者は、汝らの中に宿りたまふ御靈によりて、汝らの死ぬべ
き體をも活し給はん。一二されば兄弟よ、われらは負債あれど、肉
に負ふ者ならねば、肉に從ひて活くべきにあらず。一三汝等もし肉
に從ひて活きなば、死なん。もし靈によりて體の行爲を殺さば活
くべし。一四すべて神の御靈に導かるる者は、これ神の子なり。一五
汝らは再び懼を懷くために僕たる靈を受けしにあらず、子とせ
られたる者の靈を受けたり、之によりて我らはアバ父と呼ぶなり。一
六御靈みづから我らの靈とともに我らが神の子たることを證す。一
七もし子たらば世嗣たらん、神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たる
なり。これはキリストとともに榮光を受けん爲に、その苦難をも共

に受くるに因る。一八われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に
顯れんとする榮光にくらぶるに足らず。一九それ造られたる者は、
切に慕ひて神の子たちの現れんことを待つ。二〇造られたるものの
虛無に服せしは、己が願によるにあらず、服せしめ給ひし者による
なり。二一然れどなほ造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれ
て、神の子たちの光榮の自由に入る望は存れり。二二我らは知る、
すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむこと
を。二三然のみならず、御靈の初の實をもつ我らも自ら心のうち
に嘆きて、子とせられんこと、即ちおのが軆の贖はれんことを待
つなり。二四我らは望によりて救はれたり、眼に見ゆる望は望に
あらず、人その見るところを爭でなほ望まんや。二五我等もし其の見
ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。二六斯くのごとく御靈も
我らの弱を助けたまふ。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、
御靈みづから言ひ難き歎をもて執成し給ふ。二七また人の心を極め
たまふ者は御靈の念をも知りたまふ。御靈は神の御意に適ひて聖徒

のために執成し給へばなり。二八神を愛する者、すなはち御旨により
て召されたる者の爲には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知
る。二九神は預じめ知りたまふ者を御子の像に象らせんと預じめ
定め給へり。これ多くの兄弟のうちに、御子を嫡子たらせんが爲な
り。三〇又その預じめ定めたる者を召し、召したる者を義とし、義と
したる者には光榮を得させ給ふ。三一然れば此等の事につきて何を
か言はん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。三二己
の御子を惜まずして我ら衆のために付し給ひし者は、などか之にそ
へて萬物を我らに賜はざらんや。三三誰か神の選び給へる者を訴へ
ん、神は之を義とし給ふ。三四誰か之を罪に定めん、死にて甦へり
給ひしキリスト・イエスは神の右に在して、我らの爲に執成し給ふな
り。三五我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難
か、迫害か、飢か、裸か、危險か、劍か。三六録して
『汝のために我らは、終日ころされて
屠らるべき羊の如きものとせられたり』

とあるが如し。三七されど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛
したまふ者に頼り、勝ち得て餘あり。三八われ確く信ず、死も生命
も、御使も、權威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、
三九高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・
イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

第九章 一我キリストに在りて眞をいひ虚僞を言はず、二我に大な
る憂あることと心に絶えざる痛あることとを、我が良心も聖靈に
よりて證す。三もし我が兄弟わが骨肉の爲にならんには、我みづか
ら詛はれてキリストに棄てらるるも亦ねがふ所なり。四彼等はイス
ラエル人にして、彼らには神の子とせられたることと、榮光と、も
ろもろの契約と、授けられたる律法と、禮拜と、もろもろの約束とあ
り。五先祖たちも彼等のものなり、肉によれば、キリストも彼等より
出で給ひたり。キリストは萬物の上にあり、永遠に讃むべき神なり、
アァメン。六それ神の言は廢りたるに非ず。イスラエルより出づる
者みなイスラエルなるに非ず。七また彼等はアブラハムの裔なればと

て皆その子たるに非ず『イサクより出づる者は、なんぢの裔と稱へら
るべし』とあり。八即ち肉の子らは神の子らにあらず、ただ約束の
子等のみ其の裔と認めらるるなり。九約束の御言は是なり、曰く『時
ふたたび巡り來らば、我きたりてサラに男子あらん』と。一〇然のみ
ならず、レベカも我らの先祖イサク一人によりて孕りたる時、一一
その子いまだ生れず、善も惡もなさぬ間に、神の選の御旨は動かず、
一二行爲によらで召す者によらん爲に『兄は次弟に事ふべし』とレベ
カに宣へり。一三『われヤコブを愛しエザウを憎めり』と録されたる
如し。一四さらば何をか言はん、神には不義あるか。決して然らず。
一五モーセに言ひ給ふ『われ憐まんとする者をあはれみ、慈悲を施
さんとする者に慈悲を施すべし』と。一六されば欲する者にも由ら
ず、走る者にも由らず、ただ憐みたまふ神に由るなり。一七パロに
つきて聖書に言ひ給ふ『わが汝を起したるは此の爲なり、即ち我
が能力を汝によりて顯し、且わが名の全世界に傳へられん爲なり』
と。一八されば神はその憐まんと欲する者を憐み、その頑固にせん

と欲する者を頑固にし給ふなり。
一九さらば汝あるいは我に言はん『神なんぞなほ人を咎め給ふか、誰かその御定に悖る者あらん』
二〇ああ人よ、なんぢ誰なれば神に言ひ逆ふか、造られしもの造りたる者に對ひて『なんぢ何ぞ我を斯く造りし』と言ふべきか。
二一陶工は同じ土塊をもて、此を貴きに用ふる器とし、彼を賤しきに用ふる器とするの權なからんや。
二二もし神、怒をあらはし權力を示さんと思しつつも、なほ大なる寛容をもて、滅亡に備れる怒の器を忍び、
二三また光榮のために預じめ備へ給ひし憐憫の器に對ひて、その榮光の富を示さんとし給ひしならば如何に。
二四この憐憫の器は我等にして、ユダヤ人の中よりのみならず、異邦人の中よりも召し給ひしものなり。
二五ホゼヤの書に
『我わが民たらざる者を我が民と呼び、
愛せられざる者を愛せらるる者と呼ばん、
二六「なんぢら我が民にあらず」と言ひし處にて、
彼らは活ける神の子と呼ばるべし』

と宣へる如し。二七イザヤもイスラエルに就きて叫べり『イスラエ
ルの子孫の數は海の砂のごとくなりとも、救はるるはただ殘の者の
みならん。二八主、地の上に御言をなし了へ、これを遂げ、これを速
かにし給はん』二九また
　『萬軍の主われらに裔を遺し給はずば、
　我等ソドムの如くになり、ゴモラと等しかりしならん』
とイザヤの預言せしが如し。三〇然らば何をか言はん、義を追ひ求め
ざりし異邦人は義を得たり、即ち信仰による義なり。三一イスラエ
ルは義の律法を追ひ求めたれど、その律法に到らざりき。三二何の故
か、かれらは信仰によらず、行爲によりて追ひ求めたる故なり。彼ら
は躓く石に躓きたり。三三錄して
　『視よ、我つまづく石さまたぐる岩をシオンに置く、
　之に依頼む者は辱しめられじ』
とあるが如し。

第一〇章一兄弟よ、わが心のねがひ、神に對する祈は、彼らの救

はれんことなり。二われ彼らが神のために熱心なることを證す、さ
れど其の熱心は知識によらざるなり。三それは神の義を知らず、己
の義を立てんとして、神の義に服はざればなり。四キリストは凡て
信ずる者の義とせられん爲に律法の終となり給へり。五モーセは、
律法による義をおこなふ人は之によりて生くべしと録したり。六さ
れど信仰による義は斯くいふ『なんぢ心に「誰か天に昇らん」と言
ふなかれ』と。七これキリストを引下さんとするなり『また「たれか
底なき所に下らん」と言ふなかれ』と。是キリストを死人の中より
引上げんとするなり。八さらば何と言ふか『御言はなんぢに近し、な
んぢの口にあり、汝の心にあり』と。これ我らが宣ぶる信仰の言
なり。九即ち、なんぢ口にてイエスを主と言ひあらはし、心にて神
の之を死人の中より甦へらせ給ひしことを信ぜば、救はるべし。一
〇それ人は心に信じて義とせられ、口に言ひあらはして救はるるな
り。一一聖書にいふ『すべて彼を信ずる者は辱しめられじ』と。一二
ユダヤ人とギリシヤ人との區別なし、同一の主は萬民の主にましまし

て、凡て呼び求むる者に對して豊なり。一三『すべて主の御名を呼
び求むる者は救はるべし』とあればなり。一四然れど未だ信ぜぬ者を
爭で呼び求むることをせん、未だ聽かぬ者を爭で信ずることをせん、
宣傳ふる者なくば爭で聽くことをせん。一五遣されずば爭で宣傳ふ
ることをせん『ああ美しきかな、善き事を告ぐる者の足よ』と録さ
れたる如し。一六されど、みな福音に從ひしにはあらず、イザヤい
ふ『主よ、われらに聞きたる言を誰か信ぜし』一七斯く信仰は聞く
により、聞くはキリストの言による。一八されど我いふ、彼ら聞え
ざりしか、然らず

『その聲は全地にゆきわたり、
其の言は世界の極にまで及べり』

一九我また言ふ、イスラエルは知らざりしか、先づモーセ言ふ『われ
民ならぬ者をもて汝らに嫉を起させ、愚なる民をもて汝らを怒
らせん』二〇またイザヤ憚らずして言ふ

『我を求めざる者に、われ見出され、

我を尋ねざる者に我あらはれたり』
二更にイスラエルに就きては『われ服はずして言ひさからふ民に、
終日手を伸べたり』と云へり。
第一一章一されば我いふ、神はその民を棄て給ひしか。決して然ら
ず。我もイスラエル人にしてアブラハムの裔ベニヤミンの族の者な
り。二神はその預じめ知り給ひし民を棄て給ひしにあらず。汝らエ
リヤに就きて聖書に云へることを知らぬか、彼イスラエルを神に訴
へて言ふ、三『主よ、彼らは汝の預言者たちを殺し、なんぢの祭壇を
毀ち、我ひとり遺りたるに、亦わが生命をも求めんとするなり』と。
四然るに御答は何と云へるか『われバアルに膝を屈めぬ者、七千人を
我がために遺し置けり』と。五斯くのごとく今もなほ恩恵の選によ
りて遺れる者あり。六もし恩恵によるとせば、もはや行爲によるにあ
らず。然らずば恩恵はもはや恩恵たらざるべし。七さらば如何に、イ
スラエルはその求むる所を得ず、選ばれたる者は之を得たり、その
他の者は鈍くせられたり。八『神は今日に至るまで、彼らに眠れる心

、見えぬ目、聞えぬ耳を與へ給へり』と録されたるが如し。九ダビデ
も亦いふ
『かれらの食卓は罠となれ、網となれ、
つまづきとなれ、報となれ、
一〇その眼は眩みて見えずなれ、
常にその背を屈めしめ給へ』
一一されば我いふ、彼らの躓きしは倒れんが爲なりや。決して然ら
ず、反つて其の落度によりて救は異邦人に及べり、これイスラエル
を勵まさん爲なり。一二もし彼らの落度、世の富となり、その衰微、
異邦人の富となりたらんには、まして彼らの數滿つるに於てをや。一
三われ異邦人なる汝等にいふ、我は異邦人の使徒たるによりて己が
職を重んず。一四これ或は我が骨肉の者を勵まし、その中の幾許か
を救はん爲なり。一五もし彼らの棄てらるること世の平和となりたら
んには、其の受け納れらるるは、死人の中より活くると等しからず
や。一六もし初穗の粉潔くば、パンの團塊も潔く、樹の根潔くば、其

の枝も潔からん。一七若しオリブの幾許の枝きり落されて野のオリブ
なる汝、その中に接がれ、共にその樹の液汁ある根に與らば、一八
かの枝に對ひて誇るな、たとひ誇るとも汝は根を支へず、根は反つ
て汝を支ふるなり。一九なんぢ或は言はん『枝の折られしは我が接
がれん爲なり』と。二〇實に然り、彼らは不信によりて折られ、汝
は信仰によりて立てるなり、高ぶりたる思をもたず、反つて懼れよ。
二一もし神、原樹の枝を惜み給はざりしならば、汝をも惜み給はじ。
二二神の仁慈と、その嚴肅とを見よ。嚴肅は倒れし者にあり、仁慈は
その仁慈に止る汝にあり、若しその仁慈に止らずば、汝も切り取
らるべし。二三彼らも若し不信に止らずば、接がるることあらん、神
は再び彼らを接ぎ得給ふなり。二四なんぢ生來の野のオリブより切
り取られ、その生來に悖りて善きオリブに接がれたらんには、まして
原樹のままなる枝は己がオリブに接がれざらんや。二五兄弟よ、わ
れ汝らが自己を聰しとする事なからん爲に、この奧義を知らざるを
欲せず、即ち幾許のイスラエルの鈍くなれるは、異邦人の入り來り

て數滿つるに及ぶ時までなり。二六かくしてイスラエルは悉とく救
はれん。録して
『救ふ者シオンより出で來りて、
ヤコブより不虔を取り除かん、
二七われその罪を除くときに
彼らに立つる我が契約は是なり』
とあるが如し。二八福音につきて云へば、汝等のために彼らは敵と
せられ、選につきて云へば、先祖たちの爲に彼らは愛せらるるなり。
二九それ神の賜物と召とは變ることなし。三〇汝ら前には神に從は
ざりしが、今は彼らの不順によりて憐まれたる如く、三一彼らも汝
らの受くる憐憫によりて憐まれん爲に、今は從はざるなり。三二神
は凡ての人を憐まんために、凡ての人を不順の中に取籠め給ひたり。
三三ああ神の智慧と知識との富は深いかな、その審判は測り難く、そ
の途は尋ね難し。
三四『たれか主の心を知りし、誰かその議士となりし。

三五たれか先づ主に與へて其の報を受けんや』
三六これ凡ての物は神より出で、神によりて成り、神に歸すればなり、
榮光とこしへに神にあれ。アァメン。

第一二章一されば兄弟よ、われ神のもろもろの慈悲によりて汝ら
に勸む、己が身を神の悅びたまふ潔き活ける供物として獻げよ、こ
れ靈の祭なり。二又この世に效ふな、神の御意の善にして悅ぶべく、
かつ全きことを辨へ知らんために、心を更へて新にせよ。三われ
與へられし恩惠によりて汝等おのおのに告ぐ、思ふべき所を超えて
自己を高しとすな。神のおのおのに分ち給ひし信仰の量にしたがひ
愼みて思ふべし。四人は一つ體におほくの肢あれども、凡ての肢そ
の運用を同じうせぬ如く、五我らも多くあれど、キリストに在りて一
つ體にして、各人たがひに肢たるなり。六われらが有てる賜物はお
のおの與へられし恩惠によりて異なる故に、或は預言あらば信仰の
量にしたがひて預言をなし、七或は務あらば務をなし、或は教
をなす者は教をなし、八或は勸をなす者は勸をなし、施す者は

をしみなく施し、治むる者は心を盡して治め、憐憫をなす者は喜
びて憐憫をなすべし。九愛には虚僞あらざれ、惡はにくみ、善はした
しみ、一〇兄弟の愛をもて互に愛しみ、禮儀をもて相讓り、一一勤
めて怠らず、心を熱くし、主につかへ、一二望みて喜び、患難にた
へ、祈を恆にし、一三聖徒の缺乏を賑し、旅人を懇ろに待せ、一四
汝らを責むる者を祝し、これを祝して詛ふな。一五喜ぶ者と共によ
ろこび、泣く者と共になけ。一六相互に心を同じうし、高ぶりたる
思をなさず、反って卑きに附け。なんぢら己を聰しとすな。一七惡
をもて惡に報いず、凡ての人のまへに善からんことを圖り、一八汝
らの爲し得るかぎり力めて凡ての人と相和げ。一九愛する者よ、自
ら復讐すな、ただ神の怒に任せまつれ。錄して『主いひ給ふ、復讐
するは我にあり、我これに報いん』とあり。二〇『もし汝の仇飢ゑ
なば之に食はせ、渇かば之に飮ませよ、なんぢ斯するは熱き火を彼の
頭に積むなり』二一惡に勝たるることなく、善をもて惡に勝て。

第一三章一凡ての人、上にある權威に服ふべし。それは神によらぬ

權威なく、あらゆる權威は神によりて立てらる。二この故に權威にさ
からふ者は神の定に悖るなり、悖る者は自らその審判を招かん。三
長たる者は善き業の懼にあらず、惡しき業の懼なり、なんぢ權威を
懼れざらんとするか、善をなせ、然らば彼より譽を得ん。四かれは
汝を益せんための神の役者なり。然れど惡をなさば懼れよ、彼は徒
らに劍をおびず、神の役者にして、惡をなす者に怒をもて報ゆる
なり。五然れば服はざるべからず、啻に怒の爲のみならず、良心
のためなり。六また之がために汝ら貢を納む、彼らは神の仕人に
して此の職に勵むなり。七汝等その負債をおのおのに償へ、貢を
受くべき者に貢をさめ、税を受くべき者に税をさめ、畏るべき
者をおそれ、尊ぶべき者をたふとべ。八汝等たがひに愛を負ふのほ
か何をも人に負ふな。人を愛する者は律法を全うするなり。九それ
『姦淫する勿れ、殺すなかれ、盗むなかれ、貪るなかれ』と云へるこ
の他なほ誡命ありとも『おのれの如く隣を愛すべし』といふ言の中
にみな籠るなり。一〇愛は隣を害はず、この故に愛は律法の完全な

り。一一なんぢら時を知る故に、いよいよ然なすべし。今は眠より覺
むべき時なり。始めて信ぜし時よりも今は我らの救近ければなり。
一二夜ふけて日近づきぬ、然れば我ら暗黒の業をすてて光明の甲を
著るべし。一三晝のごとく正しく歩みて宴樂・醉酒に、淫樂・好色
に、爭鬪・嫉妬に歩むべきに非ず。一四ただ汝ら主イエス・キリス
トを衣よ、肉の慾のために備すな。

第一四章一なんぢら信仰の弱き者を容れよ、その思ふところを詰
るな。二或人は凡ての物を食ふを可しと信じ、弱き人はただ野菜を食
ふ。三食ふ者は食はぬ者を蔑すべからず、食はぬ者は食ふ者を審くべ
からず、神は彼を容れ給へばなり。四なんぢ如何なる者なれば、他人
の僕を審くか、彼が立つも倒るるも其の主人に由れり。彼は必ず
立てられん、主は能く之を立たせ給ふべし。五或人は此の日を彼の日
に勝ると思ひ、或人は凡ての日を等しとおもふ、各人おのが心の中
に確く定むべし。六日を重んずる者は主のために之を重んず。食ふ者
は主のために食ふ、これ神に感謝すればなり。食はぬ者も主のため

に食はず、かつ神に感謝するなり。七我等のうち己のために生ける
者なく、己のために死ぬる者なし。八われら生くるも主のために生
き、死ぬるも主のために死ぬ。然れば生くるも死ぬるも我らは主の
有なり。九それキリストの死にて復生き給ひしは、死にたる者と生け
る者との主とならん爲なり。一〇なんぢ何ぞその兄弟を審くか、汝
なんぞ其の兄弟を蔑するか、我等はみな神の審判の座の前に立つべ
し。一一録して

『主いひ給ふ、我は生くるなり、
凡ての膝はわが前に屈み、
凡ての舌は神を讃め稱へん』

とあり。一二我等おのおの神のまへに己の事を陳ぶべし。一三されば
今より後、われら互に審くべからず、むしろ兄弟のまへに妨碍また
は躓物を置かぬように心を決めよ。一四われ如何なる物も自ら潔か
らぬ事なきを主イエスに在りて知り、かつ確く信ず。ただ潔からずと
思ふ人にのみ潔からぬなり。一五もし食物によりて兄弟を憂ひしめ

ば、汝は愛によりて歩まざるなり、キリストの代りて死に給ひし人
を、汝の食物によりて亡すな。一六汝らの善きことの譏られぬよ
うにせよ。一七それ神の國は飲食にあらず、義と平和と聖靈によれ
る歡喜とに在るなり。一八かくしてキリストに事ふる者は神に悦ば
れ、人々に善しとせらるるなり。一九されば我ら平和のことと互に
徳を建つる事とを追ひ求むべし。二〇なんぢ食物のために神の御業
を毀つな。凡ての物は潔し、されど之を食ひて人を躓かする者には
惡とならん。二一肉を食はず、葡萄酒を飲まず、その他なんぢの兄弟
を躓かする事をせぬは善し。二二なんぢの有てる信仰を己みづから
神の前に保て。善しとする所につきて自ら咎めなき者は幸福なり。
二三疑ひつつ食ふ者は罪せらる。これ信仰によらぬ故なり、凡て信仰
によらぬ事は罪なり。

第一五章一われら強き者はおのれを喜ばせずして、力なき者の
弱を負ふべし。二おのおの隣人の徳を建てん爲に、その益を圖りて
之を喜ばすべし。三キリストだに己を喜ばせ給はざりき。録して

『なんぢを謗る者の謗は我に及べり』とあるが如し。四夙くより録さ
れたる所は、みな我らの教訓のために録ししものにして、聖書の忍耐
と慰安とによりて希望を保たせんとてなり。五願はくは忍耐と慰安と
の神、なんぢらをしてキリスト・イエスに效ひ、互に思を同じう
せしめ給はん事を。六これ汝らが心を一つにし口を一つにして、我
らの主イエス・キリストの父なる神を崇めん爲なり。七此の故にキリ
スト汝らを容れ給ひしごとく、汝らも互に相容れて神の榮光を
彰すべし。八われ言ふ、キリストは神の眞理のために割禮の役者と
なり給へり。これ先祖たちの蒙りし約束を堅うし給はん爲、九また
異邦人も憐憫によりて神を崇めんためなり。録して

『この故に、われ異邦人の中にて
汝を讃めたたへ、
又なんぢの名を謳はん』

とあるが如し。一〇また曰く
『異邦人よ、主の民と共に喜べ』

一一又いはく
『もろもろの國人よ、主を讃め奉れ、
もろもろの民よ、主を稱へ奉れ』
一二又イザヤ言ふ
『エッサイの蘖生じ、
異邦人を治むるもの興らん。
異邦人は彼に望をおかん』
一三願はくは希望の神、信仰より出づる凡ての喜悦と平安とを汝ら
に滿たしめ、聖靈の能力によりて希望を豐ならしめ給はんことを。
一四わが兄弟よ、われは汝らが自ら善に滿ち、もろもろの知識に滿
ちて互に訓戒し得ることを確く信ず。一五されど我なほ汝らに憶ひ
出させん爲に、ここかしこ少しく憚らずして書きたる所あり、これ
神の我に賜ひたる恩惠に因る。一六即ち異邦人のためにキリスト・イ
エスの仕人となり、神の福音につきて祭司の職をなす。これ異邦人
の聖靈によりて潔められ、御心に適ふ献物とならん爲なり。一七さ

れば、われ神の事につきては、キリスト・イエスによりて誇る所あ
り。一八我は、キリストの異邦人を服はせん爲に我を用ひて、言と
業と、一九また徴と不思議との能力、および聖靈の能力にて働き給
ひし事のほかは敢へて語らず、エルサレムよりイルリコの地方に到る
まで、　くキリストの福音を充たせり。二〇我は努めて他人の置ゑ
たる基礎のうへに建てじとて、未だキリストの御名の稱へられぬ所
にのみ福音を宣傳へり。二一録して

『未だ彼のことを傳へられざりし者は見、
いまだ聞かざりし者は悟るべし』

とあるが如し。二二この故に、われ汝らに往かんとせしが、しばしば
妨げられたり。二三されど今は此の地方に働くべき處なく、且な
んぢらに往かんことを多年切に望みゐたれば、二四イスパニヤに赴
かんとき立寄りて汝らを見、ほぼ意に滿つるを得てのち汝らに送
られんとを望むなり。二五されど今、聖徒に事へん爲にエルサレムに
往かんとす。二六マケドニアとアカヤとの人々は、エルサレムに在る

聖徒の貧しき者に幾許かの施與をするを善しとせり。二七實に之を善
しとせり、また聖徒に對して斯くする負債あり。異邦人もし彼らの
靈の物に與りたらんには、肉の物をもて彼らに事ふべきなり。二八
されば此の事を成し了へ、この果を付してのち、汝らを歷てイスパ
ニヤに往かん。二九われ汝らに到るときは、キリストの滿ち足れる
祝福をもて到らんことを知る。三〇兄弟よ、我らの主イエス・キリ
ストにより、また御靈の愛によりて汝らに勸む、なんぢらの祈の
うちに、我とともに力を盡して我がために神に祈れ。三一これユダ
ヤにをる從はぬ者の中より我が救はれ、又エルサレムに對する我が
務の聖徒の心に適ひ、三二かつ神の御意により、歡喜をもて汝等
にいたり、共に安んぜん爲なり。三三願はくは平和の神なんぢら衆
と偕に在さんことを、アァメン。

第一六章一我ケンクレヤの教會の執事なる我らの姉妹フィベを汝
らに薦む。二なんぢら主にありて聖徒たるに相應しく彼を容れ、何に
ても其の要する所を助けよ、彼は夙くより多くの人の保護者また我

が保護者たり。三プリスカとアクラとに安否を問へ、彼らはキリスト・
イエスに在る我が同勞者にして、四わが生命のために己の首をも惜
まざりき。彼らに感謝するは、ただ我のみならず、異邦人の諸教會
もまた然り。五又その家にある教會にも安否を問へ。又わが愛する
エパネトに安否を問へ。彼はアジヤにて結べるキリストの初の實な
り。六汝等のために甚く勞せしマリヤに安否を問へ。七我とともに
囚人たりし我が同族アンデロニコとユニアスとに安否を問へ、彼ら
は使徒たちの中に名聲あり、かつ我に先だちてキリストに歸せし者
なり。八主にありて我が愛するアンプリヤに安否を問へ。九キリスト
にある我らの同勞者ウルパノと我が愛するスタキスとに安否を問へ。
一〇キリストに在りて錬達せるアペレに安否を問へ。アリストブロの
家の者に安否を問へ。一一わが同族ヘロデオンに安否を問へ。ナルキ
ソの家なる主に在る者に安否を問へ。一二主に在りて勞せしツルパナ
とツルポサとに安否を問へ。主に在りて甚く勞せし愛するペルシス
に安否を問へ。一三主に在りて選ばれたるルポスと其の母とに安否を

問へ、彼の母は我にもまた母なり。一四アスンクリト、フレゴン、ヘル
メス、パトロバ、ヘルマス及び彼らと偕に在る兄弟たちに安否を問
へ。一五ピロロゴ及びユリヤ、ネレオ及びその姉妹、またオルンパ及び
彼らと偕に在る凡ての聖徒に安否を問へ。一六潔き接吻をもて互に
安否を問へ。キリストの諸教會みな汝らに安否を問ふ。一七兄弟
よ、われ汝らに勸む、おほよそ汝らの學びし教に背きて分離を生
じ、顛躓をおこす者に心して之に遠ざかれ。一八かかる者は我らの
主キリストに事へず、反つて己が腹に事へ、また甘き言と媚諂と
をもて質朴なる人の心を欺くなり。一九汝らの從順は凡ての人
に聞えたれば、我なんぢらの爲に喜べり。而して我が欲する所は、
汝らが善に智く、惡に疏からんことなり。二〇平和の神は速かに
サタンを汝らの足の下に碎き給ふべし。願はくは我らの主イエスの
恩惠、なんぢらと偕に在らんことを。二一わが同勞者テモテ及び我が
同族ルキオ、ヤソン、ソシパテロ汝らに安否を問ふ。二二この書を
書ける我テルテオも主にありて汝らに安否を問ふ。二三我と全教會

との家主ガイオ汝らに安否を問ふ。町の庫司エラストと兄弟ク
ワルトと汝らに安否を問ふ。二四［なし］二五願はくは長き世のあひ
だ隠れたれども、二六今顯れて、永遠の神の命にしたがひ、預言者
たちの書によりて信仰の從順を得しめん爲に、もろもろの國人に
示されたる奥義の默示に循へる我が福音と、イエス・キリストを宣
ぶる事とによりて、汝らを堅うし得る、二七唯一の智き神に、榮光
世々限りなくイエス・キリストに由りて在らんことを、アアメン。

コリント人への前の書

第一章 一神の御意により召されてイエス・キリストの使徒となれる
パウロ及び兄弟ソステネ、二書をコリントに在る神の教會、即ちい
づれの處にありても、我らの主、ただに我等のみならず彼らの主な
るイエス・キリストの名を呼び求むる者とともに、聖徒となるべき召
を蒙り、キリスト・イエスに在りて潔められたる汝らに贈る。三願
はくは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩惠と平安
と汝らに在らんことを。四われ汝らがキリスト・イエスに在りて神
より賜はりし恩惠に就きて、常に神に感謝す。五汝らはキリストに
在りて、諸般のこと即ち凡ての言と凡ての悟とに富みたればなり。
六これキリストの證なんぢらの中に堅うせられたるに因る。七斯く
汝らは凡ての賜物に缺くる所なくして、我らの主イエス・キリスト

の現れ給ふを待てり。八彼は汝らを終まで堅うして、我らの主イ
エス・キリストの日に責むべき所なからしめ給はん。九汝らを召し
て其の子われらの主イエス・キリストの交際に入らしめ給ふ神は眞實
なる哉。一〇兄弟よ、我らの主イエス・キリストの名に頼りて汝ら
に勸む、おのおの語るところを同じうし、分争する事なく、同じ心お
なじ念にて全く一つになるべし。一一わが兄弟よ、クロエの家の
者、なんぢらの中に紛争あることを我に知らせたり。一二即ち汝等
おのおの『我はパウロに屬す』『われはアポロに』『我はケパに』『我は
キリストに』と言ふこれなり。一三キリストは分たる者ならんや、
パウロは汝らの爲に十字架につけられしや、汝らパウロの名に頼り
てバプテスマを受けしや。一四我は感謝す、クリスポとガイオとの他
には、我なんぢらの中の一人にもバプテスマを施さざりしを。一五
是わが名に頼りて汝らがバプテスマを受けしと人の言ふ事なからん
爲なり。一六またステパノの家族にバプテスマを施しし事あり、此
の他には我バプテスマを施しし事ありや知らざるなり。一七そはキ

リストの我を遣し給へるはバプテスマを施させん爲にあらず、福音
を宣傳へしめんとてなり。而して言の智慧をもつてせず、是キリス
トの十字架の虚しくならざらん爲なり。一八それ十字架の言は亡ぶ
る者には愚なれど、救はるる我らには神の能力なり。一九録して、

『われ智者の智慧をほろぼし、
慧き者のさときを空しうせん』

とあればなり。二〇智者いづこにか在る、學者いづこにか在る、この
世の論者いづこにか在る、神は世の智慧をして愚ならしめ給へるに
あらずや。二一世は己の智慧をもて神を知らず（これ神の智慧に適
へるなり）この故に神は宣教の愚をもて、信ずる者を救ふを善しと
し給へり。二二ユダヤ人は徴を請ひ、ギリシヤ人は智慧を求む。二三
されど我らは十字架に釘けられ給ひしキリストを宣傳ふ。これはユ
ダヤ人に躓物となり、異邦人に愚となれど、二四召されたる者には
ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の能力また神の智慧たるキリストな
り。二五神の愚は人よりも智く、神の弱は人よりも強ければなり。

二六兄弟よ、召を蒙れる汝らを見よ、肉によれる智き者おほから
ず、能力ある者おほからず、貴きもの多からず。二七されど神は智
き者を辱しめんとて世の愚なる者を選び、強き者を辱しめんとて
弱き者を選び、二八有る者を亡さんとて世の卑しきもの、輕んぜら
る者、すなわち無きが如き者を選び給へり。二九これ神の前に人の誇
る事なからん爲なり。三〇汝らは神に頼りてキリスト・イエスに在
り、彼は神に立てられて我らの智慧と義と聖と救贖とになり給へり。
三一これ『誇る者は主に頼りて誇るべし』と録されたる如くならん爲
なり。

第二章一兄弟よ、われ曩に汝らに到りしとき、神の證を傳ふる
に言と智慧との優れたるを用ひざりき。二イエス・キリスト及びそ
の十字架に釘けられ給ひし事のほかは、汝らの中にありて何をも知
るまじと心を定めたればなり。三我なんぢらと偕に居りし時に、弱
くかつ懼れ、甚く戰けり。四わが談話も、宣教も、智慧の美しき言
によらずして、御靈と能力との證明によりたり。五これ汝らの信仰

の、人の智慧によらず、神の能力に頼らん爲なり。六されど我らは
成人したる者の中にて智慧を語る。これ此の世の智慧にあらず、又
この世の廢らんとする司たちの智慧にあらず、七我らは奥義を解き
て神の智慧を語る、即ち隠れたる智慧にして、神われらの光榮のた
めに、世の創の先より預じめ定め給ひしものなり。八この世の司
には之を知る者なかりき、もし知らば榮光の主を十字架に釘けざり
しならん。九録して

『神のおのれを愛する者のために備へ給ひし事は、
眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、
人の心いまだ思はざりし所なり』

と有るが如し。一〇されど我らには神これを御靈によりて顯し給へ
り。御靈はすべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。一一
それ人のことは己が中にある靈のほかに誰か知る人あらん、斯くの
ごとく神のことは神の御靈のほかに知る者なし。一二我らの受けし靈
は世の靈にあらず、神より出づる靈なり、是われらに神の賜ひしもの

を知らんためなり。一三又われら之を語るに人の智慧の教ふる言を
用ひず、御靈の教ふる言を用ふ、即ち靈の事に靈の言を當つるな
り。一四性來のままなる人は神の御靈のことを受けず、彼には愚な
る者と見ゆればなり。また之を悟ること能はず、御靈のことは靈に
よりて辨ふべき者なるが故なり。一五されど靈に屬する者は、すべ
ての事をわきまふ、而して己は人に辨へらるる事なし。一六誰か主
の心を知りて主を教ふる者あらんや。然れど我らはキリストの心
を有てり。

第三章 一兄弟よ、われ靈に屬する者に對する如く汝らに語ること
能はず、反つて肉に屬するもの、即ちキリストに在る幼兒に對する
如く語れり。二われ汝らに乳のみ飮ませて堅き食物を與へざりき。
汝等そのとき食ふこと能はざりし故なり。三今もなほ食ふこと能は
ず、今もなほ肉に屬する者なればなり。汝らの中に嫉妬と紛爭とあ
るは、これ肉に屬する者にして世の人の如くに歩むならずや。四或者
は『われパウロに屬す』といひ、或者は『われアポロに屬す』と言

ふ、これ世の人の如くなるにあらずや。五アポロは何者ぞ、パウロは
何者ぞ、彼等はおのおの主の賜ふところに随ひ、汝らをして信ぜ
しめたる役者に過ぎざるなり。六我は植ゑ、アポロは水灌げり、され
ど育てたるは神なり。七されば種うる者も、水灌ぐ者も數ふるに足ら
ず、ただ尊きは育てたまふ神なり。八種うる者も、水灌ぐ者も歸す
る所は一つなれど、各自おのが勞に随ひて其の値を得べし。九我
らは神と共に働く者なり。汝らは神の畠なり、また神の建築物な
り。一〇我は神の賜ひたる恩惠に随ひて、熟錬なる建築師のごとく
基を据ゑたり、而して他の人その上に建つるなり。然れど如何にし
て建つべきか、おのおの心して爲すべし、一一既に置きたる基のほ
かは誰も据うること能はず、この基は即ちイエス・キリストなり。
一二人もし此の基の上に金・銀・寶石・木・草・藁をもつて建てなば、
一三各人の工は顯るべし。かの日これを明かにせん、かの日は火を
もつて顯れ、その火おのおのの工の如何を驗すべければなり。一四
その建つる所の工、もし保たば値を得、一五もし其の工燒けなば損

すべし。然れど己は火より脱れ出づる如くして救はれん。一六汝ら
知らずや、汝らは神の宮にして、神の御靈なんぢらの中に住み給ふ
を。一七人もし神の宮を毀たば神かれを毀ち給はん。それ神の宮は聖
なり、汝らも亦かくの如し。一八誰も自ら欺くな。汝等のうち此
の世にて自ら智しと思ふ者は、智くならんために愚なる者とな
れ。一九そは此の世の智慧は神の前に愚なればなり。録して『彼は
智者をその惡巧によりて捕へ給ふ』二〇また『主は智者の念の虚し
きを知り給ふ』とあるが如し。二一さらば誰も人を誇とすな、萬の
物は汝らの有なればなり。二二或はパウロ、或はアポロ、或はケ
パ、或は世界、あるひは生、あるひは死、あるひは現在のもの、或
は未來のもの、皆なんぢらの有なり。二三汝等はキリストの有、キ
リストは神のものなり。

第四章一人よろしく我らをキリストの役者また神の奥義を掌どる
家司のごとく思ふべし。二さて家司に求むべきは忠實ならん事な
り。三我は汝らに審かれ、或は人の審判によりて審かるることを最

小き事とし、また自らも己を審かず。四我みづから責むべき所あ
るを覺えねど、之に由りて義とせらるる事なければなり。我を審き
たまふ者は主なり。五然れば主の來り給ふまでは時に先だちて審判す
な。主は暗にある隱れたる事を明かにし、心の謀計をあらはし給
はん。その時おのおの神より其の譽を得べし。六兄弟よ、われ汝
等のために此等のことを我とアポロとの上に當てて言へり。これ汝
らが『録されたる所を踰ゆまじき』を我らの事によりて學び、この
人をあげ、かの人を貶して誇らざらん爲なり。七汝をして人と異な
らしむる者は誰ぞ、なんぢの有てる物に何か受けぬ物あるか。もし
受けしならば、何ぞ受けぬごとく誇るか。八なんぢら既に飽き、既に
富めり、我らを差措きて王となれり。われ實に汝らが王たらんこと
を願ふ、われらも共に王たることを得んが爲なり。九我おもふ、神は
使徒たる我らを死に定められし者のごとく、後の者として見せ給へ
り。實に我らは宇宙のもの、即ち御使にも、衆人にも、觀物にせら
れたるなり。一〇我らはキリストのために愚なる者となり、汝らは

キリストに在りて慧き者となれり。我等は弱く汝らは強し、汝ら
は尊く我らは卑し。一一今の時にいたるまで我らは飢ゑ、渇き、ま
た裸となり、また打たれ、定れる住家なく、一二手づから働きて
勞し、罵らるるときは祝し、責めらるるときは忍び、一三譏らるる
ときは勸をなせり。我らは今に至るまで世の塵芥のごとく、萬の
物の垢のごとくせられたり。一四わが斯く書すは汝らを辱しめんと
にあらず、我が愛する子として訓戒せんためなり。一五汝等にはキ
リストに於ける守役一萬ありとも、父は多くあることなし。そはキ
リスト・イエスに在りて福音により汝らを生みたるは、我なればな
り。一六この故に汝らに勸む、我に效ふ者とならんことを。一七之が
ために主にありて忠實なる我が愛子テモテを汝らに遣せり。彼は
我がキリストにありて行ふところ、即ち常に各地の教會に教ふる
所を、汝らに思ひ出さしむべし。一八わが汝らに到ること無しと
して誇る者あり。一九されど主の御意ならば速かに汝等にいたり、
誇る者の言にはあらで、その能力を知らんとす。二〇神の國は言に

あらず、能力にあればなり。二一汝ら何を欲するか、われ笞をもて
到らんか、愛と柔和の心とをもて到らんか。
第五章 一現に聞く所によれば、汝らの中に淫行ありと、而してそ
の淫行は異邦人の中にもなき程にして、或人その父の妻を有てりと云
ふ。二斯くてもなほ汝ら誇ることをなし、かかる行爲をなしし者の
除かれんことを願ひて悲しまざるか。三われ身は汝らを離れ居れど
も、心は偕に在りて其處に居るごとく、かかる事を行ひし者を既に
審きたり。四すなはち汝ら及び我が靈の、我らの主イエスの能力を
もて偕に集らんとき、主イエスの名によりて、五斯くのごとき者を
サタンに付さんとす、是その肉は亡されて、其の靈は主イエスの日
に救はれん爲なり。六汝らの誇は善からず。少しのパン種の、粉の
團塊をみな膨れしむるを知らぬか。七なんぢら新しき團塊とならん
ために舊きパン種を取り除け、汝らはパン種なき者なればなり。夫
われらの過越の羔羊すなはちキリスト既に屠られ給へり、八されば我
らは舊きパン種を用ひず、また惡と邪曲とのパン種を用ひず、眞實と

眞との種なしパンを用ひて祭を行ふべし。九われ前の書にて淫行
の者と交るなと書き贈りしは、一〇此の世の淫行の者、または貪欲
のもの、奪ふ者、または偶像を拜む者と更に交るなと言ふにあらず
(もし然せば世を離れざるを得ず)一一ただ兄弟と稱ふる者の中に、
或は淫行のもの、或は貪欲のもの、或は偶像を拜む者、あるひは
罵るもの、或は酒に醉ふもの、或は奪ふ者あらば、斯かる人と交
ることなく、共に食する事だにすなとの意なり。一二外の者を審く
ことは我の干る所ならんや、汝らの審くは、ただ内の者ならずや。
一三外にある者は神これを審き給ふ。かの惡しき者を汝らの中より
退けよ。

第六章 一汝等のうち互に事あるとき、之を聖徒の前に訴へずし
て、正しからぬ者の前に訴ふることを敢へてする者あらんや。二汝
ら知らぬか、聖徒は世を審くべき者なるを。世もし汝らに審かれん
には、汝ら最小き事を審くに足らぬ者ならんや。三なんぢら知らぬ
か、我らは御使を審くべき者なるを、ましてこの世の事をや。四然る

に汝ら審くべき此の世の事のあるとき、教會にて輕しむる所の者
を審判の座に坐らしむるか。五わが斯く言ふは汝らを辱しめんとて
なり。汝等のうちに兄弟の間のことを審き得る智きもの一人だに
なく、六兄弟は兄弟を、而も不信者の前に訴ふるか。七互に相訴
ふるは既に當しく汝らの失態なり。何故むしろ不義を受けぬか、何
故むしろ欺かれぬか。八然るに汝ら不義をなし、詐欺をなし、兄弟
にも之を爲す。九汝ら知らぬか、正しからぬ者の神の國を嗣ぐこと
なきを。自ら欺くな、淫行のもの、偶像を拜むもの、姦淫をなすも
の、男娼となるもの、男色を行ふ者、一〇盗するもの、貪欲のも
の、酒に醉ふもの、罵るもの、奪ふ者などは、みな神の國を嗣ぐこ
となきなり。一一汝等のうち曩には斯くのごとき者ありしかど、主
イエス・キリストの名により、我らの神の御靈によりて、己を洗ひ
かつ潔められ、かつ義とせらるることを得たり。一二一切のもの我に
可からざるなし、然れど一切のもの益あるにあらず。一切のもの我に
可からざるなし、されど我は何物にも支配せられず、一三食物は腹の

ため、腹は食物のためなり。されど神は之をも彼をも亡し給はん。
身は淫行をなさん爲にあらず、主の爲なり、主はまた身の爲なり。一
四神は既に主を甦へらせ給へり、又その能力をもて我等をも甦へら
せ給はん。一五汝らの身はキリストの肢體なるを知らぬか、然らば
キリストの肢體をとりて遊女の肢體となすべきか、決して然すべか
らず。一六遊女につく者は彼と一つ體となることを知らぬか『二人
のもの一體となるべし』と言ひ給へり。一七主につく者は之と一つ靈
となるなり。一八淫行を避けよ。人のをかす罪はみな身の外にあり、
されど淫行をなす者は己が身を犯すなり。一九汝らの身は、その内
にある神より受けたる聖靈の宮にして、汝らは己の者にあらざる
を知らぬか。二〇汝らは價をもて買はれたる者なり、然らばその身
をもて神の榮光を顯せ。

第七章

一汝らが我に書きおくりし事に就きては、男の女に觸れ
ぬを善しとす。二然れど淫行を免れんために、男はおのおの其の
妻をもち、女はおのおの其の夫を有つべし。三夫はその分を妻に

盡し、妻もまた夫に然すべし。四妻は己が身を支配する權をもたず、
之を持つ者は夫なり。斯くのごとく夫も己が身を支配する權を有た
ず、之を有つ者は妻なり。五相共に拒むな、ただ祈に身を委ぬるた
め合意にて暫く相別れ、後また偕になるは善し。これ汝らが情の
禁じがたきに乘じてサタンの誘ふことなからん爲なり。六されど我
が斯くいふは命ずるにあらず、許すなり。七わが欲する所は、すべ
ての人の我が如くならん事なり。然れど神より各自おのが賜物を受
く、此は此のごとく、彼は彼のごとし。八我は婚姻せぬ者および寡婦
に言ふ。もし我が如くにして居らば、彼等のために善し。九もし自
ら制すること能はずば婚姻すべし、婚姻するは胸の燃ゆるよりも勝
ればなり。一〇われ婚姻したる者に命ず（命ずる者は我にあらず、主
なり）妻は夫と別るべからず。一一もし別るる事あらば、嫁がずし
て居るか、又は夫と和げ。夫もまた妻を去るべからず。一二その
外の人に我いふ（主の言ひ給ふにあらず）もし或兄弟に不信者なる
妻ありて偕に居ることを可しとせば、之を去るな。一三また女に不

信者なる夫ありて偕に居ることを可しとせば、夫を去るな。一四そ
は不信者なる夫は妻によりて潔くなり、不信者なる妻は夫によりて
潔くなりたればなり。然なくば汝らの子供は潔からず、されど今は
潔き者なり。一五不信者みづから離れ去らば、その離るるに任せよ。
斯くのごとき事あらば、兄弟または姉妹、もはや繋がるる所なし。
神の汝らを召し給へるは平和を得させん爲なり。一六妻よ、汝いか
で夫を救ひ得るや否やを知らん。夫よ、汝いかで妻を救ひ得るや
否やを知らん。一七唯おのおの主の分ち賜ふところ、神の召し給ふと
ころに循ひて歩むべし。凡ての教會に我が命ずるは斯くのごとし。
一八割禮ありて召されし者あらんか、その人、割禮を廢つべからず。
割禮なくして召されし者あらんか、その人、割禮を受くべからず。一
九割禮を受くるも受けぬも數ふるに足らず、ただ貴きは神の誡命を
守ることなり。二〇各人その召されし時の状に止るべし。二一なんぢ
奴隷にて召されたるか、之を思ひ煩ふな（もし釋さるることを得ば
ゆるされよ）二二召されて主にある奴隷は、主につける自主の人なり。

斯くのごとく自主にして召されたる者は、キリストの奴隷なり。二三
汝らは價をもて買はれたる者なり。人の奴隷となるな。二四兄弟
よ、おのおの召されし時の状に止りて神と偕に居るべし。二五處女
のことに就きては主の命を受けず、然れど主の憐憫によりて忠實の
者となりたれば、我が意見を告ぐべし。二六われ思ふに、目前の患難
のためには、人その在るが隨にて止るぞ善き。二七なんぢ妻に繋が
るる者なるか、釋くことを求むな。妻に繋がれぬ者なるか、妻を求む
な。二八たとひ妻を娶るとも罪を犯すにはあらず。處女もし嫁ぐとも
罪を犯すにあらず。然れどかかる者はその身、苦難に遭はん、我な
んぢらを苦難に遭はすに忍びず。二九兄弟よ、われ之を言はん、時
は縮れり。されば此よりのち妻を有てる者は有たぬが如く、三〇泣
く者は泣かぬが如く、喜ぶ者は喜ばぬが如く、買ふ者は有たぬが
如く、三一世を用ふる者は用ひ盡さぬが如くすべし。此の世の状態は
過ぎ往くべければなり。三二わが欲する所は汝らが思ひ煩はざら
ん事なり。婚姻せぬ者は如何にして主を喜ばせんと主のことを慮

ぱかり、三三婚姻せし者は如何にして妻を喜ばせんと、世のことを
慮ぱかりて心を分つなり。三四婚姻せぬ女と處女とは身も靈も潔
くならんために主のことを慮ぱかり、婚姻せし者は如何にしてその
夫を喜ばせんと世のことを慮ぱかるなり。三五わが之を言ふは汝
らを益せん爲にして、汝らに絆を置かんとするにあらず、寧ろ汝
らを宣しきに適はせ、餘念なく只管、主に事へしめんとてなり。三六
人もし處女たる己が娘に對すること宣しきに適はずと思ひ、年の頃
もまた過ぎんとし、かつ然せざるを得ずば、心のままに行ふべし。
これ罪を犯すにあらず、婚姻せさすべし。三七されど人もし其の心
を堅くし、止むを得ざる事もなく、又おのが心の隨になすを得て、
その娘を留め置かんと心のうちに定めたらば、然するは善きなり。
三八されば其の娘を嫁がする者の行爲は善し。されど之を嫁がせぬ
者の行爲は更に善し。三九妻は夫の生ける間は繫がるるなり。然れ
ど夫もし死なば、欲するままに嫁ぐ自由を得べし、また主にある者
にのみ適くべし。四〇然れど我が意見にては、その儘に止らば殊に

幸福なり。 我もまた神の御靈に感じたりと思ふ。
第八章一偶像の供物に就きては我等みな知識あることを知る。 知識
は人を誇らしめ、愛は徳を建つ。**二**もし人みづから知れりと思はば、
知るべき程の事をも知らぬなり。**三**されど人もし神を愛せば、その人
、神に知られたるなり。**四**偶像の供物を食ふことに就きては、我ら
偶像の世になき者なるを知り、また唯一の神の外には神なきを知る。
五神と稱ふるもの、或は天に或は地にありて、多くの神、おほくの
主あるが如くなれど、**六**我らには父なる唯一の神あるのみ、萬物これ
より出で、我らも亦これに歸す。また唯一の主イエス・キリストある
のみ、萬物これに由り、我らも亦これに由れり。**七**されど人みな此の
知識あるにあらず、或人は今もなほ偶像に慣れ、偶像の献物として
食する故に、その良心よわくして汚さるるなり。**八**我らを神の前に
立たしむるものは食物にあらず、されば食するも益なく、食せざる
も損なし。**九**されど心して汝らの有てる此の自由を弱き者の躓物と
すな。**一〇**人もし知識ある汝が偶像の宮にて食事するを見んに、そ

の人弱きときは良心そのかされて偶像の献物を食せざらんや。
一一さらばキリストの代りて死に給ひし弱き兄弟は、汝の知識によ
りて亡ぶべし。一二斯くのごとく汝ら兄弟に對して罪を犯し、その
弱き良心を傷めしむるは、キリストに對して罪を犯すなり。一三こ
の故に、もし食物わが兄弟を躓かせんには、兄弟を躓かせぬ爲
に、我は何時までも肉を食はじ。
第九章一我は自主の者ならずや、使徒にあらずや、我らの主イエス
を見しにあらずや、汝らは主に在りて我が業ならずや。二われ他の
人には使徒ならずとも汝らには使徒なり。汝らは主にありて我が
使徒たる職の印なればなり。三われを審く者に對する我が辯明は斯
くのごとし。四我らは飲食する權なきか。五我らは他の使徒たち主
の兄弟たち及びケパのごとく、姉妹たる妻を携ふる權なきか。六た
だ我とバルナバとのみ工を止むる權なきか。七誰か己の財にて兵卒
を務むる者あらんや。誰か葡萄畑を作りてその果を食はぬ者あらん
や。誰か群を牧ひてその乳を飲まぬ者あらんや。八我ただ人の思に

のみ由りて此等のことを言はんや、律法も亦かく言ふにあらずや。九
モーセの律法に『穀物を碾す牛には口籠を繋くべからず』と録した
り。神は牛のために慮ぱかり給へるか、一〇また専ら我等のために
之を言ひ給ひしか、然り、我らのために録されたり。それ耕す者は
望をもて耕し、穀物をこなす者は之に與る望をもて碾すべきな
り。一一もし我ら靈の物を汝らに蒔きしならば、汝らの肉の物を刈
り取るは過分ならんや。一二もし他の人なんぢらに對してこの權あら
んには、まして我らをや。然れど我等はこの權を用ひざりき。唯キ
リストの福音に障碍なきやうに一切のことを忍ぶなり。一三なんぢら
知らぬか、聖なる事を務むる者は宮のものを食し、祭壇に事ふる者
は祭壇のものに與るを。一四斯くのごとく主もまた福音を宣傳ふる
者の福音によりて生活すべきことを定め給へり。一五されど我は此等
のことを一つだに用ひし事なし、また自ら斯くせられんために之を
書き贈るにあらず、斯くせられんよりは寧ろ死ぬるを善しとすれば
なり。誰もわが誇を空しくせざるべし。一六われ福音を宣傳ふとも

誇るべき所なし、已むを得ざるなり。もし福音を宣傳へずば、我は
禍害なるかな。一七若しわれ心より之をなさば報を得ん、たとひ心
ならずとも我はその務を委ねられたり。一八然らば我が報は何ぞ、
福音を宣傳ふるに、人をして費なく福音を得しめ、而も福音により
て我が有てる權を用ひ盡さぬこと是なり。一九われ凡ての人に對して
自主の者なれど、更に多くの人を得んために、自ら凡ての人の奴隷
となれり。二〇我ユダヤ人にはユダヤ人の如くなれり、これユダヤ人
を得んが爲なり。律法の下にある者には――律法の下に我はあらね
ど――律法の下にある者の如くなれり。これ律法の下にある者を得
んが爲なり。二一律法なき者には――われ神に向ひて律法なきにあら
ず、反つてキリストの律法の下にあれど――律法なき者の如くなれ
り、これ律法なき者を得んがためなり。二二弱き者には弱き者となれ
り、これ弱き者を得んためなり。我すべての人には凡ての人の状に
從へり、これ如何にもして幾許かの人を救はんためなり。二三われ
福音のために凡ての事をなす、これ我も共に福音に與らん爲なり。

二四なんぢら知らぬか、馳場を走る者はみな走れども、褒美を得る者
の、ただ一人なるを。汝らも得んために斯く走れ。二五すべて勝を
爭ふ者は何事をも節し愼む、彼らは朽つる冠冕を得んが爲なれど、
我らは朽ちぬ冠冕を得んがために之をなすなり。二六斯く我が走るは
目標なきが如きにあらず、我が拳鬪するは空を撃つが如きにあらず。
二七わが體を打ち擲きて之を服從せしむ。恐らくは他人に宣傳へて
自ら棄てらるる事あらん。

第一〇章 一兄弟よ、我なんぢらが之を知らぬを好まず。即ち我ら
の先祖はみな雲の下にあり、みな海をとほり、二みな雲と海とにてバ
プテスマを受けてモーセにつけり。三而して皆おなじく靈なる食物を
食し、四みな同じく靈なる飲物を飲めり。これ彼らに隨ひし靈なる
岩より飲みたるなり、その岩は即ちキリストなりき。五然れど彼ら
のうち多くは神の御意に適はず、荒野にて亡されたり。六此等のこ
とは我らの鑑にして、彼らが貪りし如く惡を貪らざらん爲なり。
七彼らの中の或者に效ひて偶像を拜する者となるな、即ち『民は坐し

て飲食し立ちて戯る』と録されたり。八又かれらの中の或者に效ひ
て我ら姦淫すべからず、姦淫を行ひしもの一日に二萬三千人死にた
り。九また彼等のうちの或者に效ひて我ら主を試むべからず、主を
試みしもの蛇に亡されたり、一〇又かれらの中の或者に效ひて呟
くな、呟きしもの亡す者に亡されたり。一一彼らが遭へる此等の
ことは鑑となれり、かつ末の世に遭へる我らの訓戒のために録され
たり。一二さらば自ら立てりと思ふ者は倒れぬやうに心せよ。一三
汝らが遭ひし試煉は人の常ならぬはなし。神は眞實なれば、汝らを
耐へ忍ぶこと能はぬほどの試煉に遭はせ給はず。汝らが試煉を耐へ
忍ぶことを得んために之と共に遁るべき道を備へ給はん。一四さらば
我が愛する者よ、偶像を拜することを避けよ。一五され慧き者に言ふ
ごとく言はん、我が言ふところを判斷せよ。一六我らが祝ふところの
祝の酒杯は、これキリストの血に與るにあらずや。我らが擘く所
のパンは、これキリストの體に與るにあらずや。一七パンは一つな
れば、多くの我らも一體なり、皆ともに一つのパンに與るに因る。

一八肉によるイスラエルを視よ、供物を食ふ者は祭壇に與るにあら
ずや。一九さらば我が言ふところは何ぞ、偶像の供物はあるものと
言ふか、また、偶像はあるものと言ふか。二〇否、我は言ふ、異邦人
の供ふる物は神に供ふるにあらず、惡鬼に供ふるなりと。我なんぢ
らが惡鬼と交るを欲せず。二一なんぢら主の酒杯と惡鬼の酒杯とを
兼ね飮むこと能はず。主の食卓と惡鬼の食卓とに兼ね與ること能
はず。二二われら主の妬を惹起さんとするか、我らは主よりも強き
者ならんや。二三一切のもの可からざるなし、然れど一切のもの益あ
るにあらず、一切のもの可からざるなし、されど、一切のもの徳を
建つるにあらず。二四各人おのが益を求むることなく、人の益を求め
よ。二五すべて市場にて賣る物は、良心のために何をも問はずして
食せよ。二六そは地と之に滿つる物とは主の物なればなり。二七もし
不信者に招かれて往かんとせば、凡て汝らの前に置く物を、良心の
ために何をも問はずして食せよ。二八人もし此は犧牲にせし肉なり
と言はば、告げし者のため、また良心のために食すな。二九良心

とは汝の良心にあらず、かの人の良心を言ふなり。何ぞわが自由
を他の人の良心によりて審かるる事をせん。三〇もし感謝して食す
る事をせば、何ぞわが感謝する所のものに就きて譏らるる事をせん。
三一さらば食ふにも飲むにも何事をなすにも、凡て神の榮光を顯す
やうにせよ。三二ユダヤ人にもギリシヤ人にも、また、神の教會に
も躓物となるな。三三我も凡ての事を凡ての人の心に適ふやうに力
め、人々の救はれんために、己の益を求めずして多くの人の益を求
むるなり。

第一一章 一我がキリストに效ふ者なる如く、なんぢら我に效ふ者と
なれ。二汝らは凡ての事につきて我を憶え、且わが傳へし所をその
まま守るに因りて、我なんぢらを譽む。三されど我なんぢらが之を知
らんことを願ふ。凡ての男の頭はキリストなり、女の頭は男な
り、キリストの頭は神なり。四すべて男は祈をなし、預言をなすと
き、頭に物を被るは其の頭を辱しむるなり。五すべて女は祈を
なし、預言をなすとき、頭に物を被らぬは其の頭を辱しむるなり。

これ薙髪と異なる事なし。六女もし物を被らずば、髪をも剪るべし。
されど髪を剪り或は薙ることを女の恥とせば、物を被るべし。七
男は神の像、神の榮光なれば、頭に物を被るべきにあらず、され
ど女は男の光榮なり。八男は女より出でずして、女は男より
出で、九男は女のために造られずして、女は男のために造られた
ればなり。一〇この故に女は御使たちの故によりて頭に權の徽を
戴くべきなり。一一されど主に在りては、女は男に由らざるなく、
男は女に由らざるなし。一二女の男より出でしごとく、男は女
によりて出づ。而して萬物はみな神より出づるなり。一三汝等みづ
から判斷せよ、女の物を被らずして神に祈るは宜しき事なるか。一
四なんぢら自然に知るにあらずや、男もし長き髪あらば恥づべ
きことにして、一五女もし長き髪あらばその光榮なるを。それ
女の髪の毛は被物として賜はりたるなり。一六假令これを抗辯ふ者
ありとも、斯くのごとき例は我らにも神の諸教會にもある事なし。
一七我これらの事を命じて汝らを譽めず。汝らの集ること益を受

けずして損を招けばなり。一八先づ汝らが教會に集るとき分爭あ
りと聞く、われ略これを信ず。一九それは汝等のうちに是とせらる
べき者の現れんために黨派も必ず起るべければなり。二〇なんぢら
一處に集るとき、主の晩餐を食すること能はず。二一食する時
おのおの人に先だちて己の晩餐を食するにより、饑うる者あり、醉
ひ飽ける者あればなり。二二汝ら飮食すべき家なきか、神の教會を
輕んじ、また乏しき者を辱しめんとするか、我なにを言ふべきか、
汝らを譽むべきか、之に就きては譽めぬなり。二三わが汝らに傳へ
しことは主より授けられたるなり。即ち主イエス付され給ふ夜、パ
ンを取り、二四祝して之を擘き、而して言ひ給ふ『これは汝等のため
の我が體なり。我が記念として之を行へ』二五夕餐ののち酒杯をも
前の如くして言ひたまふ『この酒杯は我が血による新しき契約な
り。飮むごとに我が記念として之をおこなへ』二六汝等このパンを
食し、この酒杯を飮むごとに、主の死を示して其の來りたまふ時に
まで及ぶなり。二七されば宣しきに適はずして主のパンを食し、主

の酒杯を飲む者は、主の體と血とを犯すなり。二八人みづから省み
て後、そのパンを食し、その酒杯を飲むべし。二九御體を辨へずし
て飲食する者は、その飲食によりて自ら審判を招くべければなり。
三〇この故に汝等のうちに弱きもの病めるもの多くあり、また眠に
就きたる者も少からず。三一我等もし自ら己を辨へなば審かるる
事なからん。三二されど審かるる事のあるは、我らを世の人とともに
罪に定めじとて、主の懲しめ給ふなり。三三この故に、わが兄弟よ、
食せんとて集るときは互に待ち合せよ。三四もし飢うる者あらば、
汝らの集會の審判を招くこと無からん爲に、己が家にて食すべし。
その他のことは我いたらん時これを定めん。

第一二章

一兄弟よ、靈の賜物に就きては、我なんぢらが知らぬを好
まず。二なんぢら異邦人なりしとき、誘はるるままに物を言はぬ偶像
のもとに導き往かれしは、汝らの知る所なり。三然れば我なんぢ
らに示さん、神の御靈に感じて語る者は、誰も『イエスは詛はるべき
者なり』と言はず、また聖靈に感ぜざれば、誰も『イエスは主なり』

と言ふ能はず。四賜物は殊なれども、御靈は同じ。五務は殊なれど
も、主は同じ。六活動は殊なれども、凡ての人のうちに凡ての活動を
爲したまふ神は同じ。七御靈の顯現をおのおのに賜ひたるは、益を得
させんためなり。八或人は御靈によりて智慧の言を賜はり、或人は
同じ御靈によりて知識の言、九或人は同じ御靈によりて信仰、ある
人は一つ御靈によりて病を醫す賜物、一〇或人は異能ある業、ある人
は預言、ある人は靈を辨へ、或人は異言を言ひ、或人は異言を釋く
能力を賜はる。一一凡て此等のことは同じ一つの御靈の活動にして、
御靈その心に隨ひて各人に分け與へたまふなり。一二體は一つに
して肢は多し、體の肢は多くとも一つの體なるが如く、キリスト
も亦然り。一三我らはユダヤ人・ギリシヤ人・奴隷・自主の別なく、
一體とならん爲に、みな一つ御靈にてバプテスマを受けたり。而し
てみな一つ御靈を飮めり。一四體は一肢より成らず、多くの肢より
成るなり。一五足もし『我は手にあらぬ故に體に屬せず』と云ふと
も、之によりて體に屬せぬにあらず。一六耳もし『それは眼にあら

ぬ故に體に屬せず』と云ふとも、之によりて體に屬せぬにあらず。
一七もし全身、眼ならば、聽くところ何れか。もし全身、聽く所なら
ば、臭ぐところ何れか。一八げに神は御意のままに肢をおのおの體
に置き給へり。一九若しみな一肢ならば、體は何れか。二〇げに肢
は多くあれど、體は一つなり。二一眼は手に對ひて『われ汝を要せ
ず』と言ひ、頭は足に對ひて『われ汝を要せず』と言ふこと能はず。
二二否、からだの中にて最も弱しと見ゆる肢は、反つて必要なり。
二三體のうちにて尊からずと思はるる所に、物を纏ひて殊に之を
尊ぶ。斯く我らの美しからぬ所は、一層すぐれて美しくすれど
も、二四美しき所には、物を纏ふの要なし。神は劣れる所に殊に
尊榮を加へて、人の體を調和したまへり。二五これ體のうちに分爭
なく、肢々一致して互に相顧みんためなり。二六もし一つの肢苦し
まば、もろもろの肢ともに苦しみ、一つの肢尊ばれなば、もろもろ
の肢ともに喜ぶなり。二七乃ち汝らはキリストの體にして各自そ
の肢なり。二八神は第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、その次

に異能ある業、次に病を醫す賜物、補助をなす者、治むる者、異言な
どを教會に置きたまへり。二九是みな使徒ならんや、みな預言者な
らんや、みな教師ならんや、みな異能ある業を行ふ者ならんや。三
〇みな病を醫す賜物を有てる者ならんや、みな異言を語る者ならん
や、みな異言を釋く者ならんや。三一なんぢら優れたる賜物を慕へ、
而して我さらに善き道を示さん。

第一三章
一たとひ我もろもろの國人の言および御使の言を語る
とも、愛なくば鳴る鐘や響く鐃の如し。二假令われ預言する能力あ
り、又すべての奥義と凡ての知識とに達し、また山を移すほどの大
なる信仰ありとも、愛なくば數ふるに足らず。三たとひ我わが財産を
ことごとく施し、又わが體を燒かるる爲に付すとも、愛なくば我
に益なし。四愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、
驕らず、五非禮を行はず、己の利を求めず、憤ほらず、人の惡を
念はず、六不義を喜ばずして、眞理の喜ぶところを喜び、七凡そ
事忍び、おほよそ事信じ、おほよそ事望み、おほよそ事耐ふるなり。

八愛は長久までも絶ゆることなし。然れど預言は廢れ、異言は止み、
知識もまた廢らん。九それ我らの知るところ全からず、我らの預言
も全からず。一〇全き者の來らん時は全からぬもの廢らん。一一わ
れ童子の時は語ることも童子のごとく、思ふことも童子の如く、論ず
る事も童子の如くなりしが、人と成りては童子のことを棄てたり。一
二今われらは鏡をもて見るごとく見るところ朧なり。然れど、かの
時には顏を對せて相見ん。今わが知るところ全からず、然れど、か
の時には我が知られたる如く全く知るべし。一三げに信仰と希望と
愛と此の三つの者は限りなく存らん、而して其のうち最も大なる
は愛なり。

第一四章一愛を追ひ求めよ、また靈の賜物、ことに預言する能力を
慕へ。二異言を語る者は人に語るにあらずして神に語るなり。そは靈
にて奧義を語るとも、誰も悟る者なければなり。三されど預言する者
は人に語りて其の徳を建て、勸をなし、慰安を與ふるなり。四異言を
語る者は己の徳を建て、預言する者は教會の徳を建つ。五われ汝

等がみな異言を語らんことを欲すれど、殊に欲するは預言せん事な
り。異言を語る者、もし釋きて教會の徳を建つるにあらずば、預言す
る者のかた勝るなり。六然らば兄弟よ、我もし汝らに到りて異言を
かたり、或は默示、あるいは知識、あるいは預言、あるいは教をもて
語らずば、何の益かあらん。七生命なくして聲を出すもの、或は笛、
あるいは立琴、その音もし差別なくば、爭で吹くところ彈くところの
何たるを知らん。八ラッパ若し定りなき音を出さば、誰か戰鬪の備
をなさん。九斯くのごとく汝らも舌をもて明かなる言を出さずば、
いかで語るところの何たるを知らん、これ汝等ただ空氣に語るのみ。
一〇世には國語の類おほかれど、一つとして意義あらぬはなし。一
一我もし國語の意義を知らずば、語る者に對して夷人となり、語る
者も我に對して夷人とならん、一二然らば汝らも靈の賜物を慕ふ者
なれば、教會の徳を建つる目的にて賜物の豐ならん事を求めよ。一
三この故に異言を語る者は自ら釋き得んことをも祈るべし。一四我
もし異言をもて祈らば、我が靈は祈るなれど、我が心は果を結ばず。

一五然らば如何にすべきか、我は靈をもて祈り、また心をもて祈ら
ん。我は靈をもて謳ひ、また心をもて謳はん。一六汝もし然せずば、
靈をもて祝するとき、凡人は汝の語ることを知らねば、その感謝に
對し如何にしてアメンと言はんや。一七なんぢの感謝はよし、然れ
ど、その人の徳を建つることなし。一八我なんぢら衆の者よりも多
く異言を語ることを神に感謝す。一九然れど我は教會にて異言をも
て一萬言を語るよりも、寧ろ人を教へんために我が心をもて五言
を語らんことを欲するなり。二〇兄弟よ、智慧に於ては子供となる
な、惡に於ては幼兒となり、智慧に於ては成人となれ。二一律法に録
して『主、宣はく、他し言の民により、他し國人の口唇をもて此の
民に語らん、然れど尚かれらは我に聽かじ』とあり。二二されば異言
は、信者の爲ならで不信者のための徴なり。預言は、不信者の爲な
らで信者のためなり。二三もし全教會一處に集れる時、みな異言
にて語らば、凡人または不信者いり來らんに、汝らを狂へる者と言
はざらんや。二四然れど若しみな預言せば、不信者または凡人の入り

きたるとき、會衆のために自ら責められ、會衆のために是非せ
られ、二五その心の秘密あらはるる故に、伏して神を拜し『神は實に
汝らの中に在す』と言はん。二六兄弟よ、さらば如何にすべきか、
汝らの集る時はおのおの聖歌あり、教あり、默示あり、異言あり、
釋く能力あり、みな徳を建てん爲にすべし。二七もし異言を語る者あ
らば、二人、多くとも三人、順次に語りて一人これを釋くべし。二八
もし釋く者なき時は、教會にては默し、而して己に語り、また神
に語るべし。二九預言者は二人もしくは三人かたり、その他の者はこ
れを辨ふべし。三〇もし坐しをる、他のもの默示を蒙らば、先のも
の默すべし。三一汝らは皆すべての人に學ばせ勸を受けしめんため
に、一人一人預言することを得べければなり。三二また預言者の靈は
預言者に制せらる。三三それ神は亂の神にあらず、平和の神なり。三
四聖徒の諸教會のするごとく、女は教會にて默すべし。彼らは語
ることを許されず。律法に云へるごとく順ふべき者なり。三五何事
か學ばんとする事あらば、家にて己が夫に問ふべし、女の教會に

て語るは恥づべき事なればなり。三六神の言は汝等より出でしか、
また汝等にのみ來りしか。三七人もし自己を預言者とし、或は御靈
に感じたる者と思はば、わが汝らに書きおくる言を主の命なりと
知れ。三八もし知らずば其の知らざるに任せよ。三九されば我が兄弟
よ、預言することを慕ひ、また異言を語ることを禁ずな。四〇凡ての
事、宣しきに適ひ、かつ秩序を守りて行へ。

第一五章 一兄弟よ、曩にわが傳へし福音を更に復なんぢらに示す。
汝らは之を受け、之に賴りて立ちたり。二なんぢら徒らに信ぜずし
て、我が傳へしままを堅く守らば、この福音に由りて救はれん。三わ
が第一に汝らに傳へしは、我が受けし所にして、キリスト聖書に
應じて我らの罪のために死に、四また葬られ、聖書に應じて三日め
に甦へり、五ケパに現れ、後に十二弟子に現れ給ひし事なり。六
次に五百人以上の兄弟に同時にあらはれ給へり。その中には既に
眠りたる者もあれど、多くは今なほ世にあり。七次にヤコブに現れ、
次にすべての使徒に現れ、八最終には月足らぬ者のごとき我にも現

れ給へり。九我は神の教會を迫害したれば、使徒と稱へらるるに足
らぬ者にて、使徒のうち最小き者なり。一〇然るに我が今の如くな
るは、神の恩惠に由るなり。斯くてその賜はりし御惠は空しくなら
ずして、凡ての使徒よりも我は多く働けり。これ我にあらず、我と
偕にある神の恩惠なり。一一されば我にもせよ、彼等にもせよ、宣傳
ふる所はかくの如くにして、汝らは斯くのごとく信じたるなり。一
二キリストは死人の中より甦へり給へりと宣傳ふるに、汝等のうち
に、死人の復活なしと云ふ者のあるは何ぞや。一三もし死人の復活
なくば、キリストもまた甦へり給はざりしならん。一四もしキリス
ト甦へり給はざりしならば、我らの宣教も空しく、汝らの信仰も
また空しからん、一五かつ我らは神の僞證人と認められん。我ら神は
キリストを甦へらせ給へりと證したればなり。もし死人の甦へる
ことなくば、神はキリストを甦へらせ給はざりしならん。一六もし
死人の甦へる事なくば、キリストも甦へり給はざりしならん。一七
若しキリスト甦へり給はざりしならば、汝らの信仰は空しく、汝

等なほ罪に居らん。一八然ればキリストに在りて眠りたる者も亡びし
ならん。一九我等この世にあり、キリストに頼りて空しき望みを懷く
に過ぎずば、我らは凡ての人の中にて最も憫むべき者なり。二〇然
れど正しくキリストは死人の中より甦へり、眠りたる者の初穗とな
り給へり。二一それ人によりて死の來りし如く、死人の復活もまた
人に由りて來れり。二二凡ての人、アダムに由りて死ぬるごとく、凡
ての人、キリストに由りて生くべし。二三而して各人その順序に隨
ふ。まづ初穗なるキリスト、次はその來り給ふときキリストに屬す
る者なり。二四次には終きたらん、その時キリストは、もろもろの
權能・權威・權力を亡して國を父なる神に付し給ふべし。二五彼は
凡ての敵をその足の下に置き給ふまで、王たらざるを得ざるなり。二
六最後の敵なる死もまた亡されん。二七『神は萬の物を彼の足の下
に服はせ給ひ』たればなり。萬の物を彼に服はせたりと宣ふとき
は、萬の物を服はせ給ひし者のその中になきこと明かなり。二八
萬の物かれに服ふときは、子も亦みづから萬の物を己に服はせ

給ひし者に服はん。これ神は萬の物に於て萬の事となり給はん爲
なり。二九もし復活なくば、死人の爲にバプテスマを受くるもの何
をなすか、死人の甦へること全くなくば、死人のためにバプテスマ
を受くるは何の爲ぞ。三〇また我らが何時も危險を冒すは何の爲ぞ。
三一兄弟よ、われらの主イエス・キリストに在りて、汝等につき我
が有てる誇によりて誓ひ、我は日々に死すと言ふ。三二我がエペソ
にて獸と鬪ひしこと、若し人のごとき思にて爲ししならば、何の
益あらんや。死人もし甦へる事なくば『我等いざ飲食せん、明日死
ぬべければなり』三三なんぢら欺かるな、惡しき交際は善き風儀を
害ふなり。三四なんぢら醒めて正しうせよ、罪を犯すな。汝等のう
ちに神を知らぬ者あり、我が斯く言ふは汝等を辱しめんとてなり。
三五されど人あるひは言はん、死人いかにして甦へるべきか、如何な
る體をもて來るべきかと。三六愚なる者よ、なんぢの播く所のもの
先づ死なずば生きず。三七又その播く所のものは後に成るべき體を
播くにあらず、麥にても他の穀にても、ただ種粒のみ。三八然るに神

は御意に隨ひて之に體を予へ、おのおのの種にその體を予へたまふ。
三九凡ての肉、おなじ肉にあらず、人の肉あり、獸の肉あり、鳥の肉
あり、魚の肉あり。四〇天上の體あり、地上の體あり、されど天上の
物の光榮は地上の物と異なり。四一日の光榮あり、月の光榮あり、
星の光榮あり、此の星は彼の星と光榮を異にす。四二死人の復活
もまた斯くのごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦へらせ
られ、四三卑しき物にて播かれ、光榮あるものに甦へらせられ、弱
きものにて播かれ、強きものに甦へらせられ、四四血氣の體にて播
かれ、靈の體に甦へらせられん。血氣の體ある如く、また靈の體あ
り。四五録して、始の人アダムは、活ける者となれるとあるが如し。
而して終のアダムは、生命を與ふる靈となれり。四六靈のものは前
にあらず、反つて血氣のもの前にありて靈のもの後にあり。四七第一
の人は地より出でて土に屬し、第二の人は天より出でたる者なり。四
八この土に屬する者に、すべて土に屬する者は似、この天に屬する者
に、すべて天に屬する者は似るなり。四九我ら土に屬する者の形を

有てるごとく、天に屬する者の形をも有つべし。五〇兄弟よ、われ
之を言はん、血肉は神の國を嗣ぐこと能はず、朽つるものは朽ちぬ
ものを嗣ぐことなし。五一視よ、われ汝らに奧義を告げん、我らは
悉とく眠るにはあらず、五二終のラッパの鳴らん時みな忽ち瞬間
に化せん。ラッパ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦へり、我らは化するな
り。五三そは此の朽つる者は朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬ
ものを著るべければなり。五四此の朽つるものは朽ちぬものを著、こ
の死ぬる者は死なぬものを著んとき『死は勝に呑まれたり』と録され
たる言は成就すべし。五五『死よ、なんぢの勝は何處にかある。死
よ、なんぢの刺は何處にかある』五六死の刺は罪なり、罪の力は律法
なり。五七されど感謝すべきかな、神は我らの主イエス・キリストに
よりて勝を與へたまふ。五八然れば我が愛する兄弟よ、確くして搖
くことなく、常に勵みて主の事を務めよ、汝等その勞の、主にあり
て空しからぬを知ればなり。

第一六章 一聖徒たちの爲にする寄附の事に就きては、汝らも我が

ガラテヤの諸教會に命ぜしごとくせよ。二一週の首の日ごとに、
各人その得る所にしたがひて己が家に貯へ置け、これ我が到らん
とき始めて寄附を集むる事なからん爲なり。三われ到らば、汝らが
選ぶところの人々に添書をあたへ、汝らの惠む物をエルサレムに
携へ往かしめん。四もし我も往くべきならば、彼らは我と共に往く
べし。五我マケドニヤを通らんとすれば、マケドニヤを過ぎて後に
汝らの許にゆかん。六かくて汝らの中に留りゐて、或は冬を過す
こともあらん、是わが何處に往くも汝らに送られん爲なり。七我は
今なんぢらを途の次に見ることを欲せず、主ゆるし給はば、暫く
汝らと偕に留らんことを望む。八われ五旬節まではエペソに留ら
んとす。九そは活動のために大なる門わが前にひらけ、また逆ふ者
も多ければなり。一〇テモテもし到らば、愼みて汝等のうちに懼
なく居らしめよ、彼は我と同じく主の業を務むる者なり。一一されば
誰も之を卑しむることなく、安らかに送りて我が許に來らしめよ、我
かれが兄弟たちと共に來るを待てるなり。一二兄弟アポロに就きて

は、我かれに兄弟たちと共に汝らに到らんことを懇ろに勸めたり
しが、今は往くことを更に欲せず、されど好き機を得ば往くべし。一
三目を覺し、堅く信仰に立ち、雄々しく、かつ剛かれ。一四一切のこと
愛をもて行へ。一五兄弟よ、ステパナの家はアカヤの初穗にして、
彼らが身を委ねて聖徒に事へたることは、汝らの知る所なり。一六
われ汝らに勸む、斯くのごとき人々また凡て之とともに働きて勞
する者に服せよ。一七我ステパナとポルトナトとアカイコとの來るを
喜ぶ。かれらは汝らの居らぬを補ひたればなり。一八彼らは我が
心と汝らの心とを安んじたり、斯くのごとき者を認めよ。一九ア
ジヤの諸教會なんぢらに安否を問ふ。アクラとプリスカ及びその家
の教會、主に在りて懇ろに汝らに安否を問ふ。二〇すべての兄弟
なんぢらに安否を問ふ。なんぢら潔き接吻をもて互に安否を問へ。
二一我パウロ自筆をもて汝らに安否を問ふ。二二もし人、主を愛せず
ば詛はるべし、我らの主きたり給ふ。二三願はくは主イエスの恩惠な
んぢらと偕にあらんことを。二四わが愛はキリスト・イエスに在りて

汝等すべての者とともに在るなり。

コリント人への後の書

第一章 一 神の御意によりてイエス・キリストの使徒となれるパウ
ロ及び兄弟テモテ、書をコリントに在る神の教會、ならびにアカ
ヤ全國に在る凡ての聖徒に贈る。
二 願はくは我らの父なる神および主
イエス・キリストより賜ふ恩惠と平安と汝らに在らんことを。
三 讃
むべき哉、われらの主イエス・キリストの父なる神、即ちもろもろ
の慈悲の父、一切の慰安の神、
四 われらを凡ての患難のうちに慰め、
我等をして自ら神に慰めらるる慰安をもて、諸般の患難に居る者
を慰むることを得しめ給ふ。
五 そはキリストの苦難われらに溢るる
如く、我らの慰安も亦キリストによりて溢るればなり。
六 我ら或は
患難を受くるも汝らの慰安と救とのため、或は慰安を受くるも汝
らの慰安の爲にして、その慰安は汝らの中に働きて、我らが受くる

如き苦難を忍ぶことを得しむるなり。七かくて汝らが苦難に與るご
とく、また慰安にも與ることを知れば、汝らに對する我らの望は
堅し。八兄弟よ、我らがアジヤにて遭ひし患難を汝らの知らざるを
好まず、すなはち壓せらるること甚だしく、力耐へがたくして、生
くる望を失ひ、九心のうちに死を期するに至れり。これ己を頼ま
ずして、死人を甦へらせ給ふ神を頼まん爲なり。一〇神は斯かる死
より我らを救ひ給へり、また救ひ給はん。我らは後もなほ救ひ給はん
ことを望みて神を頼み、一一汝らも我らの爲に祈をもて助く。これ
多くの人の願望によりて賜はる恩惠を、多くの人の感謝するに至らん
爲なり。一二われら世に在りて殊に汝らに對し、神の清淨と眞實と
をもて、また肉の智慧によらず、神の恩惠によりて行ひし事は、我
らの良心の證する所にして、我らの誇なり。一三我らの書き贈る
ことは、汝らの讀むところ知る所の他ならず。一四而して我は汝
等のうち或者の既に知れる如く、我らの主イエスの日に我らが汝ら
の誇、なんぢらが我らの誇たるを終まで知らんことを望む。
一五

この確信をもて先づ汝らに到り、再び益を得させ、一六かくて汝
らを經てマケドニアに往き、マケドニアより更に復なんぢらに到り、
而して汝らに送られてユダヤに往かんことを定めたり。一七かく定
めたるは浮きたる事ならんや。わが定むるところ肉によりて定め、然
り然り、否々と言ふが如きこと有らんや。一八神は眞實にて在せば、
我らが汝らに對する言も、然りまた否と言ふが如きにあらず。一九
我ら即ちパウロ、シルワノ、テモテが汝らの中に傳へたる神の子キ
リスト・イエスは、然りまた否と言ふが如き者にあらず、然りと言ふ
ことは彼によりて成りたるなり。二〇神の約束は多くありとも、然り
と言ふことは彼によりて成りたれば、彼によりてアアメンあり、我
ら神に榮光を歸するに至る。二一汝らと共に我らをキリストに堅く
し、且われらに膏を注ぎ給ひし者は神なり。二二神はまた我らに印
し、保證として御靈を我らの心に賜へり。二三我わが靈魂を賭けて
神の證を求む、我がコリントに往くことの遲きは、汝らを寛うせん
爲なり。二四されど我らは汝らの信仰を掌どる者にあらず、汝ら

の喜悦を助くる者なり、汝らは信仰によりて立てばなり。

第二章 一われ再び憂をもて汝らに到らじと自ら定めたり。二我
もし汝らを憂ひしめば、我が憂ひしむる者のほかに誰か我を喜ば
せんや。三われ前に此の事を書き贈りしは、我が到らんとき、我を
喜ばすべきもの、反つて我を憂ひしむる事のなからん爲にして、汝
らは皆わが喜悦を喜悦とするを信ずるに因りてなり。四われ大なる
患難と心の悲哀とにより、多くの涙をもて汝らに書き贈れり。こ
れ汝らを憂ひしめんとにあらず、我が汝らに對する愛の溢るるばか
りなるを知らしめん爲なり。五もし憂ひしむる人あらば、我を憂ひし
むるにあらず、幾許か汝ら衆を憂ひしむるなり。(幾許かと云へる
は、われ激しく責むるを好まぬ故なり)六かかる人の多數の者より受
けたる懲罰は足れり。七されば汝ら寧ろ彼を恕し、かつ慰めよ、恐
らくは其の人、甚だしき愁に沈まん。八この故に我なんぢらの愛を
彼に顯さんことを勸む。九前に書き贈りしは、凡ての事につきて汝
らが從順なりや否やをも試み知らん爲なり。一〇なんぢら何事に

ても人を恕さば、我も亦これを恕さん、われ恕したる事あらば、汝
らの爲にキリストの前に恕したるなり。一一これサタンに欺かれざ
らん爲なり、我等はその詭謀を知らざるにあらず。一二我キリスト
の福音の爲にトロアスに到り、主われに門を開き給ひたれど、一三我
が兄弟テトスに逢はぬによりて心に平安をえず、彼處の者に別を
告げてマケドニヤに往けり。一四感謝すべきかな、神は何時にてもキ
リストにより、我らを執へて凱旋し、何處にても我等によりてキリ
ストを知る知識の馨をあらはし給ふ。一五救はるる者にも亡ぶる者
にも、我らは神に對してキリストの香しき馨なり。一六この人には
死よりいづる馨となりて死に至らしめ、かの人には生命より出づる
馨となりて生命に至らしむ。誰か此の任に耐へんや。一七我らは多
くの人のごとく神の言を曲げず、眞實により神による者のごとく、
神の前にキリストに在りて語るなり。

第三章

一我等ふたたび己を薦め始めんや、また或人のごとく人の
推薦の書を汝らに齎し、また汝等より受くることを要せんや。二

汝らは即ち我らの書にして我らの心に録され、又すべての人に知
られ、かつ讀まるるなり。三汝らは明かに我らの職によりて書か
れたるキリストの書なり。而も墨にあらで活ける神の御靈にて録さ
れ、石碑にあらで心の肉碑に録されたるなり。四我らはキリストに
より、神に對して斯かる確信あり。五されど己は何事をも自ら定む
るに足らず、定むるに足るは神によるなり。六神は我らを新約の役者
となるに足らしめ給へり、儀文の役者にあらず、靈の役者なり。そは
儀文は殺し、靈は活せばなり。七石に彫り書されたる死の法の職に
も光榮ありて、イスラエルの子等はそのやがて消ゆべきモーセの顔
の光榮を見つめ得ざりし程ならんには、八まして靈の職は光榮な
からんや。九罪を定むる職もし光榮あらんには、まして義とする職
は光榮に溢れざらんや。一〇もと光榮ありし者も更に勝れる光榮
に比ぶれば、光榮なき者となれり。一一もし消ゆべき者に光榮あり
しならんには、まして永存ふるものに光榮なからんや。一二我らは斯
くのごとき希望を有つゆゑに、更に憶せずして言ひ、一三又モーセの

如くせざるなり。彼は消ゆべき者の消えゆくをイスラエルの子らに見
せぬために、面を顔におほひたり。一四然れど彼らの心鈍くなれ
り。キリストによりて面の廢るべきを悟らねば、今日に至るまで
舊約を讀む時その面なほ存れり。一五今日に至るまでモーセの書
を讀むとき、面は彼らの心のうへに置かれたり。一六然れど主に
歸する時、その面は取り除かるべし。一七主は即ち御靈なり、主
の御靈のある所には自由あり。一八我等はみな面なくして、鏡
に映るごとく主の榮光を見、榮光より榮光にすすみ、主たる御靈
によりて主と同じ像に化するなり。

第四章 一この故に我ら憐憫を蒙りて此の職を受けたれば、落膽せ
ず、二恥づべき隱れたる事をすて、惡巧に歩まず、神の言をみださ
ず、眞理を顯して神の前に己を凡ての人の良心に薦むるなり。三
もし我らの福音おほはれ居らば、亡ぶる者に覆はれをるなり。四こ
の世の神は此等の不信者の心を暗まして、神の像なるキリストの
榮光の福音の光を照さざらしめたり。五我らは己の事を宣べず、

ただキリスト・イエスの主たる事と、我らがイエスのために汝らの
僕たる事とを宣ぶ。六光、暗より照り出でよと宣ひし神は、イエ
ス・キリストの顔にある神の榮光を知る知識を輝かしめんために、
我らの心を照し給へるなり。七我等この寶を土の器に有てり、こ
れ優れて大なる能力の我等より出でずして、神より出づることの顯
れんためなり。八われら四方より患難を受くれども窮せず、爲ん方つ
くれども希望を失はず、九責めらるれども棄てられず、倒さるれど
も亡びず、一〇常にイエスの死を我らの身に負ふ。これイエスの生命
の我らの身にあらはれん爲なり。一一それ我ら生ける者の常にイエス
のため死に付さるるは、イエスの生命の我らの死ぬべき肉體にあら
はれん爲なり。一二さらば死は我等のうちに働き、生命は汝等のう
ちに働くなり。一三録して『われ信ずるによりて語れり』とあるご
とく、我等にも同じ信仰の靈あり、信ずるに因りて語るなり。一四こ
れ主イエスを甦へらせ給ひし者の我等をもイエスと共に甦へらせ、
汝らと共に立たしめ給ふことを我ら知ればなり。一五凡ての事は汝

らの益なり。これ多くの人によりて御恵の増し加はり、感謝いや増
りて神の榮光の顯れん爲なり。一六この故に我らは落膽せず、我ら
が外なる人は壞るれども、内なる人は日々に新なり。一七それ我ら
が受くる暫くの輕き患難は、極めて大なる永遠の重き光榮を得し
むるなり。一八我らの顧みる所は見ゆるものにあらで見えぬものな
ればなり。見ゆるものは暫時にして、見えぬものは永遠に至るなり。

第五章 一我らは知る、我らの幕屋なる地上の家、壞るれば、神の賜
ふ建造物、すなはち天にある、手にて造らぬ、永遠の家あることを。
二我等はその幕屋にありて歎き、天より賜ふ住所をこの上に著んこと
を切に望む。三之を著るときは裸にてある事なからん。四我等この
幕屋にありて重荷を負へる如くに歎く、之を脱がんとにあらで、此
の上に著んことを欲すればなり。これ死ぬべき者の生命に呑まれん
爲なり。五我らを此の事に適ふものとなし、その證として御靈を賜
ひし者は神なり。六この故に我らは常に心強し、かつ身に居るうち
は主より離れ居るを知る、七見ゆる所によらず、信仰によりて歩め

ばなり。八斯く心強し、願ふところは寧ろ身を離れて主と偕に居ら
んことなり。九然れば身に居るも身を離るるも、ただ御心に適はんこ
とを力む。一〇我等はみな必ずキリストの審判の座の前にあらはれ、
善にもあれ惡にもあれ、各人その身になしたる事に随ひて報を受
くべければなり。一一斯く主の畏るべきを知るによりて人々に説き勸
む。われら既に神に知られたり、亦なんぢらの良心にも知られたり
と思ふ。一二我等は再び己を汝らに薦むるにあらず、ただ我等を
もて誇とする機を汝らに與へ、心によらず外貌によりて誇る人々
に答ふることを得させんとするなり。一三我等もし心狂へるならば、
神の爲なり、心慥ならば、汝らの爲なり。一四キリストの愛われ
らに迫れり。我ら思ふに、一人すべての人に代りて死にたれば、凡て
の人すでに死にたるなり。一五その凡ての人に代りて死に給ひしは、
生ける人の最早おのれの爲に生きず、己に代り死にて甦へり給ひ
し者のために、生きん爲なり。一六されば今より後われ肉によりて人
を知るまじ、曾て肉によりてキリストを知りしが、今より後は斯くの

如くに知ることをせじ。一七人もしキリストに在らば新に造られた
る者なり、古きは既に過ぎ去り、視よ、新しくなりたり。一八これ
らの事はみな神より出づ、神はキリストによりて我らを己と和が
しめ、かつ和がしむる職を我らに授け給へり。一九即ち神はキリ
ストに在りて世を己と和がしめ、その罪を之に負はせず、かつ和
がしむる言を我らに委ね給へり。二〇されば我等はキリストの使者
たり、恰も神の我等によりて汝らを勸め給ふがごとし。我等キリ
ストに代りて願ふ、なんぢら神を和げ。二一神は罪を知り給はざり
し者を我らの代に罪となし給へり、これ我らが彼に在りて神の義と
なるを得んためなり。

第六章一我らは神とともに働く者なれば、神の恩恵を汝らが徒
らに受けざらんことを更に勸む。二（神いひ給ふ

『われ恵の時に汝に聽き、
救の日に汝を助けたり』

と。視よ、今は恵のとき、視よ、今は救の日なり）三我等この職

の謗られぬ爲に何事にも人を躓かせず。四反つて凡ての事において
神の役者のごとく己をあらはす、即ち患難にも、窮乏にも、苦難に
も、五打たるるにも、獄に入るにも、騒擾にも、勞動にも、眠らぬ
にも、斷食にも、大なる忍耐を用ひ、六また廉潔と知識と寛容と
仁慈と聖靈と虛僞なき愛と、七眞の言と神の能力とに持ちたる
義の武器とにより、八また光榮と恥辱と惡名と美名とによりて
表す。我らは人を惑す者の如くなれども眞、九人に知られぬ者の
如くなれども人に知られ、死なんとする者の如くなれども、視よ、生
ける者、懲さるる者の如くなれども殺されず、一〇憂ふる者の如くな
れども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富ませ、何も
有たぬ者の如くなれども凡ての物を有てり。一一コリント人よ、我ら
の口は汝らに向ひて開け、我らの心は廣くなれり。一二汝らの狹
くせらるるは我らに因るにあらず、反つて己が心に因るなり。一三
汝らも心を廣くして我に報をせよ。(我わが子に對する如く言ふ
なり)一四不信者と軛を同じうすな、義と不義と何

の干與かあらん、光と暗と何の交際かあらん。一五キリストとベリ
アルと何の調和かあらん、信者と不信者と何の關係かあらん。一六神
の宮と偶像と何の一致かあらん、我らは活ける神の宮なり、即ち神
の言ひ給ひしが如し。曰く
『われ彼らの中に住み、また歩まん。
我かれらの神となり、
彼等わが民とならん』
と。一七この故に
『主いひ給ふ、
「汝等かれらの中より出で、之を離れ、
穢れたる者に觸るなかれ」と。
「さらば我なんぢらを受け、
一八われ汝らの父となり、
汝等わが息子むすめとならん」と、全能の主いひ給ふ』
とあるなり。

第七章一されば愛する者よ、我らかかる約束を得たれば、肉と靈と
の汚穢より全く己を潔め、神を畏れてその清潔を成就すべし。二
我らを受け容れよ、われら誰にも不義をなしし事なく、誰をも害ひ
し事なく、誰をも掠めし事なし。三わが斯く言ふは、汝らを咎めん
とにあらず、そは我が既に言へる如く、汝らは我らの心にありて、
共に死に共に生くればなり。四我なんぢらを信ずること大なり、ま
た汝等をもて誇とすること大なり、我は慰安にみち、凡ての患難
の中にも喜悦あふるるなり。五マケドニヤに到りしとき、我らの身は
なほ聊かも平安を得ずして、樣々の患難に遭ひ、外には分爭、内に
は恐懼ありき。六然れど哀なる者を慰むる神は、テトスの來るによ
りて我らを慰め給へり。七唯その來るに因りてのみならず、彼が汝
らによりて得たる慰安をもて慰め給へり。即ち汝らの我を慕ふこ
と、歎くこと、我に對して熱心なることを我らに告ぐるによりて、我ま
すます喜べり。八われ書をもて汝らを憂ひしめたれども悔いず、そ
の書の汝らを暫く憂ひしめしを見て、前には悔いたれども今は喜

ぶ。九わが喜ぶは汝らの憂ひしが故にあらず、憂ひて悔改に至り
し故なり。汝らは神に從ひて憂ひたれば、我等より聊かも損を受
けざりき。一〇それ神にしたがふ憂は、悔なきの救を得るの悔改
を生じ、世の憂は死を生ず。一一視よ、汝らが神に從ひて憂ひ
しことは、如何ばかりの奮勵・辯明・憤激・恐懼・愛慕・熱心・罪を
責むる心などを汝らの中に生じたりしかを。汝等かの事に就き
ては全く潔きことを表せり。一二されば前に書を汝らに書き贈り
しも、不義をなしたる人の爲にあらず、また不義を受けたり人の爲に
あらず、我らに對する汝らの奮勵の、神の前にて汝らに顯れん爲
なり。一三この故に我らは慰安を得たり。慰安を得たる上にテトスの
喜悦によりて更に喜べり。そは彼の心なんぢら一同によりて安ん
ぜられたればなり。一四われ曩に彼の前に汝らに就きて誇りたれど
恥づることとなし、我らが汝らに語りし事のみな誠實なりし如く、テ
トスの前に誇りし事もまた誠實となれり。一五彼は汝等みな從順
にして畏れ戰き、己を迎へしことを思ひ出して、心を汝らに寄す

ること増々深し。一六われ凡ての事に汝らに就きて心強きを喜ぶ。

第八章 一兄弟よ、我らマケドニヤの諸教會に賜ひたる神の恩恵を
汝らに知らす。二即ち患難の大なる試練のうちに彼らの喜悦あふ
れ、又その甚だしき貧窮は吝みなく施す富の溢るるに至れり。三四
われ證す、彼らは聖徒に事ふることに與る恵を切に我らに請ひ求
め、みづから進みて、力に應じ、否これに過ぎて施濟をなせり。五
我らの望のほかに先づ己を主にささげ、神の御意によりて我らにも
身を委ねたり。六されば我らはテトスが前に此の慈恵のことを汝ら
の中に始めたれば、又これを成就せんことを勸めたり。七汝等もろ
もろの事、すなはち信仰に、言に、知識に、凡ての奮勵に、また我ら
に對する愛に富めるごとく、此の慈恵にも富むべし。八われ斯く言ふ
は汝らに命ずるにあらず、ただ他の人の奮勵によりて、汝らの愛の
眞實を試みん爲なり。九汝らは我らの主イエス・キリストの恩恵を
知る。即ち富める者にて在したれど、汝等のために貧しき者となり
給へり。これ汝らが彼の貧窮によりて富める者とならん爲なり。一

○施濟のことに就きて我ただ意見を述ぶ、これは汝らの益なり。汝
らは此の事をただに一年前より人に先だちて行ひしのみならず、又
これを願い始めし事なれば、一一今これを成し遂げよ、汝らが心
より願ひしごとく、所有に應じて成し遂げよ。一二人もし志望あら
ば、其の有たぬ所に由るにあらず、其の有つ所に由りて嘉納せらる
るなり。一三これ他の人を安くして汝らを苦しめんとにあらず、均
しくせんとするなり。一四すなはち今なんぢらの餘るところは彼らの
足らざるを補ひ、後また彼らの餘る所は汝らの足らざるを補ひ
て、均しくなるに至らんためなり。一五録して『多く集めし者にも餘
る所なく、少く集めし者にも足らざる所なかりき』とあるが如し。
一六汝らに對する同じ熱心をテトスの心にも賜へる神に感謝す。一
七彼はただに勸を容れしのみならず、甚だ熱心にして、自ら進んで
汝らに往くなり。一八我等また彼とともに一人の兄弟を遣す。こ
の人は福音をもて諸教會のうちに譽を得たる上に、一九主の榮光
と我らの志望とを顯さんがために、掌どれる此の慈惠に就きて、

諸教會より我らの道伴として選ばれたる者なり。二〇彼を遣すは、
此の大なる醵金を掌どるに、人に咎めらるる事を避けんためなり。
二一そは主の前のみならず、人の前にも善からんことを慮ぱかりて
なり。二二また一人の兄弟を彼らと共につかはす、我らは多くの事
につきて屡次かれの熱心なるを認めたり。而して今は彼が汝らを深
く信ずるに因りて、その熱心の更に加はるを認む。二三テトスのこと
を言へば、我が友なり、汝らに對して我が同勞者なり。この兄弟た
ちの事をいへば、彼らは諸教會の使なり、キリストの榮光なり。
二四されば汝らの愛と我らが汝らに就きて誇れる事との證を、諸
教會の前にて彼らに顯せ。

第九章 一聖徒に施すことに就きては汝らに書きおくるに及ばず、
二我なんぢらの志望あるを知ればなり。その志望につき汝らの事
をマケドニヤ人に誇りて、アカヤは既に一年前に準備をなせりと云へ
り。かくて汝らの熱心は多くの人を勵ましたり。三されどわれ兄弟
たちを遣すは、我が言ひしごとく汝らに準備をなさしめ、之につ

きて我らの誇りし事の空しくならざらん爲なり。四もしマケドニヤ人
われと共に來りて汝らの準備なきを見ば、汝らは言ふに及ばず、我
らも確信せしによりて恐らくは恥を受けん。五この故に兄弟たちを
勸めて、先づ汝らに往かしめ、曩に汝らが約束したる慈惠を、吝む
が如くせずして、惠む心よりせん爲に預じめ調へしむるは、必要
のことと思へり。六それ少く播く者は少く刈り、多く播く者は多く
刈るべし。七おのおの吝むことなく、強ひてすることなく、その心
に定めし如くせよ。神は喜びて與ふる人を愛し給へばなり。八神は
汝等をして常に凡ての物に足らざることなく、凡ての善き業に溢れ
しめんために、凡ての恩惠を溢るるばかり與ふることを得給ふなり。
九録して

　『彼は散して貧しき者に與へたり。
　その正義は永遠に存らん』

とある如し。一〇播く人に種と食するパンとを與ふる者は、汝らに
も種をあたへ、且これを殖し、また汝らの義の果を增し給ふべし。一一

一一汝らは一切に富みて吝みなく施すことを得、かくて我らの事によ
り、人々神に感謝するに至るなり。一二此の施濟の務は、ただに聖徒
の窮乏を補ふのみならず、充ち溢れて神に對する感謝を多からしむ。
一三即ち彼らは此の務を證據として、汝らがキリストの福音に對
する言明に順ふことと、彼らにも凡ての人にも吝みなく施すこ
とに就きて、神に榮光を歸し、一四かつ神の汝らに給ひし優れた
る恩惠により、汝らを慕ひて汝等のために祈らん。一五言ひ盡しが
たき神の賜物につきて感謝す。

第一〇章

一汝らに對し面前にては謙だり、離れゐては勇ましき我
パウロ、自らキリストの柔和と寛容とをもて汝らに勸む。二我ら
を肉に從ひて歩むごとく思ふ者あれば、斯かる者に對しては雄々し
くせんと思へど、願ふ所は我が汝らに逢ふとき斯く勇ましくせざ
らん事なり。三我らは肉にありて歩めども、肉に從ひて戰はず。四
それ我らの戰爭の武器は肉に屬するにあらず、神の前には城砦を破る
ほどの能力あり、我等はもろもろの論説を破り、五神の示教に逆ひ

て建てたる凡ての櫓を毀ち、凡ての念を虜にしてキリストに服
はしむ。六且なんぢらの從順の全くならん時、すべての不從順
を罰せんと覺悟せり。七汝らは外貌のみを見る、若し人みづからキ
リストに屬する者と信ぜば、己がキリストに屬する如く、我らも亦
キリストに屬する者なることを更に考ふべし。八假令われ汝らを破
る爲ならずして建つる爲に、主が我らに賜ひたる權威につきて誇る
こと稍過ぐとも恥とはならじ。九われ書をもて汝らを嚇すと思はざ
れ。一〇彼らは言ふ『その書は重くかつ強し、その逢ふときの容貌は
弱く、言は鄙し』と。一一斯くのごとき人は思ふべし。我らが離れを
る時おくる書の言のごとく、逢ふときの行爲も亦然るを。一二我ら
は己を譽むる人と敢へて竝び、また較ぶる事をせず、彼らは己によ
りて己を度り、己をもて己に較ぶれば智なき者なり。一三我らは
範圍を踰えて誇らず、神の我らに分ち賜ひたる範圍にしたがひて誇ら
ん。その範圍は汝らに及べり。一四汝らに及ばぬ者のごとく範圍を
踰えて身を延すに非ず、キリストの福音を傳へて汝らにまで到れる

なり。一五我らは己が範圍を踰えて他の人の勞を誇らず、唯なんぢら
の信仰の彌増すにより、我らの範圍に循ひて汝らのうちに更に大
ならんことを望む。一六これ他の人の範圍に既に備りたるものを誇
らず、汝らを踰えて外の處に福音を宣傳へん爲なり。一七誇る者は
主によりて誇るべし。一八そは是とせらるるは己を譽むる者にあら
ず、主の譽め給ふ者なればなり。

第一一章 一願はくは汝等わが少しの愚を忍ばんことを。請ふ我を
忍べ。二われ神の熱心をもて汝らを慕ふ、われ汝らを潔き處女とし
て一人の夫なるキリストに獻げんとて、之に許嫁したればなり。三
されど我が恐るるは、蛇の惡巧によりてエバの惑されし如く、汝ら
の心害はれてキリストに對する眞心と貞操とを失はん事なり。四
もし人きたりて我らの未だ宣べざる他のイエスを宣ぶる時、また汝
らが未だ受けざる他の靈を受け、未だ受け容れざる他の福音を受く
るときは、汝ら能く之を忍ばん。五我は何事にもかの大使徒たちに
劣らずと思ふ。六われ言に拙けれども知識には然らず、凡ての事に

て全く之を汝らに顯せり。七われ汝らを高うせんために自己を卑
うし、價なくして神の福音を傳へたるは罪なりや。八我は他の教會
より奪ひ取り、その俸給をもて汝らに事へたり。九又なんぢらの中
に在りて乏しかりしとき、誰をも煩はさず、マケドニヤより來りし
兄弟たち我が窮乏を補へり。斯く凡ての事に汝らを煩はすまじ
と愼みたるが、此の後もなほ愼まん。一〇我に在るキリストの誠實
によりて言ふ、我この誇をアカヤの地方にて阻まるる事あらじ。一
一これ何故ぞ、汝らを愛せぬに因るか、神は知りたまふ。一二我わが
行ふ所をなほ行はん、これ機會をうかがふ者の機會を斷ち、彼等
をしてその誇る所につき我らの如くならしめん爲なり。一三かくの
如きは僞使徒また詭計の勞動人にして、己をキリストの使徒に扮
へる者どもなり。一四これ珍しき事にあらず、サタンも己を光の
御使に扮へば、一五その役者らが義の役者のごとく扮ふは大事には
あらず、彼等の終局はその業に適ふべし。一六われ復いはん、誰も我
を愚と思ふな。もし然おもふとも、少しく誇る機を我にも得させん

爲に、愚なる者として受け容れよ。一七今いふ所は主によりて言ふ
にあらず、愚なる者として大膽に誇りて言ふなり。一八多くの人、肉
によりて誇れば、我も誇るべし。一九汝らは智き者なれば喜びて
愚なる者を忍ぶなり。二〇人もし汝らを奴隷とすとも、食ひ盡すと
も、掠めとるとも、驕るとも、顏を打つとも、汝らは之を忍ぶ。二
一われ恥ぢて言ふ、我らは弱き者の如くなりき。されど人の雄々しき
所は我もまた雄々し、われ愚にも斯く言ふなり。二二彼らヘブル人
なるか、我も然り、彼らイスラエル人なるか、我も然り、彼らアブラ
ハムの裔なるか、我も然り。二三彼らキリストの役者なるか、われ狂
へる如く言ふ、我はなほ勝れり。わが勞は更におほく、獄に入れら
れしこと更に多く、鞭うたれしこと更に夥だしく、死に瀕みたりし
こと屢次なりき。二四ユダヤ人より四十に一つ足らぬ鞭を受けしこと
五度、二五笞にて打たれしこと三たび、石にて打たれしこと一たび、
破船に遭ひしこと三度にして、一晝夜海にありき。二六しばしば旅行
して河の難、盜賊の難、同族の難、異邦人の難、市中の難、荒野の難

、海上の難、僞兄弟の難にあひ、二七勞し、苦しみ、しばしば眠ら
ず、飢ゑ渇き、しばしば斷食し、凍え、裸なりき。二八ここに擧げ
ざる事もあるに、なほ日々われに迫る諸教會の心勞あり。二九誰
か弱りて我弱らざらんや、誰か躓きて我燃えざらんや。三〇もし誇
るべくは、我が弱き所につきて誇らん。三一永遠に讃むべき者、す
なはち主イエスの神また父は、我が僞らざるを知り給ふ。三二ダマ
スコにてアレタ王の下にある總督、われを捕へんとてダマスコ人の
町を守りたれば、三三我は籠にて窓より石垣傳ひに縋り下されて其の
手を脱れたり。

第一二章

一わが誇るは益なしと雖も止むを得ざるなり、茲に主の
顯示と默示とに及ばん。二我はキリストにある一人の人を知る。この
人、十四年前に第三の天にまで取去られたり（肉體にてか、われ知ら
ず、肉體を離れてか、われ知らず、神しり給ふ）三われ斯くのごとき
人を知る（肉體にてか、肉體の外にてか、われ知らず、神しり給ふ）
四かれパラダイスに取去られて、言ひ得ざる言、人の語るまじき言

を聞けり。五われ斯くのごとき人のために誇らん、されど我が爲には
弱き事のほか誇るまじ。六もし自ら誇るとも我が言ふところ誠實な
れば、愚なる者とならじ。されど之を罷めん。恐らくは人の我を見
われに聞くところに過ぎて、我を思ふことあらん。七我は我が蒙り
たる默示の鴻大なるによりて高ぶることのなからん爲に、肉體に一つ
の刺を與へらる、即ち高ぶることなからん爲に我を撃つサタンの使
なり。八われ之がために三度まで之を去らしめ給はんことを主に求め
たるに、九言ひたまふ『わが恩惠なんぢに足れり、わが能力は弱きう
ちに全うせらるればなり』さればキリストの能力の我を庇はんため
に、寧ろ大に喜びて我が微弱を誇らん。一〇この故に我はキリスト
の爲に微弱・恥辱・艱難・迫害・苦難に遭ふことを喜ぶ、そは我よ
わき時に強ければなり。一一われ汝らに強ひられて愚になれり、我
は汝らに譽めらるべかりしなり。我は數ふるに足らぬ者なれども、
何事にもかの大使徒たちに劣らざりしなり。一二我は徴と不思議と
能力ある業とを行ひ、大なる忍耐を用ひて汝等のうちに使徒の徴

をなせり。一三なんぢら他の教會に何の劣る所かある、唯わが汝
らを煩はさざりし事のみならずや、此の不義は請ふ我に恕せ。一四
視よ、茲に三度なんぢらに到らんとして準備したれど、尚なんぢらを
煩はすまじ。我は汝らの所有を求めず、ただ汝らを求む。それ子
は親のために貯ふべきにあらず、親は子のために貯ふべきなり。一
五我は大に喜びて汝らの靈魂のために物を費し、また身をも費
さん。我なんぢらを多く愛するによりて、汝ら我を少く愛するか。
一六或人いはん、我なんぢらを煩はさざりしも、狡猾にして詭計を
もて取りしなりと。一七然れど我なんぢらに遣しし者のうちの誰に
よりて汝らを掠めしや。一八我テトスを勸めて汝らに遣し、これ
と共にかの兄弟を遣せり、テトスは汝らを掠めしや。我らは同じ
御靈によりて歩み、同じ足跡を蹈みしにあらずや。一九汝らは夙く
より我等なんぢらに對して辯明すと思ひしならん。されど我らはキ
リストに在りて神の前にて語る。愛する者よ、これ皆なんぢらの徳
を建てん爲なり。二〇わが到りて汝らを見ん時、わが望の如くなら

ず、汝らが我を見んとき、亦なんぢらの望の如くならざらんことを
恐れ、かつ分爭・嫉妬・憤恚・徒黨・誹謗・讒言・驕傲・騷亂など
の有らんことを恐る。二一また重ねて到らん時、わが神われを汝等
のまへにて辱しめ、且おほくの人の、前に罪を犯して行ひし不潔と
姦淫と好色とを悔改めざるを悲しましめ給ふことあらん乎と恐る。
第一三章 一今われ三度なんぢらに到らんとす、二三の證人の口に
よりて凡てのこと慥めらるべし。二われ既に告げたれど、今離れを
りて、二度なんぢらに逢ひし時のごとく、前に罪を犯したる者とその
他の凡ての人々とに預じめ告ぐ、われ復いたらば決して宥さじ。三
汝らはキリストの我にありて語りたまふ證據を求むればなり。キリ
ストは汝らに對ひて弱からず、汝等のうちに強し。四微弱によりて
十字架に釘けられ給ひたれど、神の能力によりて生き給へばなり。我
らもキリストに在りて弱き者なれど、汝らに向ふ神の能力によりて
彼と共に生きん。五なんぢら信仰に居るや否や、みづから試み自ら
驗しみよ。汝らみづから知らざらんや、若し棄てらるる者ならずば、

イエス・キリストの汝らの中に在す事を、六我は我らの棄てらるる者
ならぬを汝らの知らんことを望む。七我らは汝らの少しにても惡を
行はざらんことを神に祈る。これ我らの是とせらるるを顯さん爲
にあらず、よし我らは棄てらるる者の如くなるとも、汝らの善を行
はん爲なり。八我らは眞理に逆ひて能力なく、眞理のためには能力
あり。九われら弱くして汝らの強きことを喜ぶ、また之に就きて祈
るは、汝らの全くならん事なり。一〇われ離れ居りて此等のことを
書き贈るは、汝らに逢ふとき、主の破る爲ならずして建つる爲に我
に賜ひたる權威に隨ひて嚴しくせざらん爲なり。一一終に言はん、
兄弟よ、汝ら喜べ、全くなれ、慰安を受けよ、心を一つにせよ、
睦み親しめ、然らば愛と平和との神なんぢらと偕に在さん。一二潔き
接吻をもて相互に安否を問へ、一三凡ての聖徒なんぢらに安否を問
ふ。一四願はくは主イエス・キリストの恩惠・神の愛・聖靈の交感、
なんぢら凡ての者と偕にあらんことを。

ガラテヤ人への書

第一章 一人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及び之を死人の中より甦へらせ給ひし父なる神に由りて使徒となれるパウロ、二及び我と偕にある凡ての兄弟、書をガラテヤの諸教會に贈る。三願はくは、我らの父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩惠と平安と汝らに在らんことを。四主は我らの父なる神の御意に隨ひて、我らを今の惡しき世より救ひ出さんとて、己が身を我らの罪のために與へたまへり。五願はくは榮光、世々限りなく神にあらん事を、アアメン。六我は汝らが斯くも速かにキリストの恩惠をもて召し給ひし者より離れて、異なる福音に移りゆくを怪しむ。七此は福音と言ふべき者にあらず、ただ或人々が汝らを擾してキリストの福音を變へんとするなり。八されど我等にもせよ、天よりの御使にも

せよ、我らの曾て宣傳へたる所に背きたる福音を汝らに宣傳ふる者
あらば詛はるべし。九 われら前に言ひし如く今また言はん、汝らの
受けし所に背きたる福音を宣傳ふる者あらば詛はるべし。一〇 我い
ま人に喜ばれんとするか、或は神に喜ばれんとするか、抑もまた
人を喜ばせんことを求むるか。もし我なほ人を喜ばせをらば、キ
リストの僕にあらじ。一一 兄弟よ、われ汝らに示す、わが傳へた
る福音は、人に由れるものにあらず。一二 我は人より之を受けず、ま
た教へられず、唯イエス・キリストの默示に由れるなり。一三 我がユ
ダヤ教に於ける曩の日の擧動は、なんぢら既に聞けり、即ち烈しく
神の教會を責め、かつ暴したり。一四 又わが國人のうち、我と同じ
年輩なる多くの者にも勝りてユダヤ教に進み、わが先祖たちの言傳
に對して甚だ熱心なりき。一五 されど母の胎を出でしより我を選び
別ち、その恩惠をもて召し給へる者 一六 御子を我が内に顯して其の
福音を異邦人に宣傳へしむるを可しとし給へる時、われ直ちに血肉と
謀らず、一七 我より前に使徒となりし人々に逢はんとてエルサレムに

も上らず、アラビヤに出で往きて遂にまたダマスコに返れり。一八そ
の後三年を歴て、ケパを尋ねんとエルサレムに上り、十五日の間か
れと偕に留りしが、一九主の兄弟ヤコブのほか孰の使徒にも逢は
ざりき。二〇（茲に書きおくる事は、視よ、神の前にて僞らざるな
り）二一その後シリヤ、キリキヤの地方に往けり。二二キリストにあ
るユダヤの諸教會は我が顏を知らざりしかど、二三ただ人々の『わ
れらを前に責めし者、曾て暴したる信仰の道を今は傳ふ』といふを聞
き、二四わが事によりて神を崇めたり。

第二章一その後十四年を歴て、バルナバと共にテトスをも連れて、
復エルサレムに上れり。二我が上りしは默示に因りてなり。かくて
異邦人の中に宣ぶる福音を彼らに告げ、また名ある者どもに私に告
げたり、これは我が走ること、又すでに走りしことの空しからざらん
爲なり。三而して我と偕なるギリシヤ人テトスすら割禮を強ひられざ
りき。四これ私に入りたる僞兄弟あるに因りてなり。彼らの忍び入
りたるは、我らがキリスト・イエスに在りて有てる自由を窺ひ、且

われらを奴隷とせん爲なり。五然れど福音の眞理の汝らの中に留ら
んために、我ら一時も彼らに讓り從はざりき。六然るに、かの名あ
る者どもより――彼らは如何なる人なるにもせよ、我には關係なし、
神は人の外面を取り給はず――實にかの名ある者どもは我に何をも
加へず、七反ってペテロが割禮ある者に對する福音を委ねられたる如
く、我が割禮なき者に對する福音を委ねられたるを認め、八（ペテロ
に能力を與へて割禮ある者の使徒となし給ひし者は、我にも異邦人の
ために能力を與へ給へり）九また我に賜はりたる恩惠をさとりて、柱
と思はるるヤコブ、ケパ、ヨハネは、交誼の印として我とバルナバ
とに握手せり。これは我らが異邦人にゆき、彼らが割禮ある者に往か
ん爲なり。一〇唯その願ふところは我らが貧しき者を顧みんことな
り、我も固より此の事を勵みて行へり。一一されどケパがアンテオ
ケに來りしとき、責むべき事のありしをもて面前これと諍ひたり。
一二その故はある人々のヤコブの許より來るまでは、かれ異邦人と共
に食しゐたるに、かの人々の來りてよりは、割禮ある者どもを恐れ、

退きて異邦人と別れたり。一三他のユダヤ人も彼とともに僞行を
なし、バルナバまでもその僞行に誘はれゆけり。一四されど我かれ
らが福音の眞理に循ひて正しく歩まざるを見て、會衆の前にてケ
パに言ふ『なんぢユダヤ人なるにユダヤ人の如くせず、異邦人のごと
く生活せば、何ぞ強ひて異邦人をユダヤ人の如くならしめんとする
か』一五我らは生來のユダヤ人にして、罪人なる異邦人にあらざれ
ども、一六人の義とせらるるは律法の行爲に由らず、唯キリスト・イ
エスを信ずる信仰に由るを知りて、キリスト・イエスを信じたり。こ
れ律法の行爲に由らず、キリストを信ずる信仰によりて義とせられ
ん爲なり。律法の行爲によりては義とせらるる者一人だになし。一七
若しキリストに在りて義とせられんことを求めて、なほ罪人と認め
られなば、キリストは罪の役者なるか、決して然らず。一八我もし前
に毀ちしものを再び建てなば、己みづから犯罪者たるを表す。一
九我は神に生きんために、律法によりて律法に死にたり。二〇我キリ
ストと偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリス

ト我が内に在りて生くるなり。今われ肉體に在りて生くるは、我を
愛して我がために己が身を捨て給ひし神の子を信ずるに由りて生く
るなり。二一我は神の恩惠を空しくせず、もし義とせらるること律法
に由らば、キリストの死に給へるは徒然なり。
第三章一 愚なる哉、ガラテヤ人よ、十字架につけられ給ひしままな
るイエス・キリスト、汝らの眼前に顯されたるに、誰が汝らを誑
かししぞ。二我は汝等より唯この事を聞かんと欲す。汝らが御靈
を受けしは律法の行爲に由るか、聽きて信じたるに由るか。三汝ら
は斯くも愚なるか、御靈によりて始りしに、今肉によりて全うせ
らるるか。四斯程まで多くの苦難を受けしことは徒然なるか、徒然に
はあるまじ。五然らば汝らに御靈を賜ひて汝らの中に能力ある業を
行ひ給へるは、律法の行爲に由るか、聽きて信ずるに由るか。六録
して『アブラハム神を信じ、その信仰を義とせられたり』とあるが如
し。七されば知れ、信仰に由る者は是アブラハムの子なるを。八聖書
は神が異邦人を信仰に由りて義とし給ふことを知りて、預じめ福音

をアブラハムに傳へて言ふ『なんぢに由りてもろもろの國人は祝福
せられん』と。九この故に信仰による者は、信仰ありしアブラハムと
共に祝福せらる。一〇されど凡て律法の行爲による者は詛の下にあ
り。録して『律法の書に記されたる凡ての事を常に行はぬ者はみな
詛はるべし』とあればなり。一一律法に由りて神の前に義とせらるる
事なきは明かなり『義人は信仰によりて生くべし』とあればなり。
一二律法は信仰に由るにあらず、反って『律法を行ふ者は之に由り
て生くべし』と云へり。一三キリストは我等のために詛はるる者とな
りて、律法の詛より我らを贖ひ出し給へり。録して『木に懸けらる
る者は凡て詛はるべし』と云へばなり。一四これアブラハムの受けた
る祝福の、イエス・キリストによりて異邦人におよび、且われらが
信仰に由りて約束の御靈を受けん爲なり。一五兄弟よ、われ人の事
を藉りて言はん、人の契約すら既に定むれば、之を廢しまた加ふる
者なし。一六かの約束はアブラハムと其の裔とに與へ給ひし者なり。
多くの者を指すごとく『裔々に』とは云はず、一人を指すごとく『な

んぢの裔に』と云へり、これ即ちキリストなり。一七然れば我いは
ん、神の預じめ定め給ひし契約は、その後四百三十年を歴て起りし
律法に廢せらるることなく、その約束も空しくせらるる事なし。一八
もし嗣業を受くること律法に由らば、もはや約束には由らず、然るに
神は約束に由りて之をアブラハムに賜ひたり。一九然れば律法は何の
ためぞ。これ罪の爲に加へ給ひしものにて、御使たちを經て中保の
手によりて立てられ、約束を與へられたる裔の來らん時にまで及ぶな
り。二〇（中保は一方のみの者にあらず、然れど神は唯一に在せり）
二一さらば律法は神の約束に悖るか、決して然らず。もし人を生かす
べき律法を與へられたらんには、實に義とせらるるは律法に由りし
ならん。二二されど聖書は凡ての者を罪の下に閉ぢ籠めたり。これ信
ずる者のイエス・キリストに對する信仰に由れる約束を與へられん
爲なり。二三信仰の出で來らぬ前は、われら律法の下に守られて、後
に顯れんとする信仰の時まで閉ぢ籠められたり。二四かく信仰によ
りて我らの義とせられん爲に、律法は我らをキリストに導く守役と

なれり。二五されど信仰の出で來りし後は、我等もはや守役の下に居
らず。二六汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の
子たり。二七凡そバプテスマに由りてキリストに合ひし汝らは、キ
リストを衣たるなり。二八今はユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も
自主もなく、男も女もなし、汝らは皆キリスト・イエスに在りて
一體なり。二九汝等もしキリストのものならば、アブラハムの裔に
して約束に循へる世嗣たるなり。

第四章　一われ言ふ、世嗣は全業の主なれども、成人とならぬ間は
僕と異なることなく、二父の定めし時の至るまでは後見者と家令と
の下にあり。三斯くのごとく我らも成人とならぬほどは、世の小學
の下にありて僕たりしなり。四されど時滿つるに及びては、神その
御子を遣し、これを女より生れしめ、律法の下に生れしめ給へり。
五これ律法の下にある者をあがなひ、我等をして子たることを得し
めん爲なり。六かく汝ら神の子たる故に、神は御子の御靈を我らの
心に遣して『アバ、父』と呼ばしめ給ふ。七されば最早なんぢは僕

にあらず、子たるなり、既に子たらば亦神に由りて世嗣たるなり。八
されど汝ら神を知らざりし時は、その實神にあらざる神々に事へた
り。九今は神を知り、むしろ神に知られたるに、何ぞ復かの弱くして
賤しき小學に還りて、再びその僕たらんとするか。一〇汝らは日
と月と季節と年とを守る。一一我は汝らの爲に働きし事の或は無
益にならんことを恐る。一二兄弟よ、我なんぢらに請ふ、われ汝等
のごとく成りたれば、汝ら我がごとく成れ。汝ら何事にも我を害
ひしことなし。一三わが初め汝らに福音を傳へしは、肉體の弱かり
し故なるを汝ら知る。一四わが肉體に汝らの試錬となる者ありたれ
ど汝ら之を卑しめず、又きらはず、反つて我を神の使の如く、キリ
スト・イエスの如く迎へたり。一五汝らの其の時の幸福はいま何處
に在るか。我なんぢらに就きて證す、もし爲し得べくば己が目を抉
りて我に與へんとまで思ひしを。一六然るに我なんぢらに眞を言ふ
によりて仇となりたるか。一七かの人々の汝らに熱心なるは善き心
にあらず、汝らを我らより離して己らに熱心ならしめんとてなり。

一八善き心より熱心に慕はるるは、啻に我が汝らと偕にをる時のみ
ならず、何時にても宜しき事なり。一九わが幼兒よ、汝らの衷にキ
リストの形成るまでは、我ふたたび産の苦痛をなす。二〇今なんぢ
らに到りて我が聲を易へんことを願ふ、汝らに就きて惑へばなり。
二一律法の下にあらんと願ふ者よ、我にいへ、汝ら律法をきかぬか。
二二即ちアブラハムに子二人あり、一人は婢女より、一人は自主の
女より生れたりと録されたり。二三婢女よりの子は肉によりて生れ、
自主の女よりの子は約束による。二四この中に譬あり、二人の女
は二つの契約なり、その一つはシナイ山より出でて、奴隷たる子を生
む、これハガルなり。二五このハガルはアラビヤに在るシナイ山にし
て今のエルサレムに當る。エルサレムはその子らとともに奴隷たる
なり。二六されど上なるエルサレムは、自主にして我らの母なり。二
七録していふ

『石女にして産まぬものよ、喜べ。
産の苦痛せぬ者よ、聲をあげて呼はれ。

獨住の女の子は多し、夫ある者の子よりも多し』
とあり。二八兄弟よ、なんぢらはイサクのごとく約束の子なり。二
九然るに其の時、肉によりて生れし者御靈によりて生れし者を責めし
ごとく、今なほ然り。三〇されど聖書は何と云へるか『婢女とその子
とを逐ひいだせ、婢女の子は自主の女の子と共に業を嗣ぐべからず』
とあり。三一されば兄弟よ、われらは婢女の子ならず、自主の女の
子なり。

第五章一キリストは自由を得させん爲に我らを釋き放ちたまへり。
されば堅く立ちて再び奴隷の軛に繋がるな。二視よ、我パウロ汝
らに言ふ、もし割禮を受けば、キリストは汝らに益なし。三又さら
に凡て割禮を受くる人に證す、かれは律法の全體を行ふべき負債
あり。四律法に由りて義とせられんと思ふ汝らは、キリストより離
れたり、恩惠より墮ちたり。五我らは御靈により、信仰によりて希望
をいだき、義とせらるることを待てるなり。六キリスト・イエスに在
りては、割禮を受くるも割禮を受けぬも益なく、ただ愛に由りては

たらく信仰のみ益あり。七なんぢら前には善く走りたるに、誰が汝
らの眞理に從ふを阻みしか。八かかる勸は汝らを召したまふ者よ
り出づるにあらず。九少しのパン種は粉の團塊をみな膨れしむ。一〇
われ汝らに就きては、その聊かも異念を懷かぬことを主によりて
信ず。されど汝らを擾す者は、誰にもあれ審判を受けん。一一兄弟
よ、我もし今も割禮を宣傳へば、何ぞなほ迫害せられんや。もし然せ
ば十字架の顚躓も止みしならん。一二願はくは汝らを亂す者どもの
自己を不具にせんことを。一三兄弟よ、汝らの召されたるは自由を
與へられん爲なり。ただ其の自由を肉に從ふ機會となさず、反つて
愛をもて互に事へよ。一四それ律法の全體は『おのれの如くなんぢの
隣を愛すべし』との一言にて全うせらるるなり。一五心せよ、若し
互に咬み食はば相共に亡されん。一六我いふ、御靈によりて歩め、さ
らば肉の慾を遂げざるべし。一七肉の望むところは御靈にさからひ、
御靈の望むところは肉にさからひて互に相戻ればなり。これ汝ら
の欲する所をなし得ざらしめん爲なり。一八汝等もし御靈に導か

れなば、律法の下にあらじ。一九それ肉の行爲はあらはなり。即ち
淫行・汚穢・好色・二〇偶像崇拜・呪術・怨恨・紛爭・嫉妬・憤恚・
徒黨・分離・異端・二一猜忌・醉酒・宴樂などの如し。我すでに警め
たるごとく、今また警む。斯かることを行ふ者は神の國を嗣ぐこ
となし。二二されど御靈の果は愛・喜悦・平和・寛容・仁慈・善良・
忠信・二三柔和・節制なり。斯かるものを禁ずる律法はあらず。二四
キリスト・イエスに屬する者は、肉とともに其の情と慾とを十字架
につけたり。二五もし我ら御靈に由りて生きなば、御靈に由りて歩む
べし。二六互に挑み互に妬みて、虚しき譽を求むることを爲な。

第六章 一兄弟よ、もし人の罪を認むることあらば、御靈に感じた
る者、柔和なる心をもて之を正すべし、且おのおの自ら省みよ、
恐らくは己も誘はるる事あらん。二なんぢら互に重を負へ、而し
てキリストの律法を全うせよ。三人もし有ること無くして自ら有り
とせば、是みづから欺くなり。四各自おのが行爲を驗し見よ、さら
ば誇るところは他にあらで、ただ己にあらん。五各自おのが荷を負

ふべければなり。六御言を教へらるる人は、教ふる人と凡ての善き物
を共にせよ。七自ら欺くな、神は侮るべき者にあらず、人の播く
所は、その刈る所とならん。八己が肉のために播く者は肉によりて
滅亡を刈りとり、御靈のために播く者は御靈によりて永遠の生命を
刈りとらん。九われら善をなすに倦まざれ、もし撓まずば、時いた
りて刈り取るべし。一〇この故に機に隨ひて、凡ての人、殊に信仰
の家族に善をおこなへ。一一視よ、われ手づから如何に大なる文字
にて汝らに書き贈るかを。一二凡そ肉において美しき外觀をなさ
んと欲する者は、汝らに割禮を強ふ。これ唯キリストの十字架の故
によりて責められざらん爲のみ。一三そは割禮をうくる者すら自ら
律法を守らず、而も汝らに割禮をうけしめんと欲するは、汝らの肉
につきて誇らんが爲なり。一四されど我には、我らの主イエス・キリ
ストの十字架のほかに誇る所あらざれ。之によりて世は我に對して
十字架につけられたり、我が世に對するも亦然り。一五それ割禮を受
くるも受けぬも、共に數ふるに足らず、ただ貴きは新に造らるる

事(こと)なり。一六此(こ)の法(のり)に循(したが)ひて歩(あゆ)む凡(すべ)ての者(もの)の上(うへ)に、神(かみ)のイスラエル
の上(うへ)に、平安(へいあん)と憐憫(あはれみ)とあれ。一七今(いま)よりのち誰(たれ)も我(われ)を煩(わづら)はすな、我(われ)
はイエスの印(しるし)を身(み)に佩(お)びたるなり。一八兄弟(きやうだい)よ、願(ねが)はくは我(われ)らの主(しゅ)
イエス・キリストの恩恵(めぐみ)、なんぢらの靈(れい)とともに在(あ)らんことを、アア
メン。

エペソ人への書

第一章 一神の御意によりてキリスト・イエスの使徒となれるパウロ、
書をエペソに居る聖徒、キリストに在りて忠實なる者に贈る。二願
はくは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩恵と平安
と汝らに在らんことを。三讃むべきかな、我らの主イエス・キリス
トの父なる神、かれはキリストに由りて靈のもろもろの祝福をもて
天の處にて我らを祝し、四御前にて潔く瑕なからしめん爲に、世の
創の前より我等をキリストの中に選び、五御意のままにイエス・キリ
ストに由り愛をもて己が子となさんことを定め給へり。六是その愛
しみ給ふ者によりて我らに賜ひたる恩恵の榮光に譽あらん爲なり。
七我らは彼にありて恩恵の富に隨ひ、その血に頼りて贖罪、すなは
ち罪の赦を得たり。八神は我らに諸般の知慧と聰明とを與へてその

恩恵を充しめ、九御意の奥義を御意のままに示し給へり。一〇即ち
時滿ちて經綸にしたがひ、天に在るもの地にあるものを、悉とくキ
リストに在りて一つに歸せしめ給ふ。これ自ら定め給ひし所なり。
一一我らは、凡ての事を御意の思慮のままに行ひたまふ者の御旨
によりて預じめ定められ、キリストに在りて神の産業とせられたり。
一二これ夙くよりキリストに希望を置きし我らが、神の榮光の譽と
ならん爲なり。一三汝等もキリストに在りて、眞の言すなはち汝
らの救の福音をきき、彼を信じて約束の聖靈にて印せられたり。一
四これは我らが受くべき嗣業の保證にして、神に屬けるものの贖は
れ、かつ神の榮光に譽あらん爲なり。一五この故に我も汝らが主
イエスに對する信仰と凡ての聖徒に對する愛とを聞きて、一六絶えず
汝らのために感謝し、わが祈のうちに汝らを憶え、一七我らの主イ
エス・キリストの神、榮光の父、なんぢらに智慧と默示との靈を與
へて、神を知らしめ、一八汝らの心の眼を明かにし、神の召にかか
はる望と、聖徒にある神の嗣業の榮光の富と、一九神の大能の勢威

の活動によりて信ずる我らに對する能力の極めて大なるとを知らし
め給はんことを願ふ。二〇神はその大能をキリストのうちに働かせ
て、之を死人の中より甦へらせ、天の所にて己の右に坐せしめ、二
一もろもろの政治・權威・能力・支配、また啻に此の世のみならず、
來らんとする世にも稱ふる凡ての名の上に置き、二二萬の物をその
足の下に服はせ、彼を萬の物の上に首として教會に與へ給へり。
二三この教會は彼の體にして、萬の物をもて萬の物に滿し給ふ者
の滿つる所なり。

第二章 一 汝ら前には咎と罪とによりて死にたる者にして、二この
世の習慣に從ひ、空中の權を執る宰、すなはち不從順の子らの
中に今なほ働く靈の宰にしたがひて歩めり。三我等もみな前には
彼らの中にをり、肉の慾に從ひて日をおくり、肉と心との欲する
隨をなし、他の者のごとく生れながら怒の子なりき。四されど神は
憐憫に富み給ふが故に、我らを愛する大なる愛をもて、五咎により
て死にたる我等をすら、キリスト・イエスに由りてキリストと共に活

し、(汝らの救はれしは恩恵によれり)六共に甦へらせ、共に天の
處に坐せしめ給へり。七これキリスト・イエスに由りて我らに施し
たまふ仁慈をもて、其の恩恵の極めて大なる富を、來らんとする後
の世々に顯さんとてなり。八汝らは恩恵により、信仰によりて救は
れたり、是おのれに由るにあらず、神の賜物なり。九行爲に由るにあ
らず、これ誇る者のなからん爲なり。一〇我らは神に造られたる者に
して、神の預じめ備へ給ひし善き業に歩むべく、キリスト・イエスの
中に造られたるなり。一一されば記憶せよ、肉によりては異邦人にし
て、手にて肉に行ひたるかの割禮ありと稱ふる者に無割禮と稱へら
るる汝ら、一二曩にはキリストなく、イスラエルの民籍に遠く、約束
に屬する諸般の契約に與りなく、世に在りて希望なく、神なき者な
りき。一三されど前に遠かりし汝ら今キリスト・イエスに在りて、キ
リストの血によりて近づくことを得たり。一四彼は我らの平和に
して、己が肉により、樣々の誡命の規より成る律法を廢して、二つの
ものを一つとなし、怨なる隔の中籬を毀ち給へり。これは二つの

ものを己に於て一つの新しき人に造りて平和をなし、一六十字架に
よりて怨を滅し、また之によりて二つのものを一つの體となして
神と和がしめん爲なり。一七かつ來りて、遠かりし汝等にも平和を
宣べ、近きものにも平和を宣べ給へり。一八そはキリストによりて我
ら二つのもの一つ御靈にありて父に近づくことを得たればなり。一九
されば汝等はもはや旅人また寄寓人にあらず、聖徒と同じ國人また
神の家族なり。二〇汝らは使徒と預言者との基の上に建てられたる
者にして、キリスト・イエス自らその隅の首石たり。二一おのおの
の建造物、かれに在りて建て合せられ、彌増に聖なる宮、主のうちに
成るなり。二二汝等もキリストに在りて共に建てられ、御靈により
て神の御住となるなり。

第三章 一この故に汝ら異邦人のためにキリスト・イエスの囚人と
なれる我パウロ――二汝等のために我に賜ひたる神の恩惠の經綸は
汝ら聞きしならん、三即ち我まへに簡單に書きおくりし如く、こ
の奥義は默示にて我に示されたり。四汝等これを讀みてキリストの

奥義にかかはる我が悟を知ることを得べし。五この奥義は、いま御靈
によりて聖使徒と聖預言者とに顯されし如くに、前代には人の子ら
に示されざりき。六即ち異邦人が福音によりキリスト・イエスに在
りて共に世嗣となり、共に一體となり、共に約束に與る者となる事
なり。七我はその福音の役者とせらる。これ神の能力の活動に隨ひ
て我に賜ふ恵の賜物によるなり。八我は凡ての聖徒のうちの最小き
者よりも小き者なるに、キリストの測るべからざる富を異邦人に傳
へ、九また萬物を造り給ひし神のうちに、世々隱れたる奥義の經綸の
如何なるもの乎をあらはす恩惠を賜はりたり。一〇いま教會により
て神の豐なる知慧を、天の處にある政治と權威とに知らしめん爲
なり。一一これは永遠より我らの主キリスト・イエスの中に、神の定
め給ひし御旨によるなり。一二我らは彼に在りて彼を信ずる信仰によ
り、臆せず疑はずして神に近づくことを得るなり。一三されば汝ら
に請ふ、わが汝等のために受くる患難に就きて落膽すな、是なんぢら
の譽なり。一四 一五この故に我は天と地とに在る諸族の名の起ると

ころの父に跪づきて願ふ。一六父その榮光の富にしたがひて、御靈
により力をもて汝らの内なる人を強くし、一七信仰によりてキリス
トを汝らの心に住はせ、汝らをして愛に根ざし、愛を基とし、一八
凡ての聖徒とともにキリストの愛の廣さ・長さ・高さ・深さの如何ば
かりなるかを悟り、一九その測り知るべからざる愛を知ることを得し
め、凡て神に滿てる者を汝らに滿しめ給はん事を。二〇願はくは我
らの中にはたらく能力に隨ひて、我らの凡て求むる所、すべて思ふ
所よりも甚く勝る事をなし得る者に、二一榮光世々限りなく教會
によりて、又キリスト・イエスによりて在らんことを、アアメン。

第四章一されば主に在りて囚人たる我なんぢらに勸む。汝ら召さ
れたる召に適ひて歩み、二事毎に謙遜と柔和と寛容とを用ひ、愛を
もて互に忍び、三平和の繋のうちに勉めて御靈の賜ふ一致を守れ。
四體は一つ、御靈は一つなり。汝らが召にかかはる一つ望をもて
召されたるが如し。五主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、六
凡ての者の父なる神は一つなり。神は凡てのものの上に在し、凡て

のものを貫き、凡てのものの内に在したまふ。七我等はキリストの
賜物の量に隨ひて、おのおの恩惠を賜はりたり。八されば云へるこ
とあり
『かれ高きところに昇りしとき、多くの虜をひきゐ、人々に賜物
を賜へり』
と。九既に昇りしと云へば、まづ地の低き處まで降りしにあらずや。
一〇降りし者は即ち萬の物に滿たん爲に、もろもろの天の上に昇り
し者なり。一一彼は或人を使徒とし、或人を預言者とし、或人を傳道者
とし、或人を牧師・教師として與へ給へり。一二これ聖徒を全うして
職を行はせ、キリストの體を建て、一三我等をしてみな信仰と神の
子を知る知識とに一致せしめ、全き人、すなはちキリストの滿ち足
れるほどに至らせ、一四また我等はもはや幼童ならず、人の欺騙と
誘惑の術たる惡巧とより起る樣々の教の風に吹きまはされず、一五
ただ愛をもて眞を保ち、育ちて凡てのこと首なるキリストに達せん
爲なり。一六彼を本とし全身は凡ての節々の助にて整ひ、かつ聯

り、肢體おのおの量に應じて働くにより、その體成長し、自ら愛
によりて建てらるるなり。一七されば我これを言ひ、主に在りて證
す、なんぢら今よりのち、異邦人のその心の虛無に任せて歩むが如
く歩むな。一八彼らは念暗くなりて、其の內なる無知により、心の
頑固によりて神の生命に遠ざかり、一九恥を知らず、放縱に凡ての
汚穢を行はんとて己を好色に付せり。二〇されど汝らはかくの如
くならん爲にキリストを學べるにあらず。二一汝らは彼に聞き、彼に
在りてイエスにある眞理に循ひて教へられしならん。二二即ち汝
ら誘惑の慾のために亡ぶべき前の動作に屬ける舊き人を脱ぎすて、二
三心の靈を新にし、二四眞理より出づる義と聖とにて、神に象り
造られたる新しき人を著るべきことなり。二五されば虛僞をすてて
各自その隣に實をかたれ、我ら互に肢なればなり。二六汝ら怒る
とも罪を犯すな、憤恚を日の入るまで續くな。二七惡魔に機會を得
さすな。二八盗する者は今よりのち盗すな、むしろ貧しき者に分け
與へ得るために手づから働きて善き業をなせ。二九惡しき言を一切

なんぢらの口(くち)より出(いだ)すな、ただ時(とき)に随(したが)ひて人(ひと)の徳(とく)を建(た)つべき善(よ)き言(ことば)
を出(いだ)して、聽(き)く者(もの)に益(えき)を得(え)させよ。三〇神(かみ)の聖靈(せいれい)を憂(うれ)ひしむな、汝(なんぢ)
らは贖罪(あがなひ)の日(ひ)のために聖靈(せいれい)にて印(いん)せられたるなり。三一凡(すべ)ての苦(にがき)・
憤恚(いきどほり)・怒(いかり)・喧噪(さわぎ)・誹謗(そしり)、および凡(すべ)ての惡意(あくい)を汝等(なんぢら)より棄(す)てよ。三
二互(たがひ)に仁慈(なさけ)と憐憫(あはれみ)とあれ、キリストに在(あ)りて神(かみ)の汝(なんぢ)らを赦(ゆる)し給(たま)ひし
ごとく、汝(なんぢ)らも互(たがひ)に赦(ゆる)せ。
第五章 一されば汝(なんぢ)ら愛(あい)せらるる子供(こども)のごとく、神(かみ)に效(なら)ふ者(もの)となれ。
二又(また)キリストの汝(なんぢ)らを愛(あい)し、我(われ)らのために己(おのれ)を馨(かうば)しき香(かをり)の献物(ささげもの)
とし犧牲(いけにへ)として、神(かみ)に献(ささ)げ給(たま)ひし如(ごと)く、愛(あい)の中(うち)をあゆめ。三聖徒(せいと)たる
に適(かな)ふごとく、淫行(いんかう)、もろもろの汚穢(けがれ)、また慳貪(むさぼり)を汝(なんぢ)らの間(うち)にて稱(とな)
ふる事(こと)だに爲(す)な。四また恥(は)づべき言(ことば)・愚(おろか)なる話(はなし)・戲言(たはむれごと)を言(い)ふな、
これ宜(よろ)しからぬ事(こと)なり、寧(むし)ろ感謝(かんしゃ)せよ。五凡(すべ)て淫行(いんかう)のもの、汚(けが)れたる
もの、貪(むさぼ)るもの、即(すなは)ち偶像(ぐうざう)を拜(をが)む者(もの)どもの、キリストと神(かみ)との國(くに)
の世嗣(よつぎ)たることを得(え)ざるは、汝(なんぢ)らの確(かた)く知(し)る所(ところ)なり。六汝(なんぢ)ら人(ひと)の
虚(むな)しき言(ことば)に欺(あざむ)かるな、神(かみ)の怒(いかり)はこれらの事(こと)によりて不從順(ふじゅうじゅん)の子(こ)

らに及ぶなり。七この故に彼らに與する者となるな。八汝ら舊は闇
なりしが、今は主に在りて光となれり、光の子供のごとく歩め。九
（光の結ぶ實はもろもろの善と正義と誠實となり）一〇主の喜び給
ふところの如何なるかを辨へ知れ。一一實を結ばぬ暗き業に與する
事なく、反つて之を責めよ。一二彼らが隱れて行ふことは之を言ふ
だに恥づべき事なり。一三凡てかかる事は、責めらるるとき光にて
顯さる、顯さるる者はみな光となるなり。一四この故に言ひ給ふ
『眠れる者よ、起きよ、死人の中より立ち上れ。
さらばキリスト汝を照し給はん』
一五されば愼みてその歩むところに心せよ、智からぬ者の如くせ
ず、智き者の如くし、一六また機會をうかがへ、そは時惡しければな
り。一七この故に愚とならず、主の御意の如何を悟れ。一八酒に醉ふ
な、放蕩はその中にあり、むしろ御靈にて滿され、一九詩と讚美と靈
の歌とをもて語り合ひ、また主に向ひて心より且うたひ、かつ讚美
せよ。二〇凡ての事に就きて常に我らの主イエス・キリストの名によ

りて父なる神に感謝し、二一キリストを畏みて互に服へ。二二妻た
る者よ、主に服ふごとく己の夫に服へ。二三キリストは自ら體
の救主にして教會の首なるごとく、夫は妻の首なればなり。二
四教會のキリストに服ふごとく、妻も凡てのこと夫に服へ。二五
夫たる者よ、キリストの教會を愛し、之がために己を捨て給ひしご
とく、汝らも妻を愛せよ。二六キリストの己を捨て給ひしは、水の
洗をもて言によりて教會を潔め、これを聖なる者として、二七汚點
なく皺なく、凡て斯くのごとき類なく、潔き瑕なき尊き教會を、お
のれの前に建てん爲なり。二八斯くのごとく夫はその妻を己の體
のごとく愛すべし。妻を愛するは己を愛するなり。二九己の身を憎
む者は曾てあることなし、皆これを育て養ふ、キリストの教會に於
けるも亦かくの如し。三〇我らは彼の體の肢なり、三一『この故に人
は父母を離れ、その妻に合ひて二人のもの一體となるべし』三二この
奧義は大なり、わが言ふ所はキリストと教會とを指せるなり。三
三汝等おのおの己のごとく其の妻を愛せよ、妻も亦その夫を敬ふ

べし。
第六章 一子たる者よ、なんぢら主にありて兩親に順へ、これ正し
き事なり。二『なんぢの父母を敬へ（これ約束を加へたる誡命の首
なり）三さらばなんぢ幸福を得、また地の上に壽長からん』四父た
る者よ、汝らの子供を怒らすな、ただ主の薫陶と訓戒とをもて育て
よ。五僕たる者よ、キリストに從ふごとく畏れをののき、眞心をも
て肉につける主人に從へ。六人を喜ばする者の如く、ただ目の前の
事のみを勤めず、キリストの僕のごとく心より神の御旨をおこな
ひ、七人に事ふる如くせず、主に事ふるごとく快くつかへよ。八そ
は奴隷にもあれ、自主にもあれ、各自おこなふ善き業によりて主より
其の報を受くることを汝ら知ればなり。九主人たる者よ、汝らも
僕に對し斯く行ひて威嚇を止めよ、そは彼らと汝らとの主は天に
在して、偏り視たまふことなきを汝ら知ればなり。一〇終に言は
ん、汝ら主にありて其の大能の勢威に賴りて強かれ。一一惡魔の術
に向ひて立ち得んために、神の武具をもて鎧ふべし。一二我らは血肉

と戰ふにあらず、政治・權威、この世の暗黒を掌どるもの、天の
處にある惡の靈と戰ふなり。一三この故に神の武具を執れ、汝ら
惡しき日に遭ひて仇に立ちむかひ、凡ての事を成就して立ち得んた
めなり。一四汝ら立つに誠を帶として腰に結び、正義を胸當として
胸に當て、一五平和の福音の備を靴として足に穿け。一六この他なほ
信仰の盾を執れ、之をもて惡しき者の凡ての火矢を消すことを得ん。
一七また救の冑および御靈の劍、すなはち神の言を執れ。一八常
にさまざまの祈と願とをなし、御靈によりて祈り、また目を覺して
凡ての聖徒のためにも願ひて倦まざれ。一九又わが口を開くとき言
を賜はり、憚らずして福音の奧義を示し、二〇語るべき所を憚ら
ず語り得るように、我がためにも祈れ、我はこの福音のために使者と
なりて鎖に繋がれたり。二一愛する兄弟、主に在りて忠實なる役者
テキコ、我が情況わが爲す所のことを、具に汝らに知らせん。二
二われ彼を遣すは、我が事を汝らに知らせて、汝らの心を慰め
しめん爲なり。二三願はくは父なる神および主イエス・キリストより

賜ふ平安と、信仰に伴へる愛と、兄弟たちに在らんことを。
二四 願
はくは朽ちぬ愛をもて我らの主イエス・キリストを愛する凡ての者
に御恵あらんことを。

ピリピ人への書

第一章一キリスト・イエスの僕たる我ら、パウロとテモテと、書
をピリピにをるキリスト・イエスに在る凡ての聖徒、および監督た
ちと執事たちとに贈る。二願はくは我らの父なる神および主イエス・
キリストより賜ふ恩恵と平安と汝らに在らんことを。三われ汝らを
憶ふごとに、我が神に感謝し、四常に汝ら衆のために、願のつどつ
ど喜びて願をなす。五是なんぢら初の日より今に至るまで、福音
を弘むることに與るが故なり。六我は汝らの衷に善き業を始め給ひ
し者の、キリスト・イエスの日まで之を全うし給ふべきことを確信
す。七わが斯くも汝ら衆を思ふは當然の事なり、我が縲絏にある時
にも、福音を辯明して之を堅うする時にも、汝らは皆われと共に恩恵
に與るによりて、我が心にあればなり。八我いかにキリスト・イエ

スの心をもて汝ら衆を戀ひ慕ふか、その證をなし給ふ者は神な
り。九我は祈る、汝らの愛、知識ともろもろの悟とによりて彌が上
にも増し加はり、一〇善惡を辨へ知り、キリストの日に至るまで潔
よくして躓くことなく、一一イエス・キリストによる義の果を充して、
神の榮光と譽とを顯さん事を。一二兄弟よ、我はわが身にありし
事の反つて福音の進歩の助となりしを汝らが知らんことを欲する
なり。一三即ち我が縲絏のキリストの爲なることは、近衞の全營に
も、他の凡ての人にも顯れ、一四かつ兄弟のうちの多くの者は、わ
が縲絏によりて主を信ずる心を厚くし、懼るる事なく、ますます勇
みて神の言を語るに至れり。一五或者は嫉妬と分爭とによりてキリ
ストを宣傳へ、あるものは善き心によりて之を宣傳ふ。一六これは
福音を辯明するために我が立てられたることを知り、愛によりてキリ
ストを宣べ、一七かれは我が縲絏に患難を加へんと思ひ、誠意によら
ず、徒黨によりて之を宣ぶ。一八さらば如何、外貌にもあれ、眞にも
あれ、孰も宣ぶる所はキリストなれば、我これを喜ぶ、また之を

喜ばん。一九そは此のことの汝らの祈とイエス・キリストの御靈
の賜物とによりて、我が救となるべきを知ればなり。二〇これは我
が何事をも恥ぢずして、今も常のごとく聊かも臆することなく、生
くるにも、死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇められ給はん
ことを切に願ひ、また望むところに適へるなり。二一我にとりて、生
くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。二二されど若し肉體にて
生くる事わが勤勞の果となるならば、孰を選ぶべきか、我これを知
らず。二三我はこの二つの間に介まれたり。わが願は世を去りてキ
リストと偕に居らんことなり、これ遙に勝るなり。二四されど我な
ほ肉體に留るは汝らの爲に必要なり。二五我これを確信する故に、
なほ存へて汝らの信仰の進歩と喜悦とのために、汝等すべての者
と偕に留らんことを知る。二六これは我が再び汝らに到ることに
より、汝らキリスト・イエスに在りて我にかかはる誇を増さん爲な
り。二七汝等ただキリストの福音に相應しく日を過せ、さらば我が
往きて汝らを見るも、離れゐて汝らの事をきくも、汝らが靈を一

つにして堅く立ち、心を一つにして福音の信仰のために共に戰ひ、
二八凡ての事において逆ふ者に驚かされぬを知ることを得ん。その
驚かされぬは、彼らには亡の兆、なんぢらには救の兆にて、此
は神より出づるなり。二九汝等はキリストのために啻に彼を信ずる
事のみならず、また彼のために苦しむ事をも賜はりたればなり。三〇
汝らが遭ふ戰鬪は、曩に我の上に見しところ、今また我に就きて聞
くところに同じ。

第二章一この故に若しキリストによる勸、愛による慰安、御靈の
交際、また憐憫と慈悲とあらば、二なんぢら念を同じうし、愛を同じ
うし、心を合せ、思ふことを一つにして、我が喜悦を充しめよ。三
何事にまれ、徒黨また虚榮のためにすな、おのおの謙遜をもて互に
人を己に勝れりとせよ。四おのおの己が事のみを顧みず、人の事を
も顧みよ。五汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。六即ち彼
は神の貌にて居給ひしが、神と等しくある事を固く保たんとは思は
ず、七反つて己を空しうし、僕の貌をとりて人の如くなれり。八

既に人の状にて現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至
るまで順ひ給へり。九この故に神は彼を高く上げて、之に諸般の名
にまさる名を賜ひたり。一〇これ天に在るもの、地に在るもの、地の
下にあるもの、悉とくイエスの名によりて膝を屈め、一一且もろも
ろの舌の『イエス・キリストは主なり』と言ひあらはして、榮光を
父なる神に歸せん爲なり。一二されば我が愛する者よ、なんぢら常に
服ひしごとく、我が居る時のみならず、我が居らぬ今もますます服
ひ、畏れ戰きて己が救を全うせよ。一三神は御意を成さんために
汝らの衷にはたらき、汝等をして志望をたて、業を行はしめ給へ
ばなり。一四なんぢら呟かず疑はずして、凡ての事をおこなへ。一
五是なんぢら責むべき所なく素直にして、此の曲れる邪惡なる時代
に在りて神の瑕なき子とならん爲なり。汝らは生命の言を保ちて、
世の光のごとく此の時代に輝く。一六かくて我が走りしところ勞せ
しところ空しからず、キリストの日にわれ誇ることを得ん。一七さら
ば汝らの信仰の供物と祭とに加へて、我が血を灌ぐとも我は喜ば

ん、なんぢら衆と共に喜ばん。一八かく汝等もよろこべ、我とと
もに喜べ。一九われ汝らの事を知りて慰安を得んとて、速かにテ
モテを汝らに遣さんことを主イエスに頼りて望む。二〇そは彼のほ
かに我と同じ心をもて眞實に汝らのことを慮ぱかる者なければな
り。二一人は皆イエス・キリストの事を求めず、唯おのれの事のみを
求む。二二されどテモテの錬達なるは汝らの知る所なり、即ち子
の父に於ける如く我とともに福音のために勤めたり。二三この故に我
わが身の成行を見ば、直ちに彼を遣さんことを望む。二四我もまた
速かに往くべきを主によりて確信す。二五されど今は先われと共に
働き共に戰ひし兄弟、すなはち汝らの使として我が窮乏を補ひ
しエパフロデトを、汝らに遣すを必要のことと思ふ。二六彼は汝
等すべての者を戀ひしたひ、又おのが病みたることの汝らに聞えし
を以て悲しみ居るに因りてなり。二七彼は實に病にかかりて死ぬば
かりなりしが、神は彼を憐みたまへり、啻に彼のみならず、我をも
憐み、憂に憂を重ねしめ給はざりき。二八この故に急ぎて彼を遣

す、なんぢらが再び彼を見て喜ばん爲なり。又わが憂を少うせ
ん爲なり。二九されば汝ら主にありて歡喜を盡して彼を迎へ、かつ
斯くのごとき人を尊べ。三〇彼は汝らが我を助くるに當り、汝ら
の居らぬを補はんとて、己が生命を賭け、キリストの事業のために
死ぬばかりになりたればなり。

第三章 一 終に言はん、我が兄弟よ、なんぢら主に在りて喜べ。な
んぢらに同じことを書きおくるは、我に煩はしきことなく、汝等に
は安然なり。二なんぢら犬に心せよ、惡しき勞動人に心せよ、肉の
割禮ある者に心せよ。三神の御靈によりて禮拜をなし、キリスト・
イエスによりて誇り、肉を恃まぬ我らは眞の割禮ある者なり。四さ
れど我は肉にも恃むことを得るなり。もし他の人、肉に恃むとこ
ろありと思はば、我は更に恃む所あり。五我は八日めに割禮を受け
たる者にして、イスラエルの血統、ベニヤミンの族、ヘブル人より
出でたるヘブル人なり。律法に就きてはパリサイ人、六熱心につきて
は教會を迫害したるもの、律法によれる義に就きては責むべき所

なかりし者なり。七されど曩に我が益たりし事はキリストのために
損と思ふに至れり。八然り、我はわが主キリスト・イエスを知ること
の優れたるために、凡ての物を損なりと思ひ、彼のために既に凡て
の物を損せしが、之を塵芥のごとく思ふ。九これキリストを獲、かつ
律法による己が義ならで、唯キリストを信ずる信仰による義、すな
はち信仰に基きて神より賜はる義を保ち、キリストに在るを認めら
れ、一〇キリストとその復活の力とを知り、又その死に效ひて彼の
苦難にあづかり、一一如何にもして死人の中より甦へることを得ん
が爲なり。一二われ既に取れり、既に全うせられたりと言ふにあら
ず、唯これを捉へんとて追ひ求む。キリストは之を得させんとて我
を捉へたまへり。一三兄弟よ、われは既に捉へたりと思はず、唯こ
の一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向ひて勵み、一四
標準を指して進み、神のキリスト・イエスに由りて上に召したまふ召
にかかはる褒美を得んとて之を追ひ求む。一五されば我等のうち成人
したる者は、みな斯くのごとき思を懷くべし、汝等もし何事にて

も異なる思を懐き居らば、神これをも示し給はん。一六ただ我等は
その至れる所に隨ひて歩むべし。一七兄弟よ、なんぢら諸共に我
に效ふものとなれ、且なんぢらの模範となる我らに循ひて歩むもの
を視よ。一八そは我しばしば汝らに告げ、今また涙を流して告ぐる
如く、キリストの十字架に敵して歩む者おほければなり。一九彼らの
終は滅亡なり。おのが腹を神となし、己が恥を光榮となし、ただ
地の事のみを念ふ。二〇されど我らの國籍は天に在り、我らは主イエ
ス・キリストの救主として其の處より來りたまふを待つ。二一彼は
萬物を己に服はせ得る能力によりて、我らの卑しき状の體を化へ
て、己が榮光の體に象らせ給はん。

第四章一この故に我が愛するところ慕ふところの兄弟、われの喜悦
われの冠冕たる愛する者よ、斯くのごとく主にありて堅く立て。二我
ユウオデヤに勸めスントケに勸む、主にありて心を同じうせんこと
を。三また眞實に我と軛を共にする者よ、なんぢに求む。この二人
の女を助けよ。彼らはクレメンス其のほか生命の書に名を録された

る我が同勞者と同じく、福音のために我とともに勤めたり。四汝ら
常に主にありて喜べ、我また言ふ、なんぢら喜べ。五凡ての人に汝
らの寛容を知らしめよ、主は近し。六何事をも思ひ煩ふな、ただ事
ごとに祈をなし、願をなし、感謝して汝らの求を神に告げよ。七
さらば凡て人の思にすぐる神の平安は、汝らの心と思とをキリ
スト・イエスによりて守らん。八終に言はん、兄弟よ、凡そ眞な
ること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、凡そ潔よきこと、
凡そ愛すべきこと、凡そ令聞あること、如何なる徳いかなる譽に
ても、汝等これを念へ。九なんぢら我に學びしところ、受けしとこ
ろ、聞きしところ、見し所を皆おこなへ、さらば平和の神なんぢら
と偕に在さん。一〇汝らが我を思ふ心の今また萠したるを、われ主
にありて甚く喜ぶ。汝らは固より我を思ひゐたるなれど、機を得
ざりしなり。一一われ窮乏によりて之を言ふにあらず、我は如何なる
狀に居るとも、足ることを學びたればなり。一二我は卑賤にをる道を
知り、富にをる道を知る。また飽くことにも、飢うることにも、富む

ことにも、乏しき事にも、一切の秘訣を得たり。一三我を強くし給ふ
者によりて、凡ての事をなし得るなり。一四されど汝らが我が患難
に與りしは善き事なり。一五ピリピ人よ、汝らも知る、わが汝ら
に福音を傳ふる始、マケドニヤを離れ去るとき、授受して我が事に
與りしは、汝等のみにして、他の教會には無かりき。一六汝らは
我がテサロニケに居りし時に、一度ならず二度までも我が窮乏に物贈
れり。一七これ贈物を求むるにあらず、唯なんぢらの益となる實の
繁からんことを求むるなり。一八我には凡ての物そなはりて餘あり、
既にエパフロデトより汝らの贈物を受けたれば、飽き足れり。これ
は馨しき香にして神の享け給ふところ、喜びたまふ所の供物な
り。一九かくてわが神は己の富に隨ひ、キリスト・イエスによりて
汝らの凡ての窮乏を榮光のうちに補ひ給はん。二〇願はくは榮光
世々限りなく、我らの父なる神にあれ、アァメン。二一汝らキリス
ト・イエスに在りて聖徒おのおのに安否を問へ、我と偕にある兄弟
たち汝らに安否を問ふ。二二凡ての聖徒、殊にカイザルの家のもの、

汝らに安否を問ふ。二三願はくは主イエス・キリストの恩恵、なん
ぢらの靈と偕に在らんことを。

コロサイ人への書

第一章 一 神の御心によりてキリスト・イエスの使徒となれるパウ
ロ及び兄弟テモテ、二 書をコロサイに居る聖徒、キリストにありて
忠實なる兄弟に贈る。願はくは我らの父なる神より賜ふ恩惠と平安
と汝らに在らんことを。三 我らは常に汝らの爲に祈りて、我らの主
イエス・キリストの父なる神に感謝す。四 これキリスト・イエスを信
ずる汝らの信仰と、凡ての聖徒に對する汝らの愛とにつきて聞き
たればなり。五 かく聖徒を愛するは、汝らの爲に天に蓄へあるも
のを望むに因る。この望のことは汝らに及べる福音の眞の言に
よりて汝らが曾て聞きし所なり。六 この福音は全世界にも及び、果
を結びて増々大になれり。汝らが神の恩惠をききて眞に之を知り
し日より、汝らの中に然りしが如し。七 汝らが、我らと共に僕た

る愛するエパフラスより學びたるは、この福音なり。彼は汝らの爲
にキリストの忠實なる役者にして、八汝らが御靈によりて懷ける愛
を我らに告げたり。九この故に我らこの事を聞きし日より、汝等の
ために絶えず祈りかつ求むるは、汝ら靈のもろもろの知慧と穎悟と
をもて神の御意を具に知り、一〇凡てのこと主を悅ばせんが爲に、
その御意に從ひて歩み、凡ての善き業によりて果を結び、いよいよ
神を知り、一一また神の榮光の勢威に隨ひて賜ふもろもろの力に
よりて強くなり、凡ての事よろこびて忍び、かつ耐へ、一二而して我
らを光にある聖徒の嗣業に與るに足る者とし給ひし父に感謝せん
事なり。一三父は我らを暗黑の權威より救ひ出して、その愛しみ給
ふ御子の國に遷したまへり。一四我らは御子に在りて贖罪すなはち罪
の赦を得るなり。一五彼は見得べからざる神の像にして、萬の造
られし物の先に生れ給へる者なり。一六萬の物は彼によりて造らる、
天に在るもの、地に在るもの、見ゆるもの、見えぬもの、或は位
、あるひは支配、あるひは政治、あるひは權威、みな彼によりて造

られ、彼のために造られたればなり。一七彼は萬の物より先にあり、
萬の物は彼によりて保つことを得るなり。一八而して彼はその體な
る教會の首なり、彼は始にして死人の中より最先に生れ給ひし者
なり。これ凡ての事に就きて長とならん爲なり。一九神は凡ての滿ち
足れる徳を彼に宿して、二〇その十字架の血によりて平和をなし、或
は地にあるもの、或は天にあるもの、萬の物をして己と和がしむ
るを善しとし給ひたればなり。二一汝等もとは惡しき業を行ひて神
に遠ざかり、心にて其の敵となりしが、二二今は神キリストの肉の
體をもて、其の死により汝等をして己と和がしめ、潔く瑕なく責
むべき所なくして、己の前に立たしめんし給ふなり。二三汝等も
し信仰に止り、之に基きて堅く立ち、福音の望より移らずば、斯
くせらるることを得べし。此の福音は汝らの聞きし所、また天の
下なる凡ての造られし物に宣傳へられたるものにして、我パウロはそ
の役者となれり。二四われ今なんぢらの爲に受くる苦難を喜び、又
キリストの體なる教會のために、我が身をもてキリストの患難の

缺けたるを補ふ。二五われ神より汝等のために與へられたる職に
隨ひて教會の役者となれり。二六これ神の言、すなはち歷世歷代
かくれて、今神の聖徒に顯れたる奧義を宣傳へんとてなり。二七神
は聖徒をして異邦人の中なるこの奧義の榮光の富の如何ばかりなる
かを知らしめんと欲し給へり、此の奧義は汝らの中に在すキリスト
にして榮光の望なり。二八我らは此のキリストを傳へ、知慧を盡し
て凡ての人を訓戒し、凡ての人を教ふ。これ凡ての人をしてキリス
トに在り、全くなりて神の前に立つことを得しめん爲なり。二九わ
れ之がために我が衷に能力をもて働き給ふものの活動にしたがひ、
力を盡して勞するなり。

第二章
一我なんぢら及びラオデキヤに居る人々、その他すべて我
が肉體の顏をまだ見ぬ人のために、如何に苦心するかを汝らの知ら
んことを欲す。二かく苦心するは、彼らが心慰められ、愛をもて相
列り、全き穎悟の凡ての富を得て、神の奧義なるキリストを知ら
ん爲なり。三キリストには知慧と知識との凡ての寶藏れあり。四
我

これを言ふは、巧なる言をもて人の汝らを欺くこと勿らん爲な
り。五われ肉體にては汝らと離れ居れど、靈にては汝らと偕に居り
て喜び、また汝らの秩序あるとキリストに對する信仰の堅きとを
見るなり。六汝らキリスト・イエスを主として受けたるにより、其
のごとく彼に在りて歩め。七また彼に根ざしてその上に建てられ、か
つ教へられし如く信仰を堅くし、溢るるばかり感謝せよ。八なんぢら
心すべし、恐らくはキリストに從はずして人の言傳と世の小學と
に從ひ、人を惑す虚しき哲學をもて汝らを奪ひ去る者あらん。九
それ神の滿ち足れる徳はことごとく形體をなしてキリストに宿れり。
一〇汝らは彼に在りて滿ち足れるなり。彼は凡ての政治と權威との
首なり。一一汝らまた彼に在りて手をもてせざる割禮を受けたり、
即ち肉の體を脱ぎ去るものにして、キリストの割禮なり。一二汝
らバプテスマを受けしとき、彼とともに葬られ、又かれを死人の中
より甦へらせ給ひし神の活動を信ずるによりて、彼と共に甦へらせ
られたり。一三汝ら前には諸般の咎と肉の割禮なきとに因りて死に

たる者なりしが、神は汝らを彼と共に生かし、我らの凡ての咎を赦
し、一四かつ我らを責むる規の證書、すなはち我らに逆ふ證書を
塗抹し、これを中間より取り去りて十字架につけ、一五政治と權威
とを褫ぎて之を公然に示し、十字架によりて凱旋し給へり。一六然れ
ば汝ら食物あるひは飲物につき、祭あるいは月朔あるいは安息日の
事につきて、誰にも審かるな。一七此等はみな來らんとする者の影に
して、其の本體はキリストに屬けり。一八殊更に謙遜をよそほひ御使
を拜する者に、汝らの褒美を奪はるな。かかる者は見し所のもの
に基き、肉の念に隨ひて徒らに誇り、一九首に屬くことをせざ
るなり。全體は、この首によりて節々維々に助けられ、相聯り、神
の育にて生長するなり。二〇汝等もしキリストと共に死にて此の
世の小學を離れしならば、何ぞなほ世に生ける者のごとく人の誡命
と教とに循ひて二一『捫るな、味ふな、觸るな』と云ふ規の下に
在るか。二二（此等はみな用ふれば盡くる物なり）二三これらの誡命
は、みづから定めたる禮拜と謙遜と身を惜まぬ事とによりて知慧あ

るごとく見ゆれど、實は肉慾の放縱を防ぐ力なし。
第三章 一 汝等もしキリストと共に甦へらせられしならば、上にあ
るものを求めよ、キリスト彼處に在りて神の右に坐し給ふなり。二 汝
ら上にあるものを念ひ、地に在るものを念ふな、三 汝らは死にたる
者にして、其の生命はキリストとともに神の中に隱れ在ればなり。四
我らの生命なるキリストの現れ給ふとき、汝らも之とともに榮光
のうちに現れん。五 されば地にある肢體、すなはち淫行・汚穢・情
慾・惡慾・また慳貪を殺せ、慳貪は偶像崇拜なり。六 神の怒は、こ
れらの事によりて不從順の子らに來るなり。七 汝らもかかる人の
中に日を送りし時は、これらの惡しき事に歩めり。八 されど今は凡て
此等のこと及び怒・憤恚・惡意を棄て、譏と恥づべき言とを汝
らの口より棄てよ。九 互に虚言をいふな、汝らは既に舊き人とその
行爲とを脱ぎて、一〇 新しき人を著たればなり。この新しき人は、
これを造り給ひしものの像に循ひ、いよいよ新になりて知識に至
るなり。一一 かくてギリシヤ人とユダヤ人、割禮と無割禮、あるひは

夷狄、スクテヤ人・奴隷・自主の別ある事なし、それキリストは萬
の物なり、萬のものの中にあり。一二この故に汝らは神の選民にし
て聖なる者また愛せらるる者なれば、慈悲の心・仁慈・謙遜・柔和
・寛容を著よ。一三また互に忍びあひ、若し人に責むべき事あらば
互に恕せ、主の汝らを恕し給へる如く汝らも然すべし。一四凡て
此等のものの上に愛を加へよ、愛は徳を全うする帶なり。一五キリ
ストの平和をして汝らの心を掌どらしめよ、汝らの召されて一體
となりたるはこれが爲なり、汝ら感謝の心を懷け。一六キリストの
言をして豐に汝らの衷に住ましめ、凡ての知慧によりて、詩と讃美
と靈の歌とをもて、互に教へ互に訓戒し、恩惠に感じて心のうち
に神を讃美せよ。一七また爲す所の凡ての事、あるひは言あるひは
行爲、みな主イエスの名に頼りて爲し、彼によりて父なる神に感謝せ
よ。一八妻たる者よ、その夫に服へ、これ主にある者のなすべき事
なり。一九夫たる者よ、その妻を愛せよ、苦をもて之を待ふな。二
〇子たる者よ、凡ての事みな兩親に順へ、これ主の喜びたまふ所

なり。二一父たる者よ、汝らの子供を怒らすな、或は落膽すること
あらん。二二僕たる者よ、凡ての事みな肉につける主人にしたがへ、
人を喜ばする者の如く、ただ眼の前の事のみを勤めず、主を畏れ、
眞心をもて從へ。二三汝ら何事をなすにも人に事ふる如くせず、主
に事ふる如く心より行へ。二四汝らは主より報として嗣業を受く
ることを知ればなり。汝らは主キリストに事ふる者なり。二五不義
を行ふ者はその不義の報を受けん、主は偏り視給ふことなし。
第四章一主人たる者よ、汝らも天に主あるを知れば、義と公平と
をもて其の僕をあしらへ。二汝ら感謝しつつ目を覺して祈を常に
せよ。三また我らの爲にも祈りて、神の我らに御言を傳ふる門をひら
き、我等をしてキリストの奧義を語らしめ、四之を我が語るべき如く
顯させ給はんことを願へ、我はこの奧義のために繫がれたり。五な
んぢら機をうかがひ、外の人に對し知慧をもて行へ。六汝らの言
は常に惠を用ひ、鹽にて味つけよ。然らば如何にして各人に答ふべ
きかを知らん。七愛する兄弟、忠實なる役者、主にありて我とともに

僕たるテキコ、我がことを具に汝らに知らせん。八われ殊に彼を
汝らに遣すは、我らの事を知らしめ、又なんぢらの心を慰めしめ
ん爲なり。九汝らの中の一人、忠實なる愛する兄弟オネシモを彼と
共につかはす、彼等この處の事を具に汝らに知らせん。一〇我と共
に囚人となれるアリスタルコ及びバルナバの從弟なるマルコ、汝ら
に安否を問ふ。此のマルコに就きては汝ら既に命を受けたり、彼も
し汝らに到らば之を接けよ。一一またユストと云へるイエス汝らに
安否を問ふ。割禮の者の中ただ此の三人のみ、神の國のために働く
我が同勞者にして我が慰安となりたる者なり。一二汝らの中の一人
にてキリスト・イエスの僕なるエパフラス汝らに安否を問ふ。彼は
常に汝らの爲に力を盡して祈をなし、汝らが全くなり、凡て神
の御意を確信して立たんことを願ふ。一三我かれが汝らとラオデキ
ヤ及びヒエラポリスに在る者との爲に甚く心を勞することを證す。
一四愛する醫者ルカ及びデマス汝らに安否を問ふ。一五汝らラオデ
キヤにある兄弟とヌンパ及びその家にある教會とに安否を問へ。一

六この書(ふみ)を汝(なんぢ)らの中(うち)にて讀(よ)みたらば、之(これ)をラオデキヤ人(ひと)の教會(けうくわい)にも
讀(よ)ませ、汝等(なんぢら)はまたラオデキヤより來(きた)る書(ふみ)を讀(よ)め。一七アルキポに
言(い)へ『主(しゅ)にありて受(う)けし職(つとめ)を愼(つつし)みて盡(つく)せ』と。一八我(われ)パウロ手(て)づか
ら安否(あんぴ)を問(と)ふ。わが縲絏(なはめ)を記憶(きおく)せよ。願(ねが)はくは御惠(みめぐみ)なんぢらと偕(とも)に
在(あ)らんことを。

テサロニケ人への前の書

第一章 一パウロ、シルワノ、テモテ、書を父なる神および主イエス・
キリストにあるテサロニケ人の教會に贈る。願はくは恩惠と平安と
汝らに在らんことを。二われら祈のときに汝らを憶えて、常に汝
ら衆人のために神に感謝す。三これ汝らが信仰のはたらき、愛の勞苦
、主イエス・キリストに對する望の忍耐を、我らの父なる神の前に
絶えず念ふに因りてなり。四神に愛せらるる兄弟よ、また汝らの選
ばれたることを知るに因りてなり。五それ我らの福音の汝らに至り
しは、言にのみ由らず、能力と聖靈と大なる確信とに由れり。且
われらが汝らの中にありて汝らの爲に如何なる行爲をなししかは、
汝らの知る所なり。六かくて汝らは大なる患難のうちにも、聖靈
による喜悅をもて御言をうけ、我ら及び主に效ふ者となり、七而して

マケドニヤ及びアカヤに在る凡ての信者の模範となれり。八それは主
のことば汝等より出でて、啻にマケドニヤ及びアカヤに響きしのみ
ならず、神に對する汝らの信仰のことは諸方に弘りたるなり。さ
れば之に就きては何をも語るに及ばず。九人々親しく我らが汝らの
中に入りし状を告げ、また汝らが偶像を棄てて神に歸し、活ける眞
の神に事へ、一〇神の死人の中より甦へらせ給ひし御子、すなはち
我らを來らんとする怒より救ひ出すイエスの、天より降りたまふを
待ち望むことを告ぐればなり。

第二章一兄弟よ、我らの汝らに到りしことの空しからざりしは、
汝ら自ら知る。二前に我らは汝らの知るごとく、ピリピにて苦難
と侮辱とを受けたれど、我らの神に頼りて大なる紛争のうちに、憚
らず神の福音を汝らに語れり。三我らの勸は、迷より出でず、汚穢
より出でず、詭計を用ひず、四神に嘉せられて福音を委ねられたる者
なれば、人を喜ばせんとせず、我らの心を鑒たまふ神を喜ばせ奉
つらんとして語るなり。五我らは汝らの知るごとく何時にても諂諛

の言を用ひず、事によせて慳貪をなさず（神これを證し給ふ）六キ
リストの使徒として重んぜらるべき者なれども、汝らにも他の者に
も人よりは譽を求めず、七汝らの中にありて優しきこと、母の己が
子を育てやしなふ如くなりき。八かく我らは汝らを戀ひ慕ひ、なん
ぢらは我らの愛する者となりたれば、啻に神の福音のみならず、我ら
の生命をも與へんと願へり。九兄弟よ、なんぢらは我らの勞と苦難
とを記憶す、われらは汝らの中の一人をも累はすまじとて、夜晝工
をなし、勞しつつ福音を宣傳へたり。一〇また信じたる汝等にむか
ひて、如何に潔く正しく責むべき所なく行ひしかは、汝らも證し
神も證し給ふなり。一一汝らは知る、我らが父のその子に對するご
とく各人に對し、一二御國と榮光とに招きたまふ神の心に適ひて歩
むべきことを勸め、また勵まし、また諭したるを。一三かくてなほ我
ら神に感謝して巳まざるは、汝らが神の言を我らより聞きし時、こ
れを人の言とせず、神の言として受けし事なり。これは誠に神の
言にして、汝ら信ずる者のうちに働くなり。一四兄弟よ、汝ら

はユダヤに於けるキリスト・イエスにある神の教會に效ふ者となれ
り、彼らのユダヤ人に苦しめられたる如く、汝らも己が國人に苦し
められたるなり。一五ユダヤ人は主イエスをも預言者をも殺し、我ら
を追ひ出し、一六我らが異邦人に語りて救を得させんとするを拒み、
神を悦ばせず、かつ萬民に逆ひ、かくして常に己が罪を充すなり。
而して神の怒はかれらに臨みてその極に至れり。一七兄弟よ、わ
れら心は離れねど、顔にて暫時なんぢらと離れ居れば、汝らの顔
を見んことを愈々切に願ひて、一八（我パウロは一度ならず再度まで
も）なんぢらに到らんと爲たれど、サタンに妨げられたり。一九我
らの主イエスの來り給ふとき、御前における我らの希望、また喜悦、
また誇の冠冕は誰ぞ、汝らならずや。二〇實に汝らは我らの光榮
、我らの喜悦なり。

第三章一この故に、もはや忍ぶこと能はず、我等のみアテネに留
ることに決し、二キリストの福音において神の役者たる我らの兄弟
テモテを汝らに遣せり。これは汝らを堅うし、また信仰につきて

勸め、三この患難によりて動かさるる者の無からん爲なり。患難に遭
ふことの我らに定りたるは、汝等みづから知る所なり。四我らが
患難に遭ふべきことは、汝らと偕に在りしとき預じめ告げたるが、
今果して汝らの知るごとく然か成れり。五この故に最早われ忍ぶこ
と能はず、試むる者の汝らを試みて、我らの勞の空しくならんこ
とを恐れ、なんぢらの信仰を知らんとて人を遣せり。六然るに今テ
モテ汝らより歸りて、汝らの信仰と愛とにつきて喜ばしき音信を
聞かせ、又なんぢら常に我らを懇ろに念ひ、我らに逢はんことを切
に望み居るは、我らが汝らに逢はんことを望むに等しと告げたるに
よりて、七兄弟よ、われらは諸般の苦難と患難との中にも、汝らの
信仰によりて慰安を得たり。八汝等もし主に在りて堅く立たば我ら
は生くるなり。九汝等につきて我らの神の前によろこぶ大なる喜悦
のために、如何なる感謝をか神に献ぐべき。一〇我らは夜晝祈りて、
汝らの顔を見んことと、汝らの信仰の足らぬ所を補はんことと
を切に願ふ。一一願はくは我らの父なる神みづからと我らの主なるイ

エスと、我らを導きて汝らに到らせ給はんことを。一二願はくは主
、なんぢら相互の愛および凡ての人に對する愛を増し、かつ豐にし
て、我らが汝らを愛する如くならしめ、一三かくして汝らの心を
堅うし、我らの主イエスの、凡ての聖徒と偕に來りたまふ時、われら
の父なる神の前に潔くして責むべき所なからしめ給はんことを。
第四章 一されば兄弟よ、終に我ら主イエスによりて汝らに求め、
かつ勸む。なんぢら如何に歩みて神を悦ばすべきかを我等より學び
し如く、また歩みをる如くに増々進まんことを。二我らが主イエスに
頼りて如何なる命令を與へしかは、汝らの知る所なり。三それ神の
御旨は、なんぢらの潔からんことにして、即ち淫行をつつしみ、四
各人おのが妻を得て、潔くかつ貴くし、五神を知らぬ異邦人のごとく
情慾を放縱にすまじきを知り、六かかる事によりて兄弟を欺き、
また掠めざらんことなり。凡て此等のことを行ふ者に主の報し給
ふは、わが既に汝らに告げ、かつ證せしごとし。七神の我らを招き
給ひしは、汚穢を行はしめん爲にあらず、潔からしめん爲なり。八

この故に之を拒む者は人を拒むにあらず、汝らに聖靈を與へたまふ
神を拒むなり。九兄弟の愛につきては汝らに書きおくるに及ばず。
汝らは互に相愛する事を親しく神に教へられ、一〇また既にマケド
ニヤ全國に在るすべての兄弟を愛するに因りてなり。されど兄弟
よ、なんぢらに勸む。ますます之を行ひ、一一我らが前に命ぜしご
とく力めて安靜にし、己の業をなし、手づから働け。一二これ外の
人に對して正しく行ひ、また自ら乏しきことなからん爲なり。一三
兄弟よ、既に眠れる者のことに就きては、汝らの知らざるを好ま
ず、希望なき他の人のごとく歎かざらん爲なり。一四我らの信ずる如
く、イエスもし死にて甦へり給ひしならば、神はイエスによりて眠
に就きたる者を、イエスと共に連れきたり給ふべきなり。一五われら
主の言をもて汝らに言はん、我等のうち主の來りたまふ時に至る
まで生きて存れる者は、既に眠れる者に決して先だたじ。一六それ主
は、號令と御使の長の聲と神のラッパと共に、みづから天より降り給
はん。その時キリストにある死人まづ甦へり、一七後に生きて存れ

る我らは、彼らと共に雲のうちに取り去られ、空中にて主を迎へ、
斯くていつまでも主と偕に居るべし。一八されば此等の言をもて互
に相慰めよ。

第五章 一兄弟よ、時と期とに就きては汝らに書きおくるに及ばず。
二汝らは主の日の盗人の夜きたるが如くに來ることを、自ら詳細
に知ればなり。三人々の平和無事なりと言ふほどに、滅亡にはかに彼
らの上に來らん、妊める婦に産の苦痛の臨むがごとし、必ず遁る
ることを得じ。四されど兄弟よ、汝らは暗に居らざれば、盗人の來
るごとく其の日なんぢらに追及くことなし。五それ汝等はみな光の
子ども晝の子供なり。我らは夜に屬く者にあらず、暗に屬く者にあ
らず。六されば他の人のごとく眠るべからず、目を覺して愼むべし。
七眠る者は夜眠り、酒に醉ふ者は夜醉ふなり。八されど我らは晝に屬
く者なれば、信仰と愛との胸當を著け、救の望の兜をかむりて愼
むべし。九それ神は我らを怒に遭はせんとにあらず、主イエス・キ
リストに頼りて救を得させんと定め給へるなり。一〇主の我等のた

めに死に給へるは、我等をして寤めをるとも眠りをるとも己と共に
生くることを得しめん爲なり。一一此の故に互に勸めて各自の徳を
建つべし、これ汝らが常に爲す所なり。一二兄弟よ、汝らに求む。
なんぢらの中に勞し、主にありて汝らを治め、汝らを訓戒する者を
重んじ、一三その勤勞によりて厚く之を愛し敬へ。また互に相和
ぐべし。一四兄弟よ、汝らに勸む、妄なる者を訓戒し、落膽せし者
を勵まし、弱き者を扶け、凡ての人に對して寛容なれ。一五誰も人
に對し惡をもて惡に報いぬやう愼め。ただ相互に、また凡ての人に
對して常に善を追ひ求めよ。一六常に喜べ、一七絶えず祈れ、一八凡
てのことを感謝せよ、これキリスト・イエスに由りて神の汝らに求
め給ふ所なり。一九御靈を熄すな、二〇預言を蔑すな、二一凡てのこ
と試みて善きものを守り、二二凡て惡の類に遠ざかれ。二三願はく
は平和の神、みづから汝らを全く潔くし、汝らの靈と心と體と
を全く守りて、我らの主イエス・キリストの來り給ふとき責むべき
所なからしめ給はん事を。二四汝らを召したまふ者は眞實なれば、

之を成し給ふべし。二五兄弟よ、我らのために祈れ。二六きよき接吻
をもて凡ての兄弟の安否を問へ。二七主によりて汝らに命ず、この
書を凡ての兄弟に讀み聞かせよ。二八願はくは主イエス・キリスト
の恩惠、なんぢらと偕に在らんことを。

テサロニケ人への後の書

第一章 一パウロ、シルワノ、テモテ、書を我らの父なる神および
主イエス・キリストに在るテサロニケ人の教會に贈る。二願はくは
父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩惠と平安と汝らに在
らんことを。三兄弟よ、われら汝等につきて常に神に感謝せざるを
得ず、これ當然の事なり。そは汝らの信仰おほいに加はり、各自み
な互の愛を厚くしたればなり。四されば我らは、汝らが忍べる凡て
の迫害と患難との中にありて保ちたる忍耐と信仰とを、神の諸教會
の間に誇る。五これ神の正しき審判の兆にして、汝らが神の國に
相應しき者とならん爲なり。今その御國のために苦難を受く。六汝
らに患難を加ふる者に患難をもて報い、患難を受くる汝らに、我らと
共に安息をもて報い給ふは、神の正しき事なり。七即ち主イエス焔

の中にその能力の御使たちと共に天より顯れ、八神を知らぬ者と我
らの主イエスの福音に服はぬ者とに報いをなし給ふとき、九かかる
者どもは主の顔とその能力の榮光とを離れて、限りなき滅亡の刑罰
を受くべし。一〇その時は主おのが聖徒によりて崇められ、凡ての信
ずる者（なんぢらも我らの證を信じたる者なり）によりて讃められ
んとて來りたまふ日なり。一一これに就きて我ら常に汝らのために
祈るは、我らの神の汝等をして召に適ふ者となし、能力をもて汝
らの凡て善に就ける願と信仰の業とを成就せしめ給はんことなり。
一二これ我らの神および主イエス・キリストの恵によりて、我らの
主イエスの御名の汝らの中に崇められ、又なんぢらも彼に在りて崇
められん爲なり。

第二章
一兄弟よ、我らの主イエス・キリストの來り給ふこと、又
われらが主の許に集ふことに就きては、汝らに求む。二或は靈によ
り、或は言により、或は我等より出でし如き書により、主の日すで
に來れりとて、容易く心を動かしかつ驚かざらん事を。三誰が如何

にすとも、それに欺かるるな。その日の前に背教の事あり、不法の人
すなはち滅亡の子あらはれざるを得ず、四彼はすべて神と稱ふる者お
よび人の拜む者に逆ひ、此等よりも己を高くし、遂に神の聖所に
坐し己を神として見する者なり。五われ汝らと偕に在りし時、これ
らの事を告げしを汝ら憶えぬか。六彼をして己が時に至りて顯れし
めんために、彼を阻めをる者を汝らは知る。七不法の秘密は既に働
けり、然れど此はただ阻めをる者の除かるるまでなり。八かくて其の
とき不法の者あらはれん、而して主イエス御口の氣息をもて彼を殺
し、降臨の輝耀をもて彼を亡し給はん。九彼はサタンの活動に從ひ
て來り、もろもろの虚僞なる力と徴と不思議と、一〇不義のもろも
ろの誑惑とを行ひて、亡ぶる者どもに向はん、彼らは眞理を愛する
愛を受けずして、救はるることを爲ざればなり。一一この故に神は、
彼らが虚僞を信ぜんために惑をその中に働かせ給ふ。一二これ眞理
を信ぜず不義を喜ぶ者の、みな審かれん爲なり。一三されど主に愛
せらるる兄弟よ、われら常に汝等のために神に感謝せざるを得ず。

神は御靈によれる潔と眞理に對する信仰とをもて、始より汝らを
救に選び、一四また我らの主イエス・キリストの榮光を得させんと
て、我らの福音をもて汝らを招き給へばなり。一五されば兄弟よ、
堅く立ちて我らの言あるひは書に由りて教へられたる傳を守れ。一
六我らの主イエス・キリスト、及び我らを愛し恩惠をもて永遠の慰安
と善き望とを與へ給ふ我らの父なる神、一七願はくは汝らの心を
慰めて、凡ての善き業と言とに堅うし給はんことを。
第三章 一終に言はん、兄弟よ、我らの爲に祈れ、主の言の汝ら
の中における如く、疾く弘りて崇められん事と、二われらが無法なる
惡人より救はれんこととを祈れ。そは人みな信仰あるに非ざればな
り。三されど神は眞實なれば、汝らを堅うし汝らを護りて、惡しき
者より救ひ給はん。四かくて我らの命ずることを汝らが今も行ひ、
後もまた行はんことを主によりて信ずるなり。五願はくは主なんぢ
らの心を、神の愛とキリストの忍耐とに導き給はんことを。六兄弟
よ、我らの主イエス・キリストの名によりて汝らに命ず、我等より

受けし傳に從はずして妄に歩む凡ての兄弟に遠ざかれ。七如何に
して我らに效ふべきかは、汝らの自ら知る所なり。我らは汝らの
中にありて妄なる事をせず、八價なしに人のパンを食せず、反つて
汝等のうち一人をも累はさざらんために勞と苦難とをもて、夜晝は
たらけり。九これは權利なき故にあらず、汝等をして我らに效はし
めん爲に、自ら模範となりたるなり。一〇また汝らと偕に在りしと
き、人もし働くことを欲せずば食すべからずと命じたりき。一一聞
く所によれば、汝等のうちに妄に歩みて何の業をもなさず、徒事
にたづさはる者ありと。一二我ら斯くのごとき人に、靜に業をなし
て己のパンを食せんことを、我らの主イエス・キリストに由りて
命じかつ勸む。一三兄弟よ、なんぢら善を行ひて倦むな。一四もし
此の書にいへる我らの言に從はぬ者あらば、その人を認めて交る
ことをすな、彼みづから恥ぢんためなり。一五然れど彼を仇の如くせ
ず、兄弟として訓戒せよ。一六願はくは平和の主、みづから何時に
ても凡ての事に平和を汝らに與へ給はんことを。願はくは主なんぢ

ら凡ての者と偕に在さん事を。一七我パウロ手づから筆を執りて汝
らの安否を問ふ。これ我がすべての書の記章なり。わが書けるもの
は斯くの如し。一八願はくは我らの主イエス・キリストの恩恵なんぢ
ら凡ての者と偕ならんことを。

テモテへの前の書

第一章 一我(われ)らの救主(すくひぬし)なる神(かみ)と我(われ)らの希望(のぞみ)なるキリスト・イエスとの命(めい)によりて、キリスト・イエスの使徒(しと)となれるパウロ、二書(ふみ)を信仰(しんかう)に由(よ)りて我(わ)が眞實(しんじつ)の子(こ)たるテモテに贈(おく)る。願(ねが)はくは父(ちち)なる神(かみ)および我(われ)らの主(しゆ)キリスト・イエスより賜(たま)ふ恩惠(めぐみ)と憐憫(あはれみ)と平安(へいあん)と、汝(なんぢ)に在(あ)らんことを。三我(われ)マケドニヤに往(ゆ)きしとき汝(なんぢ)に勸(すす)めし如(ごと)く、汝(なんぢ)なほエペソに留(とど)まり、ある人々(ひとびと)に命(めい)じて、異(こと)なる教(をしへ)を傳(つた)ふることなく、四昔話(むかしばなし)と窮(きはま)りなき系圖(けいづ)とに心(こころ)を寄(よ)する事(こと)なからしめよ。此等(これら)のことは信仰(しんかう)に基(もとづ)ける神(かみ)の經綸(けいりん)の助(たすけ)とならず、反(かへ)つて議論(ぎろん)を生(しやう)ずるなり。五命令(めいれい)の目的(もくてき)は清(きよ)き心(こころ)と善(よ)き良心(りやうしん)と僞(いつは)りなき信仰(しんかう)とより出(い)づる愛(あい)にあり。六ある人々(ひとびと)これらの事(こと)より外(はづ)れて虚(むな)しき物語(ものがたり)にうつり、七律法(おきて)の教師(けうし)たらんと欲(ほつ)して、反(かへ)つて其(そ)の言(い)ふ所(ところ)その確證(かくしよう)する

所を自ら悟らず。八律法は道理に循ひて之を用ひば善き者なるを
我らは知る。九律法を用ふる者は、律法の正しき人の爲にあらずし
て、不法のもの、服從せぬもの、敬虔ならぬもの、罪あるもの、潔か
らぬもの、妄なるもの、父を撃つもの、母を撃つもの、人を殺す者
、一〇淫行のもの、男色を行ふもの、人を誘拐すもの、僞るもの、
いつはり誓ふ者の爲、そのほか健全なる教に逆ふ凡ての事のため
に設けられたるを知るべし。一一これは我に委ね給ひし幸福なる神の
榮光の福音に循へるなり。一二我に能力を賜ふ我らの主キリスト・
イエスに感謝す。一三われ曩には涜す者、迫害する者、暴行の者なり
しに、我を忠實なる者として、この職に任じ給ひたればなり。われ
信ぜぬ時に知らずして行ひし故に憐憫を蒙れり。一四而して我らの
主の恩恵は、キリスト・イエスに由れる信仰および愛とともに溢るる
ばかり彌増せり。一五『キリスト・イエス罪人を救はん爲に世に來り
給へり』とは、信ずべく正しく受くべき言なり、其の罪人の中にて
我は首なり。一六然るに我が憐憫を蒙りしは、キリスト・イエス我

を首に寛容をことごとく顯し、この後、かれを信じて永遠の生命
を受けんとする者の模範となし給はん爲なり。
一七願はくは萬世の王、すなはち朽ちず見えざる唯一の神に、世々限りなく尊貴と榮光と
あらん事を、アァメン。
一八わが子テモテよ、汝を指したる凡ての
預言に循ひて、我この命令を汝に委ぬ。これ汝がその預言により、
信仰と善き良心とを保ちて、善き戰鬪を戰はん爲なり。
一九或人よき良心を棄てて信仰の破船をなせり。
二〇その中にヒメナオとアレキサンデルとあり、彼らに涜すまじきことを學ばせんとて、我これを
サタンに付せり。

第二章

一されば我第一に勸む、凡ての人のため、王たち及び凡て
權を有つものの爲に、おのおの願・祈禱・とりなし・感謝せよ。
二是われら敬虔と謹嚴とを盡して、安らかに靜に一生を過さん爲なり。
三斯くするは美事にして、我らの救主なる神の御意に適ふこと
なり。
四神は凡ての人の救はれて、眞理を悟るに至らんことを欲し給
ふ。
五それ神は唯一なり、また神と人との間の中保も唯一にして、人

なるキリスト・イエス是なり。六彼は己を與へて凡ての人の贖價と
なり給へり、時至りて證せらる。七我これが爲に立てられて宣傳者
となり、使徒となり（我は眞を言ひて虚僞を言はず）また信仰と眞
とをもて異邦人を教ふる教師となれり。八これ故にわれ望む、男は
怒らず爭はず、何れの處にても潔き手をあげて祈らんことを。九ま
た女は恥を知り、愼みて宜しきに合ふ衣にて己を飾り、編みた
る頭髪と金と眞珠と價貴き衣とを飾とせず、一〇善き業をもて飾
とせんことを。これ神を敬はんと公言する女に適へる事なり。一一
女は凡てのこと從順にして靜に道を學ぶべし。一二われ女の教
ふることと男の上に權を執ることとを許さず、ただ靜にすべし。一
三それアダムは前に造られ、エバは後に造られたり。一四アダムは惑
されず、女は惑されて罪に陷りたるなり。一五然れど女もし愼
みて信仰と愛と潔とに居らば、子を生むことに因りて救はるべし。
第三章一『人もし監督の職を慕はば、これよき業を願ふなり』と
は、信ずべき言なり。二それ監督は責むべき所なく、一人の妻の夫

にして、自ら制し、愼み、品行正しく、旅人を懇ろに待し、能く教へ、三酒を嗜まず、人を打たず、寛容にし、爭はず、金を貪らず、四善く己が家を理め、謹嚴にして子女を從順ならしむる者たるべし。五（人もし己が家を理むることを知らずば、爭でか神の教會を扱ふことを得ん）六また新に教に入りし者ならざるべし、恐らくは傲慢になりて惡魔と同じ審判を受くるに至らん。七外の人にも令聞ある者たるべし、然らずば誹謗と惡魔の羂とに陷らん。八執事もまた同じく謹嚴にして、言を二つにせず、大酒せず、恥づべき利をとらず、九潔き良心をもて信仰の奧義を保つものたるべし。一〇まづ彼らを試みて責むべき所なくば、執事の職に任ずべし。一一女もまた謹嚴にして人を誹らず、自ら制して凡ての事に忠實なる者たるべし。一二執事は一人の妻の夫にして、子女と己が家とを善く理むる者たるべし。一三善く執事の職をなす者は良き地位を得、かつキリスト・イエスに於ける信仰につきて大なる勇氣を得るなり。一四われ速かに汝に往かんことを望めど、今これらの事を書きおくる

は、一五若し遲からんとき、人の如何に神の家に行ふべきかを汝に
知らしめん爲なり。神の家は活ける神の教會なり、眞理の柱、眞理
の基なり。一六實に大なるかな、敬虔の奧義

『キリストは肉にて顯され、
靈にて義とせられ、
御使たちに見られ、
もろもろの國人に宣傳へられ、
世に信ぜられ、
榮光のうちに上げられ給へり』

第四章 一されど御靈あきらかに、或人の後の日に及びて、惑す靈と
惡鬼の教とに心を寄せて、信仰より離れんことを言ひ給ふ。二これ
虛僞をいふ者の僞善に由りてなり。彼らは良心を燒金にて烙かれ、
三婚姻するを禁じ、食を斷つことを命ず。されど食は神の造り給へ
る物にして、信じかつ眞理を知る者の感謝して受くべきものなり。四
神の造り給へる物はみな善し、感謝して受くる時は棄つべき物なし。

五そは神の言と祈とによりて潔めらるるなり。六汝もし此等のこ
とを兄弟に教へば、信仰と汝の従ひたる善き教との言にて養
はるる所のキリスト・イエスの良き役者たるべし。七されど妄なる
談と老いたる女の昔話とを捨てよ、また自ら敬虔を修行せよ。
八體の修行もいささかは益あれど、敬虔は今の生命と後の生命と
の約束を保ちて凡ての事に益あり。九これ信ずべく正しく受くべき
言なり。一〇我らは之がために勞しかつ苦心す、そは我ら凡ての人
、殊に信ずる者の救主なる活ける神に望を置けばなり。一一汝こ
れらの事を命じかつ教へよ。一二なんぢ年若きをもて人に輕んぜらる
な、反つて言にも、行状にも、愛にも、信仰にも、潔にも、信者の
模範となれ。一三わが到るまで、讀むこと勸むること教ふる事に心
を用ひよ。一四なんぢ長老たちの按手を受け、預言によりて賜はり
たる賜物を等閑にすな。一五なんぢ心を傾けて此等のことを專ら
務めよ。汝の進歩の明かならん爲なり。一六なんぢ己とおのれの
教とを愼みて此等のことに怠るな、斯くなして己と聽く者とを

救ふべし。
第五章一老人を譴責すな、反って之を父のごとく勸め、若き人を
兄弟の如くに、二老いたる女を母の如くに勸め、若き女を姉妹の
如くに全き貞潔をもて勸めよ。三寡婦のうちの眞の寡婦を敬へ。
四されど寡婦に子もしくは孫あらば、彼ら先づ己の家に孝を行ひて
親に恩を報ゆることを學ぶべし。これ神の御意にかなふ事なり。五
眞の寡婦にして獨殘りたる者は、望を神におきて、夜も晝も絶え
ず願と祈とを爲す。六されど佚樂を放恣にする寡婦は、生けりと
雖も死にたる者なり。七これらの事を命じて彼らに責むべき所なか
らしめよ。八人もし其の親族、殊に己が家族を顧みずば、信仰を棄
てたる者にて、不信者よりも更に惡しきなり。九六十歳以下の寡婦は
寡婦の籍に記すべからず、記すべきは一人の夫の妻たりし者にして、
一〇善き業の聲聞あり、或は子女をそだて、或は旅人を宿し、或
は聖徒の足を洗ひ、或は惱める者を助くる等、もろもろの善き業に
從ひし者たるべし。一一若き寡婦は籍に記すな、彼らキリストに背

きて心亂るる時は、嫁ぐことを欲し、
一二初の誓約を棄つるに因りて批難を受くべければなり。
一三彼等はまた懶惰に流れて家々を遊びめぐる、啻に懶惰なるのみならず、言多くして徒事にたづさはり、言ふまじき事を言ふ。
一四されば若き寡婦は嫁ぎて子を生み、家を理めて敵に少しにても謗るべき機を與へざらんことを我は欲す。
一五彼らの中には既に迷ひてサタンに從ひたる者あり。
一六信者たる女もし其の家に寡婦あらば、自ら之を助けて教會を煩はすな。これ眞の寡婦を教會の助けん爲なり。
一七善く治むる長老、殊に言と教とをもて勞する長老を一層尊ぶべき者とせよ。
一八聖書に『穀物を碾す牛に口籠を繫くべからず』また『勞動人のその價を得るは相應しきなり』と云へばなり。
一九長老に對する訴訟は二三人の證人なくば受くべからず。
二〇罪を犯せる者をば衆の前にて責めよ、これ他の人をも懼れしめんためなり。
二一われ神とキリスト・イエスと選ばれたる御使たちとの前にて嚴かに汝に命ず、何事をも偏り行はず、偏頗なく此等のことを守れ、
二二輕々しく人に手を按くな、人

の罪に與るな、自ら守りて潔くせよ。二三今よりのち水のみを飲ま
ず、胃のため、又しばしば病に罹る故に、少しく葡萄酒を用ひよ。二
四或人の罪は明かにして先だちて審判に往き、或人の罪は後にした
がふ。二五斯くのごとく善き業も明かなり、然らざる者も遂には隠
るること能はず。

第六章 一おほよそ軛の下にありて奴隷たる者は、おのれの主人を
全く尊ぶべき者とすべし。これ神の名と教との譏られざらん爲な
り。二信者たる主人を有てる者は、その兄弟なるに因りて之を輕ん
ぜず、反つて彌増々これに事ふべし。その益を受くる主人は信者に
して愛せらるる者なればなり。汝これらの事を教へかつ勧めよ。三
もし異なる教を傳へて、健全なる言すなはち我らの主イエス・キ
リストの言と、敬虔にかなふ教とを肯はぬ者あらば、四その人は
傲慢にして何をも知らず、ただ議論と言爭とにのみ耽るなり、之に
よりて嫉妬・爭闘・惡しき念おこり、五また心腐りて眞理をはな
れ、敬虔を利益の道とおもふ者の爭論おこるなり。六されど足ること

を知りて敬虔を守る者は、大なる利益を得るなり。七我らは何をも
携へて世に來らず、また何をも携へて世を去ること能はざればな
り。八ただ衣食あらば足れりとせん。九されど富まんと欲する者は、
誘惑と羂、また人を滅亡と沈淪とに溺らす愚にして害ある各樣の慾
に陷るなり。一〇それ金を愛するは諸般の惡しき事の根なり、ある
人々これを慕ひて信仰より迷ひ、さまざまの痛をもて自ら己を刺
しとほせり。一一神の人よ、なんぢは此等のことを避けて、義と敬虔
と信仰と愛と忍耐と柔和とを追ひ求め、一二信仰の善き戰鬪をたたか
へ、永遠の生命をとらへよ。汝これが爲に召を蒙り、また多くの
證人の前にて善き言明をなせり。一三われ凡ての物を生かしたま
ふ神のまへ、及びポンテオ・ピラトに向ひて善き言明をなし給ひし
キリスト・イエスの前にて汝に命ず。一四汝われらの主イエス・キ
リストの現れたまふ時まで汚點なく責むべき所なく、誡命を守れ。
一五時いたらば幸福なる唯一の君主、もろもろの王の王、もろもろの
主の主、これを顯し給はん。一六主は唯ひとり不死を保ち近づきが

たき光に住み、人の未だ見ず、また見ること能はぬ者なり。願はくは尊貴と限りなき權力と彼にあらんことを、アァメン。一七汝この世の富める者に命ぜよ。高ぶりたる思をもたず、定なき富をたのまずして、唯われらを樂しませんとて萬の物を豐に賜ふ神に依頼み、一八善をおこなひ、善き業に富み、惜みなく施し、分け與ふることを喜び、一九かくて己のために善き基を蓄へ、未來の備をなして眞の生命を捉ふることを爲よと。二〇テモテよ、なんぢ委ねられたる事を守り、妄なる虚しき物語、また僞りて知識と稱ふる反對論を避けよ。二一ある人々この知識を裝ひて信仰より外れたり。願はくは御惠なんじと偕に在らんことを。

テモテへの後の書

第一章一神の御意により、キリスト・イエスにある生命の約束に循
ひて、キリスト・イエスの使徒になれるパウロ、二書を我が愛する子
テモテに贈る。願はくは父なる神および我らの主キリスト・イエス
より賜ふ、恩恵と憐憫と平安と汝に在らんことを。三われ夜も晝も
祈の中に絶えず汝を思ひて、わが先祖に效ひ清き良心をもて事ふ
る神に感謝す。四我なんぢの涙を憶え、わが歡喜の滿ちん爲に汝を
見んことを欲す。五是なんぢに在る虚僞なき信仰をおもひ出すに因り
てなり。その信仰の曩に汝の祖母ロイス及び母ユニケに宿りしごと
く、汝にも然るを確信す。六この故に、わが按手に因りて汝の内に
得たる神の賜物をますます熾にせんことを勸む。七そは神の我らに
賜ひたるは、臆する靈にあらず、能力と愛と謹愼との靈なればなり。

八されば汝われらの主の證をなす事と、主の囚人たる我とを恥とす
な、ただ神の能力に隨ひて福音のために我とともに苦難を忍べ。九
神は我らを救ひ聖なる召をもて召し給へり。是われらの行爲に由る
にあらず、神の御旨にて創世の前にキリスト・イエスをもて我らに賜
ひし恩惠に由るなり。一〇この恩惠は今われらの救主キリスト・イ
エスの現れ給ふに因りて顯れたり。彼は死をほろぼし、福音をもて
生命と朽ちざる事とを明かにし給へり。一一我はこの福音のために
立てられて宣傳者・使徒・教師となれり。一二之がために我これらの
苦難に遭ふ。されど之を恥とせず、我わが依頼む者を知り、且わが委
ねたる者を、かの日に至るまで守り得給ふことを確信すればなり。一
三汝キリスト・イエスにある信仰と愛とをもて我より聽きし健全な
る言の模範を保ち、一四かつ委ねられたる善きものを我等のうちに
宿りたまふ聖靈に頼りて守るべし。一五アジヤに居る者みな我を棄て
しは汝の知る所なり、その中にフゲロとヘルモゲネとあり。一六願
はくは主オネシポロの家に憐憫を賜はんことを。彼はしばしば我を

慰め、又わが鎖を恥とせず。一七そのロマに居りし時には懇ろに
尋ね來りて、遂に逢ひたり。一八願はくは主かの日にいたり主の憐憫
を彼に賜はんことを、彼がエペソにて我に事へしことの如何ばかり
なりしかは、汝の能く知るところなり。
第二章 一わが子よ、汝キリスト・イエスにある恩惠によりて強か
れ。二且おほくの證人の前にて、我より聽きし所のことを他の者に
教へ得る忠實なる人々に委ねよ。三汝キリスト・イエスのよき兵卒
として我とともに苦難を忍べ。四兵卒を務むる者は生活のために纏は
るる事なし、これ募れる者を喜ばせんとすればなり。五技を競ふ者
、もし法に隨ひて競はずば冠冕を得ず。六勞する農夫まづ實の分配
を得べきなり。七汝わが言ふ所をおもへ、主なんぢに凡ての事に就
きて悟を賜はん。八わが福音に云へる如く、ダビデの裔にして死人
の中より甦へり給へるイエス・キリストを憶えよ。九我はこの福音
のために苦難を受けて惡人のごとく繋がるるに至れり、されど神の
言は繋がれたるにあらず。一〇この故に我えらばれたる者のために

凡ての事を忍ぶ。これ彼等をして永遠の光榮と共にキリスト・イエ
スによる救を得しめんとてなり。一一ここに信ずべき言あり『我等
もし彼と共に死にたる者ならば、彼と共に生くべし。一二もし耐へ忍
ばば、彼と共に王となるべし。若し彼を否まば、彼も我らを否み給
はん。一三我らは眞實ならずとも、彼は絶えず眞實にましませり、彼
は己を否み給ふこと能はざればなり』一四汝かれらに此等のことを
思ひ出さしめ、かつ言爭する事なきやう神の前にて嚴かに命ぜよ、
言爭は益なくして聞く者を滅亡に至らしむ。一五なんぢ眞理の言を
正しく教へ、恥づる所なき勞動人となりて、神の前に錬達せる者と
ならんことを勵め。一六また妄なる虚しき物語を避けよ。かかる者
はますます不敬虔に進み、一七その言は脱疽のごとく腐れひろがる
べし、ヒメナオとピレトとは斯くのごとき者の中にあり。一八彼らは
眞理より外れ、復活ははや過ぎたりと云ひて、或人々の信仰を覆
へすなり。一九されど神の据ゑ給へる堅き基は立てり、之に印あり、
記して曰ふ『主おのれの者を知り給ふ』また『凡て主の名を稱ふる者

は不義を離るべし』と。二〇大なる家の中には金銀の器あるのみな
らず、木また土の器もあり、貴きに用ふるものあり、また賤しきに
用ふるものあり。二一人もし賤しきものを離れて自己を潔よくせば
貴きに用ひらるる器となり、淨められて主の用に適ひ、凡ての善き
業に備へらるべし。二二汝わかき時の慾を避け、主を清き心にて呼
び求むる者とともに、義と信仰と愛と平和とを追ひ求めよ。二三愚
なる無學の議論を棄てよ、これより分爭の起るを知ればなり。二四主
の僕は爭ふべからず、凡ての人に優しく能く教へ忍ぶことをなし、
二五逆ふ者をば柔和をもて戒むべし、神あるひは彼らに悔改むる
心を賜ひて眞理を悟らせ給はん。二六彼ら一度は惡魔に囚はれたれ
ど、醒めてその羂をのがれ、神の御心を行ふに至らん。

第三章一されど汝これを知れ、末の世に苦しき時きたらん。二人々
おのれを愛する者・金を愛する者・誇るもの・高ぶる者・罵るもの・
父母に逆ふもの・恩を忘るる者・潔からぬ者、三無情なる者・怨を
解かぬ者・讒る者・節制なき者・殘刻なる者・善を好まぬ者、四友を賣

る者・放縦なる者・傲慢なる者・神よりも快樂を愛する者、五敬虔の
貌をとりてその徳を捨つる者とならん、斯かる類の者を避けよ。六
彼らの中には人の家に潜り入りて愚なる女を虜にする者あり、斯
くせらるる女は罪を積み重ねて各樣の慾に引かれ、七常に學べども
眞理を知る知識に至ること能はず。八彼の者らはヤンネとヤンブレと
がモーセに逆ひし如く、眞理に逆ふもの、心の腐れたる者、また
信仰につきて棄てられたる者なり。九されど此の上になほ進むこと能
はじ、そはかの二人のごとく彼らの愚なる事も亦すべての人に顯
るべければなり。一〇汝は我が教誨・品行・志望・信仰・寛容・愛
・忍耐・迫害、および苦難を知り、一一またアンテオケ、イコニオム、
ルステラにて起りし事、わが如何なる迫害を忍びしかを知る。主は凡
てこれらの中より我を救ひ出したまへり。一二凡そキリスト・イエ
スに在りて敬虔をもて一生を過さんと欲する者は迫害を受くべし。
一三惡しき人と人を欺く者とは、ますます惡にすすみ、人を惑し、
また人に惑されん。一四されど汝は學びて確信したる所に常に居

れ。なんぢ誰より之を學びしかを知り、一五また幼き時より聖なる
書を識りし事を知ればなり。この書はキリスト・イエスを信ずる信仰
によりて救に至らしむる知慧を汝に與へ得るなり。一六聖書はみな
神の感動によるものにして、教誨と譴責と矯正と義を薫陶するとに
益あり。一七これ神の人の全くなりて諸般の善き業に備を全うせ
ん爲なり。

第四章一われ神の前また生ける者と死にたる者とを審かんとし給
ふキリスト・イエスの前にて、その顯現と御國とをおもひて嚴かに
汝に命ず。二なんぢ御言を宣傳へよ、機を得るも機を得ざるも常に
勵め、寛容と教誨とを盡して責め、戒め、勸めよ。三人々健全なる
教に堪へず、耳痒くして私慾のまにまに己がために教師を増し加へ、
四耳を眞理より背けて昔話に移る時來らん。五されど汝は何事に
も愼み、苦難を忍び、傳道者の業をなし、なんぢの職を全うせよ。
六我は今供物として血を灑がんとす、わが去るべき時は近づけり。七
われ善き戰鬪をたたかひ、走るべき道程を果し、信仰を守れり。八今

よりのち義の冠冕わが爲に備はれり。かの日に至りて正しき審判主
なる主、これを我に賜はん、啻に我のみならず、凡てその顯現を慕ふ
者にも賜ふべし。九なんぢ勉めて速かに我に來れ。一〇デマスは此
の世を愛し、我を棄ててテサロニケに往き、クレスケンスはガラテ
ヤに、テトスはダルマテヤに往きて、一一唯ルカのみ我とともに居る
なり。汝マルコを連れて共に來れ、彼は職のために我に益あれば
なり。一二我テキコをエペソに遣せり。一三汝きたる時わがトロア
スにてカルポの許に遺し置きたる外衣を携へきたれ、また書物、殊
に羊皮紙のものを携へきたれ。一四金細工人アレキサンデル大に我
を惱せり。主はその行爲に隨ひて彼に報いたまふべし。一五汝も
また彼に心せよ、かれは甚だしく我らの言に逆ひたり。一六わが
始の辯明のとき誰も我を助けず、みな我を棄てたり、願はくはこの
罪の彼らに歸せざらんことを。一七されど主われと偕に在して我を強
めたまへり。これ我によりて宣教の全うせられ、凡ての異邦人のこ
れを聞かん爲なり。而して我は獅子の口より救ひ出されたり。一八ま

た主は我を凡ての惡しき業より救ひ出し、その天の國に救ひ入れたま
はん。願はくは榮光世々限りなく彼にあらん事を、アアメン。一九
汝プリスカ及びアクラ、またオネシポロの家に安否を問へ。二〇エ
ラストはコリントに留れり。トロピモは病ある故に我かれをミレ
トに遺せり。二一なんぢ勉めて冬のまへに我に來れ、ユブロ、プデス、
リノス、クラウデヤ、及び凡ての兄弟、なんぢに安否を問ふ。二二願
はくは主なんぢの靈と偕に在し、御惠なんぢらと偕に在らんことを。

テトスへの書

第一章 一 神の僕またイエス・キリストの使徒パウロ――我が使徒となれるは、永遠の生命の望に基きて神の選民の信仰を堅うし、また彼らを敬虔にかなふ眞理を知る知識に至らしめん爲なり。二 僞りなき神は、創世の前に、この生命を約束し給ひしが、三 時いたりて御言を宣教にて顯さんとし、その宣教を我らの救主たる神の命令をもて我に委ねたまへり。――四 われ書を同じ信仰によりて我が眞實の子たるテトスに贈る。願はくは父なる神および我らの救主キリスト・イエスより賜ふ恩惠と平安と、汝にあらんことを。五 わが汝をクレテに遣し置きたる故は、汝をして缺けたる所を正し、且わが命ぜしごとく町々に長老を立てしめん爲なり。六 長老は責むべき所なく、一人の女の夫にして、子女もまた放蕩をもて訴へらるる事な

く、服従せぬことなき信者たるべきなり。七それ監督は神の家司なれば、責むべき所なく、放縦ならず、軽々しく怒らず、酒を嗜まず、人を打たず、恥づべき利を取らず、八反つて旅人を懇ろに待ひ、善を愛し、謹慎あり、正しく潔く節制にして、九教に適ふ信ずべき言を守る者たるべし。これ健全なる教をもて人を勧め、かつ言ひ逆ふ者を言ひ伏することを得んためなり。一〇服従せず、虚しき事をかたり、人の心を惑す者おほし、殊に割禮ある者のうちに多し。一一彼らの口を箝がしむべし、彼らは恥づべき利を得んために、教ふまじき事を教へて全家を覆へすなり。一二クレテ人の中なる或る預言者いふ

『クレテ人は常に虚偽をいふ者、
あしき獣、また懶惰の腹なり』

一三この證は眞なり。されば汝きびしく彼らを責めよ、一四彼らがユダヤ人の昔話と眞理を棄てたる人の誡命とに心を寄することなく、信仰を健全にせん爲なり。一五潔き人には凡ての物きよく、汚れ

たる人と不信者とには一つとして潔き物なし、彼らは既に心も良心
も汚れたり。一六みづから神を知ると言ひあらはせど、其の行爲にて
は神を否む。彼らは憎むべきもの、服はぬ者、すべての善き業に就
きて棄てられたる者なり。

第二章 一されど汝は健全なる教に適ふことを語れ。二老人には
自ら制することと謹嚴と謹愼とを勸め、また信仰と愛と忍耐とに健全
ならんことを勸めよ。三老いたる女にも同じく、清潔にかなふ行爲
をなし、人を誹らず、大酒の奴隷とならず、善き事を教ふる者となら
んことを勸めよ。四かつ彼等をして若き女に夫を愛し、子を愛し、
五謹愼と貞操とを守り、家の務をなし、仁慈をもち、己が夫に服
はんことを教へしめよ。これ神の言の汚されざらん爲なり。六若き
人にも同じく謹愼を勸め、七なんぢ自ら凡ての事につきて善き業の
模範を示せ。教をなすには邪曲なきことと謹嚴と、八責むべき所な
き健全なる言とを以てすべし。これ逆ふ者をして我らの惡を言ふ
に由なく、自ら恥づる所あらしめん爲なり。九奴隷には己が主人に

服ひ、凡ての事において之を喜ばせ、之に言ひ逆はず、一〇物を盗
まず、反って全き忠信を顯すべきことを勸めよ。これ凡ての事に
おいて我らの救主なる神の教を飾らん爲なり。一一凡ての人に救
を得さする神の恩惠は既に顯れて、一二不敬虔と世の慾とを棄てて
謹愼と正義と敬虔とをもて此の世を過し、一三幸福なる望、すなは
ち大なる神、われらの救主イエス・キリストの榮光の顯現を待つ
べきを我らに教ふ。一四キリストは我等のために己を與へたまへり。
是われらを諸般の不法より贖ひ出して、善き業に熱心なる特選の民
を己がために潔めんとてなり。一五なんぢ全き權威をもて此等のこ
とを語り、勸め、また責めよ。なんぢ人に輕んぜらるな。
第三章 一汝かれらに司と權威ある者とに服し、かつ從ひ、凡て
の善き業をおこなふ備をなし、二人を誹らず、爭はず、寛容にし、
常に柔和を凡ての人に顯すべきことを思ひ出させよ。三我らも前に
は愚なるもの、順はぬもの、迷へる者、さまざまの慾と快樂とに事
ふるもの、惡意と嫉妬とをもて過すもの、憎むべき者、また互に憎

み合ふ者なりき。四されど我らの救主なる神の仁慈と、人を愛した
まふ愛との顯れしとき、五六我らの行ひし義の業にはよらで、唯そ
の憐憫により、更生の洗と、我らの救主イエス・キリストをもて
豐に注ぎたまふ聖靈による維新とにて、我らを救ひ給へり。七これ
我らが其の恩惠によりて義とせられ、永遠の生命の望にしたがひて
世嗣とならん爲なり。八この言は信ずべきなれば、我なんぢが此等
につきて確證せんことを欲す。神を信じたる者をして愼みて善き
業を務めしめん爲なり。かくするは善き事にして人に益あり。九され
ど愚なる議論・系圖・爭鬪、また律法に就きての分爭を避けよ。これ
らは益なくして空しきものなり。一〇異端の者をば一度もしくは二度
、訓戒して後これを棄てよ。一一かかる者は汝の知るごとく、邪曲
にして自ら罪を認めつつ尚これを犯すなり。一二我アルテマス或は
テキコを汝に遣さん、その時なんぢ急ぎてニコポリなる我がもと
に來れ。われ彼處にて冬を過さんと定めたり。一三教法師ゼナス及び
アポロを懇ろに送りて、乏しき事なからしめよ。一四かくて我らの

伴侶も善き業を務めて必要を資けんことを學ぶべし、これ果を結ばぬ事なからん爲なり。

一五我と偕に居る者みな汝に安否を問ふ。信仰に在りて我らを愛する者に安否を問へ。願はくは御恵、なんぢら凡ての者と偕にあらん事を。

ピレモンへの書

第一章

一キリスト・イエスの囚人たるパウロ及び兄弟テモテ、書を
我らが愛する同勞者ピレモン、二我らの姉妹アピヤ、我らと共に戰鬪
をなせるアルキポ及び汝の家にある教會に贈る。三願はくは我らの
父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩惠と平安と、汝らに在
らんことを。四われ祈るとき常に汝をおぼえて我が神に感謝す。五
これ主イエスと凡ての聖徒とに對する汝の愛と信仰とを聞きたれば
なり。六願ふところは、汝の信仰の交際の活動により、人々われらの
中なる凡ての善き業を知りて、榮光をキリストに歸するに至らんこ
となり。七兄弟よ、我なんぢの愛によりて大なる勸喜と慰安とを得
たり。聖徒の心は汝によりて安んぜられたればなり。八この故に、
われキリストに在りて、汝になすべき事を聊かも憚らず命じ得れ

ど、九むしろ愛の故によりて汝にねがふ。一〇既に年老いて今はキリ
スト・イエスの囚人となれる我パウロ、縲絏の中にて生みし我が子オ
ネシモの事をなんぢに願ふ。一一かれ前には汝に益なき者なりしが、
今は汝にも我にも益ある者となれり。一二我かれを汝に歸す、かれ
は我が心なり。一三我は彼をわが許に留めおきて、我が福音のため
に縲絏にある間、なんぢに代りて我に事へしめんと欲したれど、一
四なんぢの承諾を經ずして斯くするを好まざりき、是なんぢの善の
止むを得ざるに出でずして心より出でんことを欲したればなり。一
五彼が暫時なんぢを離れしは、或は汝かれを永遠に保ち、一六もは
や奴隷の如くせず、奴隷に勝りて愛する兄弟の如くせん爲なりしや
も知るべからず。我は殊に彼を愛す、まして汝は肉によりても主に
よりても、之を愛せざる可けんや。一七汝もし我を友とせば、請ふ、
われを納るるごとく彼を納れよ。一八彼もし汝に不義をなし、また
は汝に負債あらば、之を我に負はせよ。一九我パウロ手づから之を
記す、われ償はん、汝われに身を以て償ふべき負債あれど、我こ

れを言はず。二〇兄弟よ、請ふ、なんぢ主に在りて我に益を得させ
よ、キリストに在りて我が心を安んぜよ。二一我なんぢの從順を
確信して之を書き贈る。わが言ふところに勝りて汝の行はんこと
を知るなり。二二而して我がために宿を備へよ、我なんぢらの祈に
より、遂に我が身の汝らに與へられんことを望めばなり。二三キリ
スト・イエスに在りて我とともに囚人となれるエパフラス、二四及び
我が同勞者マルコ、アリスタルコ、デマス、ルカ皆なんぢに安否を問
ふ。二五願はくは主イエス・キリストの恩惠、なんぢらの靈と偕にあ
らんことを。

ヘブル人への書

第一章 一神むかしは預言者等により、多くに分ち、多くの方法をもて
先祖たちに語り給ひしが、二この末の世には御子によりて、我らに語
り給へり。神は曾て御子を立てて萬の物の世嗣となし、また御子に
よりて諸般の世界を造り給へり。三御子は神の榮光のかがやき、神
の本質の像にして、己が權能の言をもて萬の物を保ちたまふ。また
罪の潔をなして、高き處にある稜威の右に坐し給へり。四その受け
給ひし名の御使の名に勝れるごとく、御使よりは更に勝る者となり
給へり。五神は孰の御使に曾て斯くは言ひ給ひしぞ

『なんぢは我が子なり、
われ今日なんぢを生めり』

と。また

『われ彼の父となり、
彼わが子とならん』
と。
六また初子を再び世に入れ給ふとき
『神の凡ての使は之を拜すべし』
と言ひ給ふ。七また御使たちに就きては
『神は、その使たちを風となし、
その事ふる者を焔となす』
と言ひ給ふ。八されど御子に就きては
『神よ、なんじの御座は世々限りなく、
汝の國の杖は正しき杖なり。
九なんぢは義を愛し、不法をにくむ。
この故に神なんぢの神は歡喜の油を、
汝の友に勝りて汝にそそぎ給へり』
と。
一〇また
『主よ、なんぢ太初に地の基を置きたまへり、

　天も御手の業なり。
一一これらは滅びん、されど汝は常に存へたまはん。
　これらはみな衣のごとく舊びん。
一二而して汝これらを袍のごとく疊み給はん、
　これらは衣のごとく變らん。
　されど汝はかはり給ふことなく
　汝の齢は終らざるなり』
一三又いづれの御使に曾て斯くは言ひ給ひしぞ
『われ汝の仇を汝の足臺となすまでは、
　我が右に坐せよ』
と言ひたまふ。
一四御使はみな事へまつる靈にして、救を嗣がんとする者のた
めに職を執るべく遣されたる者にあらずや。
と。

第二章
一この故に我ら聞きし所をいよいよ篤く愼むべし、恐らく
は流れ過ぐる事あらん。
二若し御使によりて語り給ひし言すら堅く
せられて、咎と不從順とみな正しき報を受けたらんには、
三我ら

斯くのごとき大なる救を等閑にして爭でか遁るることを得ん。こ
の救は初め主によりて語り給ひしものにして、聞きし者ども之を我
らに確うし、四神また徴と不思議とさまざまの能力ある業と、御旨
のままに分ち與ふる聖靈とをもて證を加へたまへり。五それ神は我
らの語るところの來らんとする世界を、御使たちには服はせ給はざ
りき。六或篇に人證して言ふ
『人は如何なる者なれば、
之を御心にとめ給ふか。
人の子は如何なる者なれば、
之を顧み給ふか。
七汝これを御使よりも少しく卑うし、
光榮と尊貴とを冠らせ、
八萬の物をその足の下の服はせ給へり』
と。既に萬の物を之に服はせ給ひたれば、服はぬものは一つだに
殘さるる事なし。されど今もなほ我らは萬の物の之に服ひたるを

見ず。九ただ御使よりも少しく卑くせられしイエスの、死の苦難を
受くるによりて榮光と尊貴とを冠らせられ給へるを見る。これ神の
恩惠によりて萬民のために死を味ひ給はんとてなり。一〇それ多く
の子を光榮に導くに、その救の君を苦難によりて全うし給ふは、
萬の物の歸するところ、萬の物を造りたまふ所の者に相應しき事
なり。一一潔めたまふ者も、潔めらるる者も、皆ただ一つより出づ。
この故に彼らを兄弟と稱ふるを恥とせずして言ひ給ふ、

一二『われ御名を我が兄弟たちに告げ、
集會の中にて汝を讚め歌はん』

一三また

『われ彼に依頼まん』

又

『視よ、我と神の我に賜ひし子等とは……』

と。一四子等はともに血肉を具ふれば、主もまた同じく之を具へ給ひ
しなり。これは死の權力を有つもの、即ち惡魔を死によりて亡し、

一五かつ死の懼によりて生涯、奴隷となりし者どもを解放ち給はん
ためなり。一六實に主は御使を扶けずしてアブラハムの裔を扶けたま
ふ。一七この故に神の事につきて憐憫ある忠實なる大祭司となりて、
民の罪を贖はんために、凡ての事において兄弟の如くなり給ひし
は宜なり。一八主は自ら試みられて苦しみ給ひたれば、試みられ
るる者を助け得るなり。

第三章 一されば共に天の召を蒙れる聖なる兄弟よ、我らが言ひあ
らはす信仰の使徒たり大祭司たるイエスを思ひ見よ。二彼の己を立
て給ひし者に忠實なるは、モーセが神の全家に忠實なりしが如し。
三家を造る者の家より勝りて尊ばるる如く、彼もモーセに勝りて大
なる榮光を受くるに相應しき者とせられ給へり。四家は凡て之を造
る者あり、萬の物を造り給ひし者は神なり。五モーセは後に語り傳へ
られんと爲ることの證をせんために、僕として神の全家に忠實な
りしが、六キリストは子として神の家を忠實に掌どり給へり。我等
もし確信と希望の誇とを終まで堅く保たば、神の家なり。七この故

に聖靈の言ひ給ふごとく
『今日なんぢら神の聲を聞かば、
八その怒を惹きし時のごとく、
荒野の嘗試の日のごとく、
こころを頑固にするなかれ。
九彼處にて汝らの先祖たちは
我をこころみて驗し、
かつ四十年の間わが業を見たり。
一〇この故に我この代の人を憤ほりて云へり、
「彼らは常に心まよい、
わが途を知らざりき」と。
一一われ怒をもて「彼らは、
我が休に入るべからず」と誓へり』
一二兄弟よ、心せよ、恐らくは汝等のうち活ける神を離れんとする
不信仰の惡しき心を懷く者あらん。一三汝等のうち誰も罪の誘惑に

よりて頑固にならぬやう、今日と稱ふる間に日々互に相勸めよ。一
四もし始の確信を終まで堅く保たば、我らはキリストに與る者と
なるなり。一五それ
『今日なんじら神の聲を聞かば、
その怒を惹きし時のごとく、
こころを頑固にするなかれ』
と云へ。一六然れば聞きてなほ怒を惹きし者は誰なるか、モーセに
よりてエジプトを出でし凡ての人にあらずや。一七また四十年のあひ
だ、神は誰に對して憤ほり給ひしか、罪を犯してその死屍を荒野に
横たへし人々にあらずや。一八又かれらは我が安息に入るべからずと
は、誰に對して誓ひ給ひしか、不從順なる者にあらずや。一九之に
よりて見れば、彼らの入ること能はざりしは、不信仰によりてなり。
第四章 一然れば我ら懼るべし、その安息に入るべき約束はなほ遺れ
ども、恐らくは汝らの中これに達せざる者あらん。二それは彼らの
ごとく我らも善き音信を傳へられたり、然れど彼らには聞きし所の

言益なかりき。聞くもの之に信仰をまじへざりしに因る。三われら
信じたる者は、かの休に入ることを得るなり。
『われ怒をもて「彼らは、
わが休に入るべからず」と誓へり』
と云ひ給ひしが如し。されど世の創より御業は既に成れるなり。四
或篇に七日めに就きて斯く云へり『七日めに神その凡ての業を休み
たまへり』と。五また茲に
『かれらは、
我が休に入るべからず』
と云へり。六然れば之に入るべき者なほ在り、曩に善き音信を傳へら
れし者らは、不從順によりて入ることを得ざりしなれば、七久しき
を經てのち復、日を定めダビデによりて『今日』と言ひ給ふ。曩に記
したるが如し。曰く
『今日なんじら神の聲を聞かば、
こころを頑固にするなかれ』

八若しヨシュア既に休を彼らに得しめしならば、神はその後、ほか
の日につきて語り給はざりしならん。九然れば神の民の爲になほ安息
は遺れり。一〇既に神の休に入りたる者は、神のその業を休み給ひ
しごとく、己が業を休めり。一一されば我等はこの休に入らんこと
を務むべし、是かの不從順の例にならひて誰も墮つることなからん
爲なり。一二神の言は生命あり、能力あり、兩刃の劍よりも利くし
て、精神と靈魂、關節と骨髓を透して之を割ち、心の念と志望と
を驗すなり。一三また造られたる物に一つとして神の前に顯れぬは
なし、萬の物は我らが係れる神の目のまへに裸にて露るるなり。
一四我等には、もろもろの天を通り給ひし偉なる大祭司、神の子イ
エスあり。然れば我らが言ひあらはす信仰を堅く保つべし。一五我ら
の大祭司は我らの弱を思ひ遣ること能はぬ者にあらず、罪を外にし
て凡ての事、われらと等しく試みられ給へり。一六この故に我らは
憐憫を受けんが爲、また機に合ふ助となる惠を得んがために、憚
らずして惠の御座に來るべし。

第五章一 凡そ大祭司は人の中より選ばれ、罪のために供物と犧牲
とを献げんとて、人にかかはりて神に事ふることを任ぜらる。二彼は
自らも弱に纏はるるが故に、無知なるもの、迷へる者を思ひ遣るこ
とを得るなり。三之によりて民のために爲すごとく、また己のため
にも罪に就きて献物をなさざるべからず。四又この貴き位はアロ
ンのごとく神に召さるるにあらずば、誰も自ら之を取る者なし。五
斯くの如くキリストも己を崇めて自ら大祭司となり給はず。之に
向ひて

『なんじは我が子なり、
われ今日なんじを生めり』

と語り給ひし者、これを立てたり。六また他の篇に

『なんじは永遠にメルキゼデクの位に等しき祭司たり』

と言ひ給へるが如し。七キリストは肉體にて在ししとき、大なる叫
と涙とをもて、己を死より救ひ得る者に祈と願とを献げ、その
恭敬によりて聽かれ給へり。八彼は御子なれど、受けし所の苦難

によりて從順を學び、九かつ全うせられたれば、凡て己に順ふ者のために永遠の救の原となりて、一〇神よりメルキゼデクの位に等しき大祭司と稱へられ給へり。一一之に就きて我ら多くの言ふべき事あれど、汝ら聞くに鈍くなりたれば釋き難し。一二なんじら時を經ること久しければ、教師となるべき者なるに、今また神の言の初步を人より教へられざるを得ず、汝らは堅き食物ならで乳を要する者となれり。一三おほよそ乳を用ふる者は幼兒なれば、未だ義の言に熟せず、一四堅き食物は智力を練習して善惡を辨ふる成人の用ふるものなり。

第六章 一この故に我らはキリストの教の初步に止ることなく、再び死にたる行爲の悔改と神に對する信仰との基、二また各樣のバプテスマと按手と、死人の復活と永遠の審判との教の基を置かずして完全に進むべし。三神もし許し給はば、我ら之をなさん。四一たび照されて天よりの賜物を味ひ、聖靈に與る者となり、五神の善き言と來世の能力とを味ひて後、六墮落する者は更にまた自ら神の

子を十字架に釘けて肆し者とする故に、再びこれを悔改に立返ら
すること能はざるなり。七それ地しばしば其の上に降る雨を吸ひ入れ
て耕す者の益となるべき作物を生ぜば、神より祝福を受く。八され
ど茨と薊とを生ぜば、棄てられ、かつ詛に近く、その果ては焚か
るるなり。九愛する者よ、われら斯くは語れど、汝らには更に善き
こと、即ち救にかかはる事あるを深く信ず。一〇神は不義に在さね
ば、汝らの勤勞と、前に聖徒につかへ、今もなほ之に事へて御名の
ために顯したる愛とを忘れ給ふことなし。一一我らは汝等がおのお
の終まで前と同じ勵をあらはして全き望を保ち、一二怠ること
なく、信仰と耐忍とをもて約束を嗣ぐ人々に效はんことを求む。一三
それ神はアブラハムに約し給ふとき、指して誓ふべき己より大なる
者なき故に、己を指して誓ひて言ひ給へり、一四『われ必ず、なん
ぢを惠み惠まん、なんぢを殖し殖さん』と、一五斯くの如くアブラハ
ムは耐へ忍びて約束のものを得たり。一六おほよそ人は己より大な
る者を指して誓ふ、その誓はすべての爭論を罷むる保證たり。一七

この故に神は約束を嗣ぐ者に御旨の變らぬことを充分に示さんと欲
して誓を加へ給へり。一八これ神の　ること能はぬ二つの變らぬも
のによりて、己の前に置かれたる希望を捉へんとて遁れたる我らに
強き奨勵を與へん爲なり。一九この希望は我らの靈魂の錨のごとく
安全にして動かず、かつ幔の内に入る。二〇イエス我等のために前驅
し、永遠にメルキゼデクの位に等しき大祭司となりて、その處に入
り給へり。

第七章一此のメルキゼデクはサレムの王にて至高き神の祭司たりし
が、王たちを破りて還るアブラハムを迎へて祝福せり。二アブラハム
は彼に凡ての物の十分の一を分け與へたり。その名を釋けば第一に
義の王、次にサレムの王、すなはち平和の王なり。三父なく、母なく、
系圖なく、齢の始なく、生命の終なく、神の子の如くにして限り
なく祭司たり。四先祖アブラハム分捕物のうち十分の一、最も善き
物を之に與へたれば、その人の如何に尊きかを思ふべし。五レビの
子等のうち祭司の職を受くる者は、律法によりて、民すなはちアブ

ラハムの腰より出でたる己が兄弟より、十分の一を取ることを命ぜ
らる。六されど此の血脈にあらぬ彼は、アブラハムより十分の一を取
りて約束を受けし者を祝福せり。七それ小なる者の大なる者に祝福せ
らるるは論なき事なり。八かつ此所にては死ぬべき者十分の一を受く
れども、彼處にては『活くるなり』と證せられた者これを受く。九
また十分の一を受くるレビすら、アブラハムに由りて十分の一を納め
たりと云ふも可なり。一〇そはメルキゼデクのアブラハムを迎へし時
に、レビはなほ父の腰に在りたればなり。一一もしレビの系なる祭司
によりて全うせらるる事ありしならば（民は之によりて律法を受け
たり）何ぞなほ他にアロンの位に等しからぬメルキゼデクの位に
等しき祭司の起る必要あらんや。一二祭司の易る時には律法も亦必
ず易るべきなり。一三此等のことは曾て祭壇に事へたることなき他の
族に屬する者をさして云へるなり。一四それ我らの主のユダより出
で給へるは明かにして、此の族につき、モーセは聊かも祭司に係
ることを云はざりき。一五一六又メルキゼデクのごとき他の祭司おこ

り、肉の誡命の法に由らず、朽ちざる生命の能力によりて立てられた
れば、我が言ふ所いよいよ明かなり。一七そは『なんぢは永遠にメ
ルキゼデクの位に等しき祭司たり』と證せられ給へばなり。一八前
の誡命は弱く、かつ益なき故に廢せられ、一九（律法は何をも全う
せざりしなり）更に優れたる希望を置かれたり、この希望によりて我
らは神に近づくなり。二〇かの人々は誓なくして祭司とせられたれ
ども、二一彼は誓なくしては爲られず、誓をもて祭司とせられ給へ
り。

即ち彼に就きて

『主ちかひて悔い給はず、
「なんじは永遠に祭司たり」』

と言ひ給ひしが如し。二二イエスは斯くも優れたる契約の保證となり
給へり。二三かの人々は死によりて永くその職に留ることを得ざる
故に、祭司となりし者の數多かりき。二四されど彼は永遠に在せば易
ることなき祭司の職を保ちたまふ。二五この故に彼は己に頼りて神
にきたる者のために執成をなさんとて常に生くれば、之を全く救ふこ

と得給ふなり。二六斯くのごとき大祭司こそ我らに相應しき者なれ、
即ち聖にして惡なく、穢なく、罪人より遠ざかり、諸般の天よりも
高くせられ給へり。二七他の大祭司のごとく先づ己の罪のため、次
に民の罪のために日々犧牲を献ぐるを要し給はず、その一たび己を
献げて之を成し給ひたればなり。二八律法は弱みある人々を立てて
大祭司とすれども、律法の後なる誓の御言は、永遠に全うせられ給
へる御子を大祭司となせり。

第八章一今いふ所の要點は斯くのごとき大祭司の我らにある事な
り。彼は天にては稜威の御座の右に坐し、二聖所および眞の幕屋に
事へたまふ。この幕屋は人の設くるものにあらず、主の設けたまふ
所なり。三おほよそ大祭司の立てらるるは供物と犧牲とを献げん爲
なり、この故に彼もまた献ぐべき物あるべきなり。四然るに若し地に
在さば、既に律法に循ひて供物を献ぐる祭司等あるによりて祭司
とはなり給はざるべし。五彼らの事ふるは、天にある物の型と影とな
り。モーセが幕屋を建てんとする時に『愼め、山にて汝が示され

たる式に效ひて凡ての物を造れ』との御告を受けしが如し。六されど
キリストは更に勝れる約束に基きて立てられし勝れる契約の中保と
なりたれば、更に勝る職を受け給へり。七かつ初の契約もし虧くる
所なくば、第二の契約を求むる事なかりしならん。八然るに彼らを
咎めて言ひ給ふ
『主いひ給ふ「視よ、
我イスラエルの家とユダの家とに、
新しき契約を設くる日來らん。
九この契約は我かれらの先祖の手を執りて、
エジプトの地より導き出しし時に
立てし所の如きにあらず、
彼らは我が契約にとどまらず、
我も彼らを顧みざりしなり」
と主いひ給ふ。
一〇「されば、かの日の後に我がイスラエルの家と立つる契約は

是なり」

と主いひ給ふ。

「われ我が律法を彼らの念に置き、
そのこころに之を記さん、
また我かれらの神となり、
彼らは我が民とならん。

一一彼らはまた各人その國人に、
その兄弟に教へて、
なんじ主を知れと言はざるべし。
そは小より大に至るまで、
皆われを知らん。

一二我もその不義を憐み、
この後また其の罪を思ひ出でざるべし』と。

一三既に『新し』と言ひ給へば、初のものを舊しとし給へるなり、舊びて衰ふるものは、消失せんとするなり。

第九章一初の契約には禮拜の定と世に屬する聖所とありき。二設
けられたる幕屋あり、前なるを聖所と稱へ、その中に燈臺と案と供
のパンとあり。三また第二の幕の後に至聖所と稱ふる幕屋あり。四
その中に金の香壇と金にて　く覆ひたる契約の櫃とあり、この中に
マナを納れたる金の壺と芽したるアロンの杖と契約の石碑とあり、五
櫃の上に榮光のケルビムありて贖罪所を覆ふ。これらの物に就き
ては、今一々言ふこと能はず、六此等のもの斯く備りたれば、祭司
たちは常に前なる幕屋に入りて禮拜をおこなふ。七されど奧なる幕屋
には、大祭司のみ年に一度おのれと民との過失のために獻ぐる血を
携へて入るなり。八之によりて聖靈は前なる幕屋のなほ存するあひ
だ、至聖所に入る道の未だ顯れざるを示し給ふ。九この幕屋はその
時のために設けられたる比喩なり、之に循ひて獻げたる供物と犧牲
とは、禮拜をなす者の良心を全うすること能はざりき。一〇此等は
ただ食物・飲物さまざまの濯事などに係り、肉に屬する定にして、
改革の時まで負せられたるのみ。一一然れどキリストは來らんとする

善き事の大祭司として來り、手にて造らぬ此の世に屬せぬ更に大な
る全き幕屋を經て、一二山羊と犢との血を用ひず、己が血をもて只
一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪を終へたまへり。一三もし山羊お
よび牡牛の血、牝牛の灰などを穢れし者にそそぎて其の肉體を潔む
ることを得ば、一四まして永遠の御靈により瑕なくして己を神に献
げ給ひしキリストの血は、我らの良心を死にたる行爲より潔めて活
ける神に事へしめざらんや。一五この故に彼は新しき契約の中保な
り。これ初の契約の下に犯したる咎を贖ふべき死あるによりて、召
されたる者に約束の永遠の嗣業を受けさせん爲なり。一六それ遺言は
必ず遺言者の死を要す。一七遺言は遺言者死にてのち始めて效あり、
遺言者の生くる間は效なきなり。一八この故に初の契約も血なくし
て立てしにあらず。一九モーセ律法に循ひて諸般の誡命をすべての
民に告げてのち、犢と山羊との血また水と緋色の毛とヒソプとをと
りて、書および凡ての民にそそぎて言ふ、二〇『これ神の汝らに命
じたまふ契約の血なり』と。二一また同じく幕屋と祭のすべての器

とに血をそそげり。二二おほよそ律法によれば、萬のもの血をもて
潔める。もし血を流すことなくば、赦さるることなし。二三この故
に天に在るものに象りたる物は此等にて潔められ、天にある物は此
等に勝りたる犧牲をもて潔めらるべきなり。二四キリストは眞のも
のに象れる、手にて造りたる聖所に入らず、眞の天に入りて今よ
り我等のために神の前にあらはれ給ふ。二五これ大祭司が年ごとに他
の物の血をもて聖所に入るごとく、屡次おのれを献ぐる爲にあらず。
二六もし然らずば世の創より以來しばしば苦難を受け給ふべきなり。
然れど今、世の季にいたり己を犧牲となして罪を除かんために一た
び現れたまへり。二七一たび死ぬることと死にてのち審判を受くる
ことの人に定りたる如く、二八キリストも亦おほくの人の罪を負
はんが爲に一たび献げられ、復罪を負ふことなく、己を待望む者に
再び現れて救を得させ給ふべし。

第一〇章
一それ律法は來らんとする善き事の影にして眞の形にあ
らねば、年毎にたえず献ぐる同じ犧牲にて、神にきたる者を何時まで

も全うすることを得ざるなり。二もし之を得ば、禮拜をなす者、一
たび潔められて復心に罪を憶えねば、獻ぐることを止めしならん。
三然れど犧牲によりて、年ごとに罪を憶ゆるなり。四これ牡牛と山羊
との血は罪を除くこと能はざるに因る。五この故にキリスト世に來る
とき言ひ給ふ

『なんぢ犧牲と供物とを欲せず、
唯わが爲に體を備へたまへり。
六なんぢ燔祭と罪祭とを悅び給はず、
七その時われ言ふ「神よ、我なんぢの
御意を行はんとて來る
我につきて書の卷に錄されたるが如し」』

と。八先には『汝いけにへと供物と燔祭と罪祭と（即ち律法に循
ひて獻ぐる物）を欲せず、また悅ばず』と言ひ、九後に『視よ、我
なんぢの御意を行はんとて來る』と言ひ給へり。その後なる者を立
てん爲に、その先なる者を除き給ふなり。一〇この御意に適ひてイエ

ス・キリストの體の一たび献げられしに由りて我らは潔められたり。
一一すべての祭司は日毎に立ちて事へ、いつまでも罪を除くこと能は
ぬ同じ犧牲をしばしば献ぐ。一二然れどキリストは罪のために一つの
犧牲を献げて限りなく神の右に坐し、一三斯くて己が仇の己が足臺と
せられん時を待ちたまふ。一四そは潔めらるる者を一つの供物にて
限りなく全うし給ふなり。一五聖靈も亦われらに之を證して
一六『「この日の後、われ彼らと立つる契約は是なり」
と主いひ給ふ。また
「わが律法をその心に置き、その念に銘さん」』
と言ひ給ひて、
一七『この後また彼らの罪と不法とを思ひ出でざるべし』
と言ひたまふ。一八かかる赦ある上は、もはや罪のために献物をな
す要なし。一九然れば兄弟よ、我らイエスの血により、二〇その肉體
たる幔を經て我らに開き給へる新しき活ける路より憚らずして至
聖所に入ることを得、二一かつ神の家を治むる大なる祭司を得たれ

ば、二二心は濯がれて良心の咎をさり、身は清き水にて洗はれ、眞
の心と全き信仰とをもて神に近づくべし。二三また約束し給ひし者
は忠實なれば、我ら言ひあらはす所の望を動かさずして堅く守り、
二四互に相顧み、愛と善き業とを勵まし、二五集會をやむる或人の
習慣の如くせず、互に勸め合ひ、かの日のいよいよ近づくを見て、ま
すます斯くの如くすべし。二六我等もし眞理を知る知識をうけたる後
、ことさらに罪を犯して止めずば、罪のために犧牲、もはや無し。二七
ただ畏れつつ審判を待つことと、逆ふ者を焚きつくす烈しき火との
み遺るなり。二八モーセの律法を蔑する者は慈悲を受くることなく、
二三人の證人によりて死に至る。二九まして神の子を蹈みつけ、己
が潔められし契約の血を潔からずとなし、恩惠の御靈を侮る者の受
くべき罰の重きこと如何許とおもふか。三〇『仇を復すは我に在り、
われ之を報いん』と言ひ、また『主その民を審かん』と言ひ給ひし者
を我らは知るなり。三一活ける神の御手に陷るは畏るべきかな。三
二なんぢら御光を受けしのち苦難の大なる戰鬪に耐へし前の日を思

ひ出でよ。三三或は誹謗と患難とに遭ひて觀物にせられ、或は斯か
ることに遭ふ人の友となれり。三四また囚人となれる者を思ひやり、
永く存する尤も勝れる所有の己にあるを知りて、我が所有を奪は
るるをも喜びて忍びたり。三五されば大なる報を受くべき汝らの
確信を投げすつな。三六なんぢら神の御意を行ひて約束のものを受
けん爲に必要なるは忍耐なり。

三七『いま暫くせば、
來るべき者きたらん、
遲からじ。三八我に屬ける義人は、信仰によりて活くべし。
もし退かば、わが心これを喜ばじ』

三九然れど我らは退きて滅亡に至る者にあらず、靈魂を得るに至る
信仰を保つ者なり。

第一一章 一それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を眞實とする
なり。二古への人は之によりて證せられたり。三信仰によりて我等
は、もろもろの世界の神の言にて造られ、見ゆる物の顯るる物よ

り成らざるを悟る。四信仰に由りてアベルはカインよりも勝れる犠牲
を神に献げ、之によりて正しと證せられたり。神その供物につき
て證し給へばなり。彼は死ぬれども、信仰によりて今なほ語る。五
信仰に由りてエノクは死を見ぬように移されたり。神これを移し給ひ
たれば見出されざりき。その移さるる前に神に喜ばるることを證
せられたり。六信仰なくしては神に悦ばるること能はず、そは神に
來る者は、神の在すことと神の己を求むる者に報い給ふことを、
必ず信ずべければなり。七信仰に由りてノアは、未だ見ざる事につ
きて御告を蒙り、畏みてその家の者を救はん爲に方舟を造り、かつ
之によりて世の罪を定め、また信仰に由る義の世嗣となれり。八信仰
に由りてアブラハムは召されしとき嗣業として受くべき地に出で往
けとの命に遵ひ、その往く所を知らずして出で往けり。九信仰によ
り異國に在るごとく約束の地に寓り、同じ約束を嗣ぐべきイサクとヤ
コブと共に幕屋に住めり、一〇これ神の營み造りたまふ基礎ある都
を望めばなり。一一信仰に由りてサラも約束したまふ者の忠實なる

を思ひし故に、年邁ぎたれど胤をやどす力を受けたり。一二この故
に死にたる者のごとき一人より天の星のごとく、また海邊の數へが
たき砂のごとく夥多しく生れ出でたり。一三彼等はみな信仰を懷きて
死にたり、未だ約束の物を受けざりしが、遙にこれを見て迎へ、地
にては旅人また寓れる者なるを言ひあらはせり。一四斯く言ふは、己
が故郷を求むることを表すなり。一五若しその出でし處を念はば、
歸るべき機ありしなるべし。一六されど彼らの慕ふ所は天にある更
に勝りたる所なり。この故に神は彼らの神と稱へらるるを恥とし給
はず、そは彼等のために都を備へ給へばなり。一七信仰に由りてア
ブラハムは試みられし時イサクを献げたり、彼は約束を喜び受け
し者なるに、その獨子を献げたり。一八彼に對しては『イサクより出
づる者なんぢの裔と稱へらるべし』と云ひ給ひしなり。一九かれ思へ
らく、神は死人の中より之を甦へらすることを得給ふと、乃ち死
より之を受けしが如くなりき。二〇信仰に由りてイサクは來らんとす
る事につきヤコブとエサウとを祝福せり。二一信仰に由りてヤコブは

死ぬる時ヨセフの子等をおのおの祝福し、その杖の頭によりて禮拜
せり。二二信仰に由りてヨセフは生命の終らんとする時、イスラエル
の子らの出で立つことに就きて語り、又おのが骨のことを命じたり。
二三信仰に由りて兩親はモーセの生れたる時、その美しき子なるを
見て、王の命をも畏れずして三月の間これを匿したり。二四信仰に
由りてモーセは人と成りしときパロの女の子と稱へらるるを否み、
二五罪のはかなき歡樂を受けんよりは、寧ろ神の民とともに苦しまん
ことを善しとし、二六キリストに因る謗はエジプトの財寶にまさる
大なる富と思へり、これ報を望めばなり。二七信仰に由りて彼は王
の憤恚を畏れずしてエジプトを去れり。これ見えざる者を見るがご
とく耐ふる事をすればなり。二八信仰に由りて彼は過越と血を灑ぐこ
とを行へり、これ初子を滅す者の彼らに觸れざらん爲なり。二九
信仰に由りてイスラエル人は紅海を乾ける地のごとく渡りしが、エ
ジプト人は然せんと試みて溺れ死にたり。三〇信仰に由りて七日の
あいだ廻りたればエリコの石垣は崩れたり。三一信仰に由りて遊女ラ

ハブは平和をもて間者を接けたれば、不從順の者とともに亡びざ
りき。三二この外なにを言ふべきか、ギデオン、バラク、サムソン、
エフタ、またダビデ、サムエル及び預言者たちに就きて語らば、時
足らざるべし。三三彼らは信仰によりて國々を服へ、義をおこなひ、
約束のものを得、獅子の口をふさぎ、三四火の勢力を消し、劍の刃
をのがれ、弱よりして強くせられ、戰爭に勇ましくなり、異國人の
軍勢を退かせたり。三五女は死にたる者の復活を得、ある人は更
に勝りたる復活を得んために、免さるることを願はずして極刑を甘
んじたり。三六その他の者は嘲笑と鞭と、また縲絏と牢獄との試錬を
受け、三七或者は石にて撃たれ、試みられ、鐵鋸にて挽かれ、劍に
て殺され、羊・山羊の皮を纏ひて經あるき、乏しくなり、惱され、
苦しめられ、三八（世は彼らを置くに堪へず）荒野と山と洞と地の穴
とに徨へり。三九彼等はみな信仰に由りて證せられたれども約束の
ものを得ざりき。四〇これ神は我らの爲に勝りたるものを備へ給ひし
故に、彼らも我らと偕ならざれば、全うせらるる事なきなり。

第一二章 一この故に我らは斯く多くの證人に雲のごとく圍まれた
れば、凡ての重荷と纏へる罪とを除け、忍耐をもて我らの前に置かれ
たる馳場をはしり、二信仰の導師また之を全うする者なるイエスを
仰ぎ見るべし。彼はその前に置かれたる歡喜のために、恥をも厭は
ずして十字架をしのび、遂に神の御座の右に坐し給へり。三なんじら
倦み疲れて心を喪ふこと莫らんために、罪人らの斯く己に逆ひし
ことを忍び給へる者をおもへ。四汝らは罪と鬪ひて未だ血を流すま
で抵抗しことなし。五また子に告ぐるごとく汝らに告げ給ひし勸言
を忘れたり。曰く
『わが子よ、主の懲戒を輕んずるなかれ、
主に戒めらるるとき倦むなかれ。
六そは主、その愛する者を懲しめ、
凡てその受け給ふ子を鞭うち給へばなり』
と。七汝らの忍ぶは懲戒の爲なり、神は汝らを子のごとく待ひた
まふ、誰か父の懲しめぬ子あらんや。八凡ての人の受くる懲戒、もし

汝らに無くば、それは私生兒にして眞の子にあらず、九また我らの
肉體の父は、我らを懲しめし者なるに尚これを敬へり、況して靈魂
の父に服ひて生くることを爲ざらんや。一〇そは肉體の父は暫くの
間その心のままに懲しむることを爲しが、靈魂の父は我らを益す
るために、その聖潔に與らせんとて懲しめ給へばなり。一一凡ての
懲戒、今は喜ばしと見えず、反つて悲しと見ゆ、されど後これに由
りて練習する者に、義の平安なる果を結ばしむ。一二されば衰へた
る手、弱りたる膝を強くし、一三足蹇へたる者の履み外すことなく、
反つて醫されんために汝らの足に直なる途を備へよ。一四力めて凡
ての人と和ぎ、自ら潔からんことを求めよ。もし潔からずば、主を
見ること能はず。一五なんじら愼め、恐らくは神の恩惠に至らぬ者
あらん。恐らくは苦き根はえいでて汝らを惱し、多くの人これに由
りて汚されん。一六恐らくは淫行のもの、或は一飯のために長子の
特權を賣りしエサウの如き妄なるもの起らん。一七汝らの知るごと
く、彼はそののち祝福を受けんと欲したれども棄てられ、涙を流し

て之を求めたれど囘復の機を得ざりき。一八汝らの近づきたるは、
火の燃ゆる觸り得べき山・黒雲・黒闇・嵐、一九ラッパの音、言の
聲にあらず、この聲を聞きし者は此の上に言の加へられざらんこと
を願へり。二〇これ『獸すら山に觸れなば、石にて撃るべし』と命ぜ
られしを、彼らは忍ぶこと能はざりし故なり。二一その現れしとこ
ろ極めて怖しかりしかば、モーセは『われ甚く怖れ戰けり』と云へ
り。二二されど汝らの近づきたるはシオンの山、活ける神の都なる
天のエルサレム、千萬の御使の集會、二三天に録されたる長子どもの
教會、萬民の審判主なる神、全うせられたる義人の靈魂、二四新約
の仲保なるイエス及びアベルの血に勝りて物言ふ灑の血なり、二五
なんじら心して語りたまふ者を拒むな、もし地にて示し給ひし時こ
れを拒みし者ども遁るる事なかりしならば、況して天より示し給ふと
き、我ら之を退けて遁るることを得んや。二六その時、その聲、地を
震へり、されど今は誓ひて言ひたまふ『我なほ一たび地のみならず、
天をも震はん』と。二七此の『なほ一度』とは震はれぬ物の存らんた

めに、震はるる物すなはち造られたる物の取り除かるることを表す
なり。二八この故に我らは震はれぬ國を受けたれば、感謝して恭敬
と畏懼とをもて御心にかなふ奉仕を神になすべし。二九我らの神は燒
き盡す火なればなり。

第一三章 一兄弟の愛を常に保つべし。二旅人の接待を忘るな、或
人これに由り、知らずして御使を舍したり。三己も共に繋がるるご
とく囚人を思へ、また己も肉體に在れば、苦しむ者を思へ。四凡て
の人、婚姻のことを貴べ、また寢床を汚すな。神は淫行のもの、姦淫
の者を審き給ふべければなり。五金を愛することなく、有てるものを
以て足れりとせよ。主みづから『われ更に汝を去らず、汝を捨て
じ』と言ひ給ひたればなり。六然れば我ら心を強くして斯く言はん

『主わが助主なり、我おそれじ。
人われに何をなさん』

と。七神の言を汝らに語りて汝らを導きし者どもを思へ、その
行状の終を見てその信仰に效へ。八イエス・キリストは昨日も今日

も永遠までも變り給ふことなし。九各樣の異なる教のために惑さる
な。飮食によらず、恩惠によりて心を堅うするは善し、飮食により
て歩みたる者は益を得ざりき。一〇我らに祭壇あり、幕屋に事ふる者
は之より食する權を有たず。一一大祭司、罪のために活物の血を携
へて至聖所に入り、その活物の體は陣營の外にて燒かるるなり。一
二この故にイエスも己が血をもて民を潔めんが爲に、門の外にて苦難
を受け給へり。一三されば我らは彼の恥を負ひ、陣營より出でてその
御許に往くべし。一四われら此處には永遠の都なくして、ただ來らん
とする者を求むればなり。一五此の故に我らイエスによりて常に讚美
の供物を神に献ぐべし、乃ちその御名を頌むる口唇の果なり。一六
かつ仁慈と施濟とを忘るな、神は斯くのごとき供物を喜びたまふ。
一七汝らを導く者に順ひ之に服せよ。彼らは己が事を神に陳ぶべ
き者なれば、汝らの靈魂のために目を覺しをるなり。彼らを歎かせ
ず、喜びて斯く爲さしめよ、然らずば汝らに益なかるべし。一八我
らの爲に祈れ、我らは善き良心ありて凡てのことと正しく行はんと欲

するを信ずるなり。一九われ速かに汝らに歸ることを得んために、
汝らの祈らんことを殊に求む。二〇願はくは永遠の契約の血により
て、羊の大牧者となれる我らの主イエスを、死人の中より引上げ給
ひし平和の神、二一その悦びたまふ所を、イエス・キリストに由り
て我らの衷に行ひ、御意を行はしめん爲に凡ての善き事につきて、
汝らを全うし給はんことを。世々限りなく榮光、かれに在れ、アァ
メン。二二兄弟よ、請ふ我が勸の言を容れよ、我なんじらに手短く
書き贈りたるなり。二三なんじら知れ、我らの兄弟テモテは釋され
たり。彼もし速かに來らば、我かれと偕に汝らを見ん。二四汝ら
の凡ての導く者、および凡ての聖徒に安否を問へ。イタリヤの人々
、なんぢらに安否を問ふ。二五願はくは恩惠なんぢら衆と偕に在ら
んことを。

ヤコブの書

第一章 一神および主イエス・キリストの僕ヤコブ、散り居る十二の
族の平安を祈る。二わが兄弟よ、なんぢら各様の試錬に遭ふとき、
只管これを歡喜とせよ。三そは汝らの信仰の験は、忍耐を生ずる
を知ればなり。四忍耐をして全き活動をなさしめよ。これ汝らが
全くかつ備りて、缺くる所なからん爲なり。五汝らの中もし智慧
の缺くる者あらば、咎むることなくまた惜む事なく、凡ての人に與ふ
る神に求むべし、さらば與へられん。六但し疑ふことなく、信仰を
もて求むべし。疑ふ者は、風に動かされて翻へる海の波のごときな
り。七かかる人は主より何物をも受くと思ふな。八斯かる人は二心
にして、凡てその歩むところの途定りなし。九卑き兄弟は、おのが
高くせられたるを喜べ。一〇富める者は、おのが卑くせられたるを

喜べ。そは草の花のごとく過ぎゆくべければなり。一一日出で熱き
風吹きて草を枯らせば、花落ちてその麗しき姿ほろぶ。富める者も
また斯くのごとく、その途の半にして己まづ消え失せん。一二試錬
に耐ふる者は幸福なり、之を善しとせらるる時は、主のおのれを愛す
る者に、約束し給ひし生命の冠冕を受くべければなり。一三人誘は
るるとき『神われを誘ひたまふ』と言ふな、神は悪に誘はれ給はず、
又みづから人を誘ひ給ふことなし。一四人の誘はるるは己の慾に
引かれて惑さるるなり。一五慾孕みて罪を生み、罪成りて死を生む。
一六わが愛する兄弟よ、自ら欺くな。一七凡ての善き賜物と凡ての
全き賜物とは、上より、もろもろの光の父より降るなり。父は變る
ことなく、また回轉の影もなき者なり。一八その造り給へる物の中
にて我らを初穂のごとき者たらしめんとて、御旨のままに眞理の言
をもて、我らを生み給へり。一九わが愛する兄弟よ、汝らは之を知
る。されば、おのおの聽くことを速かにし、語ることを遲くし、怒
ることを遲くせよ。二〇人の怒は神の義を行はざればなり。二一さ

れば凡ての穢と溢るる惡とを捨て、柔和をもて其の植ゑられたる所
の靈魂を救ひ得る言を受けよ。二二ただ御言を聞くのみにして、己
を欺く者とならず、之を行ふ者となれ。二三それ御言を聞くのみに
して之を行はぬ者は、鏡にて己が生來の顏を見る人に似たり。二
四己をうつし見て立ち去れば、直ちにその如何なる姿なりしかを忘
る。二五されど全き律法、すなはち自由の律法を懇ろに見て離れぬ
者は、業を行ふ者にして、聞きて忘るる者にあらず、その行爲によ
りて幸福ならん。二六人もし自ら信心ふかき者と思ひて、その舌に
轡を著けず、己が心を欺かば、その信心は空しきなり。二七父な
る神の前に潔くして穢なき信心は、孤兒と寡婦とをその患難の時に
見舞ひ、また自ら守りて世に汚されぬ是なり。

第二章一わが兄弟よ、榮光の主なる我らの主イエス・キリストに
對する信仰を保たんには、人を偏り視るな。二金の指輪をはめ華美
なる衣を著たる人、なんぢらの會堂に入りきたり、また粗末なる
衣を著たる貧しき者いり來らんに、三汝等その華美なる衣を著た

る人を重んじ視て『なんぢ此の善き處に坐せよ』と言ひ、また貧し
き者に『なんぢ彼處に立つか、又はわが足下に坐せよ』と言はば、四
汝らの中にて區別をなし、また惡しき思をもてる審判人となるに非
ずや。五わが愛する兄弟よ、聽け、神は世の貧しき者を選びて信仰
に富ませ、神を愛する者に約束し給ひし國の世繼たらしめ給ひしに
非ずや。六然るに汝らは貧しき者を輕んじたり、汝らを虐げ、ま
た裁判所に曳くものは、富める者にあらずや。七彼らは汝らの上に
稱へらるる尊き名を汚すものに非ずや。八汝等もし聖書にある『お
のれの如く汝の隣を愛すべし』との尊き律法を全うせば、その爲
すところ善し。九されど若し人を偏り視れば、これ罪を行ふなり。
律法、なんぢらを犯罪者と定めん。一〇人、律法全體を守るとも、そ
の一つに蹟かば是すべてを犯すなり。一一それ『姦淫する勿れ』と
宣ひし者、また『殺す勿れ』と宣ひたれば、なんぢ姦淫せずとも、
若し人を殺さば律法を破る者となるなり、一二なんぢら自由の律法に
よりて審かれんとする者のごとく語り、かつ行ふべし。一三憐憫を

行はぬ者は憐憫なき審判を受けん、憐憫は審判にむかひて勝ち誇る
なり。一四わが兄弟よ、人みづから信仰ありと言ひて、もし行爲なく
ば何の益かあらん、かかる信仰は彼を救ひ得んや。一五もし兄弟 或
は姉妹、裸體にて日用の食物に乏しからんとき、一六汝等のうち、
或人これに『安らかにして往け、温かなれ、飽くことを得よ』といひ
て體に無くてならぬ物を與へずば、何の益かあらん。一七斯くのご
とく信仰もし行爲なくば、死にたる者なり。一八人もまた言はん『な
んぢ信仰あり、われ行爲あり、汝の行爲なき信仰を我に示せ、我わが
行爲によりて信仰を汝に示さん』と。一九なんぢ神は唯一なりと信
ずるか、かく信ずるは善し、惡鬼も亦信じて慄けり。二〇ああ虚しき
人よ、なんぢ行爲なき信仰の徒然なるを知らんと欲するか。二一我ら
の父アブラハムはその子イサクを祭壇に獻げしとき、行爲によりて義
とせられたるに非ずや。二二なんぢ見るべし、その信仰、行爲と共に
はたらき、行爲によりて全うせられたるを。二三またアブラハム神
を信じ、その信仰を義と認められたりと云へる聖書は成就し、かつ

彼は神の友と稱へられたり。二四かく人の義とせらるるは、ただ信仰
のみに由らずして行爲に由ることは、汝らの見る所なり。二五また
遊女ラハブも使者を受け、これを他の途より去らせたるとき、行爲に
よりて義とせられたるに非ずや。二六靈魂なき體の死にたる者なる
が如く、行爲なき信仰も死にたるものなり。

第三章 一わが兄弟よ、なんぢら多く教師となるな。教師たる我ら
の更に嚴しき審判を受くることを、汝ら知ればなり。二我らは皆し
ばしば蹪く者なり、人もし言に蹉跌なくば、これ全き人にして全身
に轡を著け得るなり。三われら馬を己に馴はせんために轡をその
口に置くときは、その全身を馭し得るなり。四また船を見よ、その形
は大く、かつ激しき風に追はるるとも、最小き舵にて舵人の欲する
ままに運すなり。五斯くのごとく舌もまた小きものなれど、その誇
るところ大なり。視よ、いかに小き火の、いかに大なる林を燃
すかを。六舌は火なり、不義の世界なり、舌は我らの肢體の中にて、
全身を汚し、また地獄より燃え出でて一生の車輪を燃すものなり。

七獸・鳥・匍ふもの・海にあるもの等、さまざまの種類みな制せら
る、既に人に制せられたり。八されど誰も舌を制すること能はず、舌
は動きて止まぬ惡にして死の毒の滿つるものなり。九われら之をもて
主たる父を讃め、また之をもて神に象りて造られたる人を詛ふ。一
〇讃美と呪詛と同じ口より出づ。わが兄弟よ、かかる事はあるべき
にあらず。一一泉は同じ穴より甘き水と苦き水とを出さんや。一二わ
が兄弟よ、無花果の樹オリブの實を結び、葡萄の樹、無花果の實を
結ぶことを得んや。斯くのごとく鹽水は甘き水を出すこと能はず。一
三汝等のうち智くして慧き者は誰なるか、その人は善き行状によ
り柔和なる智慧をもて行爲を顯すべし。一四されど汝等もし心の
うちに苦き妬と黨派心とを懷かば、誇るな、眞理に悖りて僞るな。
一五かかる智慧は上より下るにあらず、地に屬し、情慾に屬し、惡鬼
に屬するものなり。一六妬と黨派心とある所には亂と各樣の惡し
き業とあればなり。一七されど上よりの智慧は第一に潔よく、次に
平和・寛容・温順また憐憫と善き果とに滿ち、人を偏り視ず、虛僞

なきものなり。一八義の果は平和をおこなふ者の平和をもて播くに因
るなり。

第四章一 汝等のうちの戰爭は何處よりか、分爭は何處よりか、汝
らの肢體のうちに戰ふ慾より來るにあらずや。二汝ら貪れども得
ず、殺すことをなし、妬むことを爲れども得ること能はず、汝らは
爭ひまた戰す。汝らの得ざるは求めざるに因りてなり。三汝ら求
めてなほ受けざるは慾のために費さんとて妄に求むるが故なり。四
姦淫をおこなふ者よ、世の友となるは、神に敵するなるを知らぬか、
誰にても世の友とならんと欲する者は、己を神の敵とするなり。五
聖書に『神は我らの衷に住ませ給ひし靈を、妬むほどに慕ひたまふ』
と云へるを虛しきことと汝ら思ふか。六神は更に大なる恩惠を賜
ふ。されば言ふ『神は高ぶる者を拒ぎ、へりくだる者に恩惠を與へ
給ふ』と。七この故に汝ら神に服へ、惡魔に立ち向へ、さらば彼な
んぢらを逃げ去らん。八神に近づけ、さらば神なんぢらに近づき給は
ん。罪人よ、手を淨めよ、二心の者よ、心を潔よくせよ。九なん

ぢら悩め、悲しめ、泣け、なんぢらの笑を悲歎に、なんぢらの歡喜
を憂に易へよ。一〇主の前に己を卑うせよ、然らば主なんぢらを高
うし給はん。一一兄弟よ、互に謗るな。兄弟を謗る者、兄弟を審
く者は、これ律法を誹り、律法を審くなり。汝もし律法を審かば、
律法をおこなふ者にあらずして審判人なり。一二立法者また審判者は
唯一人にして、救ふことをも滅ぼすことをも爲し得るなり。なんぢ
誰なれば隣を審くか。一三聽け『われら今日もしくは明日それがし
の町に往きて、一年の間かしこに留り、賣買して利を得ん』と言ふ
者よ、一四汝らは明日のことを知らず、汝らの生命は何ぞ、暫く
現れて遂に消ゆる霧なり。一五汝等その言ふところに易へて『主の
御意ならば、我ら活きて此のこと、或は彼のことを爲さん』と言ふ
べきなり。一六されど今なんぢらは高ぶりて誇る、斯くのごとき誇
はみな惡しきなり。一七人善を行ふことを知りて、之を行はぬは罪
なり。
第五章一聽け、富める者よ、なんぢらの上に來らんとする艱難のた

めに泣きさけべ。二汝らの財は朽ち、汝らの衣は蠹み、三汝ら
の金銀は錆びたり。この錆なんぢらに對ひて證をなし、かつ火のご
とく汝らの肉を蝕はん。汝等この末の世に在りてなほ財を蓄へ
たり。四視よ、汝等がその畑を刈り入れたる勞動人に拂はざりし値
は叫び、その刈りし者の呼聲は萬軍の主の耳に入れり。五汝らは地
にて奢り樂しみ、屠らるる日に在りて尚おのが心を飽かせり。六汝
らは正しき者を罪に定め、且これを殺せり、彼は汝らに抵抗するこ
となし。七兄弟よ、主の來り給ふまで耐へ忍べ。視よ、農夫は地の
貴き實を、前と後との雨を得るまで耐へ忍びて待つなり。八汝らも
耐へ忍べ、なんぢらの心を堅うせよ。主の來り給ふこと近づきたれ
ばなり。九兄弟よ、互に怨言をいふな、恐らくは審かれん。視よ、
審判主、門の前に立ちたまふ。一〇兄弟よ、主の名によりて語りし
預言者たちを苦難と耐忍との模範とせよ。一一視よ、我らは忍ぶ者を
幸福なりと思ふ。なんぢらヨブの忍耐を聞けり、主の彼に成し給ひ
し果を見たり、即ち主は慈悲ふかく、かつ憐憫あるものなり。一二

わが兄弟よ、何事よりも先づ誓ふな、或は天、あるひは地、あるひ
は其の他のものを指して誓ふな。只なんぢら然りは然り否は否とせ
よ、罪に定めらるる事なからん爲なり。一三汝等のうち苦しむ者あ
るか、その人、祈せよ。喜ぶ者あるか、その人、讃美せよ。一四汝
等のうち病める者あるか、その人、教會の長老たちを招け。彼らは
主の名により其の人に油をぬりて祈るべし。一五さらば信仰の祈は
病める者を救はん、主かれを起し給はん、もし罪を犯し事あらば
赦されん。一六この故に互に罪を言ひ表し、かつ癒されんために相
互に祈れ、正しき人の祈ははたらきて大なる力あり。一七エリヤ
は我らと同じ情をもてる人なるに、雨降らざることを切に祈りしか
ば、三年六个月のあひだ地に雨降らざりき。一八かくて再び祈りた
れば、天雨を降らし、地その果を生ぜり。一九わが兄弟よ、汝等
のうち眞理より迷ふ者あらんに、誰か之を引回さば、二〇その人は知
れ、罪人をその迷へる道より引回す者は、かれの靈魂を死より救ひ、
多くの罪を掩ふことを。

ペテロの前の書

第一章一イエス・キリストの使徒ペテロ、書をポント、ガラテヤ、
カパドキヤ、アジヤ、ピテニヤに散りて宿れる者、二即ち父なる神
の預じめ知り給ふところに随ひて、御靈の潔により柔順ならんた
め、イエス・キリストの血の灑を受けんために選ばれたる者に贈る。
願はくは恩惠と平安と汝らに増さんことを。三讃むべきかな、我ら
の主イエス・キリストの父なる神、その大なる憐憫に随ひ、イエ
ス・キリストの死人の中より甦へり給へることに由り、我らを新に
生れしめて生ける望を懷かせ、四汝らの爲に天に蓄へある、朽ち
ず汚れず萎まざる嗣業を繼がしめ給へり。五汝らは終のときに顯
れんとて備りたる救を得んために、信仰によりて神の力に護らる
るなり。六この故に汝ら今しばしの程さまざまの試煉によりて憂へ

ざるを得ずとも、なほ大に喜べり。七汝らの信仰の驗は、壞つる
金の火にためさるるよりも貴くして、イエス・キリストの現れ給ふ
とき譽と光榮と尊貴とを得べきなり。八汝らイエスを見しことな
けれど之を愛し、今見ざれども之を信じて、言ひがたく、かつ光榮
ある喜悦をもて喜ぶ。九これ信仰の極、すなはち靈魂の救を受くる
に因る。一〇汝らの受くべき恩惠を預言したる預言者たちは、この
救につきて具に尋ね査べたり。一一即ち彼らは己が中に在すキリ
ストの靈の、キリストの受くべき苦難および其の後の榮光を預じ
め證して、何時のころ如何なる時を示し給ひしかを査べたり。一二
彼等はその勤むるところ己のためにあらず、汝らの爲なることを
默示によりて知れり。即ち天より遣され給へる聖靈によりて福音
を宣ぶる者どもの、汝らに傳へたる所にして、御使たちも之を懇
ろに視んと欲するなり。一三この故に、なんぢら心の腰に帶し、愼
みてイエス・キリストの現れ給ふときに、與へられんとする恩惠を
疑はずして望め。一四從順なる子等の如くして、前の無知なりし

時の慾に效はず、一五汝らを召し給ひし聖者に效ひて、自ら凡て
の行狀に潔かれ。一六録して『われ聖なれば、汝らも聖なるべし』
とあればなり。一七また偏ることなく各人の業に隨ひて審きたまふ
者を父と呼ばば、畏をもて世に寓る時を過せ。一八なんぢらが先祖
たちより傳はりたる虚しき行狀より贖はれしは、銀や金のごとき
朽つる物に由るにあらず、一九瑕なく汚點なき羔羊の如きキリストの
貴き血に由ることを知ればなり。二〇彼は世の創の前より預じめ
知られたまひしが、この末の世に現れ給へり。二一これは彼を死人
の中より甦へらせて之に榮光を與へ給ひし神を、彼によりて信ず
る汝らの爲なり、この故に汝らの信仰と希望とは神に由れり。二二
なんぢら眞理に從ふによりて靈魂をきよめ、僞りなく兄弟を愛す
るに至りたれば、心より熱く相愛せよ。二三汝らは朽つる種に由ら
で、朽つることなき種、すなはち神の活ける限りなく保つ言に由り
て新に生れたればなり。
二四『人はみな草のごとく、

その光榮はみな草の花の如し、
草は枯れ、花は落つ。
二五されど主の御言は永遠に保つなり』
汝らに宣傳へたる福音の言は即ちこれなり。
第二章 一されば凡ての惡意、すべての詭計・僞善・嫉妬および凡て
の謗を棄てて、二いま生れし嬰兒のごとく靈の眞の乳を慕へ、之に
より育ちて救に至らん爲なり。三なんぢら既に主の仁慈あることを
味ひ知りたらんには、然すべきなり。四主は人に棄てられ給へど、神
に選ばれたる貴き活ける石なり。五なんぢら彼にきたり、活ける石
のごとく建てられて靈の家となれ。これ潔き祭司となり、イエス・キ
リストに由りて神に喜ばるる靈の犧牲を獻げん爲なり。六聖書に
『視よ、選ばれたる貴き
隅の首石を我シオンに置く。
之に依頼む者は辱しめられじ』
とあるなり。七されば信ずる汝らには尊きなれど、信ぜぬ者には

『造家者らの棄てたる石は、隅の首石となれる』にて、八『つまづく石
、礙ぐる岩』となるなり。彼らは服はぬに因りて御言に躓く。こ
れは斯く定められたるなり。九されど汝らは選ばれたる族、王なる
祭司・潔き國人・神に屬ける民なり、これ汝らを暗黒より召して、己
の妙なる光に入れ給ひし者の譽を顯させん爲なり。一〇なんぢら
前には民にあらざりしが、今は神の民なり。前には憐憫を蒙らざり
しが、今は憐憫を蒙れり。一一愛する者よ、われ汝らに勸む。汝ら
は旅人また宿れる者なれば、靈魂に逆ひて戰ふ肉の慾を避け、一二
異邦人の中にありて行状を美しく爲よ、これ汝らを謗りて惡をお
こなふ者と云へる人々の、汝らの善き行爲を見て、反つて眷顧の日
に神を崇めん爲なり。一三なんぢら主のために凡て人の立てたる制度
に服へ。或は上に在る王、一四或は惡をおこなふ者を罰し、善を
おこなふ者を賞せんために王より遣されたる司に服へ。一五善を
行ひて愚なる人の無知の言を止むるは、神の御意なればなり。一
六なんぢら自由なる者のごとくすとも、その自由をもて惡の覆とな

さず、神の僕のごとくせよ。一七なんぢら凡ての人を敬ひ、兄弟
を愛し、神を畏れ、王を尊べ。一八僕たる者よ、大なる畏をもて
主人に服へ、啻に善きもの、寛容なる者にのみならず、情なき者
にも服へ、一九人もし受くべからざる苦難を受け、神を認むるに因り
て憂に堪ふる事をせば、これ譽むべきなり。二〇もし罪を犯して撻
たるるとき、之を忍ぶとも何の功かある。されど若し善を行ひてな
ほ苦しめらるる時これを忍ばば、これ神の譽めたまふ所なり。二一
汝らは之がために召されたり、キリストも汝らの爲に苦難をうけ、
汝らを其の足跡に隨はしめんとて模範を遺し給へるなり。二二彼は
罪を犯さず、その口に虚僞なく、二三また罵られて罵らず、苦しめ
られて脅かさず、正しく審きたまふ者に己を委ね、二四木の上に懸
りて、みづから我らの罪を己が身に負ひ給へり。これ我らが罪に就き
て死に、義に就きて生きん爲なり。汝らは彼の傷によりて癒された
り。二五なんぢら前には羊のごとく迷ひたりしが、今は汝らの靈魂
の牧者たる監督に歸りたり。

第三章一 二妻たる者よ、汝らもその夫に服へ。たとひ御言に遵
はぬ夫ありとも、汝らの潔く、かつ恭敬しき行状を見て、言に
よらず妻の行状によりて救に入らん爲なり。三 汝らは髮を辮み、
金をかけ、衣服を裝ふごとき表面のものを飾とせず、四 心のうちの
隱れたる人、すなはち柔和、恬靜なる靈の朽ちぬ物を飾とすべし、是
こそは神の前にて價貴きものなれ。五 むかし神に望を置きたる潔
き女たちも、かくの如くその夫に服ひて己を飾りたり。六 即ち
サラがアブラハムを主と呼びて之に服ひし如し。汝らも善を行ひ
て何事にも戰き懼れずばサラの子たるなり。七 夫たる者よ、汝ら
その妻を己より弱き器の如くし、知識にしたがひて偕に棲み、生命
の恩惠を共に嗣ぐ者として之を貴べ、これ汝らの祈に妨害なから
ん爲なり。八 終に言ふ、汝らみな心を同じうし、互に思ひ遣り、
兄弟を愛し、憐み、へりくだり、九 惡をもて惡に、誹をもて誹に
報ゆることなく、反つて之を祝福せよ。汝らの召されたるは祝福を
嗣がん爲なればなり。

一〇『生命を愛し、善き日を送らんとする者は、
舌を抑へて惡を避け、
口唇を抑へて虚僞を語らず、
一一惡より遠ざかりて善をおこなひ、平和を求めて之を追ふべし。
一二それ主の目は義人の上にとどまり、
その耳は彼らの祈にかたむく。
されど主の御顔は惡をおこなふ者に向ふ』
一三汝等もし善に熱心ならば、誰か汝らを害はん。一四
たとひ義のために苦しめらるる事ありとも、汝ら幸福なり『彼等の威嚇を懼る
な、また心を騒がすな』一五心の中にキリストを主と崇めよ、また
汝らの衷にある望の理由を問ふ人には、柔和と畏懼とをもて常に
辯明すべき準備をなし、一六かつ善き良心を保て。これ汝等のキリ
ストに在りて行ふ善き行状を罵る者の、その謗ることに就きて
自ら愧ぢん爲なり。一七もし善をおこなひて苦難を受くること神の
御意ならば、惡を行ひて苦難を受くるに勝るなり。一八キリストも

汝らを神に近づかせんとて、正しきもの正しからぬ者に代りて、一
たび罪のために死に給へり、彼は肉體にて殺され、靈にて生かされ給
へるなり。一九また靈にて往き、獄にある靈に宣傳へたまへり。二〇
これらの靈は、昔ノアの時代に方舟の備へらるるあひだ寛容をもて
神の待ち給へるとき、服はざりし者どもなり、その方舟に入り水を
經て救はれし者は、僅にしてただ八人なりき。二一その水に象れる
バプテスマは肉の汚穢を除くにあらず、善き良心の神に對する要求
にして、イエス・キリストの復活によりて今なんぢらを救ふ。二二
彼は天に昇りて神の右に在す。御使たち及びもろもろの權威と能力
とは彼に服ふなり。

第四章 一キリスト肉體にて苦難を受け給ひたれば、汝らも亦おなじ
心をもて自ら鎧へ。――肉體にて苦難を受くる者は罪を止むるなり
――二これ今よりのち、人の慾に從はず、神の御意に從ひて、肉體に
寓れる殘の時を過さん爲なり。三なんぢら過ぎにし日は、異邦人の
好む所をおこなひ、好色・慾情・酩酊・宴樂・暴飲・律法にかなはぬ

偶像崇拜に歩みて、もはや足れり。四彼らは汝らの己とともに放蕩
の極に走らぬを怪しみて譏るなり。五彼らは生ける者と死にたる者
とを審く準備をなし給へる者に己のことを陳ぶべし。六福音の死に
たる者に宣傳へられしは、彼らが肉體にて人のごとく審かれ、靈に
て神のごとく生きん爲なり。七萬の物のをはり近づけり、然れば汝
ら心を慥にし、愼みて祈せよ。八何事よりも先づ互に熱く相愛
せよ。愛は多くの罪を掩へばなり。九また吝むことなく互に懇ろに
待せ。一〇神のさまざまの恩惠を掌どる善き家司のごとく、各人そ
の受けし賜物をもて互に事へよ。一一もし語るならば、神の言をか
たる者のごとく語り、事ふるならば、神の與へたまふ能力を受けたる
者のごとく事へよ。是イエス・キリストによりて事々に神の崇められ
給はん爲なり。榮光と權力とは世々限りなく彼に歸するなり、アァ
メン。一二愛する者よ、汝らを試みんとて來れる火のごとき試煉を
異なる事として怪しまず、一三反つてキリストの苦難に與れば、與
るほど喜べ、なんぢら彼の榮光の顯れん時にも喜び樂しまん爲な

り。一四もし汝等キリストの名のために謗られなば幸福なり。榮光
の御靈すなはち神の御靈なんじらの上に留り給へばなり。一五汝等
のうち誰にても或は殺人、あるひは盜人、あるひは惡を行ふ者、
あるひは妄に他人の事に干渉する者となりて苦難に遭ふな。一六さ
れど若しキリステアンたるをもて苦難を受けなば、之を恥づること
なく、反つて此の名によりて神を崇めよ。一七既に時いたれり、審判
は神の家より始るべし。まづ我等より始るとせば、神の福音に從
はざる者のその結局は如何にぞや。一八義人もし辛うじて救はるるな
らば、不敬虔なるもの、罪ある者は何處にか立たん。一九されば神の
御意に從ひて苦難を受くる者は、善を行ひて己が靈魂を眞實なる
造物主にゆだね奉るべし。

第五章
一われ汝らの中なる長老たちに勸む（我は汝らと同じく
長老たる者、またキリストの苦難の證人、顯れんとする榮光に與
る者なり）二汝らの中にある神の群羊を牧へ。止むを得ずして爲さ
ず、神に從ひて心より爲し、利を貪るために爲さず、悅びてなし、

三委ねられたる者の主とならず、群羊の模範となれ。四さらば大牧者
の現れ給ふとき、萎まざる光榮の冠冕を受けん。五若き者よ、なん
ぢら長老たちに服へ、かつ皆たがひに謙遜をまとへ『神は高ぶる
者を拒ぎ、へりくだる者に恩惠を與へ給ふ』六この故に神の能力ある
御手の下に己を卑うせよ、さらば時に及びて神なんぢらを高うし給
はん。七又もろもろの心勞を神に委ねよ、神なんぢらの爲に慮ぱ
かり給へばなり。八愼みて目を覺しをれ、汝らの仇なる惡魔、ほゆ
る獅子のごとく歷迴りて呑むべきものを尋ぬ。九なんぢら信仰を堅う
して彼を禦げ、なんぢらは世にある兄弟たちの同じ苦難に遭ふを知
ればなり。一〇もろもろの恩惠の神、すなはち永遠の榮光を受けし
めんとて、キリストによりて汝らを召し給へる神は、汝らが暫く
苦難をうくる後、なんぢらを全うし、堅うし、強くして、その基を
定め給はん。一一願はくは權力世々限りなく神にあれ、アァメン。一
二われ忠實なる兄弟なりと思ふシルワノに由りて、簡單に書き贈り
て汝らに勸め、かつ此は神の眞の恩惠なることを證す、汝等この

恩恵に立て。一三汝らと共に選ばれてバビロンに在る教會、なんぢ
らに安否を問ふ、わが子マルコも安否を問ふ。一四なんぢら愛の接吻
をもて互に安否を問へ。願はくはキリストに在る汝ら衆に平安あ
らんことを。

ペテロの後の書

第一章一イエス・キリストの僕また使徒なるシメオン・ペテロ、書
を我らの神および救主イエス・キリストの義によりて、我らと同じ
貴き信仰を受けたる者に贈る。二願はくは神および我らの主イエス
を知るによりて、恩恵と平安と汝らに増さんことを。三キリストの
神たる能力は、生命と敬虔とに係る凡てのものを我らに賜へり。是
おのれの榮光と徳とをもて召し給へる者を我ら知るに因りてなり。
四その榮光と徳とによりて我らに貴き大なる約束を賜へり、これ
は汝らが世に在る慾の滅亡をのがれ、神の性質に與る者とならん
爲なり。五この故に勵み勉めて汝らの信仰に徳を加へ、徳に知識を、
六知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に敬虔を、七敬虔に兄弟の愛
を、兄弟の愛に博愛を加へよ。八此等のもの汝らの衷にありて彌増

すときは、汝等われらの主イエス・キリストを知るに怠ることなく、
實を結ばぬこと無きに至らん。九此等のものの無きは盲人にして遠く
見ること能はず、己が舊き罪を潔められしことを忘れたるなり。一〇
この故に兄弟よ、ますます勵みて汝らの召されたること、選ばれた
ることを堅うせよ。若し此等のことを行はば躓くことなからん。一
一かくて汝らは我らの主なる救主イエス・キリストの永遠の國に入
る恩惠を豐に與へられん。一二されば汝らは此等のことを知り、既
に受けたる眞理に堅うせられたれど、我つねに此等のことを思ひ出さ
せんとするなり。一三我は尚この幕屋に居るあいだ、汝らに思ひ出
させて勵ますを正當なりと思ふ。一四そは我らの主イエス・キリスト
の我に示し給へるごとく、我わが幕屋を脱ぎ去ることの速かなるを
知ればなり。一五我また汝等をして我が世を去らん後にも、常に此
等のことを思ひ出させんと勉むべし。一六我らは我らの主イエス・キ
リストの能力と來りたまふ事とを汝らに告ぐるに、巧なる作話を
用ひざりき、我らは親しくその稜威を見し者なり。一七いとも貴き

榮光の中より聲出でて『こは我が愛しむ子なり、我これを悦ぶ』と
言ひ給へるとき、主は父なる神より尊貴と榮光とを受け給へり。一
八我らも彼と偕に聖なる山に在りしとき、天より出づる此の聲をきけ
り。一九かくて我らが有てる預言の言は堅うせられたり。汝等この
言を暗き處にかがやく燈火として、夜明け、明星の汝らの心の
中にいづるまで顧みるは善し。二〇なんじら先づ知れ、聖書の預言
は、すべて己がままに釋くべきものにあらぬを。二一預言は人の心
より出でしにあらず、人々聖靈に動かされ、神によりて語れるものな
ればなり。

第二章 一されど民のうちに僞預言者おこりき、その如く汝らの中
にも僞教師あらん。彼らは滅亡にいたる異端を持ち入れ、己らを買
ひ給ひし主をさへ否みて、速かなる滅亡を自ら招くなり。二また多
くの人かれらの好色に随はん、之によりて眞の道を譏らるべし。
三彼らは貪慾によりて飾言を設け、汝等より利をとらん。彼らの
審判は古へより定められたれば遲からず、その滅亡は寢ねず。四
神

は罪を犯しし御使たちを赦さずして地獄に投げいれ、之を黒闇の穴
におきて審判の時まで看守し、五また古き世を容さずして、ただ義の
宣傳者なるノアと他の七人とをのみ護り、敬虔ならぬ者の世に洪水
を來らせ、六またソドムとゴモラとの町を滅亡に定めて灰となし、後
の不敬虔をおこなふ者の鑑とし、七ただ無法の者どもの好色の擧動
を憂ひし正しきロトのみを救ひ給へり。八（この正しき人は彼らの中
に住みて、日々その不法の行爲を見聞して、己が正しき心を傷めた
り）九かく主は敬虔なる者を試煉の中より救ひ、また正しからぬ者を
審判の日まで看守して之を罰し、一〇別けて、肉に隨ひて、汚れた
る情慾のうちを歩み、權ある者を輕んずる者を罰することを知り給
ふ。この曹輩は膽太く放縱にして、尊き者どもを譏りて畏れぬな
り。一一御使たちはかの尊き者どもに勝りて、大なる權勢と能力と
あれど、彼らを主の御前に譏り訴ふることをせず。一二然れど、か
の曹輩は恰も捕へられ屠らるるために生れたる辯別なき生物のごと
し、知らぬことを譏り、不義の價をえて必ず亡さるべし。一三彼ら

は晝もなほ酒食を快樂とし誘惑を樂しみ、汝らと共に宴席に與り
て、汚點となり瑕となる。一四その目は淫婦にて滿ち罪に飽くことな
し、彼らは靈魂の定らぬ者を惑し、その心は貪欲に慣れて呪詛の
子たり。一五彼らは正しき道を離れて迷ひいで、ベオルの子バラムの
道に隨へり。バラムは不義の報を愛して、一六その不法を咎められ
たり。物言はぬ驢馬、人の聲して語り、かの預言者の狂を止めたれ
ばなり。一七この曹輩は水なき井なり、颶風に逐はるる雲霧なり、黒
き闇かれらの爲に備へられたり。一八彼らは虛しき誇をかたり、迷
の中にある者どもより辛うじて遁れたる者を、肉の慾と好色とをも
て惑し、一九之に自由を與ふることを約すれど、自己は滅亡の奴隷
たり、敗くる者は勝つ者に奴隷とせらるればなり。二〇彼等もし主な
る救主イエス・キリストを知るによりて、世の汚穢をのがれしのち、
復これに纏はれて敗くる時は、その後の状は前よりもなほ惡しくな
るなり。二一義の道を知りて、その傳へられたる聖なる誡命を去り往
かんよりは寧ろ義の道を知らぬを勝れりとす。二二俚諺に『犬おのが

吐きたる物に歸り來り、豚身を洗ひてまた泥の中に轉ぶ』と云へるは
眞にして、能く彼らに當れり。
第三章 一愛する者よ、われ今この第二の書を汝らに書き贈り、第一
なると之をもて汝らに思ひ出させ、その潔よき心を勵まし、二
聖なる預言者たちの預じめ云ひし言、および汝らの使徒たちの傳
へし主なる救主の誡命を憶えさせんとす。三汝等まづ知れ、末の世
には嘲る者嘲笑をもて來り、おのが慾に隨ひて歩み、四かつ言はん
『主の來りたまふ約束は何處にありや、先祖たちの眠りしのち、萬の
もの開闢の初と等しくして變らざるなり』と。五彼らは殊更に次の
事を知らざるなり、即ち古へ神の言によりて天あり、地は水より
出で水によりて成立ちしが、六その時の世は之により水に淹はれて滅
びたり。七されど同じ御言によりて今の天と地とは蓄へられ、火に
て燒かれん爲に、敬虔ならぬ人々の審判と滅亡との日まで保たるるな
り。八愛する者よ、なんぢら此の一事を忘るな。主の御前には一日は
千年のごとく、千年は一日のごとし。九主その約束を果すに遲きは、

或人の遲しと思ふが如きにあらず、ただ一人の亡ぶるをも望み給は
ず、凡ての人の悔改に至らんことを望みて汝らを永く忍び給ふな
り。一〇されど主の日は盜人のごとく來らん、その日には天とどろき
て去り、もろもろの天體は燒け崩れ、地とその中にある工とは燒け
盡きん。一一かく此等のものはみな崩るべければ、汝等いかに潔き
行状と敬虔とをもて、一二神の日の來るを待ち之を速かにせんこ
とを勉むべきにあらずや、その日には天燃え崩れ、もろもろの天體
燒け溶けん。一三されど我らは神の約束によりて、義の住むところの
新しき天と新しき地とを待つ。一四この故に愛する者よ、汝等こ
れを待てば、神の前に汚點なく瑕なく安然に在らんことを勉めよ。一
五且われらの主の寛容を救なりと思へ、これは我らの愛する兄弟
パウロも、その與へられたる智慧にしたがひ曾て汝らに書き贈りし
如し。一六彼はその凡ての書にも此等のことに就きて語る、その中に
は悟りがたき所あり、無學のもの心の定らぬ者は、他の聖書のご
とく之をも強ひ釋きて自ら滅亡を招くなり。一七されば愛する者よ、

なんぢら預じめ之を知れば、慎みて無法の者の迷にさそはれて己
が堅き心を失はず、
一八
ますます我らの主なる救主イエス・キリ
ストの恩寵と主を知る知識とに進め。願はくは今および永遠の日ま
でも榮光かれに在らんことを。

ヨハネの第一の書

第一章 一 太初より有りし所のもの、我等が聞きしところ、目にて
見し所、つらつら視て手觸りし所のもの、即ち生命の言につき
て、二 ――この生命すでに顯れ、われら之を見て證をなし、その曾
て父と偕に在して、今われらに顯れ給へる永遠の生命を汝らに告ぐ
―― 三 我らの見しところ聞きし所を汝らに告ぐ、これ汝等をも我
らの交際に與らしめん爲なり。我らは父および其の子イエス・キリ
ストの交際に與るなり。四 此等のことを書き贈るは、我らの喜悦の
滿ちん爲なり。五 我らが彼より聞きて、また汝らに告ぐる音信は是
なり、即ち神は光にして少しの暗き所なし。六 もし神と交際あり
と言ひて暗きうちを歩まば、我ら僞りて眞理を行はざるなり。七 も
し神の光のうちに在すごとく光のうちを歩まば、我ら互に交際を

得、また其の子イエスの血、すべての罪より我らを潔む。八もし罪な
しと言はば、是みづから欺けるにて眞理われらの中になし。九もし
己の罪を言ひあらはさば、神は眞實にして正しければ、我らの罪を
赦し、凡ての不義より我らを潔め給はん。一〇もし罪を犯したる事な
しといはば、これ神を僞者とするなり、神の言われらの中になし。
第二章 一わが若子よ、これらの事を書き贈るは、汝らが罪を犯さざ
らん爲なり。人もし罪を犯さば、我等のために父の前に助主あり、
即ち義なるイエス・キリストなり。二彼は我らの罪のために宥の
供物たり、啻に我らの爲のみならず、また全世界の爲なり。三我ら
その誡命を守らば、之によりて彼を知ることを自ら悟る。四『われ彼
を知る』と言ひて其の誡命を守らぬ者は僞者にして眞理その衷にな
し。五その御言を守る者は誠に神の愛、その衷に全うせらる。之に
よりて我ら彼に在ることを悟る。六彼に居ると言ふ者は、彼の歩み給
ひしごとく自ら歩むべきなり。七愛する者よ、わが汝らに書き贈る
は、新しき誡命にあらず、汝らが初より有てる舊き誡命なり。こ

の舊き誡命は汝らが聞きし所の言なり。八然れど我が汝らに書き
贈るところは、また新しき誡命にして、主にも汝らにも眞なり、そ
の故は眞の光すでに照りて、暗黒はややに過ぎ去ればなり。九光
に在りと言ひて其の兄弟を憎むものは、今もなほ暗黒にあるなり。
一〇その兄弟を愛する者は、光に居りて顚躓その衷になし。一一そ
の兄弟を憎む者は暗黒にあり、暗きうちを歩みて己が往くところを
知らず、これ暗黒はその眼を矇したればなり。一二若子よ、我この
書を汝らに贈るは、なんぢら主の御名によりて罪を赦されたるに因
る。一三父たちよ、我この書を汝らに贈るは、汝ら太初より在す者
を知りたるに因る。若き者よ、我この書を汝らに贈るは、なんぢら
惡しき者に勝ちたるに因る。子供よ、我この書を汝らに贈りたるは、
汝ら御父を知りたるに因る。一四父たちよ、我この書を汝らに贈り
たるは、汝ら太初より在す者を知りたるに因る。若き者よ、我この
書を汝らに贈りたるは、汝ら強くかつ神の言その衷に留り、ま
た惡しき者に勝ちたるに因る。一五なんぢら世をも世にある物をも愛

すな。人もし世を愛せば、御父を愛する愛その衷になし。一六おほよ
そ世にあるもの、即ち肉の慾、眼の慾、所有の誇などは、御父より
出づるにあらず、世より出づるなり。一七世と世の慾とは過ぎ往く、
されど神の御意をおこなふ者は永遠に在るなり。一八子供よ、今は
末の時なり、汝らが非キリスト來らんと聞きしごとく、今や非キリ
スト多く起れり、之によりて我等その末の時なるを知る。一九彼らは
我等より出でゆきたれど、固より我等のものに非ざりき。我らの屬な
らば、我らと共に留りしならん。されどその出でゆきしは、皆われ
らの屬ならぬことの顯れん爲なり。二〇汝らは聖なる者より油を
注がれたれば、凡ての事を知る。二一我この書を汝らに贈るは、汝
ら眞理を知らぬ故にあらず、眞理を知り、かつ凡ての虚僞の眞理よ
り出でぬことを知るに因る。二二僞者は誰なるか、イエスのキリス
トなるを否む者にあらずや。御父と御子とを否む者は非キリストな
り。二三凡そ御子を否む者は御父をも有たず、御子を言ひあらはす
者は御父をも有つなり。二四初より聞きし所を汝らの衷に居らし

めよ。初より聞きしところ汝らの衷に居らば、汝らも御子と御父
とに居らん。二五我らに約し給ひし約束は是なり、即ち永遠の生命
なり。二六汝らを惑す者どもに就きて我これらの事を書き贈る。二
七なんぢらの衷には、主より注がれたる油とどまる故に、人の汝ら
に物を教ふる要なし。此の油は汝らに凡ての事を教へ、かつ眞に
して虚僞なし、汝等はその教へしごとく主に居るなり。二八されば
若子よ、主に居れ。これ主の現れ給ふとき臆することなく、其の
來り給ふときに恥づることなからん爲なり。二九なんぢら主を正しと
知らば、凡て正義をおこなふ者の主より生れたることを知らん。

第三章
一視よ、父の我らに賜ひし愛の如何に大なるかを。我ら神
の子と稱へらる。既に神の子たり、世の我らを知らぬは、父を知ら
ぬによりてなり。二愛する者よ、我等いま神の子たり、後いかん、未
だ顯れず、主の現れたまふ時われら之に肖んことを知る。我らそ
の眞の状を見るべければなり。三凡て主による此の希望を懷く者は、
その清きがごとく己を潔くす。四すべて罪をおこなふ者は不法を行

ふなり、罪は即ち不法なり。五汝らは知る、主の現れ給ひしは罪
を除かん爲なるを。主には罪あることなし。六おほよそ主に居る者は
罪を犯さず、おほよそ罪を犯す者は未だ主を見ず、主を知らぬなり。
七若子よ、人に惑さるるな、義をおこなふ者は義人なり、即ち主の義
なるがごとし。八罪を行ふものは惡魔より出づ、惡魔は初より罪を
犯せばなり。神の子の現れ給ひしは、惡魔の業を毀たん爲なり。九
凡て神より生るる者は罪を行はず、神の種、その衷に止るに由る。
彼は神より生るる故に罪を犯すこと能はず。一〇之に由りて神の子と
惡魔の子とは明かなり。おほよそ義を行はぬ者および己が兄弟を
愛せぬ者は神より出づるにあらず。一一われら互に相愛すべきは汝
らが初より聞きし音信なり。一二カインに效ふな、彼は惡しき者よ
り出でて己が兄弟を殺せり。何故ころしたるか、己が行爲は惡しく、
その兄弟の行爲は正しかりしに因る。一三兄弟よ、世は汝らを憎
むとも怪しむな。一四われら兄弟を愛するによりて、死より生命に
移りしを知る、愛せぬ者は死のうちに居る。一五おほよそ兄弟を憎む

者は即ち人を殺す者なり、凡そ人を殺す者の、その内に永遠の生命
なきを汝らは知る。一六主は我らの爲に生命を捨てたまへり、之に
よりて愛といふことを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨
つべきなり。一七世の財寶をもちて兄弟の窮乏を見、反つて憐憫の
心を閉づる者は、いかで神の愛その衷にあらんや。一八若子よ、わ
れら言と舌とをもて相愛することなく、行爲と眞實とを以てすべし。
一九之に由りて我ら眞理より出でしを知り、且われらの心われらを
責むとも神の前に心を安んずべし。二〇神は我らの心よりも大に
して一切のことを知り給へばなり。二一愛する者よ、我らが心みづ
から責むる所なくば、神に向ひて懼なし。二二且すべて求むる所
を神より受くべし。是その誡命を守りて御心にかなふ所を行へば
なり。二三その誡命はこれなり、即ち我ら神の子イエス・キリスト
の名を信じ、その命じ給ひしごとく互に相愛すべきことなり。二四
神の誡命を守る者は神に居り、神もまた彼に居給ふ。我らその賜ふ
ところの御靈に由りて其の我らに居給ふことを知るなり。

第四章一愛する者よ、凡ての靈を信ずな、その靈の神より出づるか
否かを試みよ。多くの僞預言者世に出でたればなり。二凡そイエ
ス・キリストの肉體にて來り給ひしことを言ひあらはす靈は神より
出づ、なんぢら之によりて神の御靈を知るべし。三凡そイエスを言ひ
表さぬ靈は神より出でしにあらず、これは非キリストの靈なり。そ
の來ることは汝ら聞けり、この靈いま既に世にあり。四若子よ、汝
らは神より出でし者にして既に彼らに勝てり。汝らに居給ふ者は世
に居る者よりも大なればなり。五彼らは世より出でし者なり、之に
よりて世の事をかたり、世も亦かれらに聽く。六我らは神より出でし
者なり。神を知る者は我らに聽き、神より出でぬ者は我らに聽かず。
之によりて眞理の靈と迷謬の靈とを知る。七愛する者よ、われら互
に相愛すべし。愛は神より出づ、おほよそ愛ある者は、神より生れ神
を知るなり。八愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。九神の
愛われらに顯れたり。神はその生み給へる獨子を世に遣し、我等を
して彼によりて生命を得しめ給ふに因る。一〇愛といふは、我ら神を

愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のため
に宥の供物となし給ひし是なり。一一愛する者よ、斯くのごとく神
われらを愛し給ひたれば、我らも亦たがひに相愛すべし。一二未だ神
を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在し、その愛
も亦われらに全うせらる。一三神、御靈を賜ひしに因りて、我ら神
に居り神われらに居給ふことを知る。一四又われら父のその子を遣
して世の救主となし給ひしを見て、その證をなすなり。一五凡そ
イエスを神の子と言ひあらはす者は、神かれに居り、かれ神に居る。
一六我らに對する神の愛を我ら既に知り、かつ信ず。神は愛なり、愛
に居る者は神に居り、神も亦かれに居給ふ。一七かく我らの愛完全を
えて、審判の日に懼なからしむ。我等この世にありて主の如くなる
に因る。一八愛には懼なし、全き愛は懼を除く、懼には苦難あれ
ばなり。懼るる者は、愛いまだ全からず。一九我らの愛するは、神
まづ我らを愛し給ふによる。二〇人もし『われ神を愛す』と言ひて、
その兄弟を憎まば、これ僞者なり。既に見るところの兄弟を愛

せぬ者は、未だ見ぬ神を愛すること能はず。二一神を愛する者は亦そ
の兄弟をも愛すべし。我等この誡命を神より受けたり。
第五章一凡そイエスをキリストと信ずる者は、神より生れたるな
り。おほよそ之を生み給ひし神を愛する者は、神より生れたる者をも
愛す。二我等もし神を愛して、その誡命を行はば、之によりて神の
子供を愛することを知る。三神の誡命を守るは即ち神を愛するなり、
而してその誡命は難からず。四おほよそ神より生るる者は世に勝つ、
世に勝つ勝利は我らの信仰なり。五世に勝つものは誰ぞ、イエスを神
の子と信ずる者にあらずや。六これ水と血とに由りて來り給ひし者、
即ちイエス・キリストなり。啻に水のみならず、水と血とをもて來
り給ひしなり。七證する者は御靈なり。御靈は眞理なればなり。八
證する者は三つ、御靈と水と血となり。この三つ合ひて一つとなる。
九我等もし人の證を受けんには、神の證は更に大なり。神の證は
その子につきて證し給ひし是なり。一〇神の子を信ずる者はその衷
にこの證をもち、神を信ぜぬ者は神を僞者とす。これ神その子に

つきて證せし證を信ぜぬが故なり。一一その證はこれなり、神は
永遠の生命を我らに賜へり、この生命はその子にあり。一二御子をも
つ者は生命をもち、神の子をもたぬ者は生命をもたず。一三われ神の
子の名を信ずる汝らに此等のことを書き贈るは、汝らに自ら永遠
の生命を有つことを知らしめん爲なり。一四我らが神に向ひて確信す
る所は是なり、即ち御意にかなふ事を求めば、必ず聽き給ふ。一
五かく求むるところ、何事にても聽き給ふと知れば、求めし願を得
たる事をも知るなり。一六人もし其の兄弟の死に至らぬ罪を犯すを
見ば、神に求むべし。さらば彼に、死に至らぬ罪を犯す人々に生命を
與へ給はん。死に至る罪あり、我これに就きて請ふべしと言はず。一
七凡ての不義は罪なり、されど死に至らぬ罪あり。一八凡て神より生
れたる者の罪を犯さぬことを我らは知る。神より生れ給ひし者、こ
れを守りたまふ故に、惡しきもの觸るる事をせざるなり。一九我らは
神より出で、全世界は惡しき者に屬するを我らは知る。二〇また神の
子すでに來りて我らに眞の者を知る知識を賜ひしを我らは知る。而

して我(われ)らは眞(まこと)の者(もの)に居(を)り、その子(こ)イエス・キリストに居(を)るなり、彼(かれ)
は眞(まこと)の神(かみ)にして永遠(とこしへ)の生命(いのち)なり。二一 若子(わくご)よ、自(みづか)ら守(まも)りて偶像(ぐうざう)に遠(とほ)
ざかれ。

ヨハネの第二の書

第一章 一長老、書を選ばれたる婦人および其の子供に贈る。われ
眞をもて汝らを愛す。啻に我のみならず、凡て眞理を知る者はみ
な汝らを愛す。二これは我らの衷に止りて永遠に偕にあらんとする
眞理に因りてなり。三父なる神および父の子イエス・キリストより賜
ふ恩惠と憐憫と平安とは、眞と愛との中にて我らと偕にあらん。四
われ汝の子供のうちに、我らが父より誡命を受けし如く、眞理に循
ひて歩む者あるを見て甚だ喜べり。五婦人よ、われ今なんぢに願ふ
は、我らが互に相愛すべき事なり。これは新しき誡命を書き贈るに
あらず、我らが初より有てる誡命なり。六彼の誡命に循ひて歩むは
即ち愛なり、汝らが初より聞きしごとく、愛に歩むは即ち誡命な
り。七人を惑すもの多く世にいで、イエス・キリストの肉體にて來り

給ひしことを言ひ表さず、かかる者は人を惑す者にして、非キリス
トなり。八なんぢら我らが働きし所を空しくせず、滿ち足れる報
を得んために自ら心せよ。九凡そキリストの教に居らずして、之
を越えゆく者は神を有たず、キリストの教にをる者は父と子とを有
つなり。一〇人もし此の教を有たずして汝らに來らば、之を家に入
るな、安かれと言ふな。一一之に安かれと言ふ者は、その惡しき行爲
に與するなり。一二我なほ汝らに書き贈ること多くあれど、紙と墨
とにてするを好まず、我らの歡喜を充さんために汝等にいたり、顏
をあわせて語らんことを望む。一三選ばれたる汝の姉妹の子供、な
んぢに安否を問ふ。

ヨハネの第三の書

第一章 一 長老、書を愛するガイオ、わが眞をもて愛する者に贈る。
二 愛する者よ、我なんぢが靈魂の榮ゆるごとく汝すべての事に榮え、
かつ健かならんことを祈る。三 兄弟たち來りて汝が眞理を保つこ
と、即ち眞理に循ひて歩むことを證したれば、われ甚だ喜べり。
四 我には我が子供の、眞理に循ひて歩むことを聞くより大なる喜悦
はなし。五 愛する者よ、なんぢ旅人なる兄弟たちにまで行ふ所み
な忠實をもて爲せり。六 かれら教會の前にて汝の愛につきて證せ
り。なんぢ神の御意に適ふやうに彼らを見送らば、その行ふところ
善からん。七 彼らは異邦人より何をも受けずして御名のために旅立せ
り。八 されば斯かる人を助くべきなり、我らも彼らと共に眞理のため
に働く者とならん爲なり。九 われ曩に聊か教會に書きおくれり。

然れど彼らの中に長たらんと欲するデオテレペス我らを受けず。一〇
この故に我もし往かば、その行へる業を思ひ出させん。彼は惡しき
言をもて我らを罵り、なほ足れりとせずして自ら兄弟たちを接
けず、之を接けんとする者をも拒みて教會より逐ひ出す。一一愛す
る者よ、惡に效ふな、善にならへ。善をおこなふ者は神より出で、惡
をおこなふ者は未だ神を見ざるなり。一二デメテリオは凡ての人にも
眞理にも證せらる。我等もまた證す、なんぢ我らの證の眞なる
を知る。一三我なほ汝に書き贈ること多くあれど、墨と筆とにてす
るを欲せず、一四速かに汝を見、たがひに顔をあはせて語らんこと
を望む。一五汝に平安あれ、朋友たち安否を問ふ。なんぢ名をさし
て友たちに安否を問へ。

ユダの書

第一章 一 イエス・キリストの僕にしてヤコブの兄弟なるユダ、書
を召されたる者、すなはち父なる神に愛せられ、イエス・キリスト
の爲に守らるる者に贈る。二 願はくは憐憫と平安と愛と、なんぢらに
増さんことを。三 愛する者よ、われ我らが共に與る救につき勵み
て汝らに書き贈らんとせしが、聖徒の一たび傳へられたる信仰のた
めに戰はんことを勸むる書を、汝らに贈るを必要と思へり。四 そは
敬虔ならずして我らの神の恩惠を好色に易へ、唯一の主なる我らの
主イエス・キリストを否むものども潜り入りたればなり。彼らが此の
審判を受くべきことは昔より預じめ録されたり。五 汝らは固より
凡ての事を知れど、我さらに汝等をして思ひ出さしめんとする事あ
り、即ち主エジプトの地より民を救ひ出して、後に信ぜぬ者を亡し

給へり。六又おのが位を保たずして己が居所を離れたる御使を、大
なる日の審判まで、闇黒のうちに長久の縄目をもて看守し給へり。七
ソドム、ゴモラ及びその周圍の町々も亦これと同じく、淫行に耽り、
背倫の肉慾に走り、永遠の火の刑罰をうけて鑑とせられたり。八か
くの如くかの夢見る者どもも肉を汚し、權威ある者を輕んじ、尊き
者を罵る。九御使の長ミカエル惡魔と論じてモーセの屍體を爭ひし
時に、敢へて罵りて審かず、唯『ねがはくは主なんぢを戒め給はん
ことを』と云へり。一〇されど此の人々は知らぬことを罵り、無知
の獸のごとく、自然に知る所によりて亡ぶるなり。一一禍害なるか
な、彼らはカインの道にゆき、利のためにバラムの迷に走り、また
コラの如き謀反によりて亡びたり。一二彼らは汝らと共に宴席に與
り、その愛餐の暗礁たり、憚らずして自己をやしなふ牧者、風に
逐はるる水なき雲、枯れて又かれ、根より拔かれたる果なき秋の木、
一三おのが恥を湧き出す海のあらき波、さまよふ星なり。彼らの爲に
暗き闇、とこしへに蓄へ置かれたり。一四アダムより七代に當るエ

ノク彼らに就きて預言せり。曰く『視よ、主はその聖なる千萬の衆
を率ゐて來りたまへり。一五これ凡ての人の審判をなし、すべて敬虔
ならぬ者の不敬虔を行ひたる凡ての業と、敬虔ならぬ罪人
の、主に逆ひて語りたる凡ての甚だしき言とを責め給はんとてな
り』一六彼らは呟くもの、不滿をならす者にして、おのが慾に隨ひ
て歩み、口に誇をかたり、利のために人に諂ふなり。一七愛する者
よ、汝らは我らの主イエス・キリストの使徒たちの預じめ言ひし
言を憶えよ。一八即ち汝らに曰らく『末の時に嘲る者おこり、己
が不敬虔なる慾に隨ひて歩まん』と。一九彼らは分裂をなし、情慾
に屬し、御靈を有たぬ者なり。二〇されど愛する者よ、なんぢらは己
がいと潔き信仰の上に徳を建て、聖靈によりて祈り、二一神の愛のう
ちに己をまもり、永遠の生命を得るまで我らの主イエス・キリスト
の憐憫を待て。二二また彼らの中なる疑ふ者をあはれみ、二三或者を
火より取出して救ひ、或者をその肉に汚れたる下衣をも厭ひ、かつ
懼れつつ憐め。二四願はくは汝らを守りて躓かしめず、瑕なくし

て榮光の御前に歡喜をもて立つことを得しめ給ふ者、二五 即ち我ら
の救主なる唯一の神に、榮光・稜威・權力・權威、われらの主イエ
ス・キリストに由りて、萬世の前にも今も萬世までも在らんこと
を、アァメン

ヨハネの默示録

第一章一これイエス・キリストの默示なり。即ち、かならず速か
に起るべき事を、その僕どもに顯させんとて、神の彼に與へしも
のなるを、彼その使を僕ヨハネに遣して示し給へるなり。二ヨハ
ネは神の言とイエス・キリストの證とに就きて、その見しところ
を悉とく證せり。三此の預言の言を讀む者と之を聽きて其の中に
録されたることを守る者どもとは幸福なり、時近ければなり。四ヨハ
ネ書をアジヤに在る七つの教會に贈る。願はくは今在し、昔在し、
後來りたまふ者、および其の御座の前にある七つの靈、五また忠實
なる證人、死人の中より最先に生れ給ひしもの、地の諸王の君なる
イエス・キリストより賜ふ恩惠と平安と汝らに在らんことを。願は
くは我らを愛し、その血をもて我らを罪より解放ち、六われらを其の

父なる神のために國民となし祭司となし給へる者に、世々限りなく
榮光と權力とあらんことを、アァメン。七視よ、彼は雲の中にあり
て來りたまふ、諸衆の目、殊に彼を刺したる者これを見ん、かつ地上
の諸族みな彼の故に歎かん、然り、アァメン。八今いまし、昔いま
し、後きたり給ふ主なる全能の神いひ給ふ『我はアルパなり、オメガ
なり』九汝らの兄弟にして汝らと共にイエスの艱難と國と忍耐と
に與る我ヨハネ、神の言とイエスの證との爲にパトモスといふ島
に在りき。一〇われ主日に御靈に感じゐたるに、我が後にラッパの
ごとき大なる聲を聞けり。一一曰く『なんぢの見る所のことを書に
録して、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラ
デルヒヤ、ラオデキヤに在る七つの教會に贈れ』一二われ振反りて
我に語る聲を見んとし、振反り見れば七つの金の燈臺あり。一三また
燈臺の間に人の子のごとき者ありて、足まで垂る衣を著、胸に金
の帶を束ね、一四その頭と頭髮とは白き毛のごとく雪のごとく白く、
その目は焔のごとく、一五その足は爐にて燒きたる輝ける眞鍮の

ごとく、その聲は衆の水の聲のごとし。一六その右の手に七つの星
を持ち、その口より兩刃の利き劍いで、その顏は烈しく照る日のご
とし。一七我これを見しとき其の足下に倒れて死にたる者の如くなれ
り。彼その右の手を我に按きて言ひたまふ『懼るな、我は最先なり、
最後なり、一八活ける者なり、われ曾て死にたりしが、視よ、世々限
りなく生く。また死と陰府との鍵を有てり。一九されば汝が見しこ
とと今あることと、後に成らんとする事とを録せ、二〇即ち汝が見
しところの我が右の手にある七つの星と七つの金の燈臺との奧義な
り。七つの星は七つの教會の使にして、七つの燈臺は七つの教會
なり。

第二章一エペソに在る教會の使に書きおくれ。「右の手に七つの
星を持つ者、七つの金の燈臺の間に歩むもの斯く言ふ、二われ汝の
行爲と勞と忍耐とを知る。また汝が惡しき者を忍び得ざることと、
自ら使徒と稱へて使徒にあらぬ者どもを試みて、その虛僞なるを
見あらはししことを知る。三なんぢは忍耐を保ち、我が名のために

忍びて倦まざりき。　四されど我なんぢに責むべき所あり、なんぢは
初の愛を離れたり。　五さればなんぢ何處より墜ちしかを思へ、悔改
めて初の行爲をなせ、然らずして若し悔改めずば、我なんぢに到
り汝の燈臺を、その處より取除かん。　六されど汝に取るべき所あ
り、汝はニコライ宗の行爲を憎む、我も之を憎むなり。　七耳ある者
は御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽くべし、勝を得る者には、われ神
のパラダイスに在る生命の樹の實を食ふことを許さん」八スミルナに
在る教會の使に書きおくれ。「最先にして最後なる者、死人となり
て復生きし者かく言ふ。　九われ汝の艱難と貧窮とを知る――されど
汝は富める者なり。我はまた自らユダヤ人と稱へてユダヤ人にあ
らず、サタンの會に屬く者より汝が譏を受くるを知る。　一〇なんぢ
受けんとする苦難を懼るな、視よ、惡魔なんぢらを試みんとて、汝
らの中の或者を獄に入れんとす。汝ら十日のあひだ患難を受けん、
なんぢ死に至るまで忠實なれ、然らば我なんぢに生命の冠冕を與へ
ん。　一一耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽くべし。勝を

得るものは第二の死に害はるることなし」一二ペルガモに在る教會
の使に書きおくれ。「兩刃の利き劍を持つもの斯く言ふ、一三われ
汝の住むところを知る、彼處にはサタンの座位あり、汝わが名を保
ち、わが忠實なる證人アンテパスが、汝等のうち即ちサタンの住
む所にて殺されし時も、なほ我を信ずる信仰を棄てざりき。一四さ
れど我なんぢに責むべき一二の事あり、汝の中にバラムの教を保つ
者どもあり、バラムはバラクに教へ、彼をしてイスラエルの子孫の前
に躓物を置かしめ、偶像に献げし物を食はせ、かつ淫行をなさしめた
り。一五斯くのごとく汝らの中にもニコライ宗の教を保つ者あり。
一六さらば悔改めよ、然らずば我すみやかに汝に到り、わが口の劍
にて彼らと戰はん。一七耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふことを
聽くべし、勝を得る者には我かくれたるマナを與へん、また受くる
者の外たれも知らざる新しき名を録したる白き石を與へん」一八テ
アテラに在る教會の使に書きおくれ。「目は焔のごとく、足は輝
ける眞鍮の如くなる神の子かく言ふ、一九われ汝の行爲および汝

の愛と信仰と職と忍耐とを知る、又なんぢの初の行爲よりは後の
行爲の多きことを知る。二〇されど我なんぢに責むべき所あり、汝
はかの自ら預言者と稱へて我が僕を教へ惑し、淫行をなさしめ、
偶像に献げし物を食はしむる女イゼベルを容れおけり。二一我かれ
に悔改むる機を與ふれど、その淫行を悔改むることを欲せず。二二
視よ、我かれを牀に投げ入れん、又かれと共に姦淫を行ふ者も、その
行爲を悔改めずば、大なる患難に投げ入れん。二三又かれの子供を
打ち殺さん、斯くてもろもろの教會は、わが人の腎と心とを究む
る者なるを知るべし、我は汝等おのおのの行爲に隨ひて報いん。二
四我この他のテアテラの人にして未だかの教を受けず、所謂サタン
の深きところを知らぬ汝らに斯くいふ、我ほかの重を汝らに負は
せじ。二五ただ汝等はその有つところを我が到らん時まで保て。二
六勝を得て終に至るまで我が命ぜしことを守る者には、諸國の民を
治むる權威を與へん。二七彼は鐵の杖をもて之を治め、土の器を碎
くが如くならん、我が父より我が受けたる權威のごとし。二八我また

彼に曙の明星を與へん。二九耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふ
ことを聽くべし」

第三章 一サルデスに在る教會の使に書きおくれ。「神の七つの靈
と七つの星とを持つ者かく言ふ、われ汝の行爲を知る、汝は生く
る名あれど死にたる者なり。二なんぢ目を覺し、殆ど死なんとする
殘のものを堅うせよ、我なんぢの行爲のわが神の前に全からぬを
見とめたり。三されば汝の如何に受けしか、如何に聽きしかを思ひ
いで、之を守りて悔改めよ。もし目を覺さずば、盜人のごとく我き
たらん、汝わが何れの時きたるかを知らざるべし。四されどサルデ
スにて衣を汚さぬもの數名あり、彼らは白き衣を著て我とともに
歩まん、斯くするに相應しき者なればなり。五勝を得る者は斯くのご
とく白き衣を著せられん、我その名を生命の書より消し落さず、我
が父のまへと御使の前とにてその名を言ひあらはさん。六耳ある者
は御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽くべし」七ヒラデルヒヤにある
教會の使に書きおくれ。「聖なるもの眞なる者、ダビデの鍵を持

ちて、開けば閉づる者なく、閉づれば開く者なき者かく言ふ、八われ
汝の行爲を知る、視よ、我なんぢの前に開けたる門を置く、これを
閉ぢ得る者なし。汝すこしの力ありて、我が言を守り、我が名を
否まざりき。九視よ、我サタンの會、すなはち自らユダヤ人と稱へ
てユダヤ人にあらず、ただ虚僞をいふ者の中より、或者をして汝の
足下に來り拜せしめ、わが汝を愛せしことを知らしめん。一〇汝わ
が忍耐の言を守りし故に、我なんぢを守りて、地に住む者どもを試
むるために全世界に來らんとする試錬のときに免れしめん。一一わ
れ速かに來らん、汝の有つものを守りて、汝の冠冕を人に奪はれ
ざれ。一二われ勝を得る者を我が神の聖所の柱とせん、彼は再び外
に出でざるべし、又かれの上に、わが神の名および我が神の都、す
なはち天より我が神より降る新しきエルサレムの名と、我が新し
き名とを書き記さん。一三耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふこと
を聽くべし」一四ラオデキヤに在る教會の使に書きおくれ。「アア
メンたる者、忠實なる眞なる證人、神の造り給ふものの本源たる

者かく言ふ、一五われ汝の行爲を知る、なんぢは冷かにもあらず熱
きにもあらず、我はむしろ汝が冷かならんか、熱からんかを願ふ。
一六かく熱きにもあらず、冷かにもあらず、ただ微温きが故に、我な
んぢを我が口より吐き出さん。一七なんぢ、我は富めり、豐なり、乏
しき所なしと言ひて、己が惱める者・憐むべき者・貧しき者・盲目
なる者・裸なる者たるを知らざれば、一八我なんぢに勸む、なんぢ
我より火にて煉りたる金を買ひて富め、白き衣を買ひて身に纏ひ、
なんぢの裸體の恥を露さざれ、眼藥を買ひて汝の目に塗り、見るこ
とを得よ。一九凡てわが愛する者は、我これを戒め之を懲す。この
故に、なんぢ勵みて悔改めよ。二〇視よ、われ戸の外に立ちて叩く、
人もし我が聲を聞きて戸を開かば、我その内に入りて彼とともに食
し、彼もまた我とともに食せん。二一勝を得る者には我とともに我
が座位に坐することを許さん、我の勝を得しとき、我が父とともに其
の御座に坐したるが如し。二二耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふ
ことを聽くべし』

第四章一この後われ見しに、視よ、天に開けたる門あり。初に我
に語るを聞きしラッパのごとき聲いふ『ここに登れ、我この後おこ
るべき事を汝に示さん』二直ちに、われ御靈に感ぜしが、視よ、天
に御座設けあり。三その御座に坐したまふ者あり、その坐し給ふも
のの状は碧玉・赤瑪瑙のごとく、かつ御座の周圍には緑玉のごと
き虹ありき。四また御座のまはりに二十四の座位ありて、二十四人の
長老、白き衣を纏ひ、首に金の冠冕を戴きて、その座位に坐せり。
五御座より數多の電光と聲と雷霆と出づ。また御座の前に燃えたる七
つの燈火あり、これ神の七つの靈なり。六御座のまへに水晶に似たる
玻璃の海あり。御座の中央と御座の周圍とに四つの活物ありて、前
も後も數々の目にて滿ちたり。七第一の活物は獅子のごとく、第二
の活物は牛のごとく、第三の活物は面のかたち人のごとく、第四の
活物は飛ぶ鷲のごとし。八この四つの活物おのおの六つの翼あり、
翼の内も外も數々の目にて滿ちたり、日も夜も絶間なく言ふ、
『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、

昔いまし、今いまし、のち來りたまふ
主たる全能の神』
九この活物ら御座に坐し、世々限りなく活きたまふ者に榮光と尊崇
とを歸し、感謝する時、一〇二十四人の長老、御座に坐したまふ者の
まへに伏し、世々限りなく活きたまふ者を拜し、おのれの冠冕を御座
のまへに投げ出して言ふ、
一一『我らの主なる神よ、榮光と尊崇と能力とを
受け給ふは宜なり。汝は萬物を造りたまひ、
萬物は御意によりて存し、かつ造られたり』
第五章一我また御座に坐し給ふ者の右の手に、巻物のあるを見たり、
その裏表に文字あり、七つの印をもて封ぜらる。二また大聲に『巻
物を開きてその封印を解くに相應しき者は誰ぞ』と呼はる強き御使を
見たり。三然るに天にも地にも、地の下にも、巻物を開きて之を見得
る者なかりき。四巻物を開き、これを見るに相應しき者の見えざりし
に因りて、我いたく泣きゐたりしに、五長老の一人われに言ふ『泣

くな、視よ、ユダの族の獅子・ダビデの蘖、すでに勝を得て巻物
とその七つの封印とを開き得るなり』六我また御座および四つの活物
と長老たちとの間に、屠られたるが如き羔羊の立てるを見たり、之
に七つの角と七つの目とあり、この目は全世界に遣されたる神の七
つの靈なり。七かれ來りて御座に坐したまふ者の右の手より巻物を受
けたり。八巻物を受けたるとき、四つの活物および二十四人の長老
、おのおの立琴と香の滿ちたる金の鉢とをもちて、羔羊の前に平伏せ
り、此の香は聖徒の祈祷なり。九かくて新しき歌を謳ひて言ふ
『なんぢは巻物を受け、その封印を解くに相應しきなり、汝は
屠られ、その血をもて諸種の族・國語・民・國の中より人々を
神のために買ひ、一〇之を我らの神のために國民となし、祭司と
なし給へばなり。彼らは地の上に王となるべし』
一一我また見しに、御座と活物と長老たちとの周圍にをる多くの御使
の聲を聞けり。その數、千々萬々にして、一二大聲にいふ
『屠られ給ひし羔羊こそ、能力と富と知慧と、勢威と尊崇と、榮光

と讃美とを受くるに相應しけれ』
一三我また天に、地に、地の下に、海にある萬の造られたる物、ま
た凡てその中にある物の云へるを聞けり。曰く
『願はくは御座に坐し給ふものと羔羊とに、讃美と尊崇と榮光
と權力と世々限りなくあらん事を』
一四四つの活物はアァメンと言ひ、長老たちは平伏して拜せり。

第六章
一羔羊その七つの封印の一つを解き給ひし時、われ見しに、
四つの活物の一つが雷霆のごとき聲して『來れ』と言ふを聞けり。二
また見しに、視よ、白き馬あり、之に乘るもの弓を持ち、かつ冠冕を與
へられ、勝ちて復勝たんとて出でゆけり。三第二の封印を解き給ひた
れば、第二の活物の『來れ』と言ふを聞けり。四かくて赤き馬いで來
り、これに乘るもの地より平和を奪ひ取ることと、人をして互に殺さ
しむる事とを許され、また大なる劍を與へられたり。五第三の封印
を解き給ひたれば、第三の活物の『來れ』と言ふを聞けり。われ見し
に、視よ、黒き馬あり、之に乘るもの手に權衡を持てり。六かくてわ

れ四つの活物の間より出づるごとき聲を聞けり。曰く『小麥五合は
一デナリ、大麥一升五合は一デナリなり、油と葡萄酒とを害ふな』
七第四の封印を解き給ひたれば、第四の活物の『來れ』と言ふを聞け
り。八われ見しに、視よ、青ざめたる馬あり、之に乘る者の名を死と
いひ、陰府これに隨ふ。かれらは地の四分の一を支配し、劍と饑饉
と死と地の獸とをもて人を殺すことを許されたり。九第五の封印を
解き給ひたれば、曾て神の言のため、又その立てし證のために殺さ
れし者の靈魂の祭壇の下に在るを見たり。一〇彼ら大聲に呼はりて言
ふ『聖にして眞なる主よ、何時まで審かずして地に住む者に我らの
血の復讐をなし給はぬか』一一ここにおのおの白き衣を與へられ、か
つ己等のごとく殺されんとする同じ僕たる者と兄弟との數の滿つ
るまで、なほ暫く安んじて待つべきを言ひ聞けられたり。一二第六
の封印を解き給ひし時、われ見しに、大なる地震ありて日は荒き毛
布のごとく黒く、月は全面血の如くなり、一三天の星は無花果の樹の
大風に搖られて、生り後の果の落つるごとく地におち、一四天は卷

物を巻くごとく去りゆき、山と島とは悉とくその處を移されたり。
一五地の王たち・大臣・將校・富める者・強き者・奴隷・自主の人、
みな洞と山の巖間とに匿れ、一六山と巖とに對ひて言ふ『請ふ、我ら
の上に墜ちて御座に坐したまふ者の御顏より、羔羊の怒より、我ら
を隱せ。一七そは御怒の大なる日既に來ればなり。誰か立つことを
得ん』

第七章一この後、われ四人の御使の地の四隅に立つを見たり、彼ら
は地の四方の風を引止めて、地にも海にも諸種の樹にも風を吹かせ
ざりき。二また他の一人の御使の、活ける神の印を持ちて日の出づる
方より登るを見たり、かれ地と海とを害ふ權を與へられたる四人の
御使にむかひ、大聲に呼はりて言ふ、三『われらが我らの神の僕の
額に印するまでは、地をも海をも樹をも害ふな』四われ印せられた
る者の數を聽きしに、イスラエルの子等のもろもろの族の中にて印
せられたるもの合せて十四萬四千あり。
五ユダの族の中にて一萬二千印せられ、

ルベンの族（やから）の中（うち）にて一萬二千（いちまんにせん）、
ガドの族（やから）の中（うち）にて一萬二千（いちまんにせん）、
六アセルの族（やから）の中（うち）にて一萬二千（いちまんにせん）、
ナフタリの族（やから）の中（うち）にて一萬二千（いちまんにせん）、
マナセの族（やから）の中（うち）にて一萬二千（いちまんにせん）、
七シメオンの族（やから）の中（うち）にて一萬二千（いちまんにせん）、
レビの族（やから）の中（うち）にて一萬二千（いちまんにせん）、
イサカルの族（やから）の中（うち）にて一萬二千（いちまんにせん）、
八ゼブルンの族（やから）の中（うち）にて一萬二千（いちまんにせん）、
ヨセフの族（やから）の中（うち）にて一萬二千（いちまんにせん）、
ベニヤミンの族（やから）の中（うち）にて一萬二千（いちまんにせん）印（いん）せられたり。
九この後（のち）われ見（み）しに、視（み）よ、もろもろの國（くに）・族（やから）・民（たみ）・國語（くにことば）の中（うち）より、誰（たれ）
も數（かぞ）へつくすこと能（あた）はぬ大（おほい）なる群衆（ぐんじゅう）、しろき衣（ころも）を纏（まと）ひて手（て）に棕梠（しゅろ）
の葉（は）をもち、御座（みくら）と羔羊（こひつじ）との前（まへ）に立（た）ち、一〇大聲（おほごゑ）に呼（よば）はりて言（い）ふ
『救（すくひ）は御座（みくら）に坐（ざ）したまふ我（われ）らの神（かみ）と羔羊（こひつじ）とにこそ在（あ）れ』

一一御使みな御座および長老たちと四つの活物との周圍に立ちて、
御座の前に平伏し神を拜して言ふ、
一二『アァメン、讃美・榮光・知慧・感謝・尊貴・能力・勢威、
世々限りなく我らの神にあれ、アァメン』
一三長老たちの一人われに向ひて言ふ『この白き衣を著たるは如何
なる者にして何處より來りしか』一四我いふ『わが主よ、なんぢ知れ
り』かれ言ふ『かれらは大なる患難より出できたり、羔羊の血に己
が衣を洗ひて白くしたる者なり。一五この故に神の御座の前にあり
て、晝も夜もその聖所にて神に事ふ。御座に坐したまふ者は彼らの
上に幕屋を張り給ふべし。一六彼らは重ねて飢ゑず、重ねて渇かず、
日も熱も彼らを侵すことなし。一七御座の前にいます羔羊は、彼らを
牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭
ひ給ふべければなり』
第八章一第七の封印を解き給ひたれば、凡そ半時のあひだ天靜な
りき。二われ神の前に立てる七人の御使を見たり、彼らは七つのラッ

パを與へられたり。三また他の一人の御使、金の香爐を持ちきたり
て祭壇の前に立ち、多くの香を與へられたり。これは凡ての聖徒の
祈に加へて、御座の前なる金の香壇の上に献げんためなり。四而し
て香の煙、御使の手より聖徒たちの祈とともに神の前に上れり。五
御使その香爐をとり、之に祭壇の火を盛りて地に投げたれば、數多の
雷霆と聲と電光と、また地震おこれり。六ここに七つのラッパをもて
る七人の御使これを吹く備をなせり。七第一の御使ラッパを吹きし
に、血の混りたる雹と火とありて、地にふりくだり、地の三分の一燒け
失せ、樹の三分の一燒け失せ、もろもろの青草燒け失せたり。八第二
の御使ラッパを吹きしに、火にて燃ゆる大なる山の如きもの海に投
げ入れられ、海の三分の一血に變じ、九海の中の造られたる生命ある
ものの三分の一死に、船の三分の一滅びたり。一〇第三の御使ラッパ
を吹きしに、燈火のごとく燃ゆる大なる星、天より隕ちきたり、川
の三分の一と水の源泉との上におちたり。一一この星の名は苦艾と
いふ。水の三分の一は苦艾となり、水の苦くなりしに因りて多くの

人死にたり。一二第四の御使ラッパを吹きしに、日の三分の一と月の
三分の一と星の三分の一と撃たれて、その三分の一は暗くなり、晝
も三分の一は光なく、夜も亦おなじ。一三また見しに、一つの鷲の
中空を飛び、大なる聲して言ふを聞けり。曰く『地に住める者ども
は禍害なるかな、禍害なるかな、禍害なるかな、尚ほかに三人の御使
の吹かんとするラッパの聲あるに因りてなり』

第九章
一第五の御使ラッパを吹きしに、われ一つの星の天より地に
隕ちたるを見たり。この星は底なき坑の鍵を與へられたり。二かく
て底なき坑を開きたれば、大なる爐の煙のごとき煙、坑より立ち
のぼり、日も空も坑の煙にて暗くなれり。三煙の中より蝗地上に
出でて、地の蝎のもてる力のごとき力を與へられ、四地の草すべ
ての青きもの又すべての樹を害ふことなく、ただ額に神の印なき
人をのみ害ふことを命ぜられたり。五されど彼らを殺すことを許さ
れず、五月のあひだ苦しむることを許さる、その苦痛は、蝎に刺さ
れたる苦痛のごとし。六このとき人々、死を求むとも見出さず、死な

んと欲すとも死は逃げ去るべし。七かの蝗の形は戰争の爲に具へた
る馬のごとく、頭には金に似たる冠冕の如きものあり、顔は人の顔
のごとく、八之に女の頭髪のごとき頭髪あり、齒は獅子の齒のごと
し。九また鐵の胸當のごとき胸當あり、その翼の音は軍車の轟く
ごとく、多くの馬の戰鬪に馳せゆくが如し。一〇また蝎のごとき尾
ありて之に刺あり、この尾に五月のあひだ人を害ふ力あり。一一こ
の蝗に王あり。底なき所の使にして、名をヘブル語にてアバドン
と云ひ、ギリシヤ語にてアポルオンと云ふ。一二第一の禍害すぎ去れ
り、視よ、此の後なほ二つの禍害きたらん。一三第六の御使ラッパを
吹きしに、神の前なる金の香壇の四つの角より聲ありて、一四ラッパ
を持てる第六の御使に『大なるユウフラテ川の邊に繋がれをる四人
の御使を解放て』と言ふを聞けり。一五かくてその時その日その月そ
の年に至りて、人の三分の一を殺さん爲に備へられたる四人の御使
は解放たれたり。一六騎兵の數は二億なり、我その數を聞けり。一七
われ幻影にてその馬と之に乘る者とを見しに、彼らは火・煙・硫黄

の色したる胸當を著く。馬の頭は獅子の頭のごとくにて、その口
より火と煙と硫黄と出づ。一八この三つの苦痛、すなはち其の口
より出づる火と煙と硫黄とに因りて、人の三分の一殺されたり。一
九馬の力はその口とその尾とにあり、その尾は蛇の如くにして頭あ
り、之をもて人を害ふなり。二〇これらの苦痛にて殺されざりし殘
の人々は、おのが手の業を悔改めずして、なほ惡鬼を拜し、見るこ
と聞くこと歩むこと能はぬ、金・銀・銅・石・木の偶像を拜せり、二
一又その殺人・呪術・淫行・竊盜を悔改めざりき。

第一〇章 一我また一人の強き御使の、雲を著て天より降るを見たり。
その頭の上に虹あり、その顏は日の如く、その足は火の柱のごとし。
二その手には展きたる小き卷物をもち、右の足を海の上におき、左
の足を地の上におき、三獅子の吼ゆる如く大聲に呼はれり、呼はりた
るとき七つの雷霆おのおの聲を出せり。四七つの雷霆の語りし時、わ
れ書き記さんとせしに、天より聲ありて『七つの雷霆の語りしこと
は封じて書き記すな』といふを聞けり。五かくて我が見しところの海

と地とに跨り立てる御使は、天にむかひて右の手を擧げ、六天およ
び其の中にあるもの、地および其の中にあるもの、海および其の中
にある物を造り給ひし、世々限りなく生きたまふ者を指し、誓ひて言
ふ『この後、時は延ぶることなし。七第七の御使の吹かんとするラツ
パの聲の出づる時に至りて、神の僕なる預言者たちに示し給ひし如
く、その奧義は成就せらるべし』八かくて我が前に天より聞きし聲
のまた我に語りて『なんぢ往きて、海と地とに跨り立てる御使の手
にある展きたる卷物を取れ』と言ふを聞けり。九われ御使のもとに往
きて、小き卷物を我に與へんことを請ひたれば、彼いふ『これを取
りて食ひ盡せ、さらば汝の腹苦くならん、然れど其の口には蜜のご
とく甘からん』一〇われ御使の手より小き卷物をとりて食ひ盡した
れば、口には蜜のごとく甘かりしが、食ひし後わが腹は苦くなれり。
一一また或物われに言ふ『なんぢ再び多くの民・國・國語・王たち
に就きて預言すべし』

第一一章 一ここにわれ杖のごとき間竿を與へられたり、かくて或者

いふ『立ちて神の聖所と香壇と其處に拜する者どもとを度れ、二聖所
の外の庭は差措きて度るな、これは異邦人に委ねられたり、彼らは
四十二个月のあひだ聖なる都を蹂躙らん。三我わが二人の證人に權
を與へん、彼らは荒布を著て千二百六十日のあひだ預言すべし。四彼
らは地の主の御前に立てる二つのオリブの樹、二つの燈臺なり。五も
し彼らを害はんとする者あらば、火その口より出でてその敵を焚き
盡さん。もし彼らを害はんとする者あらば、必ず斯くのごとく殺さ
るべし。六彼らは預言するあひだ雨を降らせぬやうに天を閉づる權力
あり、また水を血に變らせ、思ふままに幾度にても諸種の苦難をも
て地を撃つ權力あり。七彼等がその證を終へんとき、底なき所より
上る獸ありて之と戰鬪をなし、勝ちて之を殺さん。八その屍體は大
なる都の衢に遺らん。この都を譬へてソドムと云ひ、エジプトの
云ふ、即ち彼らの主もまた十字架に釘けられ給ひし所なり。九もろ
もろの民・族・國語・國のもの、三日半の間その屍體を見、かつ
其の屍體を墓に葬ることを許さざるべし。一〇地に住む者どもは彼

らに就きて喜び樂しみ互に禮物を贈らん、此の二人の預言者は地に
住む者を苦しめたればなり』
一一三日半ののち生命の息、神より出で
て彼らに入り、かれら足にて起ちたれば、之を見るもの大に懼れた
り。
一二天より大なる聲して『ここに昇れ』と言ふを彼ら聞きたれ
ば、雲に乘りて天に昇れり、その敵も之を見たり、
一三このとき大
なる地震ありて、都の十分の一は倒れ、地震のために死にしもの七
千人にして、遺れる者は懼をいだき天の神に榮光を歸したり。
一四
第二の禍害すぎ去れり、視よ、第三の禍害すみやかに來るなり。
一五
第七の御使ラッパを吹きしに、天に數多の大なる聲ありて
『この世の國は我らの主および其のキリストの國となれり。彼
は世々限りなく王たらん』
と言ふ。
一六かくて神の前にて座位に坐する二十四人の長老ひれふ
し神を拜して言ふ、
一七『今いまし、昔います主たる全能の神よ、なんぢの大なる
能力を執りて王と成り給ひしことを感謝す。
一八諸國の民怒を

いだけり、なんぢの怒も亦いたれり、死にたる者を審き、なん
ぢの僕なる預言者および聖徒、また小なるも大なるも汝の名
を畏るる者に報賞をあたへ、地を亡す者を亡したまふ時いた
れり』
一九斯くて天にある神の聖所ひらけ、聖所のうちに契約の櫃見え、數多
の電光と聲と雷霆と、また地震と大なる雹とありき。

第一二章 一また天に大なる徴見えたり。日を著たる女ありて、
其の足の下に月あり、其の頭に十二の星の冠冕あり。二かれは孕り
をりしが、子を産まんとして産みの苦痛と惱とのために叫べり、三
また天に他の徴見えたり。視よ、大なる赤き龍あり、これに七つ
の頭と十の角とありて、頭には七つの冠冕あり。四その尾は天の星
の三分の一を引きて之を地に落せり。龍は子を産まんとする女の前
に立ち、産むを待ちて其の子を食ひ盡さんと構へたり。五女は男子
を産めり、この子は鐵の杖もて諸種の國人を治めん。かれは神の許
に、その御座の下に擧げられたり。六女は荒野に逃げゆけり。彼處

に千二百六十日の間かれが養はるる爲に神の備へ給へる所あり。
七かくて天に戰爭おこれり、ミカエル及びその使たち龍とたたかふ。
龍もその使たちも之と戰ひしが、八勝つこと能はず、天には、はや
其の居る所なかりき。九かの大なる龍、すなわち惡魔と呼ばれ、サ
タンと呼ばれたる全世界をまどはす古き蛇は落され、地に落され、そ
の使たちも共に落されたり。一〇我また天に大なる聲ありて
『われらの神の救と能力と國と神のキリストの權威とは、今す
でに來れり。我らの兄弟を訴へ夜晝われらの神の前に訴ふる
もの落されたり。
一一而して兄弟たちは羔羊の血と己が證の言とによりて勝ち、
死に至るまで己が生命を惜まざりき。一二この故に天および天に
住める者よ、よろこべ、地と海とは禍害なるかな、惡魔おのが時
の暫時なるを知り、大なる憤恚をいだきて汝等のもとに下り
たればなり』
と云ふを聞けり。一三かくて龍はおのが地に落されしを見て、男子を

生みし女を責めたりしが、一四女は荒野なる己が處に飛ぶために、
大なる鷲の兩の翼を與へられたれば、其處にいたり、一年、二年
、また半年のあひだ蛇のまへを離れて養はれたり。一五蛇はその口
より水を川のごとく、女の背後に吐きて之を流さんとしたれど、一
六地は女を助け、その口を開きて龍の口より吐きたる川を呑み盡せ
り。一七龍は女を怒りてその裔の殘れるもの、即ち神の誡命を守り
イエスの證を有てる者に、戰鬪を挑まんとて出でゆき、一八海邊の
砂の上に立てり。

第一三章一我また一つの獸の海より上るを見たり。之に十の角と
七つの頭とあり、その角に十の冠冕あり、頭の上には神を涜す名あ
り。二わが見し獸は豹に似て、その足は熊のごとく、その口は獅子の
口のごとし。龍はこれに己が能力と己が座位と大なる權威とを與へ
たり。三我その頭の一つ傷つけられて死ぬばかりなるを見しが、そ
の死ぬべき傷いやされたれば、全地の者これを怪しみて獸に從へ
り。四また龍おのが權威を獸に與へしによりて、彼ら龍を拜し、且

その獸を拜して言ふ『たれか此の獸に等しき者あらん、誰か之と
戰ふことを得ん』五獸また大言と涜言とを語る口を與へられ、四十
二个月のあひだ働く權威を與へらる。六彼は口をひらきて神を涜し、
又その御名とその幕屋すなはち天に住む者どもとを涜し、七また聖徒
に戰鬪を挑みて、之に勝つことを許され、且もろもろの族・民・國語
・國を掌どる權威を與へらる。八凡て地に住む者にて、其の名を屠
られ給ひし羔羊の生命の書に、世の創より記されざる者は、これを
拜せん。九人もし耳あらば聽くべし。一〇虜にせらるべき者は虜に
せられん、劍にて殺す者はおのれも劍にて殺さるべし、聖徒たち
の忍耐と信仰とは茲にあり。一一我また他の獸の地より上るを見た
り。これに羔羊のごとき角二つありて龍のごとく語り、一二先の獸
の凡ての權威を彼の前にて行ひ、地と地に住む者とをして死ぬべき
傷の醫されたる先の獸を拜せしむ。一三また大なる徴をおこなひ、
人々の前にて火を天より地に降らせ、一四かの獸の前にて行ふこと
を許されし徴をもて地に住む者どもを惑し、劍にうたれてなほ生

ける獸の像を造ることを地に住む者どもに命じたり。一五而してそ
の獸の像に息を與へて物言はしめ、且その獸の像を拜せぬ者をこと
ごとく殺さしむる事を許され、一六また凡ての人をして、大小・貧富・
自主・奴隷の別なく、或はその右の手、あるいは其の額に徽章を
受けしむ。一七この徽章を有たぬ凡ての者に賣買することを得ざらし
めたり。その徽章は獸の名、もしくは其の名の數字なり。一八智慧
は茲にあり、心ある者は獸の數字を算へよ。獸の數字は人の數字
にして、その數字は六百六十六なり。

第一四章
一われ見しに、視よ、羔羊シオンの山に立ちたまふ。十四萬
四千の人これと偕に居り、その額には羔羊の名および羔羊の父の名
記しあり。二われ天よりの聲を聞けり、多くの水の音のごとく、大
なる雷霆の聲のごとし。わが聞きし此の聲は彈琴者の立琴を彈く音
のごとし。三かれら新しき歌を御座の前および四つの活物と長老
たちとの前にて歌ふ。この歌は地より贖はれたる十四萬四千人の他
は誰も學びうる者なかりき。四彼らは女に汚されぬ者なり、潔き者

なり、何處にまれ羔羊の往き給ふところに隨ふ。彼らは人の中より
贖はれて神と羔羊とのために初穂となれり。五その口に虚僞なし、彼
らは瑕なき者なり。六我また他の御使の中空を飛ぶを見たり。かれは
地に住むもの、即ちもろもろの國・族・國語・民に宣傳へんとて、
永遠の福音を携へ、七大聲にて言ふ『なんぢら神を畏れ、神に榮光
を歸せよ。その審判のとき既に至りたればなり。汝ら天と地と海と
水の源泉とを造り給ひし者を拜せよ』八ほかの第二の御使、かれに從
ひて言ふ『倒れたり、倒れたり。大なるバビロン、己が淫行より出
づる憤恚の葡萄酒をもろもろの國人に飮ませし者』九ほかの第三の
御使、かれらに從ひ大聲にて言ふ『もし獸とその像とを拜し、且そ
の額あるいは手に徽章を受くる者あらば、一〇必ず神の怒の酒杯
に盛りたる混りなき憤恚の葡萄酒を飮み、かつ聖なる御使たち及び
羔羊の前にて、火と硫黄とにて苦しめらるべし。一一その苦痛の煙は
世々限りなく立ち昇りて、獸とその像とを拜する者、また其の名の
徽章を受けし者は、夜も晝も休息を得ざらん。一二神の誡命とイエス

を信ずる信仰とを守る聖徒の忍耐は茲にあり』一三我また天より聲あ
りて『書き記せ「今よりのち主にありて死ぬる死人は幸福なり」御靈
も言ひたまふ「然り、彼等はその勞役を止めて息まん。その業これに
隨ふなり」』と言ふを聞けり。一四また見しに、視よ、白き雲あり、
その雲の上に人の子の如きもの坐して、首には金の冠冕をいただき、
手には利き鎌を持ちたまふ。一五又ほかの御使、聖所より出で、雲の
うへに坐したまふ者にむかひ、大聲に呼はりて『なんぢの鎌を入れ
て刈れ、地の穀物は全く熟し、既に刈り取るべき時至ればなり』と
言ふ。一六かくて雲の上に坐したまふ者その鎌を地に入れたれば、地
の穀物は刈り取られたり。一七又ほかの御使、天の聖所より出で、同
じく利き鎌を持てり。一八又ほかの火を掌どる御使、祭壇より出で、
利き鎌を持つ者にむかひ大聲に呼はりて『なんぢの利き鎌を入れて
地の葡萄の樹の房を刈り收めよ、葡萄は既に熟したり』と言ふ。一
九御使その鎌を地に入れて地の葡萄を刈りをさめ、神の憤恚の大な
る酒槽に投げ入れたり。二〇かくて都の外にて酒槽を踐みしに、血

酒槽より流れ出でて馬の轡に達くほどになり、一千六百町に廣が
れり。

第一五章 一我また天に他の大なる怪しむべき徵を見たり。即ち
七人の御使ありて最後の七つの苦難を持てり、神の憤恚は之にて全
うせらるるなり。二我また火の混りたる玻璃の海を見しに、獸とそ
の像とその名の數字とに勝ちたる者ども、神の立琴を持ちて玻璃の海
の邊に立てり。三彼ら神の僕モーセの歌と羔羊の歌とを歌ひて言ふ
『主なる全能の神よ、なんぢの御業は大なるかな、妙なるかな、
萬國の王よ、なんぢの道は義なるかな、眞なるかな。四主よ、た
れか汝を畏れざる、誰か御名を尊ばざる、汝のみ聖なり、諸種
の國人きたりて御前に拜せん。なんぢの審判は既に現れたれば
なり』
五この後われ見しに、天にある證の幕屋の聖所ひらけて、六かの七
つの苦難を持てる七人の御使、きよき輝ける亞麻布を著、金の帶を
胸に束ねて聖所より出づ。七四つの活物の一つ、その七人の御使に、

世々限りなく生きたまふ神の憤恚の滿ちたる七つの金の鉢を與へし
かば、**八**聖所は神の榮光とその權力とより出づる煙にて滿ち、七人
の御使の七つの苦難の終るまでは、誰も聖所に入ること能はざりき。
第一六章 一我また聖所より大なる聲ありて、七人の御使に『往き
て神の憤恚の七つの鉢を地の上に傾けよ』と言ふを聞けり。**二**かく
て第一の者ゆきて其の鉢を地の上に傾けたれば、獸の徽章を有てる
人々とその像を拜する人々との身に、惡しき苦しき腫物生じたり。
三第二の者その鉢を海の上に傾けたれば、海は死人の血の如くなり
て、海にある生物ことごとく死にたり。**四**第三の者その鉢をもろも
ろの河と、もろもろの水の源泉との上に傾けたれば、みな血となれ
り。**五**われ水を掌どる御使の『いま在し昔います聖なる者よ、なん
ぢの斯く定め給ひしは正しき事なり。**六**彼らは聖徒と預言者との血を
流したれば、之に血を飲ませ給ひしは相應しきなり』と云へるを聞け
り。**七**我また祭壇の物言ふを聞けり『然り、主なる全能の神よ、なん
ぢの審判は眞なるかな、義なるかな』と。**八**第四の者その鉢を太陽

の上に傾けたれば、太陽は火をもて人を焼くことを許さる。九かく
て人々烈しき熱に焼かれて、此等の苦難を掌どる權威を有たちまふ
神の名を涜し、かつ悔改めずして神に榮光を歸せざりき。一〇第五
の者その鉢を獸の座位の上に傾けたれば、獸の國暗くなり、その
國人痛によりて己の舌を齧み、一一その痛と腫物とによりて天の
神を涜し、かつ己が行爲を悔改めざりき。一二第六の者その鉢を大
なる河ユウフラテの上に傾けたれば、河の水涸れたり。これ日の出
づる方より來る王たちの途を備へん爲なり。一三我また龍の口より、
獸の口より、僞預言者の口より、蛙のごとき三つの穢れし靈の出づ
るを見たり。一四これは徴をおこなふ惡鬼の靈にして、全能の神の
大なる日の戰鬪のために全世界の王たちを集めんとて、その許に出
でゆくなり。一五（視よ、われ盗人のごとく來らん、裸にて歩み羞所
を見らるることなからん爲に、目を覺してその衣を守る者は幸福な
り）一六かの三つの靈、王たちをヘブル語にてハルマゲドンと稱ふる
處に集めたり。一七第七の者その鉢を空中に傾けたれば、聖所よ

り御座より大なる聲いでて『事すでに成れり』と言ふ。一八かくて
數多の電光と聲と雷霆とあり、また大なる地震おこれり、人の地の
上に在りし以來かかる大なる地震なかりき。一九大なる都は三つ
に裂かれ、諸國の町々は倒れ、大なるバビロンは神の前におもひ出
されて、劇しき御怒の葡萄酒を盛りたる酒杯を與へられたり。二〇凡
ての島は逃げさり、山は見えずなれり。二一また天より百斤ほどの
大なる雹、人々の上に降りしかば、人々雹の苦難によりて神を瀆せ
り。是その苦難甚だしく大なればなり。

第一七章 一七つの鉢を持てる七人の御使の一人きたり、我に語りて
言ふ『來れ、われ多くの水の上に坐する大淫婦の審判を汝に示さん。
二地の王たちは之と淫をおこなひ、地に住む者らは其の淫行の葡萄酒
に醉ひたり』三かくてわれ御靈に感じ、御使に携へられて荒野にゆ
き、緋色の獸に乘れる女を見たり、この獸の體は神を瀆す名に
て覆はれ、また七つの頭と十の角とあり。四女は紫色と緋とを著、
金・寶石・眞珠にて身を飾り、手には憎むべきものと己が淫行の汚

とにて滿ちたる金の酒杯を持ち、五額には記されたる名あり。曰く
『奧義大なるバビロン、地の淫婦らと憎むべき者との母』六我この女
を見るに、聖徒の血とイエスの證人の血とに醉ひたり。我これを見
て大に怪しみたれば、七御使われに言ふ『なにゆゑ怪しむか、我こ
の女と之を乘せたる七つの頭、十の角ある獸との奧義を汝に告
げん。八なんぢの見し獸は前に有りしも今あらず、後に底なき所よ
り上りて滅亡に往かん、地に住む者にて世の創より其の名を生命の
書に記されざる者は、獸の前にありて今あらず、後に來るを見て怪
しまん。九智慧の心は茲にあり。七つの頭は女の坐する七つの山
なり、また七人の王なり。一〇五人は既に倒れて一人は今あり、他の
一人は未だ來らず、來らば暫時のほど止るべきなり。一一前にあり
て今あらぬ獸は第八なり、前の七人より出でたる者にして滅亡に往
くなり。一二汝の見し十の角は十人の王にして未だ國を受けざれど
も、一時のあひだ獸と共に王のごとき權威を受くべし。一三彼らは
心を一つにして己が能力と權威とを獸にあたふ。一四彼らは羔羊と

戰はん。而して羔羊かれらに勝ち給ふべし、彼は主の主、王の王な
ればなり。これと偕なる召されたるもの、選ばれたるもの、忠實な
る者も勝を得べし』一五御使また我に言ふ『なんぢの見し水、すなわ
ち淫婦の坐する處は、もろもろの民・群衆・國・國語なり。一六
なんぢの見し十の角と獸とは、かの淫婦を憎み、之をして荒涼ばし
め、裸ならしめ、且その肉を喰ひ、火をもて之を燒き盡さん。一七
神は彼らに御旨を行ふことと、心を一つにすることと、神の御言
の成就するまで國を獸に與ふることとを思はしめ給ひたればなり。
一八なんぢの見し女は地の王たちを宰どる大なる都なり』

第一八章一この後また他の一人の御使の大なる權威を有ちて天よ
り降るを見しに、地はその榮光によりて照されたり。二かれ強き聲
にて呼はりて言ふ『大なるバビロンは倒れたり、倒れたり、かつ惡魔
の住家、もろもろの穢れたる靈の檻、もろもろの穢れたる憎むべき
鳥の檻となれり。三もろもろの國人はその淫行の憤恚の葡萄酒を飮
み、地の王たちは彼と淫をおこなひ、地の商人らは彼の奢の勢力に

よりて富みたればなり』四また天より他の聲あるを聞けり。曰く『わ
が民よ、かれの罪に干らず、彼の苦難を共に受けざらんため、その
中を出でよ。五かれの罪は積りて天にいたり、神その不義を憶え給ひ
たればなり。六彼が爲しし如く彼に爲し、その行爲に應じ倍して之を
報い、かれが酌み與へし酒杯に倍して之に酌み與へよ。七かれが自
ら尊びみづから奢りしと同じほどの苦難と悲歎とを之に與へよ。彼
は心のうちに「われは女王の位に坐する者にして寡婦にあらず、決
して悲歎を見ざるべし」と言ふ。八この故に、さまざまの苦難、一日
のうちに彼の身にきたらん、即ち死と悲歎と饑饉となり。彼また火
にて燒き盡されん、彼を審きたまふ主なる神は強ければなり。九彼と
淫をおこなひ、彼とともに奢りたる地の王たちは、其の燒かるる煙
を見て泣きかつ歎き、一〇その苦難を懼れ、遙に立ちて「禍害なる
かな、禍害なるかな、大なる都、堅固なる都バビロンよ、汝の
審判は時の間に來れり」と言はん。一一地の商人かれが爲に泣き悲し
まん。今より後その商品を買ふ者なければなり。一二その商品は金

・銀・寶石・眞珠・細布・紫色・絹・緋色および各樣の香木、また象牙
のさまざまの器、價貴き木、眞鍮・鐵・蝋石などの各樣の器、一
三また肉桂・香料・香・香油・乳香・葡萄酒・オリブ油・麥粉・麥
・牛・羊・馬・車・奴隷および人の靈魂なり。一四なんぢの靈魂の
嗜みたる果物は汝を去り、すべての美味、華美なる物は亡びて汝を
離れん、今より後これを見ること無かるべし。一五これらの物を商
ひ、バビロンに由りて富を得たる商人らは、其の苦難を懼れて遙に
立ち、泣き悲しみて言はん、一六「禍害なるかな、禍害なるかな、細布
と紫色と緋とを著、金・寶石・眞珠をもて身を飾りたる大なる都、
一七斯ばかり大なる富の時の間に荒涼ばんとは」而して凡ての船長
、すべて海をわたる人々、舟子および海によりて生活を爲すもの遙
かに立ち、一八バビロンの燒かるる煙を見て叫び「いづれの都か、
この大なる都に比ぶべき」と言はん。一九彼等また塵をおのが首
に被りて泣き悲しみ叫びて「禍害なるかな、禍害なるかな、此の大
なる都、その奢によりて海に船を有てる人々の富を得たる都、か

く時の間に荒涼ばんとは」と言はん。二〇天よ、聖徒・使徒・預言者
よ、この都につきて喜べ、神なんぢらの爲に之を審き給ひたればな
り』二一ここに一人の強き御使、大なる碾臼のごとき石を擡げ海に
投げて言ふ『おほいなる都バビロンは斯くのごとく烈しく撃ち倒さ
れて、今より後見えざるべし。二二今よりのち立琴を彈くもの、樂を
奏するもの、笛を吹く者、ラッパを鳴す者の聲なんぢの中に聞えず、
今より後さまざまの細工をなす細工人なんぢの中に見えず、碾臼の
音なんぢの中に聞えず、二三今よりのち燈火の光なんぢの中に輝か
ず、今よりのち新郎・新婦の聲なんぢの中に聞えざるべし。そは汝
の商人は地の大臣となり、諸種の國人はなんぢの咒術に惑され、二
四また預言者・聖徒および凡て地の上に殺されし者の血は、この都
の中に見出されたればなり』

第一九章一この後われ天に大なる群衆の大聲のごとき者ありて、
かく言ふを聞けり。曰く
『ハレルヤ、救と榮光と權力とは、我らの神のものなり。二

その御審は眞にして義なるなり、己が淫行をもて地を汚したる
大淫婦を審き、神の僕らの血の復讐を彼になし給ひしなり』
三また再び言ふ『ハレルヤ、彼の焼かるる煙は世々限りなく立ち昇
るなり』四ここに二十四人の長老と四つの活物と平伏して御座に坐
したまふ神を拝し『アアメン、ハレルヤ』と言へり。五また御座より
聲出でて言ふ
『すべて神の僕たるもの、神を畏るる者よ、小なるも大なるも、
我らの神を讃め奉れ』
六われ大なる群衆の聲おほくの水の音のごとく、烈しき雷霆の聲の
如きものを聞けり。曰く
『ハレルヤ全能の主、われらの神は統治らすなり。七われら喜び
樂しみて之に榮光を歸し奉らん。そは羔羊の婚姻の時いたり、
既にその新婦みづから準備したればなり。八彼は輝ける潔き細布
を著ることを許されたり、此の細布は聖徒たちの正しき行爲なり』
九御使また我に言ふ『なんぢ書き記せ、羔羊の婚姻の宴席に招かれた

る者は幸福なり』と。また我に言ふ『これ神の眞の言なり』一〇我
その足下に平伏して拜せんとしたれば、彼われに言ふ『愼みて然す
な、我は汝およびイエスの證を保つ汝の兄弟とともに僕たるな
り。なんぢ神を拜せよ、イエスの證は即ち預言の靈なり』一一我ま
た天の開けたるを見しに、視よ、白き馬あり、之に乘りたまふ者は
「忠實また眞」と稱へられ、義をもて審きかつ戰ひたまふ。一二彼
の目は焰のごとく、その頭には多くの冠冕あり、また記せる名あ
り、之を知る者は彼の他になし。一三彼は血に染みたる衣を纏へり、
その名は「神の言」と稱ふ。一四天に在る軍勢は白く潔き細布を著、
白き馬に乘りて彼にしたがふ。一五彼の口より利き劍いづ、之をも
て諸國の民をうち、鐵の杖をもて之を治め給はん。また自ら全能の
神の烈しき怒の酒槽を踐みたまふ。一六その衣と股とに『王の王、
主の主』と記せる名あり。一七我また一人の御使の太陽のなかに立て
るを見たり。大聲に呼はりて、中空を飛ぶ凡ての鳥に言ふ『いざ、神
の大なる宴席に集ひきたりて、一八王たちの肉、將校の肉、強き者

の肉、馬と之に乘る者との肉、すべての自主および奴隷、小なるもの
大なる者の肉を食へ』 一九我また獸と地の王たちと彼らの軍勢とが
相集りて、馬に乘りたまふ者および其の軍勢に對ひて戰鬪を挑むを
見たり。 二〇かくて獸は捕へられ、又その前に不思議を行ひて獸
の徽章を受けたる者と、その像を拜する者とを惑したる僞預言者も、
之とともに捕へられ、二つながら生きたるまま硫黄の燃ゆる火の池
に投げ入れられたり。 二一その他の者は馬に乘りたまふ者の口より出
づる劍にて殺され、凡ての鳥その肉を食ひて飽きたり。

第二〇章 一我また一人の御使の底なき所の鍵と大なる鎖とを手
に持ちて、天より降るを見たり。 二彼は龍、すなわち惡魔たりサタン
たる古き蛇を捕へて、之を千年のあひだ繋ぎおき、 三底なき所に投
げ入れ閉ぢ込めて、その上に封印し、千年の終るまでは諸國の民を
惑すことなからしむ。その後、暫時のあひだ解放さるべし。 四我ま
た多くの座位を見しに、之に座する者あり、審判する權威を與へら
れたり。我またイエスの證および神の御言のために馘られし者の

靈魂、また獸をもその像をも拜せず、己が額あるいは手にその徽章
を受けざりし者どもを見たり。彼らは生きかへりて千年の間キリス
トと共に王となれり。
五（その他の死人は千年の終るまで生きかへら
ざりき）これは第一の復活なり。
六幸福なるかな、聖なるかな、第一
の復活に干る人。この人々に對して第二の死は權威を有たず、彼ら
は神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年のあひだ王た
るべし。
七千年終りて後サタンは其の檻より解放たれ、
八出でて地の
四方の國の民、ゴグとマゴグとを惑し戰鬪のために之を集めん、そ
の數は海の砂のごとし。
九かくて彼らは地の全面に上りて、聖徒たち
の陣營と愛せられたる都とを圍みしが、天より火くだりて彼等を燒
き盡し、
一〇彼らを惑したる惡魔は、火と硫黄との池に投げ入れら
れたり。ここは獸も僞預言者もまた居る所にして、彼らは世々限
りなく晝も夜も苦しめらるべし。
一一我また大なる白き御座および
之に座し給ふものを見たり。天も地もその御顏の前を遁れて跡だに
見えずなりき。
一二我また死にたる者の大なるも小なるも御座の前に

立てるを見たり。而して數々の書展かれ、他にまた一つの書ありて展かる、即ち生命の書なり、死人は此等の書に記されたる所の、その行爲に隨ひて審かれたり。一三海はその中にある死人を出し、死も陰府もその中にある死人を出したれば、各自その行爲に隨ひて審かれたり。一四かくて死も陰府も火の池に投げ入れられたり、此の火の池は第二の死なり。一五すべて生命の書に記されぬ者はみな火の池に投げ入れられたり。

第二一章 一我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。二我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる新婦のごとく準備して、神の許をいで、天より降るを見たり。三また大なる聲の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みづから人と偕に在して、四かれらの目の涙をことごとく拭ひ去り給はん。今よりのち死もなく、悲歎も號叫も苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり』五かくて御座に坐し

給ふもの言ひたまふ『視よ、われ一切のものを新にするなり』また言
ひたまふ『書き記せ、これらの言は信ずべきなり、眞なり』六また我
に言ひたまふ『事すでに成れり、我はアルパなり、オメガなり、始な
り、終なり、渇く者には價なくして生命の水の泉より飮むことを
許さん。七勝を得る者は此等のものを嗣がん、我はその神となり、彼
は我が子とならん。八されど臆するもの、信ぜぬもの、憎むべきもの、
人を殺すもの、淫行のもの、呪術をなすもの、偶像を拜する者および
凡て僞る者は、火と硫黃との燃ゆる池にて其の報を受くべし、これ
第二の死なり』九最後の七つの苦難の滿ちたる七つの鉢を持てる七人
の御使の一人きたり、我に語りて言ふ『來れ、われ羔羊の妻なる新婦
を汝に見せん』一〇御使、御靈に感じたる我を携へて大なる高き
山にゆき、聖なる都エルサレムの、神の榮光をもて神の許を出でて
天より降るを見せたり。一一その都の光輝はいと貴き玉のごとく、
透徹る碧玉のごとし。一二此處に大なる高き石垣ありて十二の門あ
り、門の側らに一人づつ十二の御使あり、門の上に一つづつイスラ

エルの子孫の十二の族の名を記せり。一三東に三つの門、北に三つ
の門、南に三つの門、西に三つの門あり。一四都の石垣には十二の
基あり、これに羔羊の十二の使徒の十二の名を記せり。一五我と語る
者は都と門と石垣とを測らん爲に金の間竿を持てり。一六都は方形
にして、その長さ廣さ相均し。彼は間竿にて都を測りしに一千二百
町あり、長さ廣さ高さみな相均し。一七また石垣を測りしに、人の
度すなはち御使の度に據れば百四十四尺あり。一八石垣は碧玉
にて築き、都は清らかなる玻璃のごとき純金にて造れり。一九都
の石垣の基はさまざまの寶石にて飾れり。第一の基は碧玉、第二
は瑠璃、第三は玉髓、第四は緑玉、二〇第五は紅縞瑪瑙、第六は
赤瑪瑙、第七は貴橄欖石、第八は緑柱石、第九は黄玉石、第十は
緑玉髓、第十一は青玉、第十二は紫水晶なり。二一十二の門は
十二の眞珠なり、おのおのの門は一つの眞珠より成り、都の大路は
透徹る玻璃のごとき純金なり。二二われ都の内にて宮を見ざりき、
主なる全能の神および羔羊はその宮なり。二三都は日月の照すを要

せず、神の榮光これを照し、羔羊はその燈火なり。二四諸國の民は
都の光のなかを歩み、地の王たちは己が光榮を此處にたづさへき
たる。二五都の門は終日閉ぢず（此處に夜あることなし）二六人々は
諸國の民の光榮と尊貴とを此處にたづさへ來らん。二七凡て穢れた
る者また憎むべき事と虛僞とを行ふ者は、此處に入らず、羔羊の生命
の書に記されたる者のみ此處に入るなり。

第二二章

一御使また水晶のごとく透徹れる生命の水の河を我に見
せたり。この河は神と羔羊との御座より出でて都の大路の眞中を流
る。二河の左右に生命の樹ありて十二種の實を結び、その實は月每に
生じ、その樹の葉は諸國の民を醫すなり。三今よりのち詛はるべき者
は一つもなかるべし。神と羔羊との御座は都の中にあり。その僕
らは之に事へ、四且その御顏を見ん、その御名は彼らの額にあるべ
し。五今よりのち夜ある事なし、燈火の光をも日の光をも要せず、
主なる神かれらを照し給へばなり。彼らは世々限りなく王たるべし。
六彼また我に言ふ『これらの言は信ずべきなり、眞なり、預言者た

ちの靈魂の神たる主は、速かに起るべき事をその僕どもに示さん
とて、御使を遣し給へるなり。七視よ、われ速かに到らん、この書
の預言の言を守る者は幸福なり』八これらの事を聞き、かつ見し者
は我ヨハネなり。かくて見聞せしとき我これらの事を示したる御使
の足下に平伏して拜せんとせしに、九かれ言ふ『つつしみて然すな、
われは汝および汝の兄弟たる預言者、また此の書の言を守る者と
等しく僕たるなり、なんじ神を拜せよ』一〇また我に言ふ『この書の
預言の言を封ずな、時近ければなり。一一不義をなす者はいよいよ
不義をなし不淨なる者はいよいよ不淨をなし、義なる者はいよいよ
義をおこなひ、清き者はいよいよ清くすべし。一二視よ、われ報を
もて速かに到らん、各人の行爲に隨ひて之を與ふべし。一三我はア
ルパなり、オメガなり、最先なり、最後なり、始なり、終なり、一四
おのが衣を洗ふ者は幸福なり、彼らは生命の樹にゆく權威を與へら
れ、門を通りて都に入ることを得るなり。一五犬および咒術をなす
もの、淫行のもの、人を殺すもの、偶像を拜する者、また凡て虚僞を

愛して之を行ふ者は外にあり。一六われイエスは我が使を遣して
諸教會のために此等のことを汝らに證せり。我はダビデの萠蘖ま
た其の裔なり、輝ける曙の明星なり』一七御靈も新婦もいふ『來
りたまへ』聞く者も言へ『きたり給へ』と、渇く者はきたれ、望む者
は價なくして生命の水を受けよ。一八われ凡てこの書の預言の言を
聞く者に證す。もし之に加ふる者あらば、神はこの書に記されたる
苦難を彼に加へ給はん。一九若しこの預言の書の言を省く者あらば、
神はこの書に記されたる生命の樹、また聖なる都より彼の受くべき
分を省き給はん。二〇これらの事を證する者いひ給ふ『然り、われ
速かに到らん』アァメン、主イエスよ、來りたまへ。二一願はくは
主イエスの恩惠なんぢら凡ての者と偕に在らんことを。